

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 11 集

あ み だ じ  
阿 弥 陀 寺 遺 跡

1 9 9 0

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

## 序

愛知県海部郡甚目寺町は、甚目寺観音や法性寺などの古刹が語るように歴史の息づいている町であります。しかし、現在そのような古い町にも次々と都市化の波が押し寄せており、町の姿も刻々と変わりつつあるのです。そうした現代の動きの中で、阿弥陀寺遺跡は弥生時代と鎌倉・室町時代に生きた祖先の姿を今に伝えてくれたのであります。

阿弥陀寺遺跡の発掘調査は、甚目寺町北西部の田園地帯を北東から南西に走る名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として、愛知県の委託事業（教育委員会を通じて）として財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財発掘調査部が昭和56年に開始しました。その後昭和60年には調査主体が財団法人愛知県埋蔵文化財センターに移行し、昭和61年に発掘調査は完了しました。それ以後は、調査成果の公表に向けて整理・研究を進めてまいりましたが、ようやくここに本書をもって阿弥陀寺遺跡の全容を示すに至りました。本書が甚目寺町の歴史の一端を記録にとどめるとともに、祖先への顕彰になればと存じます。

最後に、この調査を遂行するにあたり、地元住民の方々を始め、関係者および関係機関の御理解と御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター  
理事長 松川 誠 次

## 例 言

1. 本書は愛知県海部郡甚目寺町に所在する阿弥陀寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査であり、愛知県の委託事業（教育委員会を通じて）として愛知県教育サービスセンターおよび事業を引き継いだ財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、昭和56年10月から昭和61年6月まで実施した。
3. 調査体制は別に記載したとおりである。
4. 調査にあたっては、次の関係各機関の御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、建設省英知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局、甚目寺町教育委員会。
5. 調査・報告書作成にあたっては次の方々の御協力があった。（順不同・敬称略）

加藤安信、遠藤才文、紅村弘、高橋信明、立松彰、贅元洋、岡本茂史、加納俊介、杉崎章、中野晴久、伊藤久嗣、新田洋、鈴木克彦、増田安生、寺沢薫、藤田三郎、松本洋明、兼康保明、岩崎直也、小竹森直子、山崎秀二、正岡睦夫、平井典子、島崎東、福島正美、湯尻修平、栃木英道、増山仁、笹沢浩、神村透、小林正春、市沢英利、中司照世、赤沢徳明、平野吾郎、鈴木敏則、佐藤由紀男、鈴木正博、鈴木加津子、小宮恒雄、松本完、安藤広道、石川日出志、黒沢浩、原口正三、深沢芳樹。
6. 報告書作成に関わる整理作業はもっぱら石黒立人があたり、次の方々の協力を得た。

赤塚美智代、亀井けい子、鈴木規子、永金千佳、河合明美、古橋佳子（以上調査補助員）
7. 本書の様式
  - 過去に刊行した「財団法人愛知県教育サービスセンター年報Ⅰ～Ⅲ」による概要報告の記載事項はすべて本書で改めるとともに、かつて報告した内容も今回取捨選択を行っている。対応関係は本書で示しているが、未掲載部分は当該年報を参照していただきたい。
  - 平面図基準座標・遺構記号：本センターの慣用法（昭和59年度以降）によった。ただし、調査時においては昭和58年まで任意の座標系を使用していた。
  - 遺構番号は弥生時代：0～999、鎌倉・室町時代：1000～とし、遺物番号は弥生時代：0～1999、鎌倉・室町時代：2000～とした。
  - 実測図の縮尺値：遺構図の図版は、弥生時代関係がプラン 1/1000、1/500、1/200、土層セクション 1/100、鎌倉・室町時代関係が 1/2000、1/400、1/200。挿図は図中に示したが、原則はプラン・セクションが 1/80、土層セクションが 1/40、出土状態が 1/40。

遺物は原則として土器が 1/4（拓図 1/3）、石器が石鎌・石錐 2/3、それ以外 1/2、木器は 1/3として、まぎらわしい場合と例外については図中に縮尺値を表示した。したがって、スケール目盛り表示のない場合には注意が必要である。
  - 遺物写真は縮尺値を原則 1/3とし、それ以外は縮尺値を表示したが、あくまで目安にすぎない。
  - 註・参考文献は巻末に一括して記載した。
8. 本書の執筆は石黒立人、北村和宏、森勇一、伊藤隆彦、永草康次、楯真美子が分担し、石黒が編集した。分担箇所は各章扉の目次に記載した。
9. 本調査に関する資料はすべて愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

調査体制 昭和56年～昭和59年 調査主体 財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査期間	調査指導	組織	事務局	調査担当
昭和56年10月～3月	愛知学院大学教授 澄田 正一(考古学)	調査部長	丹羽 功	発掘調査所長 高沢 茂樹
	名古屋大学教授 井関弘太郎(地理学)	庶務補佐	水谷 良夫	主事 中村 美規
	信州大学教授 大参 義一(考古学)	主査	松原 広治	〃 竹島 真澄
	南山大学教授 伊藤 秋男(考古学)	主事	松田 定次	〃 石黒 立人
	東海市平州記念館 立松 彰(考古学)	〃	菅沼真四郎	

調査期間	調査指導	組織	事務局	調査担当
昭和57年4月～6月	同9月～昭和58年2月			
	愛知学院大学教授 澄田 正一(考古学)	調査部長	丹羽 功	発掘調査所長 高沢 茂樹
	名古屋大学教授 井関弘太郎(地理学)	庶務補佐	水谷 良夫	主事 中村 美規
	信州大学教授 大参 義一(考古学)	主査	松原 広治	〃 竹島 真澄
	南山大学教授 伊藤 秋男(考古学)	主事	松田 定次	〃 石黒 立人
	京都大学霊長類	〃	菅沼真四郎	〃 遠藤 才文
	研究所教授 江原 昭善(人類学)			〃 服部 良夫
	東海市平州記念館 立松 彰(考古学)			〃 片山 正己

調査期間	調査指導	組織	事務局	調査担当
昭和58年10月～昭和59年1月	同3月			
	愛知学院大学教授 澄田 正一(考古学)	調査部長	中林 茂	発掘調査所長 高沢 茂樹
	名古屋大学教授 井関弘太郎(地理学)	庶務補佐	水谷 良夫	主事 中村 美規
	信州大学教授 大参 義一(考古学)	主査	稲垣 隆一	〃 石黒 立人
	南山大学教授 伊藤 秋男(考古学)	主事	松田 定次	
	京都大学霊長類	〃	伊藤 義幸	
	研究所教授 江原 昭善(人類学)			
	金沢大学教授 藤 則雄(地質学)			

調査期間	調査指導	組織	事務局	調査担当
昭和59年4月～昭和60年3月				
	愛知学院大学教授 澄田 正一(考古学)	調査部長	中林 茂	発掘調査所長 橋本 雅司
	名古屋大学教授 井関弘太郎(地理学)	管理課長	斎藤 樹三	主事 遠藤 才文
	信州大学教授 大参 義一(考古学)	主査	稲垣 隆一	〃 清水 雷太郎
	南山大学教授 伊藤 秋男(考古学)	主事	伊藤 義幸	〃 福岡 晃彦
		〃	森 信孔	〃 金原 宏
				〃 上部 肇
				〃 竹内 尚武
				〃 梅村 清春
				〃 梅本 博志
				〃 佐藤 公保
				〃 石黒 立人
				嘱託 宮腰 健司
				〃 長島 広
				〃 安藤 義弘

調査体制 昭和60年～昭和61年 調査主体 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

調査期間 昭和60年4月～6月

理事長		専門委員	
奥田 信之	県教育長	考古学	檜崎 彰一 名古屋大学教授
常務理事		文献史学	早川 庄八 //
中林 茂	兼事務局長	地理学	井関弘太郎 //
理事		建築史学	浅野 清 愛知工業大学教授
井関弘太郎	名古屋大学教授	動・植物学	渡辺 誠 名古屋大学助教授
伊藤 秋男	南山大学教授	形質人類学	池田 次郎 京都大学教授
大参 義一	信州大学教授	保存科学	江本 義理 東京国立文化財研究所保存科学部長
坪井 清足	奈良国立文化財研究所長	調査担当	
檜崎 彰一	名古屋大学教授	調査課長	橋本 雅司
三浦 小春	光陵女子短期大学教授	課長補佐兼主査	遠藤 才文
花木 薫雄	都市教育長会会長（一宮市教育長）	課長補佐兼主査	清水雷太郎
伊藤 芳	町村教育長会会長（蟹江町教育長）	主査	上部 肇
大橋 雄六	県土木部長	主事	浅井 和宏
小島 俊夫	県教育委員会社会教育部長	〃	酒井 俊彦
林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長（清洲町長）	事務局	
鈴木 陸美	県陶磁資料館副館長	管理課長	斎藤 樹三
監事		主査	稲垣 隆一
本田 辰郎	県出納事務局次長	主事	伊藤 義幸
田中 隆三	県教育委員会総務課長	〃	森 信孔
		〃	小倉 晴美

調査期間 昭和61年4月～12月

理事長		専門委員	
小金 潔	県教育長	考古学	檜崎 彰一 名古屋大学教授
常務理事		文献史学	早川 庄八 名古屋大学教授
中林 茂	兼事務局長	地理学	井関弘太郎 名古屋大学教授
理事		建築史学	浅野 清 愛知工業大学教授
井関弘太郎	名古屋大学教授	動・植物学	渡辺 誠 名古屋大学助教授
伊藤 秋男	南山大学教授	形質人類学	池田 次郎 岡山理科大学教授
大参 義一	信州大学教授	保存科学	江本 義理 東京国立文化財研究所保存科学部長
坪井 清足	勲大阪文化財センター理事長	岩石学	諏訪 兼位 名古屋大学教授（7月1日就任）
檜崎 彰一	名古屋大学教授	木材組織学	木方 洋二 名古屋大学教授（7月1日就任）
三浦 小春	中日新聞嘱託	調査担当	
花木 薫雄	都市教育長協議会会長（一宮市教育長）	調査課長	橋本 雅司
伊藤 芳	町村教育長協議会会長（蟹江町教育長） （6月30日辞任）	課長補佐兼主査	竹内 尚武
栗本 茂一	〃（小坂井町教育長） （7月1日就任・11月30日辞任）	課長補佐兼主査	清水雷太郎
大溪 紀雄	〃（吉良町教育長） （12月1日就任）	主事	浅井 和宏
大橋 雄六	県土木部長	嘱託	菅沼 良則
中神 秀雄	県教育委員会社会教育部長	事務局	
林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長（清洲町長）	管理課長	斎藤 樹三
日下 英之	県陶磁資料館長	主査	青山 光一
監事		主事	森 信孔
石原 坂男	県出納事務局次長	〃	田上 堅三
田中 隆三	県教育委員会総務課長	〃	小倉 晴美

# 目 次

## 第 I 章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過 .....	1
2. 遺跡の概観 .....	4
A. 地理的環境と遺跡の立地 .....	4
B. 歴史的環境 .....	6

## 第 II 章 調査の成果

1. 層序 .....	9
2. 弥生時代 .....	12
I 期 遺構 .....	18
遺物 .....	33
II 期 遺構 .....	93
遺物 .....	88
III 期 遺構 .....	131
遺物 .....	143
IV 期 遺構 .....	186
遺物 .....	188
3. 鎌倉・室町時代 .....	193
A. 遺構 .....	193
a. 溝 .....	193
b. 井戸 .....	202
c. 掘立柱建物 .....	208
d. 土坑 .....	211
e. 墓 .....	214
f. 道 .....	215
g. その他 .....	216
h. 屋敷地 .....	216
i. 遺構の年代 .....	217
b. 遺物 .....	221
a. 土器・陶磁器類 .....	221

b. 木製品	242
c. 漆製品	243
d. 金属器	243
e. 石製品	243

### 第III章 分析・考察

1. 弥生時代の遺構と遺物	245
A. 遺構	245
a. 遺跡の地表面について	246
b. 遺構の変遷について	247
B. 土器	251
a. 前言	251
b. 時期区分および系統区分	253
c. 土器の変化—A系統を中心に	263
d. 土器の変化—外来系を中心に	272
e. 土器の変化—折衷型土器について	280
f. 弥生土器総括	286
C. 石器	288
2. 自然科学的分析	289
A. 阿弥陀寺遺跡の土器胎土の特徴について	289
B. 阿弥陀寺遺跡から出土した緑色の岩石について	300
C. 阿弥陀寺遺跡から出土した赤色物質のX線回折分析	301
D. 阿弥陀寺遺跡の炭化米について	302
E. 「中世土器」の胎土	304

### 第IV章 まとめと課題

1. 弥生時代	309
2. 鎌倉・室町時代	310
一覧表	311
註・文献	337

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第43図	S B 31出土土器	47
第2図	調査区位置図	3	第44図	S B 39出土土器	47
第3図	阿弥陀寺遺跡と朝日遺跡	5	第45図	S B 41出土土器	48
第4図	弥生時代中期の尾張平野	6	第46図	S B 43・44土器出土状態	48
第5図	阿弥陀寺遺跡周辺の条里地割り	8	第47図	S B 43・44・45出土土器	49
第6図	福田川周辺の採集遺物および甚目寺・法性寺出土軒丸瓦	8	第48図	S B 46出土土器	50
第7図	基本土層図位置図	10	第49図	S B 47出土土器	50
第8図	基本土層図	11	第50図	S B 49出土土器	51
第9図	S B 17プラン・セクション	18	第51図	S B 52出土土器	52
第10図	東壁際河原石出土状態	19	第52図	S B 54出土土器	53
第11図	S B 19プラン・セクション・土層セクション	19	第53図	S B 55出土土器	54
第12図	S B 28プラン・セクション・土層セクション・柱穴セクション	20	第54図	S B 56出土土器(1)	55
第13図	S B 29プラン・セクション	21	第55図	S B 56出土土器(2)	56
第14図	S B 30プラン・土層セクション	22	第56図	S B 56出土土器(3)	57
第15図	S B 31プラン・セクション	22	第57図	S B 56出土土器(4)	58
第16図	S B 42・43プラン・セクション	23	第58図	S B 59出土土器(1)	59
第17図	S B 45プラン・セクション・土層セクション	23	第59図	S B 59出土土器(2)	60
第18図	S B 49プラン・セクション	24	第60図	S B 66出土土器	60
第19図	S B 51・52プラン・セクション	24	第61図	S K 73出土土器(1)	61
第20図	S B 53プラン・セクション	25	第62図	S K 73出土土器(2)	62
第21図	S B 54プラン・セクション・土層セクション	26	第63図	S K 74出土土器(1)	64
第22図	S B 55プラン・セクション	26	第64図	S K 74出土土器(2)	65
第23図	S B 56プラン・セクション	27	第65図	S K 74出土土器(3)	66
第24図	S B 59プラン・セクション	28	第66図	S K 74出土土器(4)	67
第25図	S B 64プラン・セクション	29	第67図	S K 96出土土器	68
第26図	S B 72プラン・セクション	29	第68図	S K 107出土土器	68
第27図	S A 01プラン・セクション	30	第69図	S K 140出土土器(1)	69
第28図	S D 04・SX 07・08プラン・土層セクション	31	第70図	S K 140出土土器(2)	70
第29図	S D 04土層セクション写真	31	第71図	S K 151出土土器	71
第30図	土坑土層セクション	32	第72図	S K 181出土土器(1)	72
第31図	S B 15出土土器	33	第73図	S K 181出土土器(2)	73
第32図	S B 17出土土器	34	第74図	S K 185出土土器(1)	74
第33図	S B 19出土土器(1)	35	第75図	S K 185出土土器(2)	75
第34図	S B 19出土土器(2)	36	第76図	S K 193出土土器	76
第35図	S B 28出土土器	37	第77図	S K 212出土土器	77
第36図	S B 29土器出土状態	39	第78図	S K 228出土土器	78
第37図	S B 29出土土器(1)	40	第79図	S K 280出土土器	79
第38図	S B 29出土土器(2)	41	第80図	S K 295出土土器	79
第39図	S B 29出土土器(3)	42	第81図	S K 297出土土器	80
第40図	S B 30土器出土状態	44	第82図	S K 314出土土器	81
第41図	S B 30出土土器(1)	45	第83図	419口縁部内面拓図	82
第42図	S B 30出土土器(2)	46	第84図	S D 10出土土器	84
			第85図	コブ付太頸壺(D系統)	85
			第86図	続条痕紋系土器	86

第87図	Ca 系統精製鉢	86	第133図	S K 98出土土器	122
第88図	石器 (1)	87	第134図	S K 111出土土器	123
第89図	石器 (2)	88	第135図	S K 112出土土器 (1)	123
第90図	石器 (3)	89	第136図	S K 112出土土器 (2)	124
第91図	石器 (4)	90	第137図	S K 120出土土器	124
第92図	木器	91	第138図	S K 122出土土器	125
第93図	土製品	92	第139図	S K 221出土土器	125
第94図	S B 08プラン・セクション	93	第140図	S K 224出土土器	126
第95図	S B 13プラン・セクション	93	第141図	S K 247出土土器	126
第96図	S B 18プラン・セクション	94	第142図	S K 298出土土器	127
第97図	S B 25プラン・セクション	95	第143図	連弧紋をもつ土器	128
第98図	S B 32プラン・セクション・土層セクション	96	第144図	線刻のある脚状土製品	128
第99図	S B 34 a・bプラン・セクション	97	第145図	土製円盤他	128
第100図	S B 36プラン・セクション	97	第146図	石器 (1)	129
第101図	S B 58プラン・セクション	98	第147図	石器 (2)	130
第102図	S B 61プラン・セクション	98	第148図	S B 05プラン・セクション・土層セクション	131
第103図	S K 120土器出土状態	99	第149図	S B 11プラン・セクション	131
第104図	S K 315土製品出土状態	99	第150図	S B 62プラン・セクション	132
第105図	S B 12出土土器 (1)	100	第151図	S B 01プラン・土層セクション	133
第106図	S B 12出土土器 (2)	101	第152図	S B 02プラン・セクション	133
第107図	S B 14出土土器	102	第153図	S B 04土層セクション	133
第108図	S B 18出土土器 (1)	102	第154図	SZ 01プラン・セクション	134
第109図	S B 18出土土器 (2)	103	第155図	S D 05土層セクション	135
第110図	S B 20出土土器	103	第156図	SZ 02 (S D 08) 土層セクション	135
第111図	S B 21出土土器	104	第157図	SZ 03土層セクション	136
第112図	S B 32土器出土状態	105	第158図	SZ 03プラン・セクション	137
第113図	S B 32出土土器	106	第159図	環濠土層セクション	138
第114図	S B 33土器出土状態	107	第160図	環濠土層セクション他	139
第115図	S B 33出土土器 (1)	108	第161図	突出部および環濠プラン・セクション	140
第116図	S B 33出土土器 (2)	109	第162図	S K 01土層セクション	140
第117図	S B 33出土土器 (3)	110	第163図	S K 23土層セクション・プラン・セクション	141
第118図	S B 61出土土器	111	第164図	S K 251土層セクション写真	141
第119図	S B 67土器出土状態	112	第165図	S B 05出土土器	143
第120図	S B 67・他出土土器	113	第166図	S B 11出土土器	144
第121図	S B 68出土土器	114	第167図	S B 34出土土器	145
第122図	S B 69出土土器	114	第168図	S B 40土器出土状態	146
第123図	S B 71炉石	115	第169図	S B 40出土土器 (1)	147
第124図	S B 71出土状態・東壁土層セクション	116	第170図	S B 40出土土器 (2)	148
第125図	S B 71出土土器	117	第171図	S B 40出土土器 (3)	149
第126図	S D 09出土土器 (1)	118	第172図	S B 40出土土器 (4)	150
第127図	S D 09出土土器 (2)	119	第173図	SE 01土器出土状態	152
第128図	S K 03出土土器	120	第174図	SE 01出土土器	153
第129図	S K 06出土土器	120	第175図	SE 03出土土器	154
第130図	S K 08出土土器	120	第176図	SE 06出土土器	154
第131図	S K 37出土土器	121	第177図	SE 07出土土器	155
第132図	S K 67出土土器	121	第178図	SZ 01 (S D 05) 出土土器	156

第179図	SZ 02出土土器	157	第222図	S Z 1001写真	214
第180図	SZ 03土器出土状態	159	第223図	S F 1005写真	215
第181図	SZ 03 (S D 14) 出土土器 (1)	160	第224図	屋敷地 1 ~ 3	217
第182図	SZ 03 (S D 15) 出土土器 (2)	161	第225図	中世土器の分類 (1)	222
第183図	SZ 03出土土器 (3)	162	第226図	中世土器の分類 (2)	223
第184図	S D 03出土土器	164	第227図	中世土器の分類 (3)	224
第185図	S D 18出土銅鐸形土製品	165	第228図	S D 1002東西部遺物出土状態写真	239
第186図	S K 23土器出土状態	168	第229図	S D 1024遺物出土状態写真	240
第187図	S K 23出土土器	169	第230図	木製品および漆器	243
第188図	S K 159出土土器 (1)	170	第231図	S D 1015出土五輪塔	244
第189図	S K 159出土土器 (2)	171	第232図	阿弥陀寺遺跡出土の鉄製品(X線写真)実物大	244
第190図	S K 255出土土器	173	第233図	I期の谷・溝・自然流路	246
第191図	S K 262出土土器 (1)	174	第234図	I期遺構群分割概念図	247
第192図	S K 262出土土器 (2)	175	第235図	遺構変遷図	248
第193図	S B 04上層出土土器	176	第236図	環濠推定復元図	250
第194図	S B 25上層出土土器	176	第237図	櫛描紋様の変化系列	257
第195図	包含層一括出土土器	177	第238図	IV期古相	262
第196図	土器群出土位置	177	第239図	IV期新相	262
第197図	包含層出土土器	180	第240図	細頸壺口頸部の変化	263
第198図	脚状土製品	180	第241図	櫛描紋の施紋順序と変化	265
第199図	石器 (1)	182	第242図	磨消線紋の変化	265
第200図	石器 (2)	183	第243図	朝日形甕の変化	266
第201図	S D 03木器出土状態	184	第244図	底部成形技法	266
第202図	木器	185	第245図	盤状・脚状土製品の器高変化	267
第203図	S B 70ブラン・セクション	186	第246図	台付甕脚台の変遷過程	268
第204図	S D 07土層セクション	186	第247図	III期台付甕に関わる各圏域	268
第205図	S E・S X 土層セクション	187	第248図	櫛描紋原体	270
第206図	S B 70出土土器	188	第249図	紋様要素の互換性	271
第207図	土製品	190	第250図	Ca 系統壺紋様の特徴	272
第208図	遺構配置図(鎌倉・室町時代)	194	第251図	D系統(瘤状突起付太頸)壺の変化	275
第209図	S D 1023東西土層セクション	197	第252図	W系統土器のイメージ	278
第210図	S D 1024南北土層セクション	197	第253図	III期各種甕分布圏	279
第211図	S D 1025・1026南北土層セクション	198	第254図	各系統相関図	282
第212図	S D 1038・1039写真	199	第255図	系統概念図と相関関係概念図	285
第213図	S D 1002東西土層セクション	201	第256図	グループ別重鉱物組成 (1)	293
第214図	S D 1001東西土層セクション	201	第257図	グループ別重鉱物組成 (2)	294
第215図	S D 1004・1005南北土層セクション	201	第258図	Qz + F1 - Bt + Mv - Mf 三角ダイアグラム	298
第216図	S D 1027 ~ S D 1031南北土層セクション	201	第259図	赤色物質X線回折チャート	301
第217図	井戸プラン・(土層)セクション (1)	204	第260図	測定に用いた炭化米 (S K 312)	301
第218図	井戸プラン・(土層)セクション (2)	205	第261図	粒長 (I)・粒幅 (W)・分布図	303
第219図	大型土坑 S K 1001・1003写真	211	第262図	長幅比度数分布図	303
第220図	大型土坑土層セクション	212	第263図	土鍋Aの胎土と形態	307
第221図	大型土坑写真	212	第264図	胎土重鉱物組成	308

## 表 目 次

第1表 遺構数の変化	12	第11表 分析試料一覧表	290
第2表 管玉の法量分布	191	第12表 重鉱物分析結果	291
第3表 床面レベル時期別度数分布	245	第13表 阿弥陀寺・トトメキ遺跡の系統分類と胎土のグループ	295
第4表 遺構の重複関係	256	第14表 勝川遺跡の系統分類と胎土のグループ	296
第5表 櫛描紋種類別共存関係	258	第15表 瓜郷・西中遺跡の系統分類と胎土のグループ	296
第6表 B系統土器時期別出土点数	273	第16表 表面観察結果	298
第7表 甕 Da 分類別度数分布	274	第17表 阿弥陀寺遺跡偏光顕微鏡観察結果	299
第8表 各系統土器出土比率	287	第18表 炭化米測定結果	302
第9表 石器種別点数	288	第19表 重鉱物分析結果	304
第10表 石鏃長形態別度数分布	288		

## 一 覧 表 目 次

<b>弥生時代</b>		土器・陶磁器	330
遺構	311	木製品・漆製品	337
土器・土製品	315	金属器	337
石器	327	石製品	337
管玉	328	<b>植物遺体</b> (本文掲載以外)	337
木器	328		
<b>鎌倉・室町時代</b>			
遺構	329		

## 図 版 目 次

図版1 弥生時代遺構全体図	1 : 1000	図版36 土器番号573~584
図版2 弥生時代遺構全体図	北半部 1 : 500	図版37 土器番号585~597
図版3 弥生時代遺構全体図	南半部 1 : 500	図版38 土器番号598~612・635
図版4	弥生時代遺構部分図 1 : 200	図版39 土器番号613~628
図版19		図版40 土器番号629~636
図版20	土器番号323~339	図版41 石器番号38~42
図版21	土器番号340~351	図版42 石器番号43~47
図版22	土器番号352~365	図版43 石器番号48~54
図版23	土器番号366~373	図版44 土器番号811~824
図版24	土器番号374~384	図版45 土器番号825~839
図版25	土器番号385~403	図版46 土器番号840~850
図版26	土器番号404~415	図版47 土器番号851~857
図版27	土器番号416~431	図版48 石器番号74~82
図版28	土器番号432~457	図版49 土器番号1070~1082
図版29	土器番号458~480	図版50 土器番号1083~1086
図版30	土器番号481~493	図版51 土器番号1087~1106
図版31	土器番号494~508	図版52 土器番号1107~1133
図版32	土器番号509~542	図版53 土器番号1134~1162
図版33	土器番号543~546・455・458・465・482・485・495	図版54 土器番号1163~1178
図版34	土器番号547~555	図版55 土器番号1179~1187
図版35	土器番号556~572・549	

図版56	土器番号1188~1201	
図版57	土器番号1202~1216	
図版58	土器番号1217~1204	
図版59	土器番号1241~1246	
図版60	土器番号1247~1267	
図版61	土器番号1272~1281	
図版62	土器番号1282~1303	
図版63	土器番号1304~1317	
図版64	土器番号1318~1325	
図版65	土器番号1326~1335	
図版66	土器番号1336~1357	
図版67	土器番号1358~1365	
図版68	土器番号1366~1369	
図版69	土器番号1371~1386	
図版70	土器番号1387~1398	
図版71	土器番号1399~1419	
図版72	土器番号1420~1433	
図版73	土器番号1434~1440	
図版74	土器番号1441~1448	
図版75	土器番号1449~1460	
図版76	石器番号113~120	
図版77	石器番号121~128	
図版78	土器番号1461~1475	
図版79	土器番号1476~1490	
図版80	土器番号1491~1508	
図版81	石器番号129~148	
図版82	石器番号149~157	
図版83	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	a系統太頸壺
図版84	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	A系統太頸壺
図版85	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	A系統細頸壺
図版86	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	A系統甕
図版87	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	A系統各器種
図版88	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	B系統壺
図版89	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	C系統壺他
図版90	土器編年Ⅰ期~Ⅱ期	D系統甕・C系統深鉢
図版91	土器編年Ⅲ期	A系統太頸壺
図版92	土器編年Ⅲ期	A系統細頸壺
図版93	土器編年Ⅲ期	A系統壺他
図版94	土器編年Ⅲ期	B系統壺他
図版95	土器編年Ⅲ期	W系統壺
図版96	土器編年Ⅲ期	W系統壺他
図版97	鎌倉・室町時代遺構全体図	1:1600
図版98	鎌倉・室町時代遺構部分図	1:400
図版104	鎌倉・室町時代遺構部分図屋敷地1	1:200
図版105	鎌倉・室町時代遺構部分図屋敷地1	1:200
図版106	鎌倉・室町時代遺構部分図屋敷地2・3	1:200
図版107	土器番号2001~2029	
図版108	土器番号2030~2070	
図版109	土器番号2071~2087	
図版110	土器番号2088~2139	
図版111	土器番号2141~2167	
図版112	土器番号2169~2213	
図版113	土器番号2214~2273	
図版114	土器番号2274~2326	
図版115	土器番号2327~2374	
図版116	土器番号2376~2429	
図版117	土器番号2430~2474	
図版118	土器番号2476~2551	
図版119	土器番号2552~2583	
図版120	土器番号2584~2626	
図版121	土器番号2627~2676	
図版122	土器番号2677~2714	
図版123	土器番号2715~2762	
図版124	土器番号2763~2799	

## 写真図版目次

写真図版1	阿弥陀寺遺跡航空写真 北半部	写真図版8	方形周溝墓と土器出土状態
写真図版2	阿弥陀寺遺跡航空写真 南半部	写真図版9	遺物出土状態(1)
写真図版3	弥生時代中期環濠の切れ目、突出部(SX04)と湾入部(SX05)全景	写真図版10	遺物出土状態(2)
写真図版4	SD03・04弥生時代中期居住域内部と弥生時代後期環濠(SD07)	写真図版11	Ⅰ期A系統壺
写真図版5	弥生時代中期居住域内部(59H区北部)、井戸(SE01)、大形土坑(SX10)	写真図版12	Ⅰ期A系統甕
写真図版6	SB19、SB42・43・51・52、SB56	写真図版13	Ⅰ期C・D系統甕他
写真図版7	大形住居(SB28)と通常住居(SB59)、SB72、SB36	写真図版14	Ⅰ期C・B系統壺他
		写真図版15	Ⅰ期C系統深鉢他
		写真図版16	Ⅱ期A系統壺
		写真図版17	Ⅱ期A系甕他
		写真図版18	Ⅲ期A系統壺

- 写真図版19 III期A系統甕、W系統壺  
写真図版20 III期W系統壺  
写真図版21 III期W系統各器種他  
写真図版22 III期B系統壺、C系統深鉢  
写真図版23 III期A系統台付甕脚台部、W系統甕  
写真図版24 IV期土器各器種  
写真図版25 石鏃各種  
写真図版26 磨製石器各種  
写真図版27 木器、土製品  
写真図版28 鎌倉・室町時代集落部分(1)  
写真図版29 鎌倉・室町時代集落(2)、井戸  
写真図版30 灰釉系陶器碗・小皿、素焼小皿  
写真図版31 施釉陶器、土鍋、羽釜、曲物、他  
写真図版32 (カラー) 阿弥陀寺遺跡出土の石斧および土器  
の偏光顕微鏡写真

# 第I章



秋

# 調査の概要



発掘作業



測量



小学生の見学

1. 調査の経緯と経過 \_\_\_\_\_ 石黒

2. 遺跡の概観

A. 地理的環境と遺跡の立地 \_\_\_\_\_ 森

B. 歴史的環境

弥生時代 \_\_\_\_\_ 石黒

鎌倉・室町時代 \_\_\_\_\_ 北村



# 1. 調査の経緯と経過

## A. 経緯

**所在地** 阿弥陀寺遺跡は、愛知県海部郡甚目寺町大字石作・大字新居屋に存在する。すでに古くから遺物の散布地と知られ、磨製石剣など注目される遺物も採集されている。

**原因** そうしたなかで、名古屋環状2号線の建設予定地に本遺跡の一部が含まれることになり、そのため、道路建設に伴う事前調査として昭和56年度から発掘調査が実施されることになった。

**調査主体** 昭和56年度より昭和59年度は財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部によって発掘調査が実施され、昭和60年度からは新しく設立された財団法人愛知県埋蔵文化財センターに業務が引き継がれ、昭和61年度まで継続した。

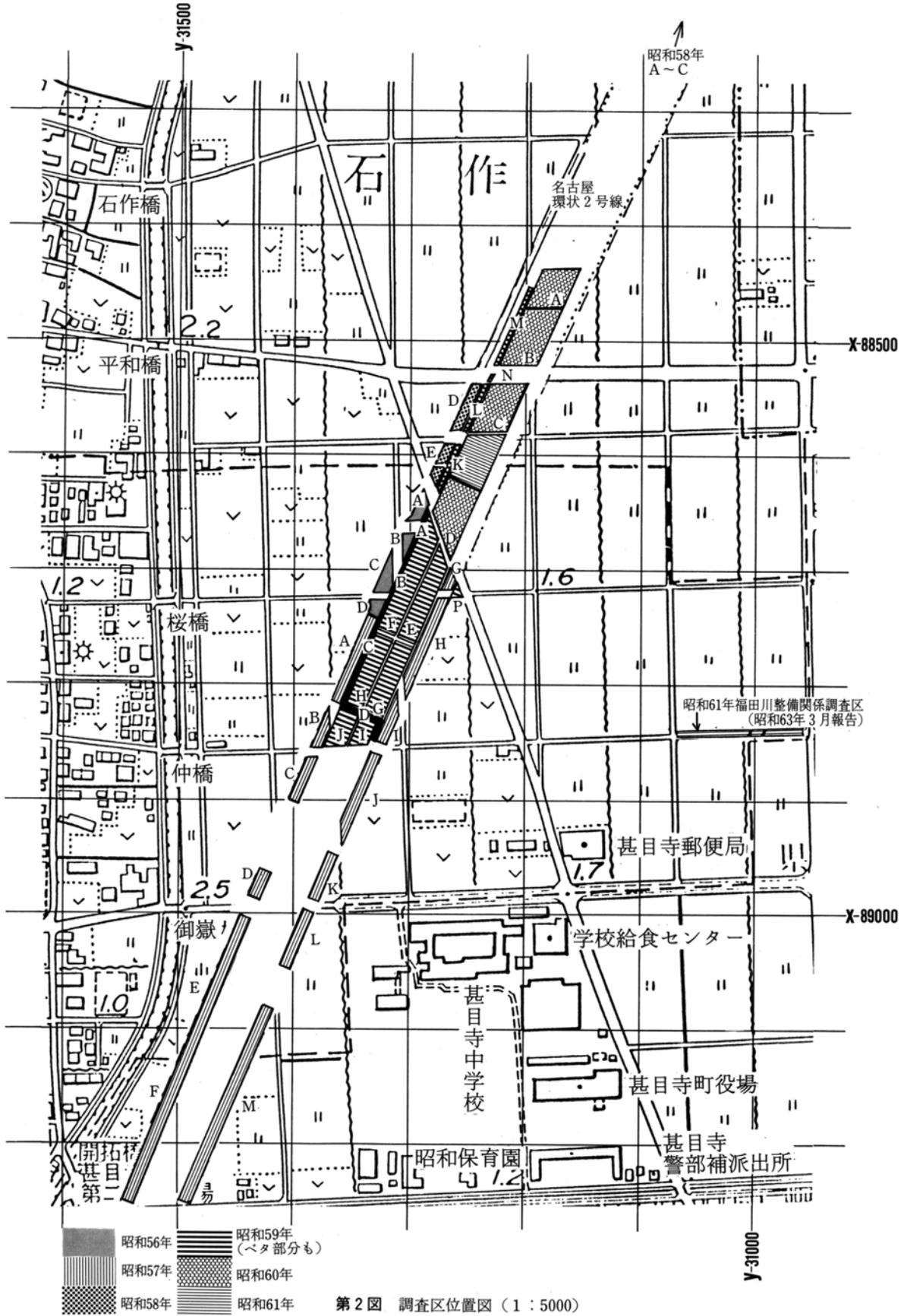
当初、弥生時代の遺跡として把握されていた阿弥陀寺遺跡も調査の進行で鎌倉・室町時代の集落跡が重複することがわかり、結果遺跡の範囲も広がることになった。



第1図 遺跡位置図

## B. 経 過

- 昭和56年度** 調査面積1200m<sup>2</sup>で開始された初年度の発掘調査は、幅10mの側道部分ということであったが、弥生時代の遺構として住居跡、環濠、方形周溝墓らしい溝跡など各種が検出でき、時期区分についても大枠の設定ができた。それに対し鎌倉・室町時代に関しては溝のみで、集落跡であるという認識には至らなかった。
- 昭和57年度** 調査面積は7940m<sup>2</sup>。幅7mの側道部分の調査で、南北600mという狭く長い発掘区であった。弥生時代の遺構は集落の様相を強く示し、新しい資料を得ることができた。鎌倉・室町時代は初めて井戸の検出があり、集落の可能性が浮上した。地形的な問題に関しては、狭く長い調査区の関係で長い土層セクションを作成することができた結果、谷や砂丘部分の復元がある程度可能となった。
- 昭和58年度** 調査面積は5214m<sup>2</sup>。本年度も側道部分の調査で、これまでの調査範囲の北部に調査区が設定された。弥生時代の遺構は皆無であったが、現水田下に堆積した現代の客土中からは弥生土器が出土したので、阿弥陀寺遺跡の削平がかなり進んでいることが推定された。
- 鎌倉・室町時代は、集落内部の区画らしい溝や墓の跡が検出され、集落であることがほぼ確実視されるようになった。
- 昭和59年度** 調査面積8894m<sup>2</sup>。初めて本道部分の調査となった。弥生時代は、環濠の変遷が予想できるようになり、ほぼ集落景観も復元できるに至った。また鎌倉・室町時代は、屋敷地を囲む溝が確認できたことにより、弥生時代の集落範囲の北部に中心のあることが推定された。
- 昭和60年度** 調査面積5519m<sup>2</sup>。弥生時代の集落部分の北部に調査区が位置したので、環濠北縁の状況が把握できた。意味不明の突部など、囲郭集落の全体設計に関わるような重要な遺構であるという感触があった。鎌倉・室町時代は、古瀬戸四耳壺などが大きな土坑から出土し墓的な遺構の存在が推定された他、礎板の遺存した柱穴が多数検出され、溝で区画された内部における建物の展開を知ることができた。
- 昭和61年度** 調査面積1738m<sup>2</sup>。先年度と同様に建物群の検出があり、集落としての景観復元に近づいた。ただし、遺構面の削平のために同時存在の建物の抽出には困難がともなっている。



## 2. 遺跡の概観

### A. 遺跡の立地および地理的環境

人間の居住や生産活動の痕跡は、自然条件に支配されて立地する。今から遡ること2000年の昔、弥生時代中期における遺跡の立地は、自然条件に厳しく支配されたものであったことは想像に難くない。ここでは、濃尾平野沖積低地の北東部から中央よりに位置する愛知県海部郡甚目寺町の阿弥陀寺遺跡の地理的環境について、土層断面の記録や周辺部の遺跡調査結果、ボーリング試料などをもとに、平野の形成と弥生時代の遺跡立地を中心に考察する。

**基盤の形成** 朝日遺跡89A区にて実施したボーリング試料を分析してみると、地表下19.10~10.20m(海拔-17.10~8.20m)の間には、縄文海進期に堆積したと考えられる貝化石を含む厚いシルト層が分布する。本層上部に、6300y.B.P.の年代値を示す純度の高いアカホヤ火山灰層(未発表)が含有されることから、朝日遺跡の付近では、シルト層の堆積は縄文時代早期の頃に開始され、少なくとも6300y.B.P.の頃まで内湾的な環境下にあったことが推定される。その上部の地表下10.20~1.50m(海拔-8.20~+0.5m)に発達する層厚約9mの中~粗粒砂層は沖積上部砂層にあたり、この上面が阿弥陀寺・朝日両遺跡をはじめ、この地域の弥生時代の遺跡の基盤層をなしている。

#### 浜堤列と埋積浅谷

基盤層の高度を詳細に検討してみると、上部砂層の上面は必ずしも平坦ではなく、いくつかの異なった原因によって生成された起伏が存在する。その一つは、原(1978)、井関(1982)、浅井(1988)らによって指摘された北西-南東方向に軸線を持つ三本の凸状の高まり(砂堆)であり、もう一つは本センターの調査結果や井関(1982)、海津(1988)らによって明らかにされた、おおむね北東から南西方向に延長される浅谷群(埋積浅谷)である。

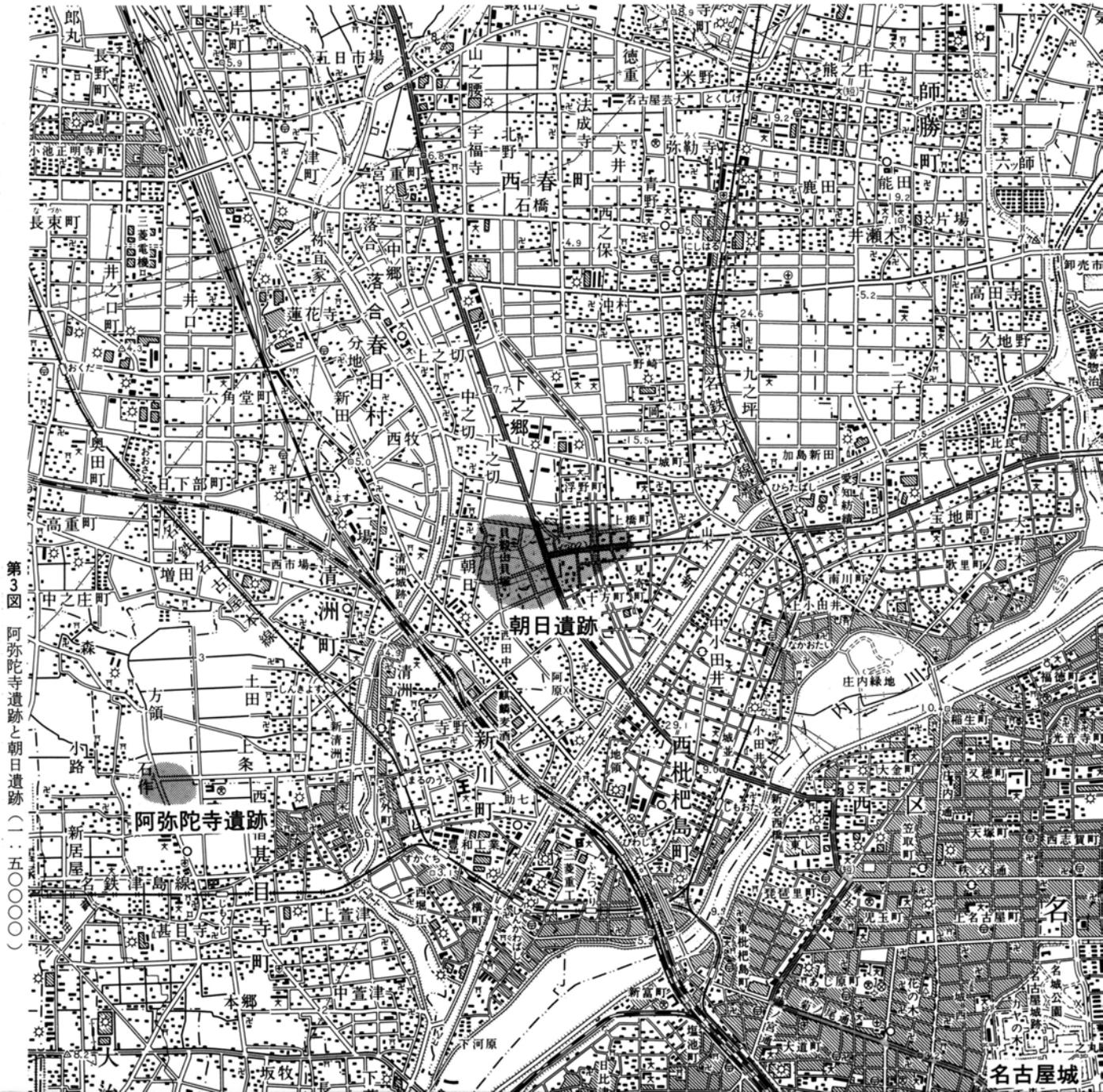
砂堆について筆者は、軸線がこの付近を流れる河道の方向と直交することより河川性の自然堤防とは考えられないこと、また朝日遺跡において旧河道によって砂堆を構成する砂層が削りとられていること、さらに土田遺跡89B区における基盤砂層の粒度分析結果では海浜砂丘の粒度組成を示すこと(森ほか:1990)などより、この砂堆の成因を、縄文海進高潮期以降の海岸線を追って前進・拡大しつつあった「浜堤列」ではないかと考えた。

また、埋積浅谷の生成時期について、その下底の泥炭層中より、4620±90y.B.P.(GaK-13397)をはじめ計7点の4000年代を示す放射性炭素年代値が得られたこと(森・伊藤・1989a)、および寒冷地に生息する昆虫化石(アシボソネクイハムシ)が多数発見されることより、浅谷の形成・堆積は少なくとも縄文時代中期の頃に開始されていたことが明らかになった

(森・伊藤：1989b)。

**遺跡の立地** これらの事実を整理し、阿弥陀寺遺跡の立地した弥生時代中～後期の頃の地形を概観してみると、阿弥陀寺遺跡は最も海側に位置する浜堤（第一浜堤）上、その北東部には後背湿地をはさんで第二浜堤前面に土田遺跡、同じく第二浜堤の頂部には拠点集落・朝日遺跡が位置していた。朝日遺跡に見られた砂堆が、縄文時代中期に埋積が開始された河道の侵食を受けていることから、第二浜堤列には縄文時代中期以前に作られたものであることがわかる。

阿弥陀寺遺跡の弥生時代住居の床面高度はわずかに $+0.4\text{m}$ ～ $-0.3\text{m}$ しかなく、海に面した浜堤上での遺跡の立地を考えれば、当時の地下水面はかなり低下していたものと考えられる。この頃、木曾川はその本流を西進させつつあり、流量の減じた旧五条川はゆったりと遠浅の海に注いでいた。阿弥陀寺遺跡の前面には広大なデルタが展開し、到来する開発の歴史の幕開けを告げていた。



第3図 阿弥陀寺遺跡と朝日遺跡 (一五〇〇〇)

## B. 歴史的環境

**弥生時代** 弥生時代の尾張平野における遺跡分布は、とくに中期に関して、土器や石器などの組み合わせから見て、地区Ⅰ～地区Ⅶまでの7地区に区分することができる<sup>(1)</sup>。

\*

**地区Ⅰ** 朝日遺跡を中心とする地区で、伊勢湾地方中期弥生文化の中心地区でもある。阿弥陀寺遺跡もこの地区に含まれ、標高3m以下と非常に低い。

**地区Ⅱ** 勝川遺跡を中心とする地区。地形的に台地部分や河川の氾濫原を含み、地区Ⅰほどの広域さはない。最近の後期の遺跡が多く発見されている。

第4図 弥生時代  
中期の尾張平野  
主要遺跡の位置と  
地区割り概念図

- 地区Ⅰ**
- 1 朝日
  - 2 西志賀
  - 3 松ノ木
  - 4 阿弥陀寺
  - 5 森南

- 地区Ⅱ**
- 1 勝川

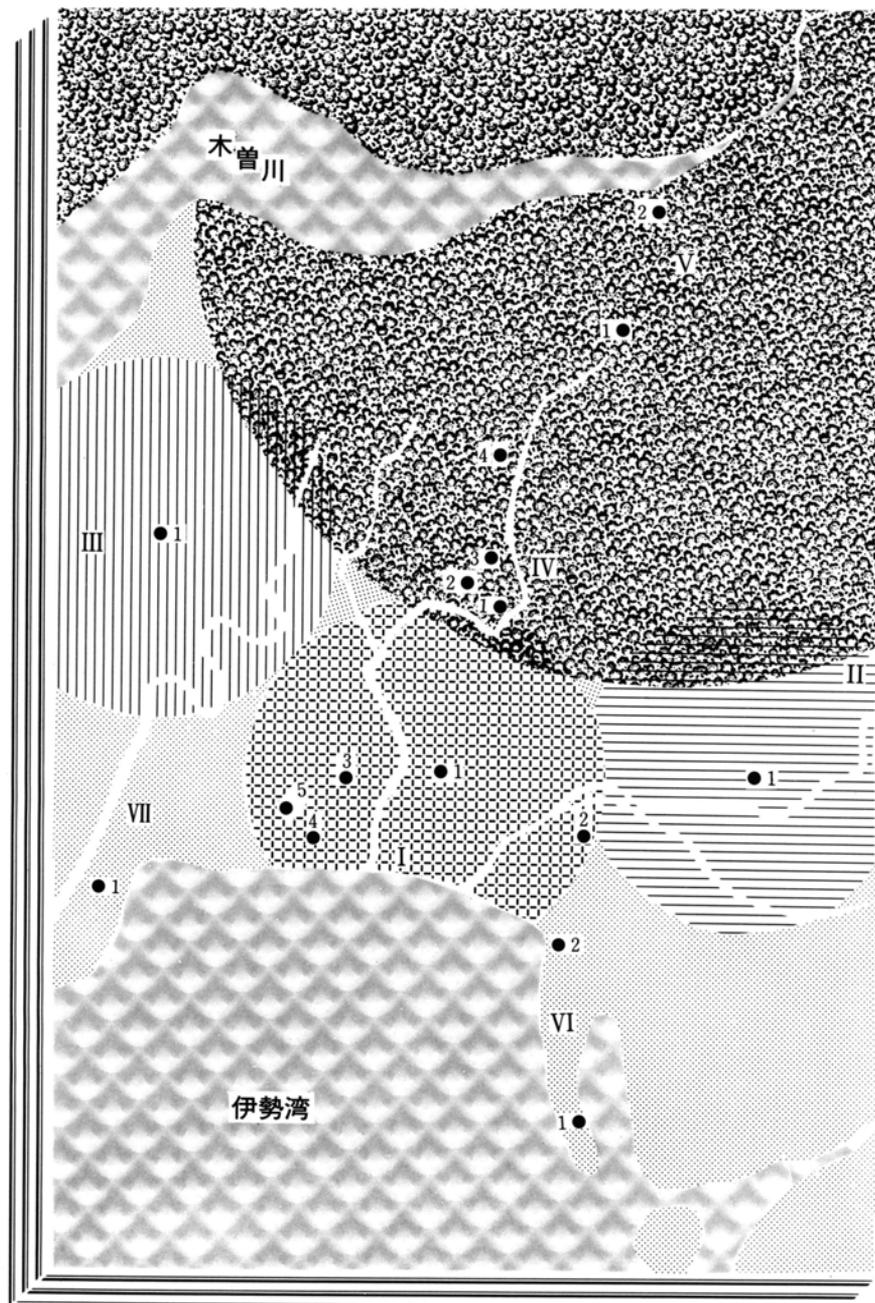
- 地区Ⅲ**
- 1 二夕子

- 地区Ⅳ**
- 1 曾野
  - 2 大地
  - 3 東長畑
  - 4 佐野

- 地区Ⅴ**
- 1 仁所野
  - 2 上野

- 地区Ⅵ**
- 1 高蔵
  - 2 三ノ丸

- 地区Ⅶ**
- 1 寺野



地区Ⅲ 二太子遺跡を中心とする地区。地区Ⅰと同様低平な平野部。縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて在地の伝統を主体に変容した地区である。

地区Ⅳ・Ⅴ 五条川の中・上流域に相当し、縄文時代晩期以来の伝統を残す地区。尾張平野の中期弥生文化の形成に際して無視できない地区。

地区Ⅵ 名古屋台地に分布する遺跡を括るが、全体を一つにできるかどうかは確定できない。自立のための農耕基盤を持たない、海に依存するか平野部に依存する地区。

地区Ⅶ 調査が不十分で詳細不明。平野部の地区として独立させることができるかもしれないが、現状では不可能。

以上の地区のうち、貝塚・貝層を形成するのは地区Ⅰのみだが、地区Ⅵも本来はあったかもしれない。

地区Ⅰには、海産物加工を始めとする各種生産活動と物資交換のセンターとしての朝日遺跡があり、阿弥陀寺遺跡はそこから入手していたようだ。また、遺跡周辺が水田開発されれば狩猟・採集が困難となる地区Ⅰ・地区Ⅲは、地区Ⅱ・地区Ⅳ・地区Ⅴ・地区Ⅵとの交換によって自然食料を入手した可能性がある。石材や木材はそれらの地区からの直接入手か、中継による入手であろう。

このように、弥生時代の尾張平野部に展開する諸遺跡は、それぞれ異なる特性(エコシステム)を基盤としつつ相互に関係を持って、一つの社会を構成していたと推測する。

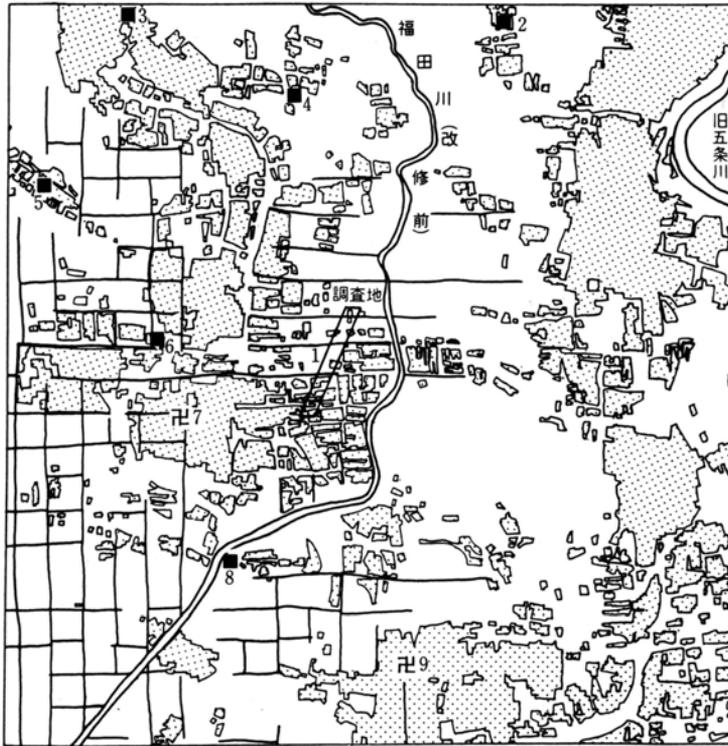
#### 鎌倉 室町時代

遺構・遺物がまとまって検出された鎌倉・室町時代(14~15世紀)の周辺遺跡について概観しておきたい。

阿弥陀寺遺跡周辺の甚目寺町から海部郡美和町、稲沢市、西春日井郡清洲町にかけては、四反畑遺跡・方領遺跡・甚目寺・清林寺遺跡・法性寺・土田遺跡・廻間遺跡・朝日西遺跡・清洲城下町遺跡等々数多くの遺跡が知られている。ただし発掘調査例は少なく、しかも小面積の調査例がほとんどであり、集落の構造については土田遺跡<sup>(2)</sup>を除いては明確ではない。従って、事例の少ない現段階では阿弥陀寺遺跡を上記の遺跡群の動向のなかに位置づけることは難しく、いましばらく資料の蓄積をまちたい。第5図は、遺跡周辺の条里制遺構(地割)の分布を示したものである<sup>(3)</sup>。もとよりその形成年代の解明については不明な点が多いが、その一部が調査区域にかかることからみて、遺跡の歴史的環境として条里制とのかかわりも重視される必要があるだろう。なお調査区内の条里制遺構については後述するが、その形成年代については、少なくとも14世紀代にさかのぼることが知られたにとどまる。文献史料と遺構・遺物との短絡的な結びつけは避けなければならないが、この点に関連して、最後に文献資料に目をむけておきたい。周知のように遺跡の所在する甚目寺町大字石作は、『和名抄』にみられる「中島郡石作郷」の故地とみる見解が支配的で、さらに調査地の西方100mにある石作神社を『延喜式』にのる式内社の1つである中島郡「石作神社」に比定する説もある。そこで調査にあたっては、「石作郷」が何らかの形であらわれるのではないかとの予見もたれたが、奈良・平安時代の遺構を認めるにたらず、14~15世紀代

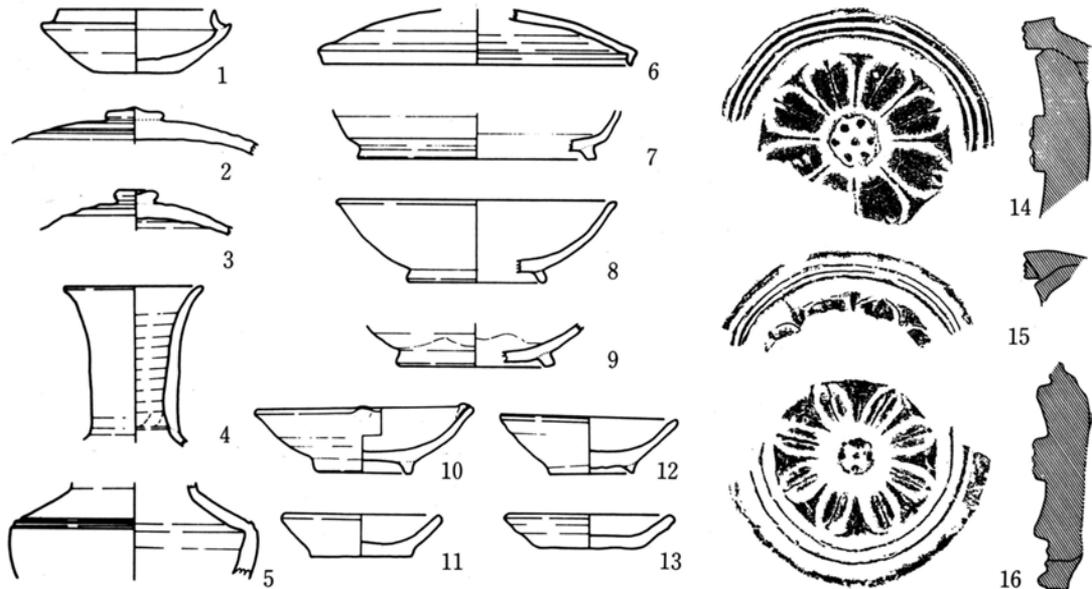
2 遺跡の概観

の遺構・遺物を検出したにとどまった。ただ調査区の西方の現福田川の川岸で古墳時代～平安時代にかけての遺物が表面採集されており、今後その辺りで当該期の遺構が見い出される可能性はある<sup>(4)</sup>。さらに関連して付記するならば、令制下における石作郷が海部郡ではなく「中島郡」に所属している点も注意すべきであろう。こうした行政領域が遺構・遺物の上に如何に反映されているか、そして調査遺構の年代に近い弘安5年(1282)<sup>(5)</sup>の段階でもひきつづき中島郡に属していた点が知られる。



- 1 阿弥陀寺遺跡
- 2 土田遺跡
- 3 四反畑遺跡
- 4 方領遺跡
- 5 森南遺跡
- 6 清明A遺跡
- 7 法性寺
- 8 大洲遺跡
- 9 甚目寺

第5図 阿弥陀寺遺跡周辺の条里制地割(坪界)



第6図 福田川周辺の採集遺物および甚目寺・法性寺出土軒丸瓦(1:4)

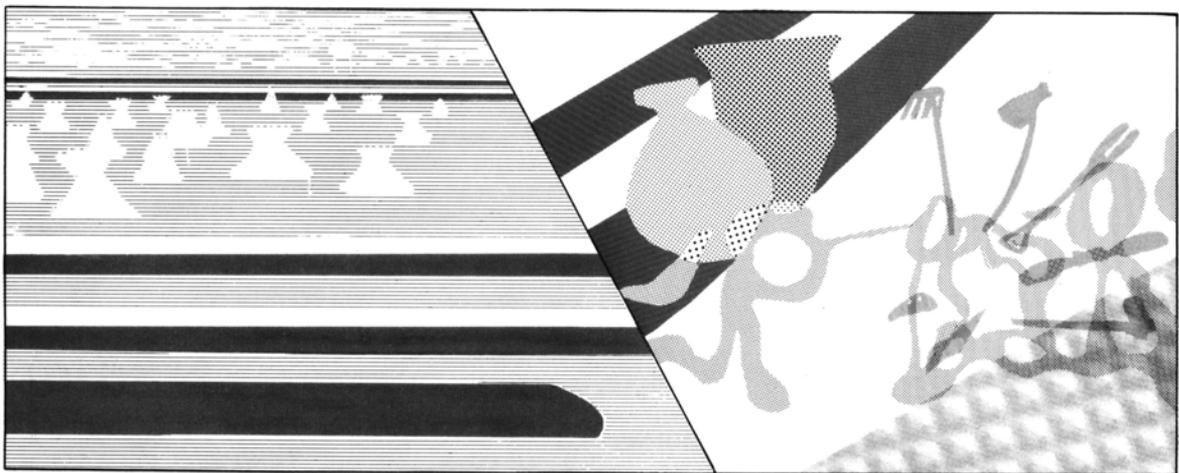
1~13 福田川周辺 14・15 甚目寺 16 法性寺

# 第II章

# 調査の成果



1. 層序 ————— 石黒
2. 弥生時代 ————— 石黒
3. 鎌倉・室町時代 ————— 北村



# 1. 層 序

阿弥陀寺遺跡は微高地上に位置している。そして、弥生時代と鎌倉・室町時代では周辺環境が大きく異なる。

弥生時代には、北に広大な湿地が広がる。すぐ南には谷地形があり、そのさらに南には砂丘化した砂堆が展開していたのである。しかし、鎌倉・室町時代になると周田はほぼ平坦と化していたようで、溝で区切られた屋敷地割り状の地区が広がっている。

**遺跡の基盤** 巨視的な意味で遺跡の基盤となる層位は、明るい灰色、あるいは青味がかかった砂層で、基本的に地表面に露出することはないが、包含層を深くまで下げると出てくる。調査区で言えば、57H区において標高+70cmで砂層の露出があり、しかも冬期の調査で苦労した記憶がある。砂層以外の部分は大体が黄灰色シルト層を基盤とする。けれども層位的には純粋な黄灰色シルト層からなる部分は少なく、厚さも決して厚くない。したがって、垂直的にはシルト層と（粗・細）砂層が交互に縞状に堆積しているのが普通の状態である。

こうした基盤も細かく見れば、時期によって変化する。弥生時代には、地表面の変化さえ促すほどの自然の影響があったようで、また遺跡の周田もそうした自然の影響を受けやすかったのか、包含層の二次堆積がみられる。つまり、もともと高い微高地も、地表面の侵食が進み周辺地区の堆積を進めたのである。その意味では、当初は決して安定していなかった微高地も順次安定に向かっていったと言えよう。もちろん、安定は一体どのレベルのことを言うのかという問題はあるけれども。

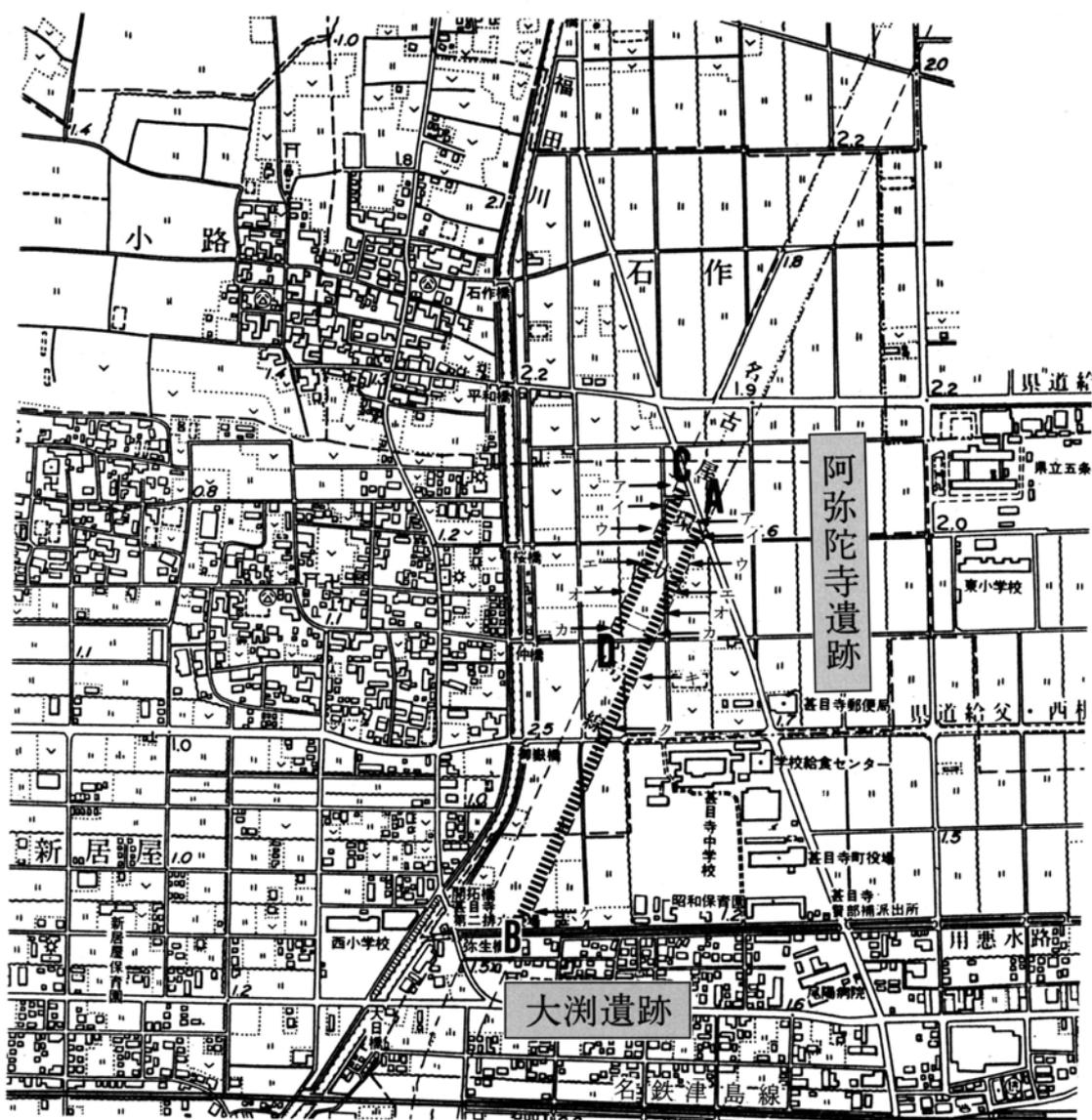
遺跡の基盤は、もともと自然状態であったものを、おそらく遺跡を営んだ人間たちが改変することになる。われわれが包含層と呼ぶ層位は、基本的に自然堆積ではない。人間活動による地表面の攪乱にすぎない。地表面の攪乱の集積が包含層なのである。したがって、どこからか土を運んできて積み上げることはない。とするならば、時間的な流れに対応した視点での遺跡の基盤とは、その時々存在した、平均標高には大きな変動のない、遺構の表面ということになる。

しかし、阿弥陀寺遺跡では、弥生時代に限らず鎌倉・室町時代においても、本当の意味での当時の地表面は検出できていない。第1の原因は近世の新田開発による削平、第2の原因は戦前の軍事施設（飛行場の滑走路）の建設による削平である。だから、基盤の変化は推定する以外にない。

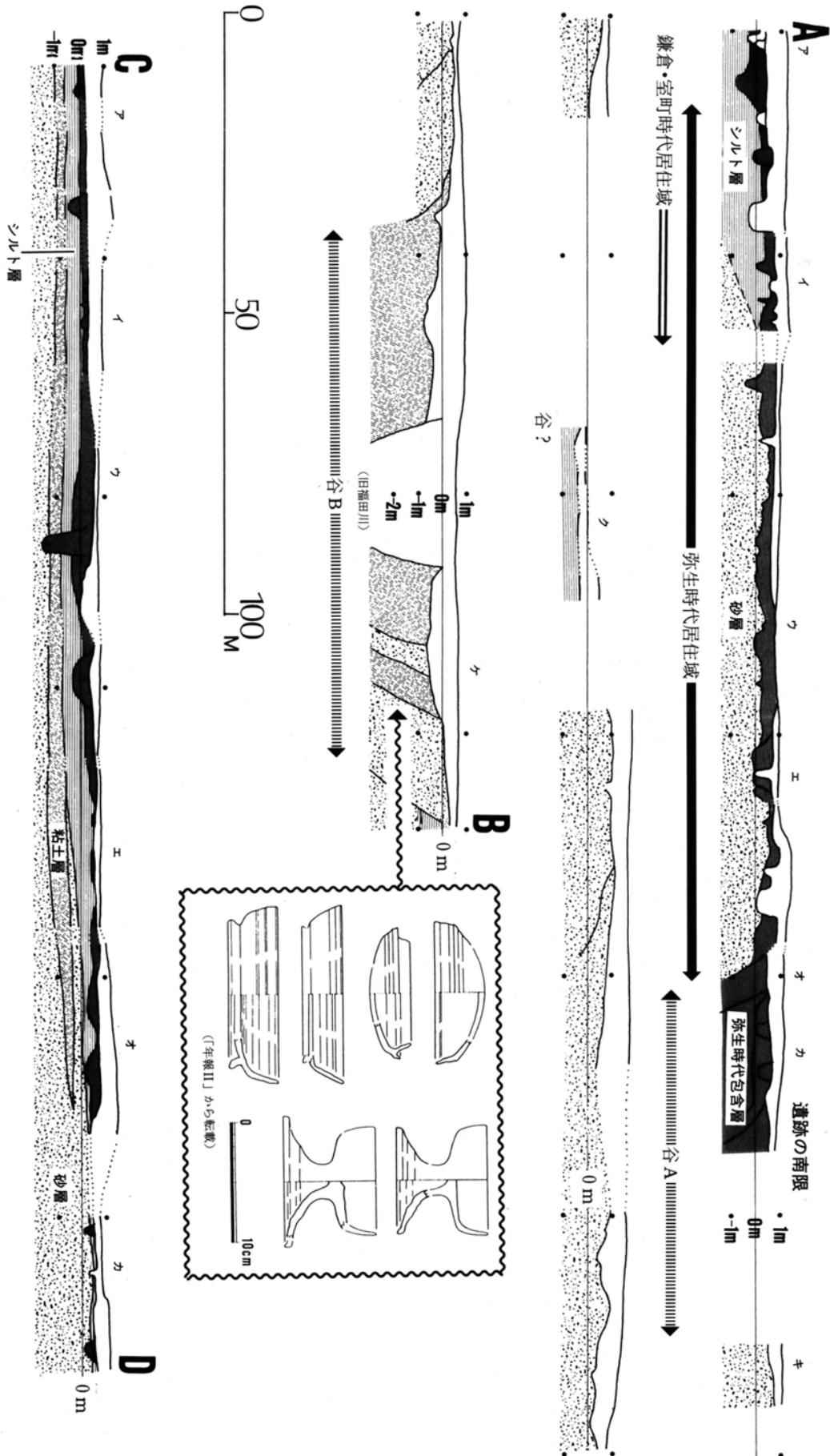
**包含層** ところで、弥生時代の包含層が、基本的には人間活動による地表面の攪乱であるといったけれども、この点は鎌倉・室町時代も同じである。弥生時代は当初全くの自然状態であった区域に包含層を形成したのであるが、鎌倉・室町時代は弥生時代の包含層を基盤としてその包含層を形成することになる。ただ、弥生時代と違って鎌倉・室町時代は集落の設計

というような側面がより強く全面に出るから、造成もより大規模となる傾向にある。今回の調査では整地層として確定できる層位の検出はないが、後の削平がなかったなら整地層としての包含層が把握できたであろう。

**自然状態** 弥生時代と鎌倉・室町時代については、人間活動の確実な痕跡としての遺構が検出できたのだが、それ以外の時期には自然状態における堆積が進行していた。弥生時代の遺構のうち、III期以降の環濠や大規模な土坑内部には鍵層となる黄灰色や灰白色のシルト層が安定的に堆積しており、それらをつなぐことによって一時期の埋没状況を推定することができる。時期は古墳時代前期でも前半期の中で収まる。そして、これらの遺構がそれ以後鎌倉・室町時代までに自然状態で埋没したということは、その期間には人間の立ち寄ることがない区域になっていたということである。



第7図 基本土層図位置図 (1:10000)

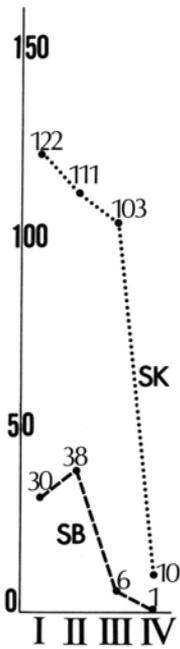


第8図 基本土層図 タテ1:250 ヨコ1:1000

## 2. 弥生時代

**時期区分** 弥生時代の阿弥陀寺遺跡に関する時期区分は、すでに昭和56年度年報で概略的区分を提示し、その後それを補足して現在（I期～IV期の4期区分）に至っている。今回も、とくにその基本的部分の変更は必要としない。ただ、土器の時期細分については新しい知見を得たので、以下でやや詳しく触れることになる。

**遺構** 遺構は溝（SD）・住居跡（SB）・土坑（SK）など多岐にわたる。ところで、住居跡という認定は単に遺構の形状だけでなく複数の要素をもって決定する必要がある。しかし阿弥陀寺遺跡の調査では、掘形よりも床面を重視して、最低限の認定要件を炭化物の薄い層が一定の範囲ではほぼ水平に分布することとした。そのため柱穴や炉跡のないものも住居跡として認定しているし、中には調査時に住居跡とされても平面形が全く不整のものもある。以下報告では、床面と掘形の整合を重視して取捨選択を行った。



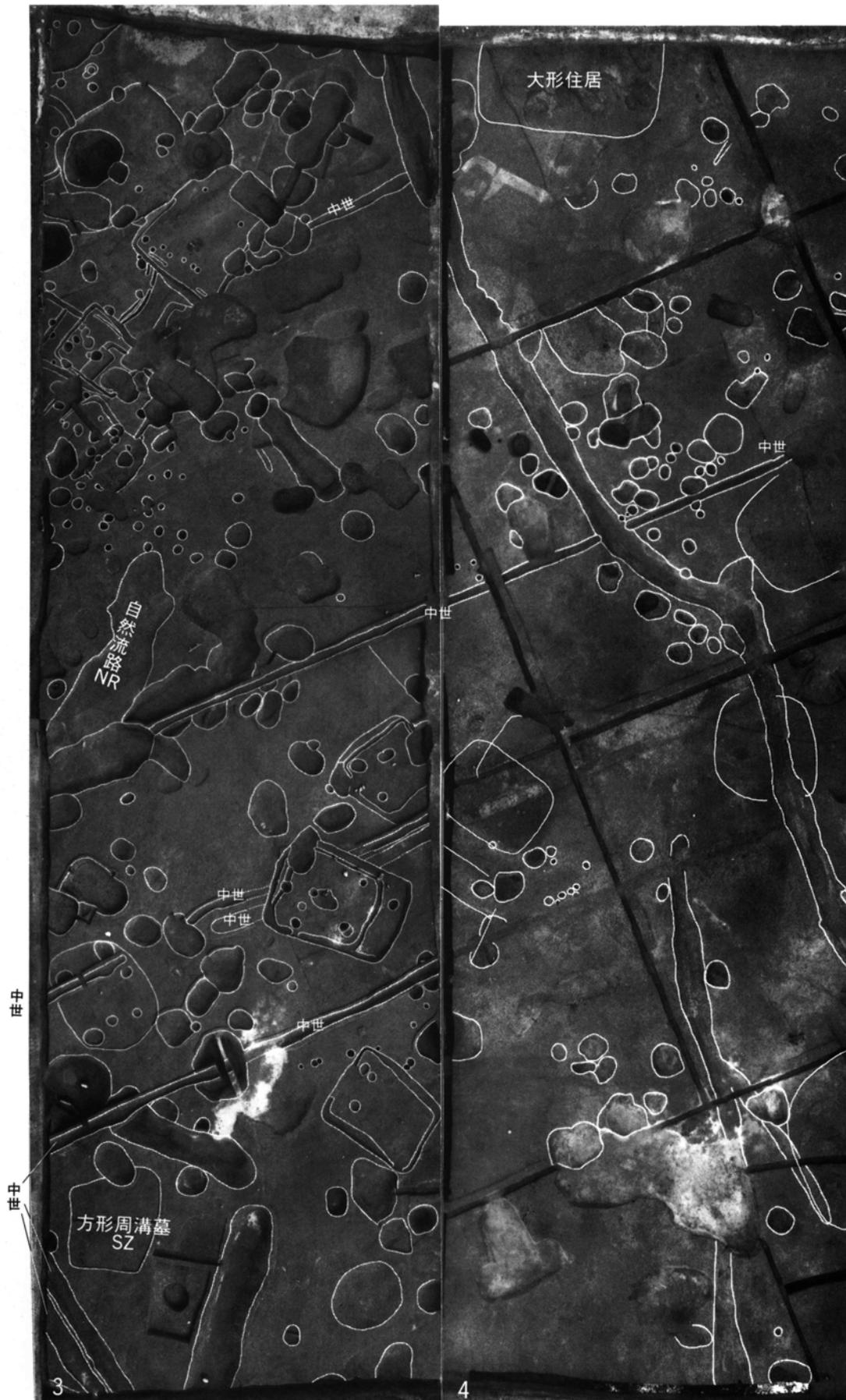
第1表 遺構数の変化

遺構はその時期決定にあたって、出土した土器の時期に多くを頼っている。土器棺などのように時期決定因を内在した構築物であればほぼ同時のものとして考えることもできようが、ほとんどは大地に記された痕跡としての遺構の埋没という一定の時間を経ているのであり、その意味で時間幅を考慮せざるをえないのが実情である。その際たるものが溝であり、とくに水流があって自然埋没となれば土器が複数の時期にわたることも少なくない。こうした事例で複数の細分時期を遺構に与えることはかえって遺構の存続期間に対する錯覚を与えることになると思われる。遺構の時期決定は下限の確定にすぎない。

ところで、遺構で最も多数検出できたのはI期に属す例で、以下時期を経るごとに減少し、IV期になると数えるほどになってしまう。同様、包含層も時期が下がれば部分的なものになる。これは、阿弥陀寺遺跡が鎌倉・室町時代の集落跡と複合し、さらにその後の水田耕作等による改変によって本来の形状が失われていることにもよる。さらには、遺跡全体の広がりの中での調査区の位置もそうしたありかたを制約している要因であろう。また、遺構すべてが時期決定できたわけではなく、小さな土坑などかなりが時期判定不能となっている。そのため、時期別の記載には対応できないことから省いたものもある。

**遺物** 遺物は、自身で時期決定できる土器は別として、包含層中から出土する石器に関してはたとえ遺構内からの出土であるとしても全く躊躇なく時期決定できるものは少ない。とくに、石鏃などのような小さなものは包含層ともども遺構内に流れ込む可能性もあるため、時期の下がる資料は下限を決定するにすぎない場合もある。そうした、マイナス要因はあるものの、いちおう記載に際しては遺構の時期区分を指標として各時期ごとにまとめた。石器については「時期のわかるもの」に比べて不明のものが多いという現状のまま後者を除外することは問題もあるので、時期別記載以外で代表的なものに限って掲載した。







- 1 59 F
- 2 59 E \* 遺構のズレは、写真が同一縮尺でないことによる。
- 3 59 H \*\* 59 E・59 G・59 Hは居住域の外縁部寄りではあるが、内部の状態をある程度は予態させるものである。
- 4 59 G
- 5 59 J \*\*\* 59 F・59 I・59 Jは居住域の内部と外部にまたがっており、遺構の密度の落差を良く示している。
- 6 59 I 注意されたい。

## I期～IV期の大別について

以下、事実記載を進めるにあたって、I期からIV期までに区分して説明する。そこで、予め当該区分について説明を加えておく。なお、土器の細別はまた後述する。

\*

**昭和57年** われわれは、昭和57年度の「年報I」において、昭和56年度の調査成果に基づき、ほぼ現在の区分に近い大別区分を設定した。すなわち、本書におけるI期からIII期を「I期」から「IV期」に区分したのである。その準拠は、弥生中期後半代の編年として通用していた貝田町式・高蔵式（朝日遺跡編年を基準とする）<sup>(1)</sup>であった。しかし、そこにおいて幾つかの問題点が生じた。つまり、既製の編年観との不一致が生じたのである。

(1)「I期」では、先行する朝日式に組成する甕にかなり近似したものやその変化した形と思われるものが出土した。果たしてそれらが确实貝田町式に組成するのかが問題となった。<sup>(2)</sup>

(2)「III期」では、従来高蔵式として認定され一時期を画すと考えられていた一群に貝田町式的要素を強く持つ土器が共存し、従来の時期区分に疑問が生じた。<sup>(3)</sup>

(3)「IV期」では、従来「美濃形貝田町式」とよばれた条痕紋深鉢が共存し、これも既製の編年観に対する疑問を引き起こした。<sup>(4)</sup>

など、幾つかの疑問点が生じたのである。また、「IV期」の「高蔵式」に関しても、一体系的にどこに帰属するのかなどが問題となった。<sup>(5)</sup>

**昭和58年** 次年度（昭和58年）では、こうした疑問点などを踏まえ再検討した。その結果、従来の編年にはとらわれない立場で進め、「I期」→I期、「II期」→II期、「III期」→III期1段階、「IV期」→III期2段階に組み替えることにした。旧III期・旧IV期をIII期として一括したのは、貝田町式系土器群の消滅過程でありかつ凹線紋系土器群の出現過程であるという、どちらか一方のみ注目するわけにはいかない複雑な時期であるということによっており、そのなかで前者が主となっている時期、後者の主となっている時期ということで分けた。しかし、段階を小時期区分としなかったのは、詳細な型式変化など土器個々の変化について十分把握していなかったからであり、あくまで便宜的なものにすぎなかった。これらのことについては「年報II」で発表している。

これ以後は、この3期区分に弥生後期のIV期を加えた4期区分を阿弥陀寺遺跡における年代区分として適用した。

**昭和59年** 昭和59年度は、それまでの時間区分重視から地域差に視点を移して、阿弥陀寺遺跡出土土器群を「在来系」と「外来系」に区分したうえで、I期～III期までの区分との対応関係を中心に変化を検討した。その結果、

(1) I期は壺以外では「朝日形」と呼んだ体部外面二枚貝調整の甕や、当時は未だ〈条痕紋系土器〉としていた一群の土器などによって特徴づけられることがほぼ確定した。

(2) III期は系統不明であった凹線紋系土器群が、中部地方以西の地方で広範に展開し、しかも畿内地方に限定されない成立過程をもつ土器群であることが伺い知れるようになってきた。その意味で、III期は阿弥陀寺遺跡であるとか尾張地方であるとか、伊勢湾地方であるとかいう範囲を超えた大きな変革期に相当するものであるという認識に至った。このことから言えば、III期をI期・II期に後続させるのではなく、凹線紋系土器群出現前後で大別してI期・II期として区分してもよかったのであるが、この問題は遺跡固有の問題から離れて弥生時代論そのものとも関係してくるため、阿弥陀寺遺跡に関わる区分ではなくなってしまうということもあるので避けることにした。

このように内容を充実させた反面、問題点もいくつか残った。すなわち、III期を特徴づける台付甕がすでに1段階に在来系台付甕として成立していることがほぼ確定できたが、その先行形態のないことから出自がどこに求められるのかが疑問として残った。また、用語としての「在来形・外来形」の確定性と実態としての土器の整合が十分にうまくいっているとは言えず、課題を先送りすることになったのである。

＊ ＊

このように、I期は貝田町式を基礎に置きつつも壺以外では「朝日形」とした甕の存在によって確定でき、III期は凹線紋系土器群の出現によって画期とするという大きな枠組みができた。しかし、II期に関しては、資料の少ないこともあって、壺を除いてはI期とIII期の間という以上の積極的な特徴が掴みかねたままであった。したがって、全体に関わる課題としてはII期の把握が残ることになった。

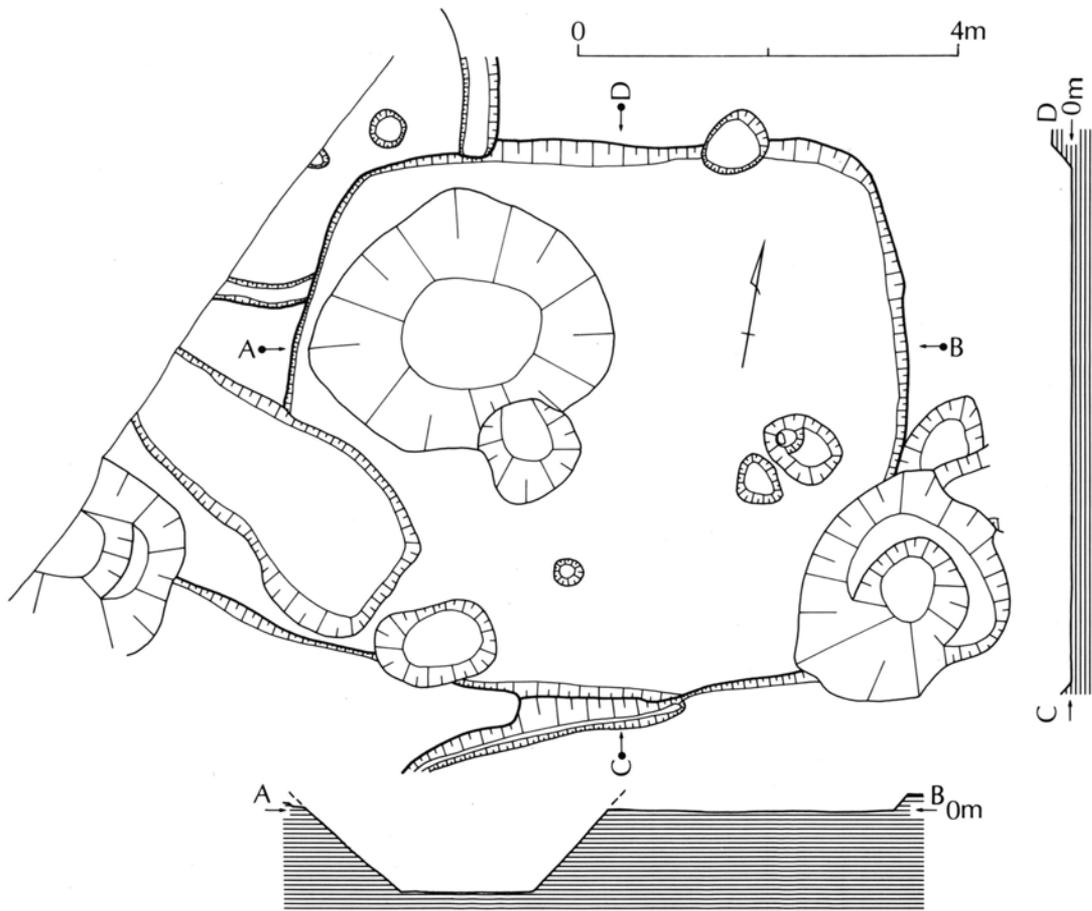
＊ ＊ ＊

**事実記載** 一応上記の経過で大別区分に至ったのであるが、事実記載の遺構や土器に関しては、細別による説明を行っている。また個々の用語などに関しても、順序は逆であるが、第三章に関連事項の記載があるので、適宜そちらと対照していただきたい。

## I 期

## 遺 構

- SB15**  
(図版9) プランおよび柱穴は不明である。掘形の深さは約45cm。床は、炭化物薄層と黄灰色砂質シルト層の互層からなる部分が少なくとも2面あるが、両者は不連続である。建て替えがあったのであろうか。I-1b期?。
- SB16**  
(図版9) プランは円形と思われる。掘形は土層セクションで約25cmの深さを確認したが、検出時にはほとんど平坦であった。幅20~40cmの周溝がめぐる。
- SB17**  
(図版9) プランは中軸線で約645cm×595cmを測るやや胴張り台形気味の長方形である。掘形は深さ約30cm。床面には炭化物が薄く散布していたが、貼り床の有無は不明である。柱穴および周溝は未検出である。I-2期。
- SB19**  
(図版9・14) プランはやや台形気味の長方形である。長軸は640cm、短軸は短辺は不明だが長辺は推定で5m強を測る。掘形は深さ約45cmほど残存し周溝が西半分にめぐり、拡張を示すのか西辺側に周溝の残欠が2ヶ所ある。主柱穴は4本であるが、西側には小ピットが列をなして集中している。



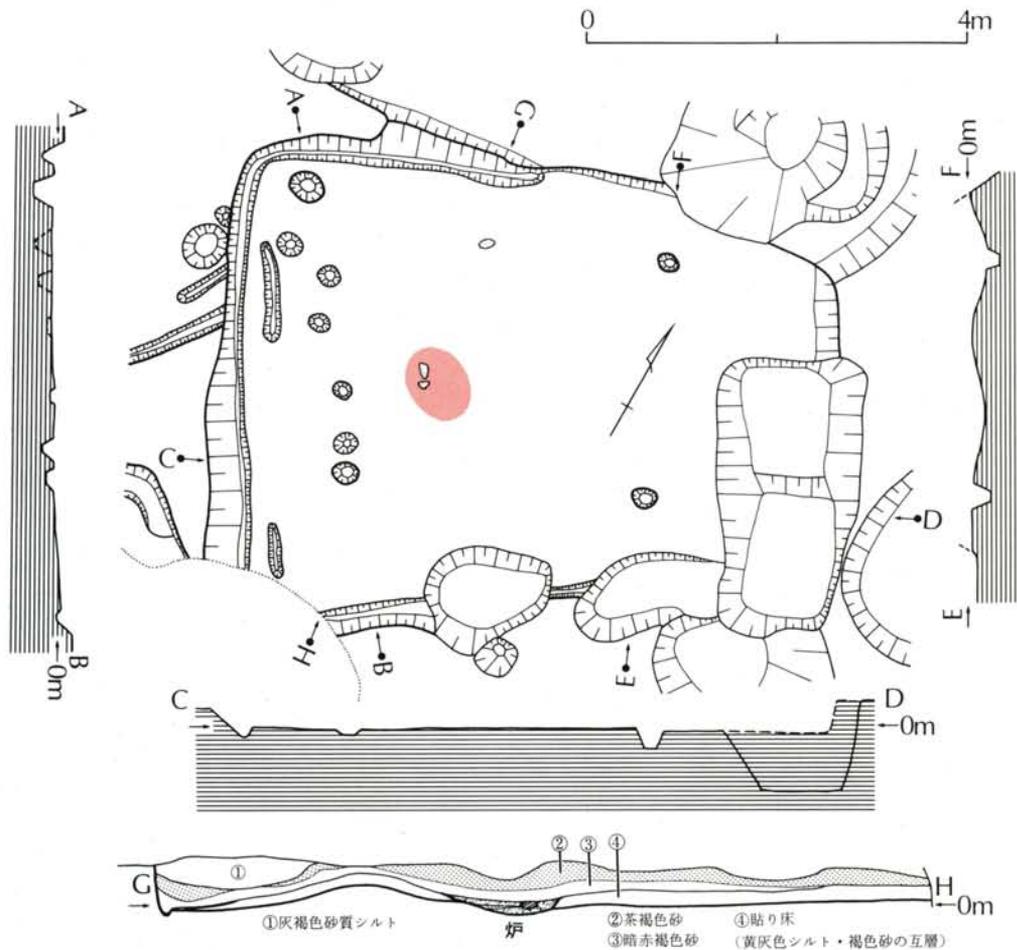
第9図 SB17プラン・セクション(1:80)

床面は平坦ではなく東半分で起伏が著しい。これは後世のもの（おそらく現代で重機の動いた軌跡）であろう。炉は地床炉で西辺寄りにあり、棒状のやや小さい河原石をともなっていた。炉石というには小さすぎるので甕の底部でも固定するものであったかもしれない。貼り床は黄灰色砂質シルトと褐色砂の互層で炭化物層はほとんど挟んでいない。東辺周壁際には長径 36cm から 16 cm の河原石 6 個が壁に平行して遺存



第10図 東壁際河原石出土状態（南から）

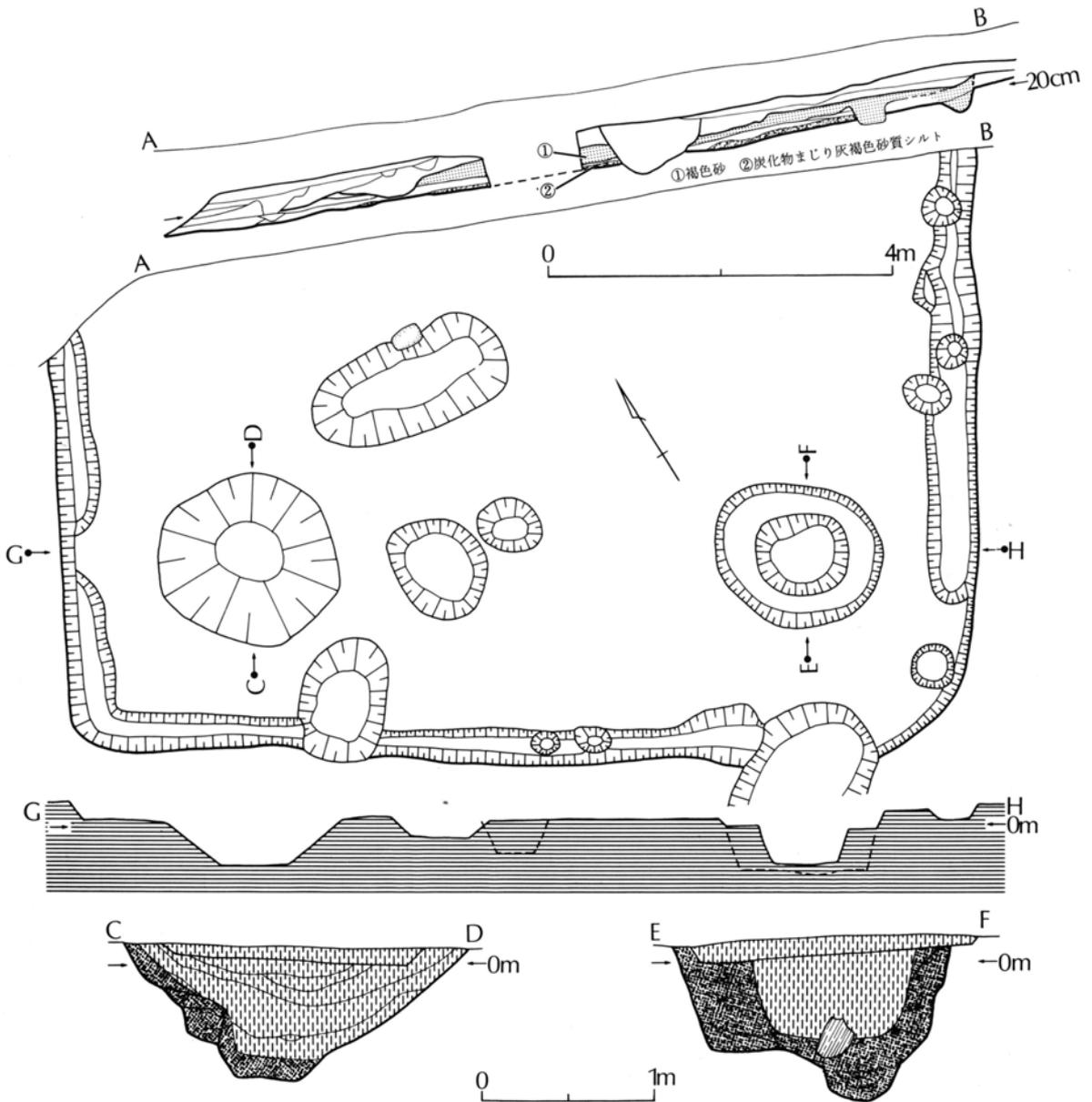
していた。内 1 点は火熱を受けて赤化していたので炉石として使われていたものかもしれない。また、大きいものは作業台として使用されたのであろう。埋土上部は砂層からなり、洪水によるものであろう。I-1b 期～I-2 期。



第11図 SB19 プラン・セクション (1:80)  
土層セクション (1:50)

**SB28** (図版10・15) 二つの調査区にまたがって二分されたため、残念にも北半分は確実には検出できなかった。それでも、土層セクションなどから復元すると、長軸が南北にくる1250cm × 1060cmほどの大形長方形堅穴住居となる。掘形は深さ約30cm 残存。周溝は幅40cm ほどで、断続しながら全周すると思われる。

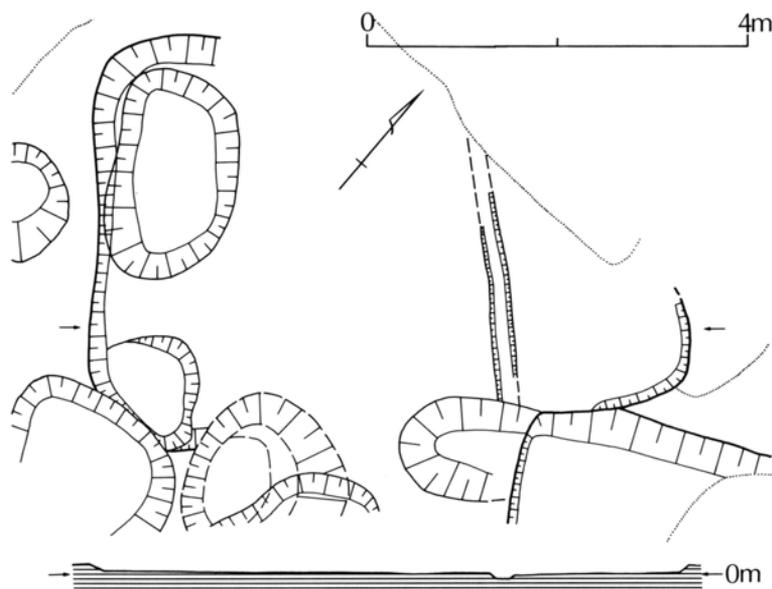
主柱穴は径180~200cm、深さは床面から約80cmという規模であり、柱ぬきとり痕?から推測する柱本体の径も50cm内外という巨大さである。床面の貼り床は確認できなかったが、炭化物層がほぼ全面に存在し、また床面に近い埋土には炭化物・焼土・焼け焦げた材が遺存していたので、なんらかの理由で焼失したのであろう。埋土上部には砂層が堆積しており、洪水の影響をうけている。I-1b期。



第12図 SB28 プラン・セクション・土層セクション (1:80)  
柱穴セクション (1:40)

SB29  
(図版11)

炭化物の薄層が平坦に散布し、いかにも床面の存在を示すところから検出したものであった。柱穴・周溝は不明だが、一応上下2群に区分できる土器の良好な廃棄が得られた。下面の土器はほぼ床面上にあり、I-1b期に属す。



第13図 SB29プラン・セクション (1:80)

SB30  
(図版11)

長軸 750cm、短軸中央で約 410cmを測る、北辺が南辺より長い長台形プランを呈する。掘形は深さ約 20cm。床面には薄く炭化物層が認められた。柱穴・周溝は不明。埋土中には土器の集中する箇所が北部と南部の2ヶ所があり、南部は南からの廃棄を示しており明らかに竪穴住居埋没過程における窪地内部への廃棄であった。ただ、北部の土器群は河原石とともに床面に接して遺存していた。I-2期。

SB31  
(図版11)

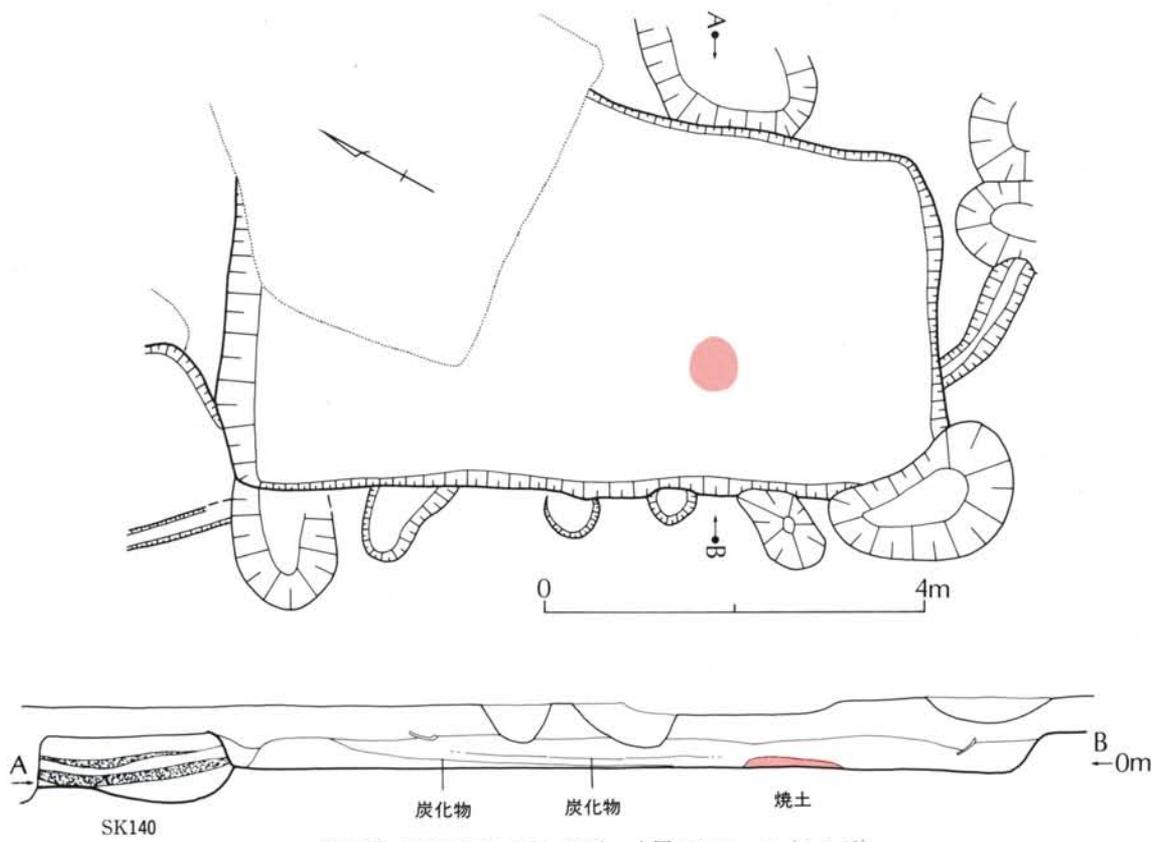
長軸 460cm、短軸 330cmを測る隅円長方形プランを呈する。周溝と柱穴のみの検出で掘形は残存せず。出土土器などからみてI期に含めたが、床面レベルは30cm前後と高い。

SB39  
(図版12)

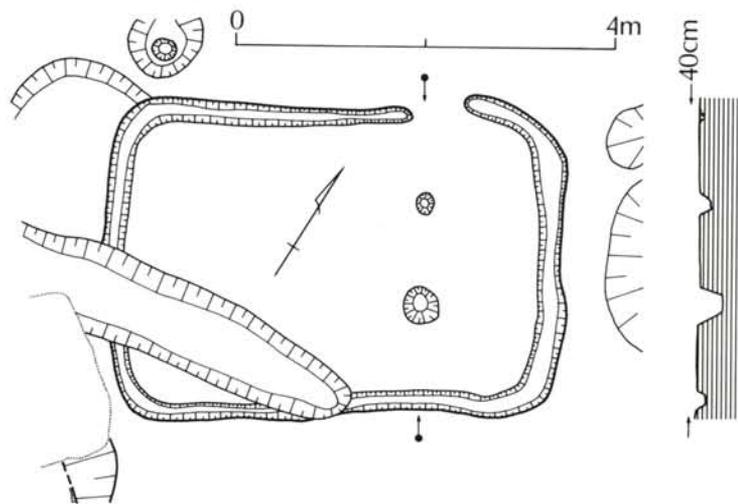
全形は不明で柱穴・周溝も未検出である。だが、土層セクションの観察では住居と考えられた。床面上での炭化物の遺存は認められなかったが、やや粗い褐色砂が全体に薄く堆積していた。埋土中には河原石や比較的大きな土器片が含まれていた。I-1b期。

SB41  
(図版12)

ほかの遺構と複雑に重複しており全体の形は掴みがたい。土層セクション・床面状況などから住居と認定した。



第14図 SB30プラン (1 : 80)・土層セクション (1 : 40)



第15図 SB31プラン・セクション (1 : 80)

**SB42**  
(図版13) SB43によって切られる。約440cmの一边および周溝・柱穴の一部を検出。南西辺は周溝が不明確となっている。ほとんどを戦前・戦中の遺構によって破壊される。

**SB43**  
(図版13) SB42を埋めて床面としている。掘形は25cmほど残存。SB42とは軸線が少しずれているが、SB51例を参考にすると拡張の可能性もある。床面上には炭化物が散布し、棒状の河原石と土器が遺存していた。SB42と同様ほとんど破壊されている。

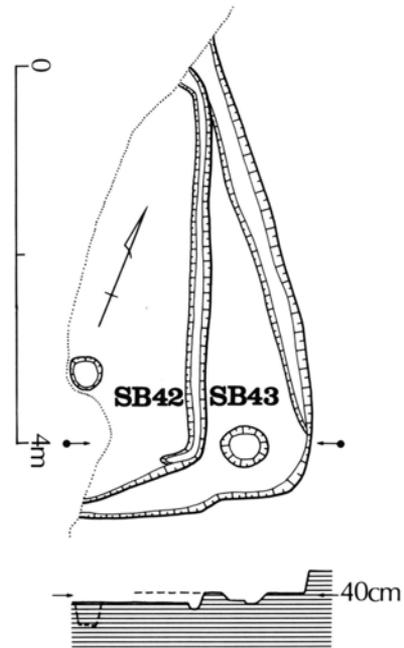
**SB44**  
(図版13) 本住居跡も戦前・戦中の遺構によってほとんど破壊されており、全体は不明である。

**SB45**  
(図版13) プランは不整形であるが、円形かもしれない。掘形は深さ約20cmほど残存。床面上には薄い炭化物がわずかに遺存していた。南部西壁際の土坑SK166内に堆積した炭化物層からは3600粒以上の炭化米、ガラス質石英安山岩のチップ、また床面上の炭化物層からもガラス質石英安山岩チップ多数を検出した。このことは、本住居内での石器製作を示すものと考えられる。

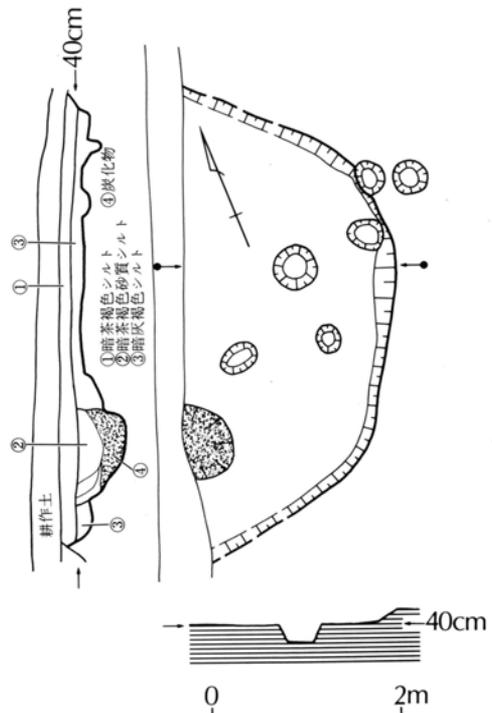
**SB46**  
(図版13) 炭化物層の広がりをもとに掘形を迫及したが、周溝・柱穴ははっきり掴むことができなかった。包含層の落ち込みかとも思えるが、自然状態での堆積は考えられないので住居跡と認定した。

**SB47**  
(図版14) 胴張りの方形と思われるが不整形なプランである。一边約320cmを測る。中央部床面上には炭化物と焼土が薄く堆積していた。

**SB48**  
(図版14) SB49に切られて全体は不明。隅円長方形プランで、短軸約320cmを測る。床面には貼り床が認められた。



第16図 SB42・43プラン・セクション (1:80)



第17図 SB45プランセクション・土層セクション (1:80)

**SB49** (図版14) 長軸約400cm、短軸約320cm

の長方形プラン。周溝はほぼ全周するが柱穴は不明。埋土上部にはSB19と同様の砂層が堆積し、床面直上には小形壺、甕などが遺存していた。SB53に切られる。

**SB50** (図版14)

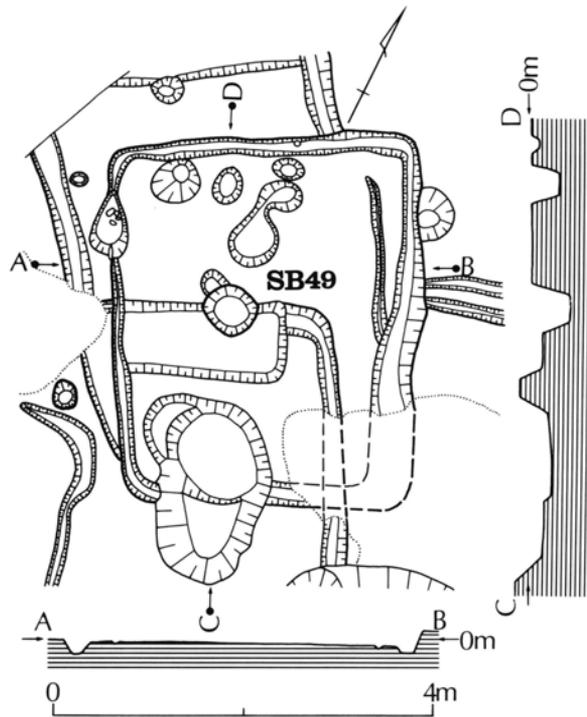
後世の攪乱のためにほんの一部分の検出にとどまった。磨製石斧の破片が1点出土している。

**SB51** (図版13)

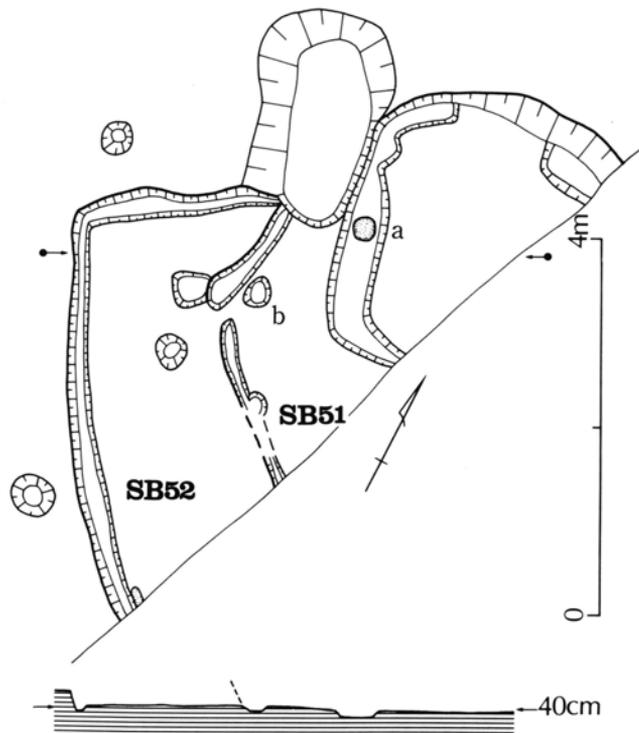
a は一辺約320cmの比較的整った隅円方形プランであるが、bは長軸500cm以上を測る不整形の胴張り方形プランのようである。a→bは拡張と考えられるが、軸線は約15度ずれている。a周溝上にある円礫(49)は直径30cmほどの台石で据え置かれたものである。床面上には炭化物・焼土の堆積がみられた。SB52とほぼ同レベル。

**SB52** (図版13)

SB51に切られる。床面および周溝には炭化物と焼土が堆積していた。掘形は深さ25cmほど残存。



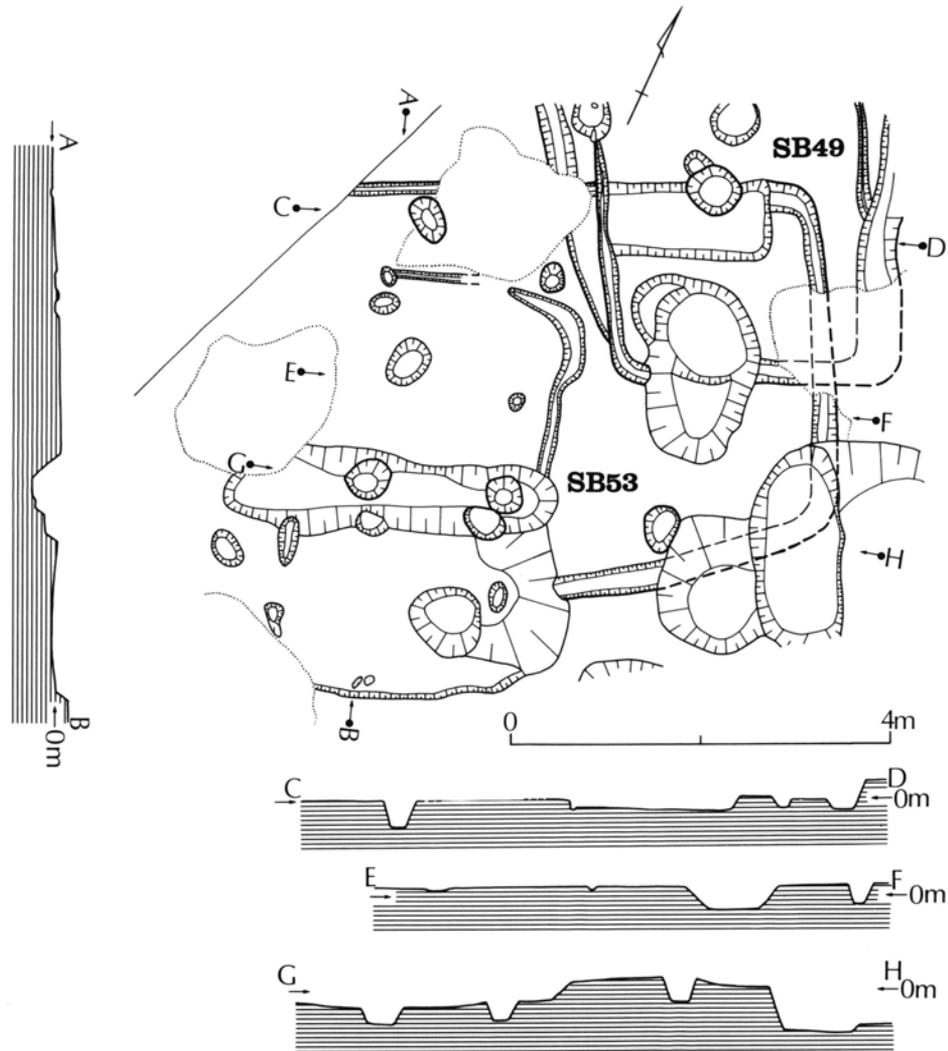
第18図 SB49プラン・セクション (1:80)



第19図 SB51・52プラン・セクション (1:80)

SB53  
(図版14)

SB49に切られる。かろうじて周溝の連続によって確認できるにすぎず、検出時はほとんど平坦であった。東辺約425cm、長軸は600cm以上あろう。内側にも周溝が一部認められるが、これは拡張前のものかどうか不明。もう一軒重複しているのかもしれない。



第20図 SB53プラン・セクション (1:80)

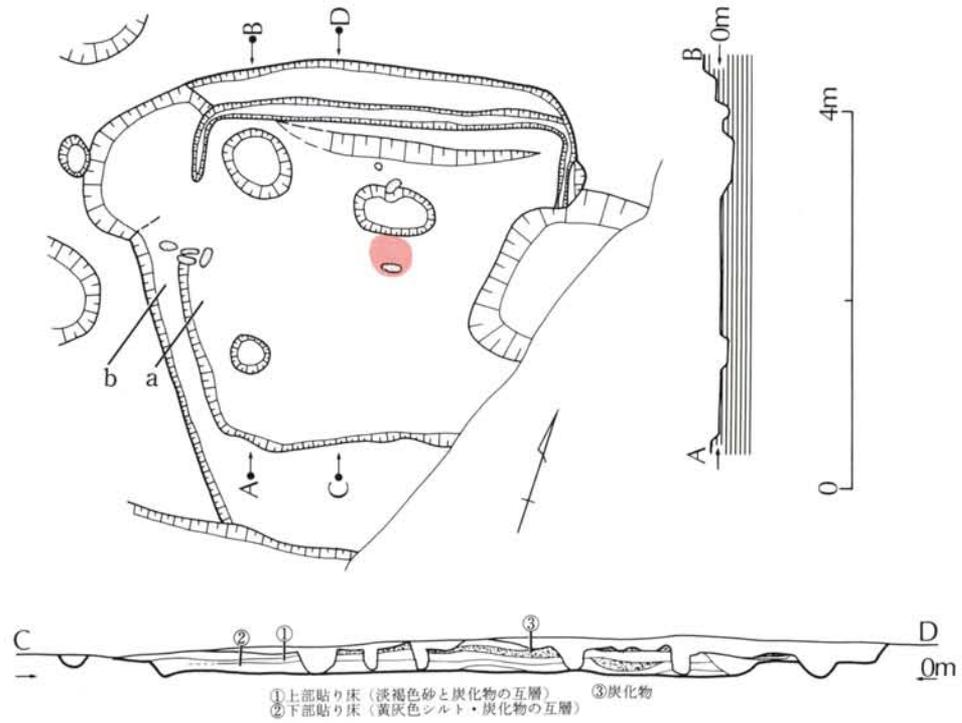
SB54  
(図版14)

周壁が平坦部によって上下2段に分かれる。おそらく平坦部はベット状遺構ではなく、拡張後の床面なのであろうが、拡張後の住居プランは実測図ほどはっきりしたものではない。

aは長軸395cm、短軸355cmを測り周溝がめぐる。掘形は深さ約10cm残存。北辺側では周溝の内側にも平坦部がせりだしている。床面は中央部やや北寄りに炭化物や焼土の薄層があり、そこで甕の底部1点が外底面を上に向けて出土した。埋土は薄い層が何枚も重なっており、貼り床状を呈していた。

bは、おそらく短軸であろう東西軸が約440cmを測る。掘形は深さ約16cm残存。周溝

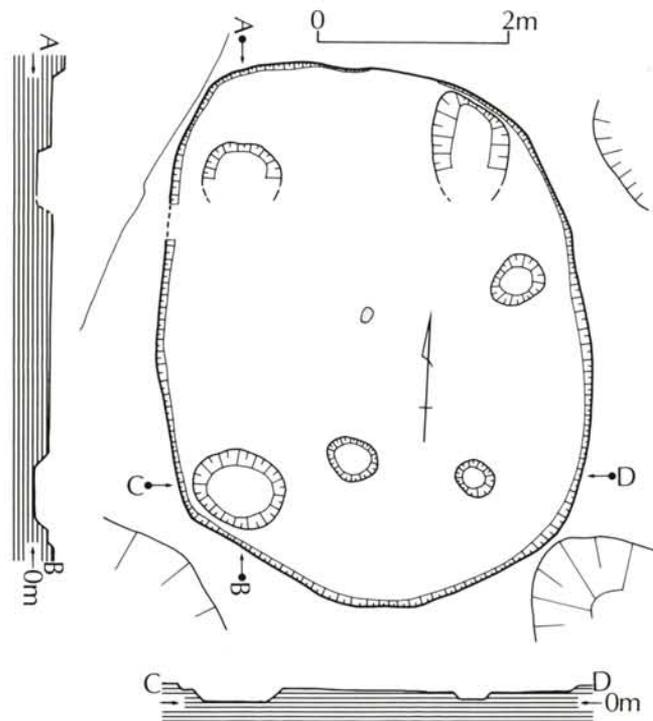
は未検出である。貼り床が認められた。西辺中央部近くで河原石の棒状礫が集積されていた。



第21図 SB54プラン・セクション (1:80)・土層セクション (1:40)

S B 55  
(図版14)

炭化物薄層を追跡して検出した住居跡である。そのため、小判形のプランは厳密には確定したものとは言えない。本来は長方形であったと思われる。柱穴は4つ検出したがいずれも浅く問題がある。



第22図 SB55プラン・セクション (1:80)

S B56  
(図版14)

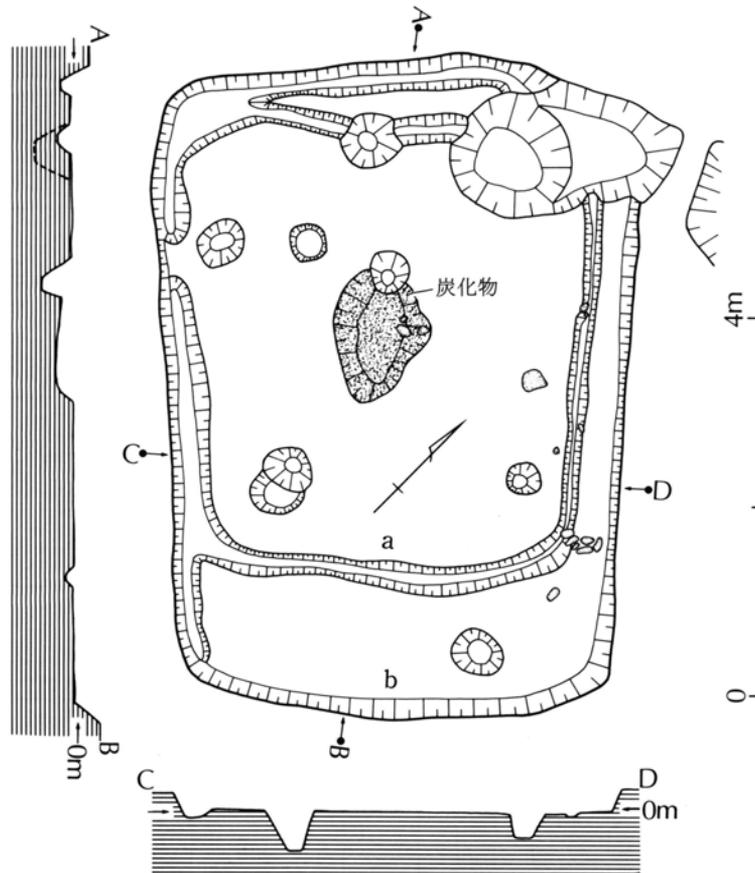
I期の住居跡では比較的良好な遺存状態である。拡張がおこなわれている。

aは中軸線で長軸485cm、短軸465cmを測るが、北西辺が南東辺に比べやや長い。周溝はほぼ全周する。

bは中軸線で長軸670cm、短軸485cmを測るがこれも北西辺が長い。周溝は北東辺と南東辺の拡張部側に存在しない。掘形は深さ約20cm残存。

床面の中央部には長楕円形の土坑があるが、内部には炭化物や焼土が充満していた。検出状況ではbにともなう。

埋土には炭化物や焼土のほか、土器が廃棄状態で多量に含まれていた。a・bの南部コーナー寄りの床面直上には土器が遺棄された状態で幾つか遺存していた。また、b周溝の南東コーナー付近には棒状を呈する河原石の集積があり、これらのことから本住居が焼失家屋であった可能性が指摘できる。I-2期。



第23図 SB56プラン・セクション (1:80)

SB59  
(図版15)

SB28の南に隣接して検出した住居跡である。2回拡張が行われている。ほとんど周溝のみの検出にとどまった。

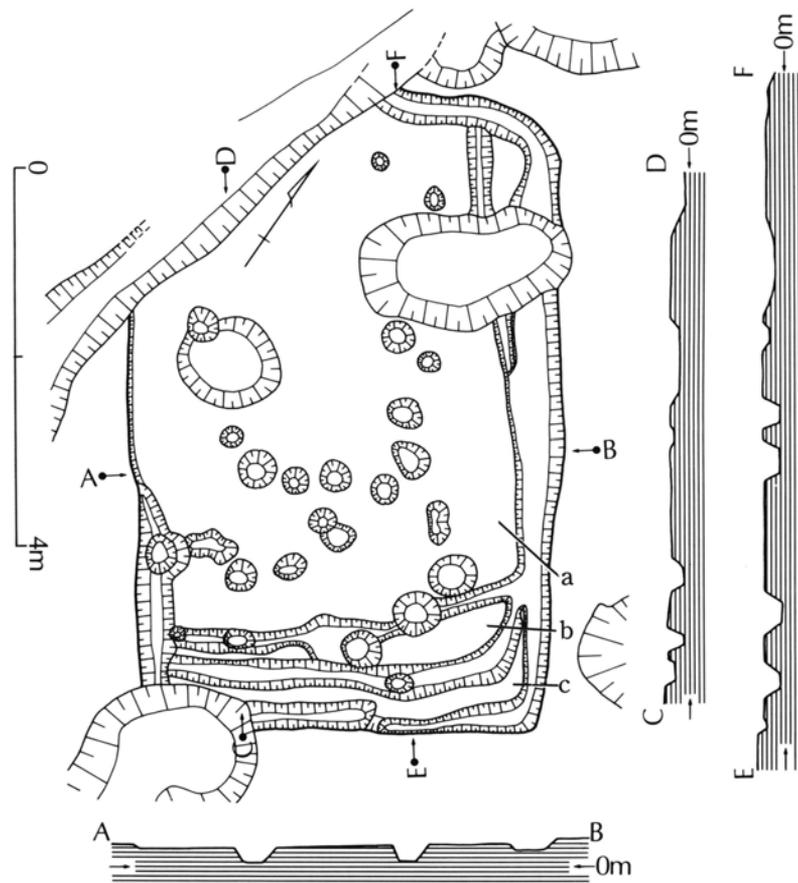
aは長軸560cm、短軸400cmで南東短辺がやや長い。

bは北東コーナー付近と南方への拡張であるが、北東コーナー付近はプランを長方形に修正するためのものようである。長軸方向へ約40cmの拡張である。

cはbを長軸方向へ約40cmほど拡張している。

床面は拡張にともなう貼り床が認められた。

多数の柱穴を検出したけれども、組み合わせははっきりしない。



第24図 SB59プラン・セクション (1:80)

S B 64  
(図版15)

SD07に中央部が切断されている。1辺約500cmの胴張りの隅円正方形であるが、検出状況はそれほど安定したものではない。埋土には褐色砂がふくまれているので洪水によって埋没したと推定できる。

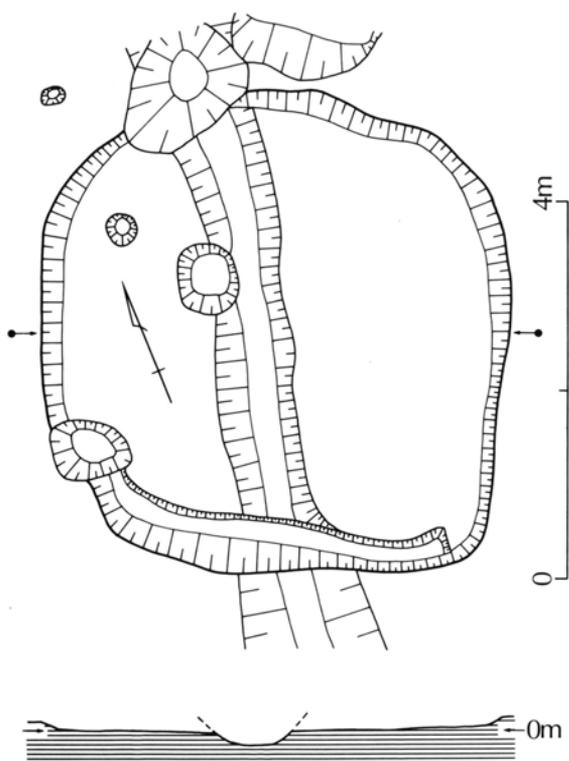
S B 66  
(図版16)

住居としてはきわめて不整形なプランであるが、炭化物薄層を床面として検出した結果であるので、一応住居跡と認定した。

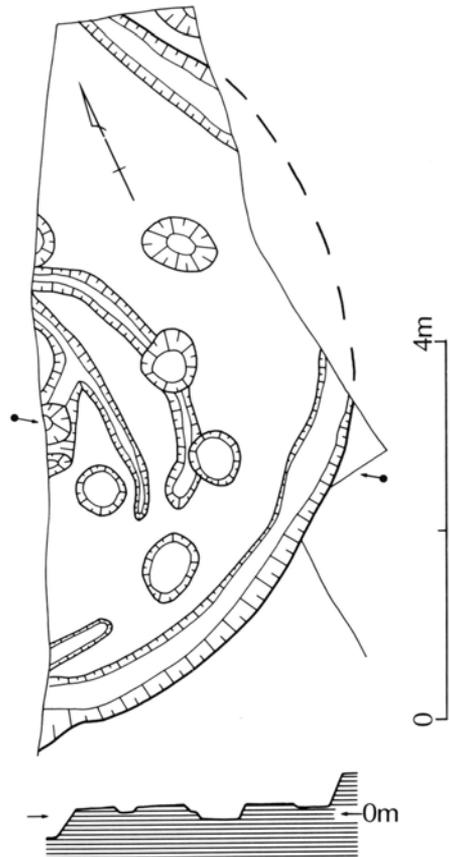
S B 72  
(図版19)

全体の5分の2ほどを検出した。円形プランと推定され、復元すると直径約900cmとなり、比較的床面積の広い住居となる。掘形は深さ約40cm残存。埋土には炭化物や焼土が含まれていたが、土層セクションの検討では別の住居跡の床面が複数確認できた。

ところで、本住居跡の南半部の埋土中には灰白色砂が含まれていた。土層セクションでは南に展開する谷A内に連続する層位であり、一時期谷Aが拡大して侵食した結果と推定した。時期はI-1b期を下らないと考えられる。住居の西半分が検出できなかったのはこのためであろう。



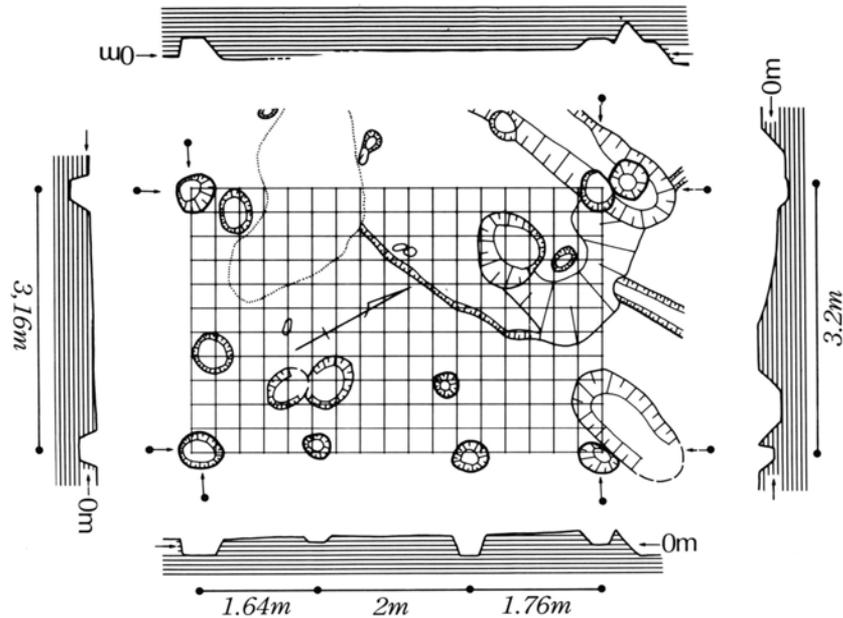
第25図 SB64プラン・セクション (1:80)



第26図 SB72プラン・セクション (1:80)

SA01  
(図版14)

住居群の密集する地区で検出した。NR01の北に隣接し、柱穴埋土はNR01と同じであった。NR01は後述するようにI-2期と考えられるので、柱穴の時期は同じか若干先行すると推定する。SA01付近ではほかにも柱穴を幾つか検出しているが、埋土が異なったり、並びが悪かったりで、確定するには至らなかった。



第27図 SA01プラン・セクション (1:80)

NR01  
(図版13・14)

検出状況ではSA01のすぐ南から始まるが、底部の傾斜からいえば、まだ北へ続くと考えられる。褐色砂の連続を重視するならSB19までは延びるであろう。とくに、出土土器の中にSB19の21に酷似するものがあることは、重要である。流路の形成期はI-2期をさがるものではないと推定する。

NR02  
(図版16)

SK261付近から始まる。検出当初は、底面が比較的深く側面の立ち上がりも安定し、埋土も何層にも分層できたので溝(57H SD1016)と認定したが、その後自然流路に変更した。底部が深いのは基盤が灰白色砂であるために強く侵食されたからである。それに対しNR01は基盤が黄灰色シルトでしまっていたので、侵食があまり及ばなかったためそれほど深くはならなかったであろう。

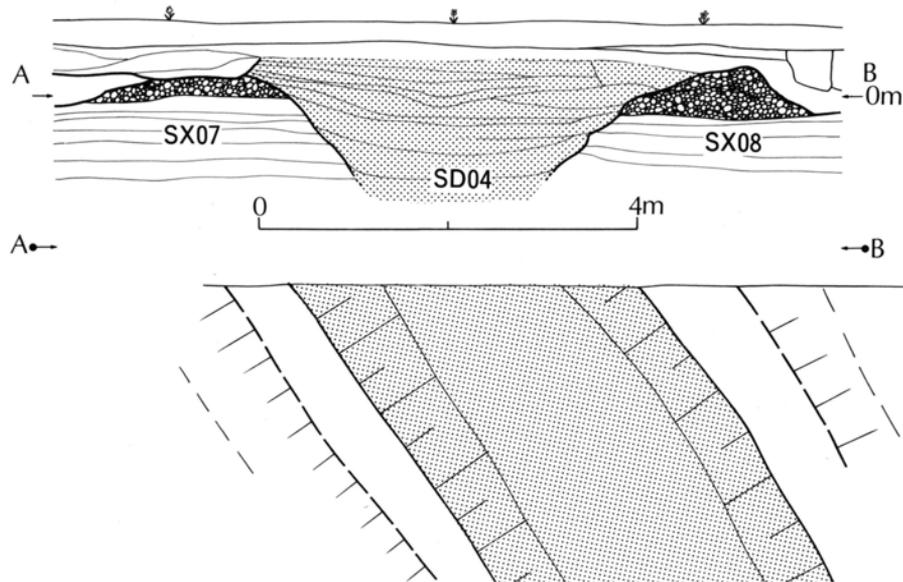
出土土器はNR01に比べ古い時期の一群が存在するけれども、恐らく侵食した遺構の土器が流れ込んだのであって、時期はNR01などほかの褐色砂を含む遺構と同じであろう。

SD04

居住域の北縁を北東から南西に走る幅約400~500cm、深さ140cm内外の比較的大きな溝である。埋土は下層がシルトを主とし厚さミリ単位の薄い砂層を混じえるが、上層は頻繁な流水のあったことを示すのか、厚さ2cmぐらゐの薄い砂層が縞状に累積している。遺

物の多くは上・下層の境界付近から出土している。基本的にはI期のうちに埋没したのであろう。

溝の両側には土堤状の高まり(SX07・08)が平行してある。溝掘削時の排土であって、とくに構築物としての性格は薄いかもしれない。



第28図 SD04・SX07・08プラン・土層セクション(1:80)



第29図 SD04土層セクション写真(西→)

**SD12**  
(図版11)

プランははっきりせず、とくにSD04との連続部分が不明確である。埋土は炭化物や遺物を多く含み、流水の痕跡は顕著に認められなかった。底面はそれほど平坦でなく、また側面の立ち上がりも緩やかである。溝などの人工物というよりは、「自然の窪地」といった表現のほうが適している。

SD04付近の土層セクションでは、下部に大きな谷地形が存在しており、これがSD12に相当するとすれば、SD04に先行して存在していたことになる。検出の失敗は、現代の攪乱と発掘区的位置関係が良くなかったために十分な検討ができなかったからである。

SK (土坑) 土坑は、埋土の状態から、

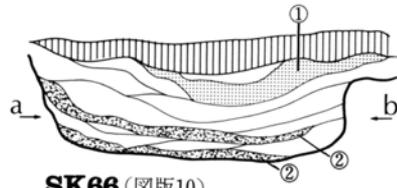
a類：単一層からなり分層できないもの、

b類：斑状をなして分層できないもの、

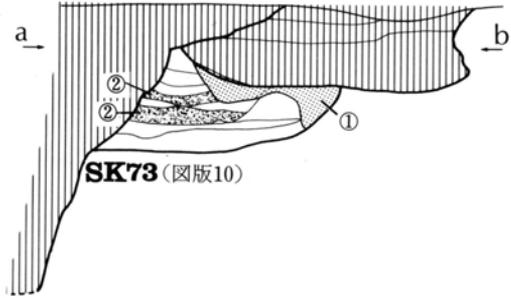
c類：縞状の断面で分層できるもの、の3類型に区分できる。さらに、c類はもっぱら焼土を含むものともっぱら灰・炭化物を含むものとに区分できるが、多くは程度の差であり普通は両者を含むので、ここではとくに区別しない。そのほか土器が多量に廃棄された土坑も若干存在する。

右に土層セクションを提示した土坑はいずれもc類である。灰・炭化物が層をなして存在するが、細かく観察するなら、それぞれの層もさらに複数層に分かれる。つまり一回の廃棄が一つの灰・炭化物層ではない。おそらく何回も廃棄されたのちにいったん中断してその間に自然に黄灰色シルトが流れ込んだか、黄灰色シルトによってその表面が塞がれたかである。いわゆる貼り床が黄灰色シルトによって施されていることと同じことであろうか。とくに、交互堆積の特徴的なSK66・73・261などは、土坑が一定期間埋められることなく機能し続けていることを示している。

こうした土坑は、だいたい群をなして住居跡群に隣接して点在しており、特別な機能ではなく、日常的な用途にあったことは明らかである。しかし、生活残滓一般が廃棄されたのではなさそうである点は重要である。



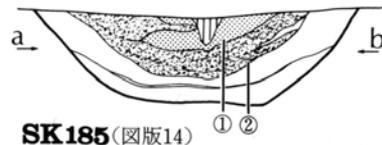
SK66 (図版10)



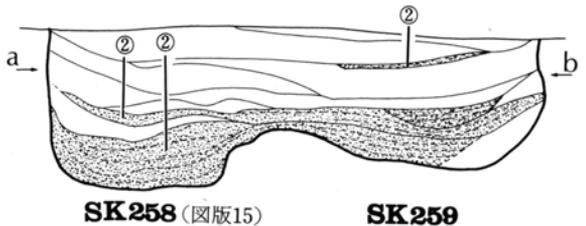
SK73 (図版10)



SK140 (図版12)

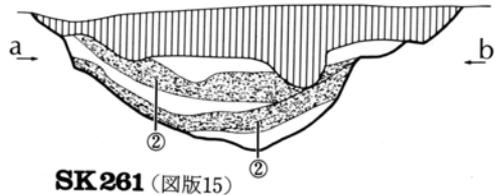


SK185 (図版14)



SK258 (図版15)

SK259



SK261 (図版15)

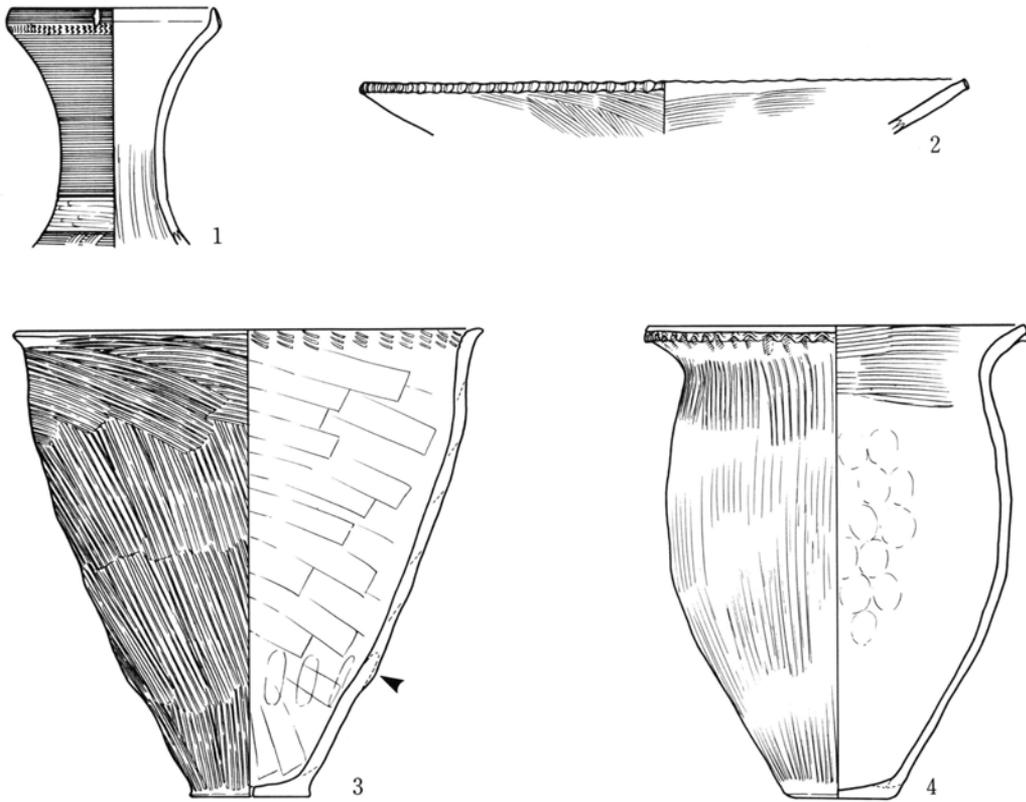
第30図 土坑土層セクション (1:40)

①褐色砂 \*矢印は標高0mを示す。  
②炭化物

## 遺物

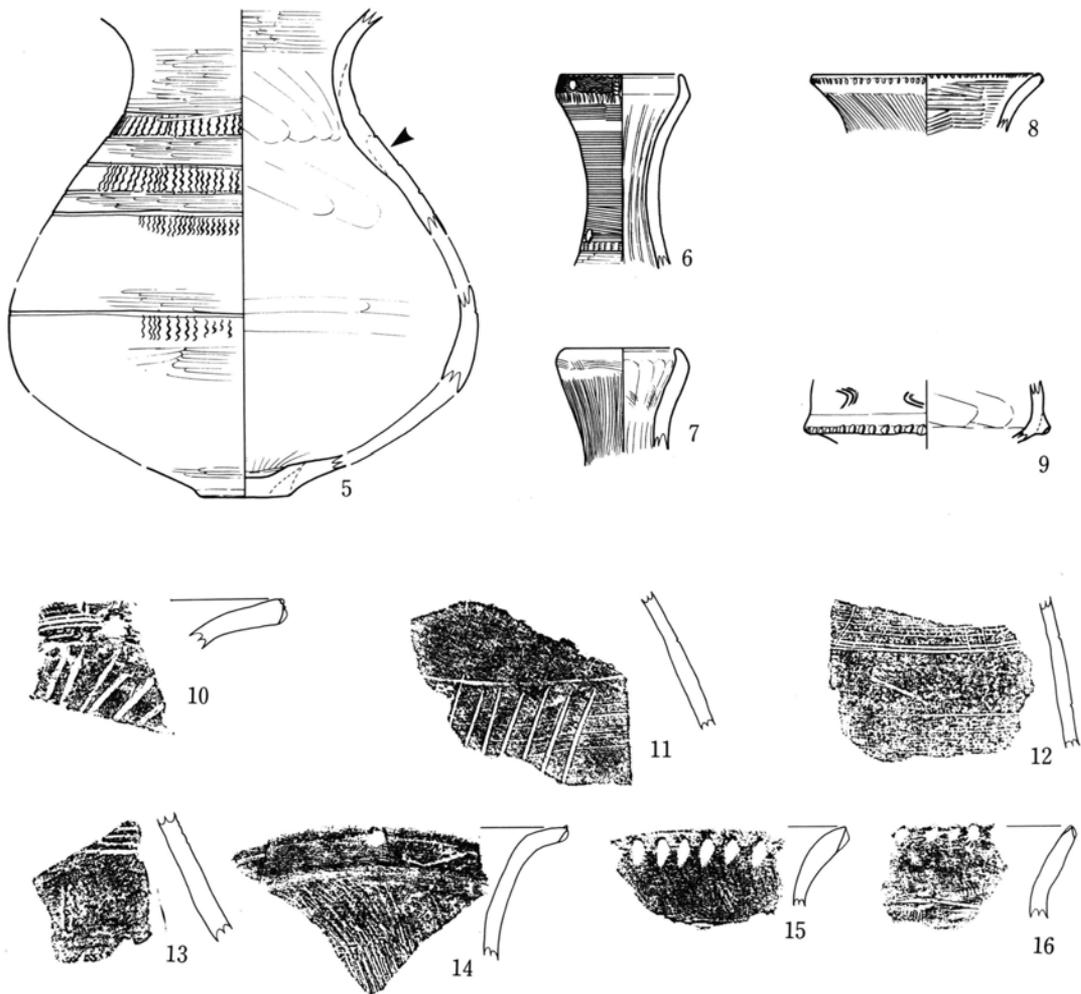
### 土器

- S B15
- 1は細頸壺 Aa (櫛描紋b類: 櫛I種a類)。口縁部屈曲部に二枚貝刻みを→方向に施している。櫛描紋も同様か。口縁部棒状浮紋にはハケメ工具圧痕。黒色仕上げ。
  - 2は粗製の高杯A。口唇部に直行して刻み(板?)が施される。
  - 3は二枚貝調整を施した深鉢。底部に焼成後穿孔が施されている。口縁部内面には←方向に二枚貝押し引きがある。櫛条痕系の条痕紋深鉢を模倣したものである。
  - 4は甕D。口唇部下部に粘土紐を付加しハケメ工具による連続刻みが施される。刻みは口縁部の半分まで及ぶ。底部成形はdである。



第31図 SB15出土土器

- SB17** 5は太頸壺A(二枚貝刺突紋系)。一次調整は不明だが、二枚貝刺突→沈線→研磨という順序である。底部成形はaである。底部内面は研磨されており、成形第一段階での調整としては丁寧な部類である。6は細頸壺Aa(櫛描紋c類:櫛I種a類)。口縁部屈曲部にD字刻み(板?)が→方向に施されている。櫛描紋も同様か。頸部櫛描紋直下には櫛刺突。黒色仕上げ。7は粗製の細頸壺Aa。8は口縁部がラッパ状に開く粗製壺。9は小型壺。おそらく細頸壺Aa系統であろう。10は太頸壺B。11は櫛描紋b類。12は櫛描紋b類で単帯。13は0期壺体部破片である。
- 14は甕Aa。体部はハケメ。15.16は甕Ac。体部は二枚貝調整。



第32図 SB17出土土器

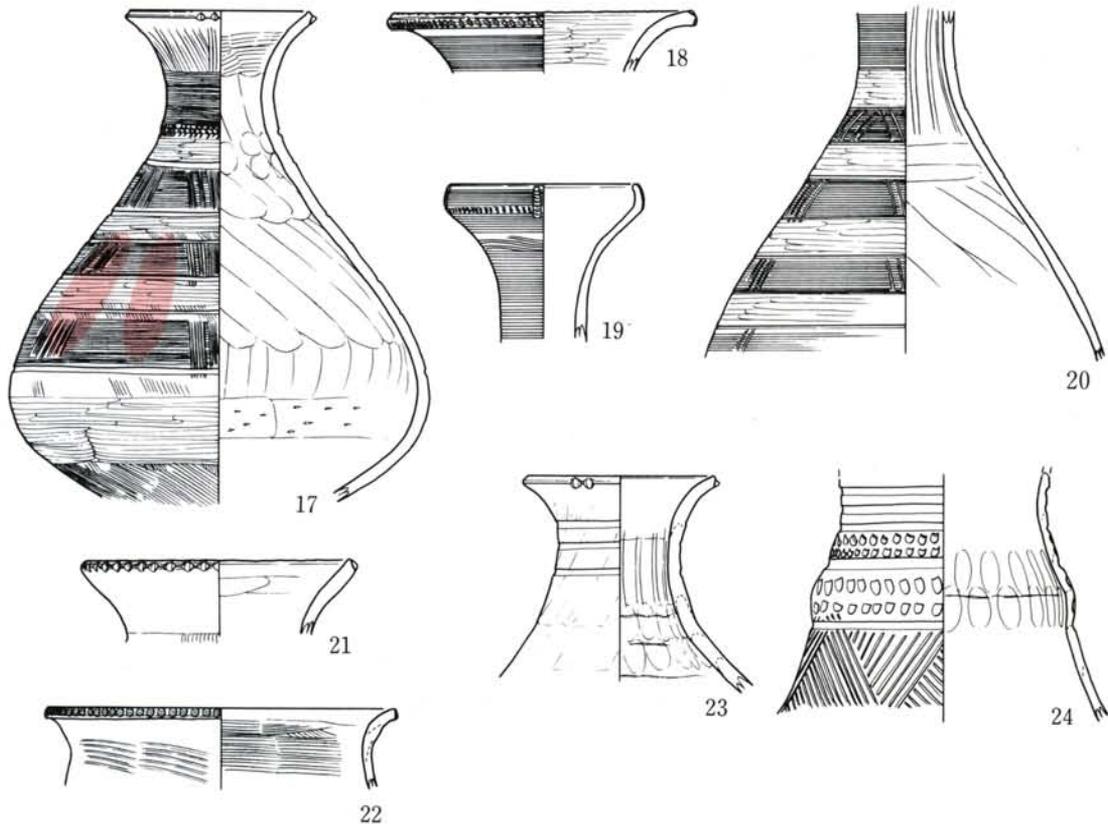
- SB19** 17は細頸壺Ab(櫛描紋b類:複帯3段)。櫛描紋原体は櫛II種b類。縦位直線は3・3・3・7の櫛III種。体部下半の屈曲は弱い。口唇部には2個一対円周4分割の位置に部分圧痕がある。黒色仕上げではなく黄褐色を呈するが、赤彩が認められる。口唇部に刻みを施す相

似形(折衷型)がもう1点ある。18は太頸壺A(櫛I種a類)。口唇部上下にハケメ工具の刻み。黒色仕上げ。19は細頸壺Aa。20は細頸壺Aa。櫛描紋b類だが単帯で多重化の傾向にある。縦位直線は(2・2)×2の櫛III種。黒色仕上げ。21は17と同類。

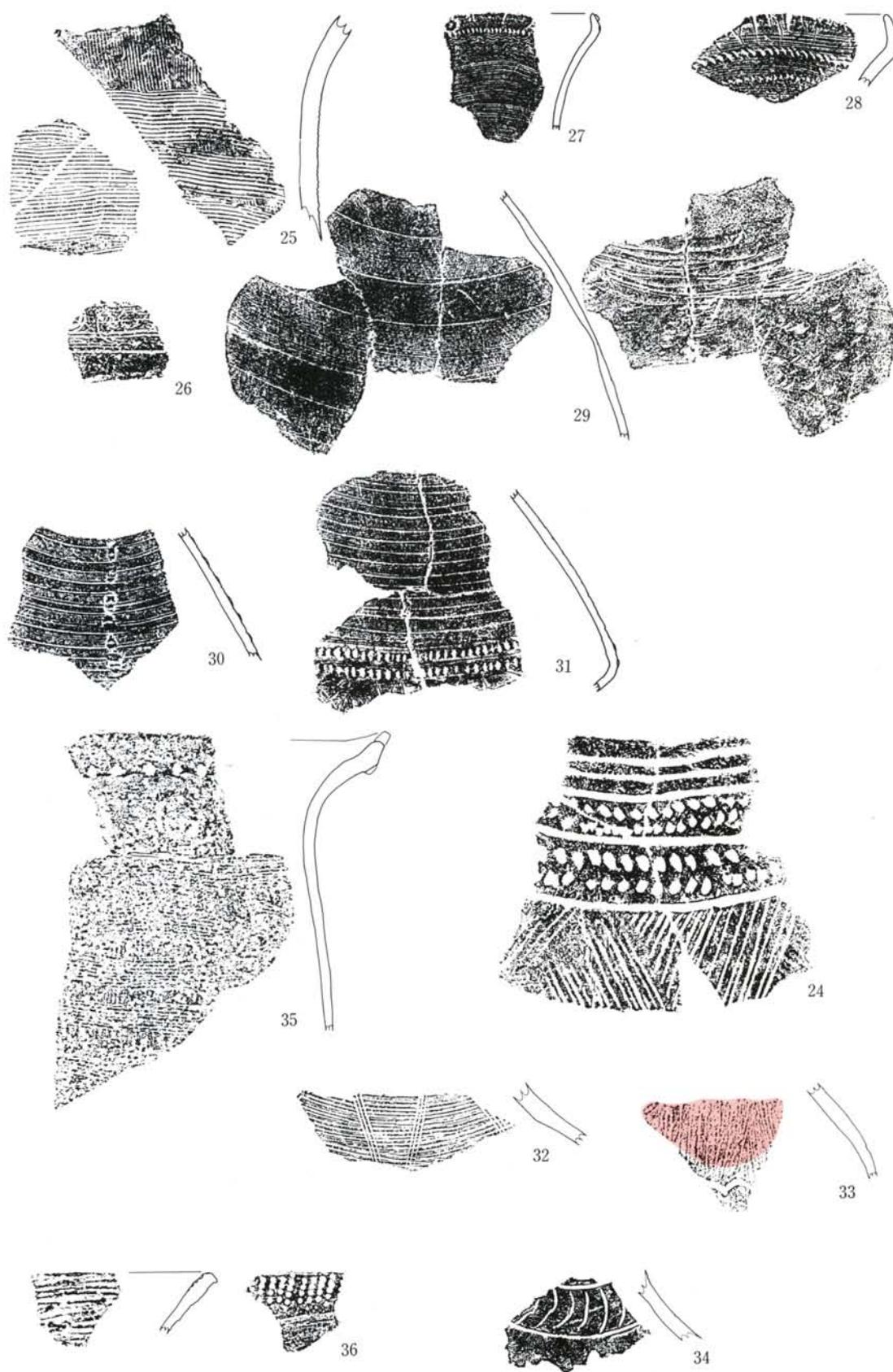
22は甕Ac。

23は口唇部の刻みは3分割で、17と相似形である。調整は板ナデ。23が17を模倣したのではなく、その逆であろう。淡灰色。24は太頸壺C。赤褐色。25は0期太頸壺破片。26は櫛描紋a類の破片。27は細頸壺Aa口縁部(櫛描紋c類だろう)。D字刻み(→方向)を挟んで上下に波状紋。黒色仕上げ。28は細頸壺Aa(櫛描紋b類)。口縁部屈曲部のD字刻みだけでなく頸部上半にも押し引き状の列点。どちらも→方向。黒色仕上げ。29は櫛描紋b類:複帯2段単帯1段。縦位弧線は3・3・3・3の櫛III種。内面に爪圧痕多数。黒色仕上げ。30.31は櫛描紋c類。同一個体のような。黒色仕上げ。楕円形浮紋上にはハケメ工具の圧痕。32は太頸壺Bの体部破片。黒色仕上げ。33は太頸壺Cの体部破片。切り込みの鋭い複合鋸歯紋の下部に連弧紋。赤彩痕あり。灰色。34は黒色仕上げだが、系統不明。ナデ調整のあとに沈線紋。

35は有段波状口縁甕。D系統大形甕の口唇部上縁に粘土を付加し、ゆるやかな隆起を4ヶ所形成して波状にした後、頂部にハケメ工具で圧痕を施す。体部にはハケメ工具による複帯直線紋。36は深鉢Cb。



第33図 SB19出土土器 (1)



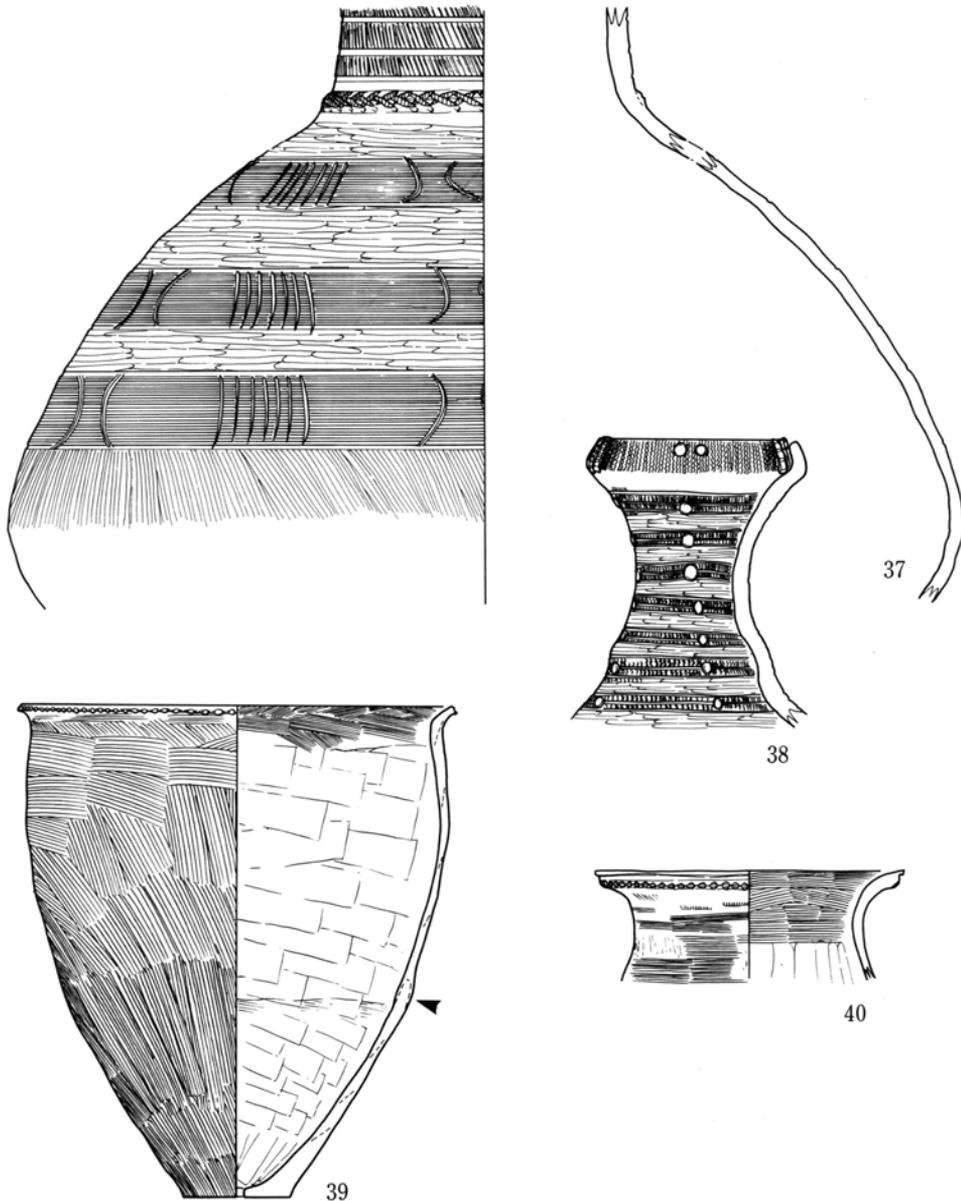
第34図 SB19出土土器 (2)

S B28

37は太頸壺A。頸部に沈線紋、頸体部の境界にハケメ工具によるX状刻み突帯。体部には櫛I種A類による櫛描紋d類。縦位分割は沈線の平行線と弧線を交互に配する。

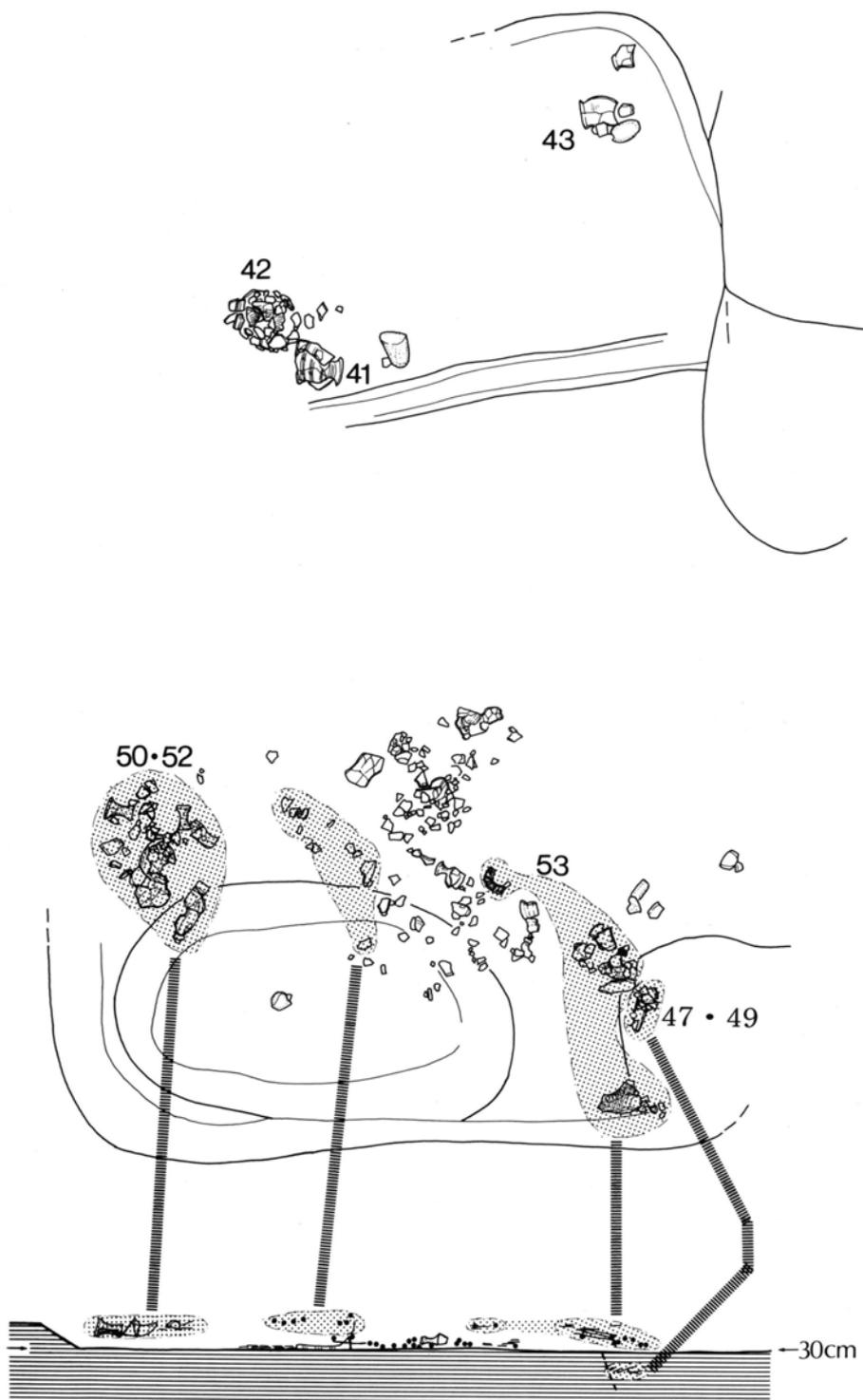
38は細頸壺Ca(二枚貝刺突紋系)で、恐らく体部下半には連弧紋が施される。太頸壺A(二枚貝刺突紋系)と施紋の基本は同じであるが、本例は二枚貝刺突紋帯の中央にさらに沈線が付加されている。こうした手法と共通する例は縄紋を施した太頸壺にみられる。施紋手法の相互影響であろう。頸部下半にある隆起は続条痕紋系土器の壺に特徴的な成形法である。口縁部の棒状浮紋(圧痕をもつ)および頸部にかけて施される円形浮紋は円周3分割の位置にある。口縁部には円形浮紋が2つだけ下図の箇所(正面?)。黒色仕上げは不十分。

39は甕A。底部に焼成後穿孔。40は甕D。口縁部の連続刻みは一見刻み目突帯のようである。

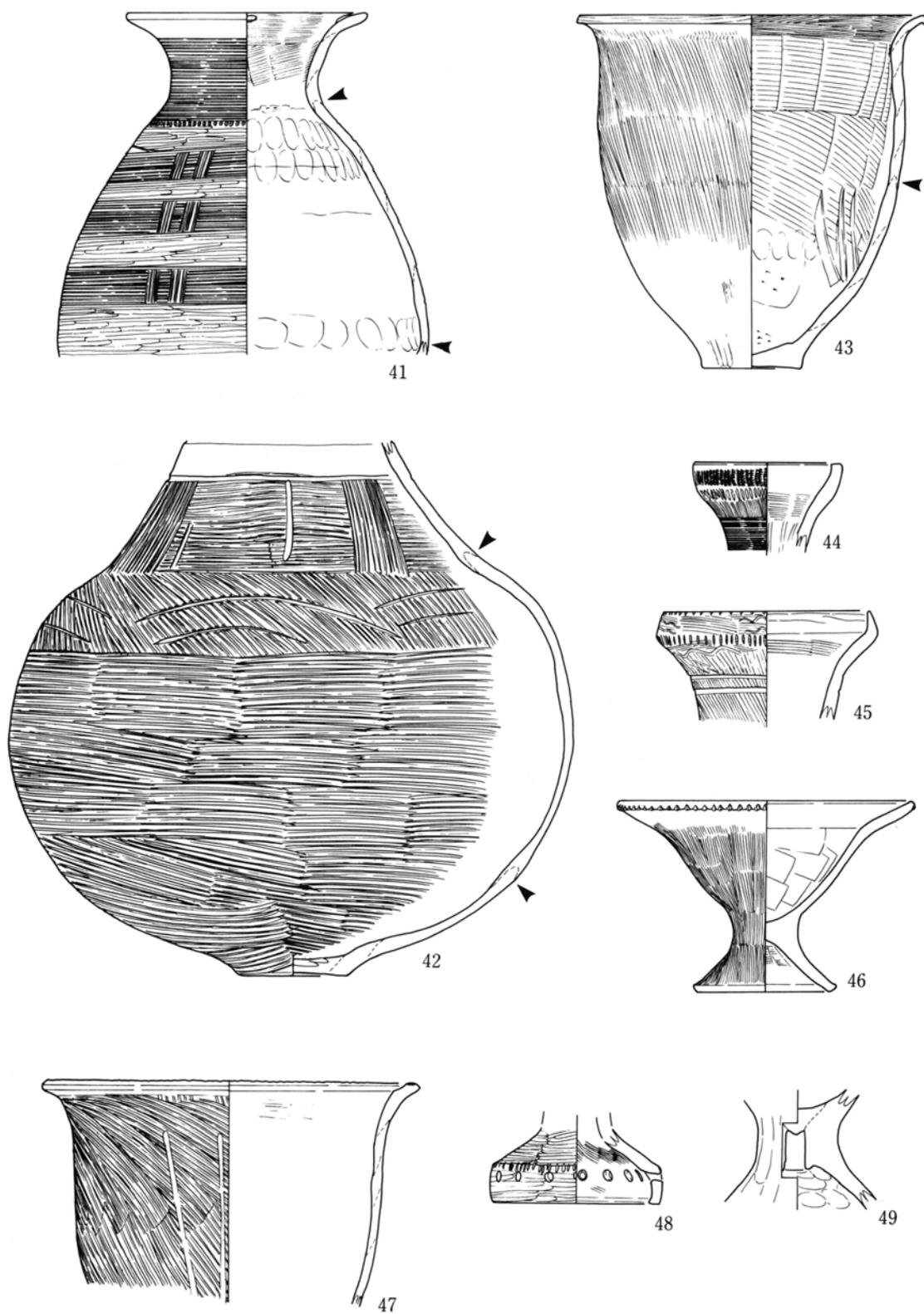


第35図 SB28出土土器

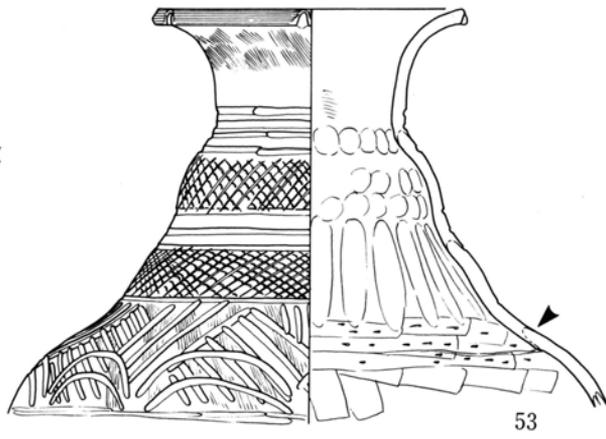
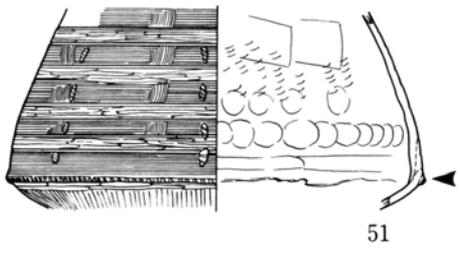
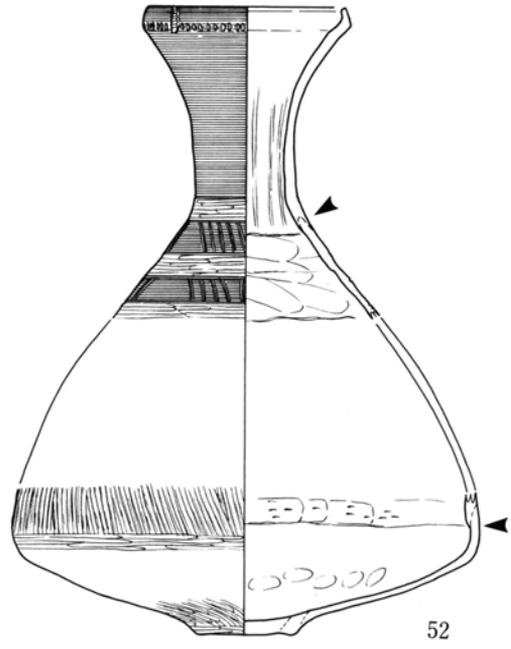
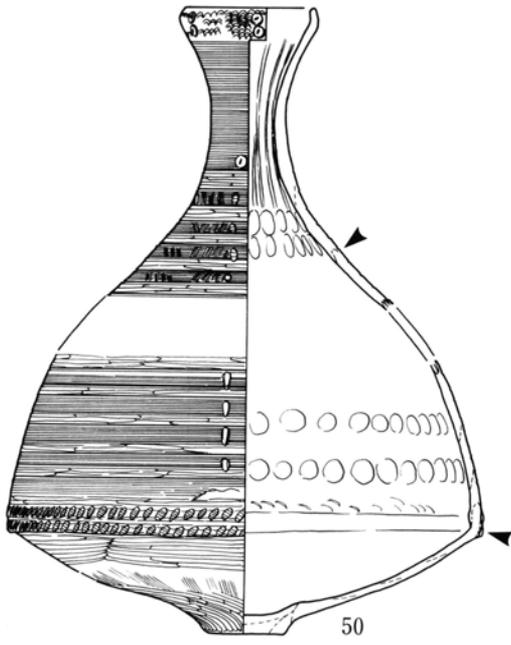
- S B 29** 出土土器は大きく下層・上層の2群および土坑内部出土の一群に分かれる。  
下層は住居北東部の床面直上につぶれた状態で41・42が近接して、43が少し離れて出土した。  
上層は住居南西部において床面から10cmほど浮いて出土した。上層は破片の移動などによるばらつきが著しく、また風化も認められる。
- 下層** 41は太頸壺A（櫛描紋a類：複帯3段：櫛II種b類）。縦位直線は(2・2・2)×2の櫛III種。口縁部内面に円形浮紋。黄褐色。  
42は太頸壺B。頸体部境界上部の紋様は、櫛描直線紋(櫛II種b類)の後、縦に沈線と櫛描直線を交互に施す。その上部は付加沈線とナデによる無紋帯。底部成形a。体部3分の1下半に成形第1段階の接合面を示すふくらみがあり、第2段階の接合面は頸体部境界にある。黒色仕上げ。  
43は甕A。口唇部はハケメ調整で面をつくる。  
44は一応細頸壺Aaのバリエーションとしてとらえ得る。口縁部の連続櫛刺突(→方向)は二枚貝刺突紋あるいは縄紋との施紋上の共通手法か。45は太頸壺Baの模倣か。口縁部上下端に刻み、口縁部・頸部に平行波状紋と直線紋。  
46は粗製の高杯A。
- 土坑** 47は甕Aa 2。口唇部上端の刻みは二枚貝で←方向。体部外面は二枚貝調整の上に下部から伸びた研磨がまばらに及んでいる。48は細頸壺Aa口縁部を倒立して脚部とした精製の高杯脚部。外面研磨。黒色仕上げ。49は台付鉢。中央部を円筒状にいったん抜いた後、上部から塞いでいる。
- 上層** 50・51は細頸壺Aa（櫛描紋c類）。50は、口縁部円周4分割の位置に圧痕を施した円形浮紋2段。波状紋を複帯に施し、刻みはない。縦位弧線は(2・2)×4を浮紋列間に2単位。体部楕円形浮紋にハケメ工具の圧痕。底部外面研磨、成形a。灰色。51は口縁部円周6分割程度の位置にハケメ工具の圧痕をもつ楕円形浮紋。内面に爪圧痕多数。52は細頸壺Aa。櫛描紋b類単体で多段化傾向が認められる。赤彩痕あり。縦位弧線は3×4。口縁部棒状浮紋は円周4分割の位置にあり、ハケメ工具の圧痕をもつ。屈曲部には→方向にD字圧痕。底部成形a。底部外面は研磨だが、凹凸がある。  
53は太頸壺B・Cの折衷。施紋は沈線紋が最初。斜格子紋は右下がり→左下がりの順。複合鋸歯紋は→方向へ。口唇部の櫛描紋、指頭圧痕、体部上部の連弧紋は太頸壺Bに、頸部無紋、体部上部の複合鋸歯紋は太頸壺Cに、辿ることができる。しかし、紋様部の一次調整や連弧紋直下に部分的に確認できた研磨はそれらと異なる系統(A系統か?)の手法か。  
56は無頸壺。上段の櫛描紋帯は波状紋。以下は直線紋に縦位弧線の一般的な組み合わせ。  
57は甕Aa 2。58は甕Dだが、体部上半への直線紋はない。59は甕D。



第36図 SB29土器出土状態 (1 : 40)

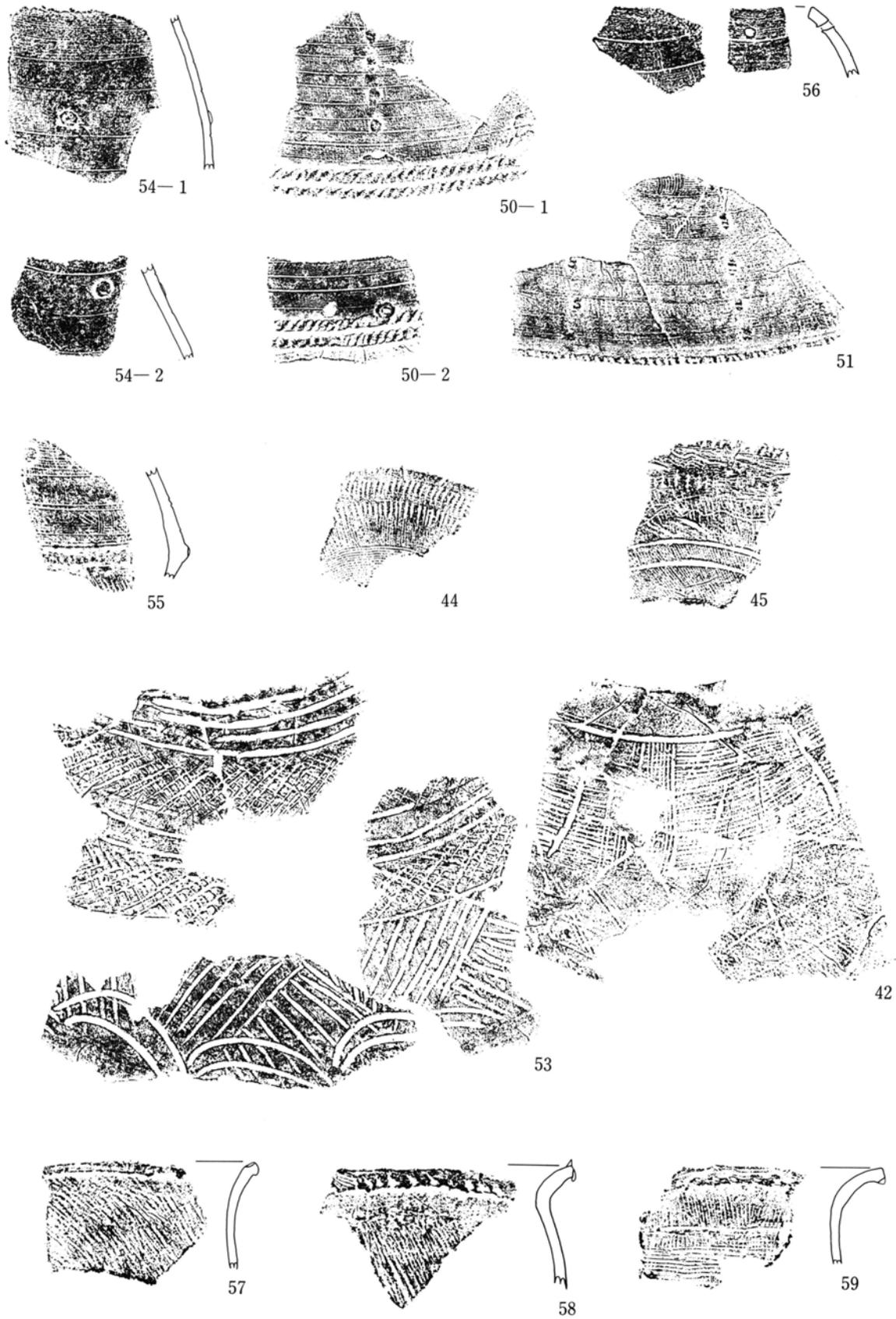


第37図 SB29出土土器 (1)



第38图 SB29出土土器 (2)

2 弥生時代



第39図 SB29出土土器 (3)

土器の堆積層は南から北へ順次薄くなっており、南から投棄された状況が読み取れる。しかし、完全になるものはほとんどなく、破片も散在していた。

60は太頸壺A。口縁部内面(円周4分割の位置?)と頸部に管状工具で圧痕を加えた円形浮紋が施される。円形浮紋に圧痕を加えるのは新しい手法。黒色仕上げ。61は細頸壺Aa。櫛描紋はc類。黒色仕上げ。62は無紋系の太頸壺A。63は作りがかなり雑。64は頸部に沈線をめぐらす非櫛描紋系の壺A。口縁部は内外面に丁寧なナデが施され、とくに内面には面がつくられている。口唇部は刻みのために、やや上下に拡張されている。赤褐色。65は細頸壺Aa。櫛描紋は櫛II種a類で断続的に施されており、口縁部近くでは各単位の端が斜めに交差して、B系統壺の体部下半のような仕上げになっている。櫛描紋の手法が稚拙であるというよりは、これで「手法」として独立しているように思う。

66は粗製の高杯。67は台付鉢の脚台か。68は鉢Ac。甕の成形第1段階。

69はやや大形の甕で、外面はハケメ工具による調整であるが、口縁部内面は、二枚貝による条痕でC系統に共通する手法を採用している。折衷型である。70はまさしく深鉢Ca。口唇部、体部外面、口縁部内面ともすべて二枚貝による調整・施紋である。口唇部には指頭圧痕が2ヶ所対で何箇所か施される。圧痕は下方に引かれている。

71は甕D。体部は非常に粗いハケメで1cmあたり2~3本。頸部にハケメ工具のアタリ状の沈線が1条あるが、おそらく体部上半に直線紋が施されているのであろう。72はやや小形の甕。

73は縄文をもつ太頸壺A。74は縄文をもつ細頸壺Aa。内面体部上半の頸部寄りに幅の狭い板状工具による引っ掻いたような静止痕がある。

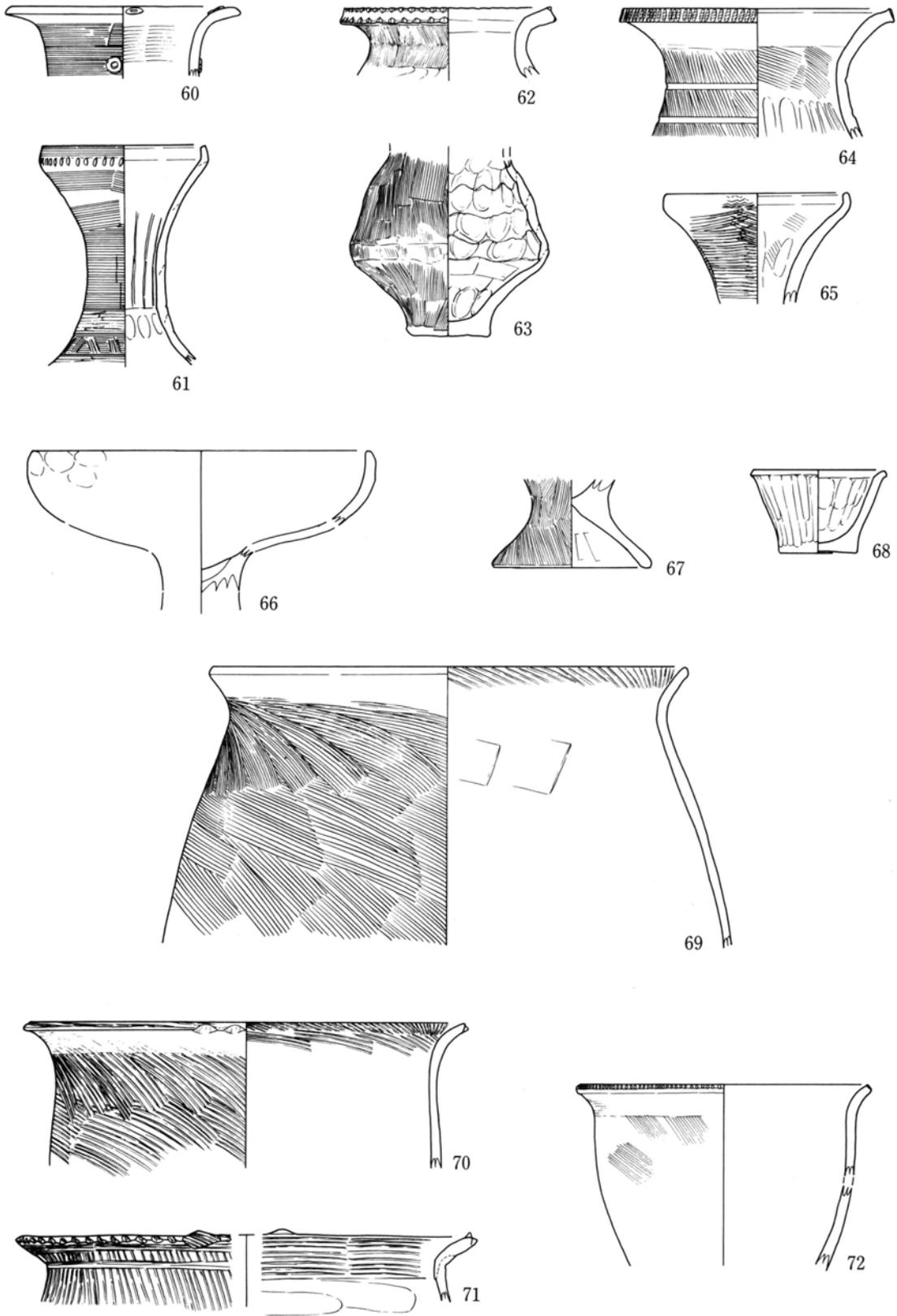
75は口縁部の上下端部に二枚貝刻みを施す壺。外面には櫛描紋。B系統のバリエーションか。76はCa系統。受口状口縁の太頸壺で口縁部外面に沈線の羽状文、口唇部に刻みを施す。灰色。77は太頸壺で口唇部に縄文。

78は甕Ad、79は深鉢Ca。前者はハケメ、後者は二枚貝だが、調整手法は同じ。80・81は深鉢Cb。口縁部内面の櫛刺突紋はすでに押し引き状ではなくなっている。

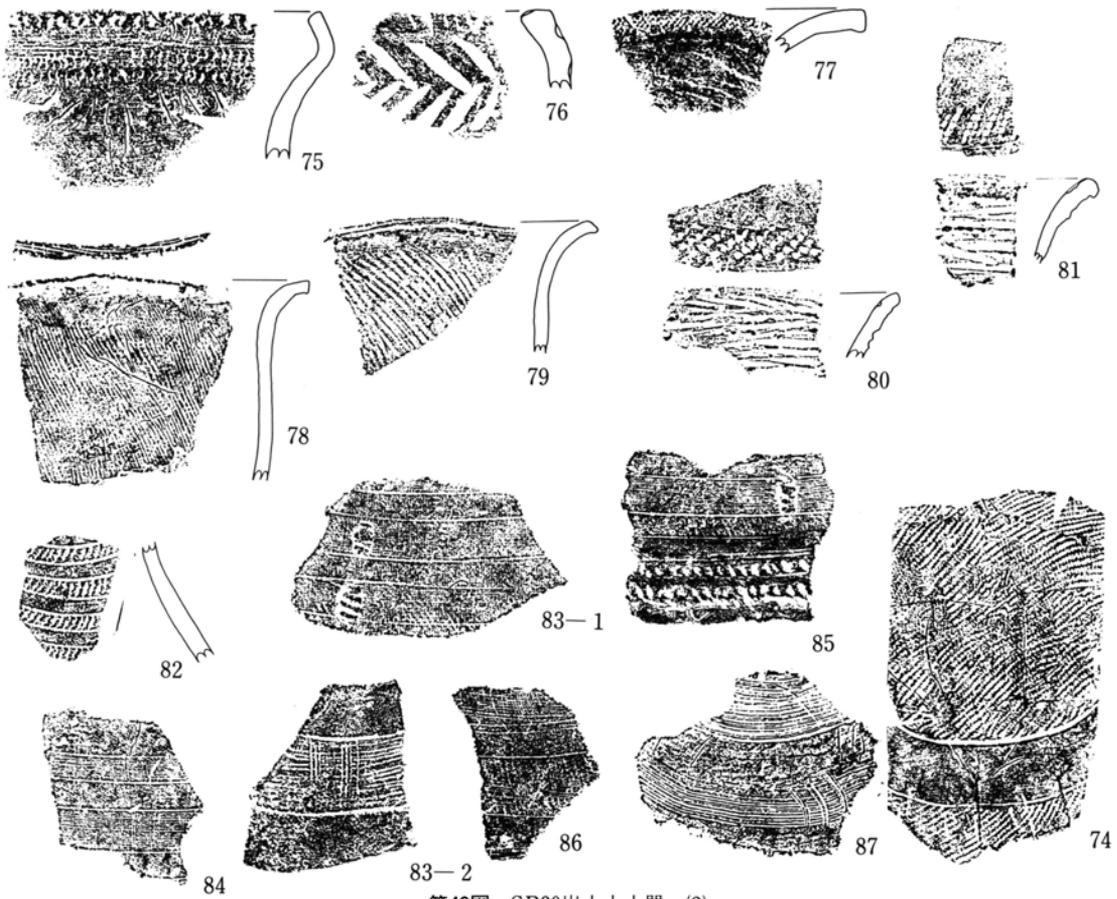
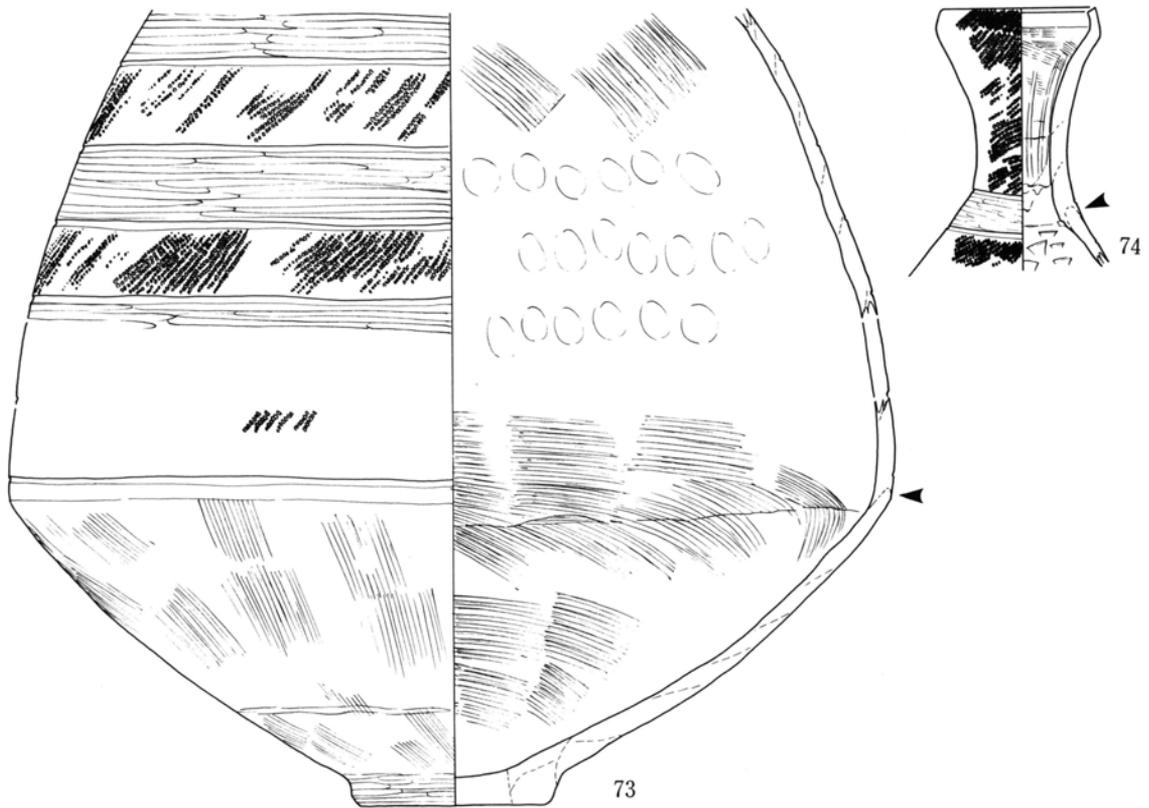
82はCa系統の壺。黒色仕上げ。83は櫛描紋b類。単帯で多重化している。84は櫛描紋c類。85は櫛描紋a類か。86は櫛描紋b類。単帯。87は櫛I種A類。付加沈線は欠落している。縦位弧線は3・2・3の櫛III種。



第40図 SB30土器出土状態（1：40）

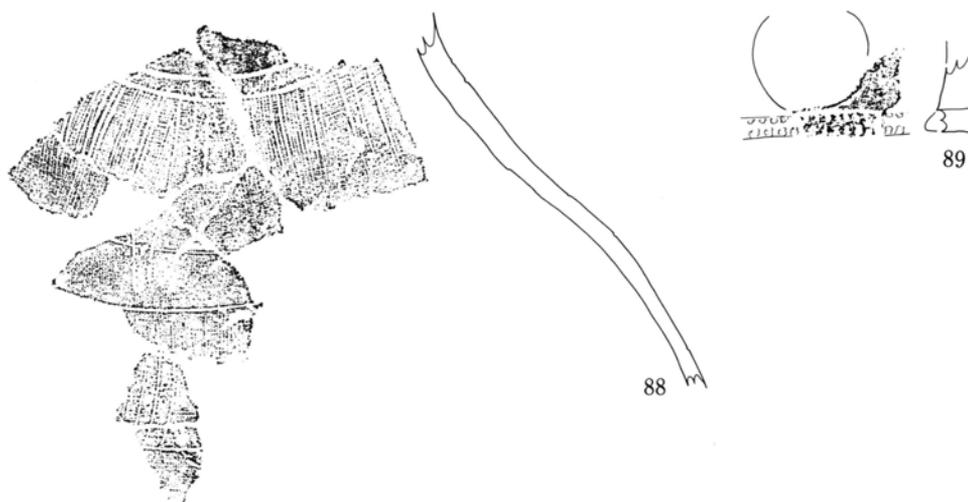


第41图 SB30出土土器 (1)



第42图 SB30出土土器 (2)

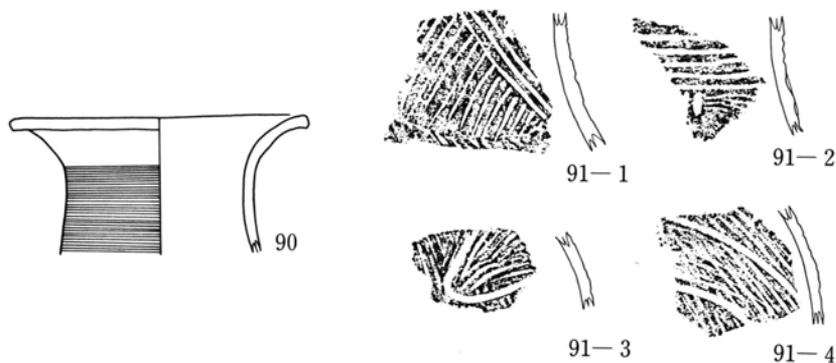
S B31 88は太頸壺B。櫛II種b類による櫛描直線紋のあと、縦位に櫛描直線と沈線が交互に施される。89は円孔のある高杯脚部。外面は1条の沈線によって突帯状の部分が作り出され、その上下にハケメ工具で刻みが施される。



第43図 SB31出土土器

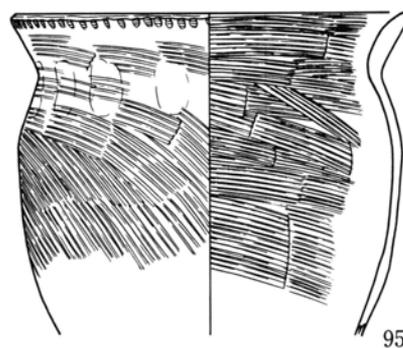
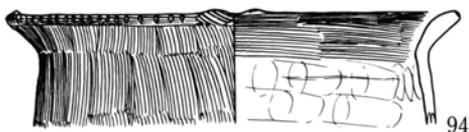
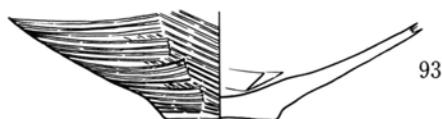
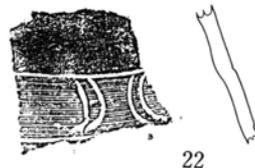
S B39 90は太頸壺A。頸部は比較的円筒状に近く古い形態を残している。

91は太頸壺C。1は頸部下端の複合鋸歯紋。2は頸部上半の隆起部近辺であろう。横3本の沈線を縦2本の沈線というか圧痕が切る部分の下に二枚貝背面圧痕がある。3はバナナを一つずつ並べたような連環状弧紋の一部。二枚貝調整→二枚貝施紋(弧状)→沈線で囲むという順で施紋される。4は3の右半分。



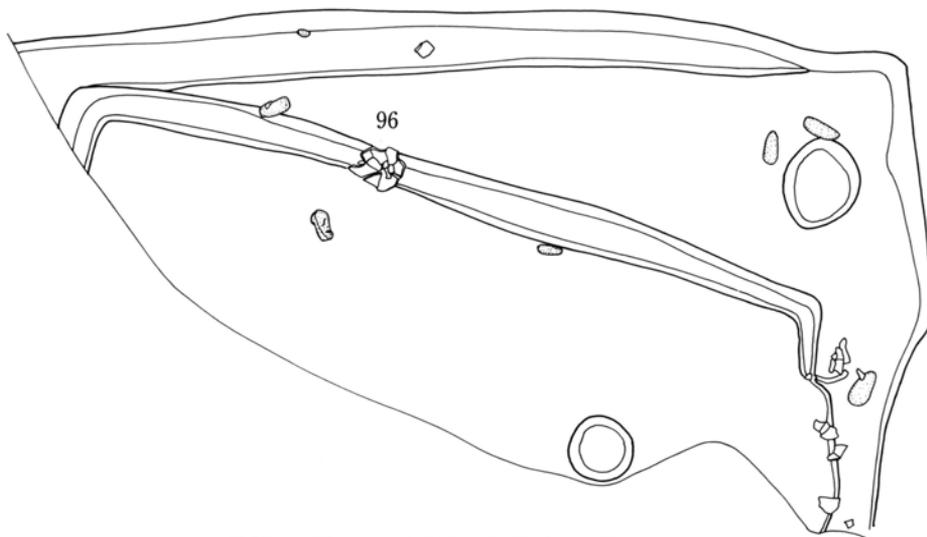
第44図 SB39出土土器 (拓図1:4)

- S B 41 92は櫛描紋*d*類。沈線の弧線が2本ずつ相對しているが、おそらく弧線間に縦位の沈線が複数条施されるのであろう。93は太頸壺B。底部はやや上げ底になっている。体部下半の調整は底部から見るとクモの巣状に施されているが、横から見ると羽状条痕風になっている。94は甕D。口唇部にハケメ工具による大きな圧痕があり、上端は突起状に上に出ている。95は甕Ac。口縁部は外反が緩いだけでなく、厚みも体部に比べて厚く鈍重な感じがする。内面には粗いハケメが施されている。



第45図 SB41出土土器

- S B 43 土器は床面直上に遺棄されていた。棒状礫も幾つかあったが使用痕跡のあるものはない。96は甕Ad。口縁部はヨコナデされている。97は甕Aa 2。口唇部はハケメ調整で面をもつ。上端にはハケメ工具の刻み。

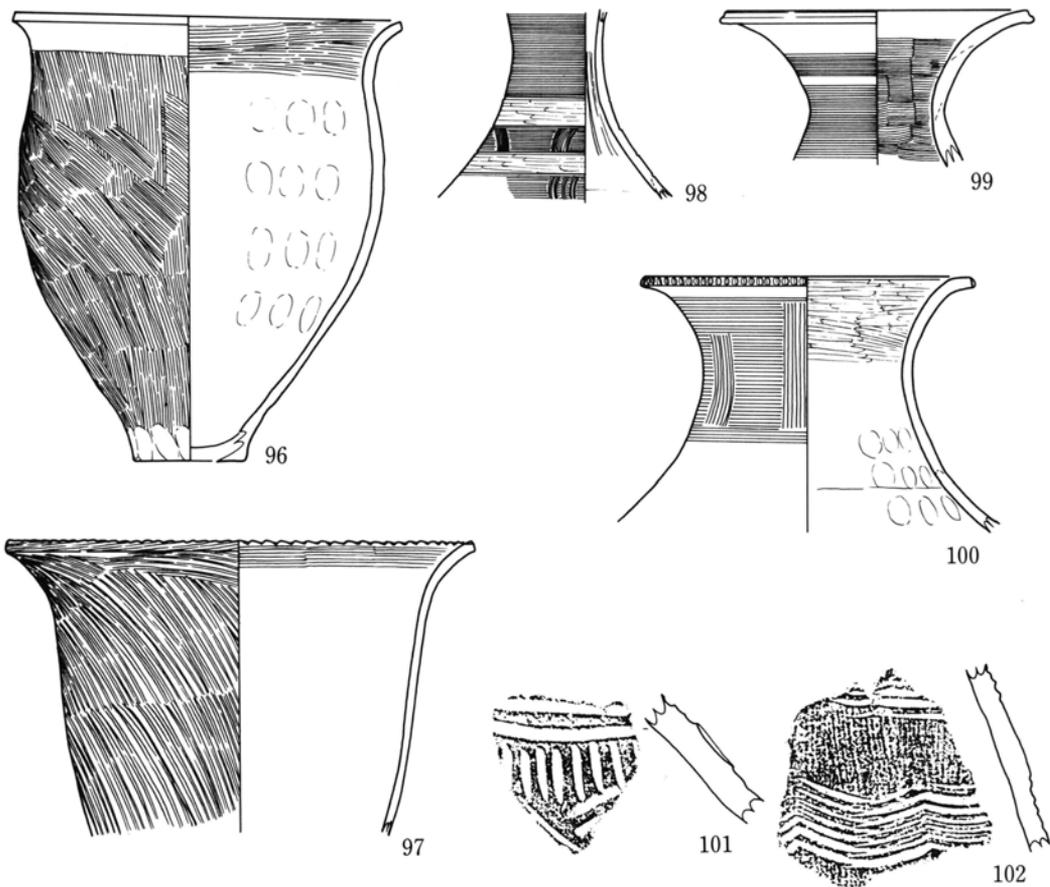


第46図 SB43・44土器出土状態 (1:40)

98は細頸壺 Aa。櫛描紋 *b* 類で、単帯の多重化が進む。99は太頸壺 A。口唇部はヨコナデで凹面をなす。

S B 44 101はC系統壺の頸部から体部への移行部。最下部の施紋はおそらく複合鋸歯紋。  
102は甕 D の体部上半。

S B 45 100は太頸壺 A。頸部は内彎して口縁部にいたる。口縁部は端部近くではほぼ水平に外折して面をつくり、内面を丁寧に研磨する。頸部の櫛描紋は縦位に長短の櫛描紋で分割する。下のほうは櫛描紋がないのではなく判別できないから空白になっている。黒色仕上げ。

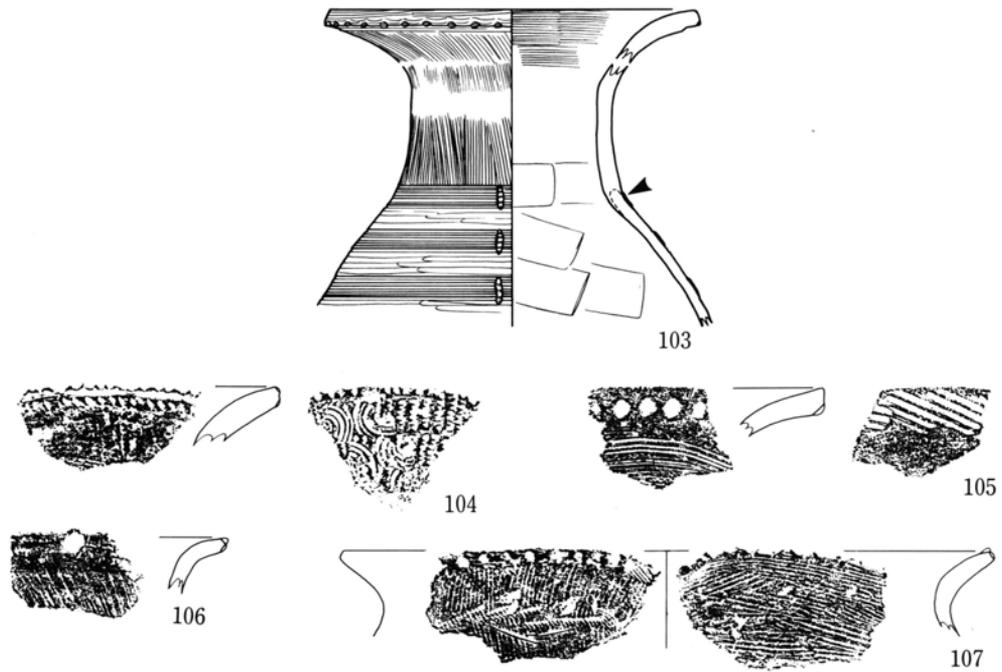


第47図 SB43・44・45出土土器（拓図1：2）

**S B 46** 103は太頸壺A。頸部に櫛描紋は無いが、体部櫛描紋は単帯の多重化である。棒状浮紋にはハケメ圧痕が施されている。

104は口縁部内面には櫛描の半円弧(扇形紋)を相對させた部分を分割線としてその間に櫛刺突帯を充填している。大地形壺のパリアントかもしれない。105は太頸壺Aだが、口縁部内面に二枚貝による矢車状紋(深鉢Caの内面紋に共通)を施している。紋樣的に折衷型。

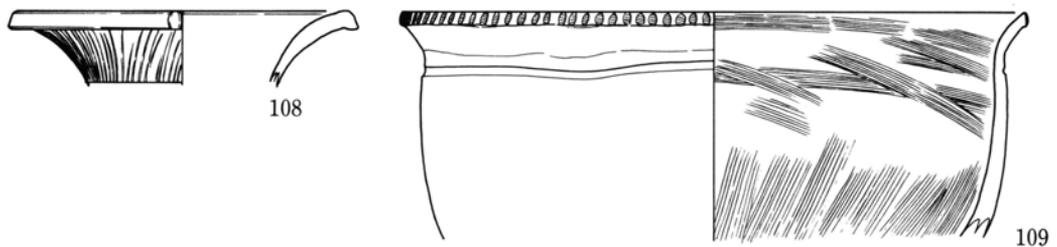
106は甕Ad。107は甕D。口唇部にはハケメ工具による小刻みと大きな圧痕が施されている。



第48図 SB46出土土器

**S B 47** 108はB系統壺。頸部の細長い形態であると思われる。口唇部には櫛描紋はなくナデの後に単独圧痕が施される。

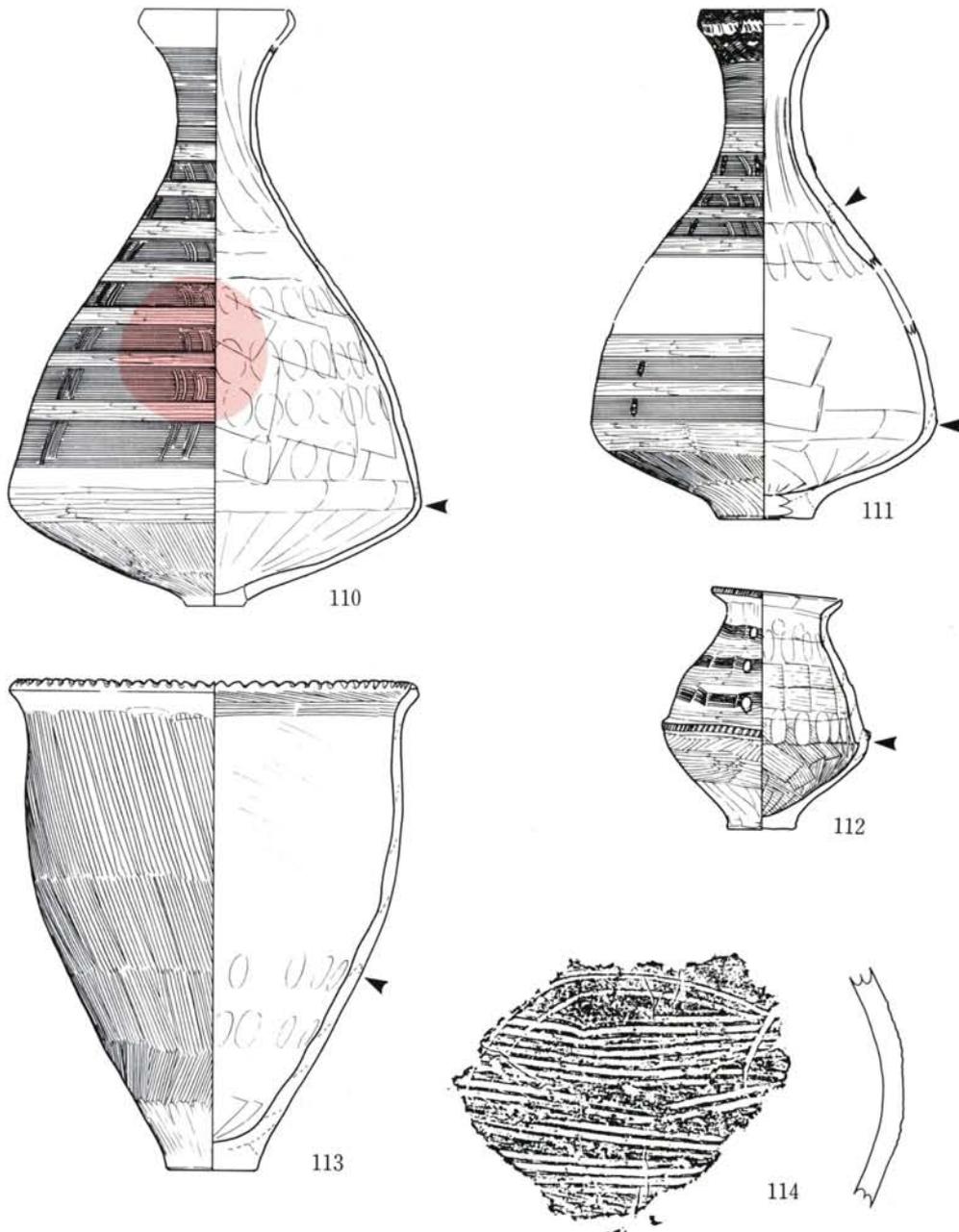
109は甕というよりは鉢に近いかもしれない。頸部に沈線が1条施されており、まるで前期遠賀川系土器のようである。



第49図 SB47出土土器

S B 49 110・111は細頸壺 Aa。110は非常に薄いつくりである。櫛描紋b類。単帯で多重化が進む。縦位弧線は2・2・5（2・3か）の櫛Ⅲ種。底部は欠損している。111は櫛描紋c類。頸部上端の櫛描紋は波状紋2帯になっており、波状紋の多重化がうかがえる。縦位弧線は3・3・3の櫛Ⅲ種。底部成形はaか。

112は小形壺。体部の上半と下半の大きさを違えているのか、鉢 Ac に載せた小形壺と似た趣で複合土器のような作りになっている。上下の境界には粘土紐を貼りつけて刻み突帯を作っている。櫛描紋は←方向に断続的に簾状紋風に施している。口唇部には細かい



第50図 SB49出土土器（拓図1：2）

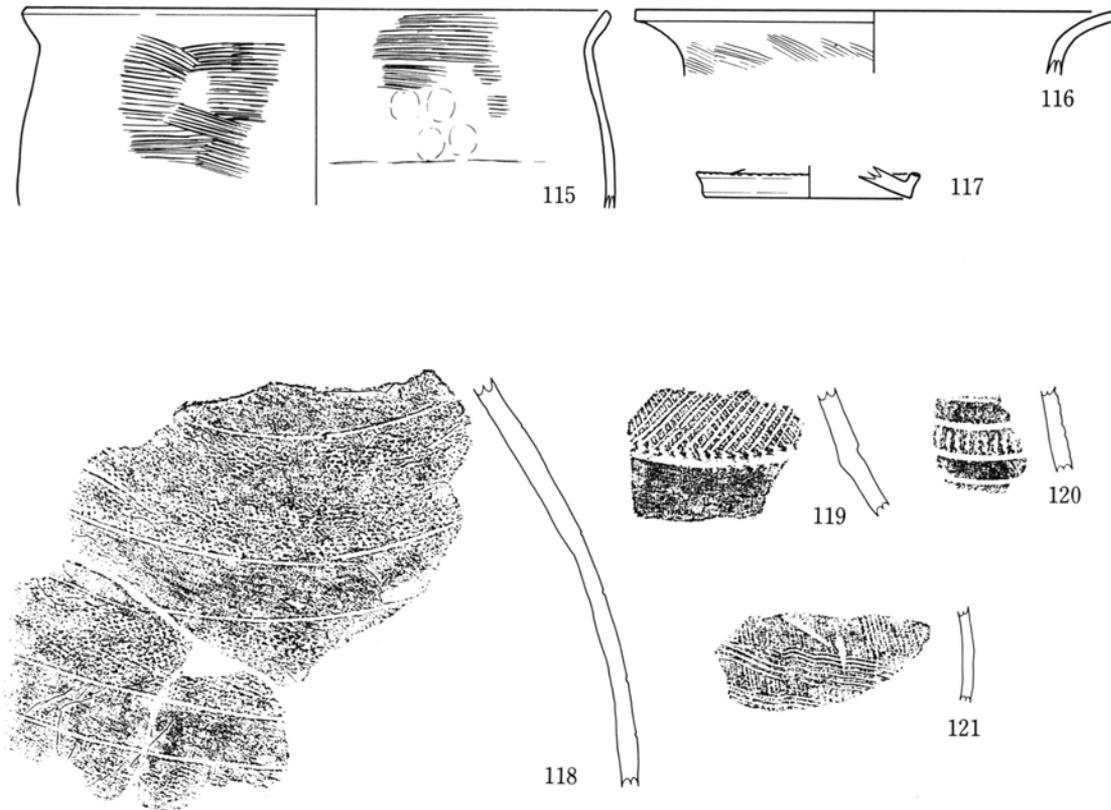
刻みを施す。

113は甕 Ab。口縁部の立ち上がりは強く、口唇部上端へのハケメ工具の刻みも深い。底部成形はc 2。114は二枚貝調整を施しC系統壺の体部上半であるが、B系統壺紋様と同じ連弧紋が施されている。

S B 52 115・116は甕 Ad。

117は高杯の脚台。端部は上方にはね上げて刻みを施している。精製である。

118は疑似縄紋。原体は二枚貝である。中期初頭以来の通有の原体である。119はB系統壺。斜格子紋直下の沈線上には二枚貝刺突が施されている。120は二枚貝刺突紋系壺。121は甕W。振幅の小さい波状紋が施されている。



第51図 SB52出土土器

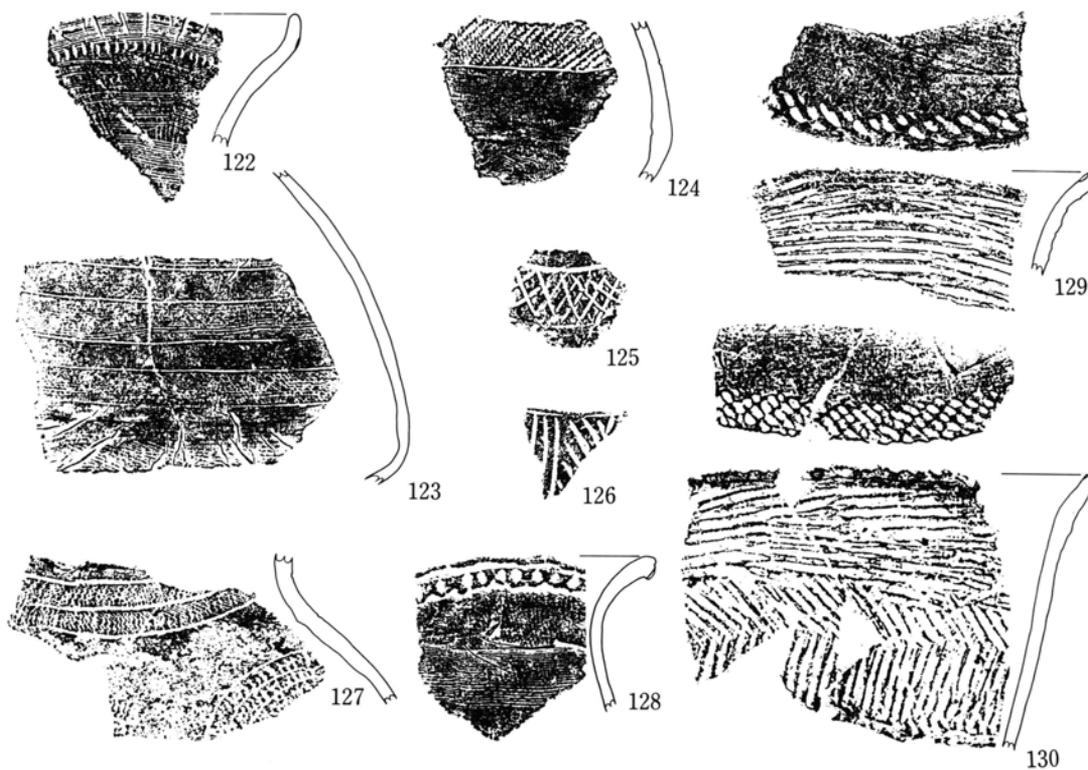
S B 54 122は細頸壺 Aa。123は櫛描紋 b 類。単帯の多重化が進む。

124は縄紋。126は複合鋸歯紋。

127は二枚貝刺突紋系壺。体部には二重連弧紋が施されるが、刺突紋帯間に研磨部分を挟まない代わりに沈線が1条加えられている。新しい様相というよりは、手法的なバリエーションであろう。黒色仕上げ。

128は甕D。口縁部の刻みは刻み突帯状で口縁部の外反も緩い。40と類似している。ひとつの類型として区分できるかもしれない。

129・130は深鉢Cb。両者とも口縁部内面の櫛刺突紋は押し引き状になっており、古い様相を見せる。



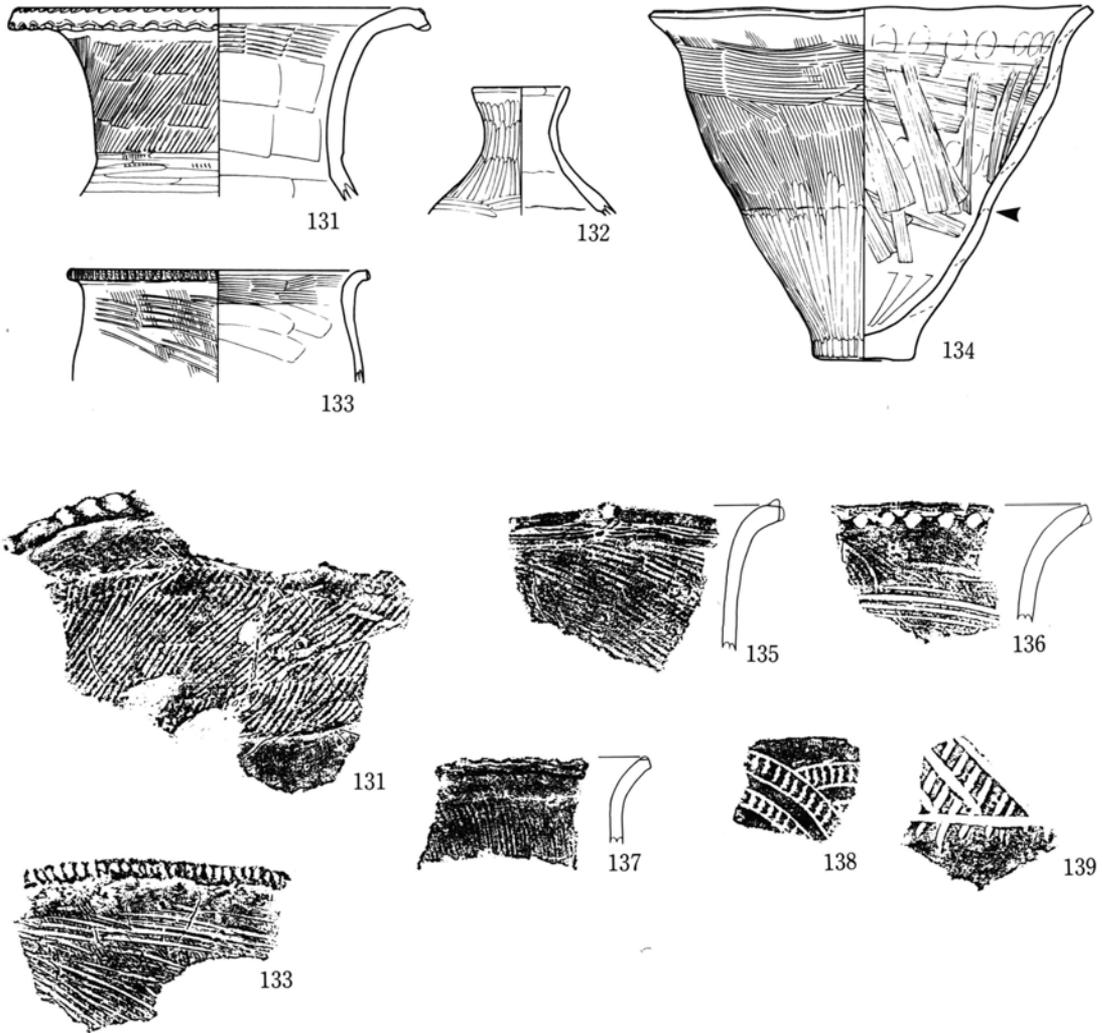
第52図 SB54出土土器

S B 55 131は太頸壺A。頸部無紋系である。体部紋様は不明。頸体部の境界には研磨のために段が形成されている。132は小形壺。外面研磨で無紋。

133は甕Ac。口縁部が短く外反する。134は煮沸痕跡がなく、鉢Aに区分する。体部外面上半にはヨコハケメが施されており、甕Dに共通する。底部はやや上げ底。

135は甕Aa 1。136は甕 Ac。しかし137は甕Ab。135は混入か。

138は二枚貝刺突紋系壺。黒色仕上げ。



第53図 SB55出土土器

S B 56

土器は床面直上遺棄の一群と投棄された状態の破片多数がある。しかし、時期差は認められないので一括して説明する。

140は0期の土器。出土状況は床面から浮いて、実測図の天地を逆にし口縁部を下にして出土した。もともこの時期に属す土器ではないが、頸部の切断（折損か）後に破面が擦られて整えられていること、二次加熱を強く受け赤化変色していたことから考えると、再利用されていた（使用法は炉での甕の底部固定用であろうか）ようである。

141は大頸壺A。口縁部は強くヨコナデされ内面には平坦面が作られる。142は無頸壺。櫛描紋系の無頸壺とは形態が異なる。

143~146は細頸壺Aa。114は櫛描紋*b*類。単帯の多重化が進む。縦位弧線は(3・2)×2の櫛III種。内面には爪圧痕多数。145は櫛描紋*c*類。縦位弧線は雑な3・3の櫛III種。浮紋は指で押さえた円形浮紋とハケメ工具で圧痕を加えて棒状に近い楕円形浮紋が交互に丁寧に施される。体部最大径の刻み突帯2条は、上は小刻みで丁寧であるが、下は粗く雑である。

146はハケメのみの粗製壺である。床面直上に遺棄されていた。

148~150は甕Ad。149は口唇部の刻みが上下端にある。150は口縁部と体部下半を欠損して床面直上で正立に出土した。器台のような役割であったかもしれない。151・152は甕Ac。

153・154は甕Aa 2。153は口唇部にハケメがある。154は口縁部外面にヨコハケメが施され、口縁部が立ち上がる。甕Dの影響か。

155は鉢Ac。口縁部には金属器を用いたような鋭い刻みが施されている。156は研磨されているので精製高杯の脚台と考える。157は粗製の高杯。

口縁部

体部  
上半

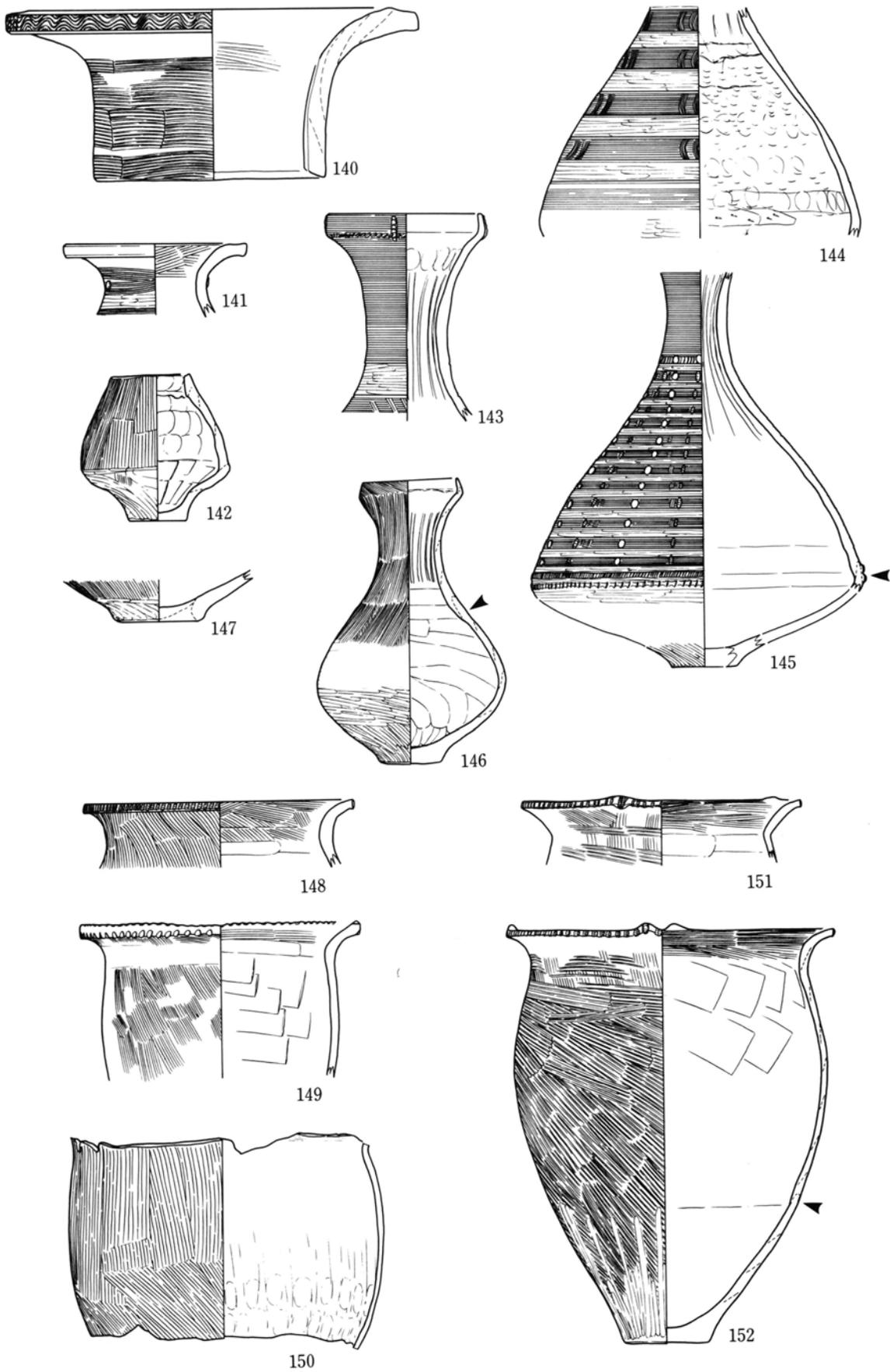
体部  
下半

底部

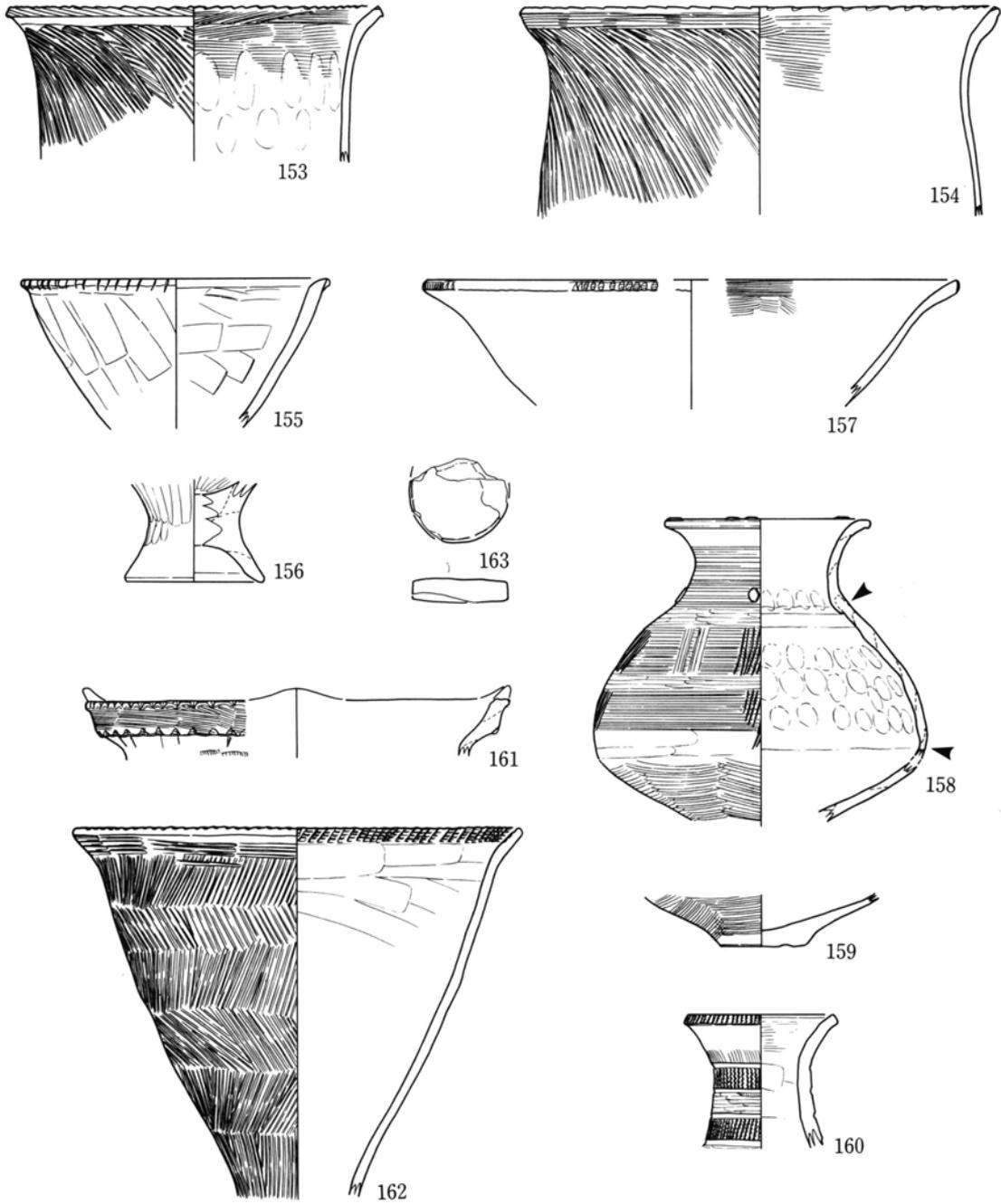


158

第54図 SB56出土土器 (1)



第55図 SB56出土土器 (2)



第56图 SB56出土土器 (3)

径はもう少し小さくなるかもしれない。

158・159はB系統壺。同一個体の可能性が高い。158は形態的にA系統に接近するので、折衷型と考える。縦位直線は沈線と櫛の交互施紋。床面直上で潰れた状態で出土した。159は底部にドーナツ状のくぼみを持つ。底部成形はbか。

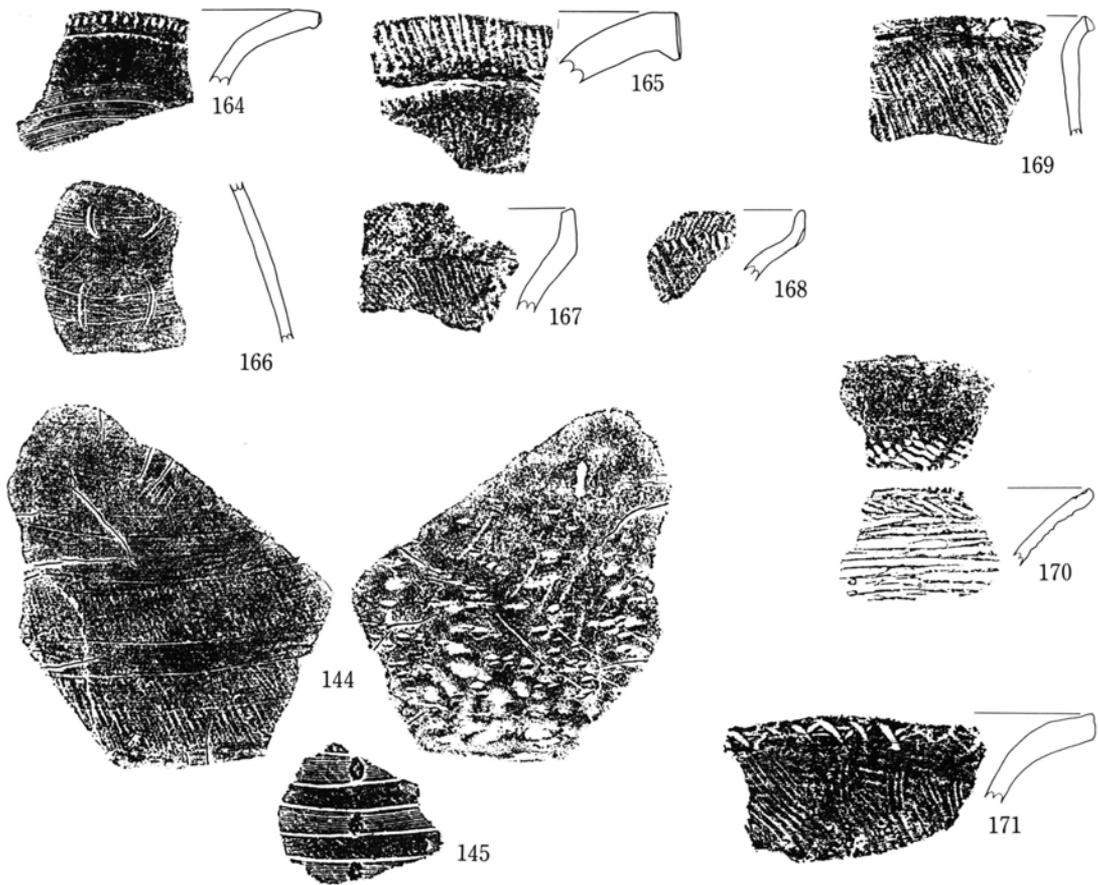
160はCa系統の二枚貝刺突紋系壺である。細頸であるが、体部と頸部の境界が明瞭かどうかは不明。どちらでも有り得る。

161は有段波状口縁甕。162は深鉢 Cb。口縁部内面の櫛刺突紋は押し引き状である。

164は櫛描紋系の太頸壺A。165は無紋系か篋櫛併用紋系の太頸壺A。166は付加沈線の欠落した櫛I種A類の単帯櫛描紋。縦位弧線は櫛I種A類。

167・168は縄紋系細頸壺 Aa。

170は深鉢 Cb。171は甕D。口唇部に斜格子紋。169は甕 Ad。



第57図 SB56出土土器 (4)

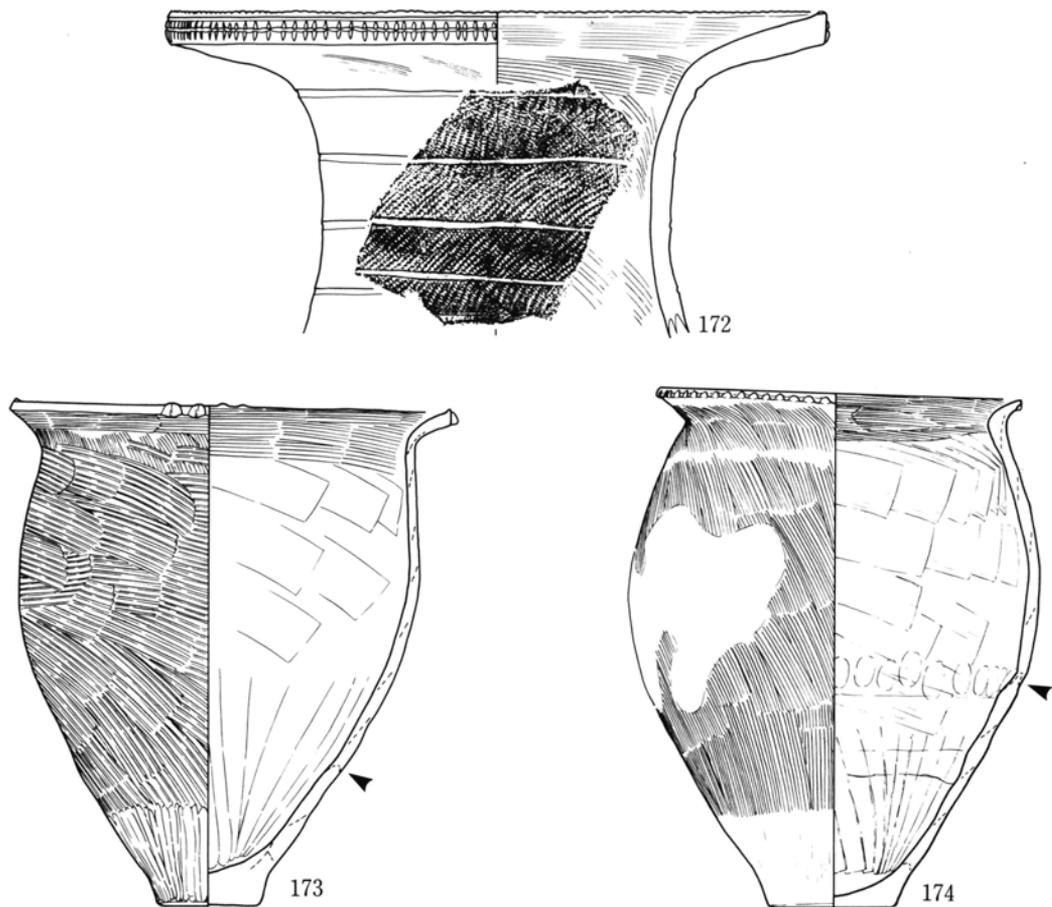
S B 59

172は縄紋をもつ太頸壺A。口唇部は沈線を施した後に板による刻みを加える。上端にも刻みがある。頸部は縄紋の後に沈線を4条施す。黄褐色。

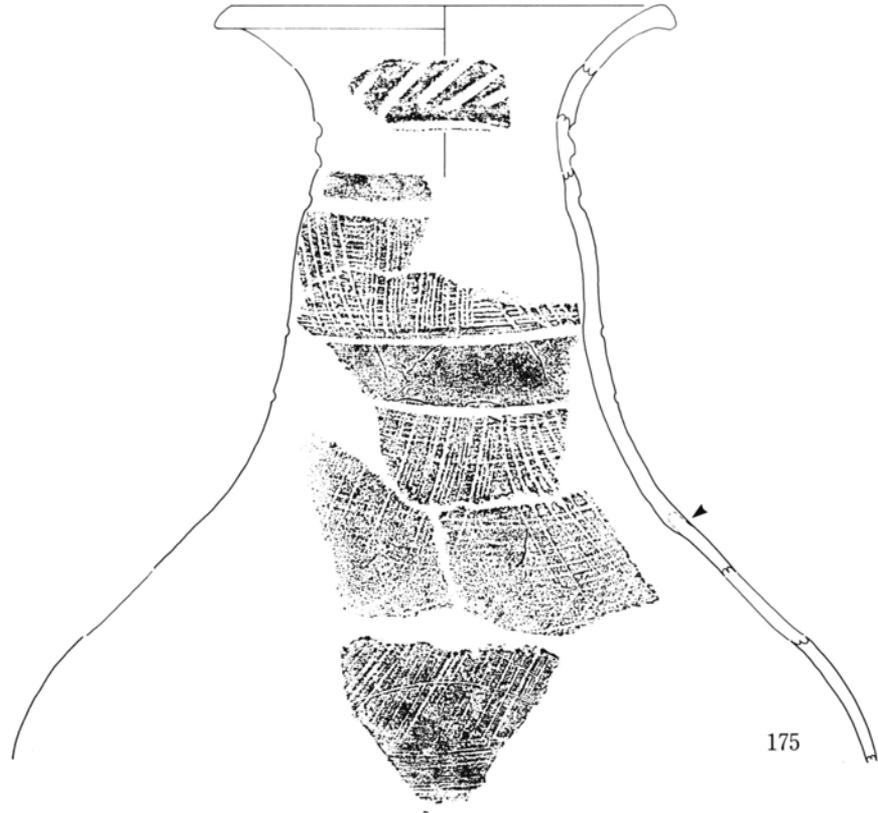
173は甕 Ac。口唇部は2ヶ一對の部分圧痕を円周4分割の位置に施す。体部はハケメ→二枚貝→下部に研磨の順で調整する。

174は甕 Ad。体部径が口縁部径を凌駕する。体部中位やや下部に成形単位のつなぎ部分が明瞭に認められる。

175はB系統壺。頸部はやや細身で長頸と言ったほうがよい。櫛描紋帯部分は櫛II種b類による直線紋のあと縦位に櫛II種b類と沈線による交互施紋が施される。口縁部外面には幅の広い沈線によるハネアゲ紋、体部上半には沈線による連弧紋が施される。典型的である。

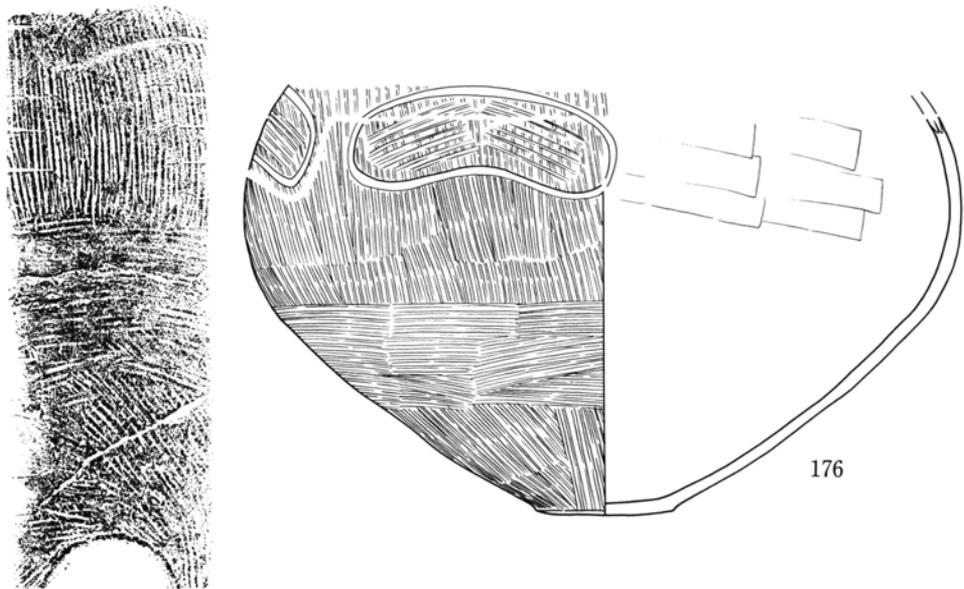


第58図 SB59出土土器 (I)



第59図 SB59出土土器 (2)

S B 66 176はC系統壺。体部は二枚貝調整で、その後に二枚貝による連弧紋を施し、それを沈線で囲む（連環状弧紋）。底部はやや突出気味で座りが悪い。



第60図 SB66出土土器 (拓図1:4)

S K 73

第62図左列184・185・191が最下部から出土した。右列はそれより上部からの出土。

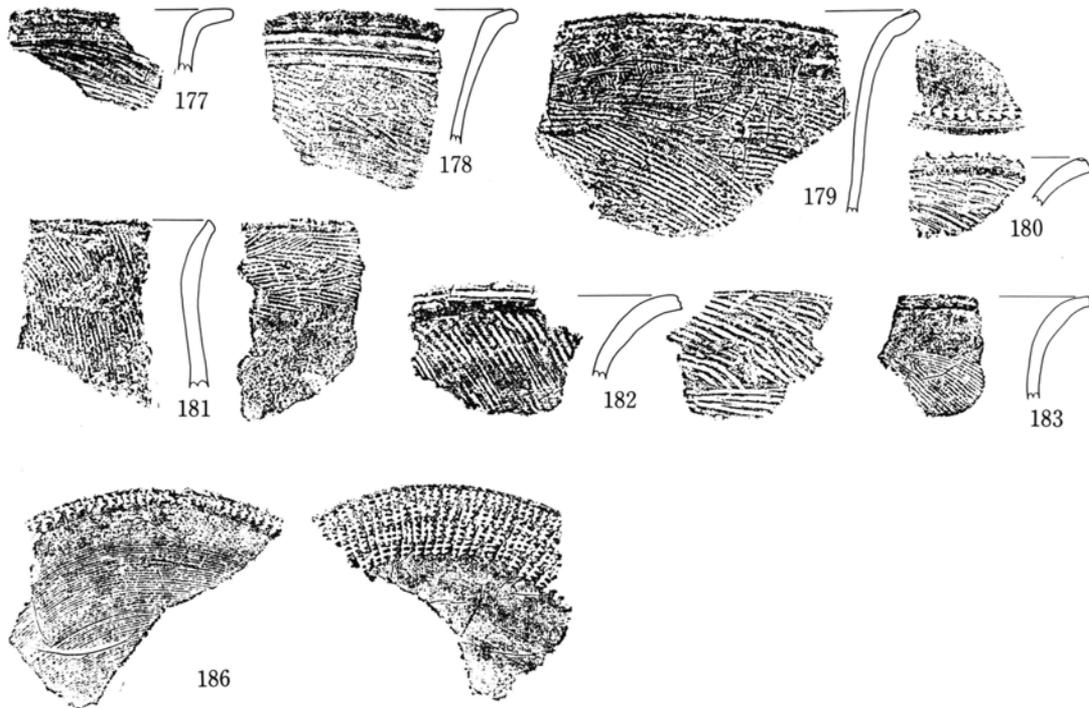
177・178は甕Aa 1. 口唇部には円周4分割の位置に単独圧痕が施されるはずである。  
179・180は甕Aa 2. 口唇部上端は二枚貝刻み。181は甕 Ad. 182は深鉢 Ca. 体部外面、  
口唇部、口縁部内面すべて二枚貝調整・施紋である。183は甕 Ad.

184・185は0期壺。二枚貝直線紋（二枚貝腹縁の弧状静止痕を残さない直線紋）の頸・体部2帯  
構成で典型的な朝日式壺である。接合しても完全にはならない。混入であろう。

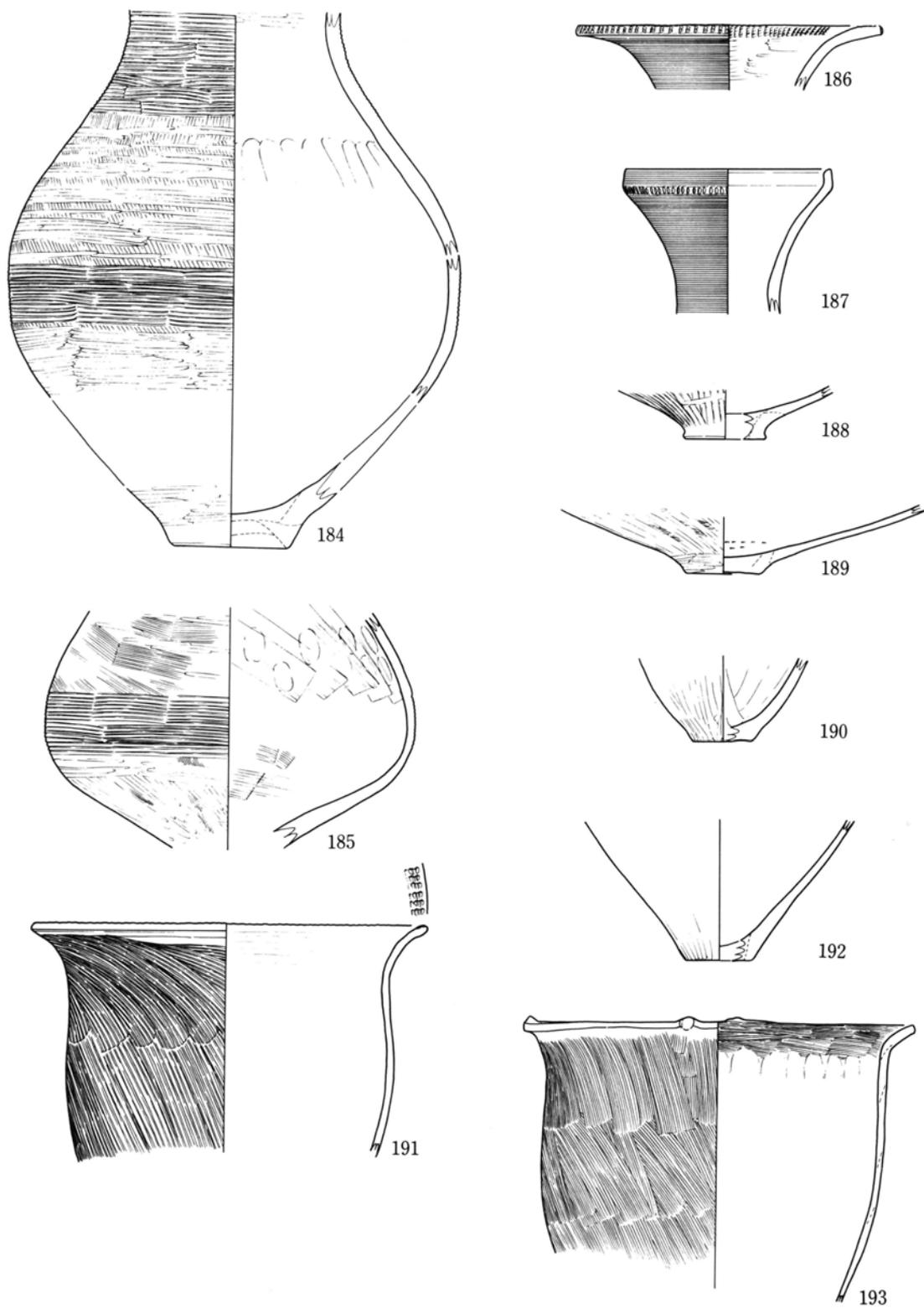
186は口縁部内面に二枚貝刺突紋を施す太頸壺A. 口唇部にも二枚貝刻み。頸部櫛描紋は  
口縁部にまで及びI期の典型であることがわかる。黒色仕上げ。187は細頸壺 Aa. 口縁部  
屈曲部には板?によるD字刻み(→方向)。黒色仕上げ。188は研磨を加えない突出した底部。  
成形はbか。189は丁寧な研磨を施す底部。外面は二枚貝調整の後に研磨が加えられる。底  
部成形aか。底部内面には擦痕がある。黒色仕上げ。折衷型。

190は鉢。全面研磨。黒色仕上げ。

191は甕 Aa 2. 口唇部上端は二枚貝刻み(→方向)。192は体部下半と底部外面に丁寧な  
研磨を施した底部。193は甕 Ad. 口唇部には円周4分割の位置に指頭による単独圧痕。



第61図 SK73出土土器 (1)



第62図 SK73出土土器 (2)

SB19に切られる土坑である。内部は炭化物と土器片が密に充満していた。接合の結果、完全になるもの多かった点は、他の土坑と大きく異なる点である。土器廃棄用の土坑と  
いった趣である。

194は0期大形壺。頸部直線紋は二枚貝腹縁の静止痕が特徴的に観察できる。口縁部は二枚貝施紋の後、上下に指頭圧痕を加える。口縁部内面には二枚貝背面で直線紋を3条施す。

195は頸部に二枚貝直線紋を施す太頸壺A。口縁部はやや垂下し、口唇部には板?で刻みを施す。196は頸体部界にハケメ工具によって段を作る。頸部櫛描紋は細密な櫛I種A類。色調は茶褐色。体部の研磨は雑である。

197は細頸壺Aa(櫛描紋b類;複帯4段)。直線紋は櫛I種a類で縦位弧線は3・3・3の櫛III種。体部内面は擦痕が顕著である。198は無頸壺。口縁部施紋は磨滅しているが波状紋のようである。

199は櫛II種b類の櫛描紋を施す太頸壺である。調整は体部下半をみる限りでは二枚貝調整である。施紋は頸部から体部にかけて横型流水紋。口縁部内面は流水紋の構図がくずれ、扇形紋で分割した直線紋帯を縦位の直線で分割している。口縁部の外周には2本1対の刺突紋がめぐる。主紋様単位は櫛描紋からなるが、構成は明らかに大地形壺と関係がある。折衷型である。黒色仕上げ。

200はB系統細頸壺。口縁部内面には3ヶ1単位の圧痕が円周4分割の位置に施される。櫛描紋は櫛II種b類。黒色仕上げ。

201は系統不明の受口状口縁壺である。口縁部屈曲部上下の波状紋はどちらもハケメ工具で施されている。調整・施紋を同一工具で行う甕Dと同じ系統の壺かもしれない。茶褐色。

202は口縁部に突起をつくる壺である。復元では円周4分割の位置にあるが、3分割かもしれない。

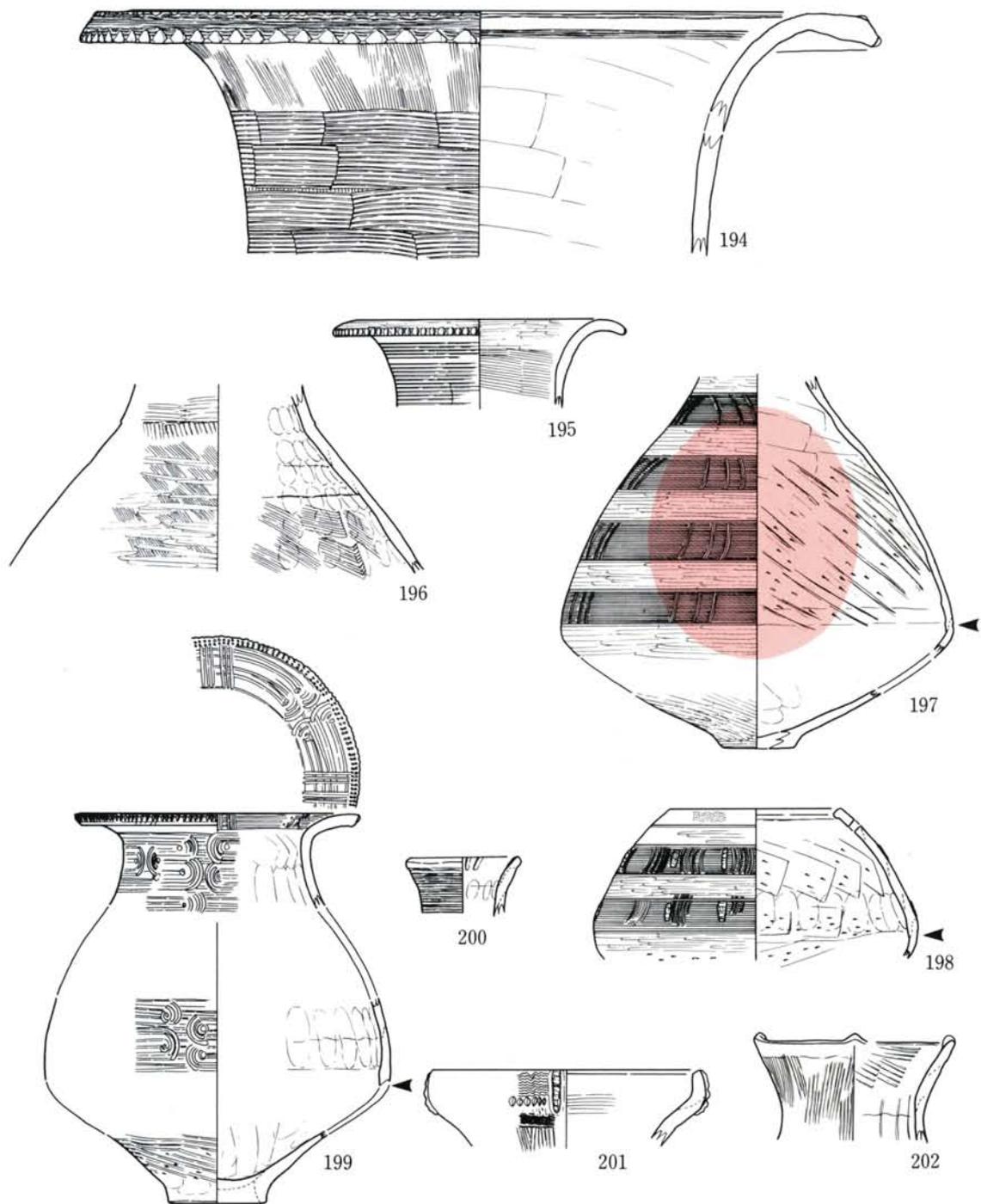
203は甕Ab。I-1b期ではただ1点である。204は甕Aa。体部下半部の調整はハケメではなく二枚貝である。205~208は甕Ad。口縁部径>体部径、口縁部径≧体部径などある。規格による定形化は認められない。206・207の底部成形はc。

209は鉢の脚台か土製品。210は高杯脚部で杯部には研磨が施されている。

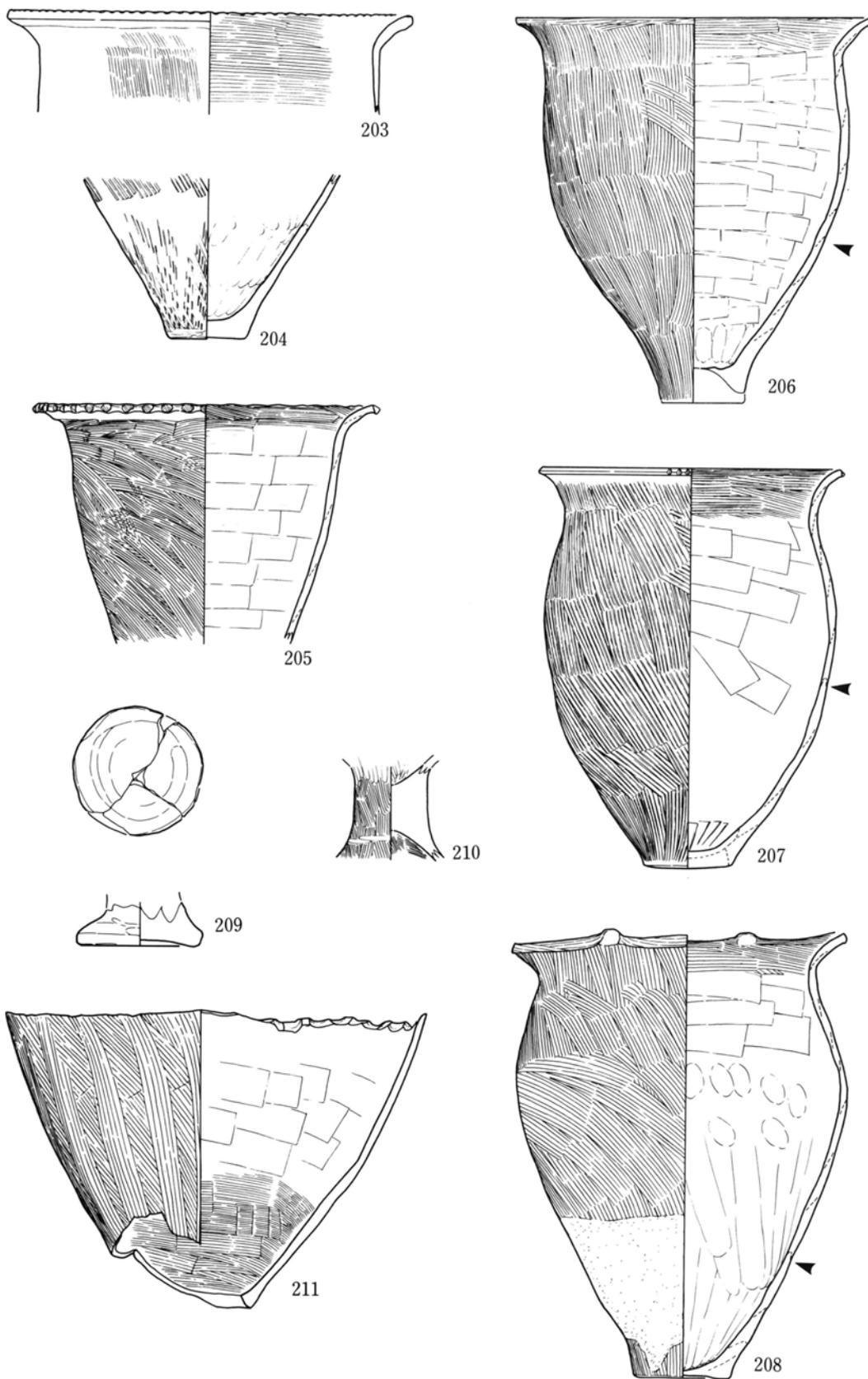
211は体部上半が意図的に打ち欠かれ、下部も抜かれた甕Ad。

212・213は太頸壺B。212は、口縁部外面に斜格子紋が施され、B系統としては珍しい。頸部紋様は、櫛II種b類による直線紋が整っている。縦位は上段が沈線4条による鋸歯紋、下段が櫛II種b類と沈線による交互施紋である。体部上半の連弧紋はそれぞれ→方向のものが←方向に施される。213は、口縁部外面に通有の幅広いハネアゲ紋。頸部の隆起部分は沈線の斜線。下部の櫛描紋は断続施紋で各単位の端は切り合う。体部上半の連弧紋はそれぞれ→方向のものが→方向に施される。この212と213は、前者がよりA系統土器に傾斜しているとすれば、後者はまだ続条痕紋系土器に近いといえることができる。

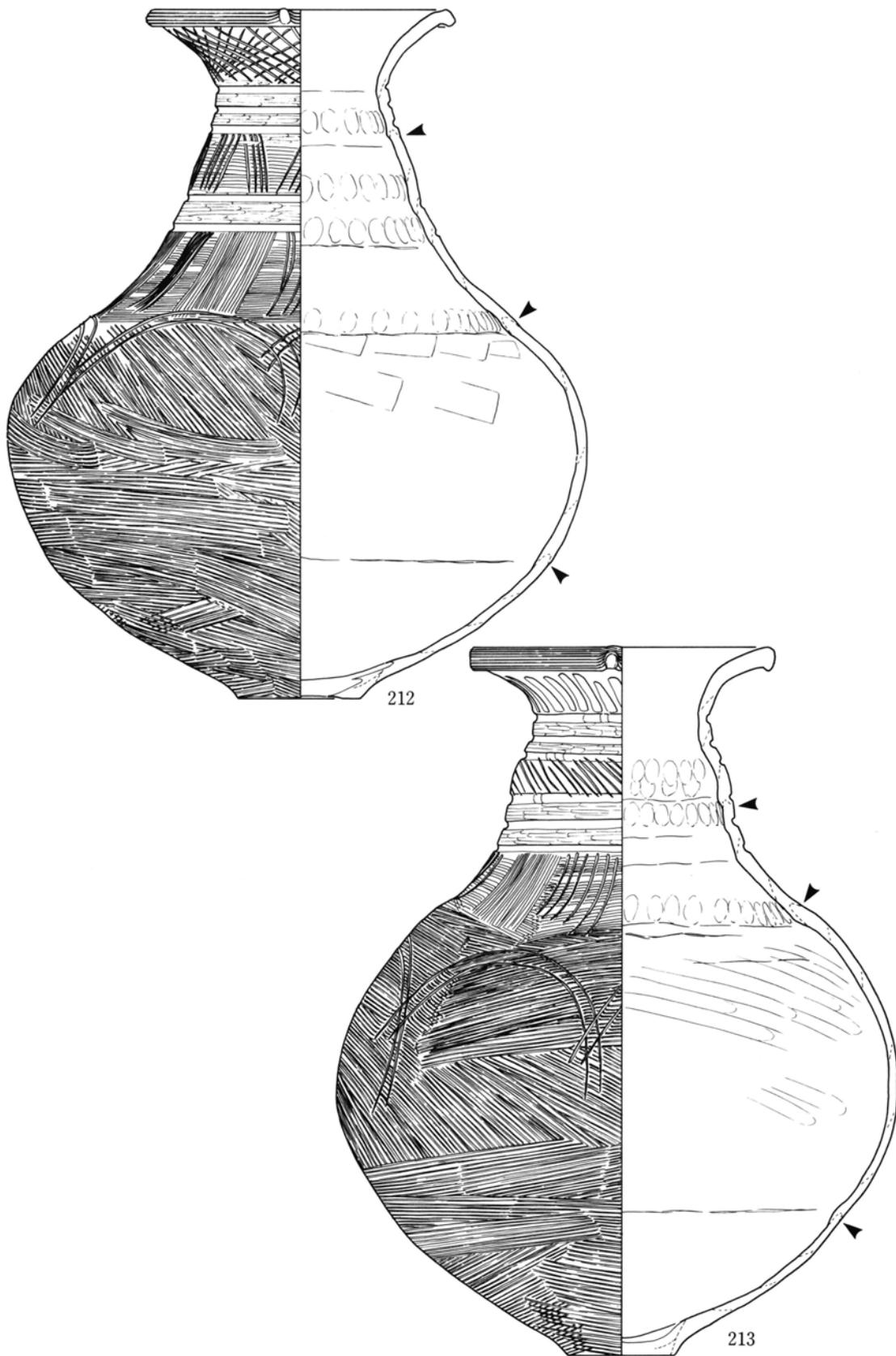
214は篋描併用紋系の太頸壺A。215は同一個体ではないが、このような感じになる。口縁部は強いヨコナデが加えられる。口唇部の施紋は沈線を2条施した後に、ハケメ工具で



第63図 SK74出土土器 (1)



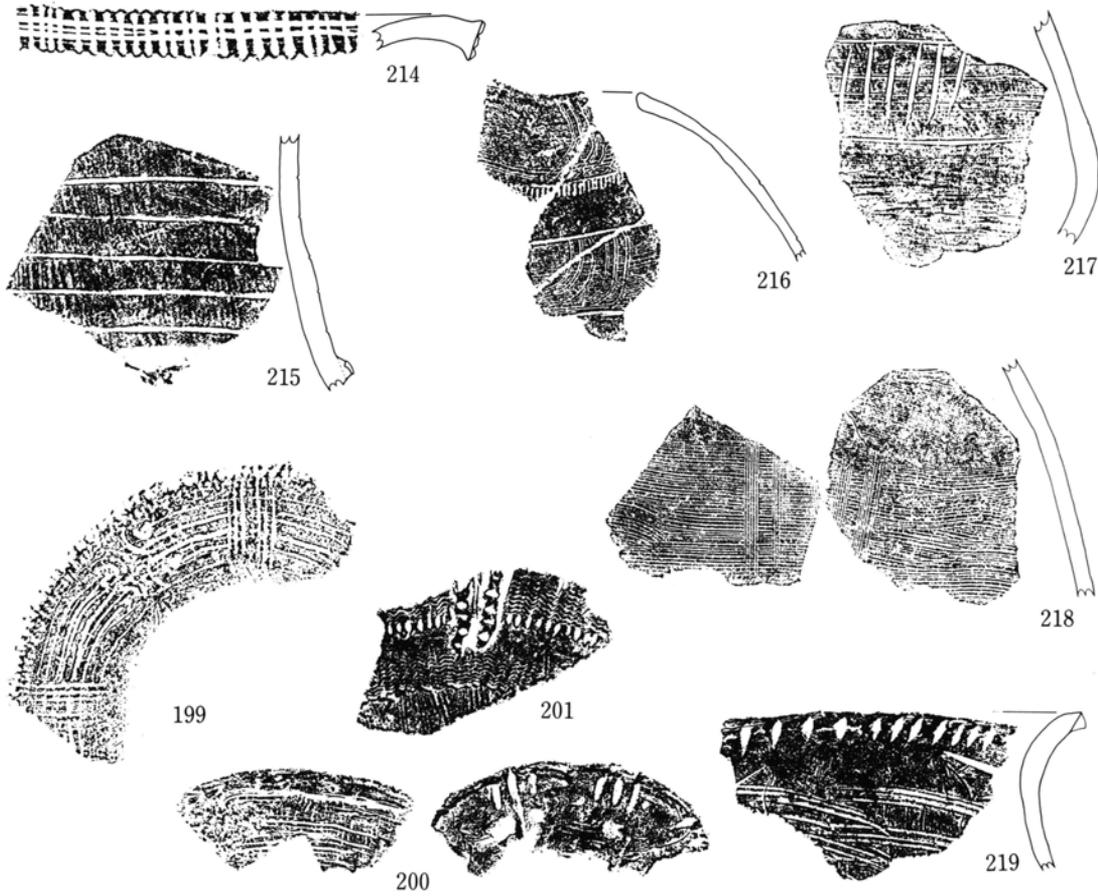
第64图 SK74出土土器 (2)



第65図 SK74出土土器 (3)

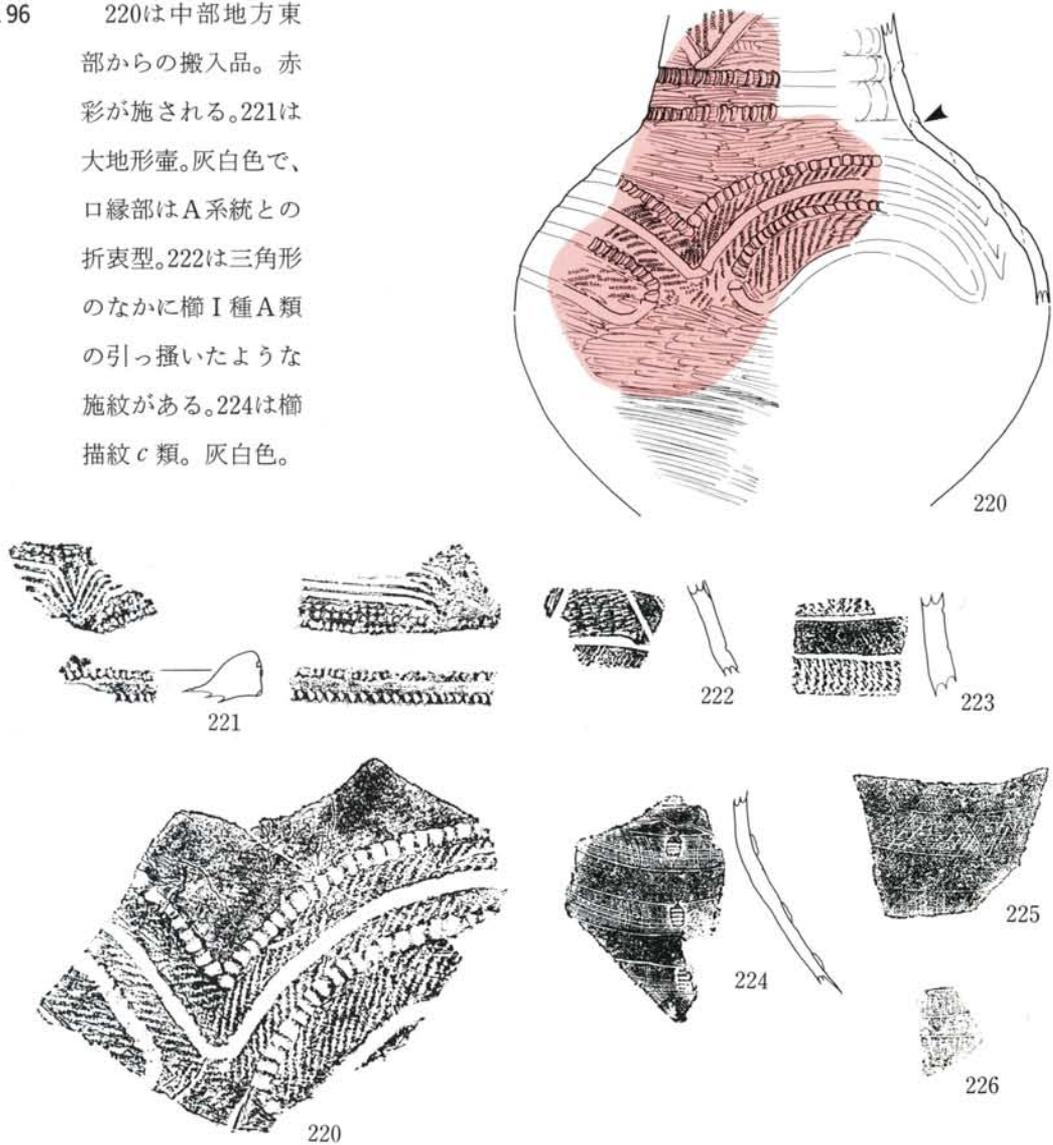
刻む。215は頸部下端に突帯を持つ。216は無頸壺A。櫛描紋上段は複帯波状紋、下段は複帯直線紋。縦位弧線は(2・2・2)×2の櫛III種。217は櫛描紋*d*類。櫛I種A類。218は4帯以上の複帯からなる櫛描紋*a*類。原体は櫛II種*b*類。

219は甕Ac。



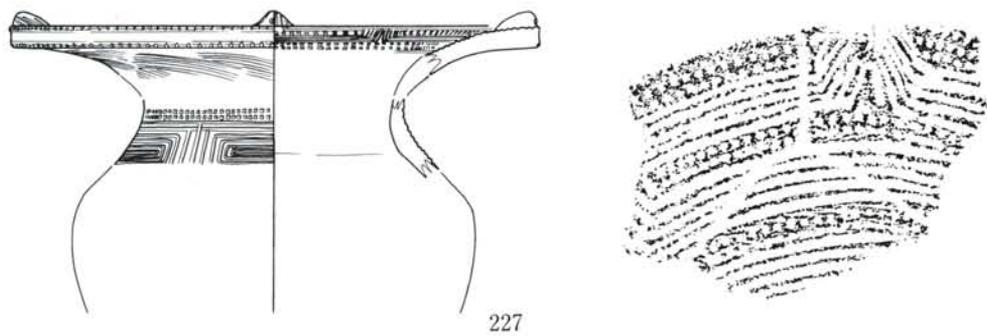
第66図 SK74出土土器 (4)

S K 96 220は中部地方東部からの搬入品。赤彩が施される。221は赤彩が施される。221は大地形壺。灰白色で、口縁部はA系統との折衷型。222は三角形のなかに楕円種A類の引っ掻いたような施紋がある。224は楕円描紋c類。灰白色。



第67図 SK96出土土器

S K 107 227は221と酷似するが接合関係はSK106のほうにある。灰白色。A系統に接近。折衷型。



第68図 SK107出土土器

S K 140 SB30に切られる土坑内部からの出土である。

228は太頸壺A。頸部の櫛描紋(櫛II種b類)は整った構成を見せず、単位も短く断続的で上下に揺れており、一見雑な印象を受ける。これを「下手」といえばそれまでだが、細頸壺などにもまま見受けられるので、一つの手法として独立していると考えたほうが良いようにも思う。明るい灰色。

229は頸部に刻み突帯をもつ縄紋系太頸壺A。

230はB系統壺。1は連弧紋が施されている。櫛II種b類の直線紋を縦位の沈線で区切っている。赤褐色。

231はC系統か。極めて彫刻的な施紋である。部位は体部中央であろうか。黄褐色。

232は口唇部が外傾するだけでなく直交する刻みが施され、C系統壺の手法と関係がある。C系統の縄紋系壺であろうか。

233~240は壺底部である。成形はaがほとんどだが、他に235や240のような粘土盤の据え置き(底部成形d)がある。これは古い様相で0期に多い特徴である。底部内面がやや凹面をなすのは成形aの特徴である。

241~244(232も?)は続条痕紋系土器の組成を示す好資料である。

241は太頸壺Ca。頸部より上の復元に自身はあるけれども、体部上半の復元は心許無い。しかし、二枚貝条痕の上に連弧紋が施されることは間違いないし、この手法は古い様相で注目してよい。口縁部は屈曲部外面に二枚貝刻みが→方向に施される。口縁部の斜格子紋は鋭い切り込み状の沈線によって施される。灰白色。

242は太頸壺Ca。口唇部に二枚貝条痕が施される。頸部はおそらく二枚貝条痕後にナデ消される。灰白色。

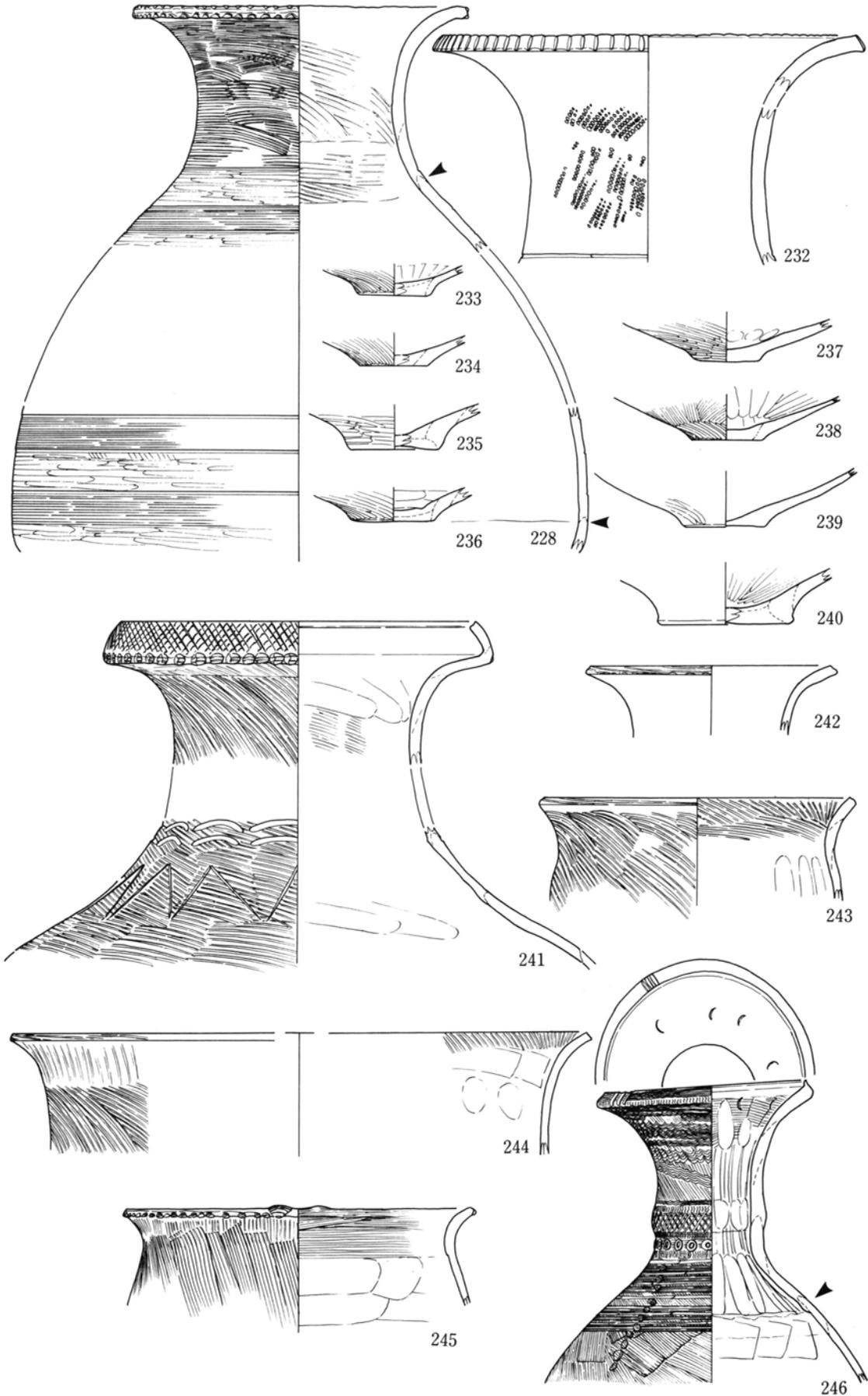
243・244は深鉢Ca。体部外面、口唇部、口縁部内面に二枚貝調整・施紋が施される。243は体部の張りがやや強くなっている。

245は甕D。

246は混入。II期後半の細頸壺で頸部に隆起部が作られる折衷型。口縁部内面には爪形紋が施される。体部紋様部はかなり上半へ圧縮されている。



第69図 SK140出土土器 (1)

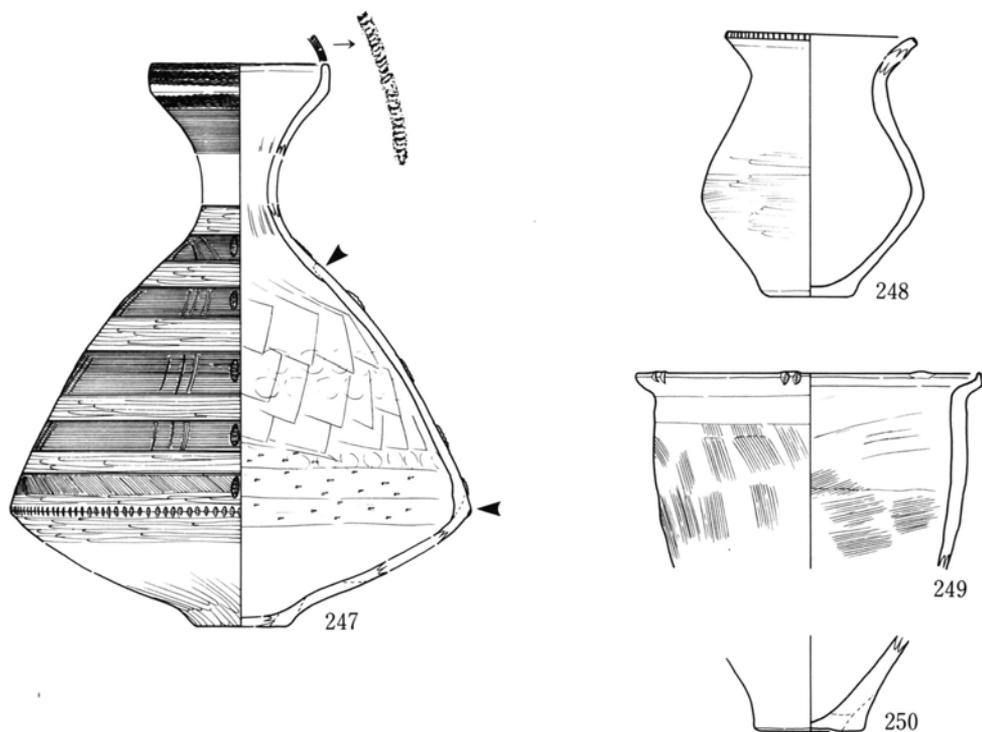


第70図 SK140出土土器 (2)

S K 151 247は櫛描紋b類だが、口唇部には幅の狭い切り込み状の刻みが施される。刻みは図示した部分で「ハ」字状に傾きを変える。口縁部外面は波状紋2段、体部には櫛I種a類を原体に単・単・複・単で施される。縦位弧線は2・2・3の櫛III種である。櫛描紋帯は最下段が無施紋でハケメをそのまま残す。体部の上下境界は突帯を作らず刻みを施している。手法的には古い様相である。黒色仕上げ。

248は小形壺。体部は研磨が施される。

249は甕A d。口唇部は2ヶ対の部分圧痕が円周4分割の位置に施される。口唇部はやや上方にそって微妙な受口をなす。250はやや上げ底の甕底部。成形はc。



第71図 SK151出土土器

S K 181 251は櫛描紋a類。櫛II種a類で複・複・単に施される。縦位施紋は直線紋と波状紋の交互施紋で、3・3の櫛III種を3回施して1単位とする。黒色仕上げ。252は櫛描紋b類。複帯3段で、縦位弧線は2・2・2の櫛III種。だいたい縦位弧線は互い違いに向きを変えるのが普通だが、拓本では中段左端の弧線向きが変わっていない。黒色仕上げ。

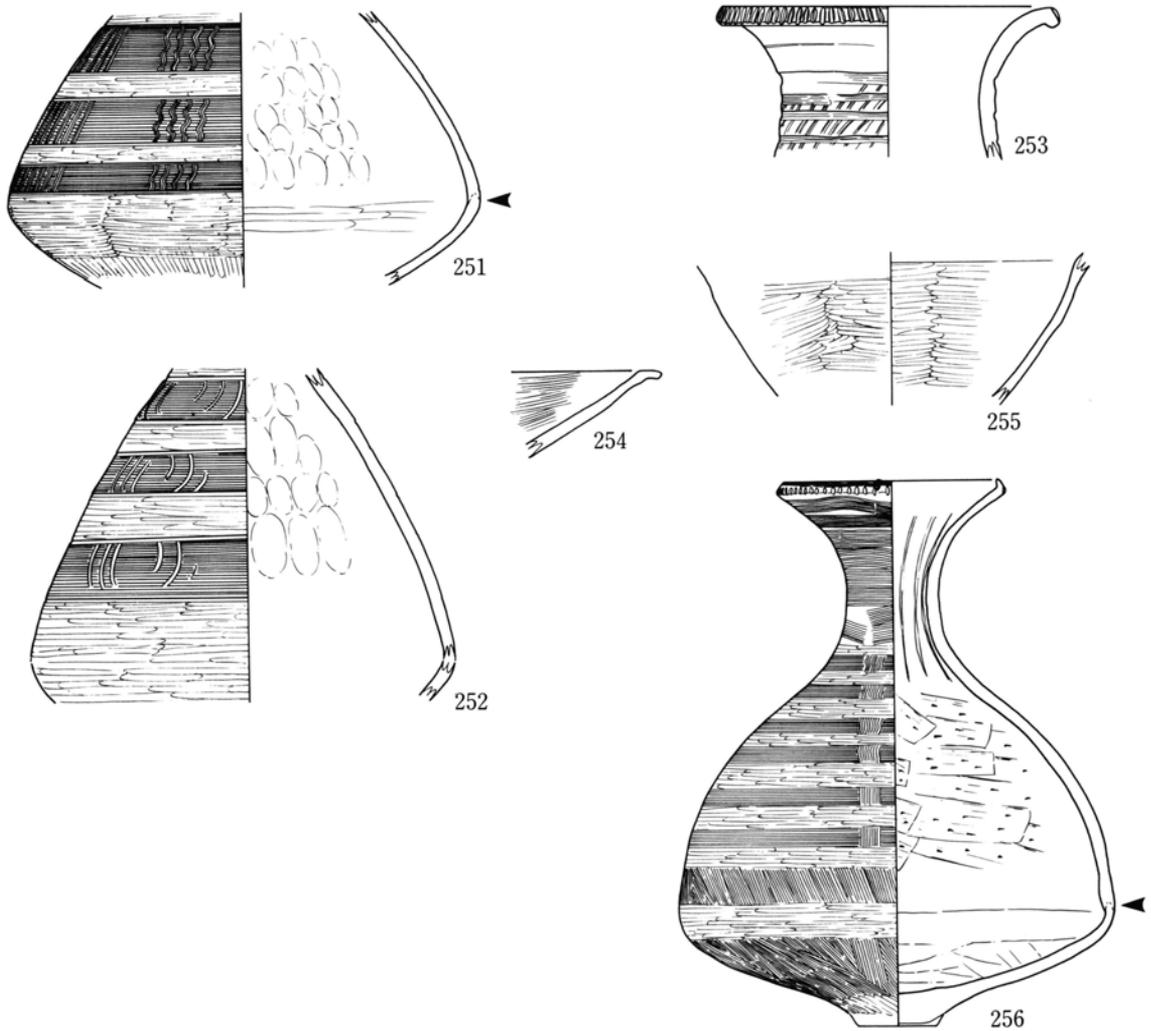
253はC系統の壺。頸部は地の条痕を完全に消さないままに沈線を施しており、古い様相を見せる。

254は高杯。255は高杯か鉢。どちらにしても精製。

256はII期細頸壺Aaの混入。縦位弧線は櫛描直線紋施紋後に一気描きで施している。胎土には砂粒が多く含まれているので、内面の擦痕は顕著になっている。

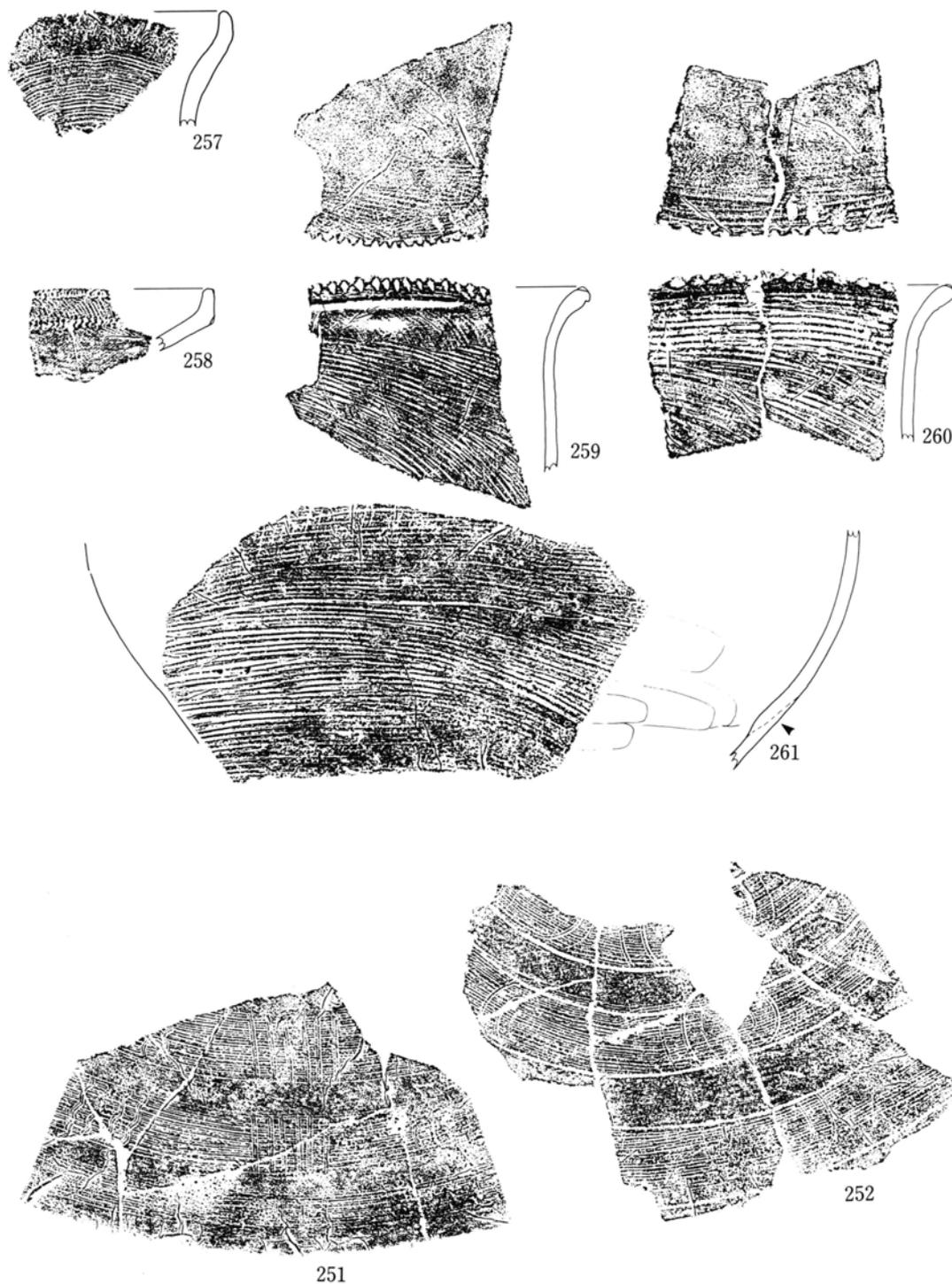
257は細頸壺Aaの口縁部。口縁部には波状紋が施される。屈曲部の刻みはない。

258は精製の鉢。黒色仕上げ。



第72図 SK181出土土器 (1)

259・260は甕 Aa 2。259は口縁部直下に一次調整のハケメがよく観察できる。  
 261はB系統壺の体部下半。



第73図 SK181出土土器 (2)

S K 185 262は甕 Aa 2 のバリエント。口縁部内面の刻みは指で圧痕状に施されている。体部外面は二枚貝調整であるが、わずかに一次調整のハケメが観察できる。

263は二枚貝調整の後研磨を施した細頸壺の底部。成形はa。黒色仕上げ。折衷型。

264は太頸壺A。黒色仕上げ。頸部の櫛描直線紋は口縁部近くまで達している。265は細頸壺Aa。口唇部に刻み。屈曲部の刻みは二枚貝。棒状浮紋上にはハケメ工具による圧痕が施される。

266は櫛描紋a類とd類の複合した例として珍しい。1・3・4は複帯櫛描紋のなかに扇形紋2段と縦位弧線および円形浮紋が施されている。2は円形浮紋の両側に縦位弧線(2・2の櫛III種)と沈線が観察できる。5は複帯櫛描紋のなかに扇形紋が一つと沈線6本が観察できる。

266のような例は少ないが、これを見るかぎりでは縦位弧線と扇形紋の使われ方の異なることが分かる。つまり、後者は流水紋としての構成に関わるが、前者は分割線的な使われ方をしているのである。そして、このような櫛描紋と沈線の併用によって櫛描直線紋が分割される手法は、B系統にも深く関係する手法であると指摘できる。これはB系統からの影響を示すのではなく、逆にB系統への影響を示すものである。また櫛描紋d類の由来も示しており、櫛描紋a類段階の紋様全体の究明が極めて重要であることを痛感させる。

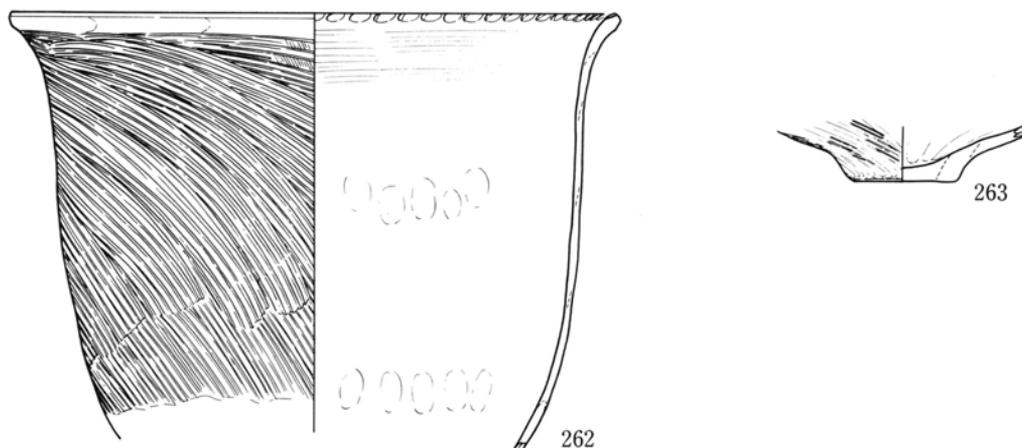
267は櫛描紋d類。

268はCa系統壺の複合鋸齒紋。

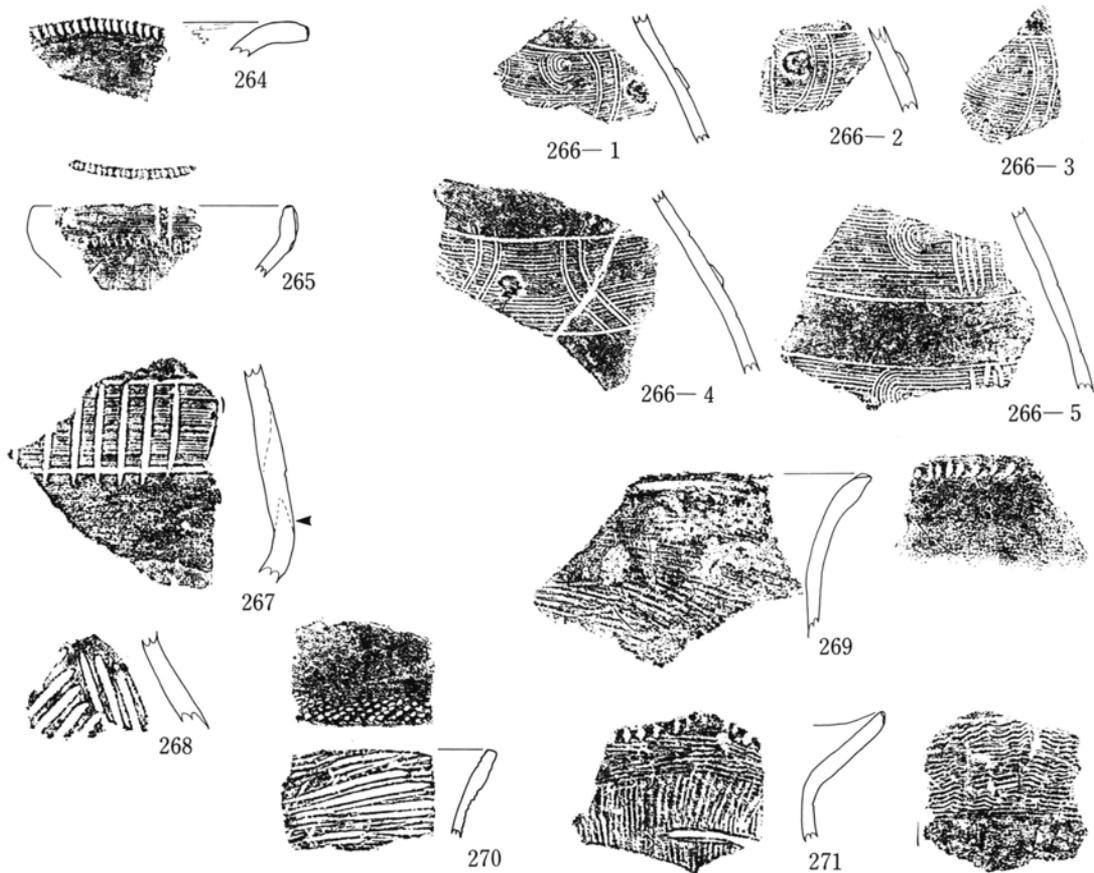
269は甕 Aa 2。

270は深鉢 Cb。口縁部内面の櫛刺突紋は細かいが押し引き状をなしている。

271は今回唯一点出土した近江形甕の典型ともされた波状口縁甕である。口唇部にはハケメ工具による刻み、口縁部内面にはハケメ工具による波状紋が3帯施されている。恐らく体部上半にもハケメ工具による施紋がある。工具のアタリかと思われる条線が観察できる。有段波状口縁甕とは大きくは同系統であるが、分布的にずれるので、下位区分で分類する必要がある。



第74図 SK185出土土器 (1)



第75図 SK185出土土器 (2)

S K 193 272は小形壺。調整と同じハケメ工具による施紋が特徴的である。系統不明だが、施紋手法的にはD系統に近いグループか。

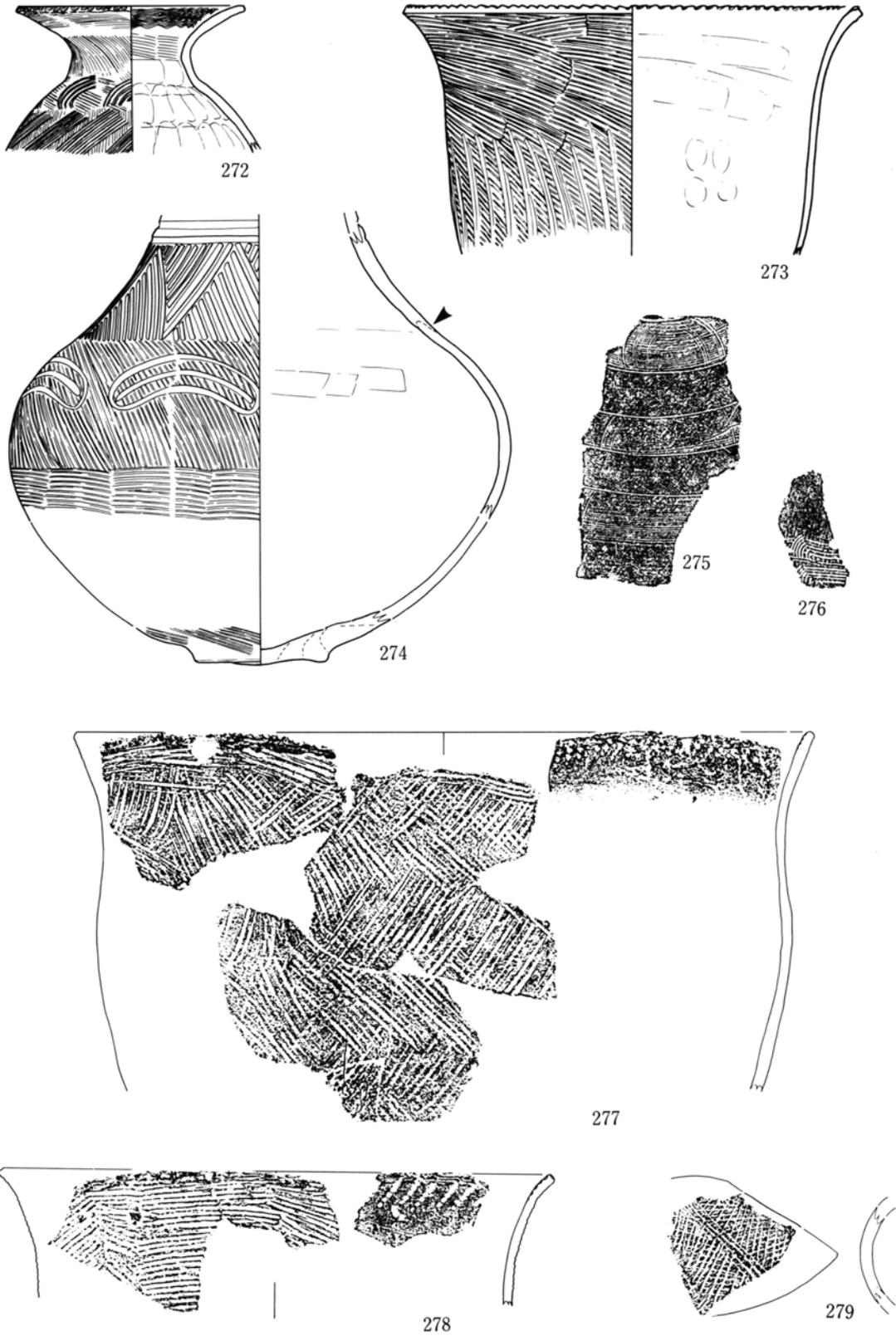
273は甕 Aa 2。口唇部上端は二枚貝による刻み。体部下半には最下部の研磨部分(この部分は欠損)から上方に伸びた研磨がまばらになって観察される。

274は太頸壺Ca。体部上半の連環状弧紋には中に沈線が1条加えられている。底部は中央が少し突出する。成形bか。

275は櫛描紋b類、276は櫛描紋a類。

277は大形の深鉢Cb。基本的には横羽状条痕であるが、口縁部左の方には部分的に縦位の羽状条痕となっている部分がある。278も深鉢Cbだが、こちらは完全に縦位羽状条痕が施されている。

279は筒状(角杯状)土製品。紋様は沈線紋で精製鉢などの紋様手法に共通する。黒色仕上げ。



第76図 SK193出土土器

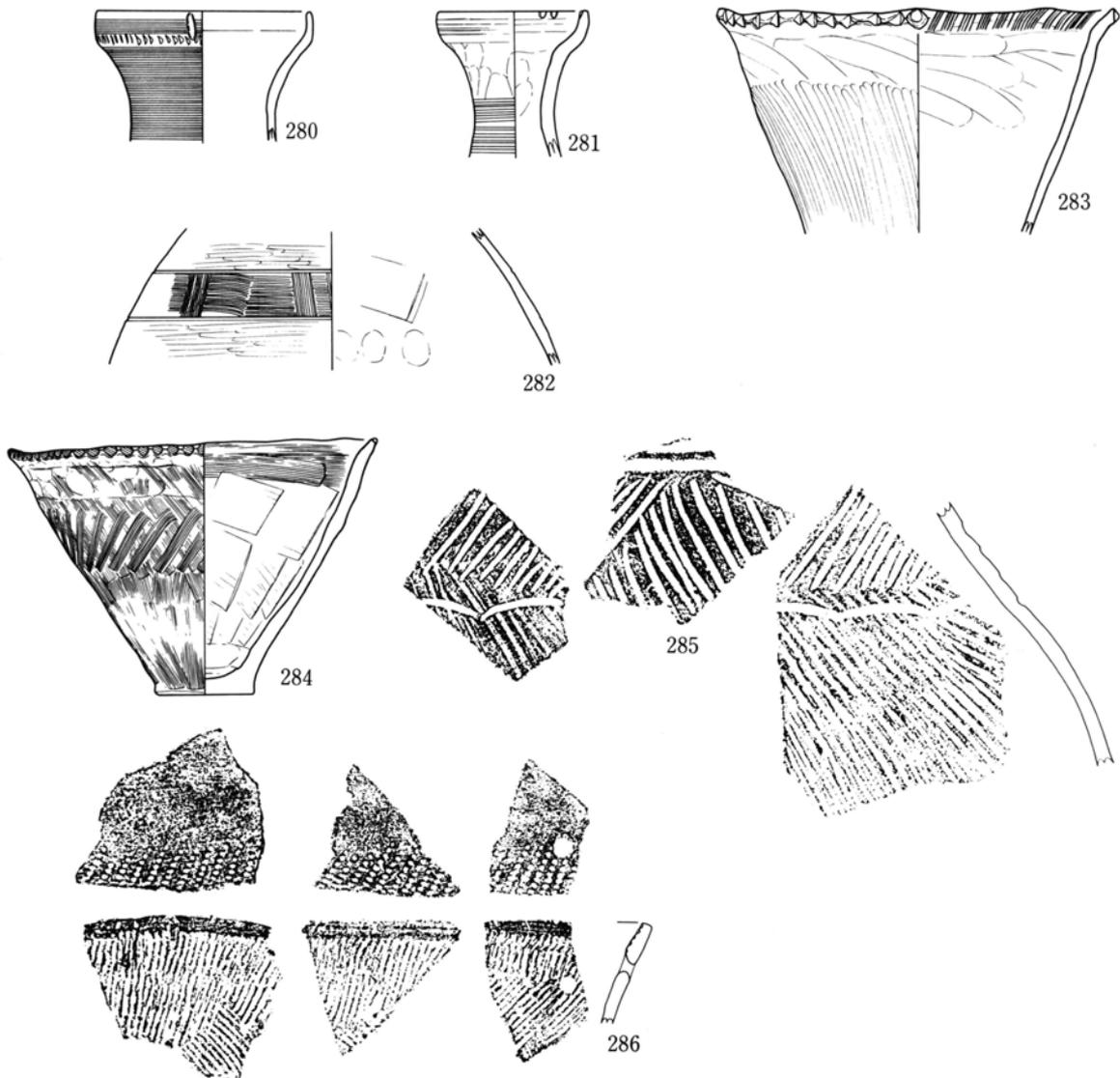
S K 212 280は細頸壺 Aa。口縁部屈曲部のD字刻みは→方向に施される。281も細頸壺 Aa だが、口縁部内面に2ヶ対の部分圧痕が施されている。頸部直線紋は櫛I種A類。

282は櫛描紋a類。原体は櫛I種A類。施紋は非常に細密で浅い。

283は口縁部内面に櫛歯状の紋様を施し、口唇部には板?による刻みと円周の何分割かの位置にある大きな圧痕が施される。体部内面や外面の上半はナデで下半のみ研磨であるが、一応精製の部類に含めてよいであろう。284は鉢A。体部上半にはハケメ工具による整った斜位の調整があり、一見紋様的である。

285はCa系統壺。複合鋸歯紋直下に連弧紋が施されているので、体部上半にはとくに紋様は施されないであろう。

286は深鉢Cb。深鉢Cbの多くは口縁部直下に横条痕を施すけれども、本例にはない。また右端のように穿孔を加えて補修しているのも珍しい。口縁部の外反が極めて弱くかな



第77図 SK212出土土器

り直線的な体部上半のようであり、典型的な深鉢の形態を保持している。口縁部内面の櫛刺突紋はやや押し引き状を呈する。

S K 228 287は細頸壺 Aa。口唇部は平坦面をなす。口縁部波状紋は上に尖る。頸部には簾状紋がある。体部櫛描紋は付加沈線はなく、櫛描直線紋上には扇形紋が施されている。

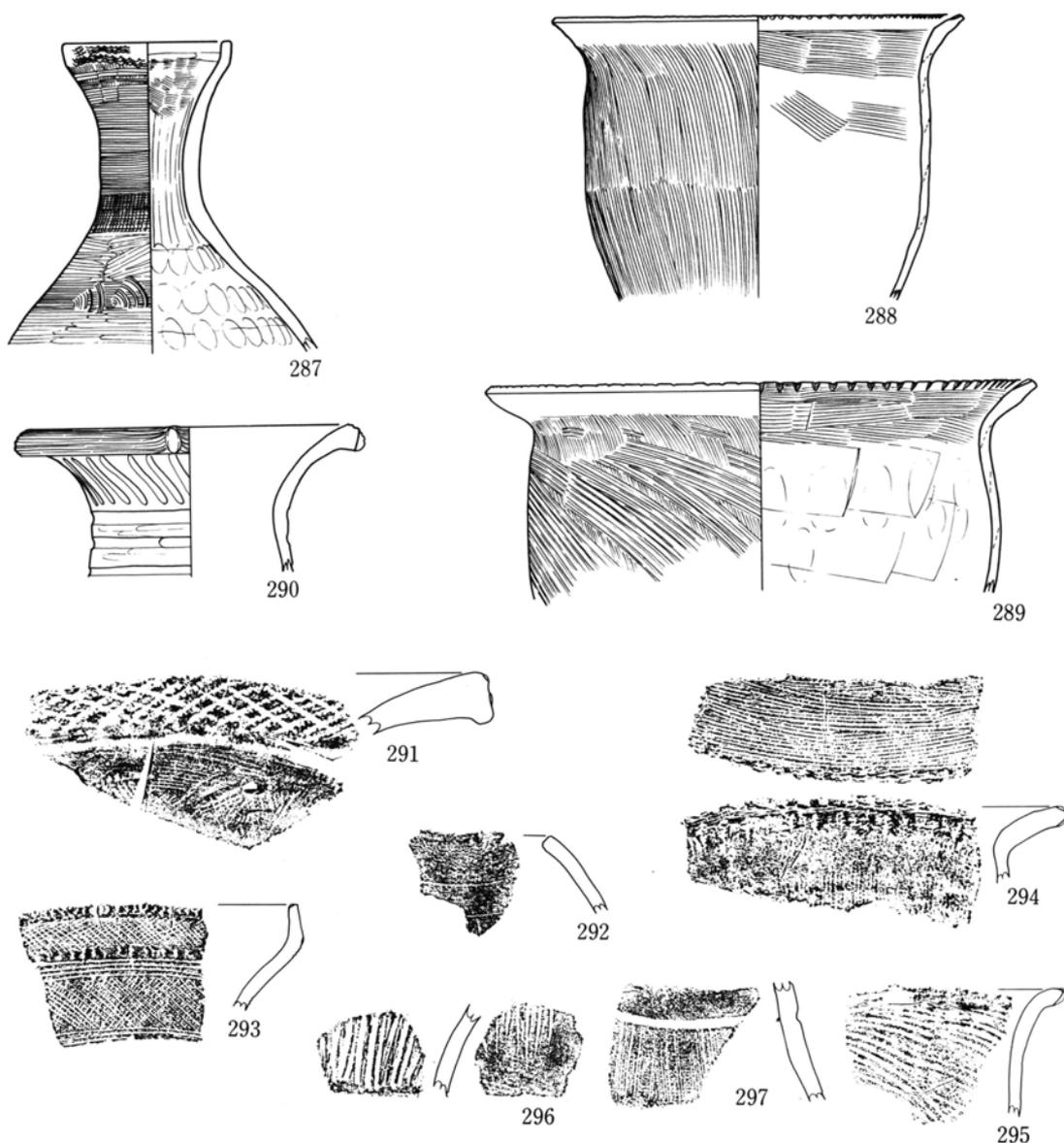
290は大頸壺 B。289は甕 Ac。288は甕 Ad。口唇部の刻みは甕 Aa の影響。

291は口唇部にハケメ工具による斜格子状の刻みが施される。292は無頸壺。

293は精製鉢。やや深めの形態になるかもしれない。紋様は沈線からなり、口唇部と屈曲部に二枚貝による刻みが施される。黒色仕上げ。

294は口唇部の上下端にハケメ工具の刻みをもつ、甕D。295は甕 Aa 1。

296はCb系統（櫛条痕系）の壺頸部。口縁部内面は沈線。297はB系統壺の頸部。



第78図 SK228出土土器

S K 280 298は甕 Ac のバリエントか。口縁部内面は二枚貝腹縁の押し引き紋(→方向)。深鉢 Cb 内面紋との関係があるかもしれない。

S K 295 299はCb系統(櫛条痕系)受口状口縁壺。突帯の刻みは指頭による。

300は細頸壺 Aa。残念ながら紋様はわからないけれども、体部上下界を突帯ではなく稜を形成して刻む手法は古い様相である。

S K 297 301は太頸壺 A。口唇部には刻みではなく刺突紋が施されている。

302は、細頸壺 Aa の形態・施紋そのままであるが、体部下半の調整が放射状ハケメではなく B 系統に普通みられるクモの巣状ハケメであり、かぎりなく A 系統に接近した折衷型である。

303は口縁部が強いヨコナデでやや垂下する。瘤状突起は円周4分割の位置にある。頸部は櫛描直線紋を施した後に沈線が施されて、いわゆる篋櫛併用紋となっている。304は口縁部内面に三角形刺突紋と4分割円周の位置に瘤状突起、頸部には板?のエッジで羽状紋が施されている。303・304はD系統に属すか。いずれにしてもA系統ではない。

305はB系統壺の体部下半。

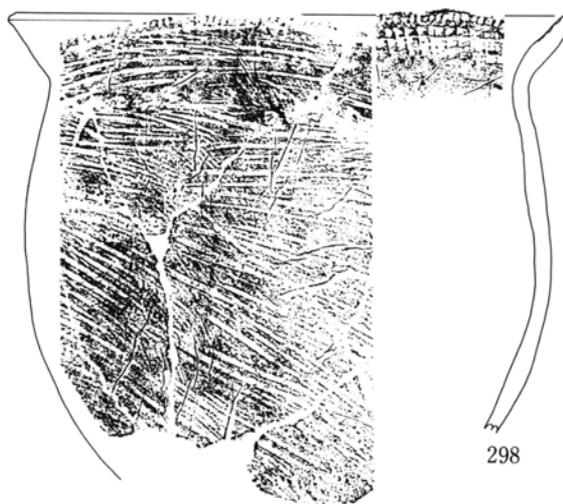
306は深鉢Cb。底部には編布痕がある。

307は櫛描紋 a 類。黒色仕上げ。

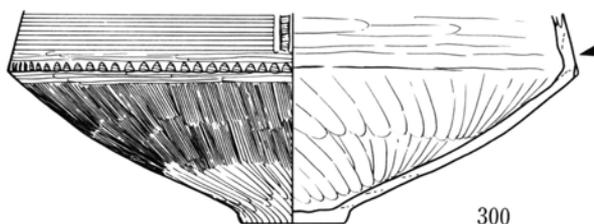
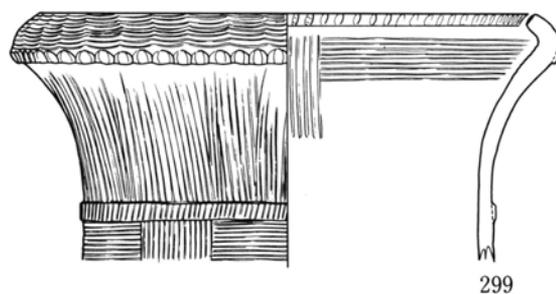
308・309は甕 Ad。310・311は甕 Aa 1。311は二枚貝調整痕の間からハケメが観察できる。

312はB系統のバリエント。体部の研磨などにA系統との関係があるかもしれない。

313・314は深鉢Cb。313の口縁部内面は櫛の押し引き状刺突。314は二枚貝刺突で、体部外面は縦位羽状条痕のようだ。口縁部直下の横方向の条痕がない。



第79図 SK280出土土器



第80図 SK295出土土器

S K 314 SK314は NR02の埋土上部に堆積していた白色シルト層を切り込む土坑である。

315は甕 Ab。口唇部上端はハケメ工具で刻む。口唇部にはハケメが施されている。

316は深鉢 Cb。口縁部内面の櫛刺突紋は押し引き状になってはいない。

S D 04  
(図版27～  
図版33)

この溝からの出土土器は、すべて一時期というわけではないけれども、量が確保できるので全体的な議論ができるという利点はある。出土土器の一部は『年報 I』(1983)で「SD17」として紹介し、その当時か

ら細分は別として I 期の基準になる資料であると考えていた。その後の資料集積も十分とはいえないが一応満足のいくものであった。

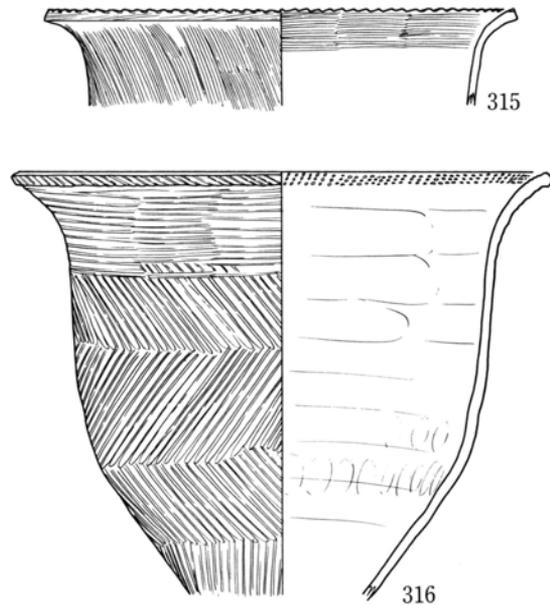
この溝から出土した土器は、器種ごとの出土量に偏りはあるものの各系統を含んでいるので、以下系統ごとに説明する。

#### A 系統

壺には太頸壺・細頸壺・無頸壺があり、比率的には細頸壺がほとんどを占める。太頸壺は、頸部に沈線紋を多条に施し下部にX状刻み突帯をめぐらす例(481)、無紋(482)、484のようなハケメを横羽状に施すものがある。体部施紋では、458は付加沈線磨消手法で縄紋を採用しているが、頸部刻み突帯の下には櫛描直線紋を施した後に二枚貝刺突紋を加えている。482は櫛II種b類を原体に、一部波状紋帯を加える珍しい紋様構成を取っている。口縁部は504・505のように口唇部の上下端をべつに刻むもの、507・508のように1ヶ所のみ刻むものがある。これは壺の大きさにも関係するようである。506は口縁部内面に二枚貝刺突紋を施す例である。544は口縁部外面の直線紋が二枚貝で施され、口縁部内面にも二枚貝による押し引き紋が加えられている。細頸壺はAaがほとんどである。紋様は、櫛描紋の他に縄紋が若干ある(455)。体部紋様は櫛描紋b類がほとんどで、ついでa類(509・510・512)、c類(416・441・520・522)となる。櫛描直線紋を断続的に施す485のような例もある。体部紋様最下段には516のように精製鉢など精製土器紋様と同じ沈線の斜格子紋を施すものがある。口縁部は、433～438のようにいろいろある。433は屈曲部のD字刻みが横に流れて押し引き状をなす。434・437は口縁部内面に部分圧痕が施される。435は屈曲部の刻みに加えて頸部にも刺突紋が施される。焼成は黒色仕上げがほとんどである。

無頸壺は486・499とも細頸壺成形第2段階である。

甕はAdが多く、Aa2はそれほど多くない。Aa1は皆無である。しかし、Adが多い



第82図 SK314出土土器

といっても、法量や外観などによる類型化は難しい。

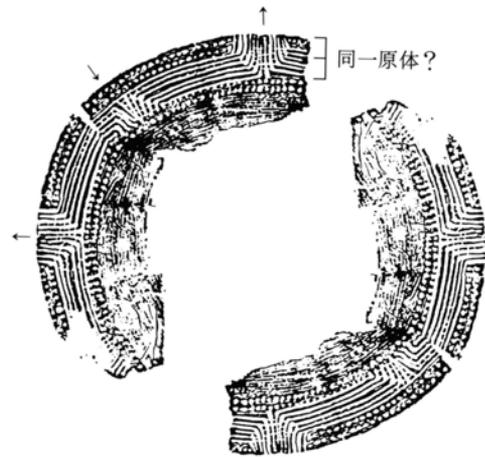
有孔土器は幾つかある（430・478・479）が、いずれも甕底部の焼成後穿孔である。

鉢は、456が円筒状の脚台に大きな円孔を穿つ特殊な形態である。493は口縁部に甕 Ab と同じ刻みを施す。

高杯は421が杯部内面上部に刻み突帯をめぐらす。457は器台状の環状土製品。

**B系統** 壺がほとんど（453・524～532）で、甕は皆無。495は、頸部外面の紋様にB系統らしきがあるだけで、口唇部・口縁部内面の紋様はA系統の強い影響がある。折衷型である。

**C系統** 壺は494が形態のわかる唯一つの例で、他は破片ばかりである。420は頸部外面に直線紋とはいえない条痕を施している。454・496・535は二枚貝刺突紋系で、535は体部中位の重連弧紋である。533はCa系統に特徴的な口縁部。539・540は縄紋帯上に1条沈線を付加している。536は二枚貝刺突を観察できるが、沈線で重方形紋を描く大地形壺のグループに属す。537は黒色研磨壺の体部上半の張る部分(肩部)で瘤状突起が施されている。419は大地形壺の典型。口縁部内面は第83図のようになっている。沈線6条(平行沈線3単位か?)が内と外に交互に開放する(矢印部分)が、外向矢印部分はちょうど突起部分に相当する。



第83図 419口縁部内面拓図  
(反転合成したもの 1:4)

深鉢は、櫛条痕系（431・480・写真図版15—d）と二枚貝条痕系（465）がある。図示してはいないが、口径約50cmの大形品が1点ある。dには底部にモミ圧痕と布目痕がある。

**D系統** 甕には、424のような口縁部の外反が強く体部との境界が明瞭なもの、体部上半にハケメ工具による直線紋(ヨコハケメ)を施す例(466・494)の他に、有段波状口縁甕と呼んだ497・545・546がある。546の口縁部内面にはハケメ工具による波状紋が施されている。

壺は、確定できない。可能性のあるのは、500～503、543などである。500は口縁部内面に瘤状突起を貼り付けるだけでなく、口縁部を強くヨコナデしている。口唇部の刻みは面に対して直交に施されており、口唇部の上下端に別に刻みを施すA系統とは手法が異なる。

543は、頸部に多条沈線紋が施され、下部には刻み突帯2条と棒状浮紋が3本1対で何ヶ所かに加えられる。体部は磨消帯と沈線斜格子紋帯が交互に施される。頸部の多条沈線紋はもともとD系統の紋様要素と考えたほうがよいのかもしれない。

**S D 12**  
(図版34・35)

547は二枚貝刺突重連弧紋をもつCa系統壺。体部下部には粗いハケメ状の条痕が施される。508はII期壺の混入。口縁部内面にはまだ研磨が施されている。

549は櫛描紋*d*類。縦位の直線と弧線が単位を構成している。

550はCa系統の細長頸壺。複合鋸歯紋は沈線を挟んで2段に分かれる。

551～553は甕D。いずれも、口唇部の下方への拡張が目立つ。

556は付加沈線を持たない櫛描紋*a*類。櫛II種*b*類の複帯に、2・2の櫛III種で縦位直線と弧線を加える。いちおう黒色仕上げ。

557は条痕紋系の櫛描紋。Cb系統壺か。558は二枚貝刺突紋系の無頸壺。A系統か。

559は櫛描紋*b*類だろう。2条刻み突帯直上の斜格子紋は沈線。黒色仕上げ。

560はC系統壺の体部中位。鋭い切り込み状の沈線による複合鋸歯紋。

561は縄紋。棒状浮紋上にも縄紋原体による圧痕。

562は櫛II種*b*類を原体とする櫛描紋。紋様構成上は付加沈線の代わりに刺突紋帯が施されている。黒色仕上げ。563は太頸壺A。口縁部近くまで櫛描直線紋が及んでいる。

564はCa系統受口状口縁壺。口唇部と屈曲部突帯に二枚貝押し引き紋。口縁部外面には櫛?条痕の上に羽状沈線紋が施される。

565は体部中央の二枚貝刻み突帯3条。566は頸部外面に細密な条痕を施す壺。C系統に属すか。

567は外面に二枚貝直線紋を施す太頸壺A。口唇部にも二枚貝刻み。

568は甕Ad。口縁部上端の刻みは甕Aa系列の影響。

569～572は深鉢Cb。口縁部内面の刺突はいずれも押し引き状を呈する。571は刺突が羽状に施されている。古い様相である。

**N R 02**  
(図版36～  
図版38)

この遺構は自然力によって形成されたものである。出土土器は、この遺構自体に伴うというよりは、削った遺構・包含層からの二次的な混入であると考えたほうがよい。それでも取り上げるのは、今回の調査では希少なI-1a期A系統の資料を含むからである。

**I-1a期**

壺は598・599・600。すべて黒色仕上げ。甕は579・580・581である。他の系統では、604(深鉢Ca)口唇部に押し引き状の条痕を施している。

**I-1b期**

上記以外。593は太頸壺A。口縁部内面にハケメ工具圧痕の施された棒状浮紋が貼り付けられている。頸部以下は櫛I種*a*類の細密な櫛描直線紋が施される。付加沈線はない。

575は瘤状突起をもつ壺576・577は細頸壺Aa。578は細頸壺成形第2段階。口縁部の波状紋は複帯。縦位弧線は3・3・3の櫛III種。底部の突出が強く古い様相を示す。

582～590は各種甕。585は体部上半3分の2ほどしか二枚貝調整されないが、590は底部近くから二枚貝調整が始まる。

591は内外面とも研磨された鉢。スス附着。

592・593は高杯。593は外面が粗いハケメ調整。脚柱状部を中心にして裾部に(上面から見て)十字方向に沈線が施される。

594は外面に丁寧な研磨を施した鉢。

595・597は甕D。

596は深鉢Cb。

601は波状紋の複帯と付加沈線。金雲母を多量に含みキラキラしている。D系統に含めることができる。

602は二枚貝刺突重連弧紋。黒色仕上げ。

603はC系統だが体部条痕は二枚貝ではなく櫛。体部上半に連環状弧紋。

605は深鉢Ca。

606・607はB系統。606は本遺跡では珍しい直口壺。607は甕。体部外面の調整は櫛II種b類による右上がりに施される。口縁部内面に櫛描紋はないので、単独圧痕を円周4分割の位置に施すと考えられる。

S K 61 I-2期のまとまった一群である。324は口唇部に二枚貝刺突。頸部には2条の沈線。325は無紋の壺。口縁部の外反が強い。326・327は細頸壺Aa。331は口縁部に指ツマミが施されII期に盛行する指頭圧痕紋につながる特徴をもつ。332は甕Ab。333・334は甕Ad。335は甕D。小形で体部の張りも強い。336は粗製の鉢。328は恐らくCa系統壺の末期的形態。沈線が3条で1単位をなしているのと、頸体部界の成形上の段が名残をとどめる。329は体部の二枚貝条痕が雑で、一次調整のハケメが下に見える。

S D 10 317はCa系統の受口状口縁壺。口縁部に複合鋸歯紋を施す。

S K 45 323は甕D。口縁部内面にハケメ工具による波状紋が2帯施される。口唇部には上下端にハケメ工具による刻み、と大きな圧痕が施される

S K 69 339は口縁部内面にハケメ圧痕を施す。

S K 75 340は←方向の断続櫛描紋。

S K 94 342・343はB系統壺の新しい様相を示す。

S K 174 346は甕D。

S K 183 349は無紋の太頸壺A。

S K 186 353は太頸壺Ca。口縁部は微妙に受口状をなす。体部上半には連弧紋の代わりに山形紋が施される。

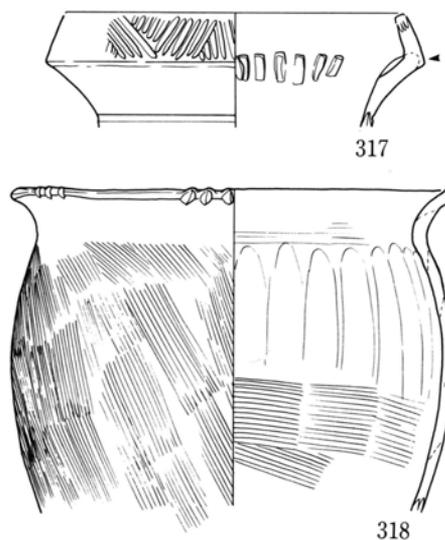
S K 188 358は混入。

S K 210 363~365は甕D。364はハケメの上に擦痕がある。

S K 230 366は太頸壺Ca。頸部紋様は、下向きのコ字重ね。他はCa系統通有の調整・施紋。

S K 233 368は混入。II-2a期の磨消線紋系壺。

369は口縁部の垂下する畿内第II様式壺と共通する形態。口縁部内面にはハケメ工具圧痕のある棒状浮紋が3本1対で円周4分割の位置に施される。黒色仕上げ。形態的にはI-



第84図 SD10出土土器

1 a 期に含めたい。

- S K 239 370は甕 Aa 2。体部には縦位に何分割かする直線が施される。口縁部外面の指オサエ痕は非常に顕著。
- S K 258 379は甕 Aa 1。
- S K 271 381はCa系統か。
- S K 272 382は細頸壺 Aa の口縁部を倒立させて脚部とした高杯。
- S K 283 383は太頸壺 B の典型。
- S K 338 384は大きな円孔を円筒形の脚部にもつ高杯。脚部の裾は突帯状に突出しハケメ工具による刻みが施される。
- S K 124 390はCa系統壺の新しい部分か。ハケメ調整を残したまま施紋されている。斜格子紋・連弧紋の下にはいちおう条痕が施されている。391は深鉢 Cb の模倣か。
- S K 199 394は深い形態の精製鉢。黒色仕上げ。
- S K 220 401は甕 D。口唇部には斜格子状の刻み。口縁部内面にはハケメ工具の波状紋。
- S K 230 404は縄紋壺。406は太頸壺 C の口縁部。珍しく外面にハネアゲ紋が施される。407は甕 B。口縁部内面には櫛描紋が施される。体部外面は櫛 I 種 A 類の右上がり調整。
- S K 240 408は二枚貝刺突連弧紋。重連弧紋かもしれない。
- S K 275 415は小形のCa系統壺。複合鋸歯紋と連弧紋は必ず施される。  
609・610は有段波状口縁甕。610は口唇部にも刻みが施される。  
611・612は甕 B。

包含層 613・614・620・621はおそらく I - 1 a 期に属す。620は B 系統の中で盛行する大形鉢の祖形である。体部上半は二枚貝直線紋、中位は研磨、下半は二枚貝条痕だが、地にはハケメが見える。613は外面に棒状浮紋が縦位と横に弧状に貼り付けられている。浮紋上には二枚貝背面圧痕がある。口唇部は二枚貝腹縁の押し引きだが、浮紋のあるところには二枚貝背面圧痕が施される。内面は横方向の条痕とそれに直交させて半截管状工具によって直線が引かれる。621は口唇部に条痕と円周 5 分割の位置に指頭圧痕が施される。

618は太頸壺 Ca。体部には連弧紋ではなく二枚貝腹縁の波状紋が施される。

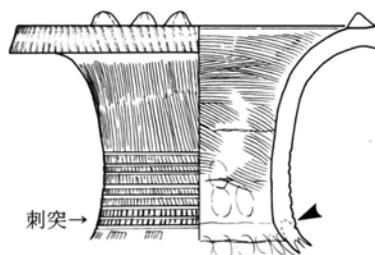
627は頸部に多条沈線を施す細頸壺である。D 系統か。

632~636は甕 D とその折衷型である。633は底部が厚手で成形は  $\bar{a}$  なので、A 系統に属す。

635は有段波状口縁甕。636は体部にハケメ工具で直線紋と波状紋を施す。口唇部は垂下している。

319は口縁部内面に瘤状突起を施す壺 D。口唇部はハケメ工具の浅い圧痕が施される。頸部の多条沈線下部には刺突が施されている。

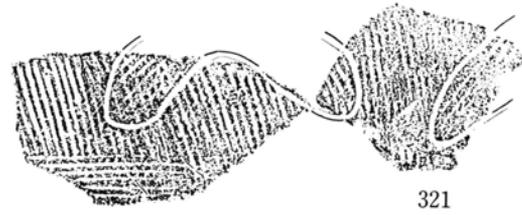
320・321はどちらも Ca 系統の紋様である。  
320は X 状に二枚貝条痕が施された後まわり



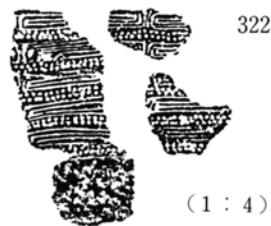
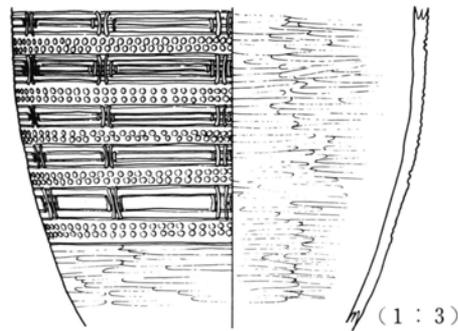
第85図 コブ付太頸壺 (D系統)

を沈線で囲む。

322は遺跡で採集した精製鉢である。横型流水紋を櫛刺突紋で区切る大地形壺の典型的な紋様構成を示す。紋様部以外は内外面とも研磨を施す。



第86図 続条痕紋系土器



第87図 Ca系統?精製鉢

## 石器

珍しいものとして次の2点がある。

1は唯一磨製穂摘具の可能性のある石器片である。

2は打製大形尖頭器である。サヌカイト製。

## 石鏃

有茎五角形系は7割以上で主体を占める。無茎にも五角形はあるが、比較できるほどの点数はない。三角形鏃は1点ある-3。無茎は他に1点ある。有茎五角形には、側縁の形状から、

**a類**：先端から緩やかなカーブを描いて明確な五角形をなさないもの-4

**b類**：側縁がほぼ直線的な五角形をなすもの-6・10

**c類**：側縁が内彎するもの-11~18（他に1点ある）

に区分できる。

そして、c類には五角形の上部二角の上下で強く内彎させて角を強く突出させるもの-12・13・14・17・19がある。また側縁の剝離を鋸歯状にする例-13・19がある。

茎部は、五角形鏃の場合、下部に表裏両面から「ハ」字に大きな剝離を施すことによって作り出すのが普通である。その点で5の茎部に細かい剝離の集中することは、これが茎部作出手法において別のグループに属することを示している。

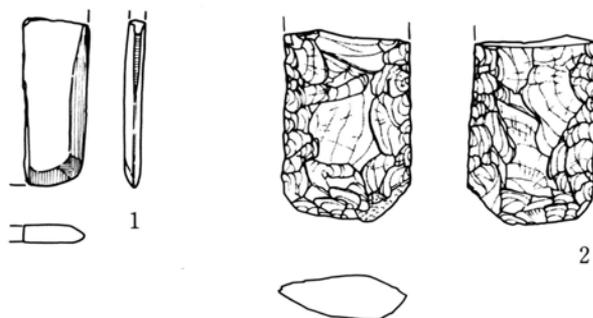
石鏃の大きさでは、五角形鏃のなかでバラツキがある。3cm未満の15から6cm以上の18までである。こうした大きさの違いは当然重量の違いとなるのであり、対象の違いにも関わるものと推測する。

## 石錐

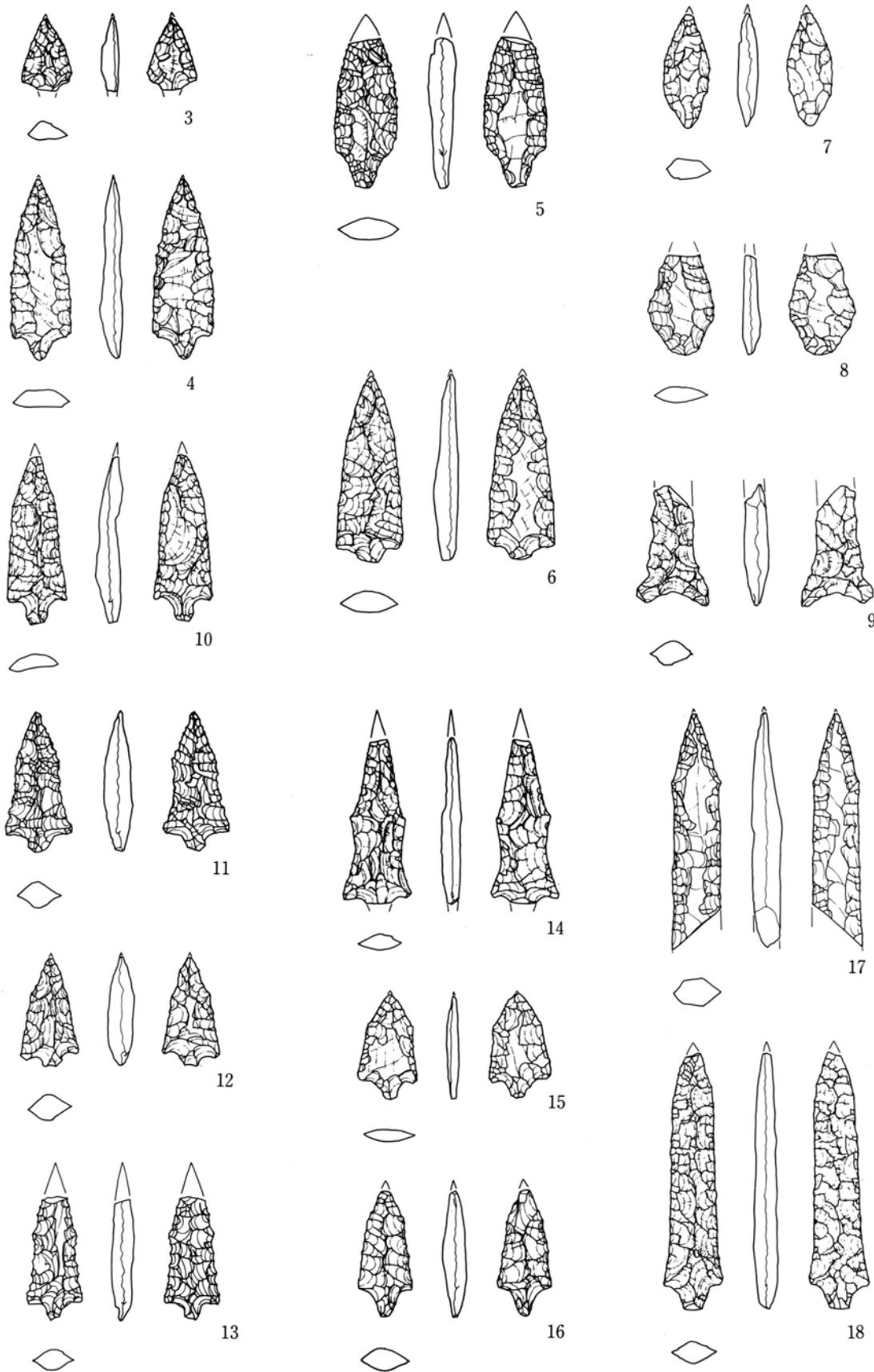
21~24は石鏃の転用でおそらく回転運動の効率を重視した機械的な穿孔に使用されたものであり、穿孔対象には有孔土器の底部孔や磨製穂摘具の紐孔など硬質の材を対象としたのであろう。25~27は指で摘んで使用する通有の石錐である。

## 磨製石斧

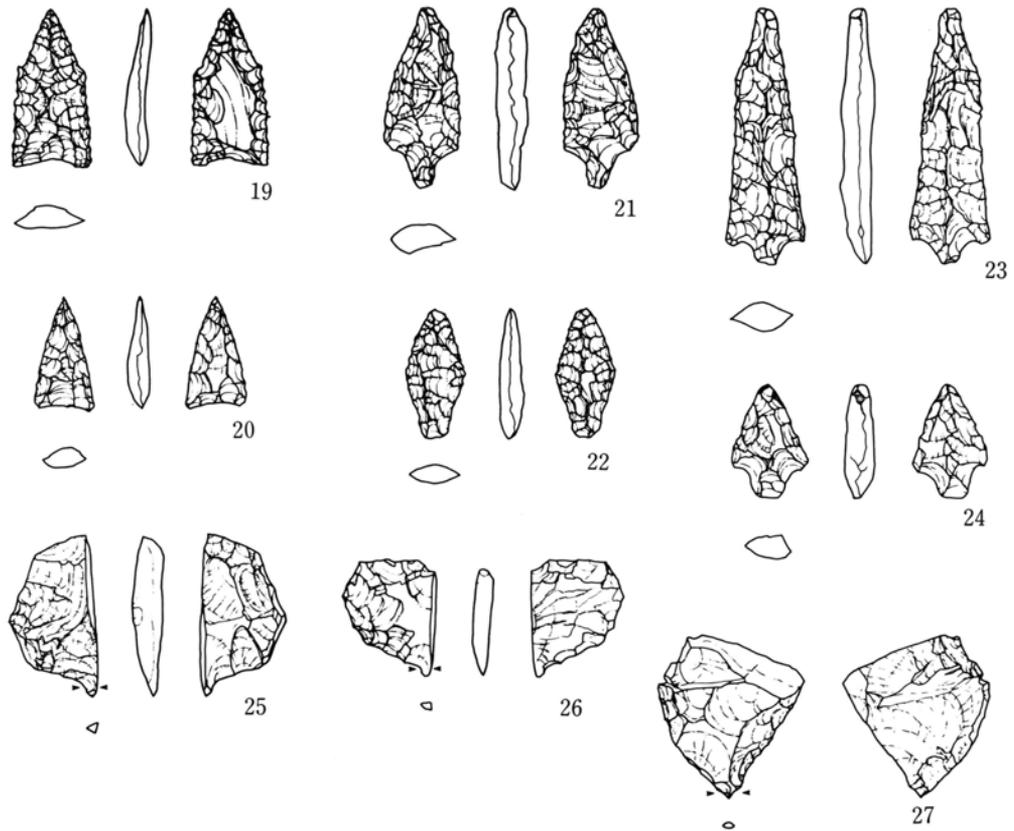
加工斧・伐採斧がある。加工斧は幅2.5cm、長さ3.5cm前後の一群と長さ6cm程度で幅が2.5cmと5cm弱のものがある。こうした長さや幅にみられるある程度の規格性は、装着すべき柄の大きさにも規制されているのであろう。伐採斧は多くが折損しており、完全なものは少ない。



第88図 石器 (1) (1:2)



第89図 石器 (2) (2 : 3)



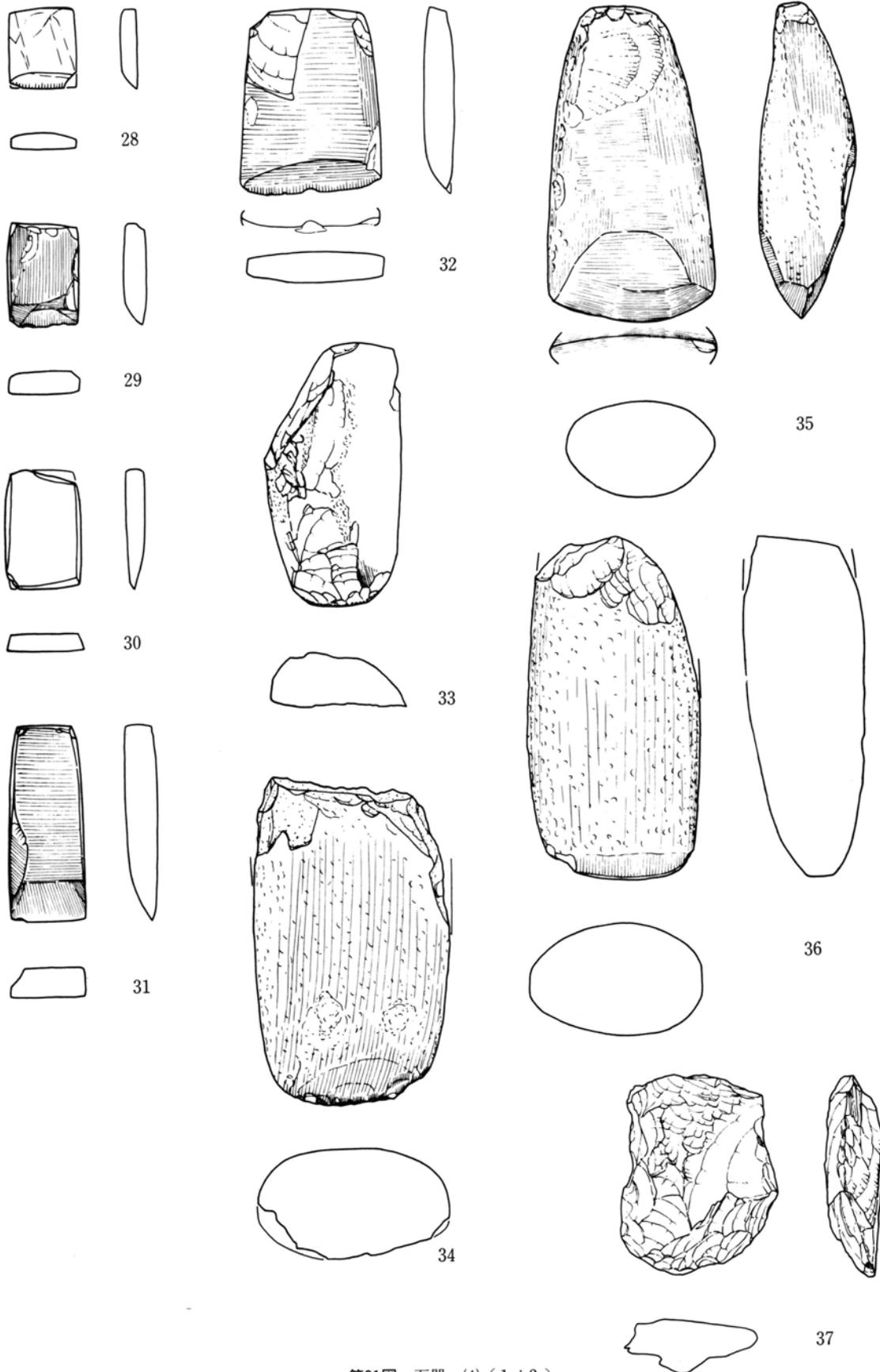
第90図 石器 (3) (2:3)

35もこれで本来完形品というわけではなく、おそらく再調整が加えられて再生されたものであろう。34・36は刃部が潰れており、折損後叩き石に転用されている。

(図版41)の38・39は伐採斧再生の一過程を示すものであろう。同40・41はクサビ状石器に転用されたものか。

42は叩き石に転用されている。

その他 (図版42・43) 43～47は刃部をもつ不定形の石器である。いずれも河原石から剥ぎ取られた表皮を残す大形剥片を使用している。45～47は刃部に細かい剝離が集中してツブレている。45はツブレが小さな面を形成している。



第91図 石器 (4) (1:2)

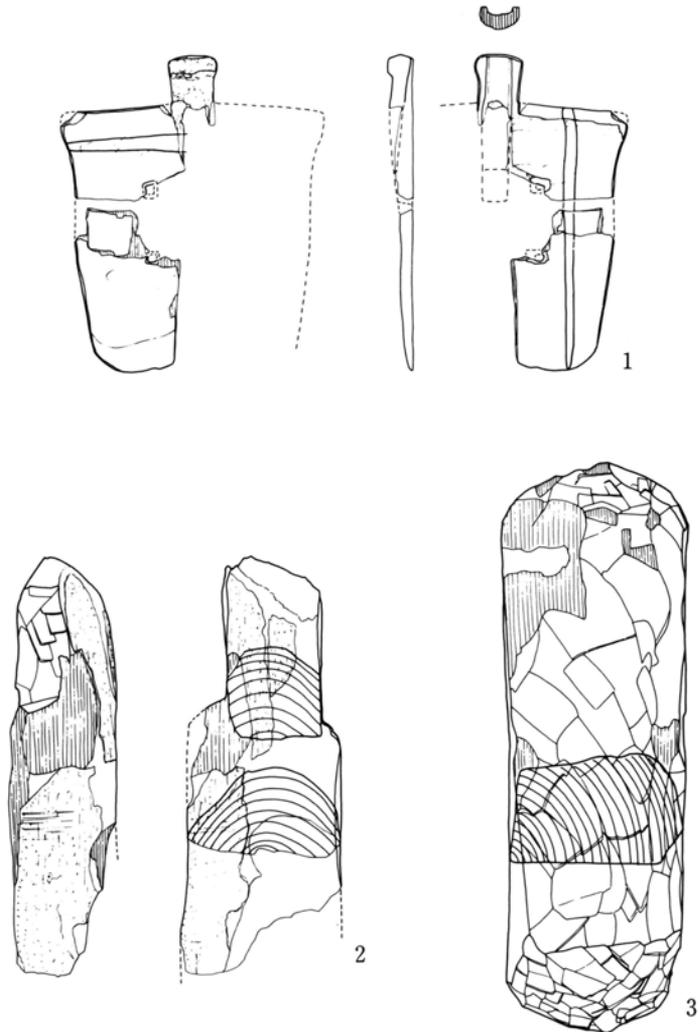
すべて SD04からの出土である。

1はスコップ状着柄スキの身部である。残存長25cm、幅12cm。長さ4cmの着柄軸から身部にかけて斜めに幅2.1cmの溝が穿たれている。身部の残存部中央には2ヶの1cm角の方形小孔が4cmの間隔で穿たれており、これが左右一対で柄の緊縛用であるとすれば、おそらく身の3分の2まで柄がのびて、身に穿たれた孔に先端をはめ込むようになっていたものとする。カシ。

2は建築材の組み合わせの部分であろう。樹皮が残存している。

3は原材である。

このほかミカン割状の原材や木端が出土している。

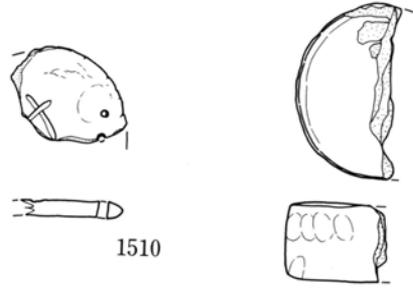


第92図 木器 (1:6)

土製品

1510はX状の紋様が一部認められる有孔土製品である。孔は2つ有るので、蓋かもしれない。

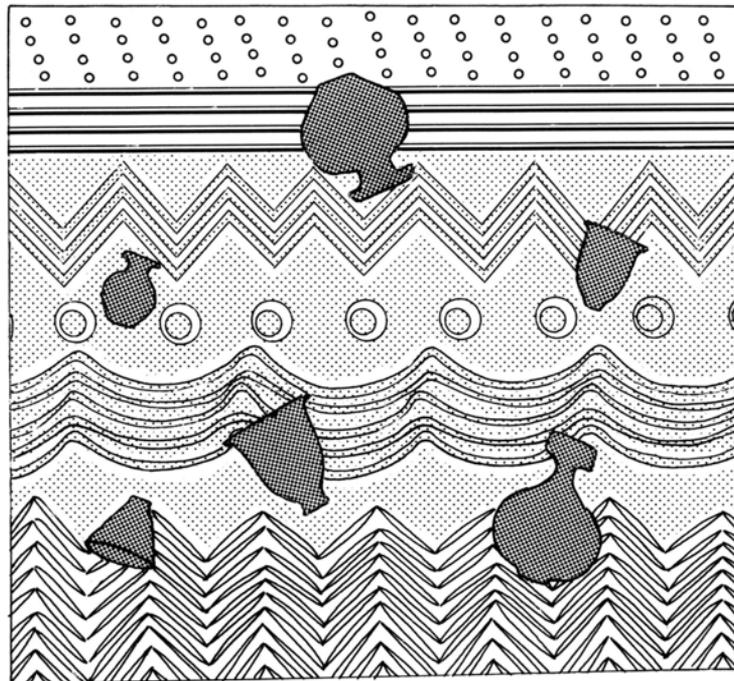
1511は経8cmを測る盤状土製品。二次火熱を受けている。



1510

1511

第93図 土製品



## II 期

### 遺 構

S B 01 (図版 6) 一辺 335cm の方形プラン。床面直上には炭化物が薄く堆積していた。掘形は深さ約 10cm 残存。SD03 に切られる。

S B 02 (図版 6) 一辺 505cm を測る。床面の確認ができたにとどまる。掘形は深さ約 10cm 残存。覆土からは若干土器片が出土したにとどまる。

S B 03 (図版 6) 規模は不明。一辺 350cm を測る方形プラン。掘形は深さ約 10cm 残存。周溝や柱穴は検出できていない。

S B 04 (図版 7) 一辺約 360cm を測る方形プラン。掘形は深さ約 20cm が残存。支柱穴を 1 ケ検出したにとどまる。

S B 06 (図版 8) SB07 を切る。方形プランだが、規模は不明。周溝がめぐる。掘形は深さ約 20cm 残存。

S B 07 (図版 8) SB06 に切られる。方形プランを呈する。

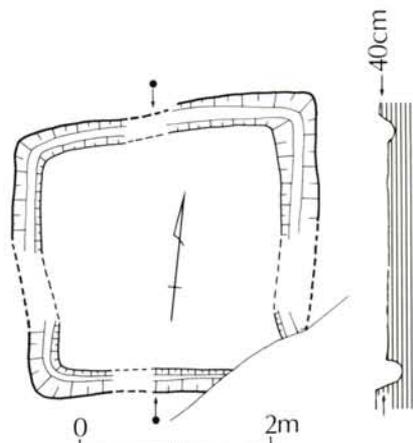
S B 08 (図版 8) 長軸 320cm、短軸 300cm を測る小形の方形プラン。柱穴は未検出である。掘形は深さ約 15cm 残存。周溝が全周する。

S B 09 (図版 8) 方形プランだが、規模は不明。SB10 に切られる。掘形は深さ約 10cm 残存。

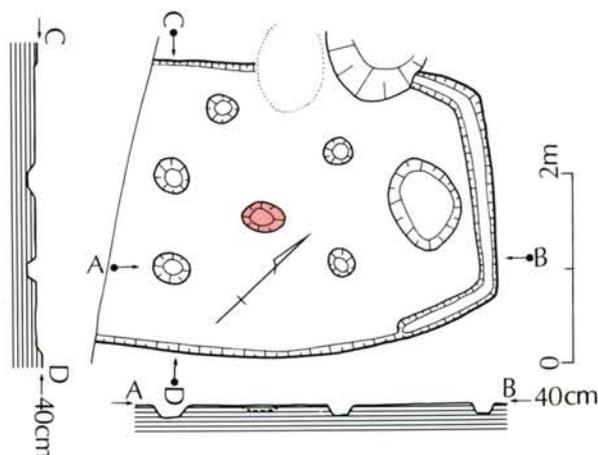
S B 10 (図版 8) 周溝のみの検出にとどまる。方形プラン。

S B 12 (図版 9) プランは楕円形をなし、長軸 415cm、単軸 325cm ぐらい。掘形は深さ約 10cm 残存。床面直上には多量の土器が遺棄されていた。痕跡程度に焼土面が認められた。

S B 13 (図版 9) プランは胴張りの長方形である。長軸 400cm 以上、単軸は 300cm を測る。掘形はほとんど残存せず。支柱穴は 4 ケで、中央ビットは炉である。床面直上には細頸壺が潰れた状態で遺存していた。



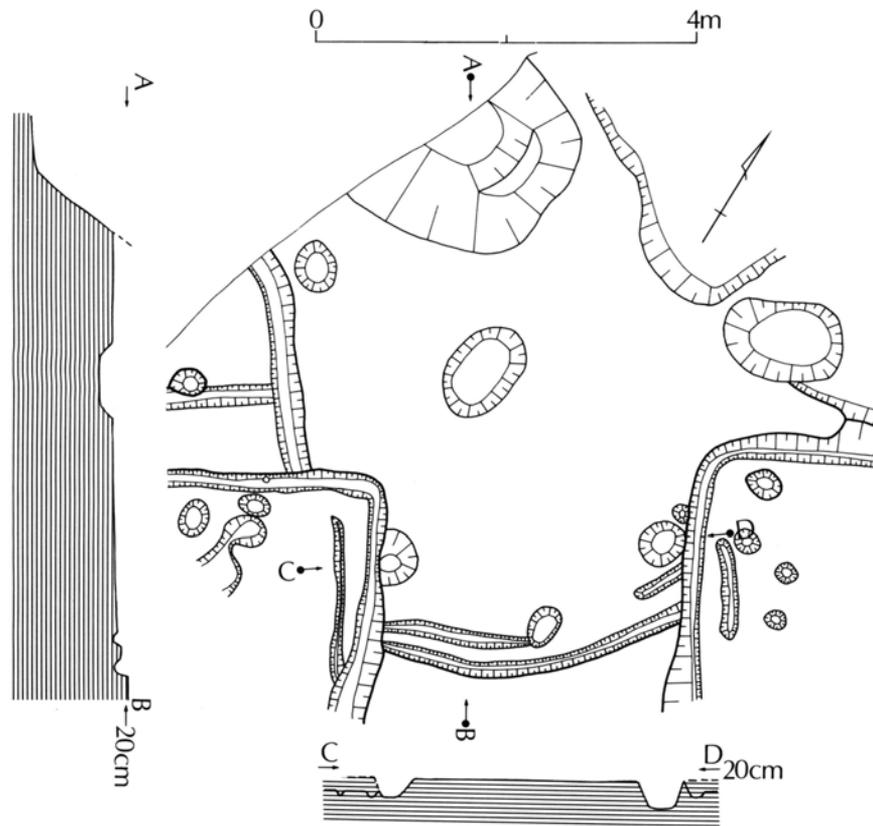
第94図 SB08プラン・セクション (1:80)



第95図 SB13プラン・セクション (1:80)

S B 14 (図版9) 一辺 440cm を測る方形プラン。床面には炭化物が薄く認められた。土器は床面から浮いて出土した。

S B 18 (図版9) プランは径約 650cm の円形である。支柱穴は 3 ケ検出した。中央ピットは焼土面を形成しないので炉とするには問題がある。南部では周溝が 2 条となっており、拡張の行われたことを示す。下層はわりとまとまった土器の出土をみたが、上層には細片を中心とした集中廃棄があった。



第96図 SB18プラン・セクション (1:80)

S B 20 (図版6・10) SZ01 (SD05) に切られる。プランはやや胴張りの長方形で、短軸 475cm を測る。掘形は深さ約 10cm 残存。

S B 21 (図版10) プランは 450cm × 425cm の不整形円形をなす。掘形は深さ約 20cm 残存。支柱穴は 4 ケ検出した。

S B 22 (図版10) 一辺 350cm を測る方形プラン。掘形は深さ約 10cm 残存。両コーナーに柱穴状のピットがあるが浅い。

S B 23 (図版10) 方形プランだが、部分の検出で規模は不明。掘形は深さ約 5cm 残存。

S B 24 (図版10) 方形プラン。周溝のみの検出にとどまる。規模は不明。

S B 25  
(図版10・11)

2回拡張が行われる。

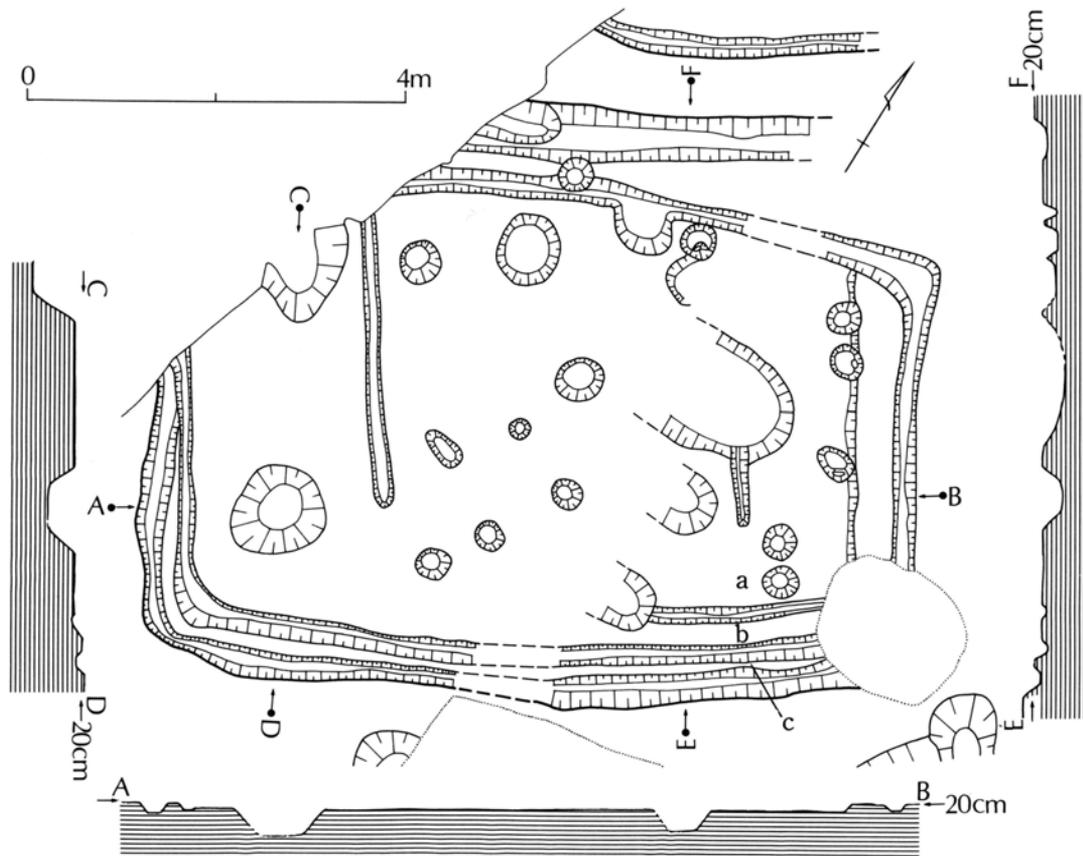
aは長軸500cm、短軸450cmを測る西辺の長い台形気味の長方形プランである。北東短辺には周溝はめぐらない。

bはaの大幅な拡張(建て替え)で長軸770cm、短軸520cmを測るやや胴張りの長方形プランとなる。

cは南東長辺から南西短辺にかけて40cmほど拡張するだけである。

掘形は深さ約20cm残存。

本住居の時期はII期としたが、上層にはIII期の土器を含む包含層があり、北西辺北側の幅広い周溝はそれに伴うものかもしれない。

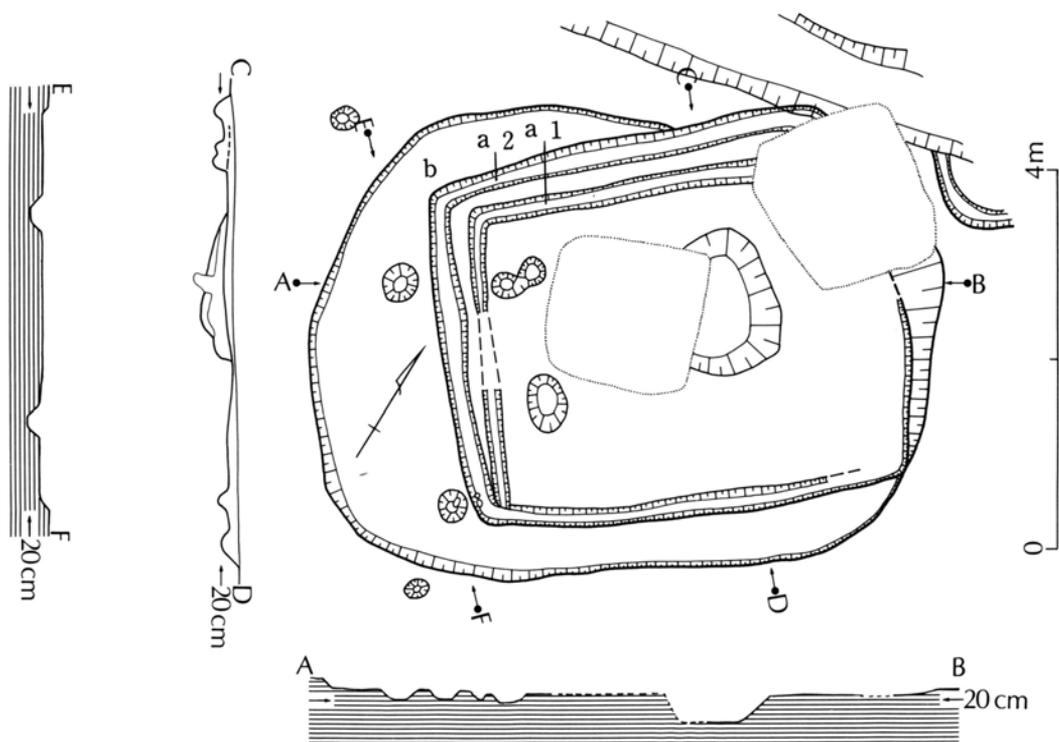


第97図 SB25プラン・セクション (1:80)

- S B 26 (図版10) 方形プラン。周溝のみの検出にとどまる。規模は不明。  
 S B 32 (図版11) 拡張(建て替え)というよりは、2つの住居跡が重複していると見たほうが良いかもしれない。

aは内側の周溝をa 1、外側の周溝をa 2とする。a 1は長軸440cm、短軸350cm、を測る長方形プランを呈する。a 2は長軸480cm、短軸400cmを測る北東短辺のやや長い長方形プランを呈する。掘形は深さ約5cm残存。

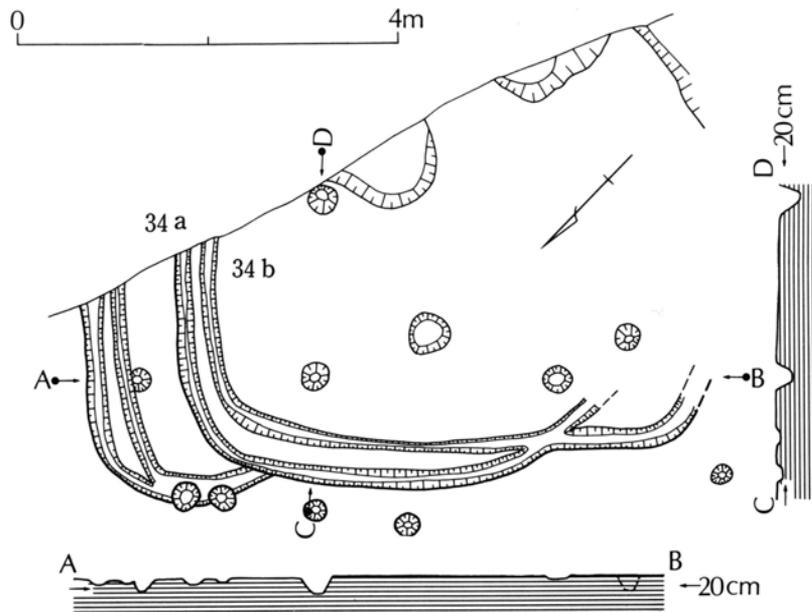
bは、胴張りの隅円長方形で、南西短辺の張り出しが強い。長軸660cm、短軸490cmを測る。掘形は深さ約15cm残存。柱穴は2ヶ検出した。周溝は土層セクションでは確認できなかった。



第98図 SB32プラン・セクション土層セクション (1:80)

- S B 33 (図版11) SB32bよりも不整形なプランを呈する。床面直上や覆土から多量の土器が出土した。土器の廃棄に惑わされて、床面や柱穴、周溝の検出が十分にできなかった。掘形は深さ約10cm残存。

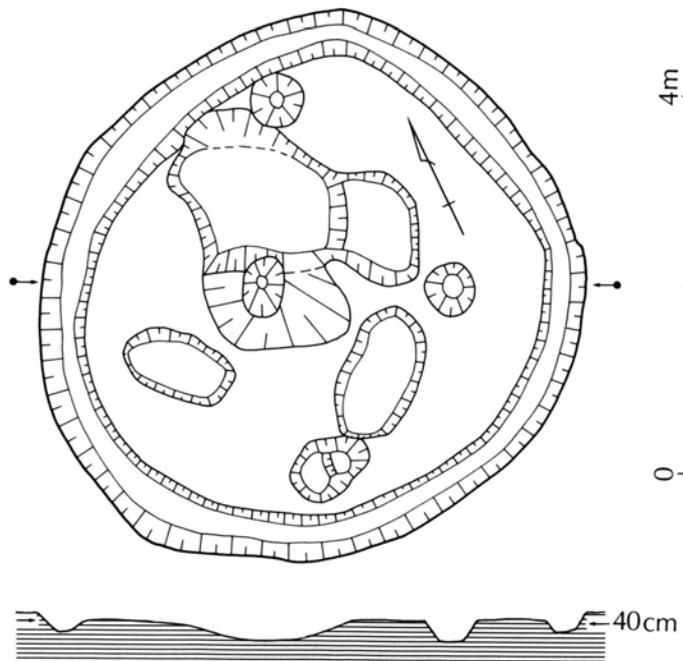
- S B 34 a 周溝のみの検出であり掘形は残存せず。周溝の切り合いは34aが拡張を示すようである  
 34 b (図版11) が、34bは北部で周溝がうまく平行しているけれども、南部では交差して拡張の状況ではない。異なる住居が偶然重複したのかもしれない。出土土器はなく、包含層の状態から時期を推定した。



第99図 SB34 a・b プラン・セクション (1:80)

SB 36  
(図版11)

プランは不整形で、直径は590cmを測る。周溝は幅40cmと広く、また深い。掘形は深さ約10cm 残存。支柱穴は3ヶ検出したが並びは悪い。床面で検出した土坑には炭化物が多量に詰まっており、水洗選別をした結果炭化米が多量に出土した。



第100図 SB36 プラン・セクション (1:80)

SB 37  
(図版11)

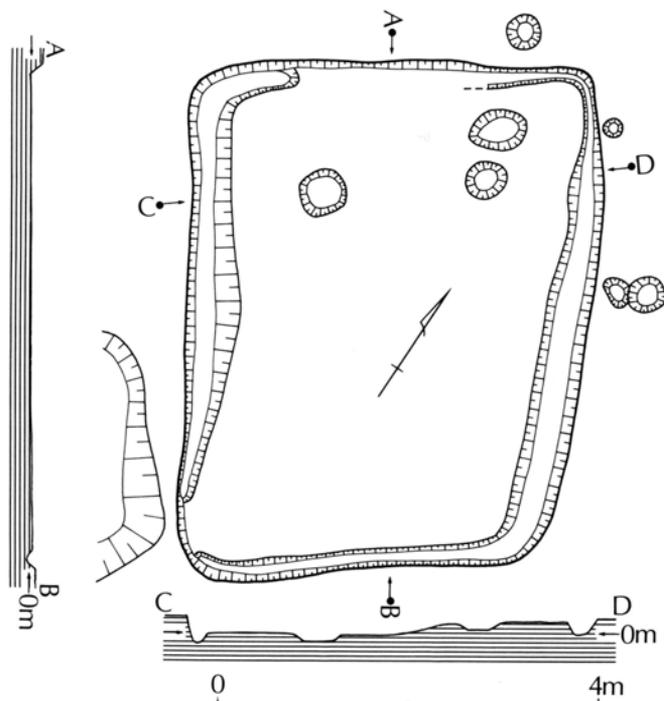
長軸540cm、短軸350cmを測る隅円長方形プランを呈する。周溝は全周しない。柱穴などは不明。掘形は深さ約10cm 残存。

**S B 38** (図版11) 北辺のやや長い台形気味の隅円方形プランを呈する。中軸線で430cmを測る。周溝が一部残存。掘形は深さ約10cm残存。

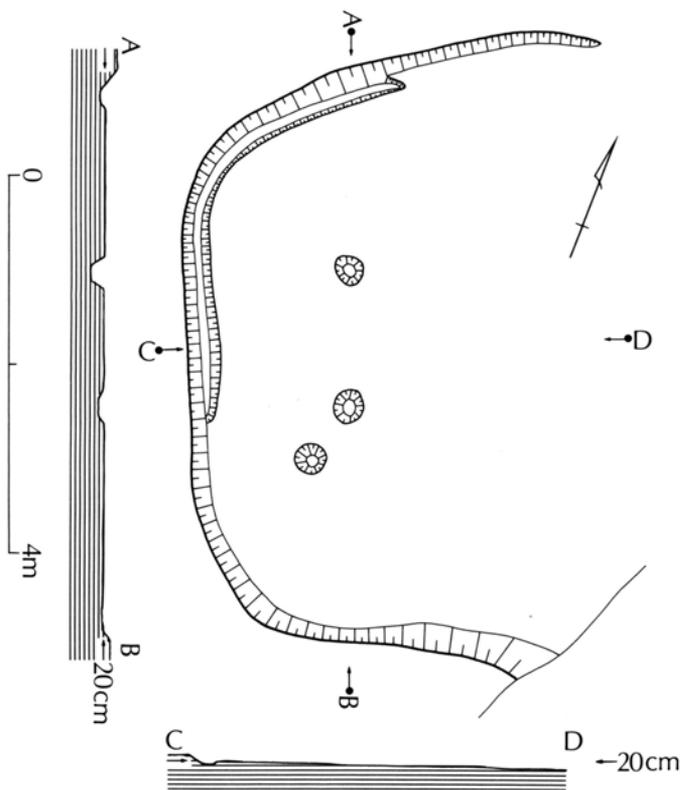
**S B 58** (図版14) 長軸530cm、短軸425cmを測るやや歪んだ長方形プランを呈する。掘形は深さ約20cm残存。床面は東から西へ少し下降しており、全くの平坦というわけではない。周溝は断続しながらめぐる。北東短辺側でピットを2ヶ検出したが、どちらも浅く支柱穴とはいえない。

**S B 60** (図版14) 薄い炭化物層を追及した結果としての掘形の検出であった。深さ約10cm残存。規模は不明。

**S B 61** (図版15) 東半分は現代の攪乱(畑の土取りか)によって削平されたため検出できなかった。残存部で一边620cmを測る。床面直上には土器が幾つか遺棄されていた。周溝が一部に検出できたが、ピットは浅く柱穴かどうか不明。



第101図 SB58プラン・セクション (1:80)



第102図 SB61プラン・セクション (1:80)

**S B 63**  
(図版15) SB62に切られる。プランは不明。周溝のみの検出にとどまっており、掘形は残存してない。

**S B 65**  
(図版15) 周溝のみの検出にとどまっており、掘形は残存していない。胴張りの隅円長方形プランを呈し、長軸650cm、短軸 435cmを測る。

**S B 67**  
(図版17) 一辺 580cmを測る方形プランを呈する。掘形は深さ約 10cm残存。床面直上には土器が遺棄されていた。

**S B 68**  
(図版18) 部分の検出で、プランは不明。掘形は深さ約10cm 残存。

**S B 69**  
(図版18) プランは不整形。掘形は深さ約10cm 残存。

**S B 71**  
(図版19) プランは円形を呈し、直径800cmぐらゐの規模である。床面は遺棄された土器群や炭化物の追跡から把握できたけれども、周壁・周溝は土層セクションでの確認にとどまった。柱穴は検出できなかった。

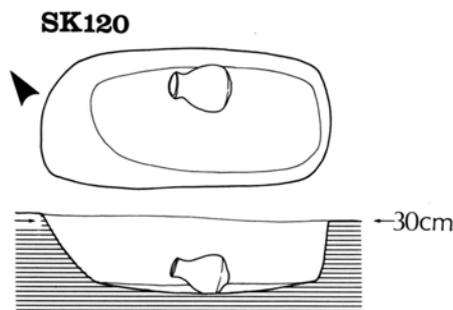
**S D 09**  
(図版10) SB22に近接して存在する。長さ 500cm以上、幅は140cm、深さは約30cm。II期の特徴を示す良好な土器群が出土した。性格などは不明である。

**S K 03**  
(図版 6) II期で唯 1 点の円窓付壺が出土した土坑。

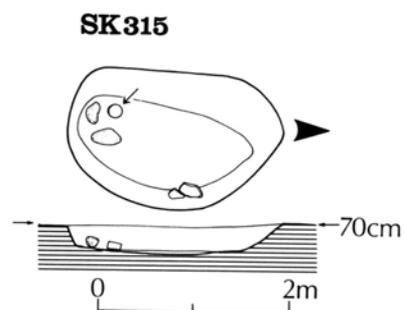
**S K 120**  
(図版11) 長軸130cm、短軸80cm、深さ 40cmの箱形を呈する土坑で、底面に接して口縁部を意図的に打ち欠いた壺が横になって出土した。埋土は単一層で、とくに埋められたというような形跡は認められなかった。

**S K 315**  
(図版17) 上面に線刻の施された脚状土製品が棒状礫とともに、本土坑の南端壁寄りに据え置かれた状態で出土した。

土坑は長軸約115cm、短軸約70cm で、深さ約15cm を測る。底面のほぼ平坦な形状を呈する。



第103図 SK120土器出土状態

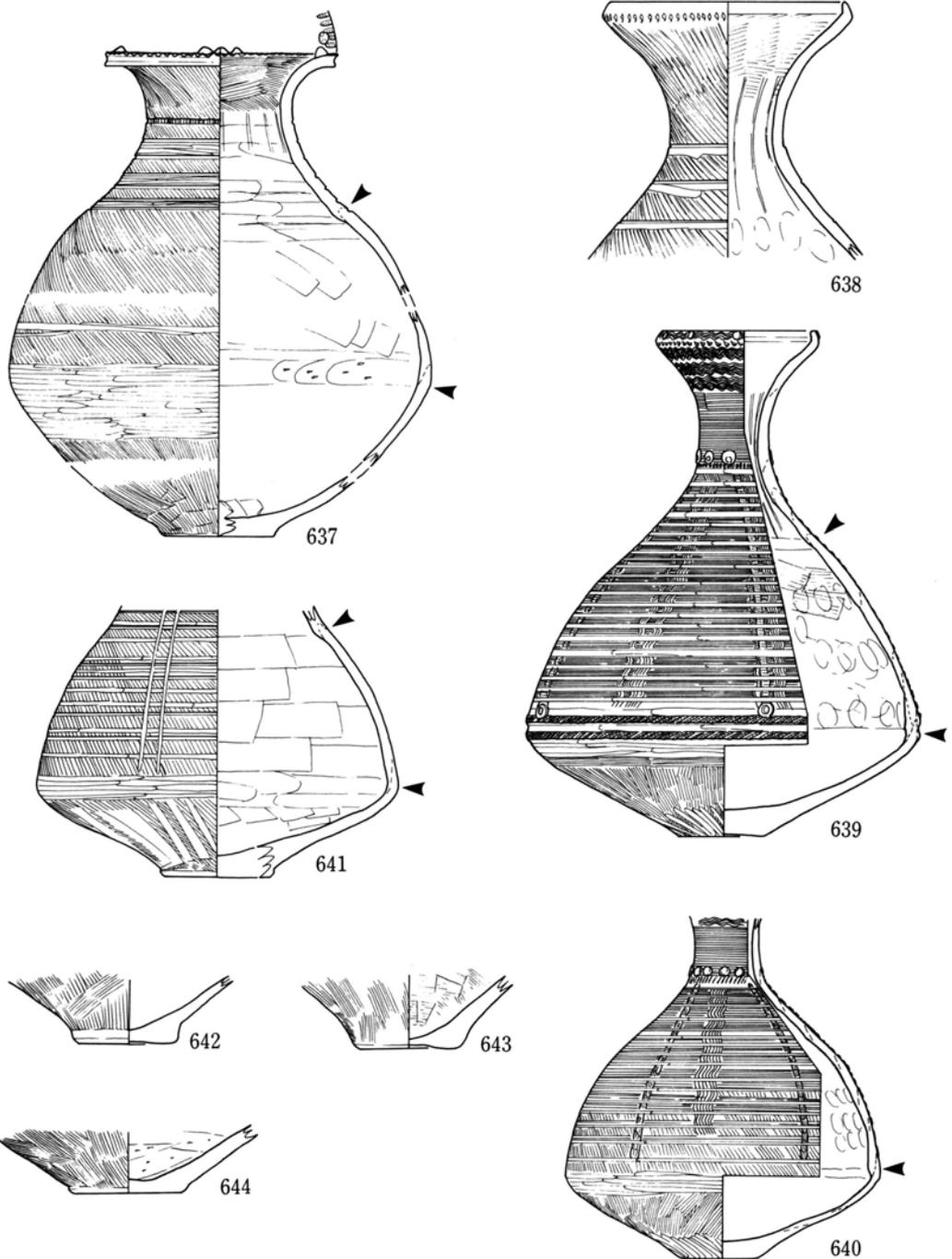


第104図 SK315土製品出土状態

遺物

土器

S B 12 637は口縁部内面に3ヶ1単位の瘤状突起が円周4分割の位置に施され、外周にハケメ工具による刻みを施す。体部は成形第1段階接合面がかなり上方にあって球形化している。施紋は磨消ハケメ帯がかなり上方に圧縮されている。

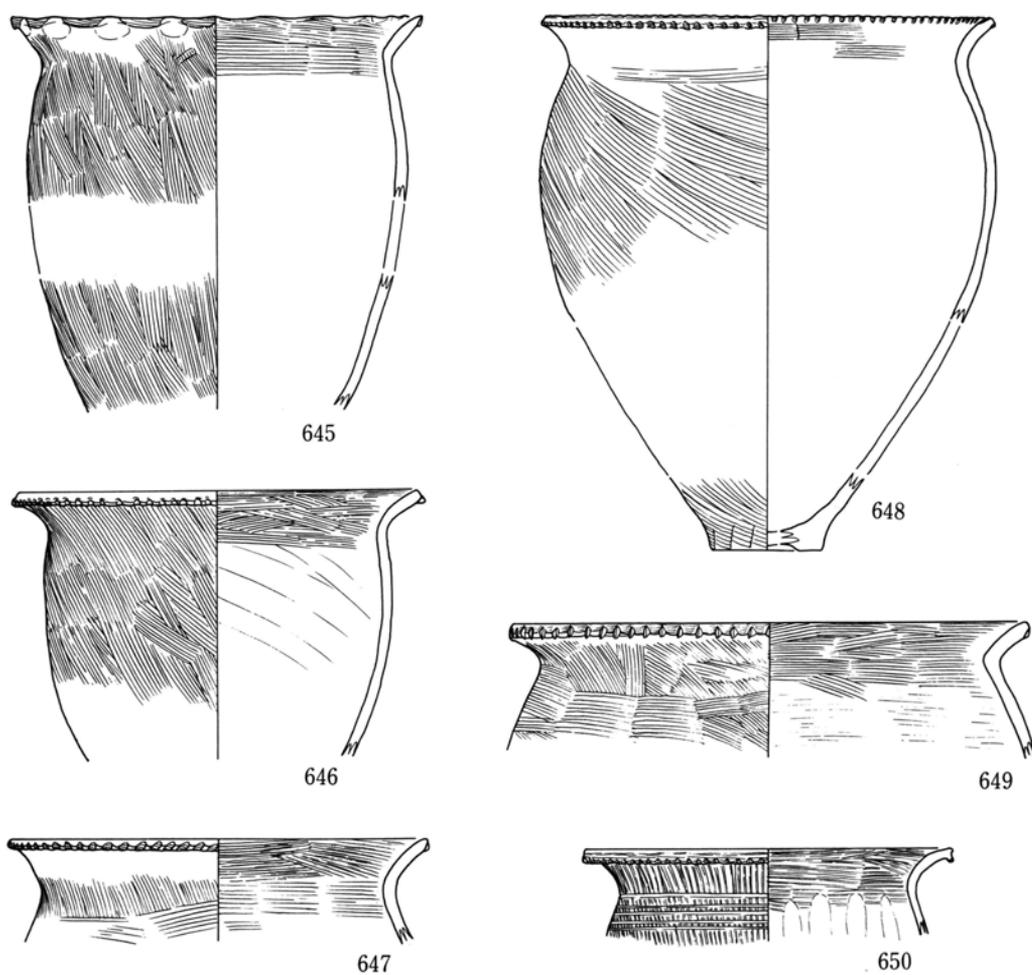


第105図 SB12出土土器 (1)

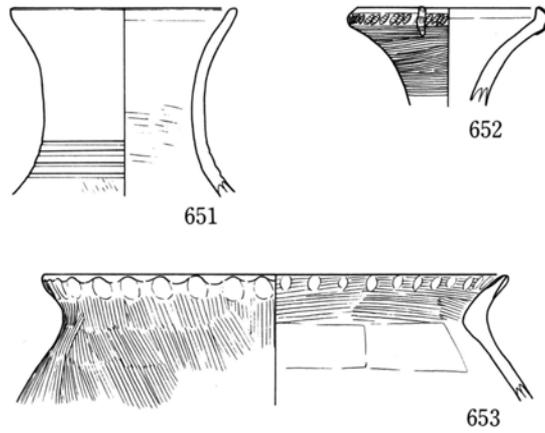
638～641は細頸壺 Aa。638は施紋が磨消ハケメ帯よりさらに省略的で沈線に磨消線を平行させているだけである。粗いハケメが特徴的である。639は櫛描紋f類で細密な紋様構成を特徴とする。黒色仕上げ。640は紋様構成は639と同じであるけれども、黒色仕上げではない。639・640の施紋で特徴的なのは、I期には円形浮紋列や棒状浮紋列であったのが、ここでは粘土紐垂下となっている点である。表現を大きく変更しない範囲での手法上の簡略化である。641は沈線→磨消線→縦位磨消線という施紋順序である。壺底部642・643はやや上げ底を呈する。

645は甕 Af(指頭圧痕紋系)である。646～649は口唇部の刻み方や体部上半のハケメ調整が断続ではあるが650のような甕Dと共通しており、純粹に固有器種とはいいがたい。648は口唇部上下端にハケメ工具による刻みが施されるだけでなく、底部もドーナツ状上げ底になっている。

650は甕D。口唇部が垂下し、粗いハケメが施されている。胎土にも金雲母が多量に含まれており、明らかに伊勢湾西岸部からの搬入品である。II-1期。



第106図 SB12出土土器 (2)



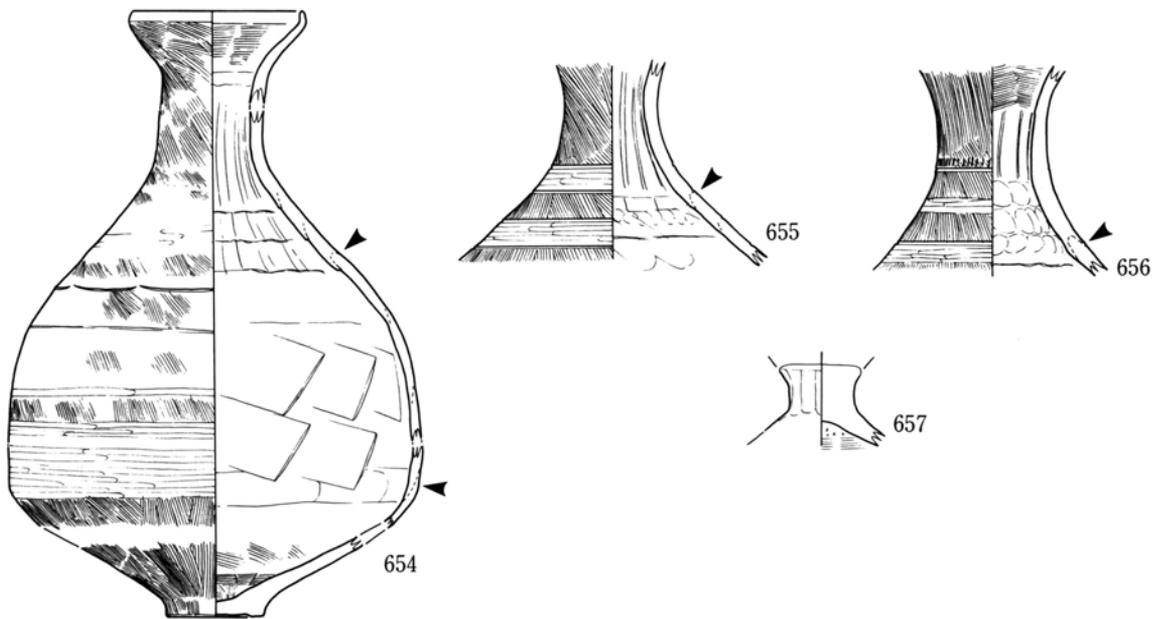
第107図 SB14出土土器

SB14 651は頸部に沈線を4条施す。口縁部はやや内傾する。円窓付壺かもしれない。652は細頸壺 Aa。口縁部の櫛描紋は脱落している。653は甕 Af。

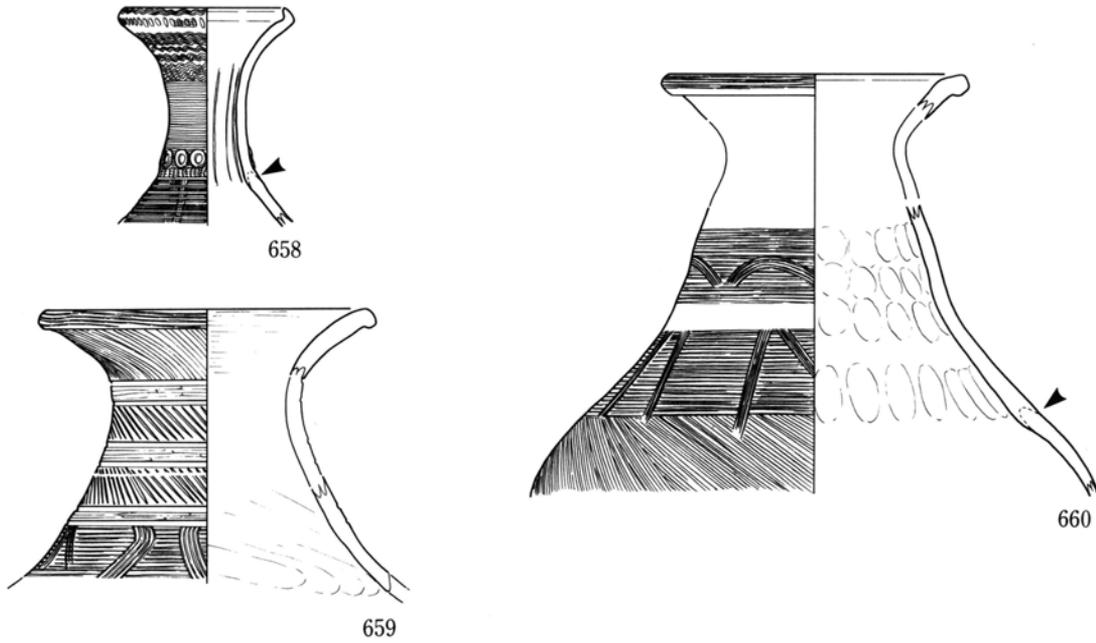
SB18 上層と下層に分かれる。

上層 細頸壺 Aa のハケメ磨消帯系3点(654~656)と蓋?が1点ある。他は小片ばかりである。

654はハケメ磨消帯構成がくずれている。沈線は整った連続性はみせず、断続的である。磨消帯も整った構成をなさず、磨消線紋との中間的な紋様構成となっている。底部はドーナツ状上げ底である。655はハケメ磨消帯。656は付加沈線が脱落している。II-2期に属す。



第108図 SB18出土土器 (1)



第109図 SB18出土土器 (2)

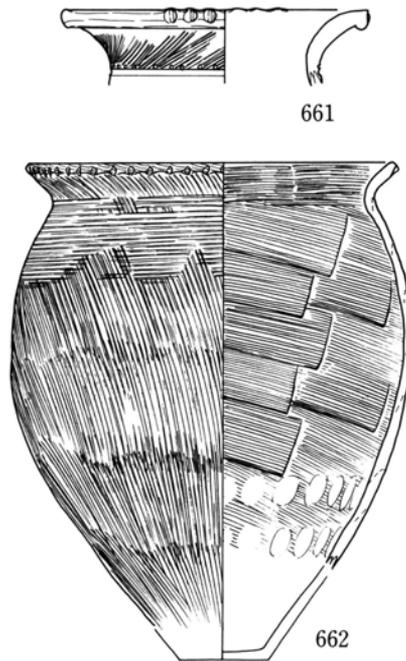
下層 658は細頸壺 Aa。櫛描紋 *f* の典型である。体部の縦位施紋には波状紋と粘土紐垂下が施されている。

659はB系統壺である。頸部には斜位沈線と組み合わせた付加沈線磨消帯が施されている。櫛描紋帯には縦位弧線が施される。櫛II種b類。660もB系統壺。櫛描紋は櫛II種A類による。体部も同様の原体による調整を施す。頸部上位の櫛描紋帯と櫛描連弧紋の組み合わせは、沈線連弧紋を櫛描紋に置き換えた手法であり古い様相である。II-1期。

SB20 661はB系統壺の口頸部である。

口唇部には3ヶ1対の部分圧痕が円周4分割の位置に施される。頸部外面は櫛II種A類による条痕風の施紋がある。頸部沈線の直上には刺突紋が施される。黒色仕上げ。

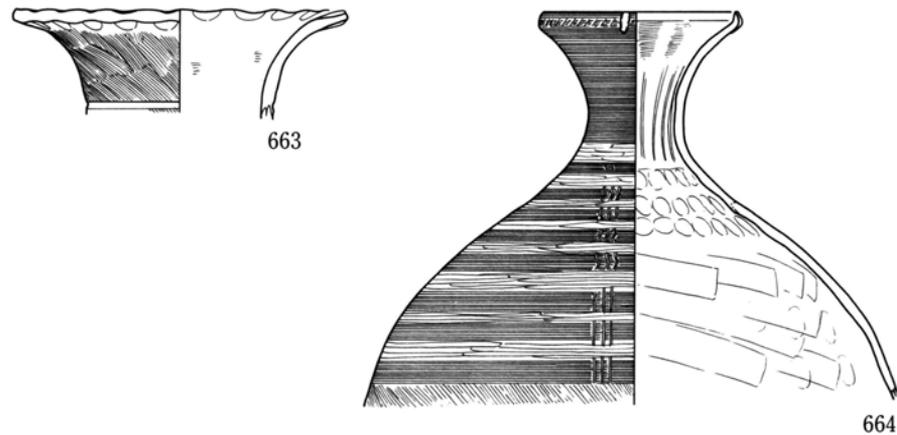
662は甕D。体部上半にハケメ工具による直線紋が施される。



第110図 SB20出土土器

S B 21 663は太頸壺A指頭圧痕紋系の典型。口縁部は無紋で頸部に沈線が施される。

664は細頸壺Aa。口縁部屈曲部の刻みは鋭い切り込みである。体部紋様は櫛描紋e類で、櫛描直線紋→櫛III種(2・2・2)による縦位波状紋(下部は直線紋になる)→研磨という順序で施される。付加沈線は脱落している。II-1期。



第111図 SB21出土土器

S B 32 土器群は上層と下層に分かれ、上層はさらに2群に分かれる。

上層第1群 671・672の2点である。時期はIII期に属す。偶然同一面で検出しただけで本来は別遺構に伴うものかもしれない。

上層第2群 665~669の5点である。665・666は「く」字状に外反する口縁部をもち、665は口唇部上端が微妙に立ち上がる。

667は大形台付甕Aである。体部と脚台の大きさがアンバランスである。赤桃色を呈するので、ススの付着はないが火熱を受けているかもしれない。668は底部に木の葉痕を残す甕底部である。

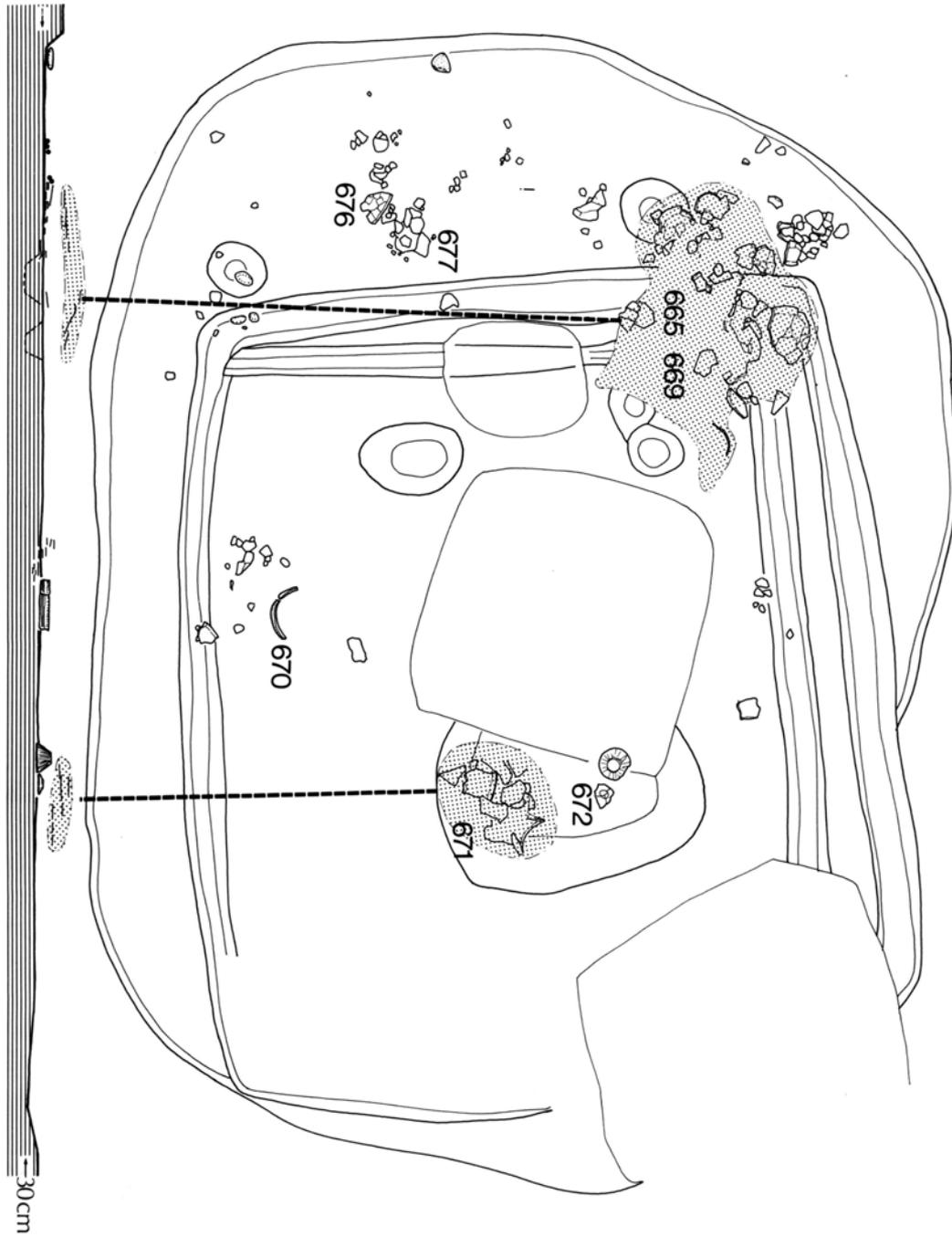
677は体部外面にカゴ目状の磨消線(暗紋)を施す壺である。

下層 ほぼ床面直上からの出土である。670は受口状口縁甕である。口縁部外面にハケメ工具の刻み、頸部直下には櫛描直線紋が施される。

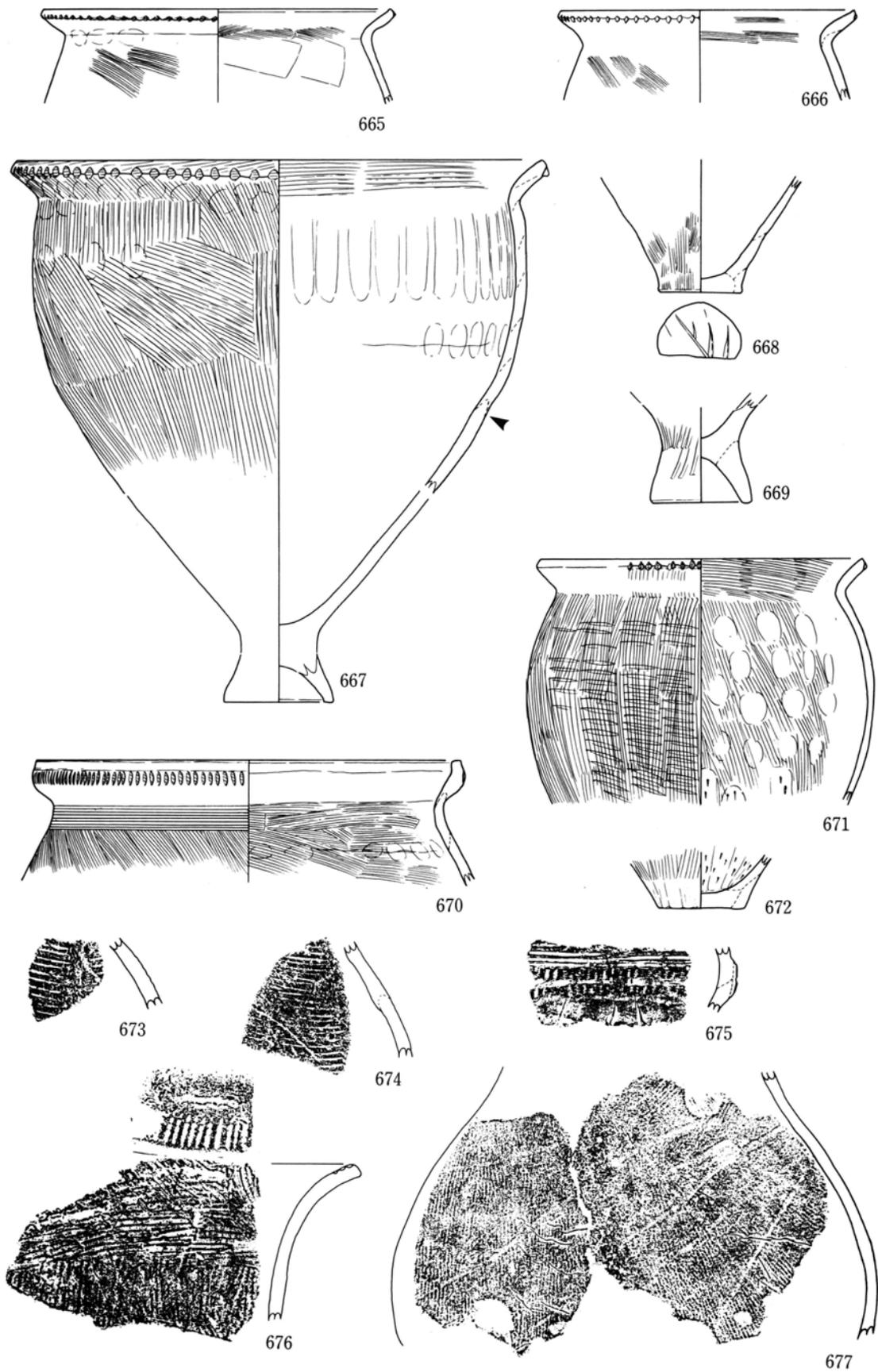
673~675は細頸壺Aa。磨消線紋系である。器面の風化が著しいため詳細はよくわからない。

676は深鉢Cb。口縁部内面の刺突紋は櫛状具の歯が独立せず、つながってしまっている。口縁部外面は横位条痕の上に左上がりの条痕を加えている。

下層はII-2b期に属すけれども、上層第2群は微妙である。



第112図 SB32土器出土状態 (1 : 40)



第113図 SB32出土土器

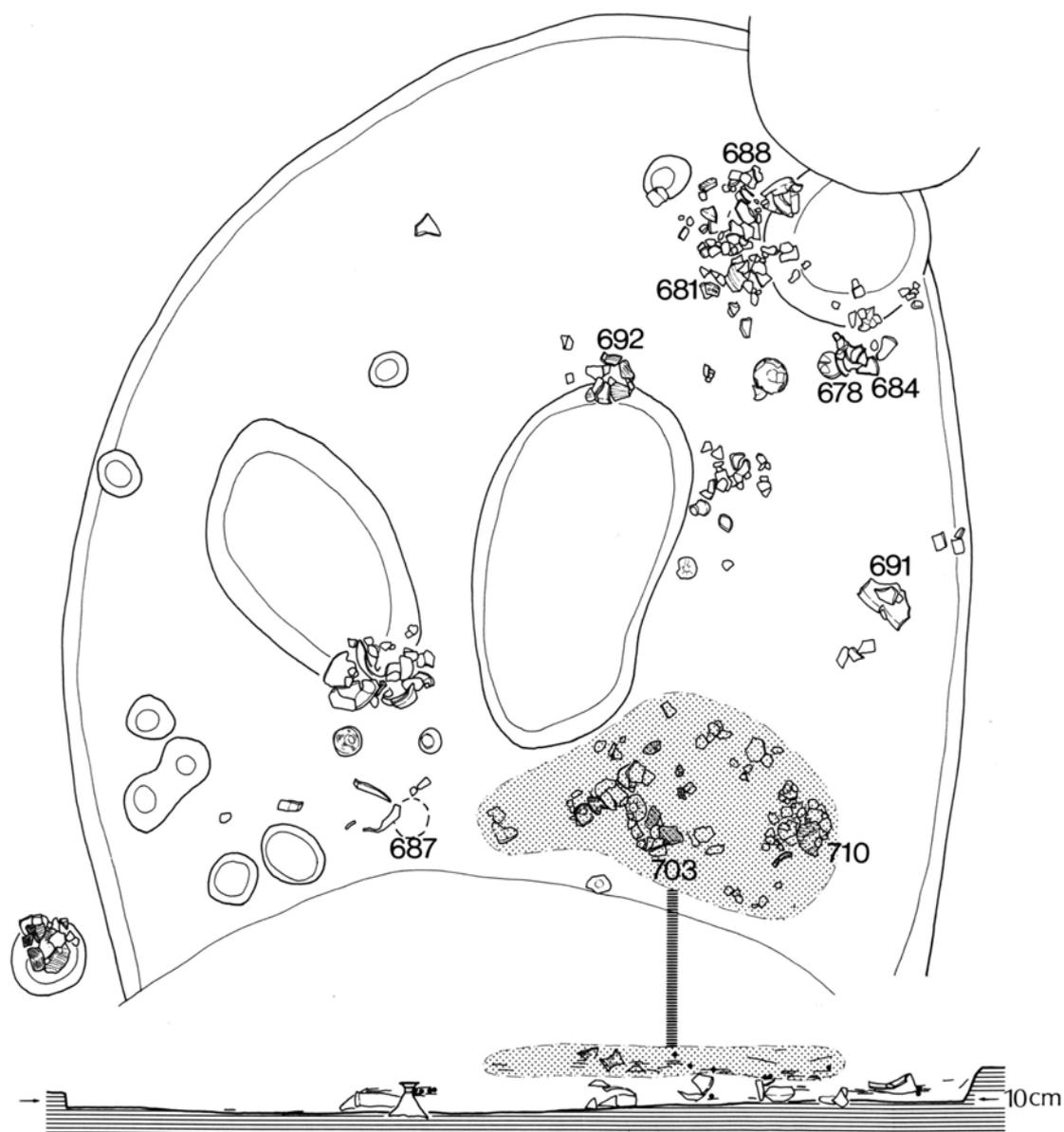
S B33 上層と下層に2分できるが、上層は「一括」としてまとめたものではない。

下層 太頸壺Aは指頭圧痕紋系(678)と部分圧痕紋系(679・680)がある。無頸壺は細頸壺Aa成形第2段階で、櫛描紋*f*(683)、櫛描紋*e*(681・704)、刺突紋系(682)、磨消ハケメ帯系がある。

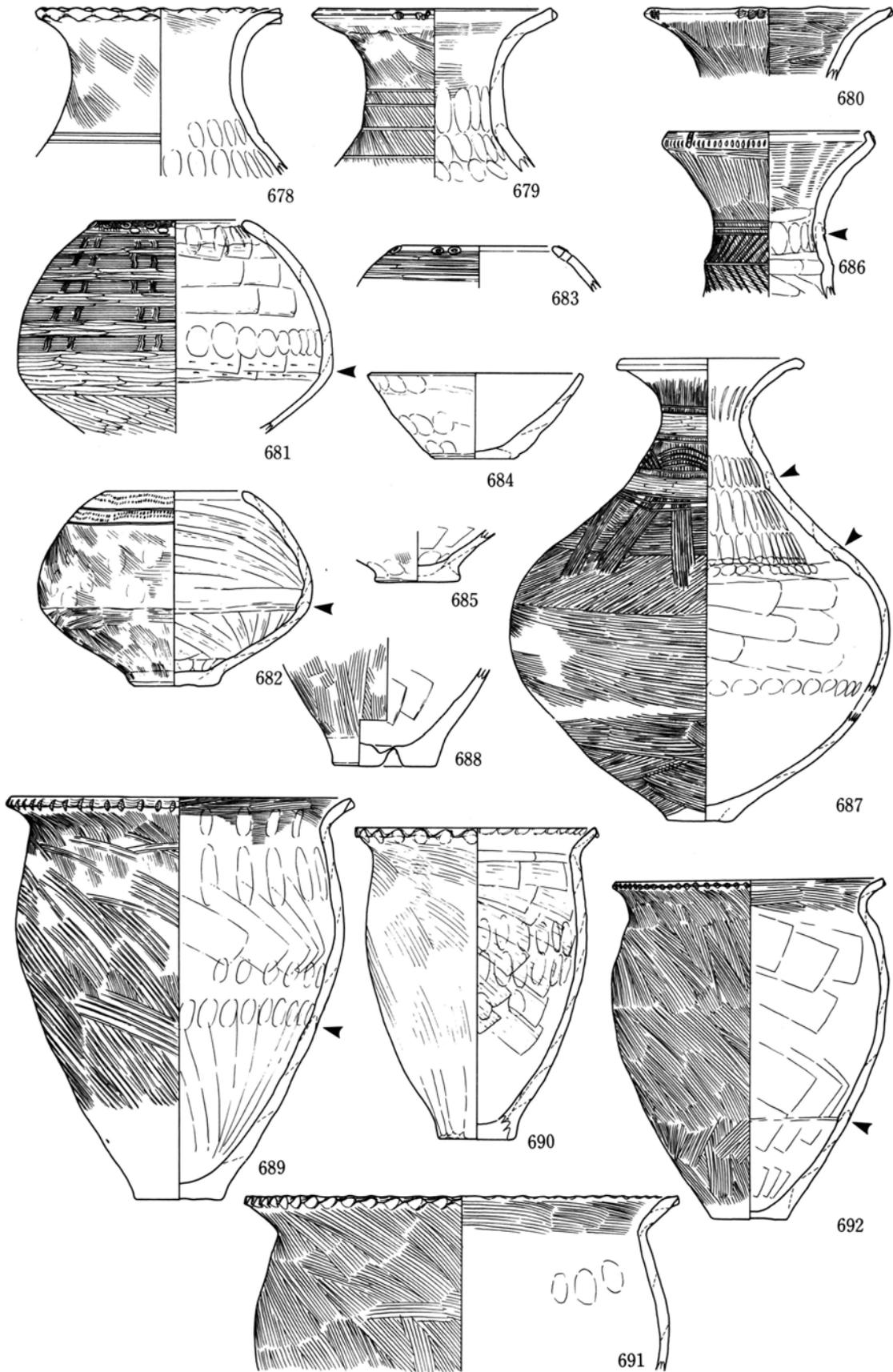
甕はAf(690・691)、Ac(689)の他に甕D系統(692)がある。

688は有孔土器の未成品である。内外面からの穿孔は位置がずれて貫通していない。

687はB系統細頸壺で、直線紋と体部調整は同一原体(櫛II種A類)で施される。頸部に施されている沈線連弧紋の下は縦位の調整であり新しい様相である。



第114図 SB33土器出土状態(1:40)



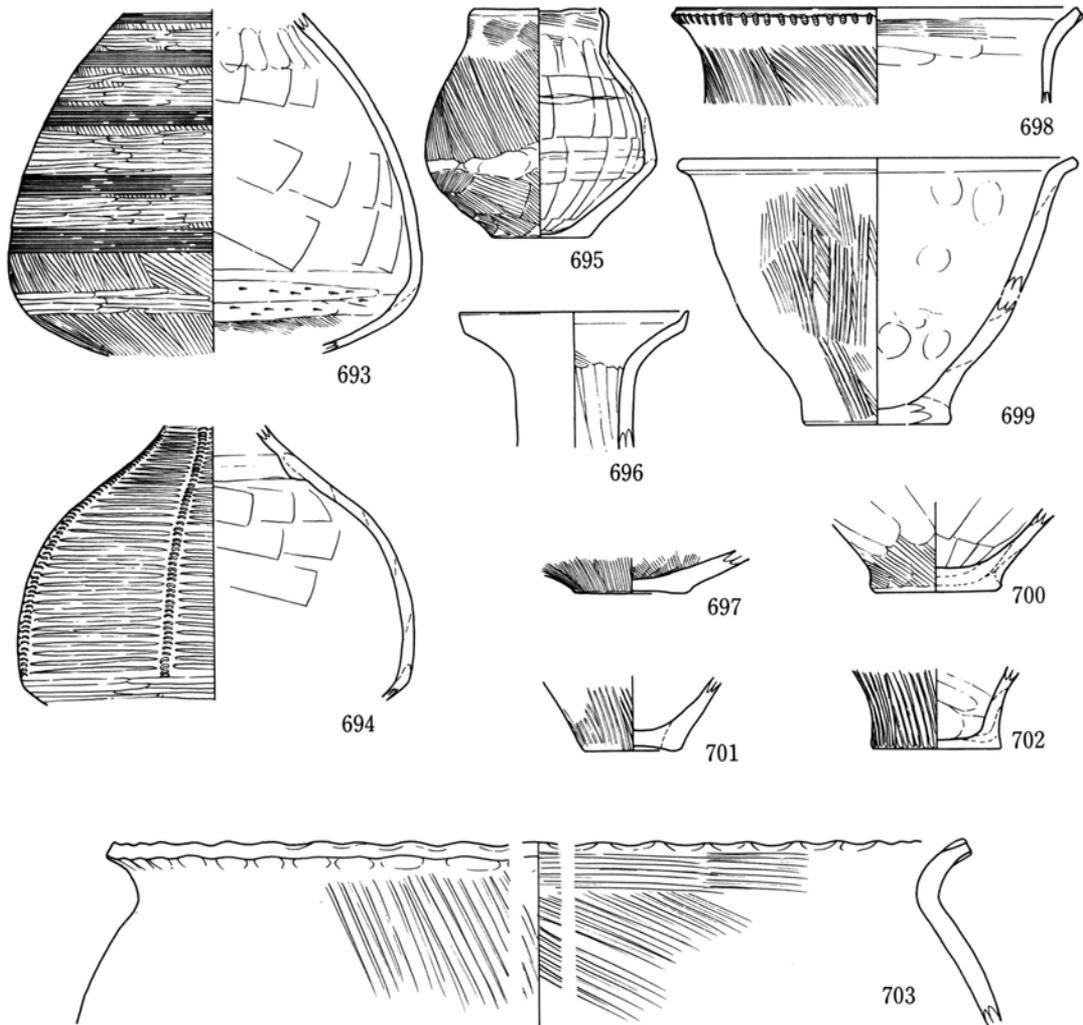
第115圖 SB33出土土器 (1)

上層

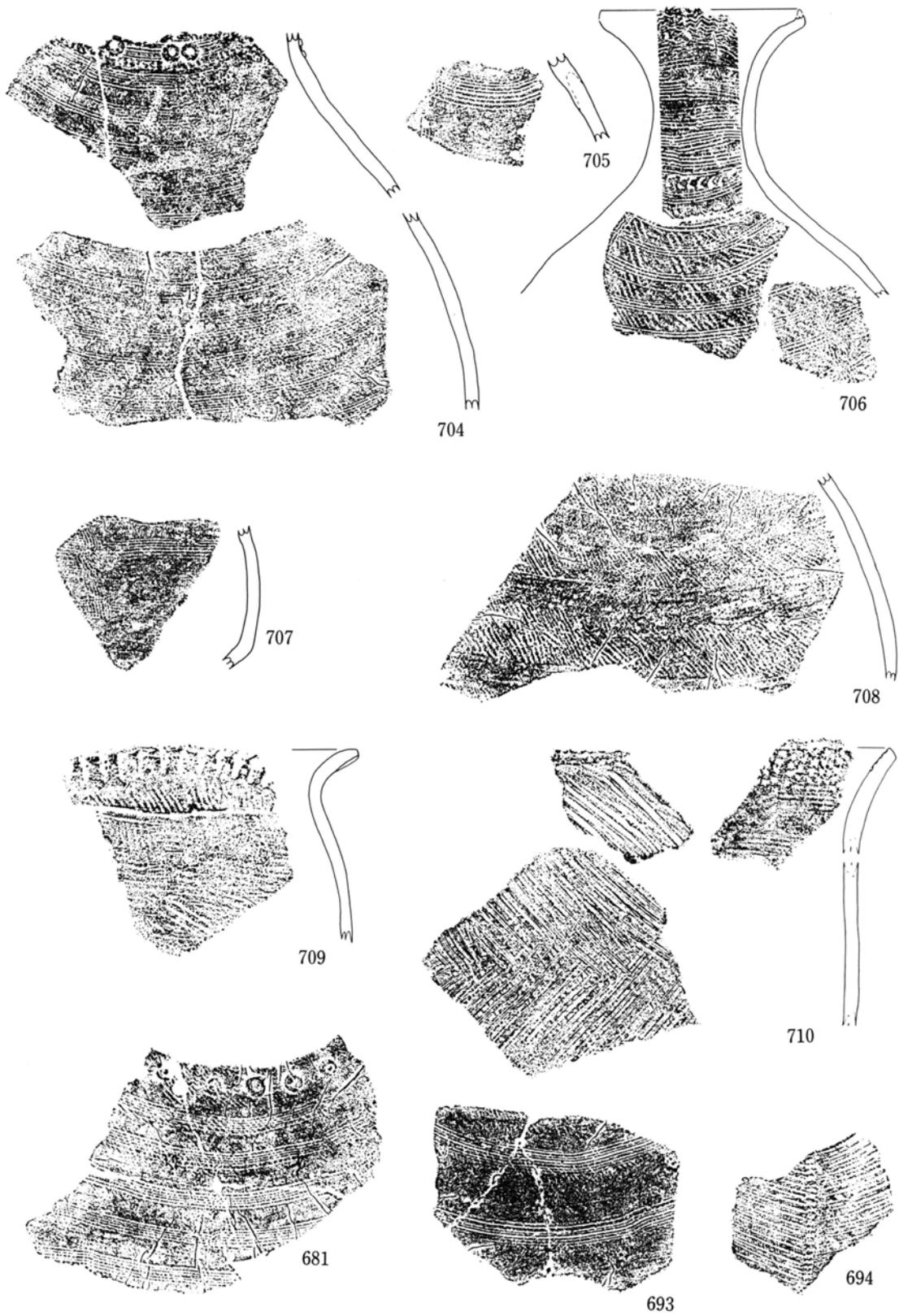
壺は、櫛描紋e類系(693・705・706・707)、磨消線紋系(694)がある。693は櫛I種a類。696は細頸壺Aa。外面はナデられてハケメを残さない。705・707は櫛I種a類単帯の櫛描直線紋→縦位波状紋→研磨という順序で施紋されるが、706体部は櫛III種(4・4)による直線紋→縦位波状紋で施紋が終了し研磨は施されていない。口縁部や頸部外面も櫛III種(2・2・2)による櫛描紋が施される。III期に続く最も新しい手法である。そして、櫛描直線紋も←方向に施され、多くが→方向であるのとは異なる。

甕は703が甕Af(指頭圧痕紋系)、709は頸部直下に断続ヨコハケメを施す。

702は深鉢Cbで底部成形はd。710は深鉢Cbの模倣品である。体部外面は櫛II種A類による横位羽状条痕を施し、口縁部内面にはハケメの上に櫛刺突紋を施す。701は上げ底状で底部成形はb。



第116図 SB33出土土器 (2)



第117図 SB33出土土器 (3)

S B61

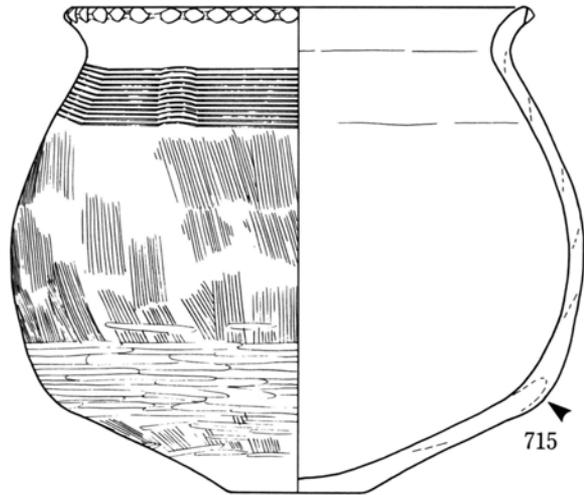
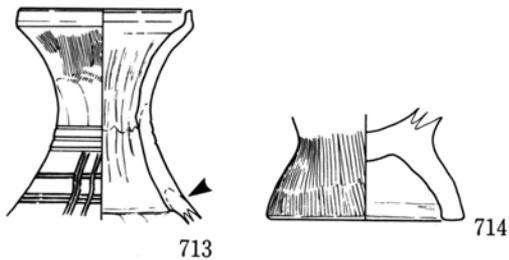
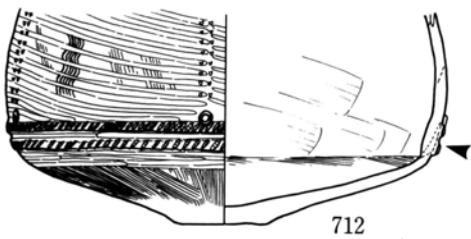
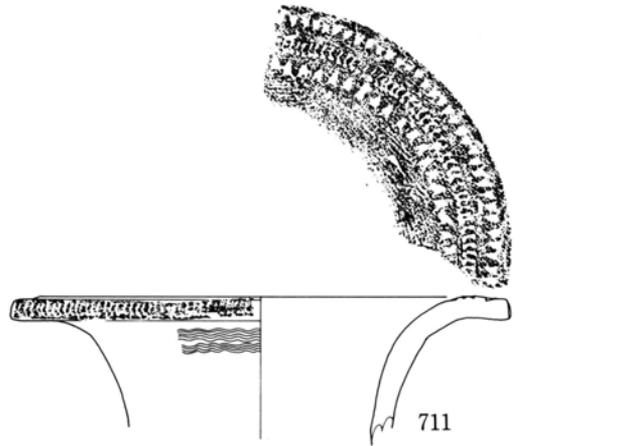
711は口唇部に半截管状工具による刺突紋、口縁部内面に三角形刺突紋2段とその間に半截管状工具による刺突紋を施す。頸部外面は波状紋のようなが風化は著しい。

712は磨消線紋系壺でII-2b期の典型。半截管状工具の縦位刺突紋と櫛描波状紋を施した後に磨消線を施す。磨消線は縦位刺突紋で断絶するところとしないところがあり、磨消線の縦位分割はまだ確立していない。

713は細頸壺Aaで、櫛描紋e類系統の最新型式(e'類)で研磨帯が省略されている。713は頸部に沈線3条、体部には櫛III種(2・3)の横位直線紋と縦位直線紋を施し、磨消線は脱落している。口縁部のヨコナデは強く外面が凹面をなすので、III期に下がるかもしれない。

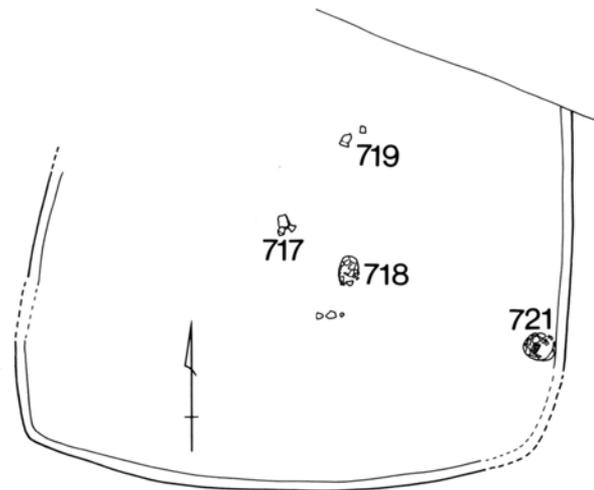
714は台付甕の脚台。接地面は内側へ微妙に拡張する。

715は大形鉢A。口唇部には指頭で大きな刻みを、頸部直下にはハケメ工具による直線紋を施す。形態的には、太頸壺成形第2段階で作られる。体部上下界の研磨がそれを示す。

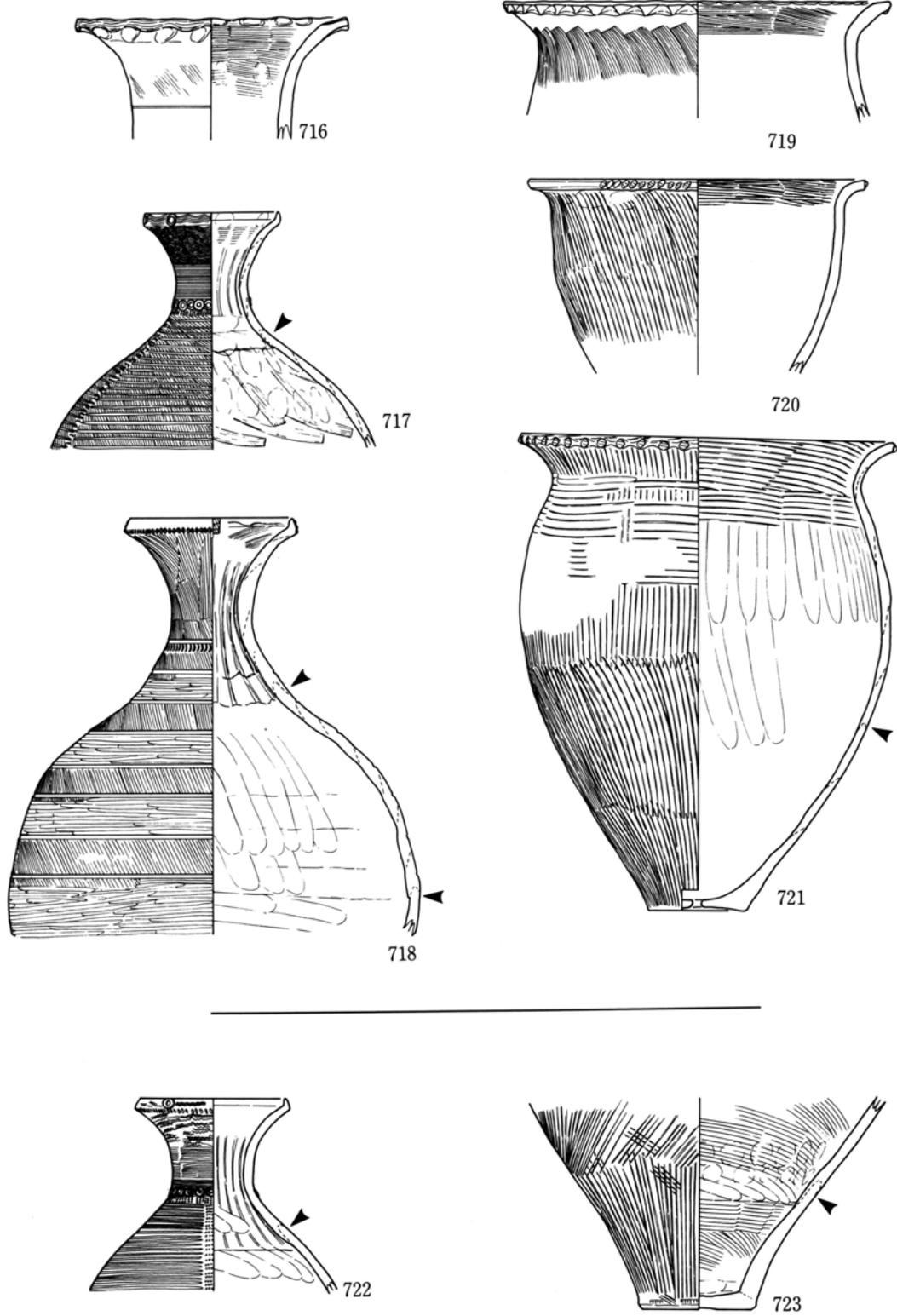


第118図 SB61出土土器

- S B 67** 716は太頸壺Aで、口唇部に指頭圧痕紋を施す。頸部に細い沈線をめぐらす。
- 717は細頸壺Aa（磨消線紋系）でII-2期の指標となる。口頸部外面は櫛描紋が施され、上半部は波状紋、下半部は直線紋となっている。頸部の円形浮紋は端部が重なるぐらい密に施されている。円形浮紋には管状工具で圧痕が施されている。縦位刺突紋は櫛。718は細頸壺Aaで、磨消ハケメ帯系。口縁部にはヨコナデの後に棒状浮紋を貼り付けハケメ工具圧痕を加えている。屈曲部にもハケメ工具刻みを施す。
- 719は甕Afで口縁部に指頭圧痕紋を施す。
- 720は口唇部にハケメ工具による部分圧痕紋を施す甕Ag。
- 721は甕Dの有孔土器。2~3/cmの粗いハケメを施している。底部はやや上げ底をなす。体部内面はユビによるナデ上げが施されている。
- 次に説明する2点はSB67近辺で出土した土器である。時期的に並行するので取り上げた。
- 722は717と同類。口頸部の波状紋は振幅が小さくあまり整っているとは言えない。屈曲部には板?でD字刻みが施される。
- 723は、底部成形がdで、やや上げ底をなす。外面調整は櫛II種b類による条痕風である。内面にはハケメを残すので、模倣品かもしれない。



第119図 SB67土器出土状態（1：80）



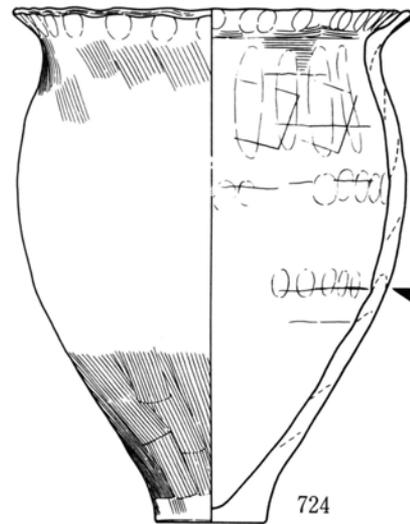
第120图 SB67·他出土土器

S B 68 甕 Af である。口縁部に指頭圧痕紋を施す。口縁部外面より内面の方が圧痕の調子のはっきりしている。また口唇部は幅が狭くなっている。

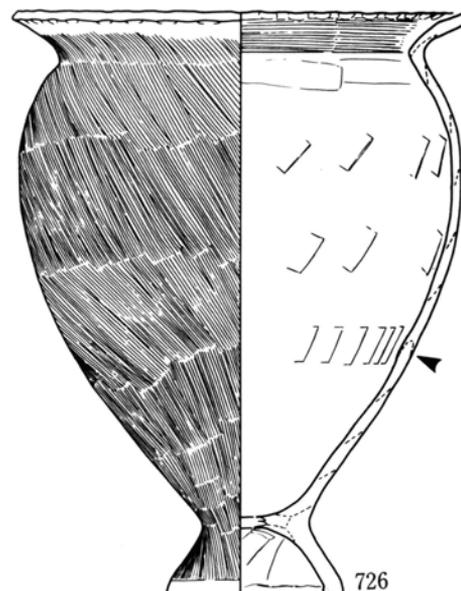
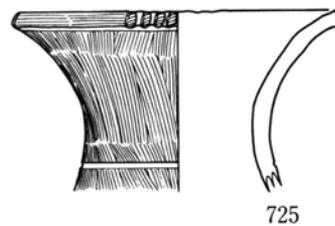
体部外面は上半の剥落が進んでいる。使用に関わるかどうかは不明である。

S B 69 725は太頸壺Aで、ハケメ工具による部分圧痕紋を円周4分割の位置に施す。口唇部にはハケメを残す。頸部は沈線をめぐらしている。

726は台付甕A。口縁部には指頭圧痕紋が施される。頸部はく字状に外反して内面に稜を作る。脚台は接地面と裾外面にヨコナデが施されるが、内側に粘土のはみだしがある。体部内面は板ナデ。



第121図 SB68出土土器



第122図 SB69出土土器

S B 71 床面直上に土器や石器が遺棄されていた。伏せた状態で出土した730の内部からはアブラナ科植物の種子が出土した。また、壁面での確認にとどまったが、白色粘土塊が2つ床面直上に遺存していた。

727は口縁部内面円周4分割の位置に3ヶ1単位の瘤状突起を貼り付ける。頸部から体部には櫛描紋を施す。体部は櫛描紋*b'*類の手法と共通する。

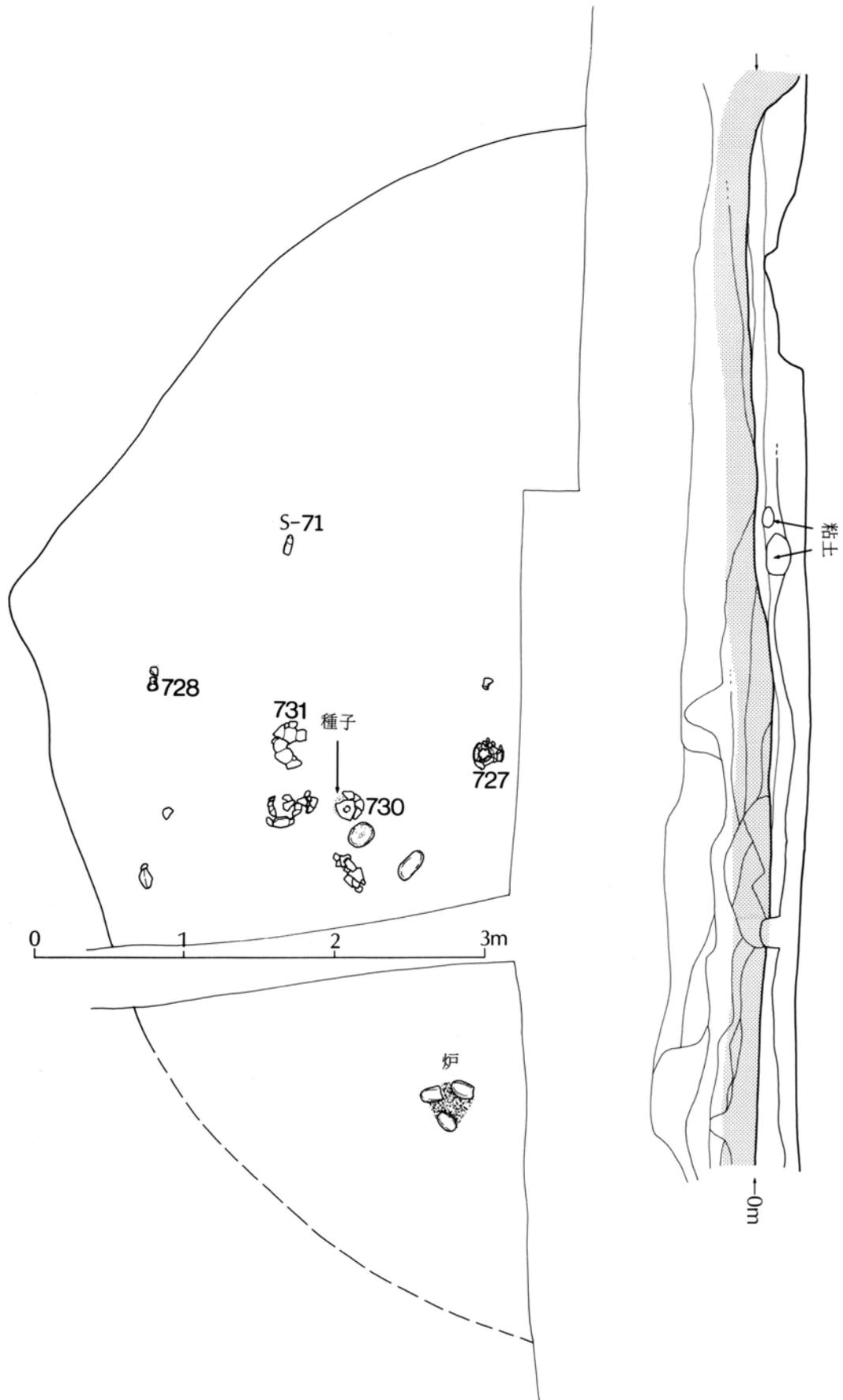
728・729は細頸壺 Aa。櫛描紋*f*類。729は縦位に粘土紐を垂下させている。730は細頸壺 Aa の体部下半とおもわれるが、最下部外面に研磨は施されていない。731は櫛描紋*e*類。732は深鉢 Cb。底部成形は*d*。

733は729と同類。734は櫛描紋*f*類だが粘土紐垂下ではなく楕円形浮紋の貼り付けであり、右の模式図のように、ハケメ工具による圧痕は楕円形浮紋の上だけでなく器面にも直接当たっている。以前は浮紋上へ丁寧に施されていたから、浮紋を意識しないでハケメ工具圧痕を施しているようで、かなり形骸化していると言える。また磨消線も浮紋のところまで断続しており、浮紋や粘土紐を脱落させ刺突紋のみとなるII-2期に近い様相を示している。II-1期でも新しいと言えよう。

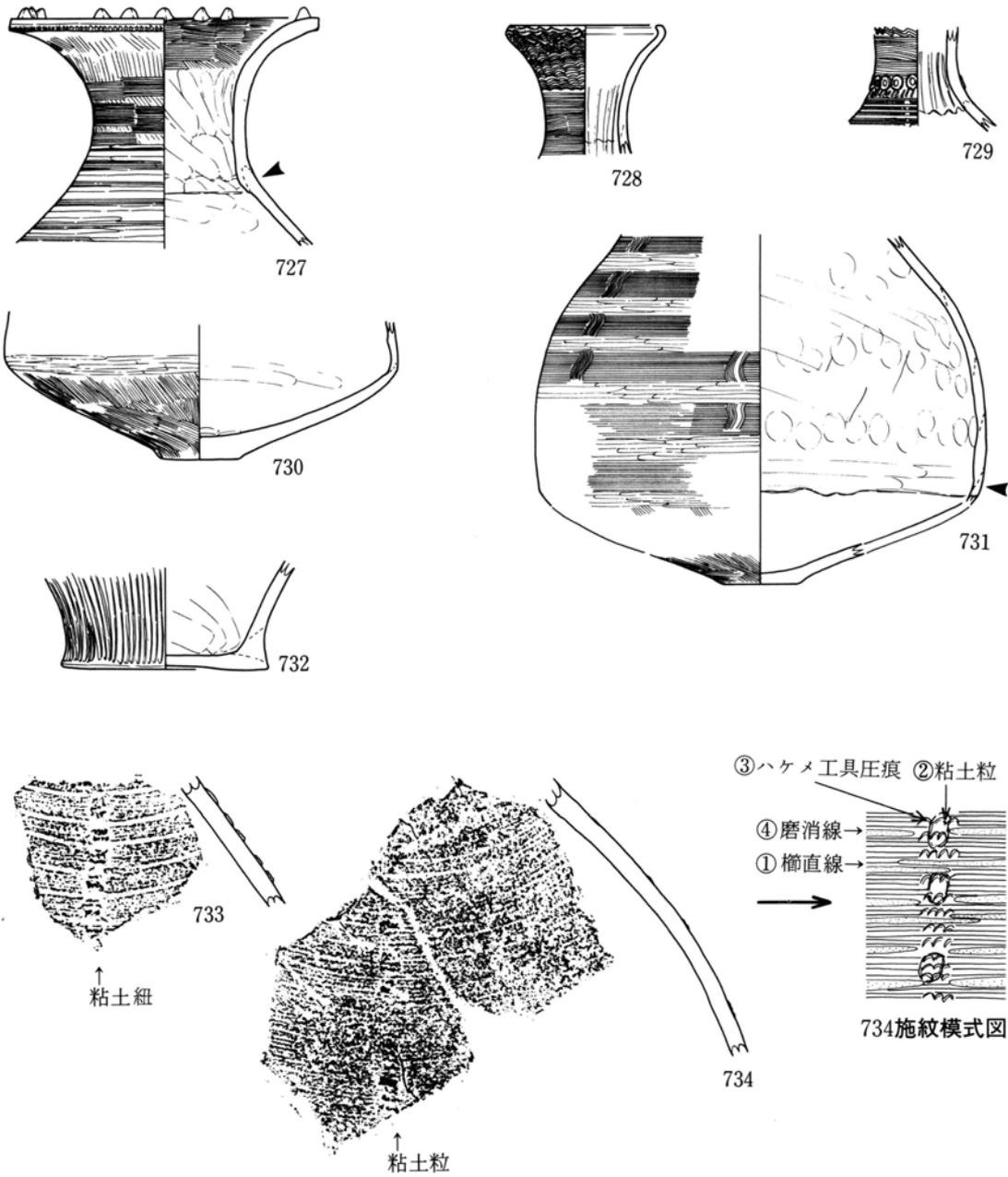
下の写真は棒状礫を3つ並べて「石囲い炉」状にした炉で、棒状礫は叩き石の転用である。



第123図 SB71 炉石（左：南東→北西、右：北東→南西）



第124図 SB71遺物出土状態・東壁土層セクション (1:40)



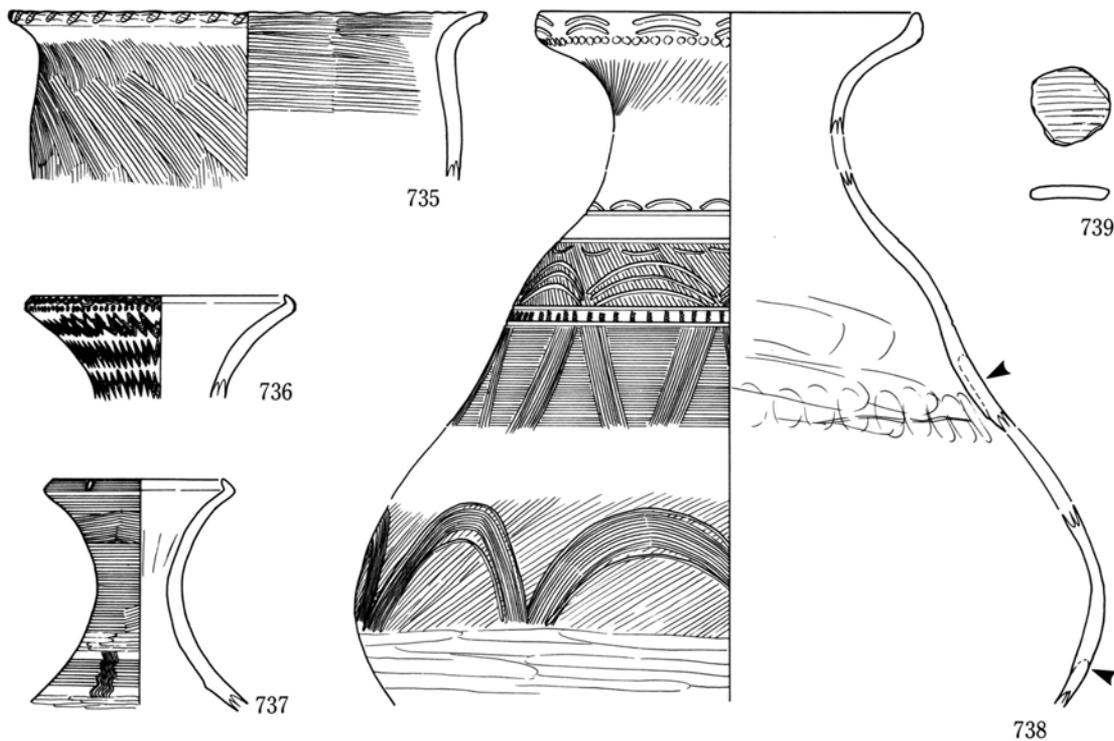
第125図 SB71出土土器

**S D09** 740は太頸壺A。口唇部はハケメ工具による刻み、頸部外面には櫛描波状紋を施す。細頸壺 Aa は、口縁部については施紋手法から、櫛描紋系 (736・737・745)、二枚貝刺突紋系 (742) の2グループに分かれる。体部施紋は、磨消線紋系 (741・744?)、櫛描紋 e 類系 (743・745)、ハケメ磨消帯系 (747・748)、櫛III種 (3・2・3) を原体として横位櫛描直線紋とそれを切る縦位櫛描直線紋の構成をとるもの (746) がある。741は太頸壺であり、頸部に「X」状刻みを施す。

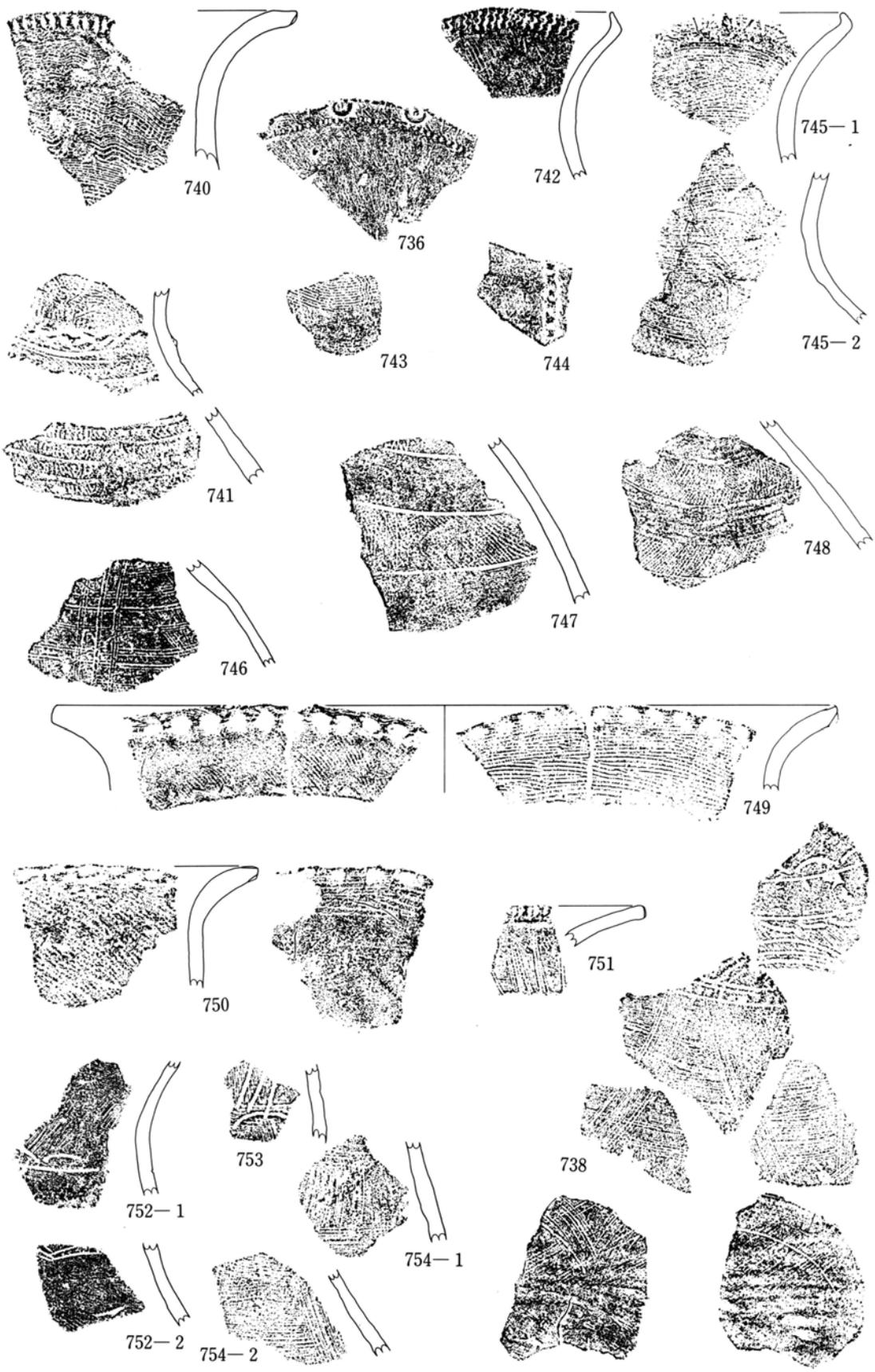
甕は749・750が Af、735は Ad。

**B系統** 738は太頸壺 B 系統。受口状口縁は外面に沈線の連弧紋、屈曲部には断面の丸い刻みを施す。頸部は櫛II種 a 類による右上方から左下方への斜条痕、隆起部は斜条痕の上に上下に相対する沈線連弧紋、櫛描紋との境には付加沈線櫛刺突紋、体部下半は櫛描連弧紋を施した後、に上下に付加沈線を弧状に施して区切る。体部下半の成形第1段階の接合面付近はヨコナデを加える。752・753も恐らく同類で、沈線の連弧紋が観察できる。754は櫛II種 A 類の施紋以外観察できない。

さて問題は、以上の土器群が一時期であるかどうかである。櫛描紋 e 類系は縦位波状紋の振幅がかなり小さくなっているので新しい様相といえるし、741の磨消線紋や746も新しい様相である。したがって、B系統壺にはやや古い様相が認められるとはいえ、II-2 a 期にさげるのが妥当であろう。



第126図 SD09出土土器 (1)

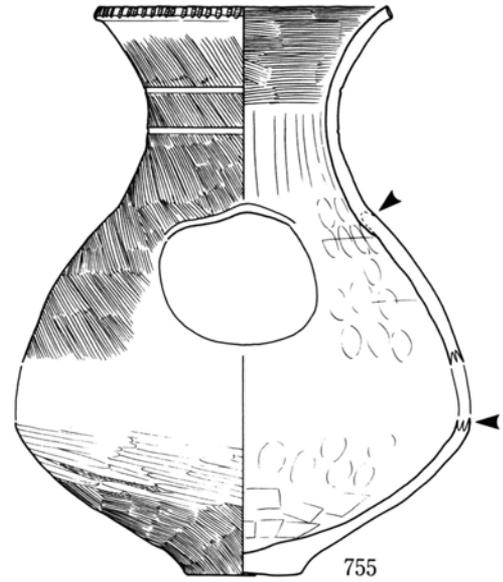


第127图 SD09出土土器 (2)

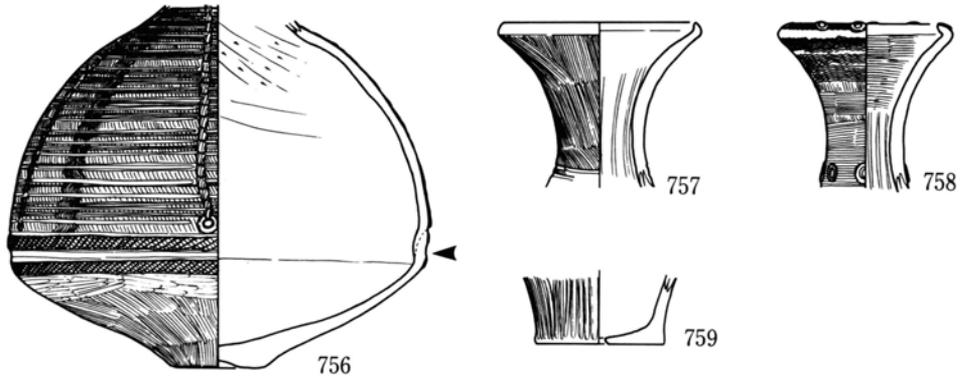
S K 03 755はII期で唯1点の円窓付壺である。おそらく初頭であろう。口唇部はハケメ工具の刻み、頸部には沈線2条、以下はハケメ調整のみの無紋系壺である。赤桃色を呈する。

S K 06 756~758は細頸壺Aa。756は櫛描紋f類。施紋は横位櫛描直線紋→縦位波状紋・粘土紐垂下→粘土紐上にハケメ状工具の圧痕→磨消線という順序である。磨消線は縦位粘土紐で断続する。底部は上げ底。黒色仕上げではなく暗褐色を呈する。757はおそらく磨消ハケメ帯系。口縁部にはヨコナゲを施す。758は櫛描紋f系の口縁部である。口縁部の内傾が強い。黒色仕上げ。

759は深鉢Cb。底部に焼成前穿孔のある有孔土器である。



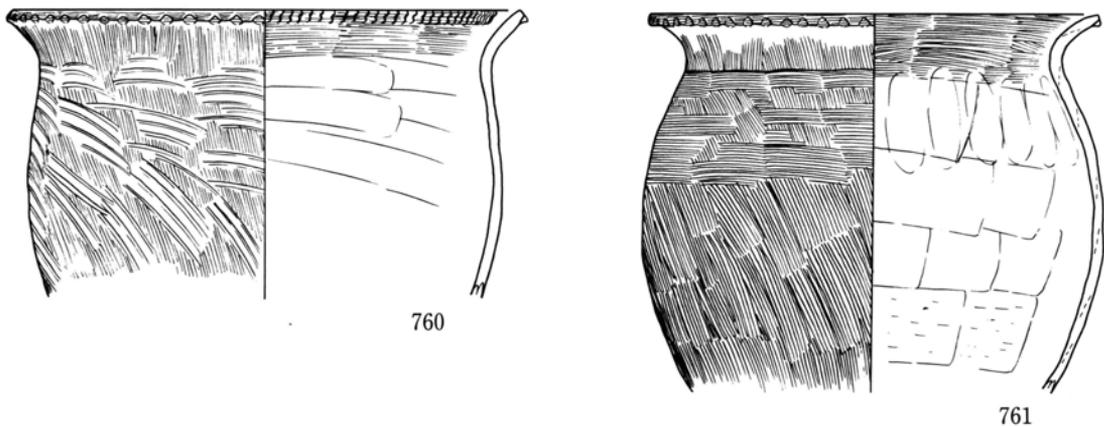
第128図 SK03出土土器



第129図 SK06出土土器

S K 08 760は甕 Ae。口縁部内面には二枚貝刺突紋、体部外面にはまばらに二枚貝調整が施されている。

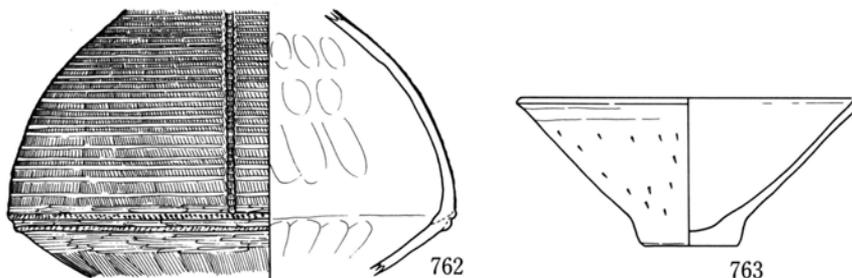
761は甕D。体部上半にはハケメ工具による断続ヨコハケメが施される。



第130図 SK08出土土器

S K 37 762は粘土紐垂下の後に磨消線紋を施す。縦位波状紋は施されていない。粘土紐には、ハケメ工具の圧痕が施されている。2条突帯には櫛刺突が施されている。

763は鉢 Ac。外面はケズリのようなものであるが、成形時にできた粘土の皺が観察できる。

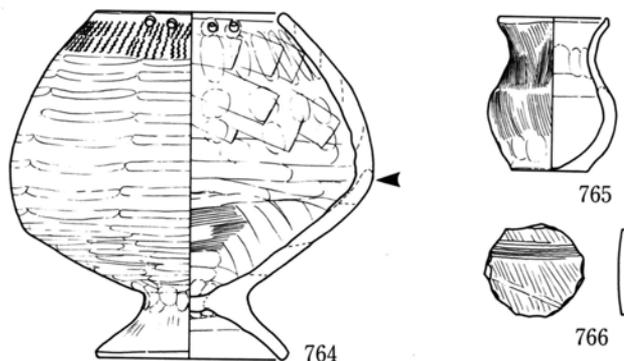


第131図 SK37出土土器

S K 67 764は台付無頸壺。口縁部外面には二枚貝刺突紋が2段、体部上半には磨消線、体部下半には研磨が施される。脚台部は強くヨコナデされ、内彎気味に立ち上がる。底部は充填によって塞がれる。

765は小形壺。口縁部は微妙に受口状口縁をなす。

766は土製円板。周囲は打ち欠いたままで未調整。



第132図 SK67出土土器

S K 98 767は壺底部。底部外面は丸く突出する。

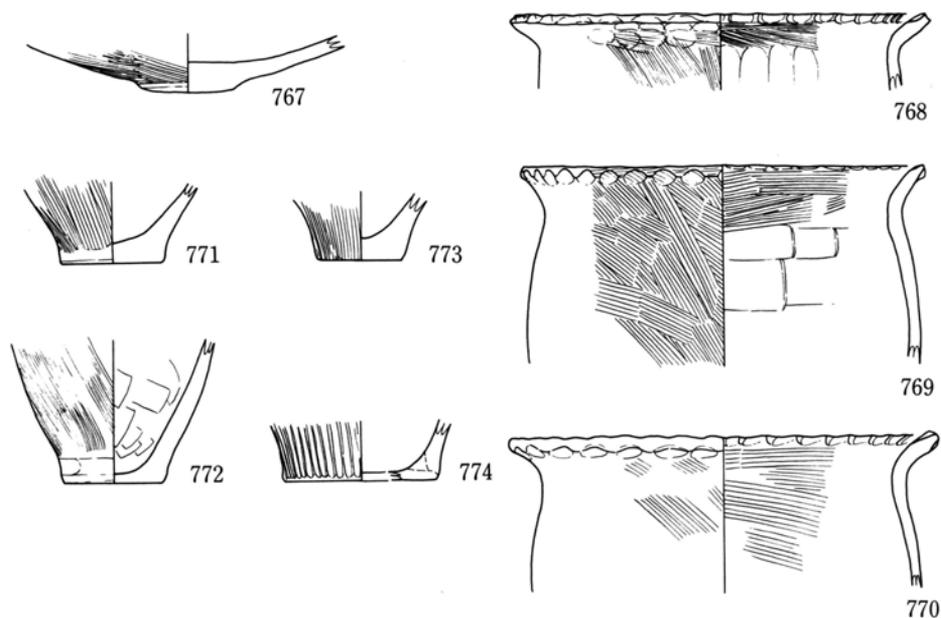
768~770は甕 Af。768は口縁部内面の指頭圧痕が強く施されている。外面は痕跡的であり、ハケメをそのまま残している。口唇部はヨコナデによって凹面をなすが、指頭圧痕によって皺ができています。769は口縁部外面の指頭圧痕が強く施され、内面は痕跡的である。770は口縁部内外面とも指頭圧痕が強く施されるけれども、内面のほうが圧痕ははっきりしている。

768や770は指頭圧痕のユビ形が明瞭に残っており、口縁部の調整という域は完全に脱している。指頭圧痕紋とした中には、圧痕が痕跡的であったようなものもあるが、こうした例を見るかぎりでは、一つの表現手法として認めて良いと考える。なお、指頭圧痕紋の施し方については、人差し指と親指で口縁部を挟み込んで圧痕を付けることは確実であるけれども、土器に対しての体の姿勢や指の当て方については充分確定できていない。768・770の場合では、圧痕の底にある1段深くなる部分が実測図で左側に寄っているの、おそらく右手であれば親指を、左手であれば人差し指を口縁部内面にくるようにして圧痕を付けたものと推測する。いずれにしても圧痕は→方向に施されることになる。

ただし、多くの指頭圧痕紋もそうであるけれども、口縁部内面の圧痕と外面の圧痕の位置が相對せず少し横にずれて施される。もちろん、相對している例もある。

771~773は甕底部。

774は深鉢 Cb の底部。成形はd。



第133図 SK98出土土器

**SK111** 775は口縁部がラッパ状に開く壺。内外面とも粗いハケメが施される。

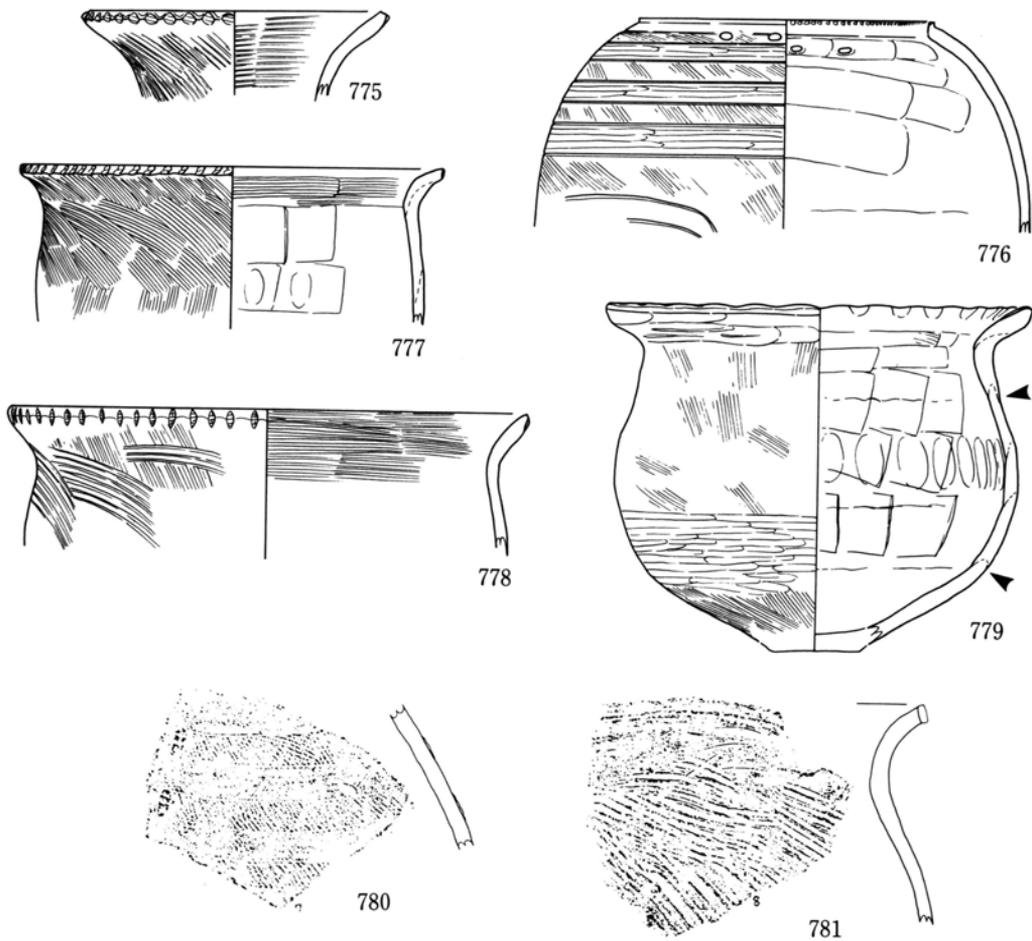
776は磨消ハケメ帯の無頸壺。だが、体部下半には沈線連弧紋が施されているようだ。また、口唇部も上方に拡張されて刻みを施しており、形態的にも純粹にA系統であるとは言えない。A系統とB系統との折衷型であろう。

777は甕 Ad。体部上半のハケメは778の二枚貝調整の施し方に類似している。778は甕 Ac。体部外面には二枚貝調整が雑に施されている。

779は大型鉢A。体部は壺成形第2段階から製作される。口縁部には内面に指頭圧痕を残す。外面はナデで消されているようである。

780は磨消ハケメ帯。ハケメ帯の幅も狭く、多重化している。

781は甕 Ac。口唇部には部分圧痕を施している。



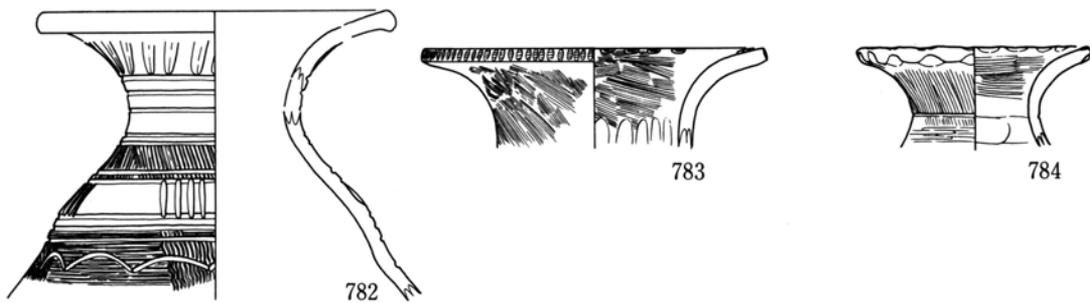
第134図 SK111出土土器

S K 112 782はB系統壺。口縁部外面はI期と共通する幅広のハネアゲ紋が施され、この部分のみ古い様相を見せる。しかし、頸部以下は紋様が圧縮され、櫛描紋帯も減少しており新しい特徴を見せる。

783は口縁部内面に管状工具で圧痕をくわえた4ヶ1単位の円形浮紋が円周4分割の位置に施されている。

784は、口縁部に指頭圧痕紋を施す。

785は、1のほうは沈線を2・3・2・3・2・3の組み合わせで施している。2は同一

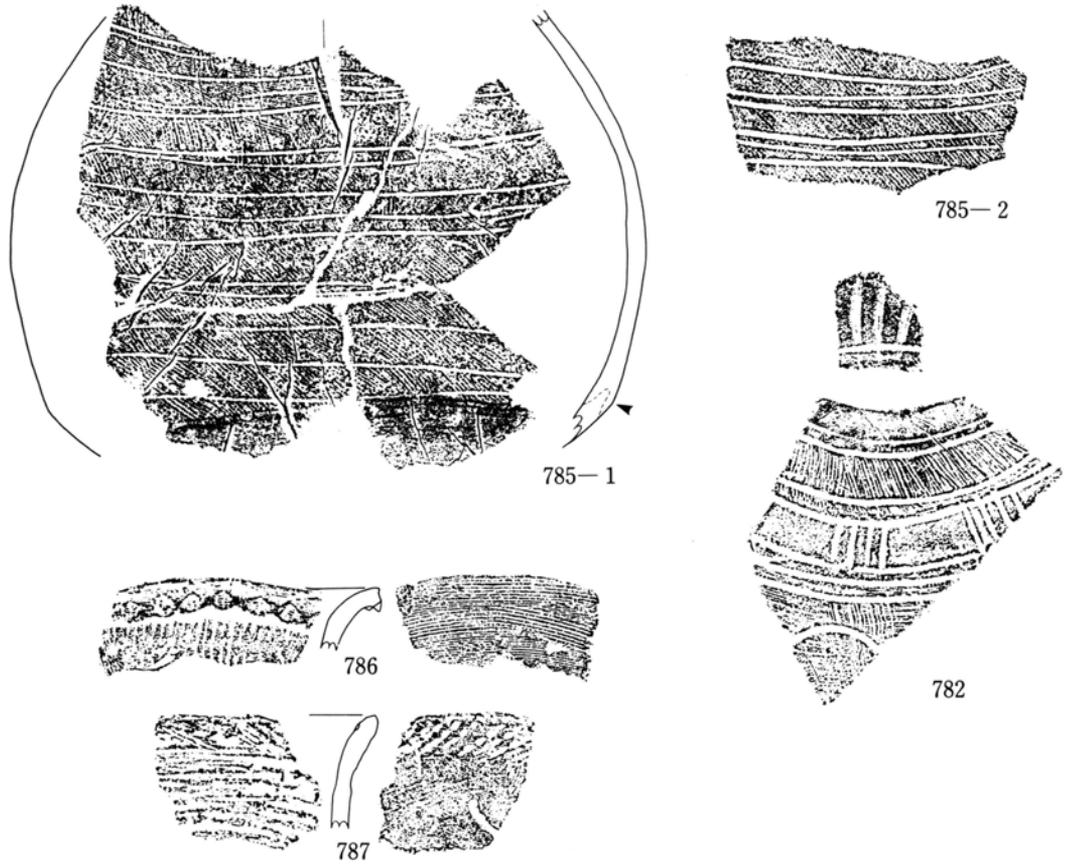


第135図 SK112出土土器 (1)

個体。沈線が3・3のように見えるが、上端の沈線が下の2条1組の沈線に近づいただけである。

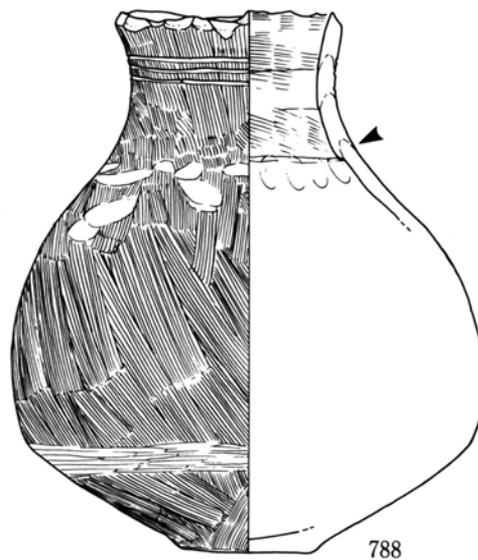
786は甕D。口唇部は垂下して、ハケメ工具による刻みが施されている。

787は深鉢Cb。



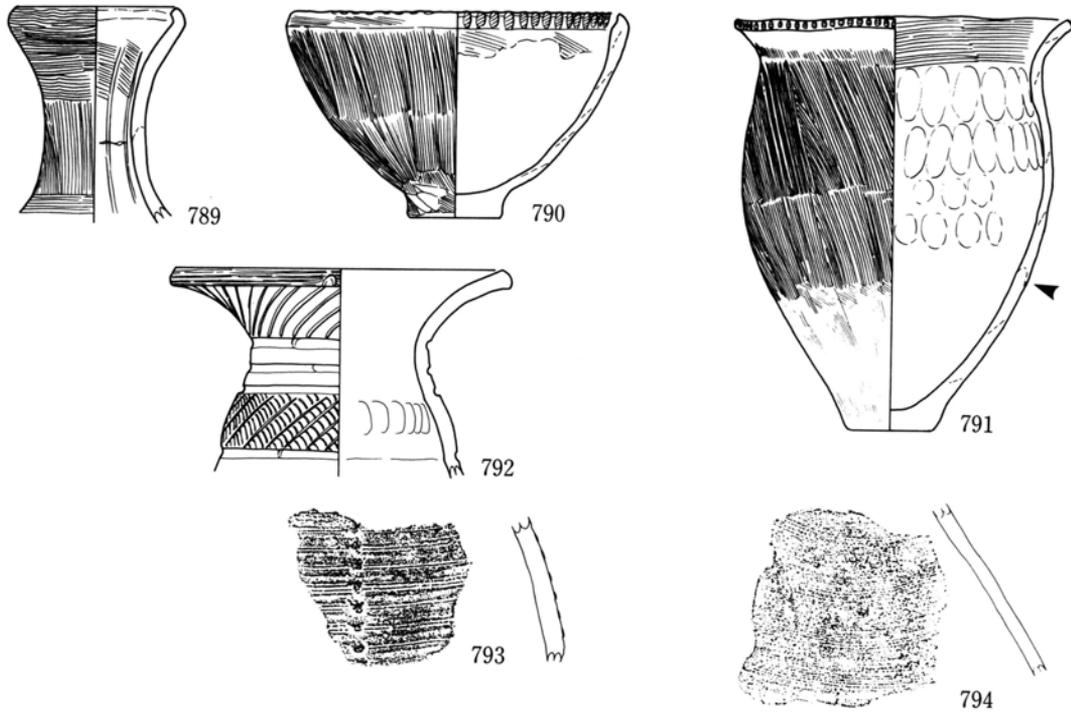
第136図 SK112出土土器 (2)

SK120 788は細頸壺Aである。口縁部は内側から外に向かって打ち欠かれている。頸部には沈線が3条めぐる。体部は無紋でハケメを残す。体部上半には、指があたってハケメの消えているところがある。



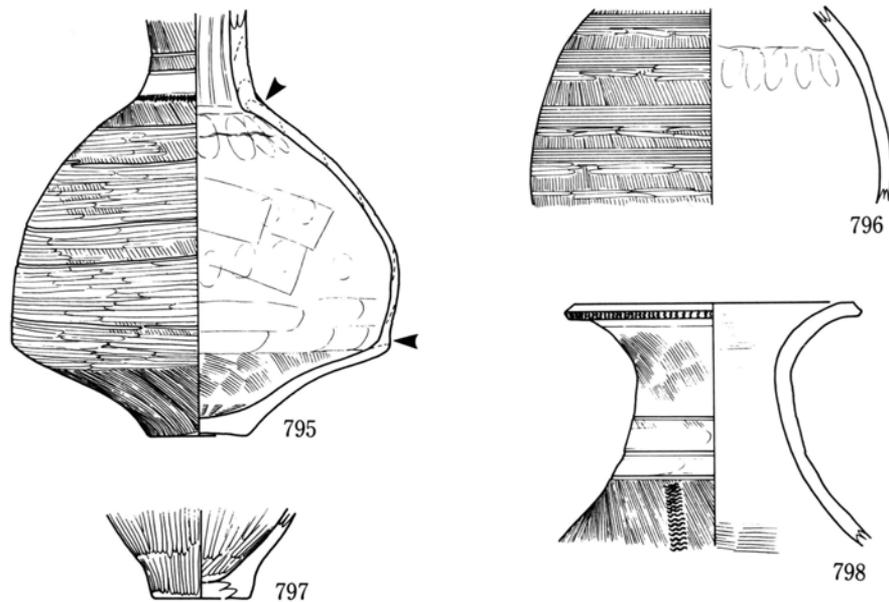
第137図 SK120出土土器

S K 122 789は細頸壺 Aa。整っていない櫛描紋が施される。790は口縁部内面にハケメ工具の圧痕を施す鉢 Ac。791は甕 Ad。792は I 期太頸壺 B で、混入である。



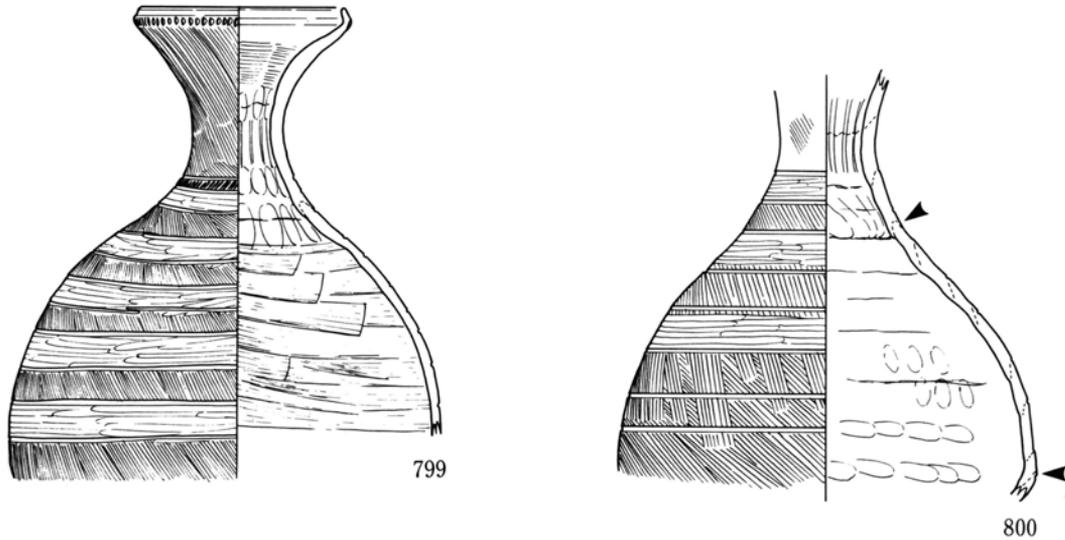
第138図 SK122出土土器

S K 221 795は細頸壺 Aa。磨消ハケメ帯は構成が崩れている。形態は体部上半が強く張り出し、半球状をなしている。796は櫛描紋 e' 系である。本例も研磨が粗雑になっている。797は鉢の底部。内外面とも研磨される。798は B 系統かと思われるが確定はできない。口唇部と体部上半に二枚貝刺突の刻みと刺突が施される。



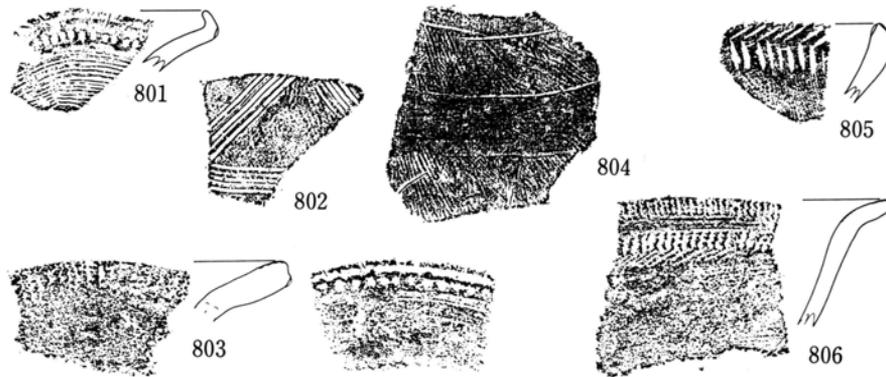
第139図 SK221出土土器

S K 224 799は細頸壺 Aa。磨消ハケメ帯は典型的。口縁部は強くヨコナデされ凹面をなす。800は磨消ハケメ帯の最下段に研磨が施されていない。



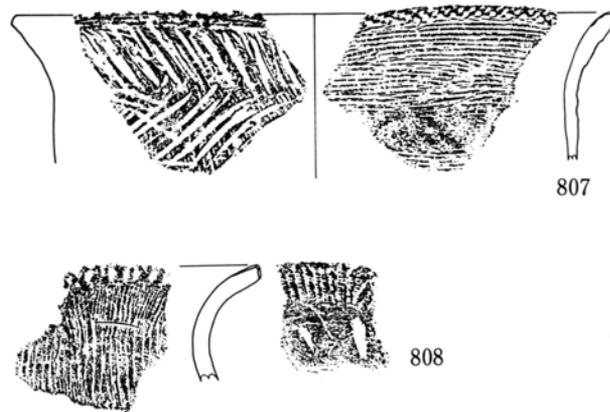
第140図 SK224出土土器

S K 227 801は細頸壺 Aa。櫛描紋系。802は櫛II種b類を原体として鋸歯紋が描かれている。803は口縁部内面に二枚貝刺突紋を施す壺口縁部。口唇部は凹面をなす。804は磨消ハケメ帯。805は口縁部にハケメ工具で横羽状刺突紋を施す鉢あるいは高杯である。806は口縁部内面に二枚貝刺突紋を2段施す高杯である。どちらも、精製の範疇に属する。



第141図 SK227出土土器

S K 298 807は深鉢 Cb と類似するが、口縁部内面にはハケメが施され、その上から櫛刺突紋が施されている。体部外面は櫛II種b類による条痕が横羽状に施されている。この時期にも深鉢 Cb は存続しているので、本例はかなり変化していることになる。A系統との折衷型である。808は甕 Ab。



第142図 SK298出土土器

### その他の遺構

- S K 33 811は体部最下部に意味不明の刻線が描かれている。812は口縁部に指頭圧痕紋が施されている。形態は甕というより大形鉢に近い。
- S K 50 813は細頸壺 Aa。体部はおそらく磨消ハケメ帯を施す。口縁部はヨコナデされている。814は細頸壺 Ab。櫛描紋が施されている。
- S K 135 818は底部の作りが薄いので甕Dだろう。焼成後穿孔の有孔土器。819は焼成前の有孔土器。形態は甕形で、口縁部には指頭圧痕紋が施される。820は体部上半にハケメ工具の直線紋を施す甕D。口唇部は垂下しハケメ工具で刻まれている。821は大きな円孔を配する器台状の土器である。円孔の上下には浅い沈線が施されている。口唇部の内側が剥落しているため、上部に組み合う部分が載っていたのかもしれない。円孔や内面にはケズリ痕が顕著に残る。
- S K 206 824は小さな円孔を穿つ器台状の土器。
- S K 249 829は太頸壺 A (櫛描紋系)。口縁部は強くヨコナデされ口唇部は凹面をなす。口唇部は上下端にハケメ工具の刻み、内面には波状紋が施されている。頸部は櫛描直線紋の上に二枚貝刺突紋が加えられている。830は太頸壺 A (磨消線紋系)。口縁部内面には円形浮紋の貼り付け痕が認められる。
- S K 287 831は口唇部に板?による刻みの施される細頸壺 Aa。体部は磨消ハケメ帯が施されている。
- S K 292 832は甕 Ab。口縁部内面にハケメ工具の刻みを施す。
- S K 296 833は磨消ハケメ帯系の細頸壺 Aa。834は口唇部と屈曲部外面に二枚貝刻みを施すB系統壺。
- S D 12 835は深鉢 Cb に類似するが、口縁部内面にはハケメの後に櫛ではなくハケメ工具の刻みを施し、体部外面も櫛 I 種 A 類の条痕を施す。A 系統との折衷型であろう。836は口縁部のやや垂下する太頸壺 A (櫛描紋系)。837は頸部は櫛描紋だが体部は磨消線が施される。細頸壺と同様の紋様構成を示し、非櫛描紋化がうかがえる。838はB系統の太頸壺。口縁部には

付加沈線二枚貝刺突紋は波状に施されている。黒色仕上げ。839は高杯の脚部。

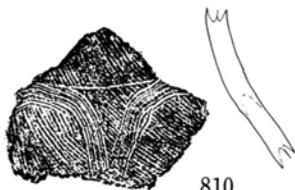
包含層 809は無頸壺で体部に櫛描連弧紋を施す。櫛原体はIII種のような。口縁部外面には管状工



809

具で圧痕を施した円形浮紋がめぐる。810は壺の体部上位で櫛描連弧紋が観察できる。どちらも、B系統と関係があり、折衷型だろう。

841はラッパ状に開く口縁部をもつ壺である。櫛描紋系であるが、e系のかなり稚拙な表現である。頸部の横位櫛描直線紋の下に施されている縦位弧線は、あまり見ない紋様である。



810

842は口縁部の垂下する形態を有する太頸壺A。口縁部内面には円周4分割の位置に3本1単位のハケメ工具圧痕を施した棒状浮紋が貼りつけられている。体部は沈線と磨消線が交互に施されている。

843は細頸壺 Aa (磨消線紋系)。縦位に粘土紐と波状紋が施されている。磨消線は粘土紐のところで切れている。体部下半には焼成後穿孔がある。

第143図 連弧紋をもつ土器

844は頸部に隆起をもつ細頸壺 Aa(櫛描紋f)。口縁部には円形浮紋2ヶに棒状浮紋3本が挟まれたものを1単位として4単位施されている。櫛は非常に細密、櫛I種A。折衷型。

845は体部に沈線を施すだけで研磨のない細頸壺 Aa。

846はB系統壺。紋様に櫛描紋が使われず、沈線紋を主とする。形態はIII-1期B系統壺に近い。体部には、沈線で連弧紋と「ハ」字状垂下紋を施した後、平行沈線間に二枚貝刺突紋を→方向に施している。おそらく、体部下半は連弧紋構成であろう。

847は沈線斜格子紋を施す精製鉢。研磨ははっきりしない。848は口縁部に鋭い刻みを施すが外面にケズリ痕を残したままの鉢。とても精製には含めることができない。

849・850は鉢 Ac。どちらも甕成形第1段階からの製作。

851は甕 Ac だが、口縁部には指頭圧痕が施される。底部は成形dなのでD系統との折衷型である。852は甕 Af。853は甕 Ab。



1514

854は口縁部内面にハケメ工具刻み、体部上半に二枚貝直線紋を施す。855は甕 Ad。856は大形鉢A。口縁部は「く」字状に外反し新しい特徴を示す。

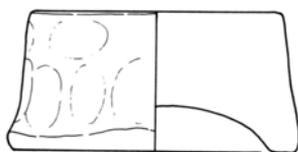
857は波状口縁をなすかどうか不明であるが、有段波状口縁甕の系列に属す。

土製品

1512は土製円板。1513はミニチュア土器。

1514は上面に刻線で図形が描かれている。

SK315から出土。



第144図 線刻のある脚状土製品



1512



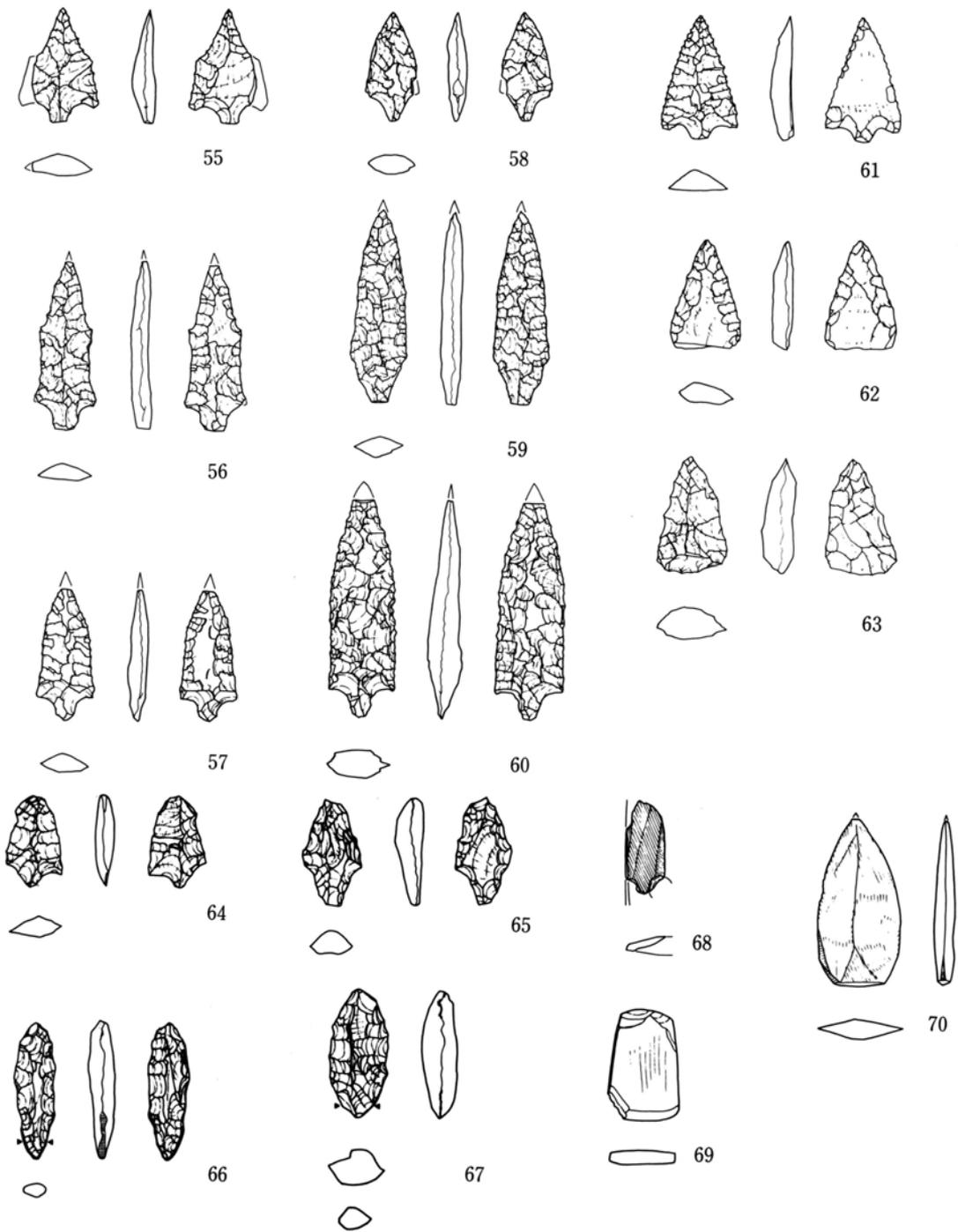
1513

第145図 土製円盤他

石器

石鏃

有茎五角形系は6点ある。a類(58・59)、b類(60)、c類(55・56)である。c類のうち55は上部2角の先をかなりくりこんで突出させているし、56も逆刺状に突出させている。三角形系は61で、側縁は鋸歯状をなす。無茎は三角形1点のほか、つくりの雑な63がある。



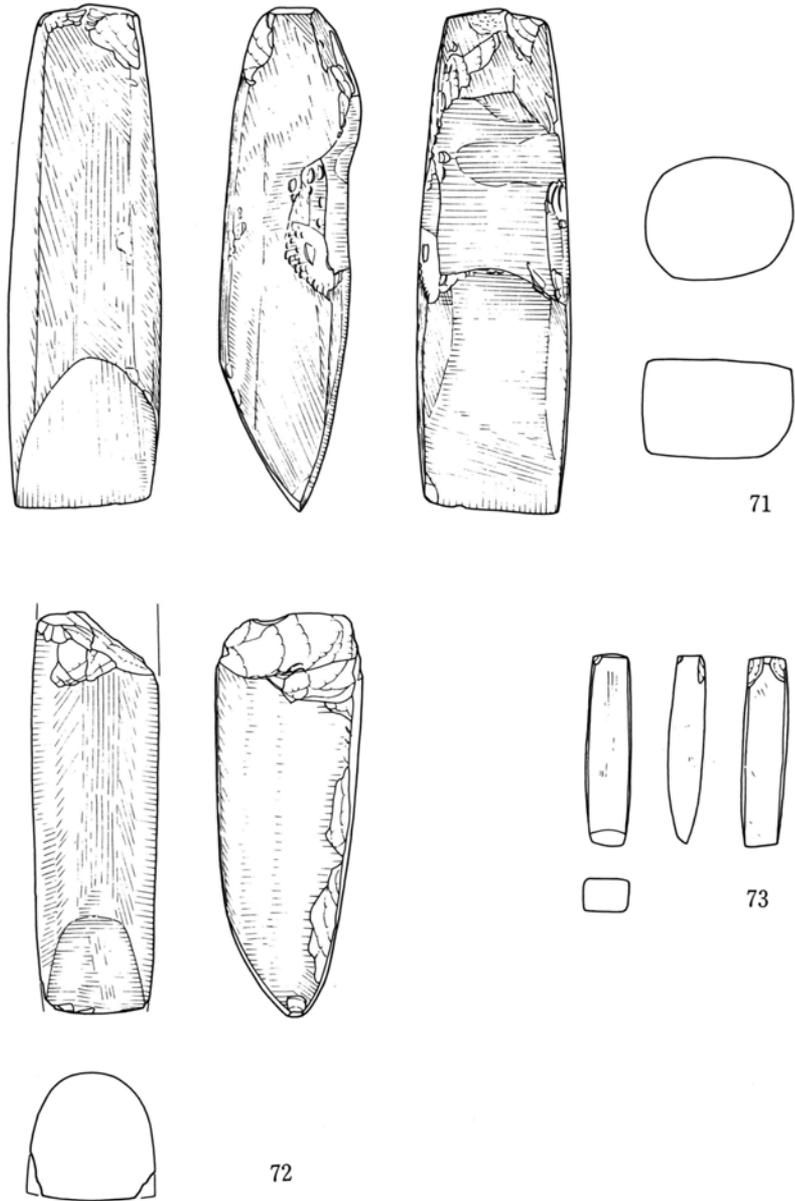
第146図 石器 (1)

**石錐** いずれも有軸である。64・65は石鏃の転用というには形が悪い。もともと有軸用として製作されたのであろう。66・67は凸基無茎形の有軸石錐である。使用痕は上下両端にある。

**磨製石器** 68は石剣か穂摘具の破片。70は石鏃。69は周囲に研磨された面を持つ。

71・72は抉入柱状片刃石斧。71は、抉部のつくりは丸っぽい。72は、住居とは確定できなかったが、炭化物や灰が厚みもって面的に散布する部分から出土した。73は小形柱状片刃石斧。

**その他 (図版48)** 砥石、叩き石。83の剝離面は周囲から打撃が加えられている。しかし、石材の目の粗さからいって打製石器の用材とは考えられない。



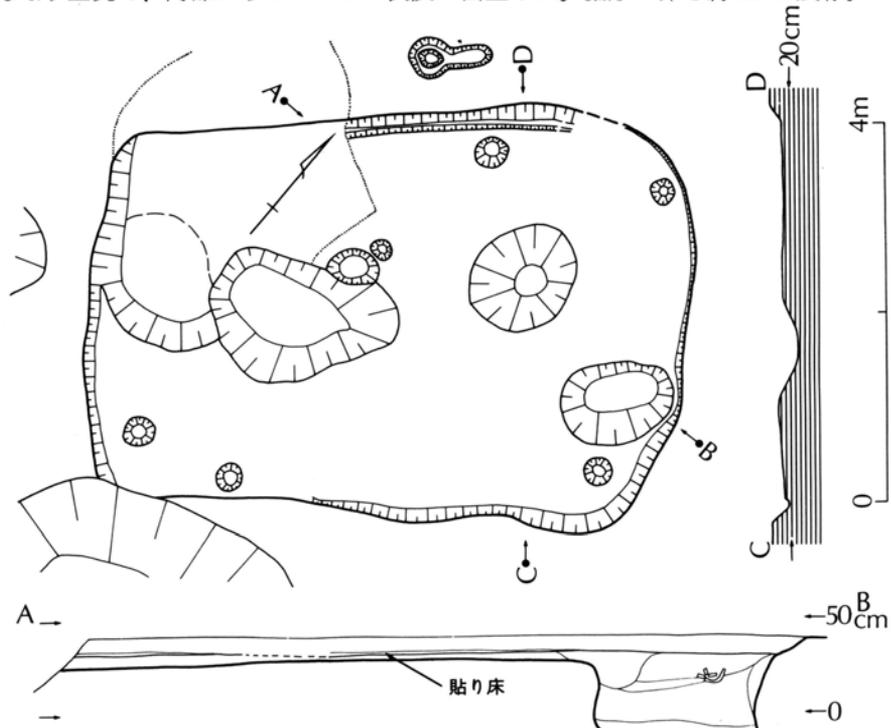
第147図 石器 (2) 71 SB71 73 SB36

### III 期

#### 遺構

SB05  
(図版7)

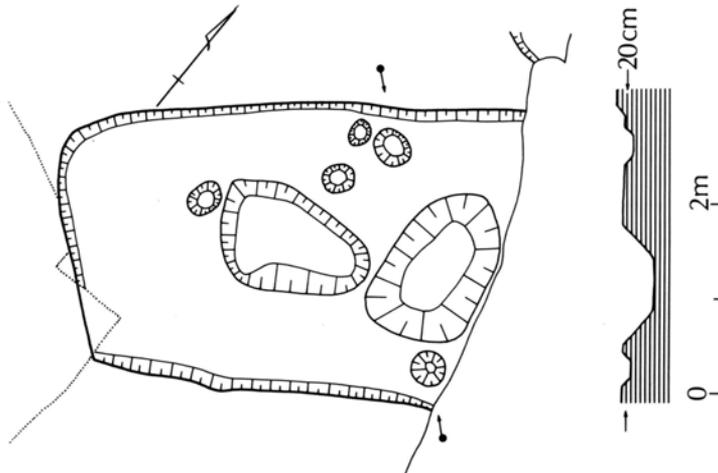
北東短辺のやや長い、不整な隅円長方形を呈する。長軸約620cm、短軸約410cmを測る。支柱穴は不明。周溝は北長辺に沿って部分的に検出した。貼り床がある。SK18は本住居にともなう土坑で、内部からドンダリの表皮が出土した。掘形は深さ約12cm残存。



第148図 SB05プラン・セクション (1:80) 土層セクション (1:40)

SB11  
(図版8・12)

長軸は500cm以上、短軸は約300cmの隅円長方形プランを呈する。掘形は深さ約10cm残存。支柱穴・周溝ははっきりしない。床面直上には多量の土器が遺存していた。

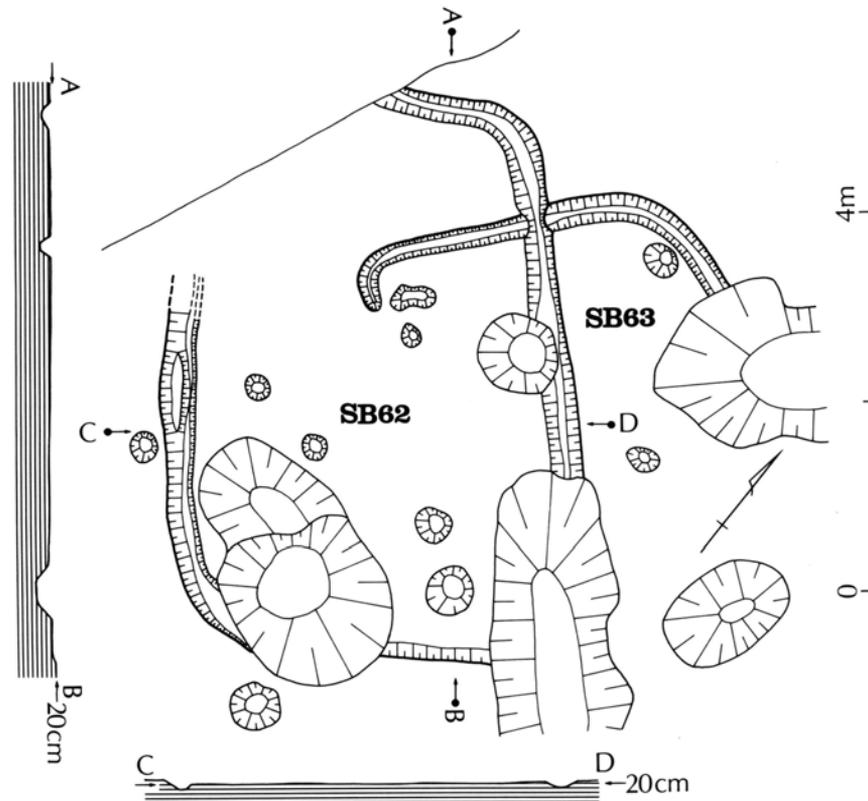


第149図 SB11プラン・セクション (1:80)

**S B 34**  
(図版11) 規模は不明。プランは隅円長方形のようだ。掘形は深さ約10cm 残存。床面直上には土器が遺棄されていた。

**S B 40**  
(図版12) 規模・プランなどはっきりしない。掘形は深さ約10cm 残存。多量に遺棄されていた土器群に混じって炭化材が認められた。土器の一部には風化したものがあり、二次火熱によるとすれば、焼失家屋であったかもしれない。多量の土器はその後の廃棄であろう。

**S B 62**  
(図版15) 長軸約600cm、短軸約430cm を測る、隅円長方形プランを呈する。掘形は残存せず、周溝と一部柱穴のみの検出にとどまった。

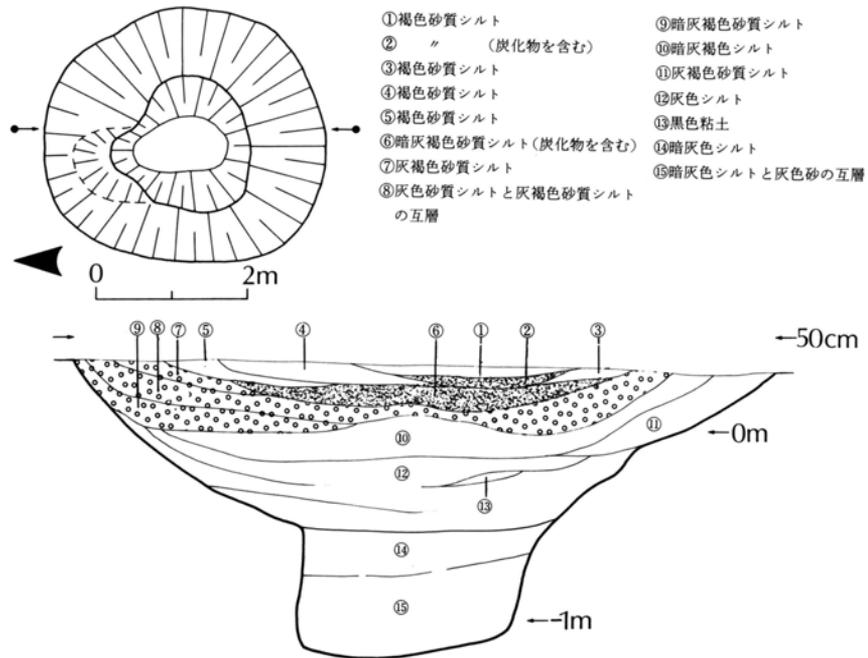


第150図 SB62プラン・セクション (1 : 80)

**S E 01**  
(図版 9) 断面ルート状で、径約300cm の不整形円形プランを呈する。深さは、皿状部分が約50cm , 下部の円筒状部分が約100cm を測る。III-1 期に掘削。

埋土は大きく3層に区分できる。1~6は炭化物層と黄灰色シルト層が交互に堆積し、また土器の廃棄もあり、廃棄土坑の様相を見せる(III-2期)。7~14は黄灰色シルトのブロックが混ざる層で、人為的に埋められていることがわかる。15は粗砂層からなり、下部からの吹き出しのようである。

廃棄土坑の様相を示す部分については、埋積中の窪地を廃棄用に利用したのか、あるいは再掘削して土坑にしたのかは明確にできなかった。

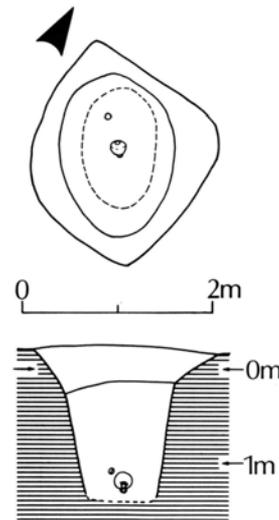


第151図 SE01プラン (1:100) 土層セクション (1:40)

**SE02**  
(図版9) 断面三角形で、径約170cm、深さ約130cmを測る。底面は粗砂層まで達しており、状況はSE01とおなじである。埋土も上部は人為的、下部は自然的である。

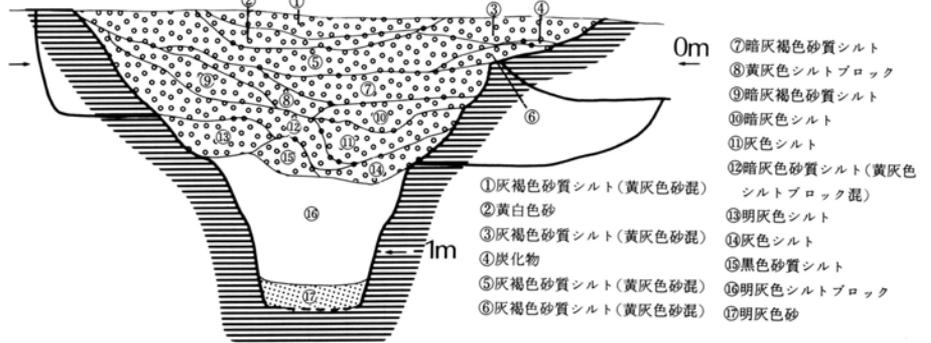
**SE03**  
(図版9) 上面は1辺約170cmの不整形方を呈する。断面ロート状で、深さ約160cm。底面付近からは、細頸壺926と口頸部を欠いた小型壺927が出土した。III-1期に掘削。

埋土は、最上部に炭化物を多く含んだ包含層が堆積しており、また土器も出土している。SE01と同様の様相を呈する。



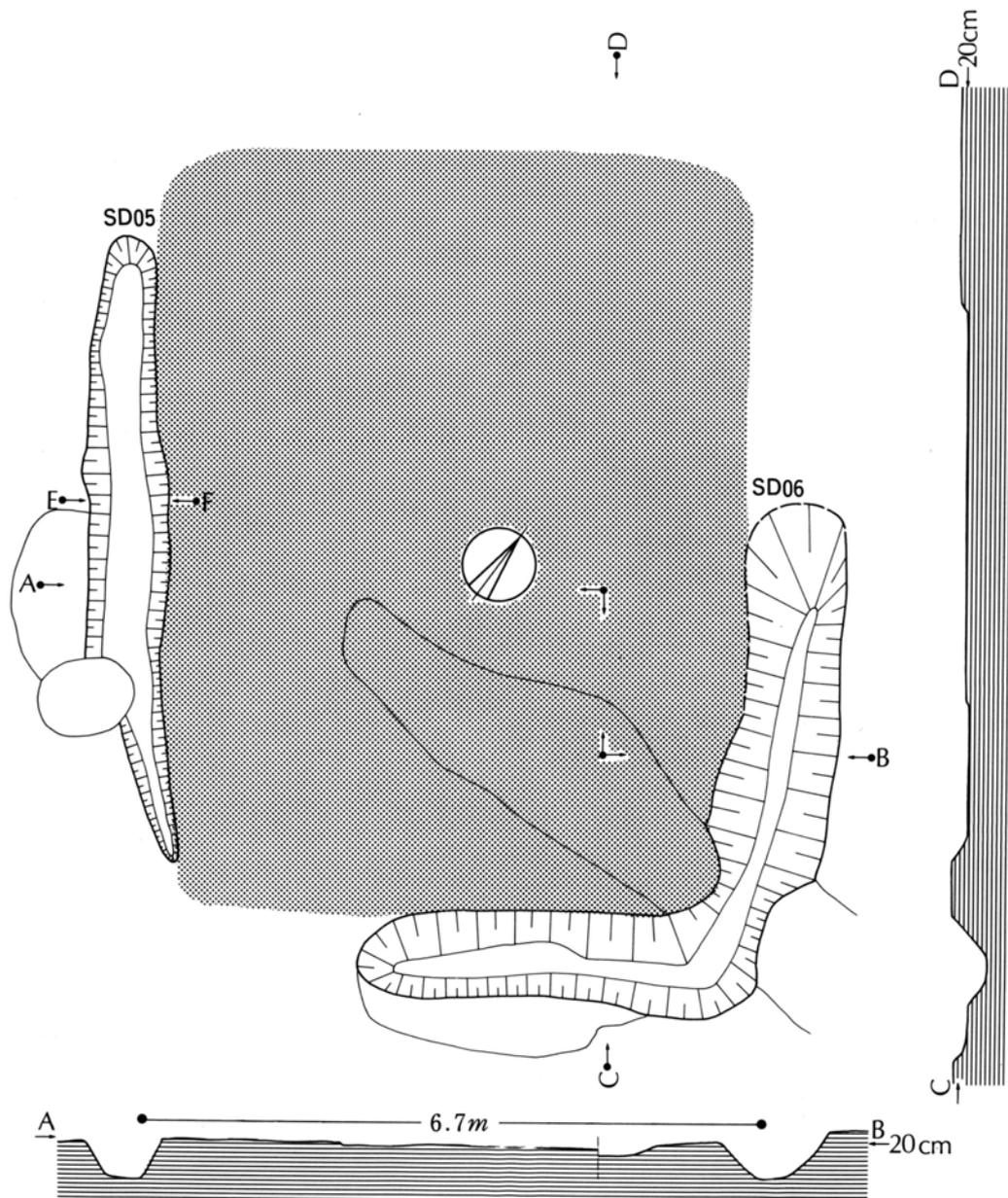
第152図 SE02プラン・セクション (1:80)

**SE04**  
(図版10) 断面ロート状で、径約235cm、深さ約160cmを測る。埋土は、黄灰色シルトのブロックからなる上層と単一層の下層からなる。底面は粗砂層に達している。



第153図 SE04土層セクション (1:40)

- SE06** (図版11) 上面は径約250cmの円形プランで、掘形の西側に幅約100cmのテラスをもつ。断面は逆台形で、深さ約110cmを測る。底面には板と木片の集積があったIII-1期に掘削。
- SE07** (図版11・12) SE06を切る。長径約180cm、短径約160cm、断面U字形で深さ約90cmを測る。埋土の断面では内部に上縁径70cm、底部径50cm、高さ約30cmの逆台形状を呈する抜き取り痕が確認でき、裏込めにはブロック状の土が詰められていた。SE06とともに底面は細砂層に達している。
- SZ01** (図版6・7) SD05とSD06で構成される方形周溝墓である。北辺の溝は未検出であるが、もともと無かったかどうかは、後世の攪乱によるところもあり、判断できない。しかし、仮にあった



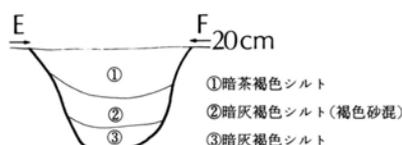
第154図 SZ01プラン・セクション (1:80)

としても、溝の深さは SD05や SD06に比べて浅いものであったろう。

SD05は、幅約90cm、深さ約40cm、長さ約700cmを測る。方台部側へやや弧状をなす。断面は、かなり立ち上がりの急な逆台形を呈する。もともと、溝幅は狭いのかもしれない。埋土は3層に区分できる。

SD06は逆「L」字状のプランで、幅は平均100cm、深さ約50cmを測る。SD05との間は220cmほどの陸橋部となっている。

規模は、おそらく東西軸が短軸で、方台部側下端ライン間で約670cmを測る。南北軸は確たる数値はだせないけれども、900cm前後になるものと推定する。



第155図 SD05土層セクション (1:20)

出土遺物は、SD05から大形壺が1点出土した。ほとんど溝底に接していたが、正立に据え置かれたもので

はなく、すでに破損した大形破片を重ねた状態に置かれていた。したがって、献供されたものが破損したからかたずけたのか、それとも別の性格を有するのかわからない。

S Z 02  
(図版 9)

SD08を1条検出しただけである。本来ならこれだけで方形周溝墓と断定するのは早計のそしりを受けることになるけれども、溝底から完全な形に復元できる土器が幾つか出土したこと、体部下半に焼成後穿孔の施された壺が出土していることなどから、方形周溝墓の溝の一部であると認定した。

とくに、当地方においてこれまでのところ、祭祀土坑といわれるような、儀礼的行為に関係すると思われる土器の出土状況が土坑や溝に伴った例は単独で検出されていないので、類似した在り方は方形周溝墓以外に思いつかないからである。

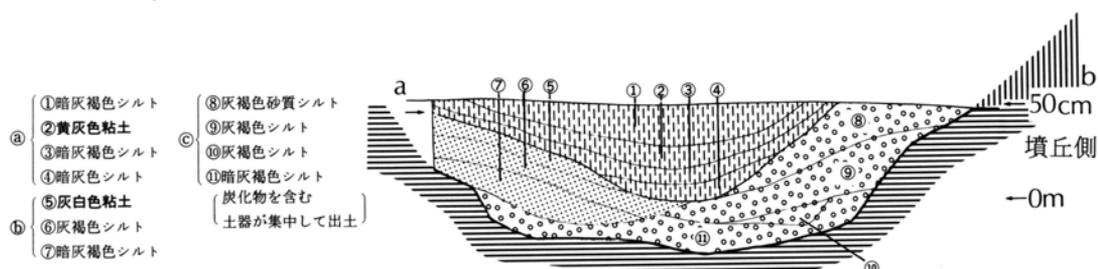
SD08は、断面逆台形を呈し、幅約300cm、深さ約80cmを測る。

埋土は大きく3層に分かれる。埋積土の色調は全体に褐色系であり、同時期の他の遺構に比べると、例えば環濠であるSD01やSD02などの上部に堆積している層位に近いという特徴がある。時期的に下がるのであろう。

㉔は方台部側から流れ込んでおり、墳丘?の崩落土であろう。土器はこの層位最下部からの出土である。

㉕は外側からの流れ込みである。

㉖は時期的には弥生時代以降の埋積土であり、環濠の上部を覆っている埋積土と共通する。



第156図 SZ02 (SD08) 土層断面図 (1:40)

S Z 03  
(図版13・14)

SD14・15・16の3条を検出した。西溝は未検出である。

SD14は、幅約160cm、深さ約50cm、長さ800cmを検出した。断面は逆台形で下場の幅は平均50cmであるが、陸橋部付近ではやや幅が広がっている。方台部側の下場ラインは直線的である。

SD15は、幅約200cm、深さ約50cm、長さ960cmを検出した。断面は逆台形で下端の幅は平均1mである。下端ラインは方台部側が直線的で、外側は蛇行している。

SD16はほんの一部分の検出であり、全体は不明である。深さは60cmを測る。プランに関しては全体の調査ができていないのでわからない。

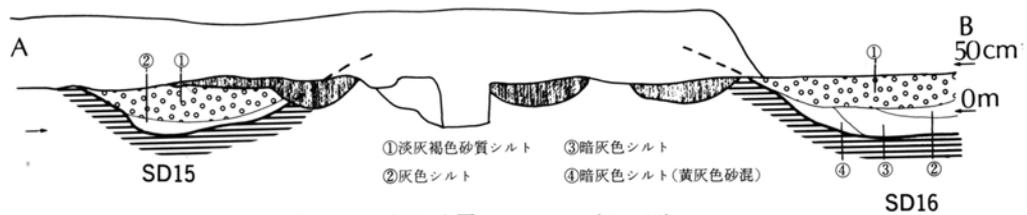
SD14とSD15の間には約50cmの陸橋部が存在するけれども、もともとの墳丘面が確認できない以上規模について確実なことはいえない。しかし、溝の下端ラインは、方台部側と外側で明らかに相違があり、規模復元の目安として墳丘裾となる方台部側下端ライン間の距離が有意であると考え。測定値はSD14とSD16の南北軸で約1360cmとなる。

出土遺物は、SD14は溝上半部から1個体分が潰れた状態で何点か出土した他、破片も多数ある。

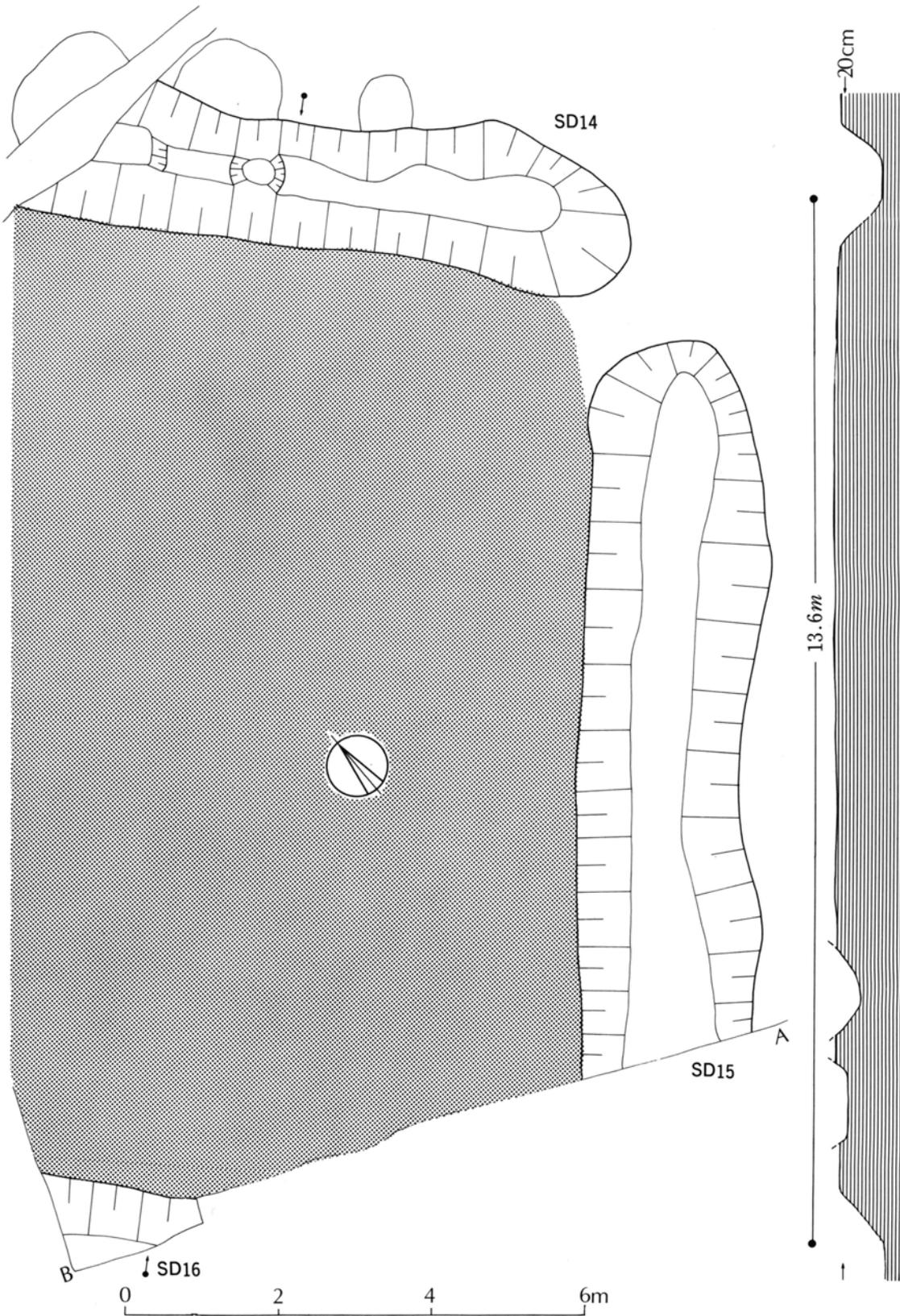
SD15も溝上半部からの出土であったが、SD14とは異なり破片が多かった。また磨製石剣(112)の破片が出土している。

これら遺物群は、ほとんどが溝上半部の出土であり、完全に復元できるものも上下逆転して潰れているので、墳丘上から転落したものと考えられる。したがって、溝内部での献供行為はなかったものと推定する。しかし、破片も含めてすべてが墳丘上で献供されたものかは確定できない。甕など復元不能なものは周溝への廃棄であった可能性もある。

この廃棄に関しては、それをすべてなんらかの形で方形周溝墓葬に伴ったものであるというつもりはない。単純な廃棄が含まれている可能性が排除できないからである。



第157図 SZ03土層セクション (1:80)



第158図 SZ03プラン・セクション (1 : 80)

**SD01** 規模は幅200~400cm、深さ80~120cmの、やや蛇行するプランの溝。断面は、スリパチ状に傾斜する壁面が下部でさらに一段箱掘りされている。底面の幅は25cm程度と狭い。

調査区内で検出した45mほどは底面の標高にばらつきがあり、西端と東端が-15cmと浅く、それ以外は平均して-35cmであるが、西端手前のカーブした部分では-45cmと深くなっている。

埋土は、下層は灰褐色系統のシルトで、上層は黄白色粘土層を含む弥生時代以降の堆積層が覆う。III-1期の土器廃棄が行なわれている。

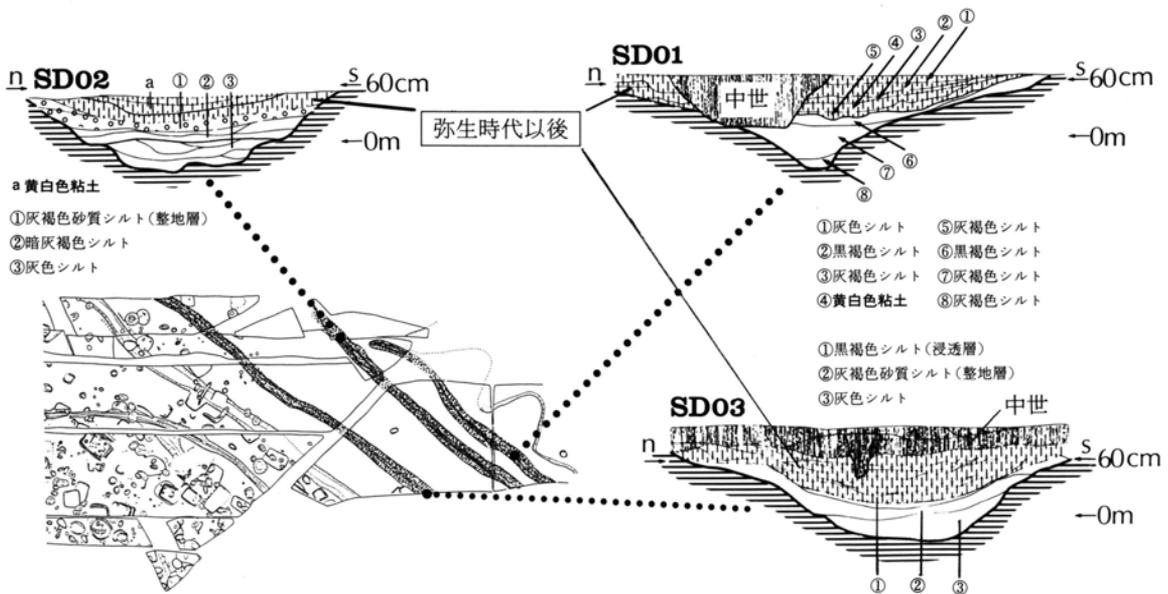
**SD02** 規模は幅340~400cm、深さは平均120cm(底面標高は-36~-55cm)の、ほぼ直線的に延びる溝である。SD01がカーブして対向する部分は幅420cmと少しひろくなっている。断面は、逆台形を呈し、下部にはSD01のような箱掘り部分が認められる。また、土層セクションでは溝の再掘削が確認できている。III-1期の土器廃棄が行われている。

埋土は、下層の灰褐色系統のシルトと上層の黄白色粘土層をまじえる褐色シルトの間に灰褐色砂質シルトが堆積しており、ある時期に整地された可能性を示す。

**SD03** 規模は幅平均300cm、深さ120~130cm(底面の標高は-55~-65cm)で、SD02に平行して走る。断面は逆台形で、下部に箱掘り部分は認められない。

埋土はSD02に類似しており、中層に灰褐色砂質シルトの堆積がみられた。溝内に廃棄された土器群はこの灰褐色砂質シルトに覆われており、廃棄の過程において堆積したものと推定する。III-1期~2期の土器廃棄が行われている。

この整地層の可能性のある堆積層の由来については、内部に土器などの遺物があまり含まれていないことから包含層を削ったものとは考えられない。SD01にみられないことも考え合せると、SD02・03間にあった土(例えば土壘状の高まり)を削ったものかもしれない。



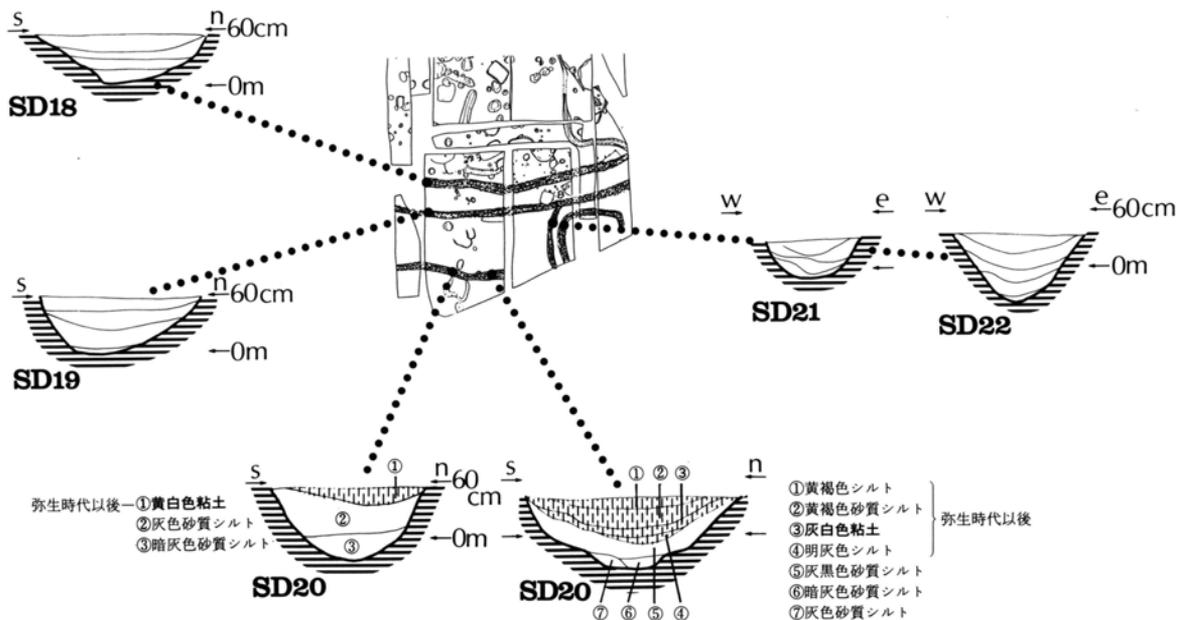
第159図 環濠土層セクション (1:80)

※ n:北 s:南

- S D 18 規模は幅平均200cm、深さは60cm(底面標高は5~15cm)と浅い。断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色砂質シルト層からなる。III-1期の土器廃棄が行われている。
- S D 19 規模は幅平均200cm、深さは60cm(底面標高は-5~10cm)と浅い。断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色砂質シルトからなる。主にIII-1期の土器廃棄が行われている。
- S D 20 規模は幅平均200cm、深さは80cm(底面標高は-10~-20cm)とやや深い。断面はU字形に近いが、東端付近では下部が一段箱掘り状に深くなっている。溝は東隣の調査区(591区)へ続いているので、両調査区の境界あたりで終息していると思われる。
- 埋土は、上層を黄白色粘土層をまじえる弥生時代以降の堆積層が覆っている。この層は西から東へ厚くなる。こうしたことに関連してか、この溝のみIII-2期以後の土器廃棄が行われておりIV期の土器もかなり下部からも出土している。
- S D 21 SD19から派生するやや規模の小さい溝。南端は不明だが、谷Aに接続するならSD19の排水路の可能性も生じる。
- S D 22 規模はSD19と同程度。調査上の制約から全形を明らかにするには至らなかったが、方形にめぐる可能性もある。このSD22で囲まれた部分は、囲郭集落の外郭を構成する方形区画遺構(SX15)として認定した。東西幅は約15cmを測る。

SD18~SD20の溝3条は、上部がかなり削平されているようで、本来の形状を把握することは難しい。だが、幸いなことに底面はそうした影響を受けてはいない。

溝の底面標高は3条の溝とも同じではなく、南から北へいくにしたがって高くなる。溝の規模が大差ないものであったとするなら、地表面標高が北へ上昇することを示唆すると考えられる。とくに、南に谷Aがひかえていることを考えるなら、この地区は全体に南へ傾斜していた可能性が高いのである。



第160図 環濠土層セクション(1:80)他

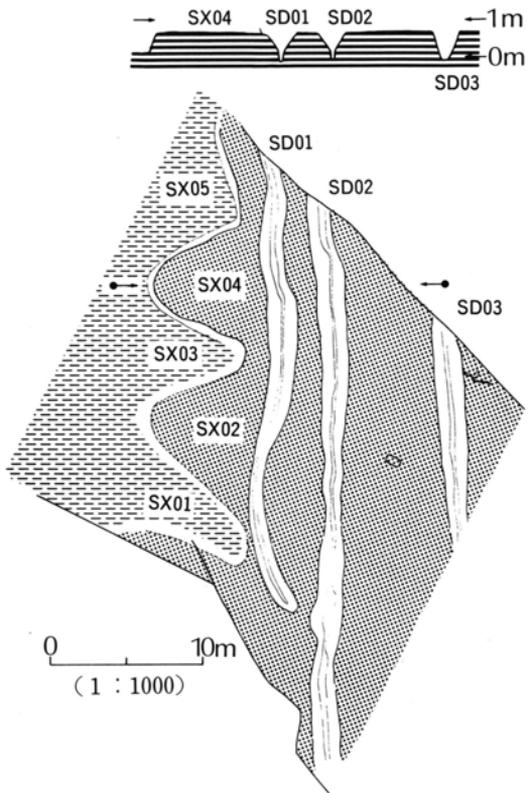
※ n:北 s:南 w:西 e:東

S X 01 SD01のすぐ北には比高約50  
 S X 05 cm の段差がある。段差は蛇行して突出部 (SX02・SX04) と湾入部をつくっている。東部は段差が SD01に平行するので、こうした部分もそれほど長いものではないようだ。あるいはこれらが1組の単位としていくつか点在するのかもしれない。

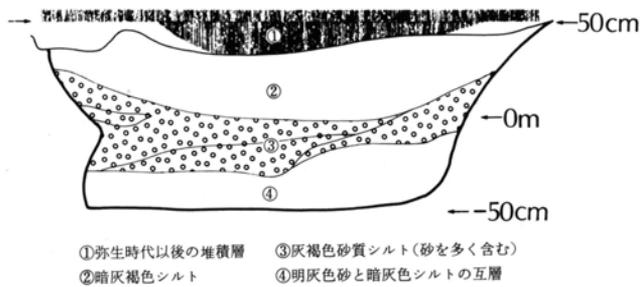
突出部のうち全体を検出できた SX04は、ヨコ約1600cm、タテ約1200cmを測る。両端基部 (湾入部の先端) とSD01の間隔は約 300cmを測る。突出部は検出時には上面がほぼ平坦であったけれども、すでに中世の削平をうけており、本来の構造は不明である。しかし、段差の斜面はかなり急傾斜につくられているので、さらに高ければ溝の壁面と同じ効果を有したものと考えられる。

S X 13 (図版11)  
 S K 01 (図版 6)

确实墓遺構であるとは言えないが、土器の組み合わせから土器棺の可能性はある。居住域の外で検出した土坑である。プランは1辺250cm程度の隅円方形で深さは約100cmを測る。底面は平坦でスキ身の未成品のような木器が出土した。埋土は中層に灰褐色シルトが堆積し、状況は SD02や SD03とよく似ている。上層には弥生時代以降の堆積層である暗褐色シルト層が覆っており、一定期間窪地状をなしていたことがうかがえる。



第161図 突出部および環濠プラン (1 : 1000)  
 セクション (1 : 200)



①弥生時代以後の堆積層 ③灰褐色砂質シルト(砂を多く含む)  
 ②暗灰褐色シルト ④明灰色砂と暗灰色シルトの互層

第162図 SK01土層セクション (1 : 40)

SK23  
(図版9)

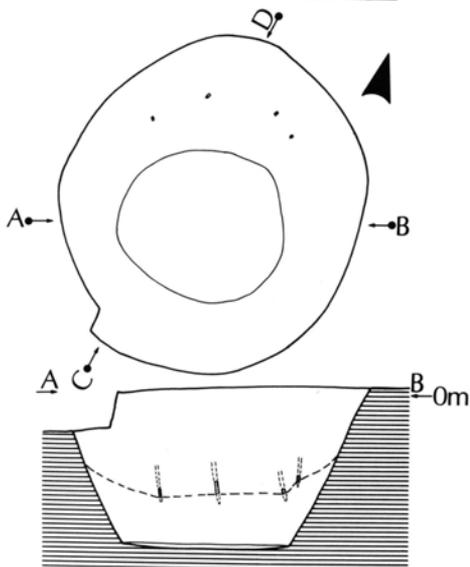
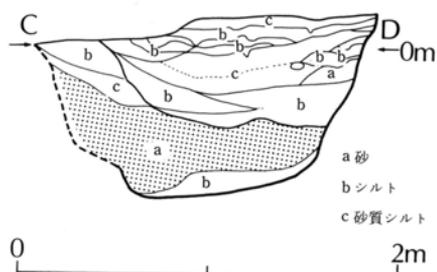
直径約160cm、深さ約40cmの断面逆台形を呈する土坑である。埋土はもっぱら砂層からなる下層と細かい堆積層に分かれる上層に区分できる。

壁面は、SD04との重複箇所にて径2～3cmの細い杭を打ち込んで擁壁とした部分があった。

出土遺物は、土器が下層と上層からそれぞれまとまって出土している。

土坑にはI期のところで区分した類型がそのままあてはまる。下の写真はc類の典型として提示したSK251である。炭化物・灰・焼土が規則的に堆積を繰り返している。この土坑の場合には黄灰色シルト層の堆積がなく連続的に廃棄が行われたようである。とくに、各層がブロック状ではなく薄い層の縞状堆積である点は廃棄のあと土坑内部でならしが行われたのであろうか。

この他、III期の土坑には土器の廃棄されたものが以前に比べてやや多く認められた点が指摘できる。



第163図 SK23土層セクション・プラン・セクション



第164図 SK251土層セクション写真

## 〈囲郭集落〉とその後

**環濠** 居住域外縁部を平行して取り巻く溝は、間隔が北と南で異なるがいちおう同時存在を前提として、基本となるSD02—SD18、SD03—SD19という関係と、断続するかもしれないSD01—SD02という関係が想定できる。そして、それら3本は溝底部の標高が一定でなく、傾斜も一定方向でないので、湛水することはあっても水路的な役割はなかったと考えられる。この点で、SD22の西を南北に平行するSD21はSD19に接続しているので一見排水路的な役割が想定できそうであるが、調査担当者によれば両遺構は切り合い関係にあるとのことであり、同時存在を証明できない以上排水路としての性格は除外される。SD20は溝の東端部へ下降しているのもそのまま谷Aに接続する雰囲気を見せている。しかし、これも埋土が特徴的であって端部の確認を誤ることはないと思われるので、排水路としての性格は除外される。ただし、この部分の旧地表面が北から南へ傾斜していたような形跡がSD18・19・203条の溝底面レベルの変化から伺えるので、仮に谷Aに対してSD20東端部が開放していなくても、オーバーフローするかたちでの排出および浸透による湛水の解消はあったかもしれない。いずれにしても、これらの溝に特に排水機能は想定できない。

**土塁** 溝の埋没状況からみると、外郭外縁のSD01—SD20は自然埋没を呈しているのに対し、基本となるSD02—SD18、SD03—SD19は廃棄された土器群とは別に人為的な堆積層（整地層）が観察できた。この堆積層の由来によっては近接して土塁が存在した可能性が浮上するけれども、鎌倉・室町時代までの削平が大きく影響しているので今回の調査では明らかにならなかった。しかし、SD01・SD02間は通路的な役割が想定できることを重視するならSD02・SD03の南側に、SD18・SD19の場合はその間およびSD18の北側に存在した可能性はある。

**環濠の消長** 溝の掘削と廃棄・埋没の順序は、掘削はほぼ同時（恐らくII期末）に位置付けられるが、埋没に関しては居住域との位置関係もあって若干のズレを見込まなければならない。総じて言えるのは、溝の埋没は一定期間の自然堆積を経たうえで人為堆積が行われていることである。つまり、環濠掘削後ある期間は環濠の維持管理は行われたかもしれないが、それほど時を置かず機能を喪失して後は廃棄の場に転用され、基本濠に関しては整地も行われたようである。埋没の順序は南のSD18・19が早くIII—1期に埋没するが、北のSD3はIII—2期まで廃棄が継続されている。南の埋没がなぜ北より早いかは、谷Aの平坦化と関係があるかもしれない。それに対し、北は突出部以北において湿地的な状態が以降も長期にわたって続くようであり、そのことが特に溝の整地と平坦化を促すことにならなかったのかもしれない。

**居住域の縮小** III期の環濠埋没は、しかし居住域の拡大を意味していない。新しい生活様式としての井戸の廃絶がIII—1期にすでに始まっていることを重視するなら、環濠廃絶後の集落は極めて浮動的であったといえる。あるいは、集落の連続性は一旦途絶えたかもしれない。

## 遺物

### 土器

S B 05 858は甕 Wa。口唇部にはハケメ工具刻み。

体部外面の調整はまず細かいハケメ調整が左下がりに施され、その後タタキ調整が下から上に施され、最後に粗いハケメを上下から分けて施す。口縁部にはタタキ痕が及んでいないので、タタキ調整は口縁部成形後に行われているようだ。

口縁部は粘土紐を付加して成形しているため、体部から続く左上がりの一次調整の細かいハケメは口縁部の中ほどで消えている。口縁部に観察できる右上がりのハケメは口縁部成形時のものであろう。

体部内面は下半にケズリが施されている。

859は焼成前穿孔の有孔土器。W系統。

860はA系統台付甕。脚台部は内彎気味である。

S B 11 III-3期。861~869はW系統。861は口縁部が小さく受口状をなす短頸壺。頸部は押し引き状の簾状紋、以下には櫛三種(2・3・2)直線紋と波状紋。その上に縦位に磨消線3条。

862は台付円窓付壺。口縁部には2条沈線後に回転ヨコナデ、体部は外面にケズリをそのまま残す。口縁部と脚端部には回転ヨコナデ。端面は微妙に凹面をなす。

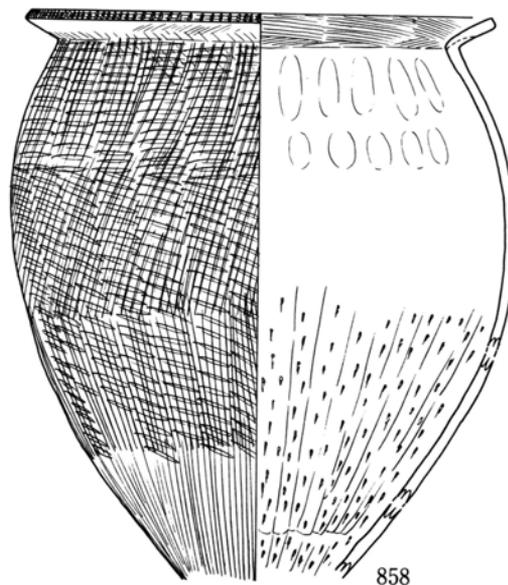
863~865は高杯 Wb。口唇部に沈線を施した後回転ヨコナデを加える例と波状紋を施すものがある。

866は高杯 Wc。口縁部に3条沈線後に回転ヨコナデ、この下に櫛というよりハケメ工具に近い原体で右下がりに連続圧痕と左下がりの押し引き紋(→方向)を施す。867は高杯脚部。沈線と鋭い切り込み状の斜格子紋、円孔列を施す。脚台の端部は回転ヨコナデが施され、端面には凹線を残す。脚台端部の形状や内面のケズリは珍しい。

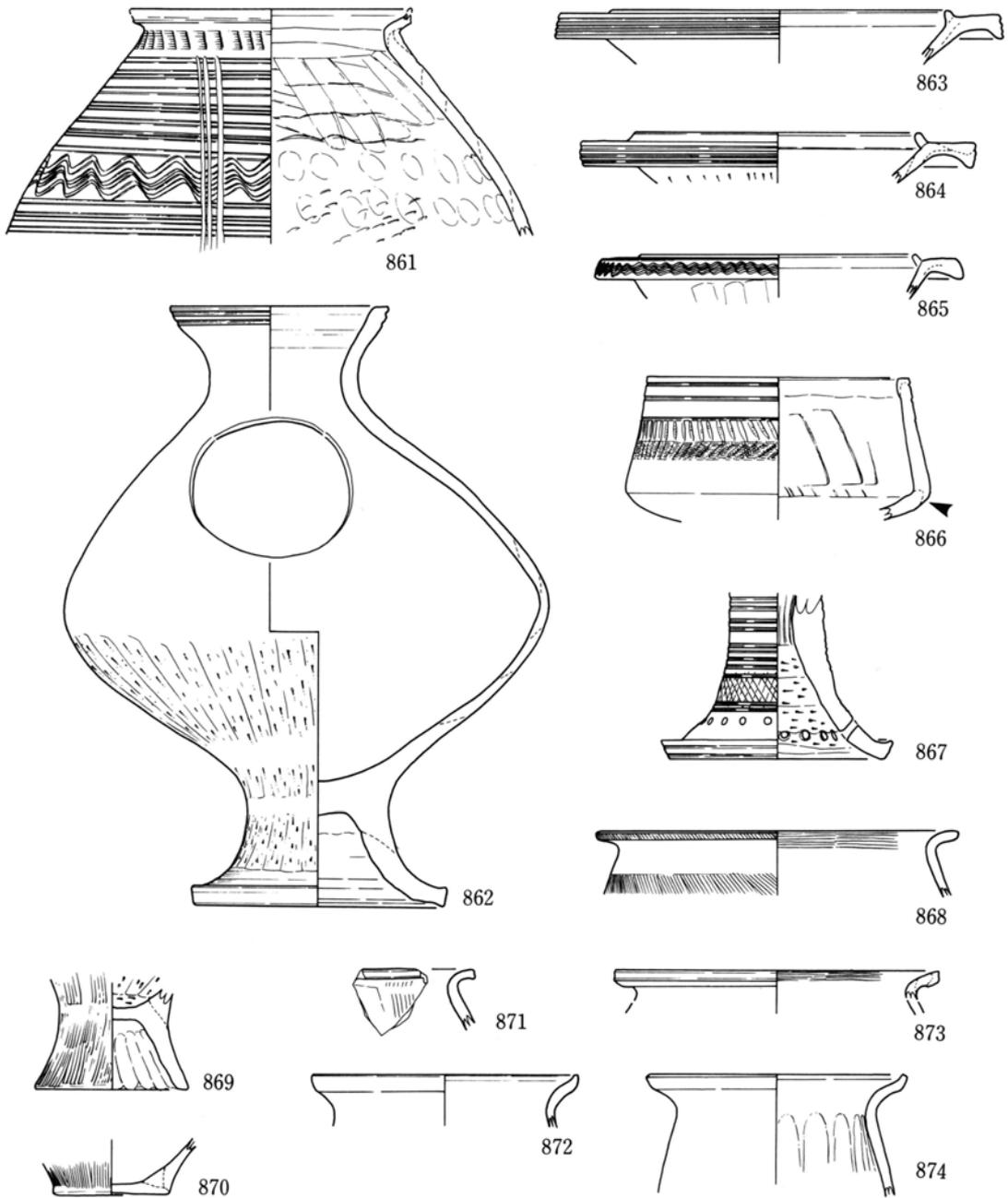
869は台付甕 Wb。やや外反気味の立ち上がりで、内面にはユビオサエ痕を残す。

870は甕 W。底部成形は d。

871・873は口縁部に回転ヨコナデが施され口唇部は凹面をなす。



第165図 SB05出土土器



第166図 SB11出土土器

873・874は口縁部が受口状をなす。調整はナデを基本とするようだ。

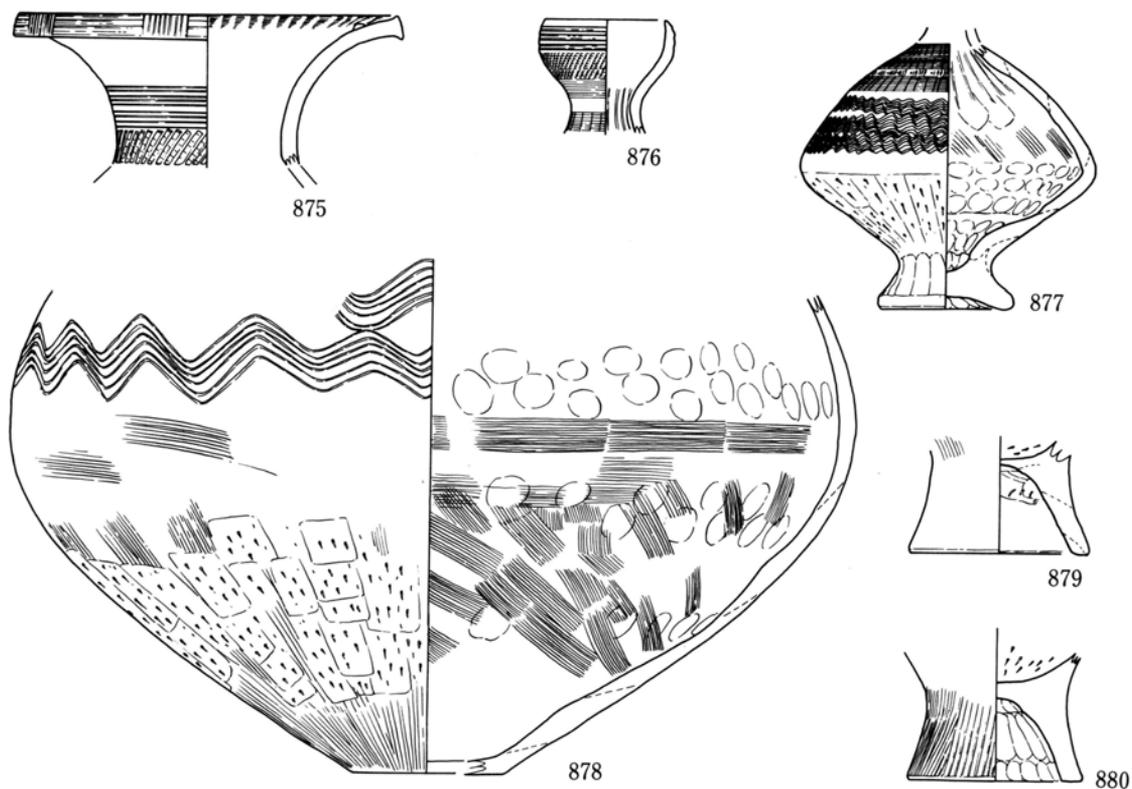
SB34 III-3期。875~880はW系統。875は太頸壺 Wa。口唇部が上下に小さく拡張され、口縁部内面には扇形紋と小さな瘤状突起、口唇部は回転ヨコナデで凹線を残し、その上を櫛で縦位に切られる。頸部にはハケメ工具の連続圧痕。

876は細頸壺 Wa。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ。以下には櫛の押し引き紋(→方向)2段、直線紋、簾状紋と続く。

877は876と同一個体か。台付壺。体部上半には簾状紋2段→扇形紋1段→簾状紋1段→波状紋3段という順序で施紋(←方向)され、下半はケズリを残す。

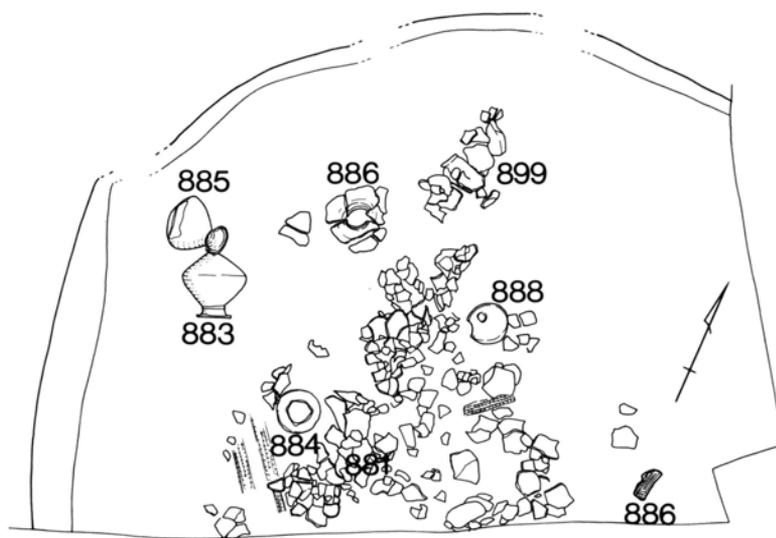
878は壺の体部で、上半に波状紋、下半はケズリを残す。

879・880は台付甕 Wb。880は脚部内面にユビオサエ痕を残す

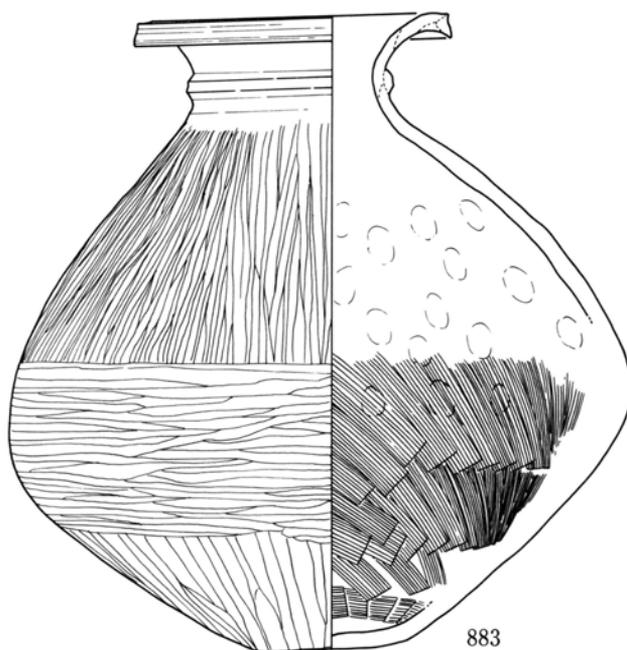
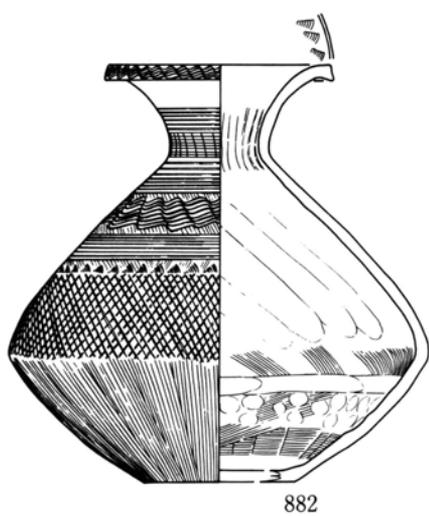
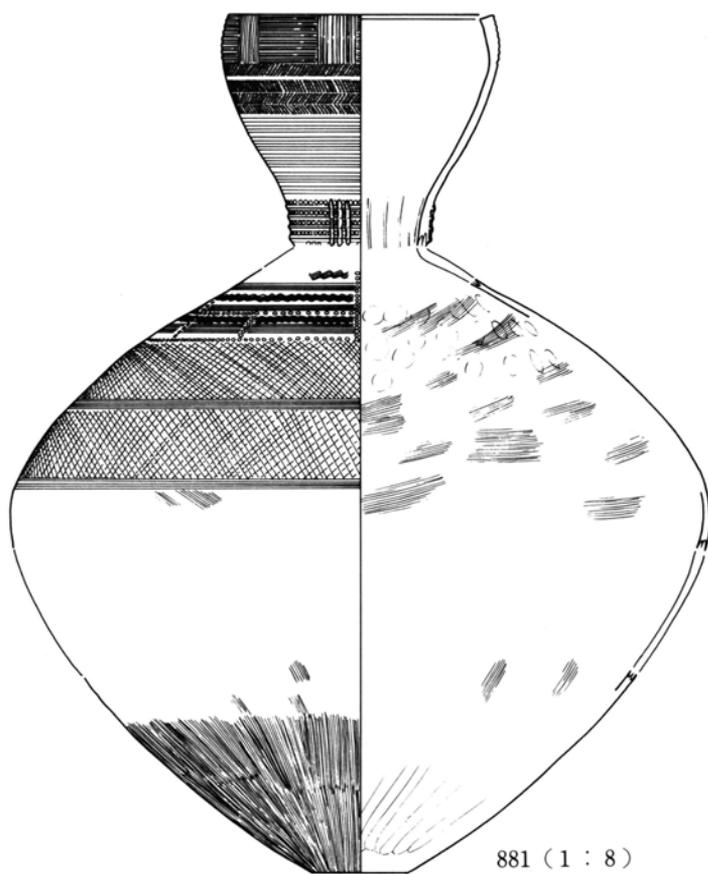


第167図 SB34出土土器

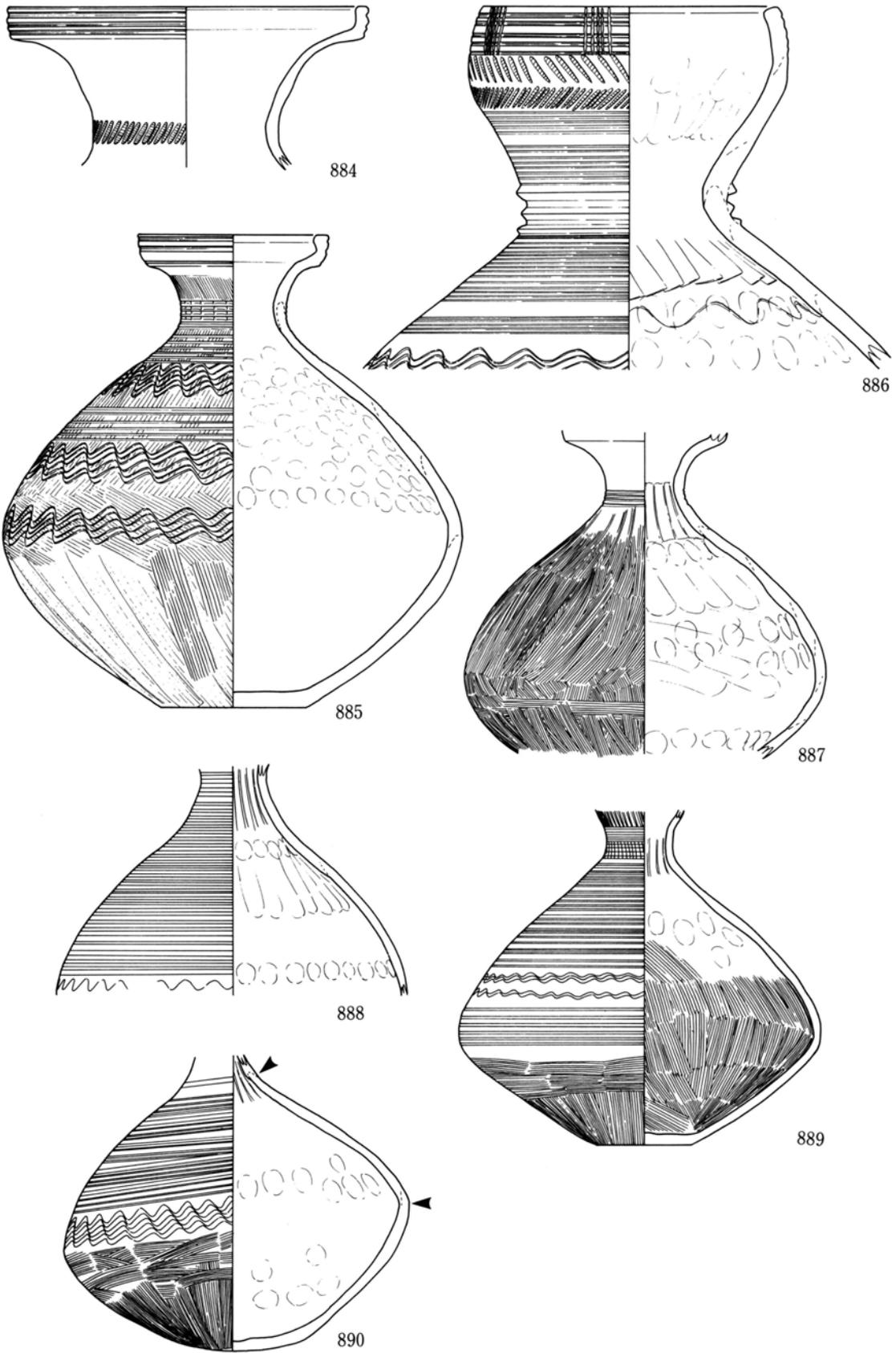
- S B 40** III-3期 893~896・904以外はW系統。881は器高約90cmの大形壺。形態は細頸壺 Wa を大形化したもの。口縁部は、8条沈線後に回転ヨコナデ、それを縦位に櫛で切る。その下は櫛押し引き4段→直線紋。頸部は、断面三角形の貼付突帯4条→突帯間に管状工具で刺突紋→縦位に粘土紐を3条1単位で複数箇所垂下させる。体部は、直線紋と波状紋を反復した後、管状工具で縦位分割と横位に刺突列、その下は斜格子紋と直線紋の反復。
- 882は太頸壺 Wa を小さくした形。口縁部内面に扇形紋、口唇部には波状紋、頸部以下は直線紋→簾状紋→直線紋→波状紋→直線紋→扇形紋→斜格子紋。
- 883は太頸壺 Wa。口頸部以外全面研磨の壺。口縁部や頸部の突帯部分は回転ヨコナデが施されている。
- 884は太頸壺 Wb。口縁部に3条沈線後に回転ヨコナデ。頸部にはハケメ工具の連続圧痕が施されている。
- 885は形態的には細頸壺 Wb系。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ。頸部は簾状紋以下直線紋→波状紋を反復して波状紋2段。体部下半は条線を明瞭に残さない板ナデ。体部内面上半はユビオサエ痕を顕著に残す。
- 886は881よりはやや小振りと同形の大形壺。口縁部は5条沈線後に回転ヨコナデ、それを縦位に櫛で切る。その下はハケメ工具の連続圧痕を羽状に2段。以下直線紋。頸部は断面三角形の貼付突帯3条。体部は直線紋、波状紋が施される。
- 887は頸部に3条沈線を施すだけで体部無紋の細頸壺 Wb。



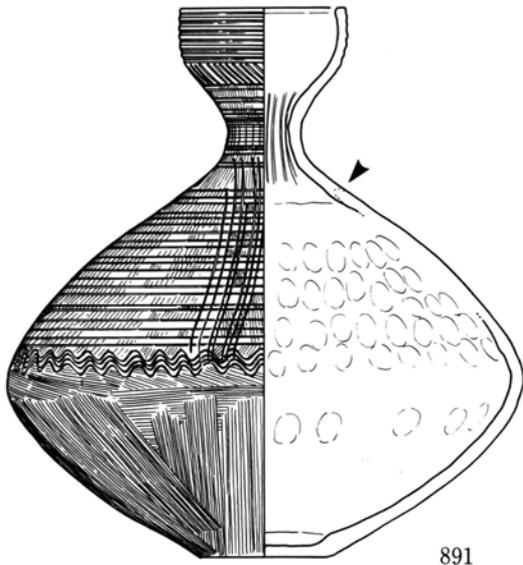
第168図 SB40土器出土状態 (1:40)



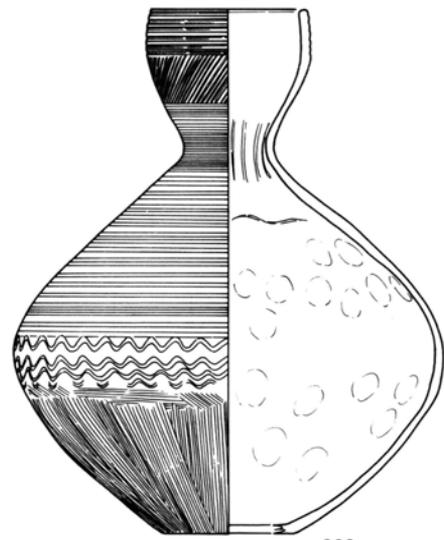
第169图 SB40出土土器 (1)



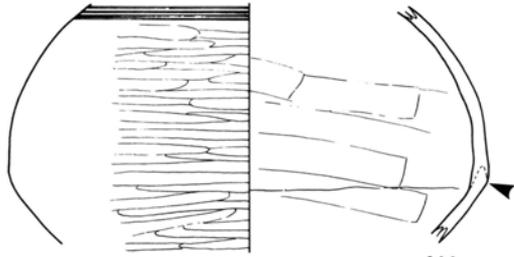
第170圖 SB40出土土器 (2)



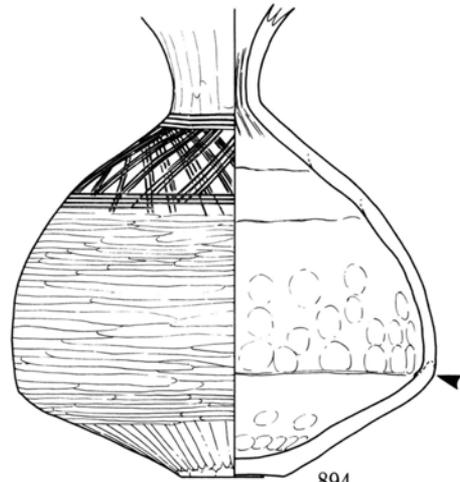
891



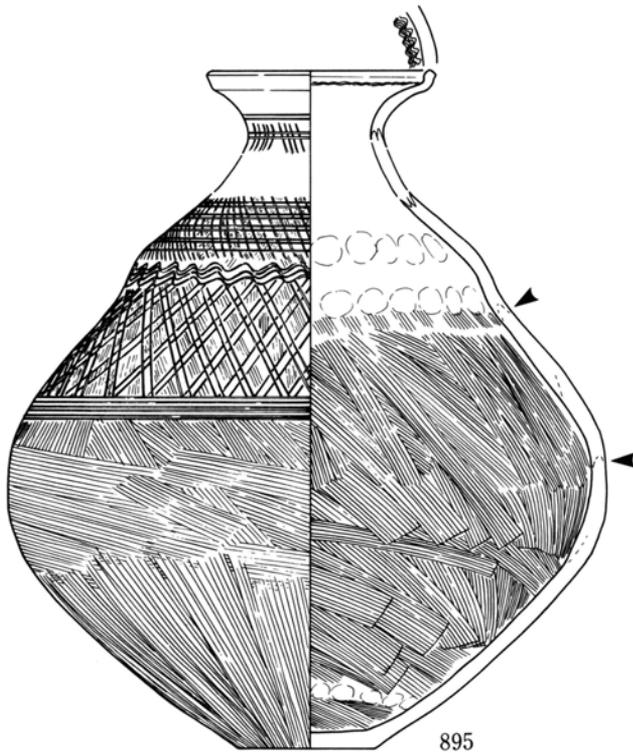
892



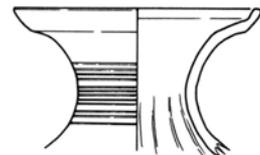
893



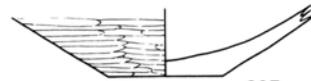
894



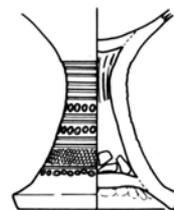
895



896

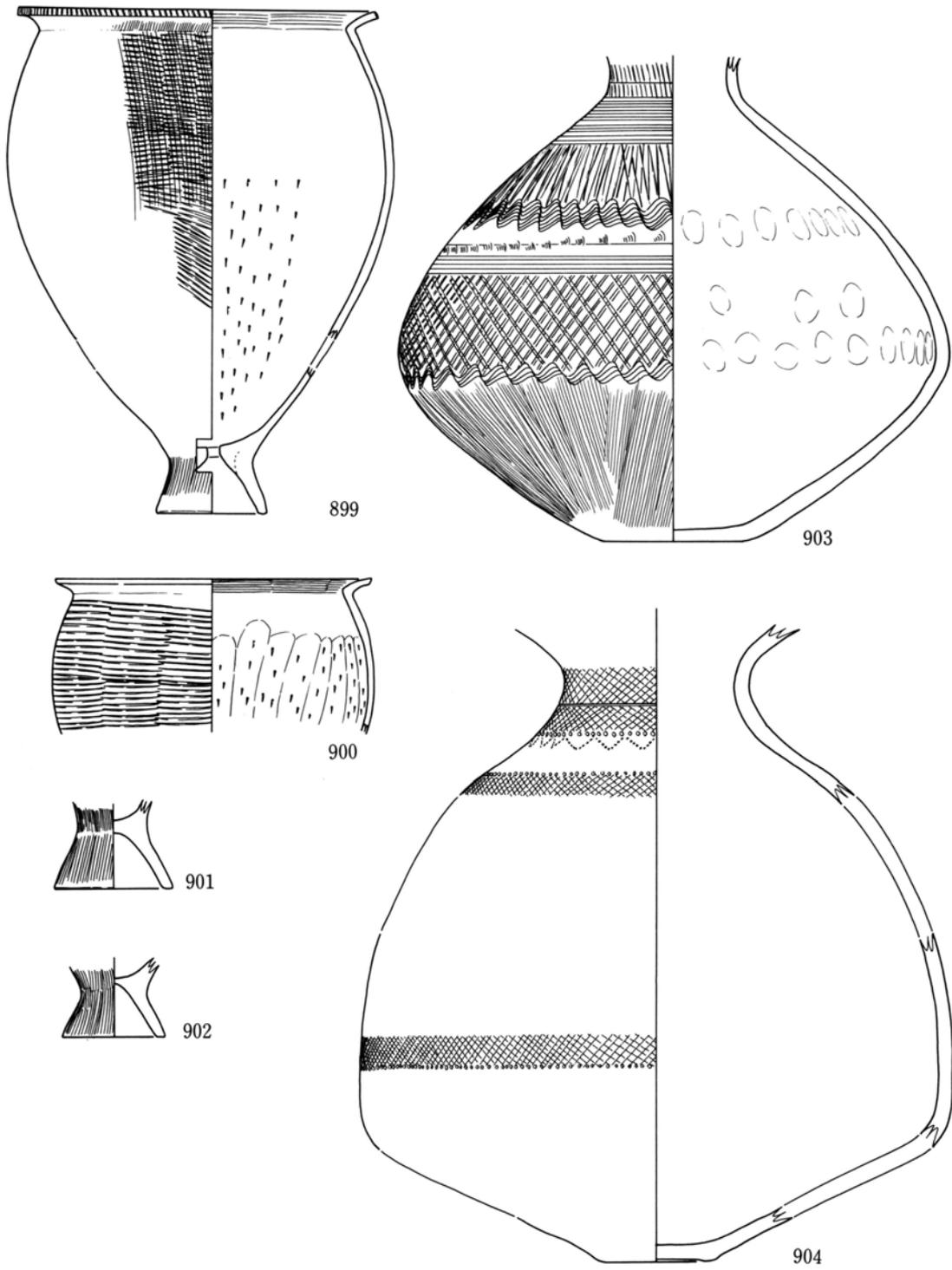


897



898

第171图 SB40出土土器 (3)



第172図 SB40出土土器 (4)

888～892は細頸壺 Wa。891は、口縁部6条沈線後に回転ヨコナデ、以下板の斜位連続圧痕→櫛III種(2・2・3)直線紋。頸部は簾状紋。体部は櫛III種(3・1・3のようだが間隔はバラッキを生じる)の直線紋と波状紋。その上に縦位の櫛III種(3・1・3)直線紋が施されている。他に櫛III種は889(3・2)、892(2・2・2・2)。

893は体部外面を研磨で仕上げる。894も体部の仕上げは研磨である。体部上半は斜格子紋を施した後に直線紋を上下に施している。底部はやや上げ底である。どちらもA系統。

895は櫛III種(2・2・2)を施す折衷型である。形態は体部上半に隆起を形成し、口縁部と外傾気味の受口状でB系統との関係を示す。しかし、製作技法は明らかにW系統である。896も同様である。

897は底部を平坦にして、体部下半に研磨を施すW系統壺である。伊勢湾西岸部の手法である。

898は高杯の脚台部である。中に小石を11個入れてから上下を粘土盤充填で塞いでいる。振れば音がする。

899は台付甕 Wb。底部には焼成後穿孔が施されている。台付の有孔土器。900はタタキで外面調整を終了している。タタキ目は幅が広い。901・902は脚台。

903・904は別の調査で出土した同じ土器群の一部。903は斜格子紋のみ櫛III種で施紋されている。頸部から体部上位にかけて縦位に粗いハケメ状の施紋を施した後、直線紋→波状紋→扇形紋→直線紋→斜格子紋→波状紋と施されている。

904はB系統壺。鋭い切り込み状沈線の斜格子紋横帯を基調として刺突紋や櫛刺突鋸歯紋を加える。

**S E 01** III-2期。A系統は905～908、D系統は912・923・924、C系統は925、他はW系統である。

**A系統** 905は細頸壺 Aa。口縁部は回転ヨコナデ。頸部には太い櫛描直線紋を施す。906は細頸壺 Aa。口縁部の屈曲部にハケメ工具刻み、頸部にはユビによる幅の広い浅い沈線を2条施す。907は細頸壺 Ab。口縁部は回転ヨコナデ。体部櫛描紋は櫛III種かもしれない。縦位に波状紋が施されている。908は細頸壺 Aa。口縁部は回転ヨコナデ。

**D系統** 912は太頸壺の頸部下位。沈線のあと円形浮紋を貼り付け管状工具で圧痕を加える。923は口唇部上下端にハケメ工具刻み、体部上半にはハケメ工具の直線紋が施されている。口唇部の特徴は伊勢湾西岸部を分布の中心とする強加飾単純口縁甕に類似しており、伝統的な甕Dとは異なる。924は口唇部が垂下してハケメ工具刻みが施されている。体部上半にはハケメ工具の直線紋が施されている。伝統的な甕Dである。

**C系統** 925は深鉢 Cb。口縁部は円周4分割の位置に山形状突起がつくられる。体部外面は櫛条痕、口縁部内面には櫛刺突紋が施されている。底部には布目痕がある。全く伝統的である。

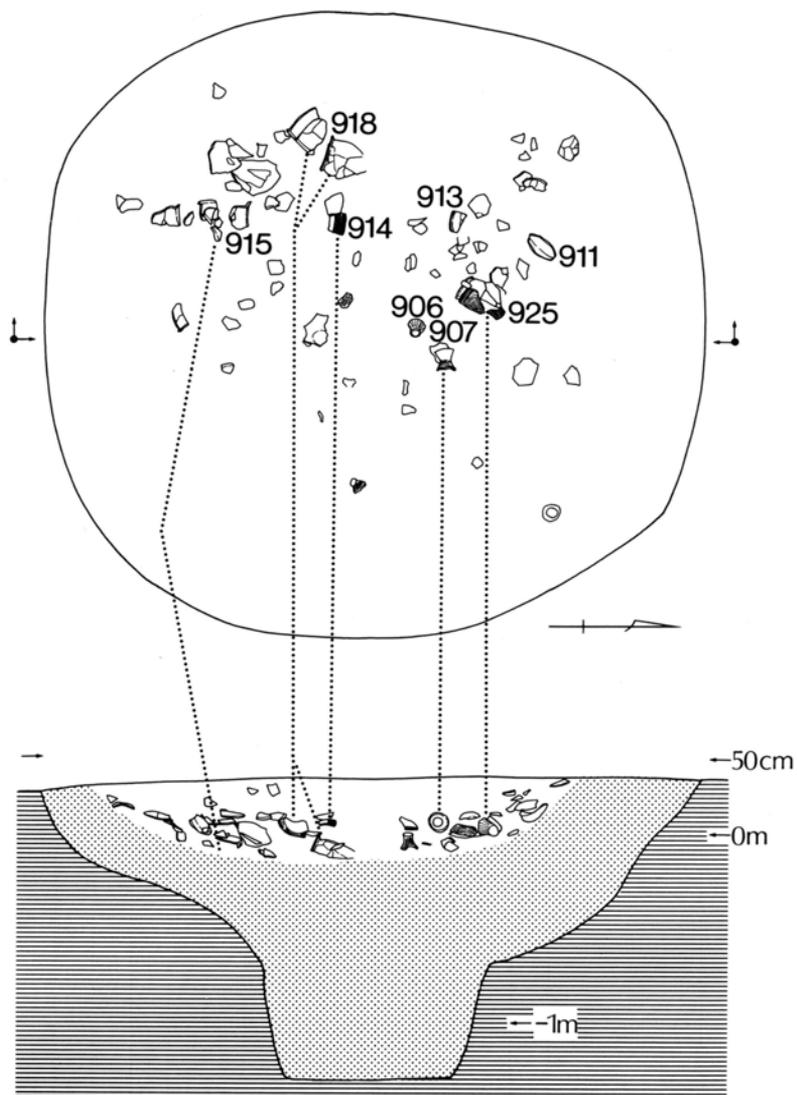
**W系統** 909・910は細頸壺 Wb。口縁部は回転ヨコナデで外面に凹線を残す。911は細頸壺の体部。上半は櫛Ⅲ種（2・2・2）による直線紋と波状紋の反復、下半は板ナデのあと研磨を加えている。

912・914は鉢。後者は簾状紋3段、以外の部分には研磨を施している。

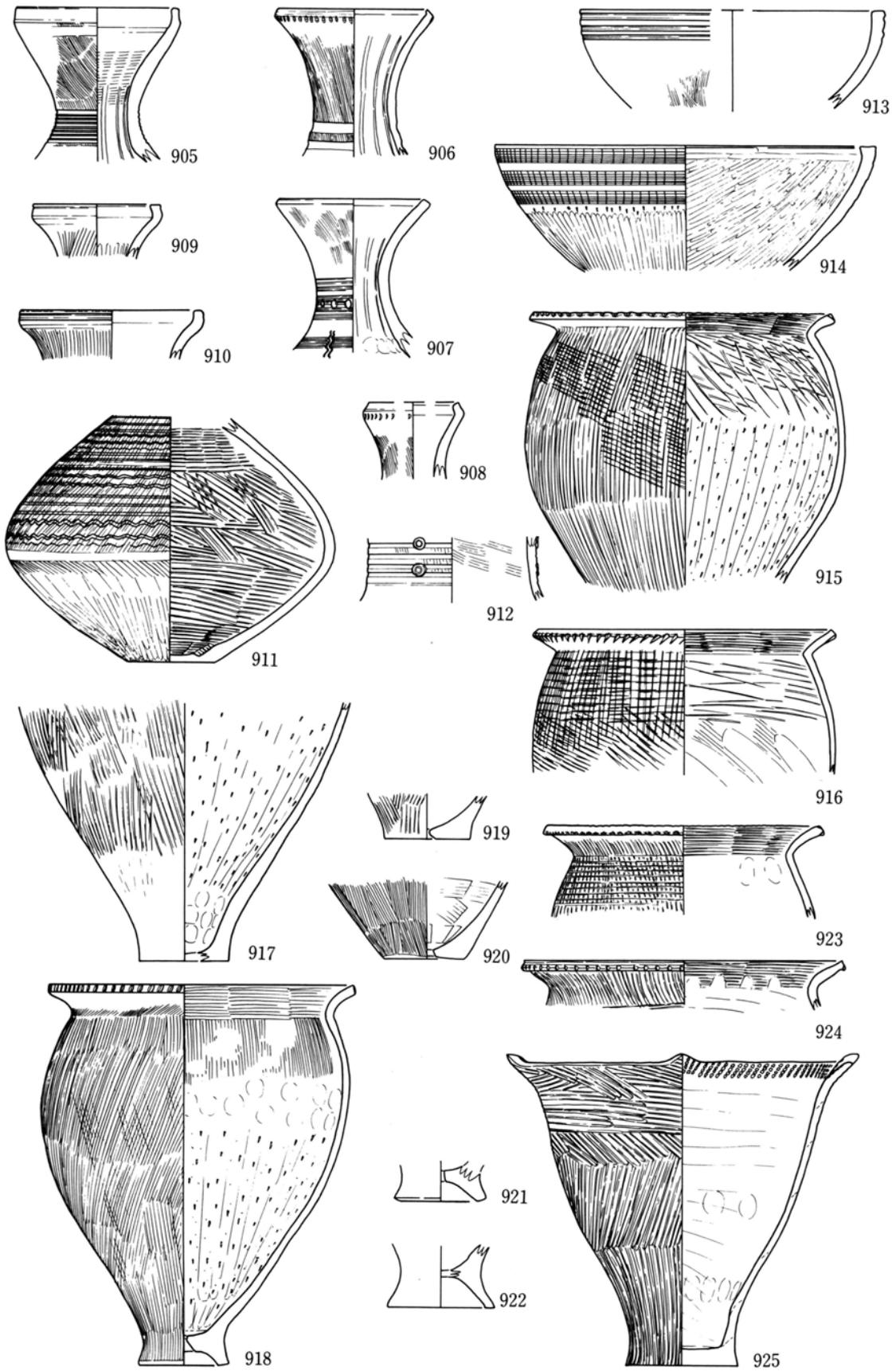
915は口唇部上端にハケメ工具刻みが施されている。手法的には珍しい。

918は台付甕 Wa。底部には焼成後穿孔がある。台付の有孔土器。体部内面にケズリ痕はあるが、外面にタタキは観察できない。919・920は平底の有孔土器。

921は台付甕 Wa の脚台部、922は台付甕W（A）の脚台部。



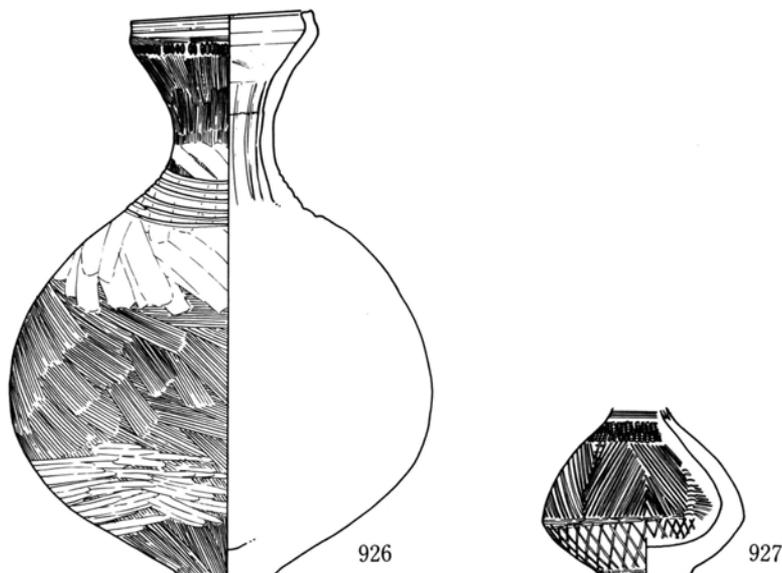
第173図 SE01土器出土状態（1：40）



第174图 SE01出土土器

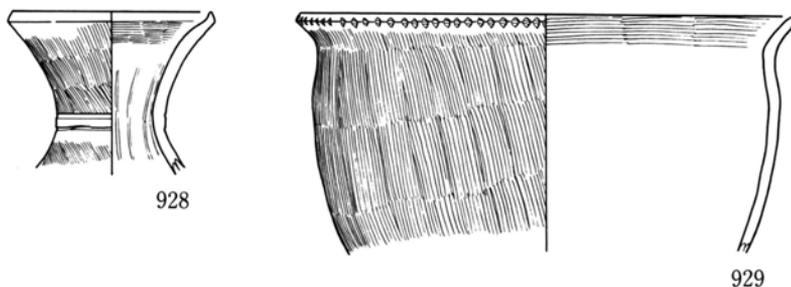
**S E 03** III-1 期。926は細頸壺 Aa の変容形。口縁部は形態が細頸壺 Wb に類似し回転ヨコナデが施されている。屈曲部にはハケメ工具刻みが施されている。体部上位は沈線6条、以下はハケメをそのまま残し無紋である。体部は球形化し、下半の研磨が成形第1段階の部分をわずかに示している。

927は頸部直下にコンパス鋸歯紋が施され、以下は沈線と言うよりは磨消線によるくずれた複合鋸歯紋、斜格子紋が施される。複合鋸歯紋の下には縦位の刺突列が観察できる。



第175図 SE03出土土器

**S E 06** III-1 期。928は細頸壺 Aa。口縁部は回転ヨコナデ。頸部に沈線2条。おそらく他は無紋。929は甕 Ad。



第176図 SE06出土土器

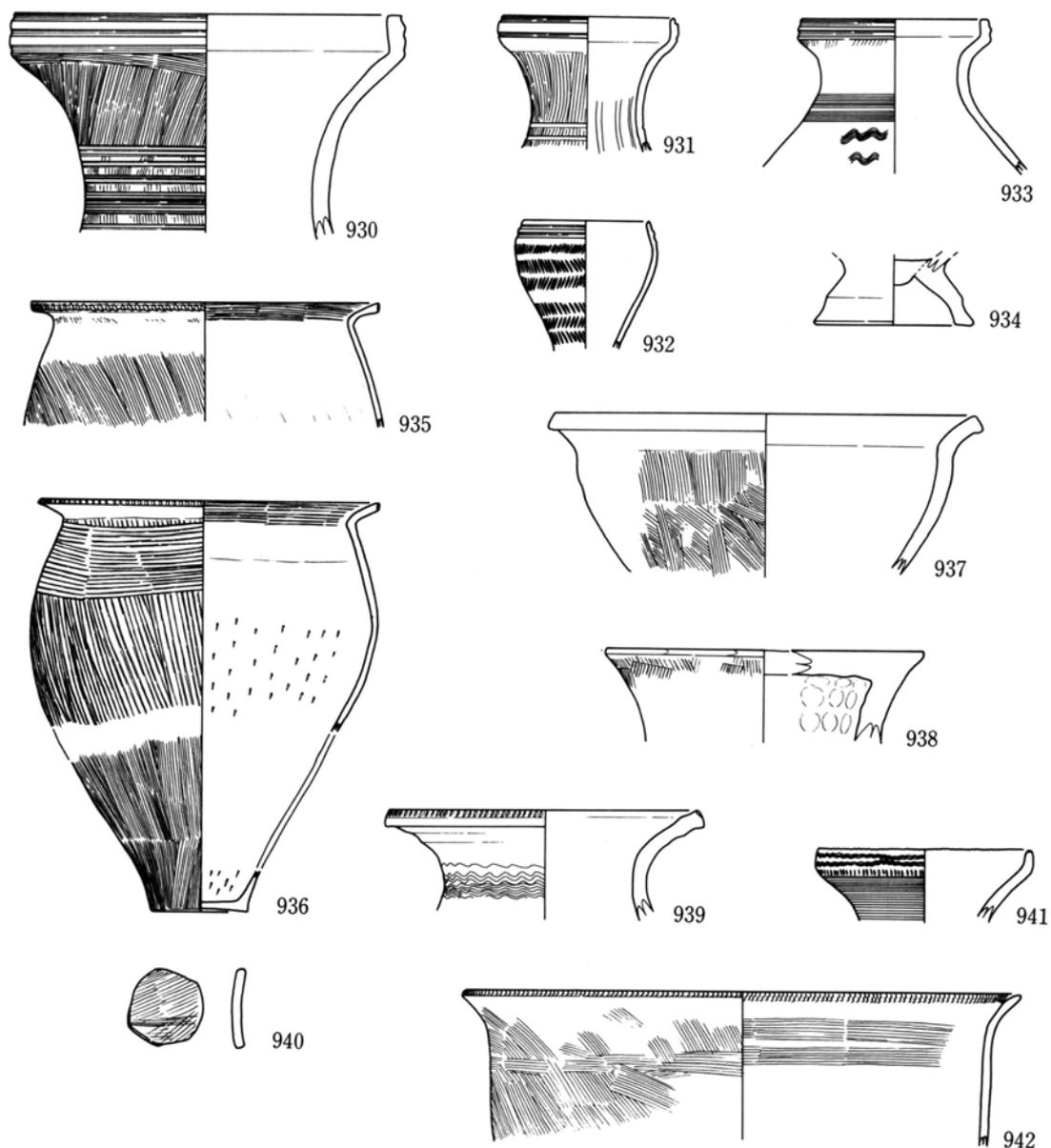
**S E 07** III-1 期。930は太頸壺 Wb。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ。頸部は櫛III種(3・2・3・2)直線紋。931は細頸壺 Wb。口縁部は最上部に2条沈線後に回転ヨコナデ、以下ハケメ工具圧痕を傾きを変えながら6段施す。933は太頸壺 Wc。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。体部はおそらく直線紋と波状紋の反復。934は台付壺の脚台。

935はタタキのない甕。936は体部上半にハケメ工具による直線紋を施す甕 Wb。

937は鉢あるいは台付鉢。938は台形土器。色調は非常に白っぽい。

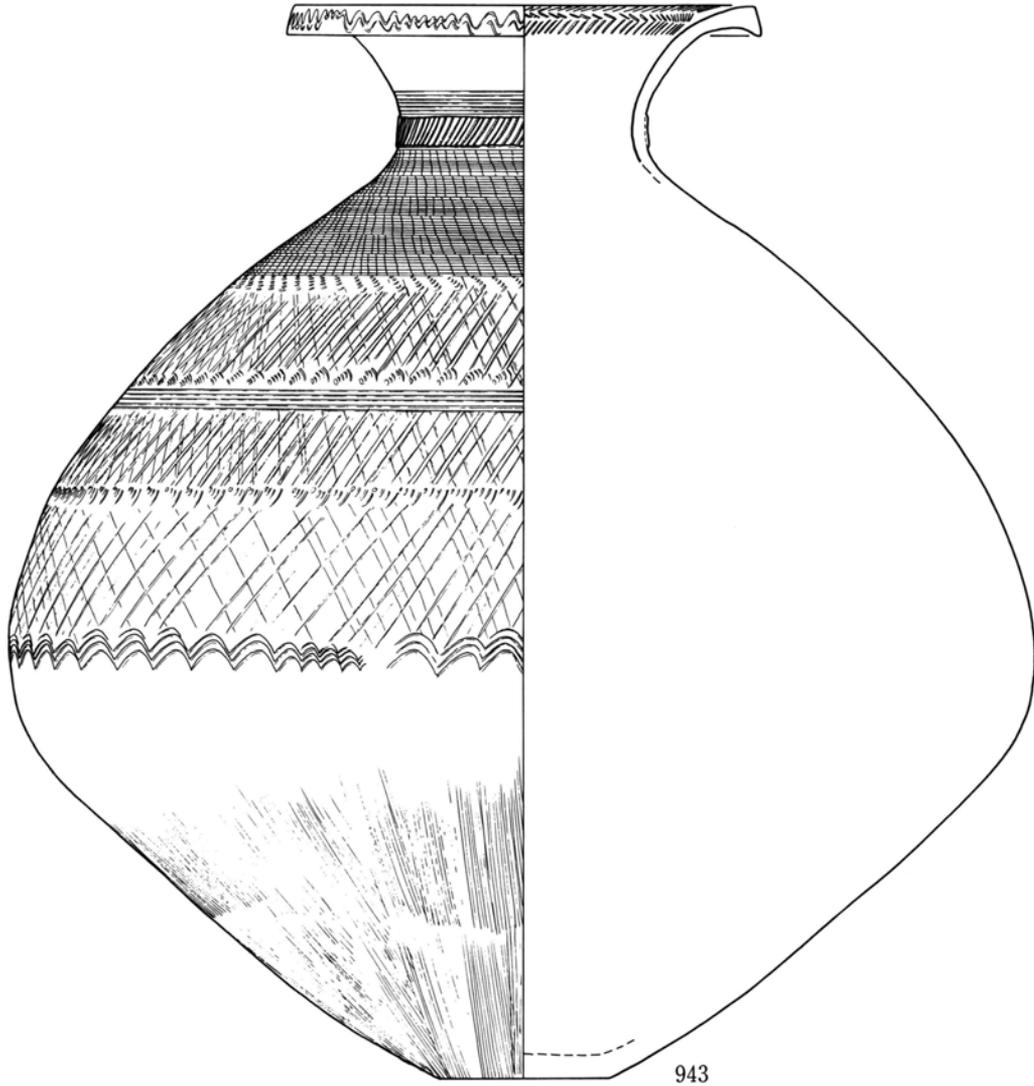
939はB系統壺。口唇部にはD字圧痕、頸部には櫛I種A類の波状紋が施される。黒色仕上げ。

941は混入。細頸壺 Aa。口唇部に刻みを施しており、I-1 a 期に属す。942は口唇部と口縁部内面に二枚貝施紋がある。

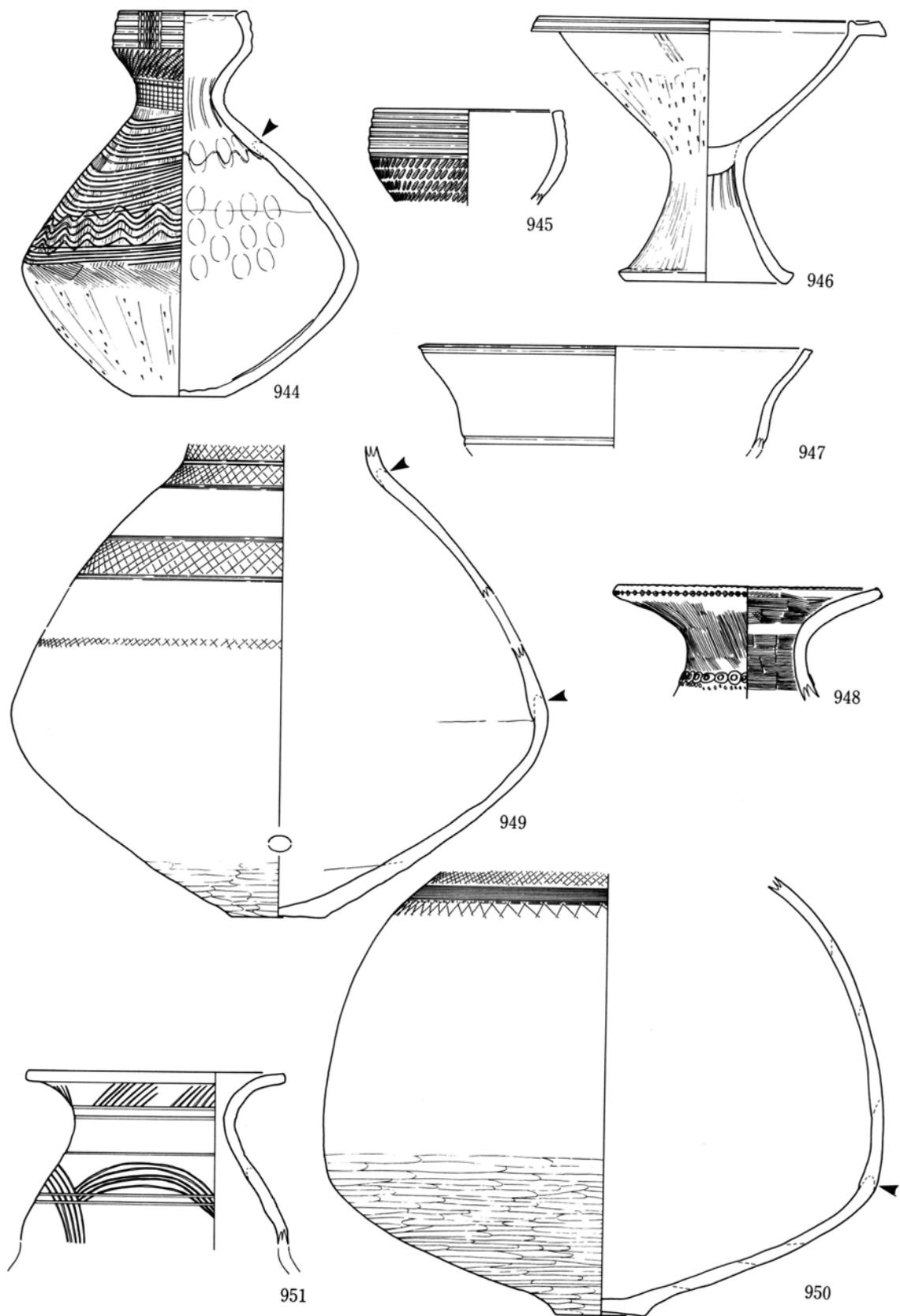


第177図 SE07出土土器

S Z 01 III-1期。943は高さ56cmの太頸壺 Wa。口縁部内面はハケメ工具の羽状圧痕紋、口唇部には波状紋、頸部以下は直線紋→ハケメ工具刻みを加えた幅広の突帯→簾状紋6段→扇形紋→斜格子紋→扇形紋→直線紋→斜格子紋→扇羽紋→斜格子紋→波状紋となる。櫛の原体は細い管状工具を束ねた櫛（櫛II種b類）のようだ。



第178図 SZ01 (SD05) 出土土器



第179图 SZ02 出土土器

- S Z 02 III-3期。944は細頸壺 Wa。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ、その上を縦位の櫛が切る。その下はハケメ工具の両端を支点として交互に移動させるコンパス鋸歯紋と同じ動きをするが、紋様はジグザグ状となっている。頸部以下は簾状紋→直線紋→波状紋。体部下半ではケズリのあと板ナデが施されている。全体に厚手で鈍重。櫛原体は櫛II種b類。
- 945は細頸壺Wa口縁部をやや大きくしたもの。5条沈線後に回転ヨコナデ、この下はハケメ工具の連続圧痕を施している。
- 946は高杯 Wb。杯部の立ち上がりは比較的直線的である。口唇部に杯部外面にはケズリを残している。
- 947は台付鉢。他に類例は知らない。口縁部と杯部下部に沈線を施している。色調は非常に白っぽく砂粒が目立つ。
- 848はII期太頸壺Aの混入。
- 949~950はB系統壺。いずれも黒色仕上げ。前2者は鋭い切り込み状沈線の斜格子紋横帯を基調とする。949には体部下半に焼成後穿孔が施されている。951は沈線紋。連弧紋は系譜関係をよく示している。
- S Z 03 III-2期。土器は完全近くまで復元できるものと、他に接合関係を持たない破片とがある。952は細頸壺 Wa。櫛III種(2×n)直線紋→ハケメ工具連続圧痕。953は太頸壺 Wb。4条沈線後回転ヨコナデ、その上を櫛(櫛III種:2×4)で切る。
- 954はA系統円窓付壺。口縁部は強いヨコナデで弱い段をつくる。
- 955は体部上半をナデ調整した後に波状紋を施す。体部上下界は弱い稜をなす。
- 958は櫛III種(2・2・2)を原体として直線紋→波状紋→斜格子紋→直線紋→波状紋の順で施される。975は頸部の太いやや小形の壺。体部にはタタキ調整の痕跡を残す。施紋は、頸部にハケメ工具連続圧痕、体部に櫛I種a類の細密な波状紋(9条以上)2段を施す。958は体部下半に横方向の研磨が施された壺底部で伊勢湾西岸的。
- 959はA系統壺底部、やや上げ底をなす。960はA系統台付甕の脚台部か。
- 961は甕W。962は甕 Af。
- 963はB系統壺。口唇部は板の刻み、頸部は縦位にハネアゲ紋を施した後横位直線紋の上にさらに斜位短線紋を加える。体部は上下に揺れる横線紋→横位短線紋を反復する。櫛原体は櫛I種A類。個々の櫛歯は鋭い条線となっている。黒色仕上げ。
- 946は太頸壺 Wb。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデで仕上げる。691は太頸壺 Wa。口縁部内面には瘤状突起が施されている。口唇部は小さく上方に拡張され、斜格子紋が施されている。
- 966は系統のはっきりしない細頸壺。口縁部は強いヨコナデによって段(凹線と呼ぶべきか)が形成され、頸部には2条めぐる。体部はナデ調整が確認できる。
- 967は円窓付壺。口縁部はヨコナデされ、頸部には沈線がめぐる。
- 968は細頸壺 Wa。口縁部は4条沈線後に回転ヨコナデ、以下はハケメ工具の連続圧痕→押し引き紋→連続圧痕→直線紋→簾状紋→櫛III種直線紋と続く。直線紋の上には櫛III種で

縦位直線が施されている。969は太頸壺Wの体部上半。直線紋が観察できる。

970は高杯 Wa。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。口縁部の短く内傾して立ち上がる例は珍しい。971は高杯脚部。

972は甕 Wd。口縁部は水平近く外折し、回転ヨコナデが加えられている。口唇部は凹面をなし、上端がやや上方に拡張される。刻みは下端に施される。体部はハケメ工具の直線紋と波状紋が施される。タタキは観察できない。内面にはケズリを残す。

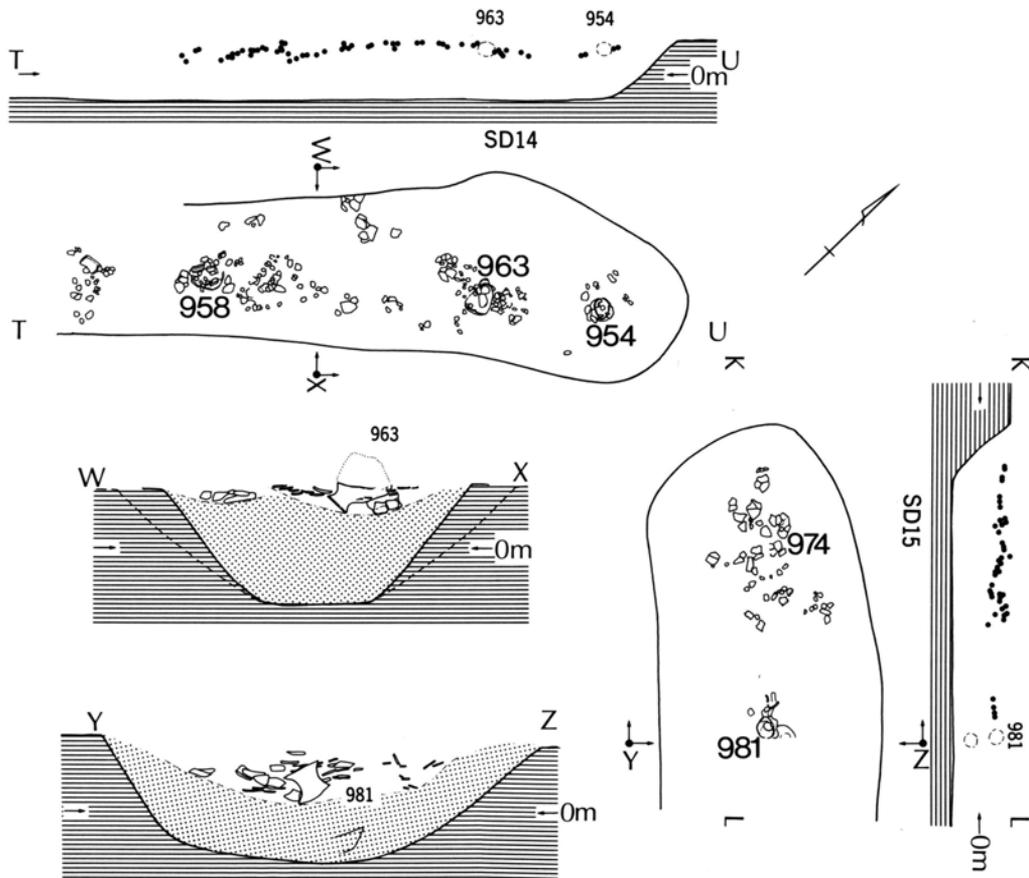
973は口縁部が強く外折し、口唇部にはハケメ工具刻みが施される。

974は甕 Wc。「く」字状に外折する口縁部は外面にユビオサエ痕を残す。口唇部にはハケメ工具圧痕が施されている。体部はタテハケメのあとナナメハケメが施され、その上にハケメ工具連続圧痕が部分的に施されている。正面だけであろうか。タタキは下半に疑わしい痕跡が観察できる。内面はケズリを残す。

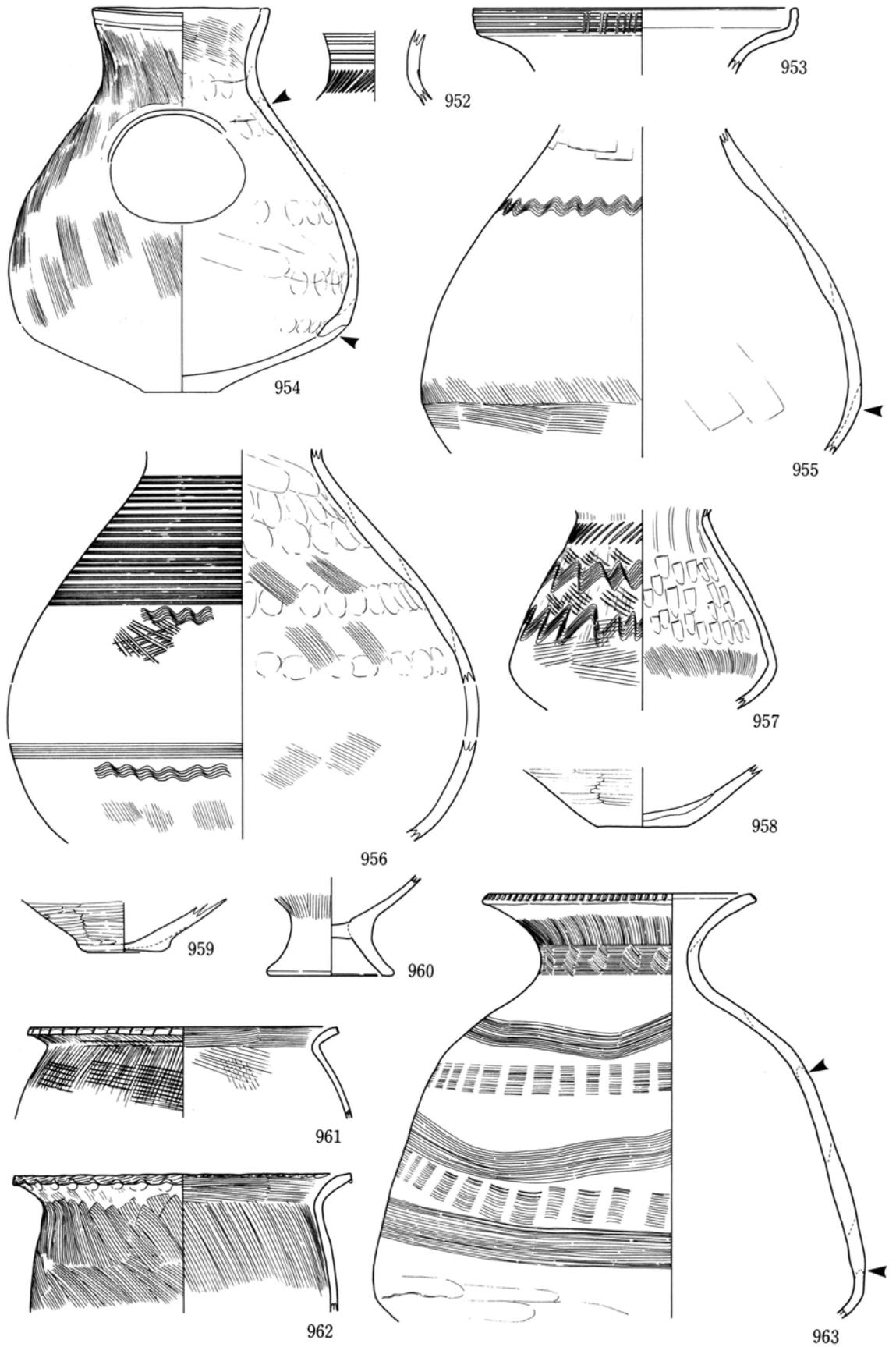
975は口縁部が受口状をなす甕 We。口縁部外面には板の刻み、体部上半にはハケメ工具の直線紋が施されている。

976は甕W底部。成形はc 1。997は甕W底部。成形はa。

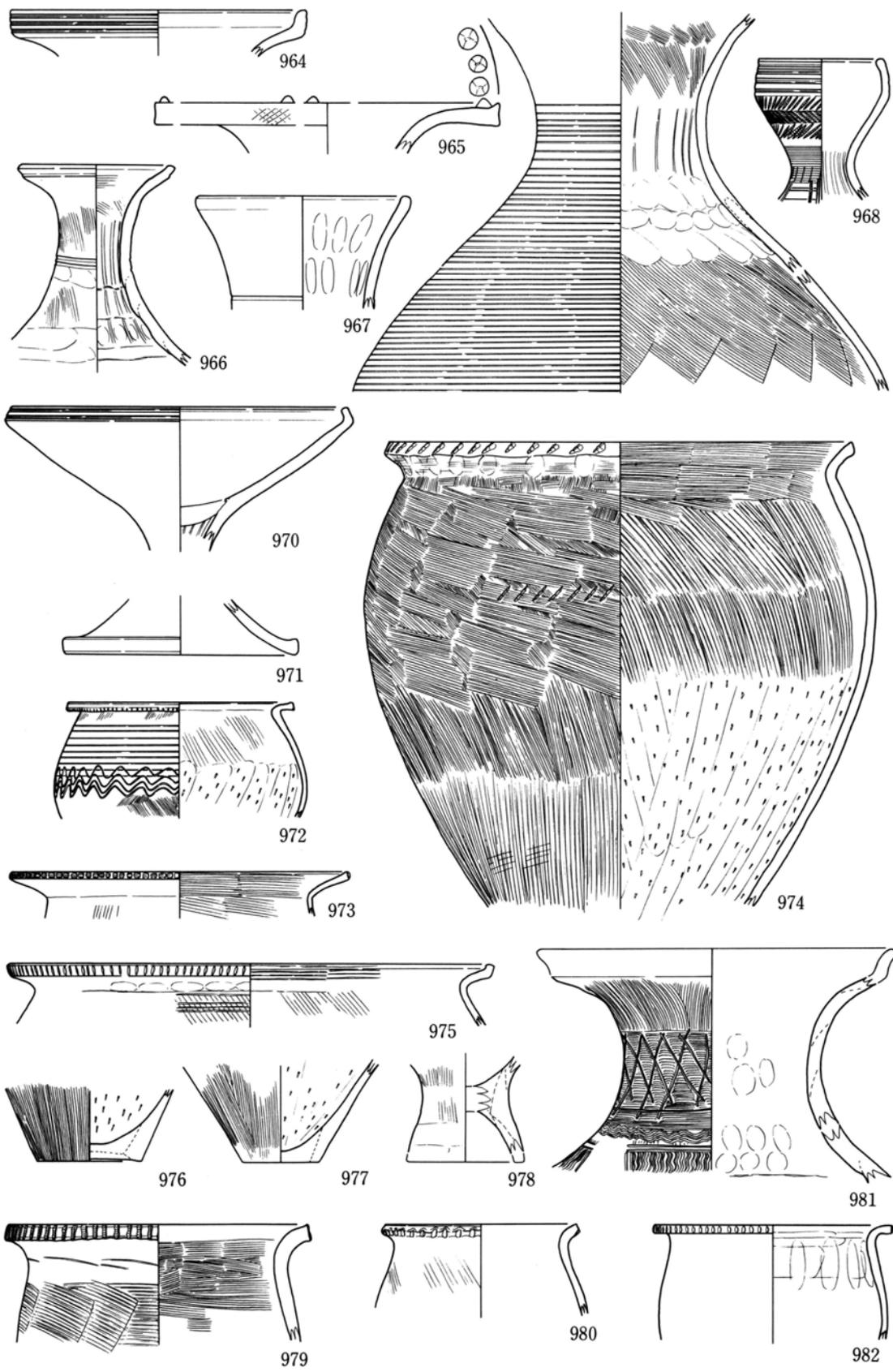
978はB系統台付甕脚台。



第180図 SZ03土器出土状態 (1:40・1:80)



第181図 SZ03 (SD14) 出土土器 (1)



第182图 SZ03 (SD15) 出土土器 (2)

979は厚手のかっちりした甕で、口唇部にハケメ工具刻みを施す。混入か。

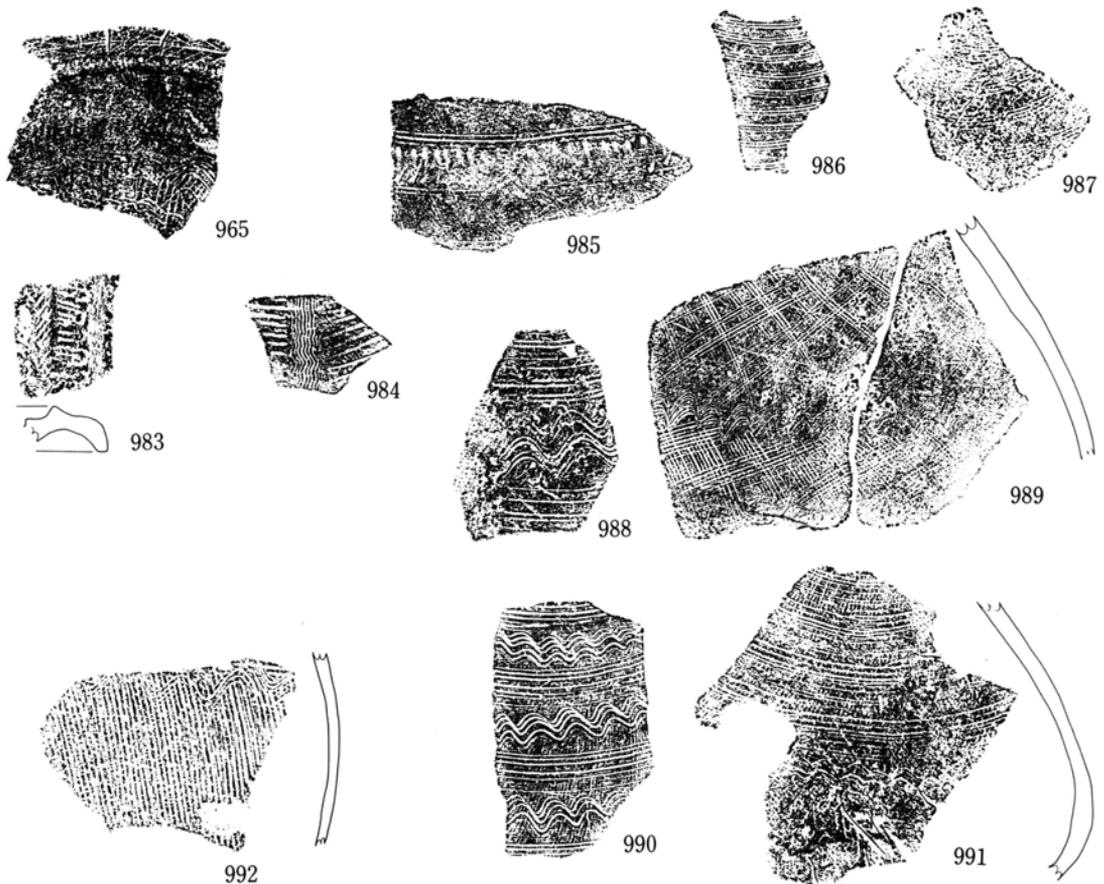
980は口縁部が小さく外反し、口唇部下端に刻みが施されている。

981はB系統壺。口縁部はおそらく受口状をなす。頸部は縦位にハネアゲ紋を施した後横位直線紋→沈線斜格子紋→横位波状紋と施され、体部は縦位に波状紋の単位を幾つか施した後平行沈線(原体は半截管状工具か)で囲む単位紋を施す。982はB系統甕。おそらく台付。体部外面はナデ調整で仕上げられる。

983は太頸壺 Wa。口唇部は垂下し、上面には突帯がめぐる。施紋は管状工具圧痕の他は不明。

984は細頸壺 Aa の体部破片。縦位波状紋と磨消線が施されている。985は壺体部のコンパス鋸歯紋。

986は櫛III種(3・3・3)。987は櫛III種(4×n)。988は櫛III種(2・2・2)。989は櫛III種(3・3・3)の斜格子紋。990は櫛III種(3・2・2)だが不揃い。991も不揃いな櫛III種(2・3・1・2)。992は甕 Wd。



第183図 SZ03出土土器 (3)

- S D 01**  
(図版49)
- III—1期。1080は細頸壺 Wb。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。  
1071は太頸壺 Wc。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。頸部以下は簾状紋施紋後、櫛III種(2・2・2・2・2)直線紋と波状紋の反復。  
1072は大形鉢Aで、口縁部に指頭圧痕紋。1073は甕W。
- S D 02**  
(図版49・50)
- A系統**
- III—3期。1074~1079はA系統、1080~1082・1085・1086はW系統。1083はB系統。  
1074は太頸壺。口縁部内面には瘤状突起と三角形刺突紋が施されている。口唇部はヨコナデ後にハケメ工具による刻みが上下端それぞれ別に施される。頸部以下は断面三角形突帯と管状工具連続圧痕→板のエッジによる羽状圧痕紋→板によるコンパス鋸歯紋→磨消線の順で施されている。1075は太頸壺A。口縁部はやや垂下し、口唇部にハケメ工具の刻み、口縁部内面は波状紋と円形浮紋に管状工具圧痕を加える、頸部外面には振幅の大きな波状紋→管状工具圧痕紋→直線紋→コンパス鋸歯紋と施されている。体部は櫛描紋を基調とするようた。  
1076は縦位波状紋の後に磨消線を施している。  
1077は大形鉢底部。1078・1079は大形鉢上半で、口縁部に指頭圧痕紋が施されている。
- W系統**
- 1080は細頸壺 Wa。口縁部に3条沈線後回転ヨコナデ、以下は櫛押し引き紋と直線紋を反復する。  
1081は縦型流水紋。波状紋はコンパス紋。1086は少ない破片からかなり無理をして復元した太頸壺 Waである。口縁部は内面に櫛羽状紋、口唇部に波状紋、体部外面は櫛III種(基本は2・2・2・2のようだが途中からくずれる)で直線紋と波状紋を反復する。
- B系統**
- 口唇部には板による部分圧痕。頸部は2条平行沈線(半載管状工具か)を4段巡らした後鋭い切り込み状の沈線で斜格子紋と鋸歯紋を施す。以下も同様の手法。黒色仕上げ。1084は外面にケズリを残す系統不明の鉢。
- S D 03**  
(図版51~  
図版54)
- III—1期と2期の混在である。W系統には若干III—3期もまざるようである。1087~1089・1112~1120・1130・1146・1149~1159・1165~1168・1171・1176はA系統、1091・1161・1163はB系統、1160はC系統・1133・1147・1148はD系統、1090・1132は系統不明、それ以外はW系統。
- A系統**
- 1087は頸細頸壺 Aa。頸部の4条沈線以外紋様不明。1088は頸部直線紋の下にコンパス鋸歯紋。1089は細頸壺 Aaの変容形。磨消線紋系。1112は円盤充填の脚台。1113は櫛描紋系で、1089と同様変容型。櫛描紋は櫛III種(2×n)。黒色仕上げ。1114は細頸壺 Aa。ハケメ磨消帯の名残。1115は口縁部に回転ヨコナデ。内面には板のコンパス鋸歯紋、口唇部は櫛刺突紋。1118は口縁部回転ヨコナデ後に波状紋を施す。体部は直線紋→鋸歯紋→鋸歯紋内部を一つおきに浅い沈線を施す。体部中央に焼成後穿孔。1119・1120は円窓付壺。どちらも口縁部は回転ヨコナデ。前者は頸部に沈線4条、後者は体部下半を研磨する。1130は他に類例のない形態。1146・1149は甕 Ad。1147は口縁部に回転ヨコナデ。W系統に近似する。  
甕脚台は、立ち上がりの内彎するものが多く、中には1157のように天井部にヘソ状の突起を残す例もある。

1165は円窓付壺か。1166は振幅の大きな波状紋を施す小形壺。1167は有孔鉢。1168は口縁部と頸部の隆起がB系統、他はA系統の特徴を示す。体部は直線紋とコンパス鋸歯紋の反復。1171・1176は甕脚台。

**B系統** III-2期を中心とする。1091は太頸壺 B。口縁部は回転ヨコナデ。外面に波状紋。口縁部外面から体部上半は縦位に櫛I種A類で施紋後横位に直線紋を施す。1161は台付甕。1163は、櫛II種A類の施紋。口縁部外面はハネアゲ紋→横位短線紋→鋭い切り込み状沈線の斜格子紋を施した後沈線を加える→横位短線紋→縦位波状紋の周りを沈線で方形に囲む単位紋を幾つか頸部紋様帯に懸垂させ、その他は体部に独立に配置する。そして懸垂紋については下部両端コーナーに沈線を「八」字状に加える。ナデ調整の黒色仕上げ。

993は体部上半の沈線斜格子紋及び波状紋からなる横位紋様帯に、1163よりは簡略化した懸垂紋を付加している。懸垂紋は、沈線で短い横線を何段も刻んだ後両端を縦位の沈線で挟んで梯子状にし、下端に平行沈線が「八」字状のヒゲのように施されている。器面はナデ調整され、黒色仕上げである。

1163や993のような懸垂紋をもつ壺は紋様構成上独立したグループとして扱うことができる。



第184図 SD03出土土器

**C系統** 1160は深鉢 Ab。底部成形はd。

**D系統** 1132は受口状口縁壺で、斜格子紋→沈線2条→ハケメ工具刻み→十字紋付加で施紋される。1148は体部上位の張る形態で、ハケメ工具による直線紋が施されると思われる。弱加飾単純口縁甕。

**W系統** 細頸壺 Wa : 1100・1101、細頸壺 Wb : 1092~1096・1123・1124のほか、細頸壺 Wb をやや大形化した1121 (頸部にハケメ工具連続圧痕)・1122、短頸壺 : 1097・1103・1125がある。1103は甕の成形法で製作されている。その他、頸部が円筒状をなして全面研磨される1107、体部下半に縦位の研磨が施される1099がある。

高杯は1169が Wb で、口唇部は沈線3条を施した上から縦位に櫛で切る。脚部は1110・1127~1129・1170がある。1170は柱状部がほぼ円筒状をなす。また脚部裾端も上方に跳ね上がっている。

鉢および台付鉢。1104は口縁部に回転ヨコナデが施され、口唇部が少し拡張される。外面には波状紋と下部に研磨が観察できる。1131は大形鉢で、口縁部は外側への折り返しで外面に段が作られる。紋様は簾状紋1段の他に押し引き紋が施されている。

甕は、タタキ調整以前のハケメ調整の有無が不確かな、a1類：タタキ→タテまたはナメハケメ—1105・1106・1111、a2類：タタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ（直線紋）—1172、と、タタキ調整の欠落したb類：タテハケメ→連続ヨコハケメ（直線紋）—1134～1139、がある。いずれも内面にはケズリを残す。

台付甕は1144の立ち上がりは内彎する（Ⅲ—2期）けれども、1145は直線的（Ⅲ—3期）である。1143はWaの脚台部（Ⅲ—2期）である。

1164は形態・表現は深鉢Cbと同じであるが、施紋・調整具はW系統甕に普通に見られる粗いハケメである。そして、内面にケズリを残し色調も黄褐色であり、明らかにW系統に属す。

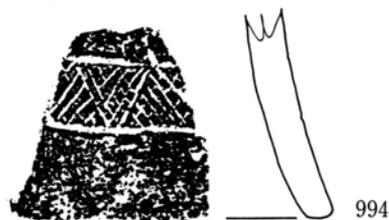
1109は取手付き土器の取手部分。彫刻的で面はかっちりしている。

1162は脚台状土製品である。

1177・1188はI期土器の混入である。1177は頸部外面に沈線を多条に施す。口縁部内部は三角形刺突紋、口唇部には二枚貝刺突紋を施す。頸部にも刺突紋が加えられている。1178は有段波状口縁甕。口縁部内面には強いヨコナデで段が形成されている。ハケメ工具の波状紋が施されている。

SD18  
(図版55～  
図版60)

Ⅲ—1期を中心とする。1179～1186・1188～1191・1192～1196・1202・1204～1219・1227～1240・1245・1246～1253・1255・1261～1267はA系統、1191・1254はB系統、1187・1203・1244はD系統、他はW系統である。



第185図 SD18出土銅鐺形土製品（2：3）

#### A系統

太頸壺。1206は口縁部に回転ヨコナデが施され、口唇部は凹面をなす。口縁部内面に管状工具圧痕、口唇部上下端に二枚貝刻み、頸部には二枚貝刻み2条突帯、以下は櫛描直線紋→二枚貝刺突紋→磨消線の反復となる。

細頸壺は口縁部の立ち上がりが明瞭でAaとして確定できるものと、立ち上がりが不明瞭でAbに近いものがある。Aaは、櫛描紋（櫛描紋e'類）系と非櫛描紋系、そして磨消線紋系の3系列に区分できる。その識別については、頸部に沈線をめぐらすもの（1180・1208・1230・1235）は非櫛描紋系である。櫛描紋系と磨消線紋系の識別は、頸部施紋が直線紋を主とするもの（1179・1181・1188・1202・1204・1207・1209・1233）は櫛描紋系が多く、上半に波状紋を何段も密に施し下半を直線紋とするもの（1190・1205・1231）は磨消線紋系に多いという傾向がうかがえる。体部施紋は1179が波頂部の尖る波状紋が4段施

されている。波状紋を施すこと自体珍しい。頸部に隆起があり、B系統との折衷型である。1189は直線紋とコンパス鋸歯紋を反復させた後、最下段にくずれた連弧紋を配している。紋様的にはB系統と関係ある。1190は磨消線紋系であるが、縦位の施紋は脱落している。1207は櫛Ⅲ種(6・6)の直線紋である。1210も櫛Ⅲ種(3・3)の直線紋を簾状紋風に施している。1235は磨消ハケメ帯の終末形態で、磨消帯のみが残存している。1247は櫛Ⅲ種(4・4)の直線紋。

底部は1218～1219・1258が木の葉痕を残す。

円窓付壺。1228は口縁部に指頭圧痕紋を施し、頸部以下も沈線と磨消線を反復させ古い特徴を示している。

甕は平底と台付がある。口縁部は指頭圧痕の施される Af 系の台付甕と Ad 系の台付甕がある。脚台部は、1182・1183・1193・1212・のように天井部にヘソ状の突起のあるものや、1194・1212～1216のように脚端部の接地面が内側に拡張するものがある。1246は大形甕で口径47cm、器高57cm。口縁部はヨコナデされ口唇部は凹面をなす。ススの付着はなく、貯蔵用であろう。

甕には、深鉢 Cb を模倣した例がいくつかある。1196・1264～1267で、体部外面は櫛条痕を施すもの施さないものとあるが、いずれも口縁部内面にハケメを残し、その上から櫛(ハケメ工具による)刺突紋を施している。本来の深鉢 Cb は1263のように内面はナデ仕上げで全くといってよいほどハケメを残すことはないので、同じ系統に含めることはできないのである。有孔土器は1237・1238、有孔鉢は1227・1245がある。

**B系統** 1191は頸部に櫛で縦位櫛描紋を施し、体部上半は半截管状工具で直線紋と波状紋を施している。1254は体部上位の隆起部分である。櫛Ⅰ種A類で施紋している。黒色仕上げ。混入であろう。

**D系統** 1187は若干垂下した口唇部にハケメ工具刻みと、体部上半にハケメ工具の直線紋を施す。1203は細頸壺 Aa の系列である。口縁部屈曲部に二枚貝刻みが施されている。体部は無紋で下半部に研磨が施されるものである。1244は口唇部上下端にハケメ工具の刻みを施し、体部上半にハケメ工具の直線紋を施す。

**W系統** 1198は口縁部内面に円周4分割の位置に2ヶー対の瘤状突起が貼り付けられ、押し引き状の扇形紋も施されている。口唇部は波状紋、体部は櫛Ⅲ種(3・3・3)の直線紋が施されている。

1220は太頸壺 Wb。口縁部は2条沈線後回転ヨコナデ。1221は細頸壺 Wa。口縁部には回転ヨコナデ。1222は櫛Ⅲ種(1・2・2)櫛描紋。体部下半には横位の研磨。伊勢湾西岸部的な特徴である。1243は太頸壺 Wb の口縁部だが、ナデ仕上げの無紋である。1256は縦型流水紋。櫛Ⅱ種b類(おそらく細い管状工具であろう)を原体とする。1257は櫛Ⅲ種。1260は太頸壺 Wb 口縁部。櫛の羽状圧痕が施されている。甕は1199は Wa。1200はタタキ痕を残さない。どちらも内面のケズリは確認できない。1259は上げ底気味の底面にハケメを残している。

1241は円窓付壺。口縁部は回転ヨコナデされ、口唇部は凹面をなす。体部の形態はW系統の典型であるが、最大径部下位の横位研磨はA系統やD系統に関係する特徴であり、完全にW系統として独立したものではないことを示している。

1252・1253は折衷型である。B系統との関係がうかがえる。

**銅鐸形  
土製品**

994は、鐸身裾部分の破片である。横位に複合鋸歯紋が観察できる。各鋸歯紋内は斜格子紋で埋められているが、鋸歯紋以前に斜線で充填されているようにみえる。

1201は周縁が打ち欠かれただけで研磨されていない土製円板の未成品。1239は脚状土製品、1240は厚めの盤状土製品である。

**S D 19** (図版61・62) 1272～1279・1299・1302・1303はA系統、1280・1281はB系統、1301はC系統、以外はW系統。

**A系統** 細頸壺 Aa は、非櫛描紋系 (1268・1269) と櫛描紋系 (1270は頸部に沈線3条と櫛III種直線紋、1271は櫛描紋e'類) に分かれる。

1272は円窓付壺。頸部に沈線4条。

台付甕1279は脚部の天井部分にヘソ状の突起がある。1275・1299は口縁部に指頭圧痕紋が施されている。

1302・1303は深鉢 Cb の模倣である。1302は口縁部内面に、1303は体部外面の条痕の下にハケメが観察できる。

**B系統** 1280は口縁部を回転ヨコナデで仕上げている。口唇部には単独圧痕が施され、頸部以下は櫛II種A類を原体とする施紋がある。器面はナデで仕上げられている。1280は器面がナデで仕上げられ、口唇部は板でD字刻みが施されている。

**C系統** 1301は深鉢 Cb。

**W系統** 1282は太頸壺 Wb。口縁部は3条沈線後回転ヨコナデされ、縦位に櫛で切られている。頸部以下は直線紋→櫛刺突紋→ハケメ工具で刻まれた幅広の突帯→ハケメ工具の羽状圧痕紋→直線紋の順で施されている。1183は口縁部が上下に拡張され、口唇部は沈線3条→回転ヨコナデ→鋭い刻み状の圧痕という順で施紋されている。頸部は上下が回転ヨコナデされ、中央にタテハケメが刻み状に残っている。

1284・1285は細頸壺 Wa。1284は口縁部に3条沈線後回転ヨコナデされ、櫛刺突紋、櫛III種 (3・3・2) 直線紋が施されている。1285は櫛III種 (3・2の反復) 直線紋が施されている。

1294は太頸壺 Wb。口縁部無紋で頸部には縦位の粗いハケメ。1295～1298は櫛III種櫛描紋。1295・1296は2・2・2、1297・1298は3・3・3である。

1293は壺体部上位でタタキ痕を残す。

甕。1290はタタキ痕を確認できるが、1291は不明。1300はハケメ工具の刺突紋が施されている。1292は台付甕の脚台部だが、立ち上がりの外反は新しい様相である。出土層位は上層であり混入である。

高杯は Wa の 1287 のほか、同形態の杯部をもつ 1288 がある。口縁部は口唇部直下に突帯状の段がつくられ、ハケメ工具で斜格子紋と斜位の連続圧痕が施されている。1289 は脚部上位で、鋭い切り込み状の沈線が施されている。

**S D 20**  
(図版 63)  
**III 期**

出土土器は大きく III 期と IV 期に分かれ、III 期はさらに細分できる。

1305・1317 は A 系統壺。1305 体部の磨消線は、上位 4 段が深く沈線状をなしている。1317 は縦位直線紋間を磨消線が埋めている。III-1 期。

1304・1312 は W 系統壺である。1304 の外面は風化しており紋様の把握は困難である。櫛 III 種のようなものである。1312 の斜格子紋も櫛 III 種のようなものである。最大径部の櫛押し引き紋は A 系統細頸壺の刻み突帯からの紋様転換であろうか。III-2 期以降。

1314~1316 は B 系統壺。1314 は沈線紋を主とし、上位から沈線で横帯に区切った後複合鋸歯紋風に右下がり斜線紋に左下がり斜線紋を部分的に加えた施紋と V 字状懸垂紋の組み合わせを反復させる。1315 はおそらく横位に直線紋を施した後、沈線の斜格子紋、波状紋と施していく。1316 は通有の櫛 I 種 A 類による施紋。いずれも黒色仕上げ。III-2 期以降。

**IV 期**

高杯と甕が出土している。1310 は口唇部に刻みがない。1311 は口唇部に規格的なハケメ工具刻みが施され、体部内面はケズリが頸部まで達していない。

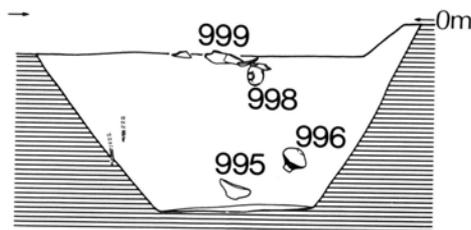
**S D 22**  
(図版 64)

1324 が W 系統である以外は A 系統に属す。

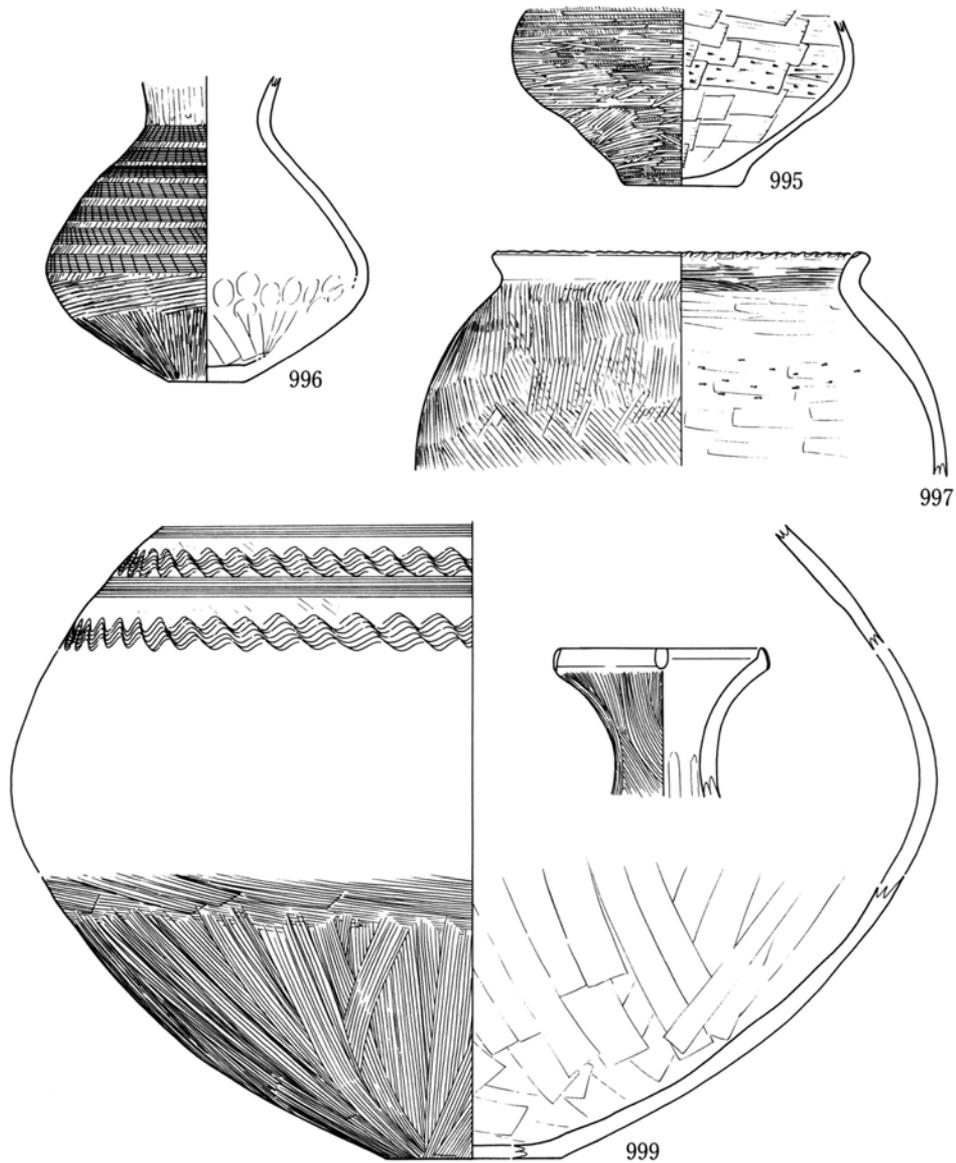
1318・1319 は櫛描紋系、1321・1322・1325 は磨消線紋系である。1319 は櫛 III 種 (4・3) で縦位直線紋の後横位に直線紋を施している。1318 は櫛 III 種かどうかは風化しているため判然としない。1312 は半截管状工具の縦位刺突紋の後に磨消線が施されている。1322 は小形の台付壺で、体部上半に縦位櫛刺突紋と磨消線が施され、その下には実測図に見るように複合鋸歯紋と刻み突帯が施されている。1325 は粘土紐垂下後に磨消線というよりは沈線を施している。粘土紐垂下は古い手法である。

**S K 23**

996 は W 系統の簾状紋壺。口縁部は口唇部を上下に拡張する太頸壺であろう。995 は細頸壺 Aa の体部。体部上半は磨消線紋のようだ。997 は口縁部内面に指頭圧痕紋を施す甕。以上は下層。998 は細頸壺 Aa。非櫛描紋系であろう。999 は W 系統壺。直線紋と波状紋の組み合わせを反復させる。以上は上層。



第186図 SK23土器出土状態 (1:40)



第187図 SK23出土土器

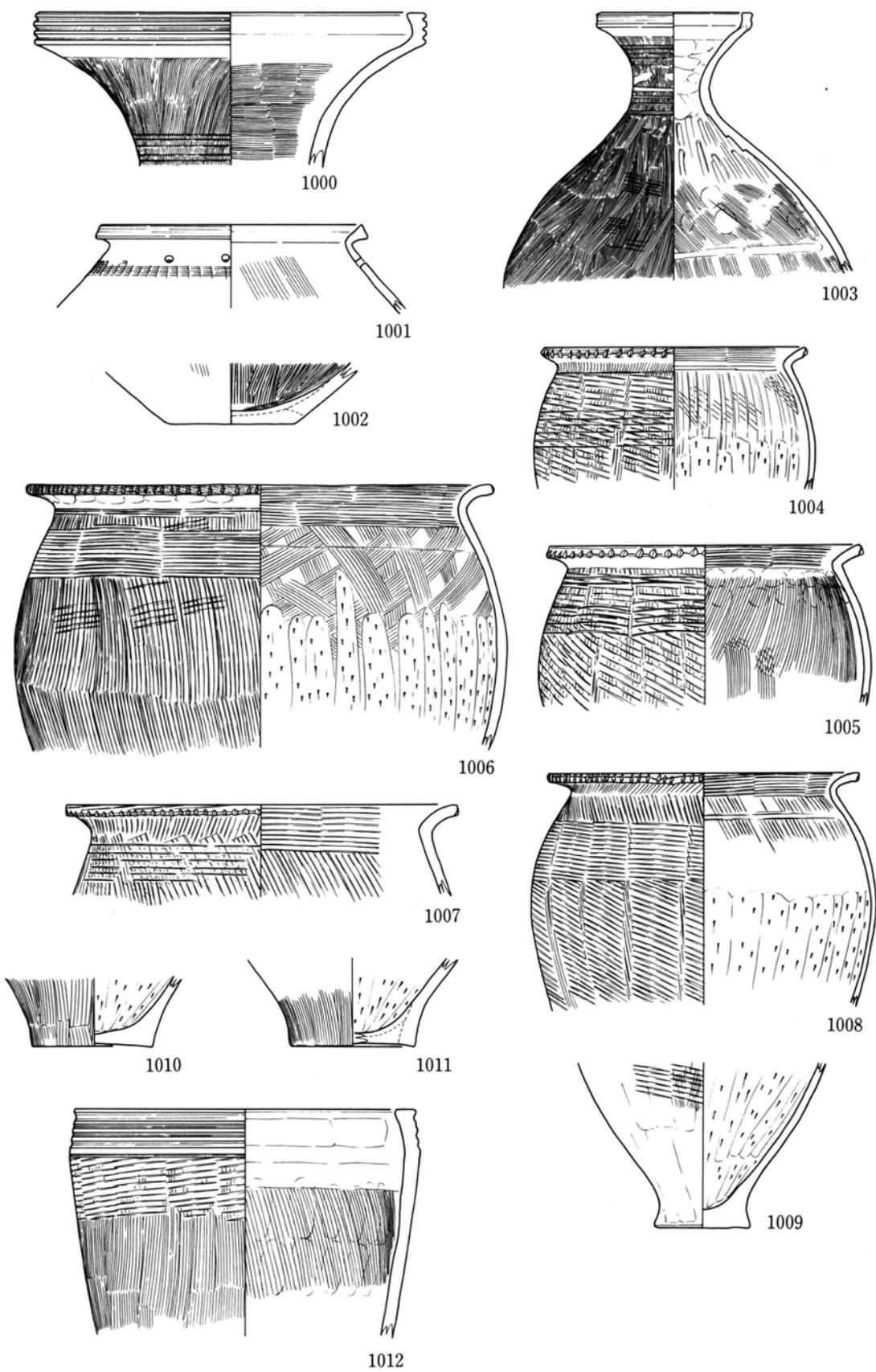
S K 159 1013～1019はA系統、1018・1020はD系統、1021はB系統。

A系統 1019は口縁部に部分圧痕紋を施す。圧痕はD字の流れた形状になっている。

台付甕脚台は、1014・1015が小さな台を別にして組み合わせているのに対し、1017は充填で作られている。1017の脚端部はヨコナデされ、接地面が凹面をなしている。

D系統 1020はA系統甕に比べて体部上位の張りが強いだけで、大差はない。胎土色調の特徴がW系統に近い。1018は底部成形がdでD系統の特徴を示している。

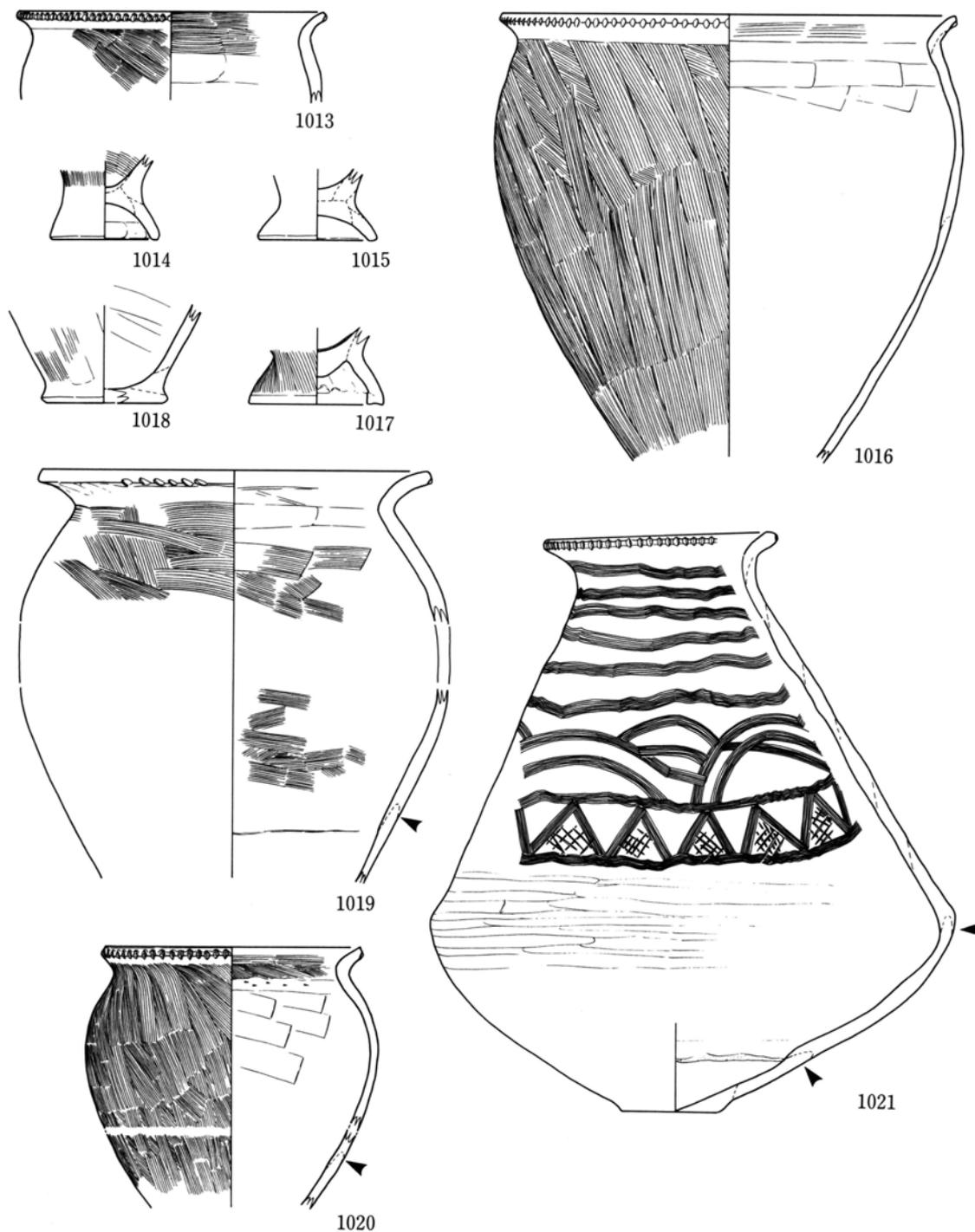
B系統 1021は口縁部に板で刻みを加える。以下は櫛描紋であるが、上位6段は直線とも波状とも言えない微妙な上下の揺れがある。その下は、櫛描紋帯2帯で大きな連弧紋を配した後、谷の部分に3帯の小さな連弧紋で埋めている。手法的にはI期の二枚貝刺突連弧紋と同じ



第188図 SK159出土土器 (1)

である。最下段は横位に波状紋を施した後鋸歯紋を作りその下に波状紋を加えて閉じる。  
そして、一つおきに沈線斜格子紋で埋める。黒色仕上げ。

**D系統** 1000は太頸壺 Wb。口縁部は沈線3条後に回転ヨコナデ。沈線はかなり深い。1001は短頸壺。口唇部は回転ヨコナデで凹面をなす。円孔と簾状紋の一部が観察できる。



第189図 SK159出土土器 (2)

1003は細頸壺 Wb。口縁部は回転ヨコナデで凹面をなす。頸部には櫛描直線紋と沈線5条が施される。体部外面は無紋でハケメを残す。ハケメの下にタタキ痕が観察できる。内面は上位に工具による引っ掻いた痕跡が顕著に残っている。

甕は各種調整の組み合わせと順序によって、

a 2類：タタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメー1006、

a 3類：タテハケメ→タタキー1008、

a 4類：タテハケメ→タタキ→連続ヨコハケメー1004・1005

b 類：タテハケメ→連続ヨコハケメー1007、

の4類に区分できる。

1009は、甕下半で外面にはハケメとは異なる擦痕がある。

1012は他に類例の少ない円筒形の鉢形土器である。口縁部は4条沈線後に回転ヨコナデされ、体部はタテハケメの後上位のみタタキが施されている。

1010・1011はやや上げ底をなす。

**S K 255** 1024～1027はA系統、1032～1035はB系統、1028・1029はW系統。1022・1023・1030・1031は折衷型である。

**A 系統** 1024は非櫛描紋系、1025・1026は櫛描紋（櫛描紋e'系）系、1027は磨消帯だが頸部には櫛描紋が施される。1026の口縁部形態はW系統の影響であろう。

**B 系統** 1032は斜格子紋帯の上下に沈線を2条ずつ付加し、その下に沈線2条と二枚貝刺突紋を施す。体部主紋様の懸垂紋は、縦位の櫛描紋を何条もの沈線で横に区切ったあと両側を沈線で挟む。そして下端両側から櫛描直線を「八」字状に加える。懸垂紋は何箇所かに配され、その間には縦位波状紋（櫛I種）を沈線で囲いさらに下部に縦位沈線と横位沈線波状紋を加えた単位紋を幾つか配置するものと推測する。

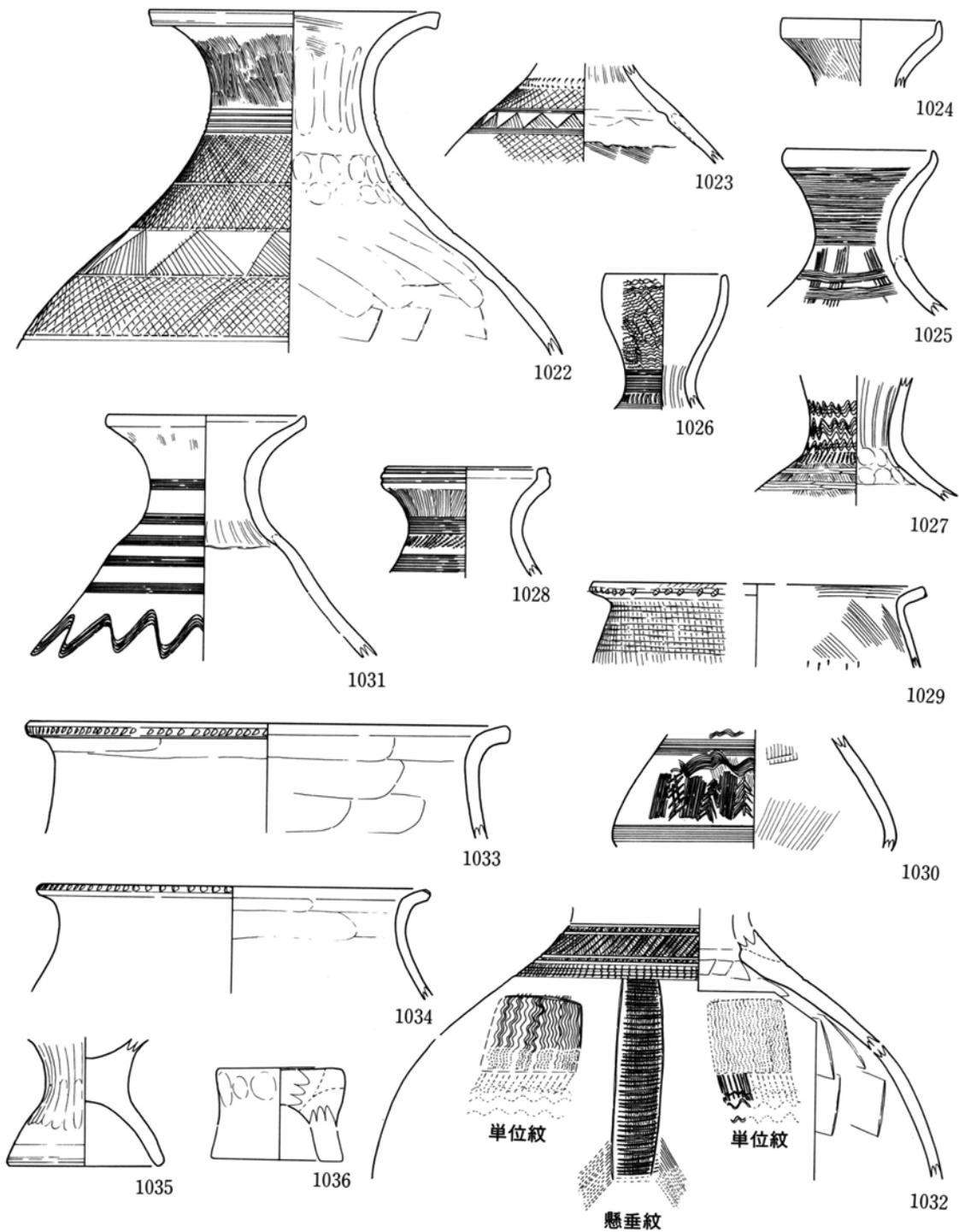
1033～1035は台付甕で口唇部はD字刻み、頸部以下外面はナデ調整される。

**W 系統** 1028は太頸壺 Wc。口縁部は2条沈線後回転ヨコナデ。頸部は直線紋と櫛刺突紋が施されている。1029は甕 Wb。

**折衷型** 1022は口縁部は回転ヨコナデされ頸部にも沈線が3条施されておりA系統の特徴を示すが、体部施紋は鋭い切り込み状の沈線によって施されておりB系統の特徴を示す。1023は半截管状工具の刺突紋以下櫛描直線紋と鋭い沈線紋との組み合わせであり、A系統とB系統の中間的様相である。

1030は横位紋様が直線紋と波状紋の反復のようであるが、実測図のように縦位直線で分割した中に沈線で左から斜格子紋、羽状紋、綾杉紋が施されている。

1031は体部上位の隆起がB系統、口縁部はA系統、施紋はW系統となる。



第190図 SK255出土土器

S K 262 1037~1042・1044~1048はW系統、1043・1049~1051はB系統。

**B系統** 1043は口縁部に回転ヨコナデが施され、外面は凹面をなす。口唇部上端は板で刻まれる。頸部には斜格子紋、以下は半截管状工具で平行線が施されているが、櫛III種ではない。1049は櫛I種A類と半截管状工具による施紋。1051は横位の櫛描紋帯を縦位に半截管状工具で切る手法は1049と同じだが、その間に懸垂紋を沈線で加えている。いずれも黒色仕上げ。

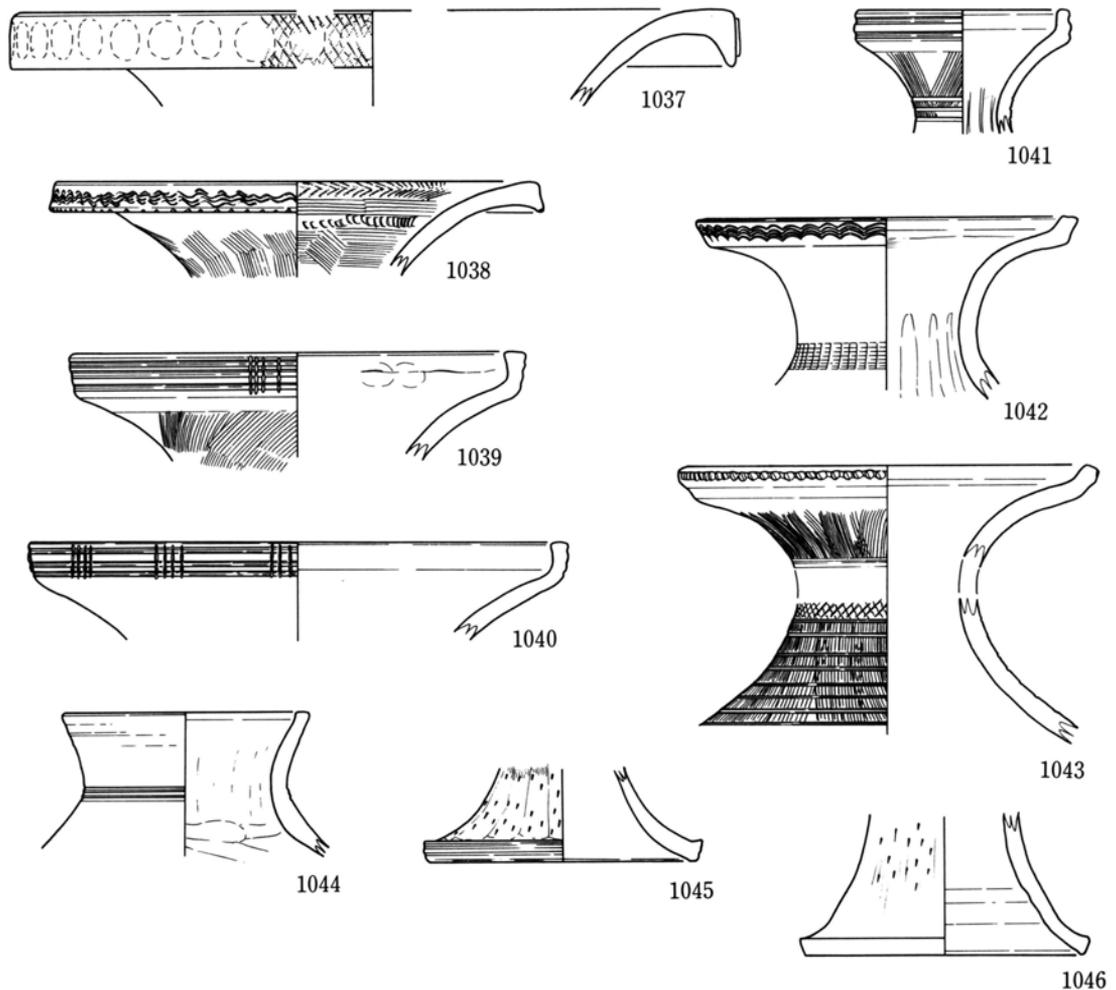
**W系統** 1037は太頸壺 Wa。口唇部は下方に拡張され、ハケメ工具で斜格子に圧痕が施された上に円形浮紋が貼り付けられる。1038は口縁部内面に櫛羽状刺突紋。頸部寄りに爪状圧痕を残す。

1039は太頸壺 Wb で、口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデされ、さらに櫛で切られる。1040も同じ手法。1041は細頸壺 Wb。口縁部は2条沈線に回転ヨコナデ。頸部は沈線3条。1042は形態が1043に近似する。口縁部は外傾し、回転ヨコナデで同じ様に凹面をなす。

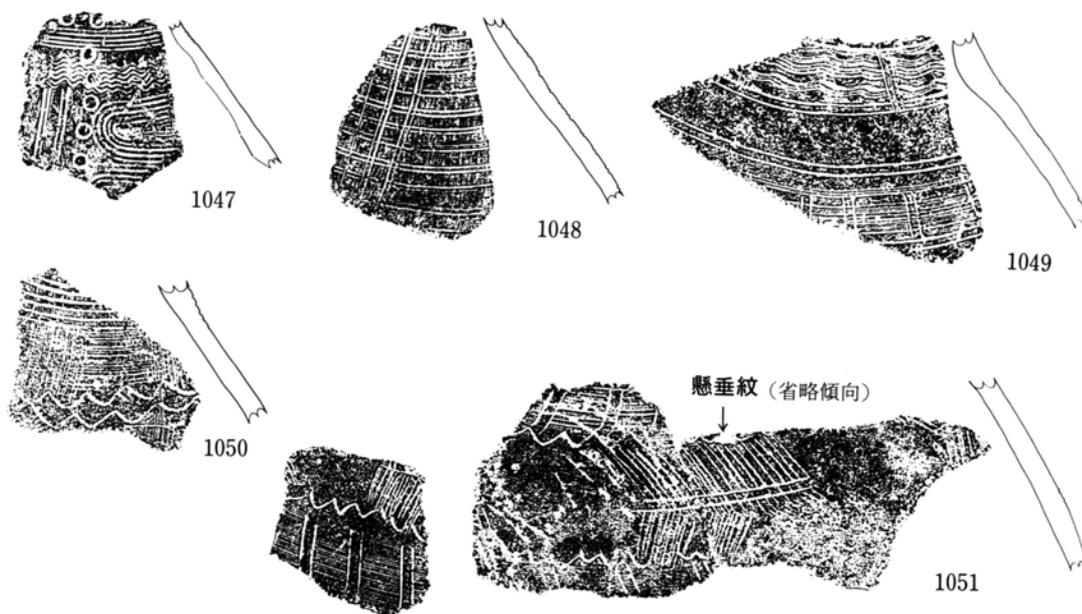
1044は短く立ち上がる口縁部と頸部に沈線3条。円窓付壺か。

1045・1046は高杯脚部。1045は脚端部に回転ヨコナデで凹線が2、3条できている。外面にケズリ痕を残す。

1047は縦型流水紋。1048は櫛Ⅲ種(2・2・2)の櫛描紋。



第191図 SK262出土土器 (1)



第192図 SK262出土土器 (2)

**S B 04**  
上層

1052は口縁部内面の櫛描連弧紋を除けばA系統である。連弧紋はW系統の施紋である。口縁部は回転ヨコナデされ、口唇部は凹面をなす。上下端部には刻みが別に施されている。頸部には突帯が2条めぐらされ、刻みが加えられている。

1053はタテハケメ→タタキ、1054はタタキ→タテハケメ、1055はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1056は有孔鉢。口縁部には指頭圧痕紋が施されている。

1058はB系統台付甕。

**S B 25**  
上層

1059は全面研磨の高杯。口縁部は外方へ突帯状に段をなす。

1060は台付甕 Wa の脚台部。1061は底部が厚いので台付鉢の脚部であろうか。1062はA系統台付甕の脚台部。

**包含層一括**

1063はB系統壺である。口縁部はヨコナデされ、やや外反する。頸部以下は櫛描紋(櫛I種A類)と沈線紋の組み合わせである。頸体部界には二枚貝刺突紋が施されている。

1064は形態的には細頸壺 Aa。全面磨消線紋手法で三角形を組み合わせた一見複雑な紋様を施している。

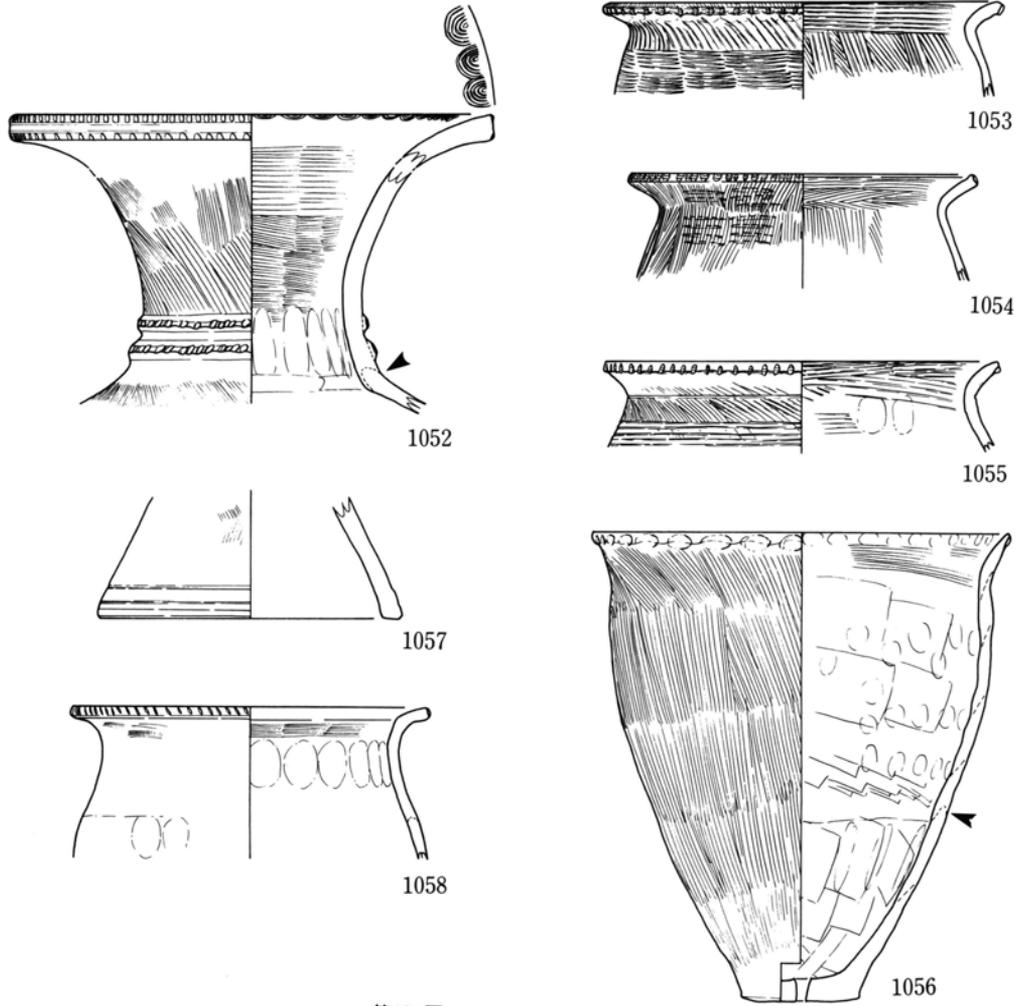
紋様は次の順序で施されている。縦位に櫛描波状紋→体部の下半分に13条の磨消線→器面8分割の軸線として縦位の磨消線→縦位分割単位内部を相対する直角三角形3段でもって埋め、直角三角形は斜位の磨消線で充填する→体部上半には横位磨消線がないので、欠落部分を補う。縦位分割の軸線を挟んで施されている直角三角形は左右でずれているために二等辺三角形にはなっていない。軸線から視点をずらした場合に整っているように見えるのは、頂点が下を向く中央の三角形だけである。

本例は、当初から磨消線紋の幾何学的構成を意図していたとは考えられない。紋様構成上不必要な縦位波状紋と最初の横位磨消線が図形の基礎単位になっておらず、紋様は縦位

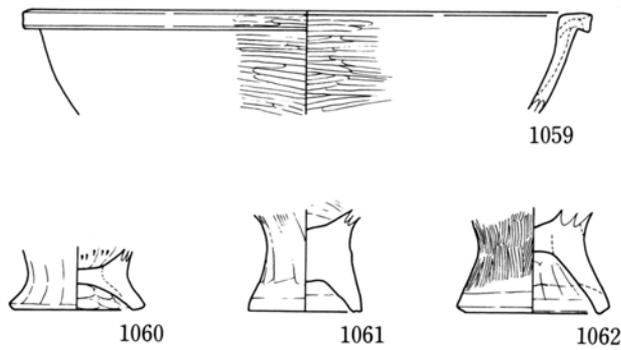
の軸線設定後に構成されているからである。途中で変更を加えた例として注目したい。

1065は三角形の枠を施して後に磨消線を充填している。最初から意図的に施紋されている。

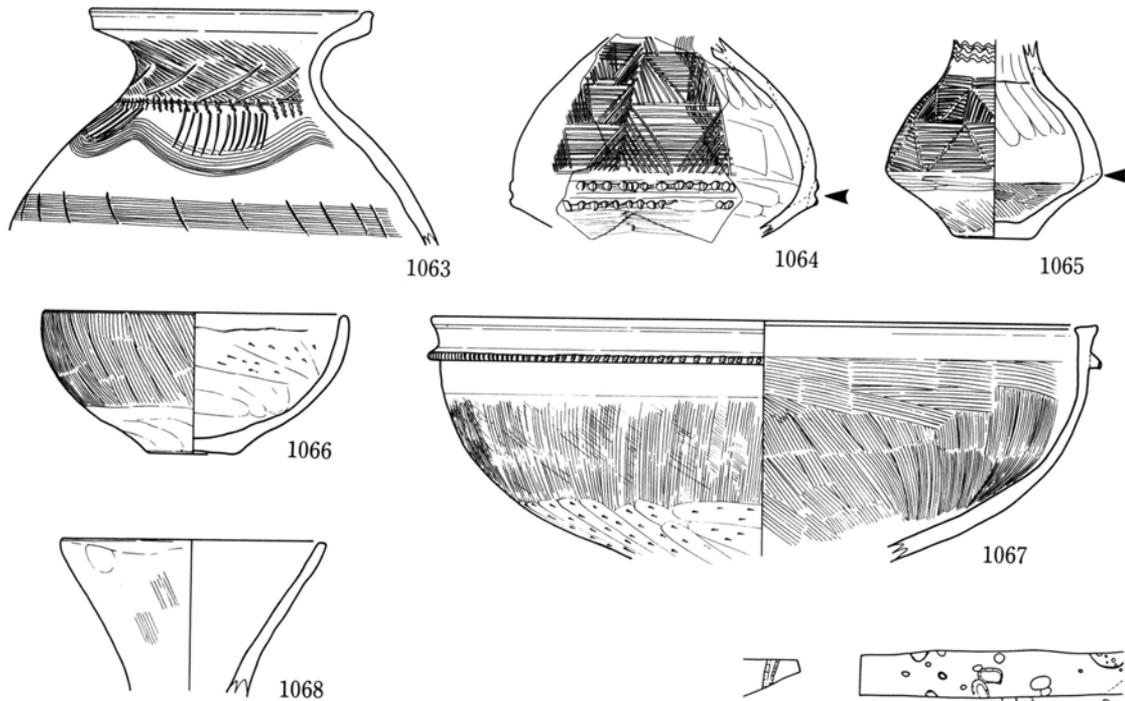
1066はA系統鉢。1067はW系統鉢。口縁部は回転ヨコナデ。口唇部は拡張して微妙に凹面をなす。



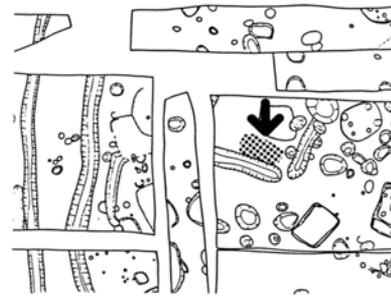
第193図 SB04上層



第194図 SB25上層出土土器



第195図 包含層一括出土土器



第196図 土器群出土位置

### その他の遺構

- S K 29 1327はA系統平底甕。1328は深鉢 Cb。1329は甕 Wb。この3点と共伴の1330は高杯 Wa。
- S K 62 口縁部は上下に離れて沈線を施して後に回転ヨコナデ。杯部外面はケズリ痕を残している。1331・1332はタテハケメ→タタキ、1333・1334はタタキ→タテハケメ。1335はタタキの向きが上下で転移している。成形第1段階と成形第2段階の調整作業上の姿勢の違いに由来するのか。
- S K 85 1336は太頸壺 Wa。口縁部内面はハケメ工具圧痕。口唇部は3条沈線後に回転ヨコナデ。1338は太頸壺 Wb。1337はA系統細頸壺。口縁部は回転ヨコナデ。1339はB系統か折衷型。口唇部に刻み。1340は小形の高杯か。口縁部は回転ヨコナデ。1341・1342は鉢か高杯 Wa。1343は脚端部が沈線を施したように凹線をなす。1344は高杯 Wb。1345は外面にケズリ痕を残す高杯脚部。脚端部は上方はねあがる。1346は台付器種の脚部。1348はタテハケメ→タタキ、1350はタタキ→タテハケメ。1357は外面に擦痕を残す。1347・1349はタテハケメ下の調整がタタキかどうかははっきりしない。1352はナナメハケメ?→タテハケメ→ハケメ工具による波状紋。口唇部はハケメ。1355・1356は底部成形d。1353は台付甕 Wa の脚部。

- S K 78 1358はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1359はタタキ→ナナメハケメ。口唇部は上下からのハケメ。底部は焼成後穿孔。有孔土器。1360はタタキ→タテハケメ。1362はタタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ。1361は立ち上がり内彎気味の脚台。台付甕W (A)。
- S K 83 1363は太頸壺 Wb。
- S K 95 1364は円窓付壺かもしれない。1365は隆起部に斜格子紋を施している。器面は非常に粗いハケメ。
- S X 13 1366はB系統壺。横位斜格子紋帯を基調とする紋様構成。黒色仕上げ。1367はW系統壺。上下に重ねれば壺棺。
- S K 110 1368は細頸壺 Aa の櫛描紋系だが、口縁部はほとんど Ab。口縁部は回転ヨコナデ。1369はD系統を模倣したA系統甕であろうか。体部のハケメは粗い。3本/cm。
- S K 325 1370は円窓付壺。口縁部は回転ヨコナデ。
- S K 117 1371はタテハケメ→タタキ。口唇部はハケメ。底部に焼成後穿孔。有孔土器。
- S K 126 1372はB系統壺。櫛I種A類。黒色仕上げ。
- S K 137 1373はタテハケメ→タタキ。1374は折衷型。口縁部内面は円周4分割の位置に3ヶ1単位の瘤状突起。口唇部は回転ヨコナデで凹面をなす。頸部以下は、波状紋→直線紋→沈線斜格子紋→直線紋→コンパス鋸歯紋→管状工具圧痕の順で施される。
- S K 137 1375・1376は鉢。口縁部は沈線後回転ヨコナデ。1377はB系統鉢。外面ナデ仕上げ。
- S K 153 1378は鉢かもしれない。タタキ→タテハケメ→波状紋。内面には若干ケズリが観察できる。
- S K 157 1379は珍しい形態。1380は口縁部に1条沈線後に回転ヨコナデの後、ハケメ工具羽状圧痕を施す。1381は口縁部の内傾が強く、高杯 Wa とは異なる。台付無頸壺かもしれない。1382・1383は高杯脚部。脚端部は回転ヨコナデされ、端面が凹面をなす。1384はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1385は台付甕W (A) 脚台。
- S K 145 1386は貫通しない多数の小孔が施されている脚部。
- S K 142 1387は体部下半に擦痕が観察できる。口唇部はハケメ。1388は細頸壺口縁部。系統不明。
- S K 198 1389は太頸壺 Wa。口縁部内面には瘤状突起が貼り付けられている。口唇部は下方に拡張され、管状工具圧痕が施される。頸部には幅広のハケメ工具による刻み突帯が施されている。1390は櫛描直線紋で区切られた中が、コンパス鋸歯紋、ハケメ工具圧痕(疑似縄紋風)で充填されている。1391・1392・細頸壺 Aa 系統。1393・1394はI期土器の混入。1393は口縁部外面に縦位の沈線紋が施されている。C系統に属すか。
- S K 203 1397は太頸壺W。1398は口縁部が回転ヨコナデされ、口唇部が凹面をなす。口縁部内面は波状紋、頸部はコンパス鋸歯紋、以下直線紋が施されている。

- S K 216 1399は太頸壺 Wc。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ、頸部は簾状紋、体部は波状紋。体部下半にはA系統壺のような成形第1段階接合部の変換点がある。1400はタテハケメ→連続ヨコハケメ。口唇部はハケメと刻み。1401は受口状口縁甕。口唇部と屈曲部に刻みが施されている。1402・1403は台付甕 Wa の脚台部。1404はW(A)の脚台部。1406は台付甕 Wa の脚台か。1407~1411は台付甕 A の脚台。1409は接地面の拡張が最も目立つ。1405はB系統台付甕。
- S K 238 1412・1413はB系統壺。懸垂紋のないグループ。1414は口唇部が上方に伸びて少し受口状をなす甕 W。外面にハケメ。体部はタタキ→タテハケメ。
- S K 243 1415は口唇部に刻みを施す受口状口縁甕。1416はその脚台か。
- S K 246 b 1417は体部に管状工具圧痕、コンパス鋸歯紋、櫛描直線紋を施す台付壺 A。1418はW系統の鉢か台付壺の脚台部。3条沈線後に回転ヨコナデ。1419は細頸壺 Wb。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。体部上半には沈線波状紋。1442は太頸壺 Wb。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ。その上に刻みが加えられる。1443は高杯。突帯状に段を作り出した口縁部外面に斜格子紋が施される。突帯下には沈線が加えられている。1444はタタキ→タテハケメ。1445はタテハケメ→連続ヨコハケメ。1446・1447はB系統壺。1448は甕 Af。
- S K 263 1420はタタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ。1421はタタキ→タテハケメ→ハケメ工具波状紋。
- S K 279 1422は1414と同類。口縁部はハケメ。体部はナナメハケ(タタキ?)→タテハケメ。
- S K 299 1423~1425はA系統土器。1426はB系統土器。1429は有孔鉢。口縁部外面に指頭圧痕。体部外面はハケメと部分にケズリ痕。内面は砂が細かいのでケズリ痕がはっきり残らない。1428は台付甕 A 脚台。底面にハケメ。天井部にはヘソ状の突起がある。1429は台付鉢の脚部か。1430はタテハケメ→断続ヨコハケメ。1432は底部の上げ底の度合いが大きい。
- S K 109 1434・1435は甕 Af。1436は櫛III種(2・2・2)直線紋。1437は折衷型。隆起部に斜格子紋が施され、下に直線紋が伸びている。
- S K 211 1438は太頸壺 Wa。口縁部内面は櫛刺突羽状紋と瘤状突起、口唇部は管状工具刺突による重円紋。1439はハケメ工具圧痕紋。原体の動きは簾状紋風であろう。1440はB系統壺。口縁部はヨコナデのあと沈線波状紋が施されている。
- S K 236 1441は波状紋で区切られた中に櫛描連弧紋が2段確認できる。上段は三重連弧紋とその谷に充填される3条の直線紋(1021では連弧紋であった)の反復であろう。下段は大きな二重連弧紋の反復であろう。黒色仕上げ。
- 包含層 1449は細頸壺 Aa 系統。頸部の扇形紋はW系統からの借用か。  
1451は口縁部に回転ヨコナデ。口縁部内面は3ヶ1単位の瘤状突起が円周4分割の位置に施される。頸部には簾状紋が観察できる。

1453は口縁部の傾斜が強い。円孔が2つあるので台付無頸壺であろうか。口縁部外面は回転ヨコナデが施され、不揃いな凹線が7条観察できる。下半はケズリ。

1454は1067のようなW系統突帯紋鉢。

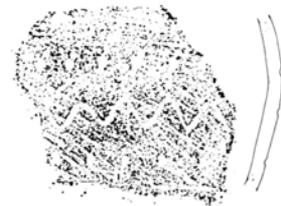
1455は高杯または台付無頸壺の脚部。脚部裾は回転ヨコナデが施され、凹線が2条確認できる。その上方にはタタキ痕が観察できる残している。

1457は口縁部に櫛描紋の施された細頸壺 Wa を大きくしたタイプの壺。頸部にも櫛描紋が施されている。

1458は口縁部内外面、体部上位にコンパス鋸歯紋の施された受口状口縁甕。

1459は口唇部に櫛刺突紋を施したB系統タイプの壺。

1460は壺D。受口状口縁部外面にはハケメ工具で羽状圧痕紋とハケメ工具圧痕を加えた棒状浮紋を貼り付ける。頸部はB系統やC系統壺の古い形態に類似する長頸形を呈する。紋様は直線紋→波状紋→2条平行直線紋（半截管状工具）→鋭い切り込み状の斜格子紋→2条平行直線紋→2条平行波状紋→縦位に粘土紐を垂下してハケメ工具圧痕を加える、という順で施紋される。



1069

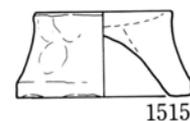
第197図 包含層出土土器

1069は甕の体部上半。ハケメ工具の圧痕紋と波状紋が組み合っている。

## 土製品

1515・1516は脚状土製品である。

成形法は底部成形cに共通し、上下反転したものである。



1515



1516

第198図 脚状土製品

## 石器

### 石鏃

五角形系は84・85・86をあげることができるけれども、側縁が内彎して上部2角の明瞭に突出する例は出土していない。

87は先端部よりの側縁が内彎気味で鋭くつくられて五角形的ではあるが、変形している。確實時期的な変化と言えるだけの保障はないけれども、五角形系の減少は考慮する余地があるかもしれない。

無茎は4点あるが、90は素材の歪みが大きく、側縁も彎曲している。93は先端部にさらに剝離を加えて両側縁に角を作り出している。かえって鈍角になってしまっており、先端の欠損を再生したとしてもよくわからない。

石鏃転用有軸錐(96・97)と有軸錐(98)および、大形の穿孔具(112)がある。112は、基部が断面方形で、先端は断面円形になっている。穿孔作業に伴う線条痕ははっきりしない。

### 磨製石鏃

99は残存長4.5cm。金属器を模したものか。

100は長さ1.5cmと非常に小さい。

### 磨製石斧

伐採斧は109・110がある。110は叩き石に転用されたため刃部が磨滅している。

加工斧。101・102は偏平片刃石斧である。101は側縁が平行し薄手であるのに対し、102は厚手で幅も頭部に向かって狭くなっている。

103は柱状片刃石斧である。104は偏平柱状片刃石斧である。

105は中形の偏平片刃石斧。106～108はさらに小振りの偏平片刃石斧である。

### 尖頭器

2片に分かれている。側縁の刃部は丁寧に研ぎ出している。

### その他 (図版76・77)

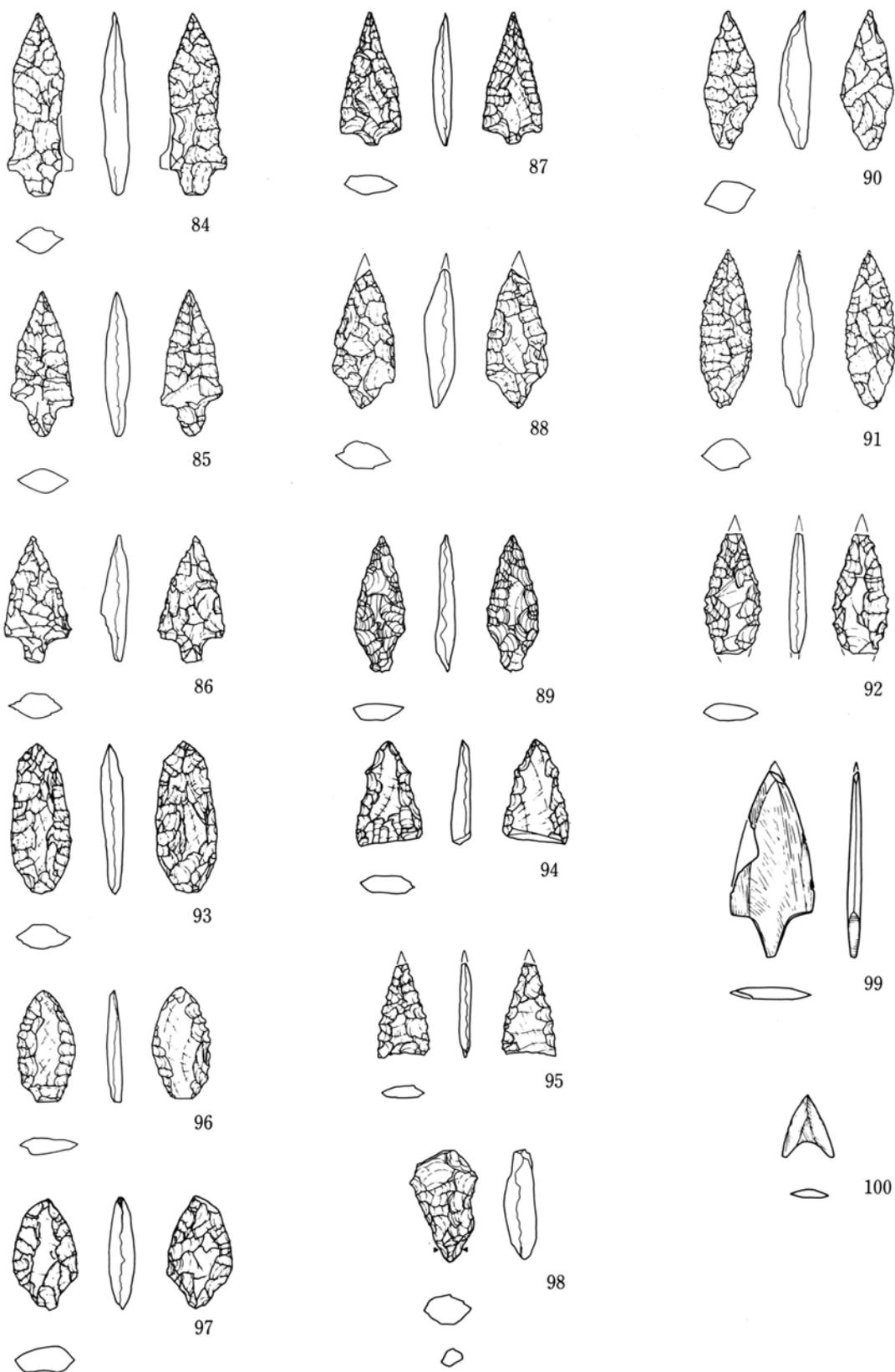
113・114は下部側縁に刃部が形成された剝片石器である。113は片面に礫表皮を残している。上部側縁は、剝片の中心に対して「V」字状に大きな剝離を加えて2つの大きな抉りを作出することによって、肩部を形成している。単に握り用というだけでなく形態表出的な要素もあるのであろう。刃部は使用により潰れている。叩く行為が行われたのであろうか。114は剝片に刃部をつけただけで極めて粗製である。

115～120は叩き石。115は剝離痕とその潰れ痕が全面を覆っている。116は磨製石斧(伐採斧)の転用で、中央部がやや凹む。117～120は棒状礫の叩き石で、両端や側縁に使用痕を残している。

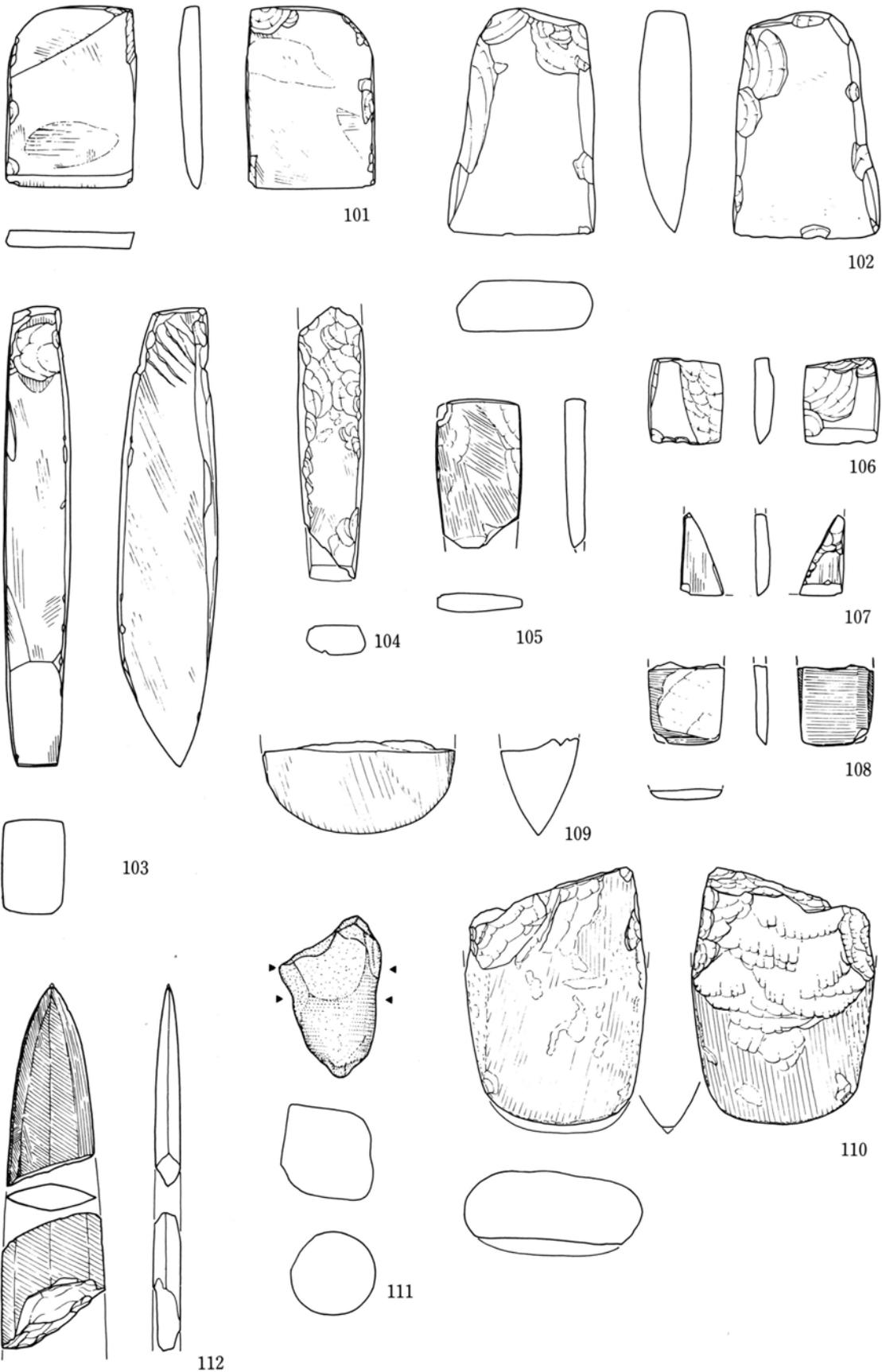
121～126は砥石。121は長さが32cmあり石皿状である。

122は紐か何かの緊縛痕が火熱を受けて焼き付いた礫。両端が叩き石として使用されたような風でもある。

127・128は砥石であるが、叩きの集中して潰れて抉れた部分が幾つか観察できる。128はどちらかと言えば台石の方であろう。



第199図 石器 (1) (2 : 3)



第200图 石器 (2) (1 : 2) 112 SZ03 (SD15)

木器

III期の木器がまとまって出土したのは、SD03の土器廃棄下層(56C区)及び東方の延長部(59F区)である。前者には木器と板材や自然木がある。第201図はその出土状態である。上段は梯子、下段は有頭棒及び板材。ほぼ溝底に接して出土した。後者からは、8・9と図示していない伐採斧の直柄(写真図版27-a)である。

**ハシゴ** 4は残存長104cmのハシゴ。足掛け用の段はすでに欠損しており、欠損部分から3段が復元できる。本来はさらに長かったであろう。

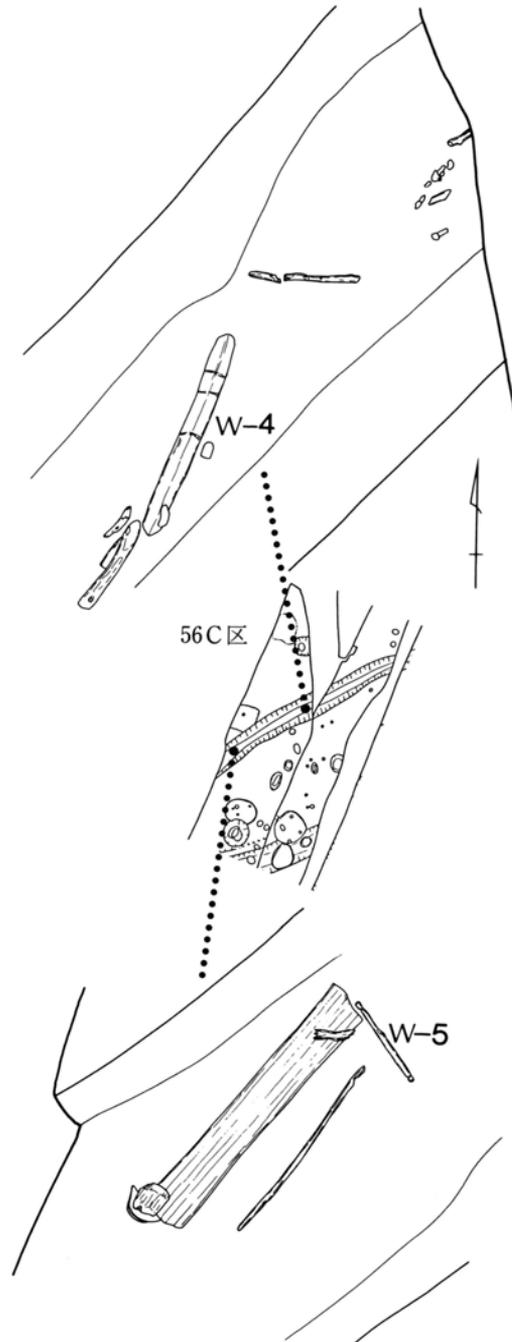
**布巻き** 5は長さ57cmの機織り具の一部、布巻き具か。

**カイ状木器** 6はSK01の底部に接して出土したスキあるいはカイ状の木器である。上部は欠損しているので続くようである。残存長50cm。未製品であろう。

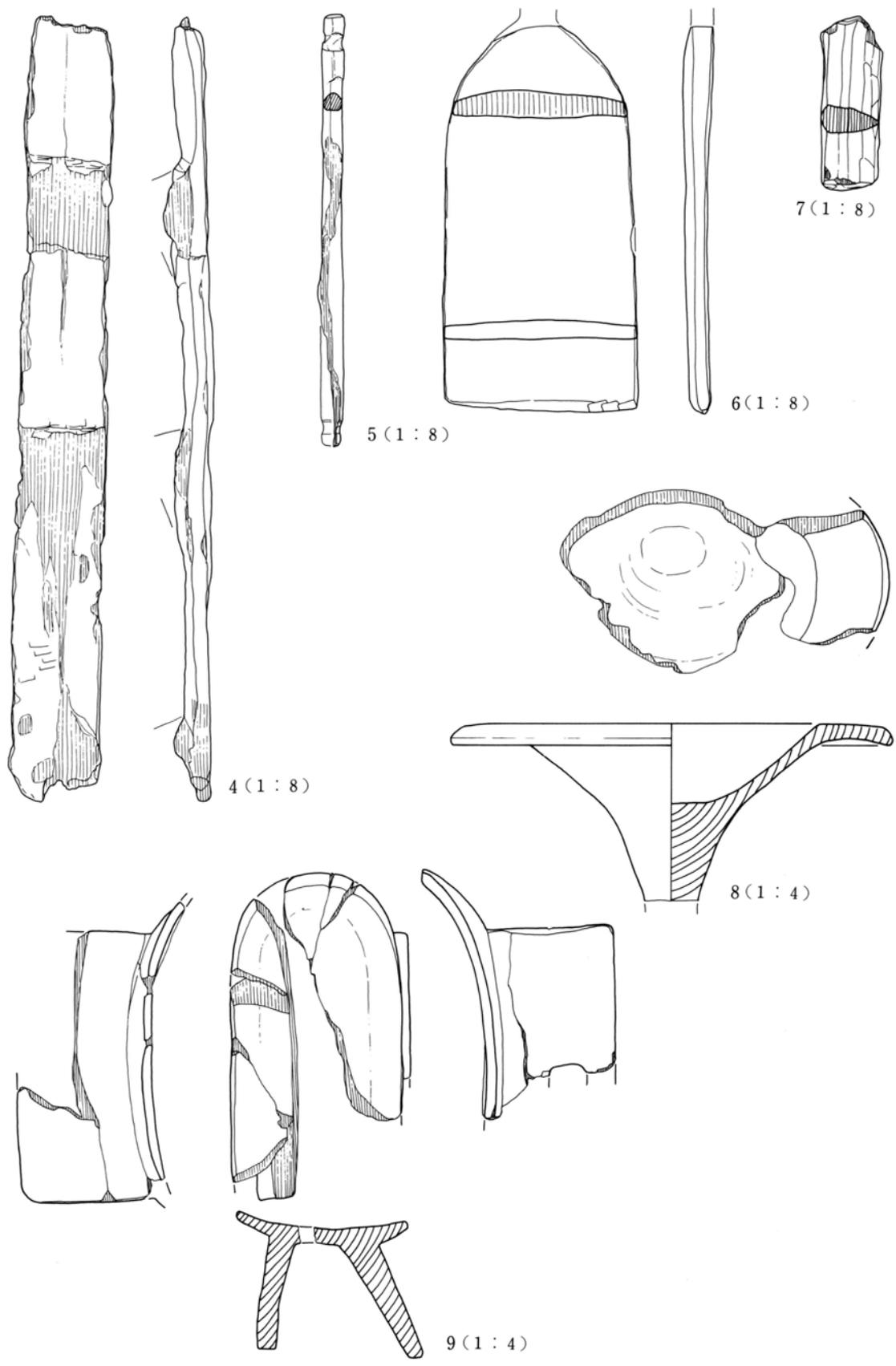
**原材** 7はSE01中層から出土した原材である。表面にはケズリ痕が観察できる。長さ22.4cm。

**高杯** 8は高杯の杯部である。表面に加工痕は観察できない。土器の高杯Wbと同じ形態である。杯部径は復元で29cm。

**イス** 9はイスか。天板の上面観は小判形を呈し、残存長22cm、幅11.2cmで両端が上方に反る。天板下部には方形板が一木作りで付けられている。右の方形板には1辺5cmの不定形な孔が観察できる。おそらく両方に穿たれていたであろう。



第201図 SD03木器出土状態(1:40)



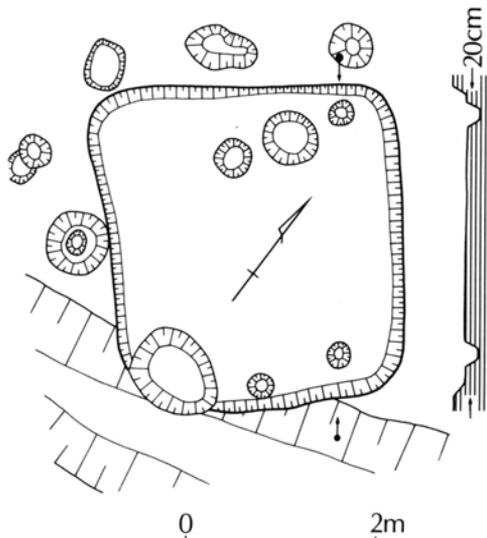
第202図 木器 4・5・8・9 SD03 6 SK01 7 SE01

IV 期

遺 構

SB70  
(図版18)

SD19埋没後に床面が形成されている。プランは隅円方形で長軸340cm、短軸 300cmを測る。掘形は深さ約 10cm残存。柱穴は幾つか検出されているが特定できない。



第203図 SB70プランセクション (1:80)

緩やかな円弧をなす北半部と強く屈曲する南部からなる。上部が大きく削平されているため溝上面の規模は意味がない。溝の底面標高は北半部が平均-45cm、南部で-25cmを測る。最も高いのは屈曲部から北へ15mほどのところで0mを測る。

SD07は、一部土層セクション(59E区西壁)において再掘削の痕跡を確認したけれども、面的には追及できていない。全面的な再掘削であるかどうかは不明である。

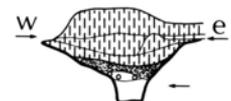
埋土は、上層からI：黄白色粘土層を含む弥生時代以降の自然堆積層①~③、II：褐色砂質シルト層からなる土器群を含む堆積層④~⑥・⑧~⑪、III：黄灰色や灰白色の微細な砂を綺状に含む暗褐色砂質シルト層⑦⑫となる。しかし、II層は北半部で検出していない。北端の Section 1ではI層が標高0m付近から堆積が始まっており、他の地区とは異なる。

SD17

L字状に屈曲する溝である。SD07と平行する部分では1条分岐(SD24)する。溝底面標高は調査区外壁土層セクションで+15cmであり、かなり浅くなっている。



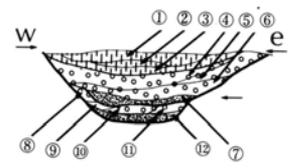
Section1



Section2



Section3



Section4



Section5



Section6



Section7

第204図 SD07・17土層セクション (第205図参照)

※矢印は、上が標高50cm、下が0mを示す。  
※※ n:北 s:南 w:西 e:東

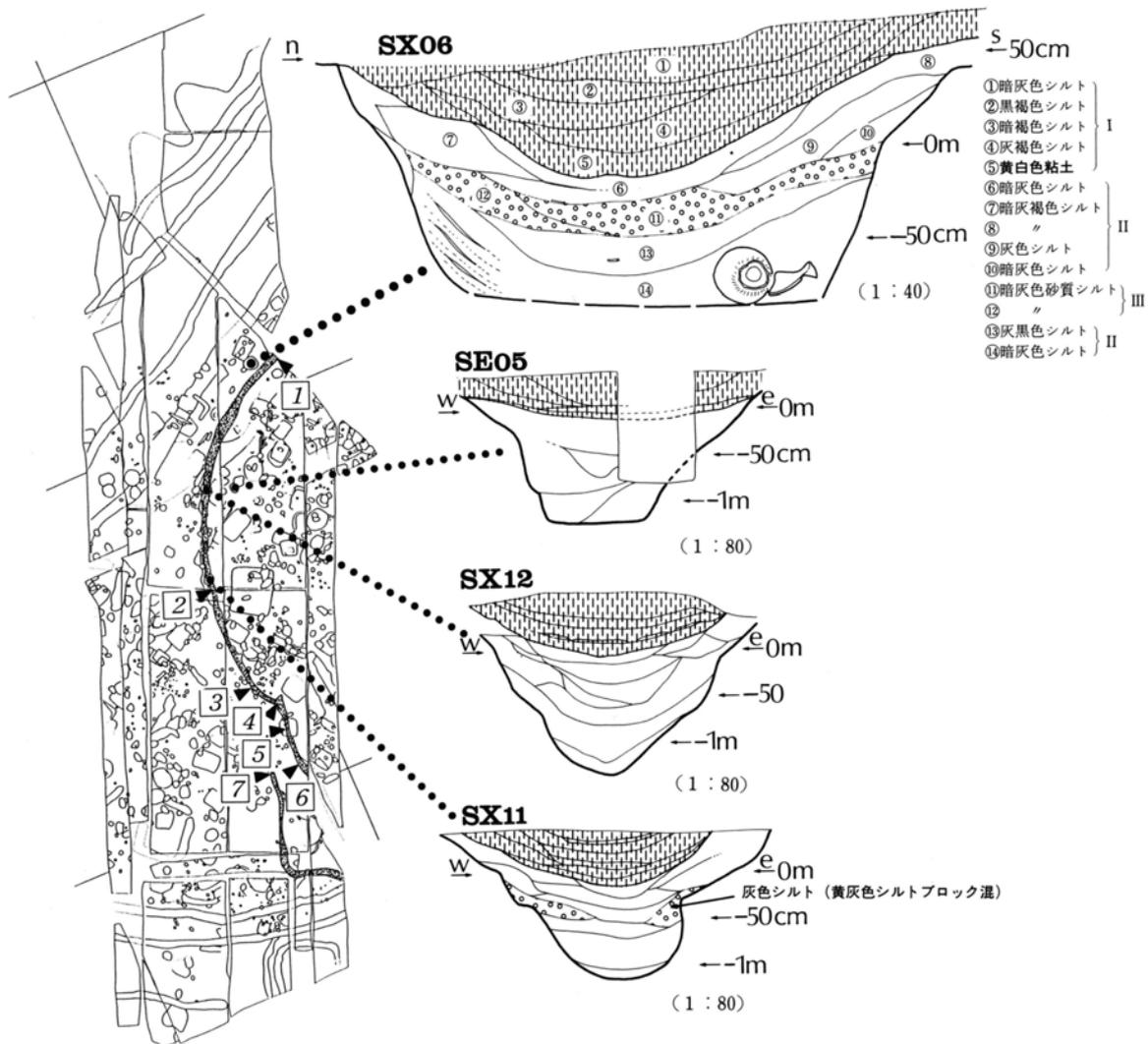
S E 05 上部は径約300cm、下部は径約100cm、深さ約 100cmのすりばち状をなす。埋土上部は弥生時代以降の堆積層が覆っていた。

S X 06 径約340cm、深さ 120cmの大形土坑。底面に接して土器が出土した。埋土は上層から I：黄白色粘土を含め弥生時代以降の堆積層、II：灰色を基調とするシルト層、III：暗灰色砂質シルト層、最下層はII層と同じだが灰白色の微細な砂からなる縞状の薄い層を含む。

S X 12 径約280cm、深さ約 180cm を測る底部の丸い土坑。SD07と重複している。土層セクションにはそれらしい輪郭が認められるものの確定できない。上部は弥生時代以降の堆積層が覆っている。

S X 11 上部の浅い皿状部分は径約370cm、下部は径約160cm で、深さは約 160cm を測る。SD07と重複している。上下の境界部分には黄灰色シルトブロックを含む灰色シルトが堆積していた。壁面の崩土であろう。

S K (土坑) 土器の廃棄と炭化物を含む土坑を幾つか検出したが、いずれもSD07の内側である。

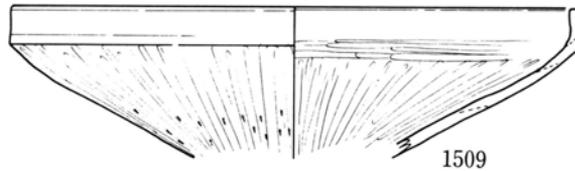


第205図 SD07・17土層セクション位置およびSE・SX土層セクション

## 遺物

### 土器

- S B 70 1509は杯部が皿状を呈しIII期の高杯 Wa に類似する。杯部は一部ケズリ痕を残すが、内外面とも研磨されている。口縁部はヨコナデされている。全体に簿手である。柱状の高い脚がつくのであろうか。



第206図 SB70出土土器

- S D 07 (図版78・79) 1461は小形壺。紋様は直線紋→波状紋→直線紋→扇形紋。  
1462は高杯。口縁部に2条沈線後回転ヨコナデ。1463は高杯脚部。裾端部はヨコナデで凹面をなす。1464は高杯脚部。1462と同形か。裾端部は上方にはねる。  
1465は蓋。  
1466は台付受口状口縁甕。口縁部外面は櫛刺突紋。体部はハケメ工具直線紋と波状紋。脚台部裾端がやや内側につまみ出される。  
1467~1470は高杯。1467は脚部上位に沈線が施され、中位でやや膨らむ。円孔も小さめで古い様相である。1469は櫛描直線紋間の波状紋がギザギザとなっている。1470は杯部が疑口縁で欠損している。1471は高杯。  
1472~1474は台付鉢。1472は細かい研磨が施されている。1473・1474は外面にハケメを残す。口縁部はヨコナデされている。1475は鉢。  
1476~1478は典型的な台付甕。口縁部はヨコナデされ、口唇部にハケメ工具圧痕を施す。脚台部は回転ヨコナデ。  
1479は受口状口縁甕。口縁部外面には櫛刺突紋、体部は直線紋と波状紋の反復。波状紋は谷が尖る特徴的な形態。黄褐色。1489は台付小形甕。1481はIII期甕W混入。  
1482は壺。口縁部内面に板による羽状圧痕紋。  
S X 06 1483~1487は壺。1483は、口縁部に回転ヨコナデ。1484は全面研磨。1485は、口唇部が上下に拡張され、口縁部内面には板で羽状圧痕紋が施されている。1486は、体部に直線紋

と波状紋の反復で最下段は扇形紋。1487は頸部に断面三角形突帯2条と突帯間に管状工具  
圧痕。体部は直線紋と斜走圧痕紋の反復。紋様部以下は研磨。

S X 11 1488は口縁部内面に板の羽状圧痕紋と棒?による刺突紋2段。口唇部は若干上下に拡張  
され、円形浮紋が貼りつけられている。1489は口唇部に圧痕。口縁部内面には赤彩で何か  
描かれている。

S X 09 1490は高杯脚部。

S X 12 1491・1492は壺。1493は高杯A。1491は口縁部がやや受口状気味をなし、内面に管状工  
具圧痕を施す。1492は口縁部内面に板による羽状圧痕紋。口唇部は沈線3条後回転ヨコナ  
デ。1493は口唇部がやや外方に突出し、面を作る。

S X 13 1494は赤彩蓋。

S X 10 1495～1497・1499は壺。1498は甕。1495は細頸壺 Aa 磨消線紋系。混入。

1496は口縁部内面に板による羽状圧痕紋と棒?による刺突紋。口唇部は沈線3条後に回  
転ヨコナデ。1497は口縁部内外面とも研磨。1499は口縁部内面に棒?による刺突紋。口唇  
部は回転ヨコナデで凹線を残す。体部は直線紋と波状紋の反復。

S K 63 1500は台付甕。口縁部は回転ヨコナデ。口唇部はハケメ工具の圧痕。

S K 132 1501は短頸壺。小さな貝による刺突紋と直線紋の反復。1502は鉢の底部か。沈線が5条  
ほどこされている。

S K 53 1503は長頸壺。紋様は口縁部に限定されている。外面は研磨。1504は体部外面に研磨が  
施されているようだ。

S K 350 1505は口縁端部が若干水平に折れ、板による羽状圧痕紋が施される。

S K 361 1506は無頸壺。体部外面はハケメをそのまま残す。

包含層 1507は受口状口縁甕。黄褐色。1479と同類。1508は皿状の杯部に柱状の長い脚部がつく  
高杯。裾部は強く外折し、端部は下部に粘土紐が付加されて上下に拡張される。

---

 其 の 他
 

---

## 土製品

**筒状土製品** 1517は、I期に類例のあった筒状土製品と形態的によく似ている。外面の紋様は、管状工具による円形圧痕列と磨消線の組み合わせである。

口側を上面として観察すると、筒状の体部は4分割されており、縦位に施された円形圧痕列とぎれるかたちで磨消線が施されている。手法的には細頸壺の体部紋様と同じである。四分割された部分のうち1区画は格子状に縦位に磨消線が加えられている。口の反対側(下部)には円形圧痕が2つ施されている。時期は、細頸壺紋様との関係で言えば、III-1期に位置づけることが可能である。

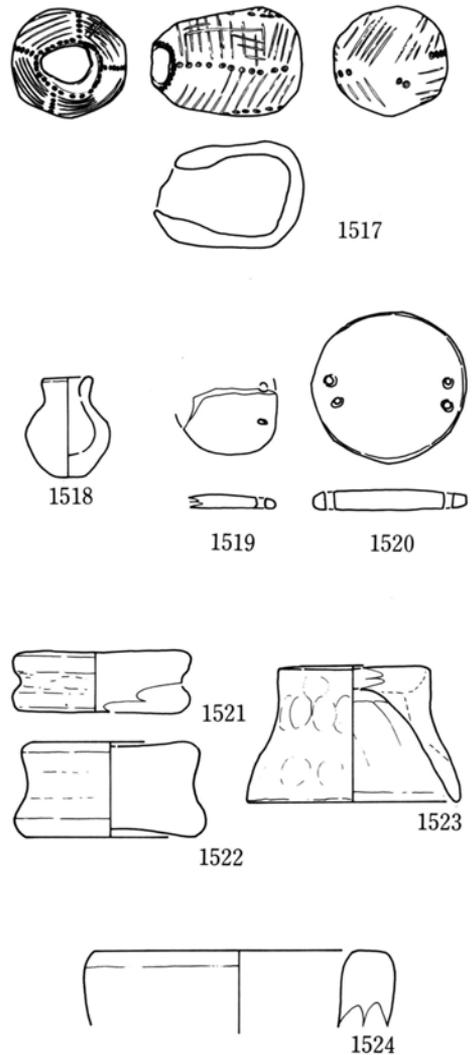
本例には鳥形土製品のような、横を正立として置くため(というよりは成形に関わる)底部は作り出されておらず、全体に丸みが残されている。系譜的に異なると考えられる。1518は壺のミニチュアである。

**蓋状土製品** 1519・1520は壺の蓋かと思われるが素紋である。おそらく中期に属するのであろう。これまでのところ、阿弥陀寺遺跡では甕蓋の出土例がない。甕の蓋があったとするなら、伝統的には木蓋?を使用していたのかもしれない。I期に多い形態である。

**盤状土製品** 1521・1522は盤状土製品である。成形段階にはもう少し高さのあった円柱を仕上げの段階で上下から圧縮するように製作されている。そのため、凹面が全周して滑車状をなす。

**脚状土製品** 1523は脚状土製品である。上下反転させれば鉢になる。これだけ高くなる例はIII期に下がるのではないだろうか。

**不明土製品** 1524は器壁が非常に厚い鉢形土器で、一見未使用のるつぼのようでもある。



第207図 土製品(1:4)

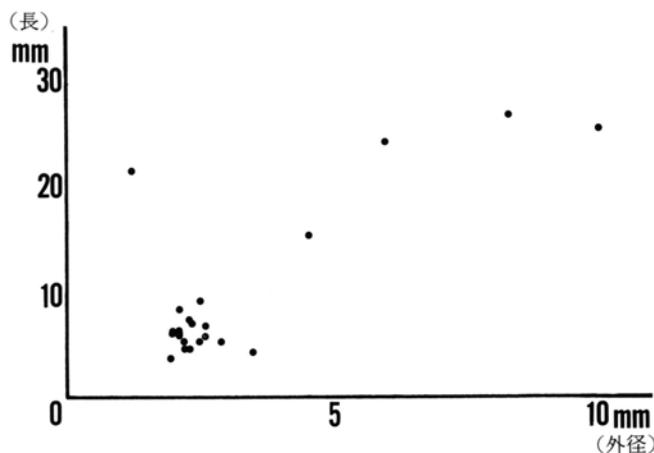
## 石器

(図版81・82)

## 装身具

管玉は21点出土した。住居跡出土のものもあるが、時期区分に対応させて説明しなかったのここで述べる。

第 表のように長・外径で分布をみると、長さ10mm以下、径2.5mm付近に集中する部分がある。いわゆる細形管玉であるが、左上に飛び出た1点はさらに細くて長いという精巧品である。右上に伸びたグループは、大形品である。



第2表 管玉の法量分布

## 石鏃

サヌカイト製と思われるものがいくつかある。129～132がそうである。131は気泡を残した素材をそのまま利用している。側縁には細かい剝離が連続している。129・130は上下非対象で柳葉形とは異なる。129は基部の作りが雑である。130は側縁が湾曲せず直線的で菱形をなす。断面は下半部の方が厚い凸レンズ状をなすので基部と考えた。132は無茎の三角形鏃である。側縁が直線的であることは、当地方産と考えられるガラス質石英安山岩製の三角形鏃（136・137）とは異なる。

143はサヌカイトだが、形態は五角形c類である。長さは5.7cmと長い。大きな剝片を得ることのできないガラス質石英安山岩では製作不可能な長さである。ガラス質石英安山岩の原石は写真図版25のj～mのような河原の転石を使用しており、大きくても拳大しかなく、しかも剝離が不安定では、こうした長い石鏃の製作は無理である。

## 伐採斧

149・150・152・153は刃部付近以外に研磨は施されておらず、成形時の剝離痕や敲打痕をそのまま残している。形態は150を除き頭部が小さくなっており、とくに152は断面円形で非弥生的である。単純に太形蛤刃石斧とは言えない。

## 加工斧

151は抉入柱状石斧であるけれども、抉部は刃部側の段が明瞭であるものの、頭部側に段はない。全面研磨である。

## 叩き石

石材は石斧と同じなので転用かとも思われるが、研磨痕は全く観察できない。

## 刃器 b

156は河原石の表皮を剝ぎ取った剝片に若干の整形を行っている。刃部には光沢が観察できる。掲載した他に4点ある。また、有肩扇状形を呈して身の厚い例も1点ある。いずれも表皮を残している。ただ、刃部は磨耗したものや敲打によるのか細かい剝離と潰れの観察できるものがある。

## 磨製尖頭器

155は先端部の破片である。包含層につき刺さって出土した。

## その他

157は磨製穂摘具と同じ石材であるが、未製品であるかどうかは不明。刃部があるようでもある。

---

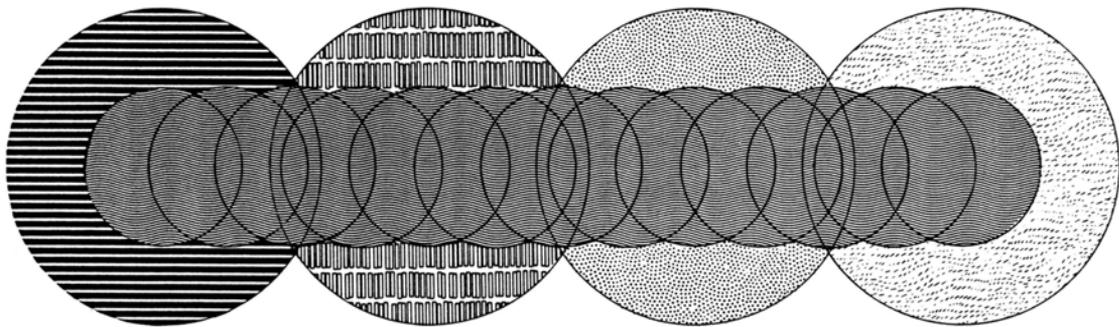
## 小結

---

**遺構** 弥生時代の遺構は、住居跡・土坑・溝などが検出できた。しかし、遺跡の遺存状況にも拘って、〈集落〉として良好な資料というのにはなお隔たりがあることは否めない。とくに残念なのは、I期の大形住居が、調査区の設定が関わっているとは言え、完全な状態で検出できなかったことである。大形住居の検出例は、当地方では極めて希であり、集落内部の住居配置状態を知る上で、またその性格を考慮する上で、完全な検出が絶対条件であった。その意味で、大きな反省材料として銘記しておきたい。

弥生集落の構造を考える場合、管理施設としての「倉庫」の有無およびその配置が重要となってくるのであるけれども、今回確実に時期の決定できる「掘立柱建物」の検出が不十分であった。確実に1軒のみの提示に止どまったが、『年報』で報告したものを含めて少なくとも4～5軒の存在は推定できた。しかし、時期が不確定であること、柱通りが悪いということで、今回報告するには至らなかった。もっとも、「倉庫」であるかの確定自体難しい問題ではあるが。

**遺物** 遺物は、人為物として土器・石器・木器があり、自然遺物として炭化米を始めとして植物種子がある。しかし、動物遺体は全く検出できていない。貝殻の破片らしきものは若干採取できたが貝層の形成はない。そうした遺物の絶体量が朝日遺跡・西志賀遺跡に比べて著しく少ないことに起因するのであろう。その意味では、本遺跡のみからそうした状況についての結論を引き出すことは慎重であるべきといえる。周辺遺跡との相互関係のなかで議論すべき事柄としておきたい。




---

## 補足

阿弥陀寺遺跡では、弥生時代から鎌倉・室町時代の間におさまる遺物が幾つか出土している。今回はとくに報告することはなかった——『年報』では報告している——が、「元屋敷式」の新しい段階から、次の段階にかけての土器片が採取されている。遺構との関係は不明確であるけれども、遺物がある以上当該期の人間活動があったことはいちおう考慮しておきたい。

---

### 3 鎌倉・室町時代

#### A. 遺 構

検出されたおもな遺構は、溝59条、井戸18基、掘立柱建物13棟、「大型土坑」3基、墓1基で、そのほかに土坑多数がある。遺構の重複は少ない。遺構の検出層位は微高地部分である南寄り3分の2ほどが現耕作土（畑）直下、北部の3分の1ほどが第二次世界大戦時の飛行場建設によって盛土された旧水田耕作土・床土直下である。これに対応するかのようになり、検出面の土質は、前者が灰褐色砂質シルトで、後者はシルト（所々に砂層が顔を出す）となっている。殊に飛行場建設に伴う盛土中に弥生時代および鎌倉・室町時代の遺物が数多く包含されていることからみて、調査区周辺の微高地が大きく削平されている公算が高い。調査区域の南半の遺構が概して少ないのはこのことと関連する可能性がある。

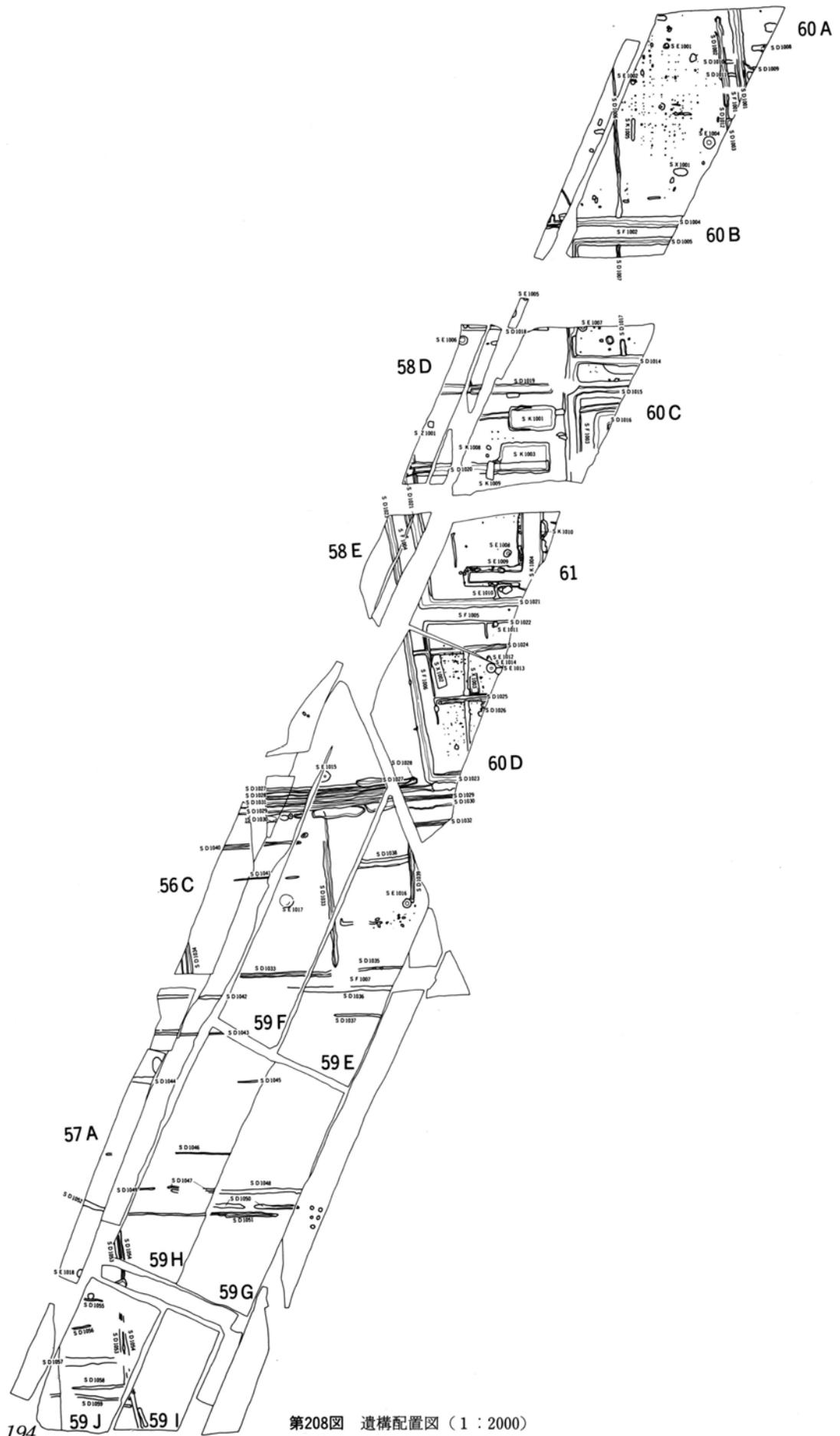
以下、まず主要な遺構について、溝、井戸、掘立柱建物、土坑の順でその調査所見を記し、ついで遺構の相互関係・年代について検討を加えることとする。なお遺構の規模に関する数値は全て検出規模である。

##### a. 溝（SD）

溝は遺構の主体をなすもので、その規模等は多様であるが、いずれも「素掘り」で走行方位は大多数が真東西ないし幾分西に振った南北を示すという強い規則性を有している。また、遺跡の立地する低湿地帯では、人々の生活に際して用・排水等々の「水」の問題が重要であったであろうことは容易に想像されるところである。もとよりすべての溝（厳密には溝状遺構）が用・排水のためのものと速断すべきではないが、参考までに一部について水流方向についても検討を加え示すこととした。水流方向の判定については、溝底の高低差が有力な手掛りとなる。しかし現実の発掘調査では溝底は往々にして凹凸がみられ、さらには湧水・地山の「汚れ」等々でその確定には困難が伴うことが多い。したがって溝底の高低差が顕著な場合はとてまかくとして、微差のときには水流方向の確度が著しく低下することになる。この点をあらかじめことわっておきたい。

S D 1001 調査区域の北端近く、60A・B区を北から南へ流れる南北（N-5.5°-W）溝。上端幅310  
（以下  
図版98） cm、深さ100cm、底面幅100cmで断面逆台形を呈すが西側斜面にはテラス状の段を有する。  
検出全長24m。S D 1009・1010・1011がとりつくが明確な切り合い関係は認められない。

S D 1002 調査区域の北端近く、60A・B区にある南北（N-5.5°-W）溝。S D 1001の西を2.8m  
の間隔で平行している。調査区内で完結し全長は24.8mをはかる。上端幅170cm、深さ35cm、



第208図 遺構配置図 (1 : 2000)

底面幅70cmで断面は逆台形を呈す。S D1010・1011・1012がとりつくが、おそらくはS D1002の水量が増加した場合、このS D1010～1012を通りS D1001・(1003)へオーバーフローしたものと推察される。

- S D1003 調査区域の北端近く(60B区)、S D1002の南延長上にある南北(N-5.5°-W)溝。検出長は3.0mにすぎず、水流方向は特定し難い。上端幅180cm、深さ60cm、底面幅100cmで断面は逆台形を呈す。北端にS D1012がとりつきS D1002へ続いている。
- S D1004 調査区域の北部の60B区から59M区におよぶ東西(W-0.5°-S)溝。上端幅300cm、深さ45cm、底面幅180cmで断面は逆台形を呈す。検出全長は38m。底面は平坦で水流方向は不明。北側の掘形にS D1006がとりつくほか、西端近くで一部土坑に切られる。
- S D1005 調査区域の北部の60B区にある。S D1004の南2.4mのところを東から28mほど平行したのち南へ直角に折れ3.8mで調査区外となる。東西部の走行方位は(W-1.0°-S)で、南北部は(N-0.5°-W)である。上端幅220cm～130cm、深さ60cm、底面幅40cmで、断面は開いたU字形を呈す。東西部に較べ南北部の上端幅は幅狭となる。南北部の南延長上には、若干ズレを有するもののS D1013(60C区)が存し、これに続く公算が高い。そのほか南側掘形にS D1007がとりつく。
- S D1006 調査区域の北部(59M・60B区)にあって、S D1004の北側掘形に直角にとりつく南北(N-4°-W)溝。S D1002・1003とは30mへだてて平行関係にある。上端幅50～100cm、深さ10～40cmで断面は逆台形を呈す。検出全長は40mで、水流方向は特定できない。
- S D1007 調査区域の北部(60B区)にある南北(N-4.0°-W)溝。S D1006の南延長上の位置で、S D1005の南側掘形に直角にとりつく。形状はS D1006に類似し、上端幅70～100cm、深さ20cmをはかる。検出全長は3.5mで、水流方向は特定出来ない。このS D1007の南延長上にS D1017(60C区)が位置しており、あるいは続いていたものかもしれない。
- S D1008 調査区域の北端近く(60A区)にあって、S D1001東側にある東西(W-2.0°-S)溝。上端幅150cm、深さ20cm、底面幅130cmで検出長4.0m。
- S D1009 調査区域の北端近く(60A区)にあって、S D1001の東側にとりつく東西(W-2.0°-S)溝。検出全長2.5mで、第二次世界大戦時の飛行場関連溝により一部壊されている。とりつき部は、北側掘形を突出させる形で幅狭となっている。上端幅200cm、深さ30cmほどと推察される。
- S D1010 調査区域の北部(60A区)にあって、S D1001とS D1002とをつなぐと考えられる東西(W-2.0°-S)溝。S D1001とのとりつき部は上記飛行場関連溝で壊されているが、位置関係からみてS D1001にとりつく蓋然性が高い。全長250cm、上端幅100cm、深さ20cmで断面は逆台形を呈す。
- S D1011 調査区域の北部(60A区)にあって、S D1011同様にS D1001とS D1002とをつなぐ東西(W-1.0°-S)溝。S D1010の南3.0mに位置する。全長250cm、上端幅80cm、深さ10cmで断面は逆半弧を呈す。
- S D1012 調査区域の北部(60B区)にあって、S D1002とS D1003とをつなぐ南北(N-3.0°-W)

溝。上端幅60cm、深さ20cmで断面U字形を呈す。全長は3.5m。

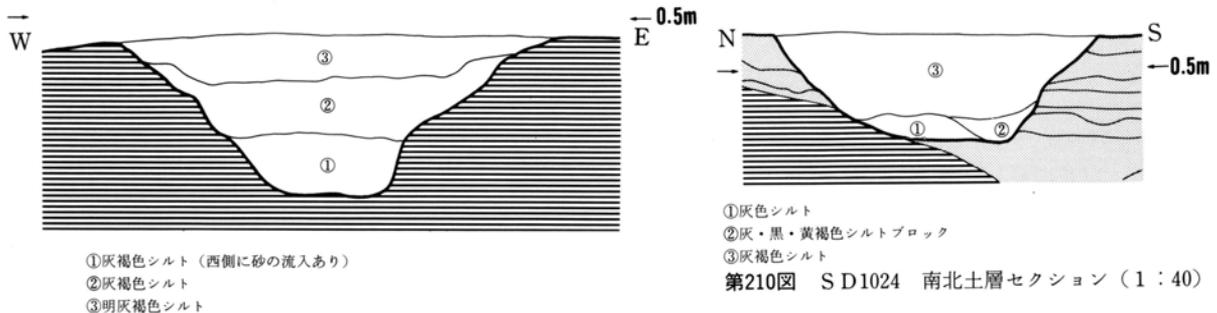
- S D 1013** (以下  
図版99) 調査区域北部(60C区)にある南北(N-3.5°-W)溝。上端幅は300cmほどであるが、北壁近く、S E 1007の西部分をのぞいて、東側掘形が緩く傾斜し、幅100cmほどとなる。深さ50cm、底面幅は50~150cmである。南半分はS D 1014の南北部と切り合い関係にあって、S D 1014の南北部東側を埋め立てて幅狭としS D 1013としている。検出全長は14.5mである。南端部がごく最近の攪乱によって壊されているが、おそらくはS D 1015にとりついていたものと推察される。
- S D 1014** 調査区域の北部(60C区)の北東部を東から西方へ(W-0.5°-S)17.5m直行したのち、ほぼ直角に南折(N-1.0°-W)し5.3mほどでS D 1015に交差する溝。S D 1015との関係は、攪乱により定かにし得ない。掘形東側が幾分開きあたかも同時存在の感があるが、埋土状況が幾分異なりS D 1015に先行する可能性がある。上端幅250~350cm、深さ30~50cm、底面幅150cmで断面は逆台形を呈す。曲折部が最も幅狭となっている。廃絶後埋め立てられ、南北部にはS D 1013が走る。
- S D 1015** 調査区域の北部(60C区)の東壁より西方へ14m直行(W-2.0°-S)したのち直角に南折し(N-4.0°-W)24mほどで調査区外となる溝。東西部はS D 1014の東西部と45mの間隔で平行する。上端幅450cm、深さ100cm、底面幅150cmで、掘形は深さ40cmほどのところで稜を有して垂直に近い急斜面となって底面にいたる。水流方向については、底面での湧水がはげしく不分明である。埋土は最下層部に薄い砂層が幾層か入るほかはシルトを基調とするものである。遺物の出土量は多く、殊に東西部で土器(小皿)が多量出土した。
- S D 1016** 調査区域の北部(60C区)の東南部にある溝。上記S D 1015とは4.0mほどの間隔でほぼ平行する。検出部は少ないが北・西掘形の総長14m。幅400cm、深さ30cm、底面幅230cmで断面は逆台形を呈す。水流方向は不明。
- S D 1017** 調査区域の北部(60C区)にあって、S D 1017の北掘形に直角にとりつく南北(N-4.0°-W)溝。上端幅130cm、深さ20cm、断面は逆半円弧を呈す。地山が砂層であり水流方向は不明。なお、このS D 1017の北延長上にS D 1007が存し両者の位置関係が注目される。
- S D 1018** 調査区域の北部(60C、59L、58D区)の北壁沿いにある東西(W-0.5°-S)溝。上端幅90cm、深さ25cmで断面は逆台形を呈す。検出総長は26m。58D区の北端近くで2条の溝(?)がとりつく。
- S D 1019** 調査区域の北部(60C区)のほぼ中央に東端部が位置し、59L・58Dにかけて検出された東西(W-2.5°-S)溝。上端幅270cm、深さ30cm、底面幅200cmで断面は逆台形を呈す。底面は平坦で水流方向は不明。検出総長は30mで、東端より9mのところの南掘形に長さ300cm、幅120cmのテラスがとりつくほか、20m地点が一部土坑により切られている。埋土はシルトを基調とするもので、両掘形近くには地山ブロックが多々みられる。なお北側の掘形ラインの東延長上がS D 1015の北側掘形となる。
- S D 1020** 調査区域の北部、60C区の南端中央に東端部が位置し、59L・58D区かけて検出された東西(W-2.5°-S)溝。上端幅2.8m、深さ0.6mで断面は逆台形を呈す。ただ、58D区の

所見<sup>6)</sup>では「新旧二本の溝が重複」し「上部溝の検出面」で幅130cm、深さ30cmのもう一本の溝が存すとす。検出全長は40m。東端部が大型土坑S K1003によって切られ、そのすぐ西がS K1008によって切られている。また検出部西端では「上部の溝はS D03-S D1021を切り、下部の溝はS D03-S D1021と同時期に存する」とす。

**S D1021** (以下図版100) 調査の中央やや北寄り、58D区から58E・59K区をとおり61調査区の中央で東に折れ調査区外へとつらなる溝。南北(N-8.0°-W)部の総長は一部調査区外をふくめ40.8m、東西(W-2.0°-S)部の総長24.4mをはかる。上端幅は南北部で430cm前後、東西部で240cm、深さはともに100cm前後をはかり、底面幅は南北部200cm、東西部100cmである。断面形は南北部では両掘形にテラス状の段が存する逆台形を呈し、東西部は逆台形を呈す。東西部の埋土の状況は一度掘り直し(単なる「溝掃除」の結果?)が行なわれたことを示している。

**S D1022** 調査区域の中央やや北寄り、60D区の南部から60C区北部にかけて検出された溝。上記S D1021の南4.0mのところを東西に24mにわたり平行したのち直角に(S D1021とは180°逆方向)折れ南北方向に20.8mつづいて終息する。東西(W-3.0°-S)部は上端幅100cm、深さ40cm、南北(N-8.5°-W)部は北から12mほどが上端幅130cm、深さ40cmをはかり以南は序々に幅狭となる。深さは12m地点で約20cmをはかるがすぐに段を有して浅くなりやがて消滅する。南北部はS D1023と平行し、南延長上にS D1025の南北部が存す。他の遺構との切り合い関係については、東西部では曲折部の東8.0m地点の南掘形に長さ2.2mの小溝がとりつくほか、9.6m地点でS E11を切っている。南北部では曲折部の南4.0mのところをS D1024と切り合う。ただし東掘形での観察では明らかにS D1024を切っているのに対し、西掘形では切り合い関係ではなくS D1024がとりつく状況を示していた。したがって当初S D1024が存し、後にこのS D1022が掘削された際に埋立てずに後述のS D1023とをつなぐためにそのままこの部分を残したと解しておきたい。なお東西部では中央あたりに多量の遺物の出土をみた。

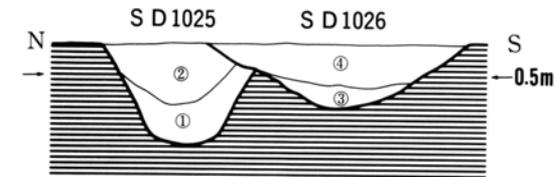
**S D1023** 調査区域の中央北寄りで、59Eから59K区をとおり60D区にかけて検出された溝。59E・59Kでは上記S D1021の西20mのところを南北(N-9.0°-W)に平行し、60D区では同じ上記S D1022およびS D1025の南北部と2.0mの間隔で平行しさらに南進したのち東方へ折れ、4.0mの東西(W-2.5°-S)部を有したのち調査区外となる。一部推定をふくめ南北部長36m、東西部長4.0mをはかる。上端幅220cm、深さ80cm、底面幅70cmで断面は逆台形を呈す。水流方向は北から南、西から東である。なお南北部のほぼ中央東側掘形にS D



1024がとりつくほか、東西部でS D1031により切られる。

**S D1024** 調査区域の中央やや北寄り、60C・61調査区にある東西(W-4.5°-S)溝。S D1022の南6.0mの東壁から西方へ延び上記S D1023へとりつく。検出長は26mをはかる。東から22mのところの上端幅160cm、深さ60cm、底面幅80cmをはかり断面は逆台形を呈す。S D1022により切られるが、切り合関係からみてそれ以西の部分は、S D1022とS D1023とつなぐ溝としてそのまま利用されたものと推察される。

**S D1025** 調査区域の中央やや北寄り、60D区北東部の東壁近くよりはじまり西方へ14m直行したのち直角に南折し6.5mで終息する溝。東西(W-4.0°-S)部は、上端幅60~100cm、深さ20~50mで、南北(N-6.0°-E)部



①灰褐色シルト ③灰褐色シルト  
②灰褐色シルト ④灰褐色シルト

第211図 S D1025・1026 南北土層セクション(1:40)

は上端幅50cm、深さ20cmをはかり、断面形はともに逆台形を呈す。東西部は方向を同じくするS D1026により切られ、南北部では径140cm前後、深さ50cmの土坑と重複するが埋土が酷似し切り合関係を明確にすることができない。あるいは同時存在か。

**S D1027  
~S D1031** 調査区域のほぼ中央を東西に走る溝群。切り合関係を整理すると下記の如くである。

S D1027→S D1028

S D1031

S D1029→S D1030

S D1027は60D区と59F区にまたがって検出された東西(W-8.0°-S)溝。検出長は16m。上端幅140cm、深さ40cmで断面は逆半円弧を呈する。

S D1028は60D区から59F・59A・56A区にかけて42mにわたり検出された東西(W-4.0°-S)溝。東端幅はS D1027とほぼ同じ位置にあたる。上端幅60~100cm、深さ40cmで断面は逆半円弧を呈する。

S D1029は60D区から56F・59A・56A・56C区にかけて検出された東西(W-4.5°-S)溝。検出全長は58m。上端幅は90~200cmと西方へ移るにつれて幅広となる。深さは30~60cmで断面は逆台形を呈す。

S D1030は、60D区から59E・59F・59A・56A・56C区におよぶ東西(W-4.0°-S)溝。検出面でのプランは、不整形の長円形が東西方向に並んだもので、本来は一つの溝の公算が高い。60D区での上端幅は30cm、深さ30cm、底面幅160cmをはかり、断面は逆台形を呈する。

S D1031は、60D区から56E・56F・59A・56C区におよぶ東西(W-3.5°-S)溝。層位置的にみてこの溝は、第二次世界大戦時の飛行場建設前より存し、今回の発掘調査の契機となった環状2号線(一般国道302号)建設の用地買収時まで機能していたことが知られるものである。溝の南側掘形には「道」が、北側には水田に伴なう畦が接する。幅300m、深さ100cmほどである。この報文では、飛行場建設前の水田跡に伴なう水路・溝については「攪乱」扱いとしているが、このS D1031については、当地の条里制地割<sup>7)</sup>を検討する際に

しばしば用いられる土地宝典に記され、「坪界」として取り上げられるという溝であるがゆえにあえて遺構として記載することとした。

**S D 1032** 調査区域のほぼ中央（60D区）の南端にある東西（W-5.5°-S）溝。上端幅100cm、深さ40cmで断面逆台形を呈す。検出長は10mで、この西延長の59E区北部ではつづきは認められない。ただ59E区の南北溝S D 1039の北延長上がS D 1032のほぼ西端にあたることからして、このS D 1032はほぼ直角に南折しS D 1039につづく公算が大である。溝の形態も類以する。

**S D 1033** 調査区域の中央やや南寄り、59E・F区で検出された溝。上記S D 1030のほぼ中央より  
(以下  
図版101) 44m南へ直行したのちほぼ直角に西折（厳密にはコーナー部に攪乱が存するのであるがその形状埋土からみて連続することは間違いない）し26mほど西進して調査区外となる。南北（N-6.0°-W）部は上端幅180cm、深さ60cm、底面幅40cmをはかり、東西（W-4°-S）部は上端幅120cm、深さ60cm、底面幅40cmをはかる。断面はともに逆台形を呈す。

**S D 1034** 調査区域の中央やや南寄り、56C区の南端近くにある南北（N-7°-W）溝。検出長8.0mで、上端幅150cm、深さ50cm。底面幅70cmをはかる。断面は逆台形を呈し、その形状はS D 1033に類似する。ただしS D 1033の西延長上の59B区において未検出である点からして連続することは考え難い。なお、このS D 1034の西側1.0mを隔てて平行する溝の掘形らしきものが存する。

**S D 1035** 調査区域の中央やや南寄り、59E区にある東西（W-3.0°-S）溝。S D 1033の東西部の攪乱をはさんだ東延長上にある。ただ上端幅60cm、深さ10cmとその規模が異なる。検出長は12m。

**S D 1036** 調査区域の中央やや南寄り、59E・F区にわたって検出された東西（W-3.0°-S）溝。上記S D 1035およびS D 1033と4.8m、32mの間隔で略平行する。上端幅120cmで、北側掘形にそった幅40cmが一段深くなり深さ50cmをはかる。検出長は28.8mで西行するにつれて浅くなり終息する。

**S D 1037** 調査区域の中央やや南寄り、59E区にあって上記S D 1036の南6.4mを平行する東西（W-2.0°-S）溝。幾分北側に張って緩い円弧を呈す。上端幅60cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。59E区の東壁より12.4mで西端となる。東端については調査区外となるが、東隣の57H区ではその延長は認められない。

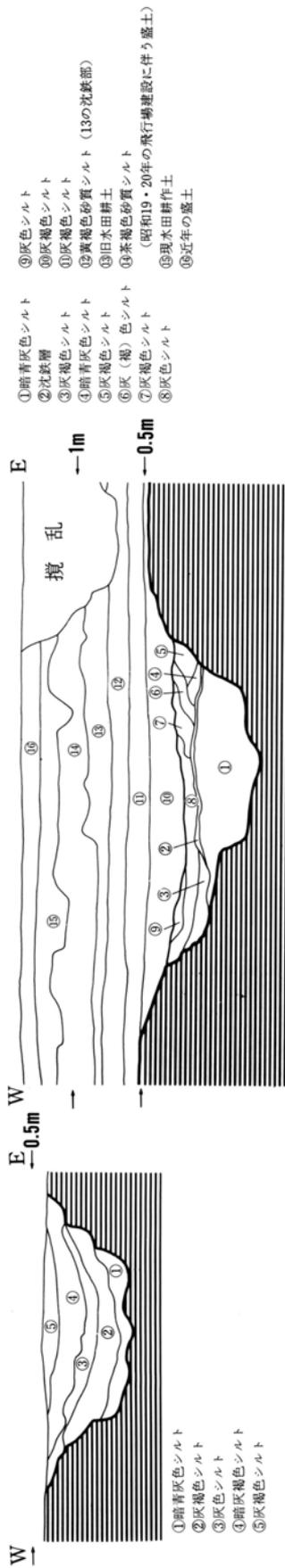
**S D 1038** 調査区域の中央南寄り、59E区にあってS D 1030の南13.2mを並走する東西（W-5.0°-S）溝。検出全長12.0mで東端はS D 1039によって切られ、西端は調査区外となるが、西隣の59F区では延長はみられない。上端幅240cmで北側掘形に



第212図 S D 1038・1039（北から）

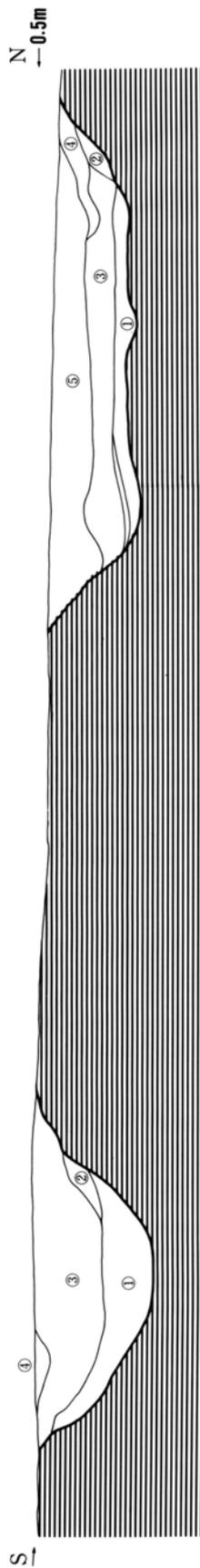
そった幅80cmが一段深くなり深さ20cmをはかる。S D1036と形状は類似するが一段と規模は大きい。

- S D1039 (以下 図版102) 調査区域の中央南寄り、59E区の北部にある南北(N-2.0°-W)溝。検出長は16mで、南端はS E1015の東隣で終息し、北端については調査区外となるが、さらに4.8m北進し直角に東折し60D区のS D1032につながる公算が高い。上端幅130cm、深さ50cmで断面は逆台形を呈す。
- S D1040 調査区域の中央南寄り、S D1030の南9mのところを59F・59A・56C区にかけて並走する東西(W-6.0°-S)溝。59F区西壁近くを東端とし検出全長22mである。上端幅80~140cm、深さ40cmで断面は逆台形を呈す。
- S D1041 調査区域の中央南寄り、上記S D1040の南8.4mのところを18mにわたり並走する東西(W-3.0°-S)溝。東端はS D1040とほぼ揃う。上端幅40cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。一部削平等により途切れる箇所がある。
- S D1042 調査区域の中央やや南寄り、56D区の北端から59B区北端にかけて検出された東西(W-2.0°-S)溝。上端幅90cm、深さ50cmで断面は逆台形を呈す。検出長18mで西端・東端とも調査区外となるが東端の東延長上にあたる59F区ではつづきは認められない。
- S D1043 調査区域の中央やや南寄り、上記S D1043の南9mほどのところを並走する東西(W-4.0°-S)溝。上端幅50cm、深さ20cmで断面逆台形の小規模な溝。検出長19.5mで両端とも調査区外となる。
- S D1044 (以下 図版103) 調査区域の中央やや南寄り、57A区の北端近くで検出された東西(W-2.0°-S)溝。上端幅120cm~300cm、深さ20cmで断面は逆台形を呈す。検出長6.0mで東・西端とも調査区外となる。
- S D1045 調査区域の中央やや南寄り、59H区の北東部で検出された東西(W-2.0°-S)溝。検出長5.5m、上端幅50cm、深さ10cmで断面逆台形の小規模な溝。
- S D1046 調査区域南部の北寄り、59H区の中央で15.5mにわたり検出された東西(W-2.0°-S)溝。上端幅30cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。西延長上の57A区で検出された長さ1.6mの東西溝は一連のもの公算が大である。
- S D1047 調査区域南部の北寄り59H区で検出された幾分蛇行する東西(W-1.0°-S)溝。上端幅40cm、深さ20cmで断面は浅いU字形を呈す。検出長は13.6mであるが途中6.4mほどが削平等で途切れる。西延長上に東西溝のS D1049が存す。あるいは一連のものかも知れない。
- S D1048 調査区域南部の北寄り、59H区にある上記S D1047に接し東隣の59G区へ延びる東西(W-1.0°-S)溝。上端幅120cm、深さ30cmで断面は逆台形を呈す。西部の一部が途切れるが検出長は36m。東端は調査区外となり、東隣の57H区ではつづきは認められない。
- S D1049 調査区域南部の北寄り、59H区にあって上記S D1047の西延長上にある東西(W-3.0°-S)溝。検出長は4.5m上端幅30cm、深さ10cmで断面は逆台形を呈す。
- S D1050 調査区域南部の北寄り、59G区および57H区にあって上記S D1048南3mのところを並走する一列に並んだ2つの東西(W-2.0°-S)溝。ともに上端幅120cm、深さ10cmで断面

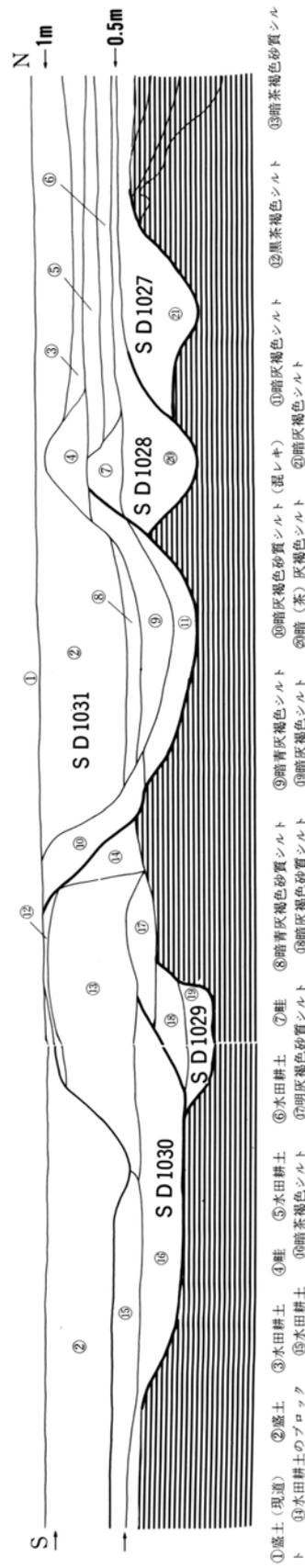


第213図 SD1002 東西土層セクション (1:40)

第214図 SD1001 東西土層セクション (1:40)



第215図 SD1004・1005 南北土層セクション (1:40)



第216図 SD1027~SD1031 南北土層セクション (1:40 60区西壁)

は逆台形を呈す。本来は一つのもので削平がすすんだ結果と考える。

- S D 1051 調査区域南部の北寄り、59G・H区で検出された東西(W-0°-S)溝。上記S D 1048の南4.8mのところを並走する。検出長さ42mをはかる。上端幅は50cm~120cmで東部が幅広である。深さ10~30cmで断面は逆台形を呈す。
- S D 1052 調査区域南部の北寄り、57A区の南部にある斜行(W-3.0°-S)溝。上端幅140cm、深さ20cmで断面は逆台形を呈す。検出長は6m。
- S D 1053・  
S D 1054 調査区域南部で検出された2条の南北(N-5.0°-W)溝。S D 1053は上端幅100~120cm、深さ20cmで、S D 1054は上端幅100~120cm、深さ10~40cmで断面はともに逆台形を呈す。接し合う両者の前後関係については定かにし得ない。削平が進んでいる関係もあって所々途切れる箇所があるが、検出長は、S D 1053が42m、S D 1054が54.5mである。ともに南北端は調査区外となる。
- S D 1055・  
S D 1056  
(以下  
図版104) 調査区域の南部、59J区北西部で検出された東西溝。S D 1055は検出長5.2m、上端幅50cm、深さ10cmの小規模な東西(W-1.0°-S)溝。S D 1056はS D 1055の南6.8mのところにある検出長5mほどの小規模な東西(W-3.0°-S)溝で、上端幅40cm、深さ20cmをはかる。ともに断面形は逆台形を呈す。
- S D 1057 調査区域の南部、59J区で検出された東西(W-2.0°-S)溝。上端幅240cm、深さ10cmで南側掘形が幾分不定形となる。断面は浅い逆半円弧を呈す。検出長は14m。
- S D 1058 調査区域の南部、59J区で検出された東西(W-2.0°-S)溝。検出長は14mで東端はS D 1053にとりつく。上端幅70cm、深さ30cmで断面は逆台形を呈す。
- S D 1059 調査区域の南部、59J区の南端近くで検出された幾分蛇行する東西(W-7.0°-S)溝。上端幅80cm、深さ10cmで断面逆台形を呈す。検出長は一部途切れるが22mをはかる。

### b. 井戸 (S E)

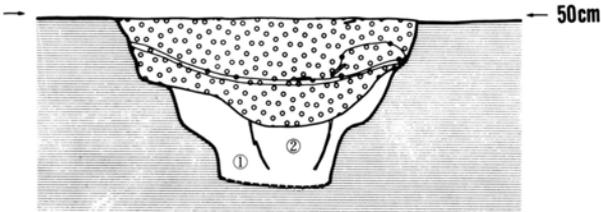
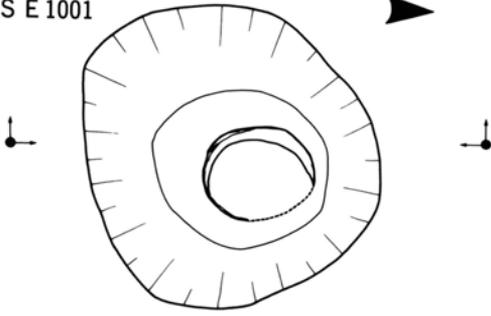
今回の調査では18基の井戸を検出した。埋土の状況からみていずれも廃棄の際に内部施設の「抜き取り」が行なわれている。加えて、例えばS E 1001のように掘形が抜き取りに際して拡幅されたと考えられるものもある。したがって、遺存する内部施設でもって単純にこれらの井戸を分類するわけにはいかないが、便宜的に遺存施設でこれらを分類すれば次の如く整理される。

内部施設 (遺存)	井戸番号
木枠	S E 1002
曲物	S E 1001 S E 1007 S E 1008 S E 1011 S E 1012
木枠+曲物	S E 1005 S E 1014 S E 1017
カメ+曲物	S E 1016
なし	S E 1003 S E 1004 S E 1006 S E 1009 S E 1010
	S E 1013 S E 1015

以下、各井戸の所見について記す。

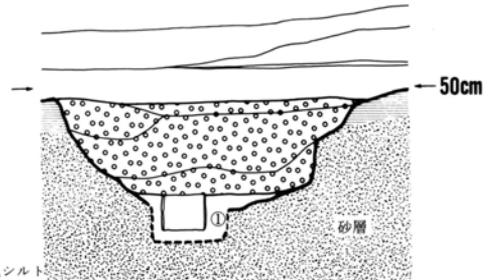
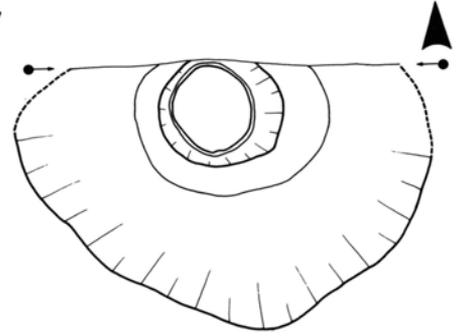
- S E 1001** 調査区域北部、60A区の西部にある井戸。S B1001の北西2mの位置にあたる。掘形は  
(以下  
図版98) 径160cmの円形で、深さは90cm。ただし掘形上半については廃棄の際の抜き取りに際して拡幅されているものと推察される。掘形のほぼ中央に曲物が2段(ともに径0.4m)遺存していた。曲物上端レベルあたりの地山に厚さ0.3mほどの砂層が存するが、底面が砂層というわけではない。遺物は抜き取り跡埋土よりの出土である。
- S E 1002** 調査区域北部、上記S E 1001の南西14mにある井戸。S B1004北東隅柱穴の内側の位置にあたる。掘形は、上端部が長径140cmの楕円形を呈すが、これは抜き取りの際の拡幅によるもので、本来は方形(南北95cm、東西80cm)と考えられる。深さは140cm。掘形の中央に木枠(一辺44cm、高54cm)が遺存していた。木枠は縦板組のもので、底面に角材を目違いの柄で組んだ方形の木組(以下、横棧)を設け、その外側に縦長の板材(長さ54cm、幅14cm、厚2cm前後)をたてならべ側板とし、側板の外側には下端を斜めに切り落した竹材(1部は半截)で囲繞し、側板の内傾・倒壊を上部のもう1つの横棧で支え、さらに四隅に角材の束木を配して上部の横棧の落下を支える、という構造となっている。遺物は抜き取り跡埋土から出土したが、そのうちの1点(灰釉系陶器碗品)は完形品である。
- S E 1003** 調査区北部(60B区)、S B1006の北にある井戸。掘形は径180cmの略円形で、深さは100cmをはかる。木枠等の内部施設は認められないが、底面が地山の砂層へ達していることから井戸跡とした。「素掘り」の井戸の可能性も否定できないが、発掘時の所見よりすれば砂層からの湧水がはげしくて壁の崩壊が生じやすく何らかの施設を必要としたであろうことは充分考えられるところである。こうしたことから廃棄時に徹底的な抜き取りが行なわれたと解しておきたい。遺物はいずれも破片であるが、埋土の中位より比較的まとまって出土した。
- S E 1004** 調査区域北部、上記S E 1003の南東15mにある井戸。掘形は径350cmの円形で、深さ140cmをはかる。木枠等の内部施設は認められなかったが、底面が地山の砂層へ達していることから井戸とした。おそらくは廃棄時に徹底的な抜き取りが行なわれたものと解しておきたい。ちなみに底面近くで曲物の「まわしの側板」とおぼしき残片の出土をみており、内部施設として曲物が用いられた公算がある。遺物は埋土の上・中位から比較的まとまって出土したほか、上層の北西部で10数個の人頭大～拳大の円礫の出土をみた。
- S E 1005** 調査区域北部の南寄り、59N区の北壁沿いにある井戸。掘形は、その一部が調査区域外にあたるため正確を期せないが、径190cmほどの円形で、深さ120cmをはかる。掘形は一旦摺鉢状に深さ60cmほど掘ったのち、その中央を曲物の径分だけさらに深さ60cmほど垂直に掘り抜いている。掘形の中央に曲物が2段(上:高30cm、径40cm、下:高28cm、径40cm、上・下とも「まわし側板」が2段づつ存すことから一見すると4段に見える)据えおかれている。その上部に角材の残欠が3本存することみて木枠が用いられていたものとみられる。なお最下段の曲物下約20cmほどはシルトで、曲物は直接底面に接していない。遺物は

S E 1001



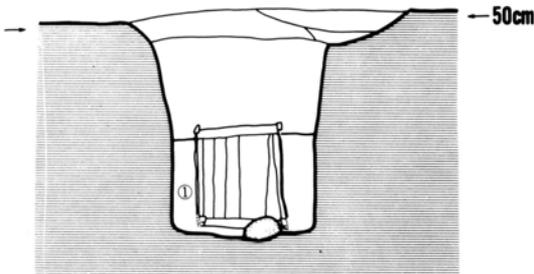
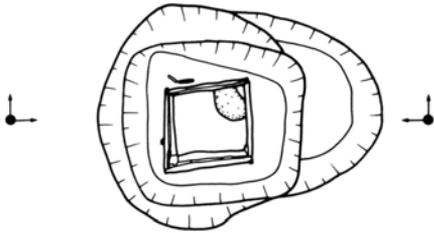
- ①暗(青)灰褐色シルト
- ②暗灰褐色シルト

S E 1007



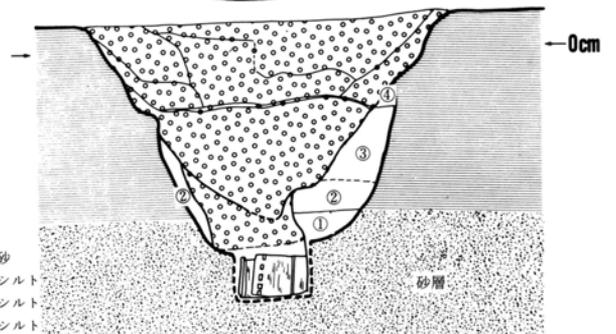
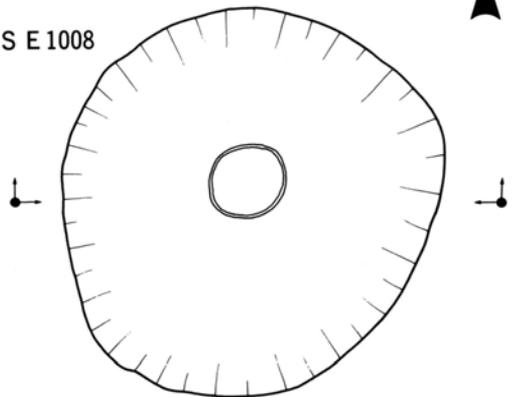
- ①暗青灰褐色シルト

S E 1002



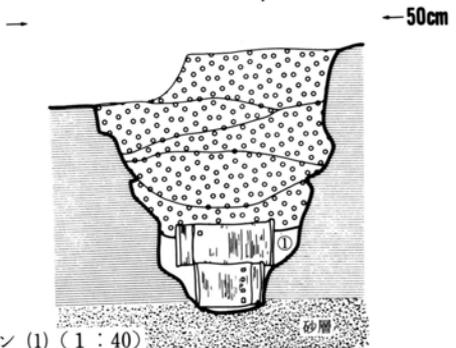
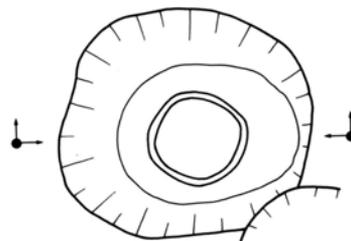
- ①暗青灰褐色シルト

S E 1008



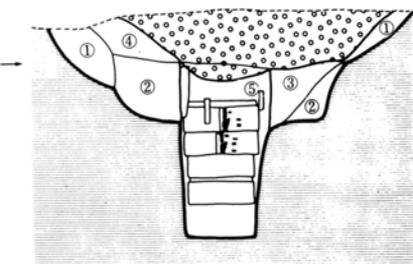
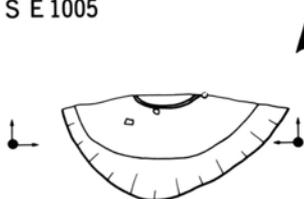
- ①暗青灰色砂
- ②暗茶褐色シルト
- ③明青灰色シルト
- ④明黄褐色シルト

S E 1011



- ①暗(青)灰褐色粘質土

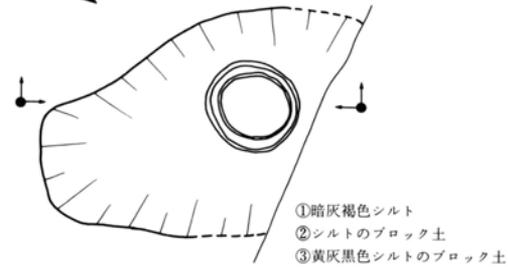
S E 1005



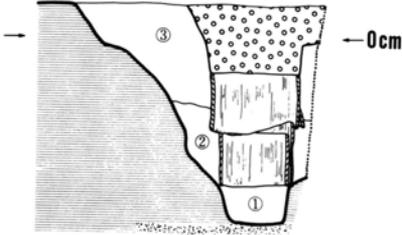
- ①灰褐色シルト
- (ブロック土含む)
- ②青灰色砂質シルト
- ③暗灰色シルト
- (ブロック土含む)
- ④灰褐色シルト
- (ブロック状)
- ⑤暗灰色シルト

第217図 井戸プラン・(土層) セクション (1) (1:40)

S E 1012

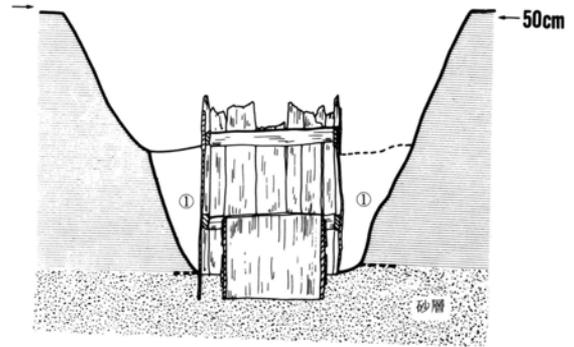
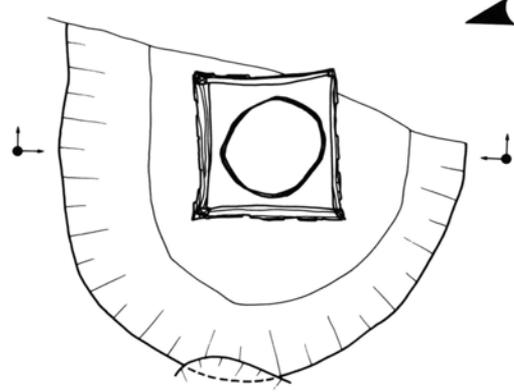


- ①暗灰褐色シルト
- ②シルトのブロック土
- ③黄灰黒色シルトのブロック土



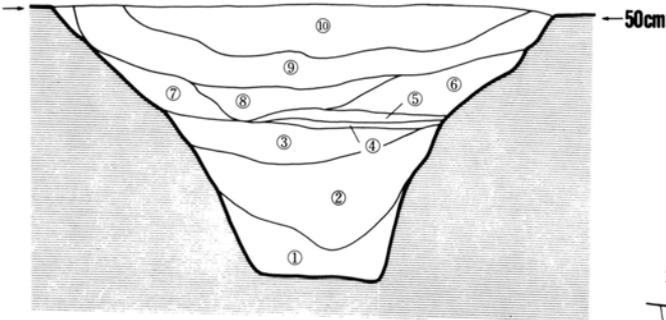
- ①暗灰褐色粘土
- ②明灰褐色シルト
- ③明灰褐色粘土
- ④黄灰褐色シルト
- ⑤沈鉄層
- ⑥灰褐色砂質シルト
- ⑦暗灰褐色砂質シルト
- ⑧灰褐色砂質シルト
- ⑨灰褐色(砂質)シルト
- ⑩明灰褐色砂質シルト

S E 1016

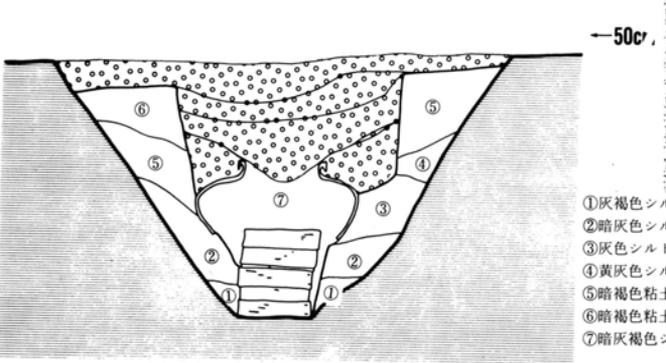
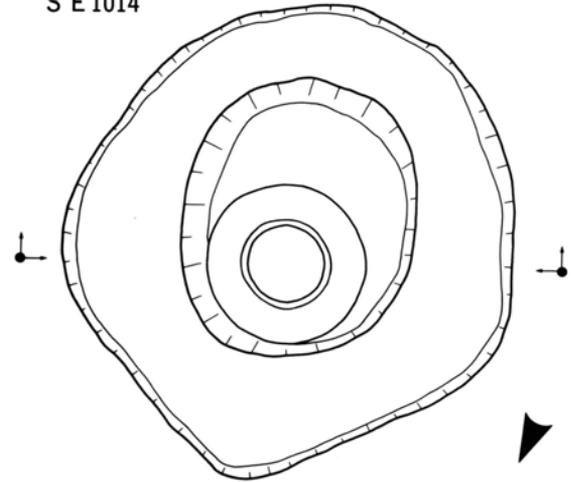


①地山のブロック土

S E 1013

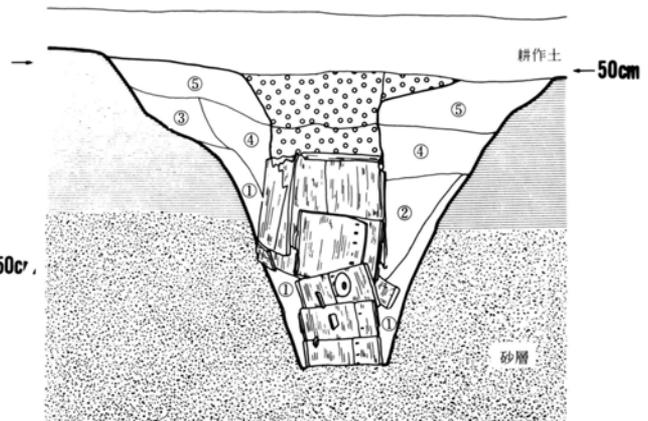
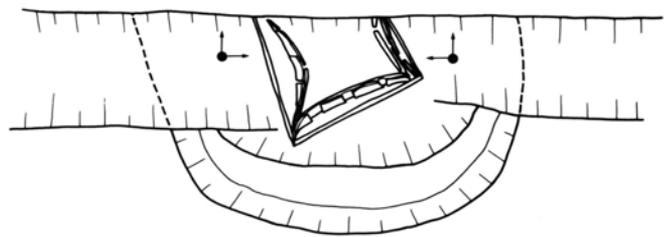


S E 1014



- ①灰褐色シルト
- ②暗灰色シルト+灰色シルト
- ③灰色シルト
- ④黄灰色シルト
- ⑤暗褐色粘土+黄灰色シルト
- ⑥暗褐色粘土+黄灰色シルトブロック
- ⑦暗灰褐色シルト

S E 1018



- ①明黒灰色シルト
- ②暗黒灰色シルト
- ③明茶褐色砂質シルト
- ④暗黒灰色シルト
- ⑤暗茶褐色砂質シルト

いずれも破片で、抜き取り跡埋土からの出土である。

- S E 1006** (以下 図版99) 調査区域北部の南寄り、59D区北部のS D1018の南2.0mにある井戸。掘形は径250cmの円形で、深さ130cm。掘形の中位に幅狭な段を有している。木枠等の施設は認められないが、その形状および底面が砂層に達していることから井戸とした。底面より竹編の籠(?)が出土した。
- S E 1007** 調査区域北部の南寄り、60C区の北壁沿いS D1013の東にある井戸。掘形は径210cmの円形で、深さは70cm。埋土の状況から見て掘形の上半は廃棄時に拡大されている公算が高い。掘形のほぼ中央に曲物(径40cm、高18cm)が1段遺存していた。遺物は、灰釉系陶器碗のごく細片が少量出土したにすぎない。
- S E 1008** 調査区域中央部のやや北寄り、61調査区域のほぼ中央にある井戸。掘形は径200cmの円形で、深さ150cm。掘形の中央に曲物(径35cm、高24cm)が1段遺存する。掘形は抜き取り時に拡幅されている公算が大である。遺物は少量が抜き取り跡埋土より出土したにとどまる。
- S E 1009** (以下 図版100) 上記S E1008の南4.0m、大型土坑S K1004の東西部の北側掘形に位置する井戸。切り合い関係からみてS K1004よりは新しい。掘形は径200cmの円形で、深さは140cm。内部施設は認められないが、底面が砂層に達していることから井戸とした。埋土中より出土した遺物のうち灰釉系陶器碗(2034)は完形品である。
- S E 1010** 上記S E1009の南4.0m、S K1004とS D1021の間にある井戸。掘形は径110cmの円形で、深さ100cm。底面が砂層に達することから井戸としたが、内部施設は認められない。
- S E 1011** 調査区域中央やや北寄り、61調査区域の南東部にある井戸。上記S E1010の南90mで、S D1022によって掘形の一部が壊されている。掘形は径130mの円形で、深さ140cm。掘形は抜き取り時に拡幅されている公算が大である。掘形の中央に曲物が2段遺存することが、下段の曲物は径34cm、上段が径50cmと径に大小がある。下段のものは「水溜」としての目的で据えられたのかも知れない。遺物は細片が抜き取り跡埋土から出土したにとどまる。
- S E 1012** 調査区域の中央北寄り、61調査区域の東南隅近くにある井戸。上記S D1011の南0.8mでS E1013、S E1014が近接する。掘形は、その一部が壁中に入り正確を期せないが、径1.3m前後の楕円形で、深さ120cm、掘形の中央に曲物が2段遺存する。S E1011同様に下段が径35cm、上段が径50cmと径が異なる。下段の曲物下20cmほど暗灰褐色シルトの推積を見たのち砂層へ達する。曲物の上方にはほぼ同径の抜き取り跡がみられ、これの点からみて上方にはさらに数段の曲物が存した可能性がある。遺物はいずれも細片で、抜き取り跡埋土よりの出土である。
- S E 1013** 上記S E1012の南隣り60D区の東北隅にある井戸。S E1014の一部をこわしている。掘形は径260cmの円形で、深さ150cmをはかる。埋土の推積状況に「井筒」部を認めることはできないが、底面が砂層に達していることから井戸とした。「素掘り」井戸の可能性も否定できないが、発掘時における湧水のはげしさからみて何らかの施設を有したものと推察される。とすれば廃棄時の抜き取りは徹底したものであり、掘形の形状は改変されている可能性が大である。遺物は埋土①～③を「下層」、埋土④～⑩を「上層」として取り上げた。

- S E 1014** 調査区域の中央北寄り、上記S E 1013の東隣にある井戸。掘形の一部がS E 1013により壊されている。掘形の一部が調査区域外となるが長径（推定）3.2m、短径220cmの楕円形で、深さ160cm。掘形の中央に木枠を一段設け、その底内面に曲物（径50cm、高45cm）を据えている。木枠は縦板組で、下端より40cm、86cmの二段に角材を目違いの柄で方形に組んだ横棧を配し、四隅に角材を束木（長さ40cm）として配し上段を支える木組の外側に縦長の板材（長さ100cm、幅10～18cm、厚さ2cm前後）を側板としてたてならべたものである。上段の横棧の四隅に束木の残欠とおぼしき角材が遺存することからみて、木枠はさらに上方へ続いていた公算が大である。曲物は下段の横棧にその上端レベルが一致するように置かれている。曲物と側板間にシルトが充填されていたこと及び木枠側板の下端が不揃いであることからして、下段の横棧が木枠底面として意図されていた可能性がある。遺物は木枠内から曲物内にかけて、完形品および一部欠損品の灰釉系陶器碗・皿が4組出土した。
- S E 1015** 調査区域の中央、59F区の北部、S D 1028の北2.0mにある井戸。掘形は、その一部が調査区域外（壁中）となるが、およそ径260cmの円形で、深さ130cm。内部施設は認められないが、その形状から井戸とした。
- S E 1016**  
(図版102) 調査区域中央やや南寄り、59E区の北東部にある井戸。東隣にS D 1039の南端部がある。掘形は径240cmの円形で、深さ135cm。摺鉢状の掘形の中央に曲物を2段（ともに径40cm、高さは下段が26cm上段が22cm）据えおき、その上に底部を欠いた常滑窯産の甕をのせている。この上にさらに甕が積まれるのか否かは抜き取りのため定かではない。遺物は抜き取り跡埋土中より出土した。
- S E 1017**  
(図版102) 調査区域中央やや南寄り、59F区の中央にある井戸。後世の削平等により掘形は判然としないが、径280cmほどで深さ80cmと推定される。木枠の最下端に設けられた横棧（1辺84cm）と考えられる角材を組んだ方形組が遺存し、その内側やや東寄りに曲物が2つ「入子」状に据えられている。外側の曲物は径50cm、高40cmで、内側のものは径32cm、高19cmをはかる。
- S E 1018**  
(図版104) 調査区域南部、57A区の東端近くにある井戸。一部が調査区域外となるが掘形は径230cmの円形で、深さ160cm。掘形の中央に曲物を4段積み上げられ、さらに最上段を囲む位置に木枠が1段据えられている。曲物は下の3段はほぼ同大（径40cm、高22cm）で、最上段がひとまわり大型（径44cm、高32cm）である。木枠は1辺70cmの方形板組で、上・下端部に横棧が設けられている。下段の横棧には幾分大型の角（板）材を目違いの柄で組んだものが用いられている。その外側に幅70cm・高さ50cmの板材をたて、さらにその外側には幅10cmほどの板材を各辺4枚づつはりあわせている。抜き取り跡の形状からみて、ほぼ同大の木枠がさらに積み重ねられていた可能性が考えられる。遺物は曲物内から出土したが、灰釉陶器碗（2066）は完形品である。このほか曲物内からは打割られた河原石が数個出土した。

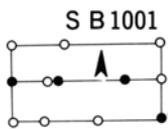
c. 掘立柱建物 (S B)

調査区域で検出された建物跡は全て掘立柱建物で、総計で13棟を数える。そのほかに建物の柱穴と断定するにいたらないものもその周辺で多々みられる。検出状況についてみると、掘立柱建物は概ね調査区北部の60A・B区と調査区域中央北寄りの61調査に集中し、それ以外では、60C区で1棟および59E区北部<sup>(8)</sup>で柱穴の可能性をもつ小土坑が集中して検出されたにとどまる。掘立柱建物の特徴としては、60A・B区および60C区検出のものはほとんどの柱穴で木製礎板が認められたのに対し、60D区以南のものはそれが認められないという点を指摘し得る。この相違の要因については定かではないが、木製礎板を有するものの地山がシルトで、有しないものの地山が砂質シルトであることからみて、地山土の相違が反映されているものと解すことも一考に値しようか。

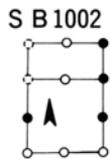
以下、掘立柱建物について、60A・B区、60C区、61・60D区、地区毎に記述をすることとする。なお参考として揚げた柱配置図の記号は○印が掘立柱掘形(柱穴)で、そのうちで木製礎板を認めたものを●印で示した。○印は推定である。

<60A・B区> (図版105)

調査区の北部、東・南・西側をそれぞれS D1002・S D1012・S D1003・S D1004・S D1006で囲まれた東西約30m、南北55mの長方形区画の内に総計で8棟の掘立柱建物が検出された。



**S B 1001** 調査区北部、60A区で検出された東西(N-0.7°-W)棟の掘立柱建物。柱通り・柱間が不揃いであり、なお検討する点もあるが柱筋を重視し、桁行総長803cm(間数は定め難い)、梁行2間(400cm 200cm等間)の建物と考えておきたい。柱掘形は不整形で、径20~40cm、深さ10~20cmと大きさに大小がある。4つの柱掘形内に木製の礎板が遺存する。殊に棟柱通りの東第2・3柱掘形の礎板は大形で内底面とほぼ同大である。



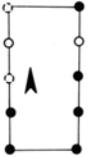
**S B 1002** 上記S B 1001の西側で検出された桁行4間(590cm 145cm等間)、梁行2間(396cm 198cm等間)の南北棟掘立柱建物。ただし西側柱列第3、4柱の掘形は未検出。棟方位は(N-0.2°-W)である。北1間分が仕切られ、また建物内南部、棟柱通り上の位置に南北に長い方形土坑(150×80cm 深さ20cm)がある。位置的にみて建物に関連する施設の可能性がある。柱掘形は不整形で径20~60cm前後、深さ30cm前後である。4つの柱掘形に木製の礎板が遺存し、東側柱列南第2・3柱の掘形の礎板は南北に細長く、北妻柱列東第1柱の掘形のもは東西に細長い。北妻柱列東第1・2柱の掘形はS B1003により壊されている。なお、北妻柱列は前記のS B1001の北側柱列の西延長上にあたり、西・東側柱北第2・3はS B1001の棟柱通り・南側柱列の西延長に位置しており、このS B1002とS B1001は計画的な配置がなされている公算が大である。

**S B 1003** 上記S B 1002に重複する位置にある推定南北棟掘立柱建物。桁行2間分(550cm 275cm等間)を検出し梁行は間数不明(350cm以上)で、棟方位はN-7.2°-Wである。東側柱列



第1・3の柱掘形は不整形で径30cm、深さ30cm前後、第2は一辺30cmの方形の掘形の内底面に径30cmの長円形の掘形を有している。この第2柱掘形と第1との間にも方形の土坑がある。上記S B1002の柱掘形をこわしているが、その形状は類似しており、このS B1003に関連するものかも知れない。また東側柱列第1・2間の西側、建物内南部に南北に長い方形土坑(100×60cm、深さ30cm)が存しその位置関係からしてS B1002にみられた方形土坑と同じ性格のものと判断される。なお東側柱列第1・2の柱掘形に木製の礎板が遺存する。

#### S B1004



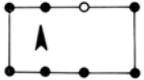
S B1002の南西で検出された桁行4間(748cm、187cm等間)、梁行1間(374cm)の南北棟掘立柱建物。東側柱列南第3および西側柱列南第3・4・5柱掘形は未検出である。棟方位はN-0.3°-Eで、S B1002とは若干方位を異にするがS B1002の西側柱列の南延上がこのS B1004の東側柱列にあたり、両者は記画的に配置された可能性がある。柱掘形は不整形で径50cm、深さ20cm前後である。柱掘形のすべてで木製の礎板が検出された。北妻柱列第1柱掘形のすぐ西側でS E1002が検出され、井戸枠の位置は建物内であることからこのS B1004に関連する可能性もある。なお西側柱列の西1.5mを南北にS D1006が並走する。

#### S B1005



S B1002の南、S B1004の東側で検出された桁行2間(488cm 244cm等間)、梁行1間(212cm)の東西棟掘立柱建物。棟方位はE-0.5°-Nである。柱掘形は不整形で径20~40cm、深さ20~30cmをはかる。総じて四隅の柱掘形が大形である。木製の礎板は認められない。

#### S B1006



S B1004の南東、S B1005の南側で検出された桁行3間(659cm 219cm等間)、梁行1間(342cm)の東西棟掘立柱建物。棟方位はE-2.4°-Nである。柱掘形は不整形で、径30~70cm、深さ20~40cmと規模に大小がある。北側柱列東第2の柱掘形を除くほかすべてで木製の礎盤が検出された。そのうち南側柱列第1では2段に重ねられていた。なおこのS B1006の西半の柱掘形周辺では柱通りにのらないが木製礎板を有する小土坑が4基ほど存すが、S B1006との関連は定かでないが、これらは建物の柱掘形の可能性が大である。

#### S B1007



上記S B1006の東側で検出された桁行1間(304cm)、梁行1間(192cm)の南北棟掘立柱建物。棟方位はN-1.1°-Wで、S B1006南北方位と若干異なるが、S B1006の北側列の東延長上がこのS B1007の北妻柱列と概ね一致し、両者の配置に計画性が看取される。柱掘形は不整形で径40cm、深さ20cm前後。北東隅を除いた4つの柱掘形で木製の礎板が認められる。

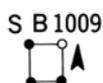
#### S B1008



S B1006の南で検出された桁行2間(390cm、195cm等間)、梁行1間(395cm)の南北棟掘立柱建物。棟の位置が南北に走る近代の溝で壊されている。柱掘形は不整形で、径20~50cm、深さ10~30cmと規模に大小がある。北西隅の柱掘形は殊に小規模である。木製の礎板はこの北側の柱掘形を除く4つで検出された。なかでも東側柱列第1・2のものは接合し径20cm、長さ25cmの丸太を縦長に割り、破面を上方にむけて礎板としたものであったことが知られた。

## 〈60C区〉

大型土坑（S K1001、S K1003）の西側中央で掘立柱建物が1棟検出された。

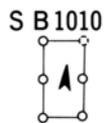


S B 1009 調査区北部中央寄りの60C区で検出された桁行1間（200cm）、梁行1間（170cm）の南北棟掘立柱建物。柱掘形は不整形で30～50cm、深さ20cm前後である。北東隅を除く柱掘形で木製の礎板が検出された。なおこのS B 1009との関連は定かではないが南妻柱列の東延長2.2m、幾分北にズレた位置で2.0m間隔の柱掘形様の小土坑（径40cm、深さ10cm）が存す。

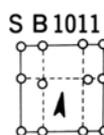
## 〈61・60D区〉（図版106）

調査区域の中央北寄り、61調査区の南端部から60D区北東部にかけて柱穴様の小土坑が集中して検出された。より仔細にみるとこれらは、北・西側をS D1022に、南側をS D1025で区切られた区画と、北・西側をS D1025に区切られた2つに分けられる。北側の区画内の小土坑を掘立柱建物の柱掘形とした場合、一直線に並ぶものが多く様々な組み合わせが考えられ調査担当者間でもなかなか見解の一致をみなかったものである。なお検討を要する点も多いが、ここでは一解釈としてS B 1010、1011、1012の3棟を想定してみた。

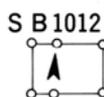
一方、南側の区画でもほぼ同様な小土坑が数多く検出されているが、北側に比べ直線的に並ぶものが少ない。掘立柱建物はS B 1013の1棟のみであるが、東壁近くのPit 86、85、87は掘立柱建物の北西隅で構成する可能性があり、あるいはPit 82・86で西妻部を構成す可能性もあるなど今後の発掘調査に期するものもある。



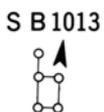
S B 1010 60D区の北端、S D1022の東3.0mのところ検出された桁行2間（430cm 略215cm等間）、梁行1間（210cm）の南北（N-5.5°-W）棟の掘立柱建物。柱掘形は径30cm前後、深さ20cm前後で、一部はS D1024の埋土を穿って設けられている。東・西側柱列の南延長上（3.5mと幾分長い）にある後記S B 1011の南側柱列東第2・3柱掘形はこのS B 1010のものとするべきであるとする見方もあり、同じく東側柱列第1・2の東延長上にある（若干のズレを有するが）Pit 9・Pit 97についてこのS B 1010のものと解する異論もあることを付記しておきたい。



S B 1011 上記S B 1010と一部重複する位置にある桁行3間（450cm、東から125cm、215cm、110cm）、梁行2間（470cm、南から280cm、190cm）の東西（W-4.5°-S）棟掘立柱建物。北側柱列・東第3の柱掘形が確認し得なかった。Pit 14・17の位置が幾分ズレるが、北1間分が仕切られていた可能性がある。柱掘形は径30cm前後、深さ10cm～20cmである。



S B 1012 上記S B 1011の東側で一部重複して検出された桁行2間（390cm、東から265cm、125cm、梁行1間（270cm）の東西（W-3.0°-S）棟掘立柱建物。柱掘形は径30cm前後、深さ10～20cmである。S B 1011東妻柱列の南第1・2柱掘形とこのS B 1012の西妻柱列南第1・2はほぼ重複し、S B 1011に壊されている。また両者の南側柱列はほぼ同一直線上にある。



S B 1013 S D1025の南北部の終息地点の南東部で検出された桁行2間（240cm、南から170cm、70cm）、梁行1間（110cm）の南北（N-7.5°-W）棟掘立柱建物。柱掘形は径20cm前後、深さ10cmほどで、東側柱列第3の柱掘形は確認されなかった。

#### d. 土坑（SK）

土坑として一括した遺構のうちには、その形態・規模等からある程度の類別が可能である。すなわち、一辺が6.5mを超える「大形土坑」、柱掘形（柱穴）類と考えられる小形の土坑、そしてそれ以外の中規模の土坑である。ここでは遺構番号としてはいずれも「SK」を付すものの便宜的に前者を「大形土坑」とし、後二者を「土坑」と呼んで区別することとする。

##### 〈大型土坑〉（図版99・100）

大型土坑は60C区および61調査区にみられ、総計で4基（SK1001～1004）を数える。平面形は長方形が3基で、L字形が1基である。断面はいずれも逆台形を呈す。その性格については詳にし得ないが、池（SG）の可能性を指摘する見解もある。

- SK1001 調査区域北部、60C区の中央で検出された東西13m、南北7mの長方形プランの土坑。深さは90cmをはかり、断面は逆台形を呈す。埋土はシルトを基調とし、外周から中央に流れ込む形の層状堆積を示す。南辺に接して幅60cm、高さ20cm前後の土塁状の高まりが東南角から8mにわたってみられる。西側の3分の1ほどがSK1002によって壊される。
- SK1002 上記1001の西部に一部重複して検出された東西700cm、南北580cmの長方形プランの土坑。深さは50cmをはかり、断面は逆台形を呈す。埋土は、外周から流れ込む形で地山ないしSK1001の埋土のブロック土が推積し、中央部には暗灰褐色シルトが推積する。
- SK1003 SK1001の南3.5mのところ検出された東西14m、南北8.5mの長方形プランの土坑。長軸方位は、SK1001・SK1002と同じで、両者は平行する位置関係にある。深さは50cm前後をはかり、断面は逆台形を呈す。埋土はシルトを基調とし、層状堆積を示す。SD1020を壊している。
- SK1004 調査区の北部南寄り、61調査区で検出された平面L字形の土坑。東西部はSD1021、南

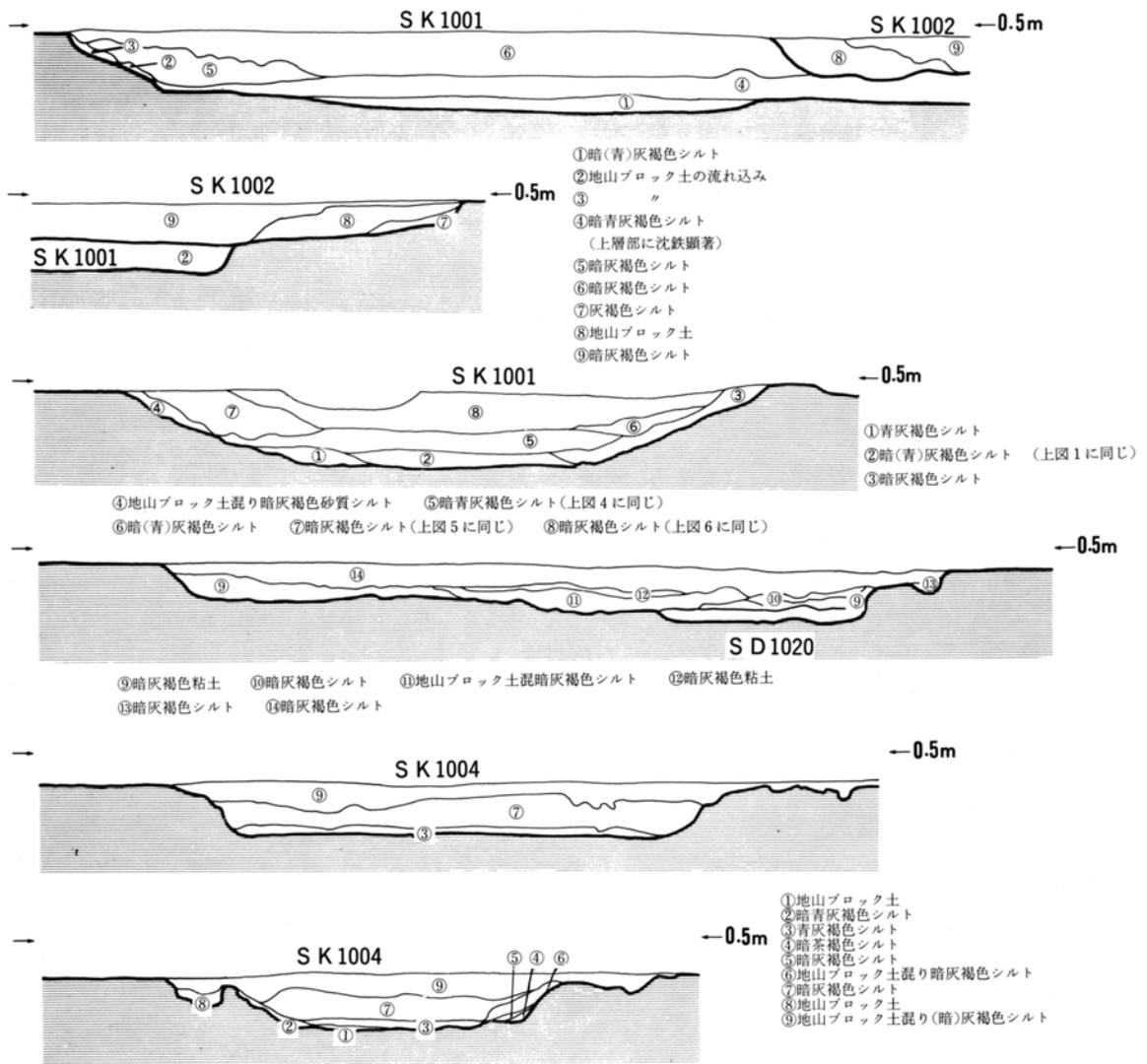


第219図 大型土坑 SK1001（西から）



大型土坑 SK1003（西から）

3 鎌倉・室町時代



第220図 大型土坑 土層セクション (1 : 80)



第221図 大型土坑 東西部 (東から)



大形土坑 南北部 (南から)

北部はS D1015と方位を同じくする。東西部は長さ22m、幅7m、深さ60cmを測り、南北部は検出長（北端は調査区外となり未検出東西部北側の交点まで）15m、幅8m、深さ60cmをはかる。外周部分には80cm幅のテラスがめぐるが、このテラスの上面は凹凸がはげしい。埋土は、シルトを基調とするが、上層ではブロック土の混入が目立つ。これより最終的には人為的な埋め立てが行なわれた可能性を示唆する。なお、当初、L字形のプランについて、方形土坑が2基切り合い関係にあるのではないかとの予測にたち検討を加えたが、切り合い関係を示す材料はなく、当初よりL字形プランに掘削されたものと考えられる。なお南辺にS D1021につなぐ溝状の凹みが見られるが、これは検出状況からみて、このS K1004が中ほどまで推積した時点で掘削されたものとみられる。

#### 〈土坑〉

柱掘形とみなし得るものについては、既に（c）掘立柱建物の項でふれたので遺物出した一部を取り上げるにとどめることとする。そのほかの土坑については、遺物の出土をみたおもなものについて記述することとする。

**S K 1005** (図版98) 調査区域北部、60B区で検出された長さ600cm、幅70cm、深さ20cmの南北に長い溝状の土坑。炭化物があたかも充填されたかのように埋土として推積している。既述のようにこの埋土はS X1001と酷似しかつ出土遺物が接合することから、両者はその形成過程について強い関連をもつものと推測される。

**S K 1006** (以下図版99) 調査区域の北部南寄り、60C区のS D1014の南掘形で検出された径100cm、深さ20cmほどの土坑。S D1014との切り合い関係については不明。埋土は灰褐色砂質シルト。

**S K 1007** 調査区域の北部南寄り、60C区のS D1004とS D1015の間で検出された一辺60cm深さ15cmほどの方形で柱掘形状の土坑。

**S K 1008** 同じ60C区の南西部、S K1003の西側で検出された径110cm、深さ20cmほどの土坑。埋土は灰褐色シルト。

**S K 1009** 上記のS K1008の南3.5mのところ検出された南北に長い長方形プランの土坑。長さ500cm、幅190cm、深さ40cmをはかり埋土は地山ブロック土を基調とする。S D1020を壊して掘削されている。

**S K 1010** 調査区域の中央北寄り、61調査区にあるS D1004の南北部東側テラス上にある長さ300cm、幅100cmほどの半円形状の土坑。深さ20cmほどで土坑というよりはS K1004のテラス上の凹みとすべきかも知れない。

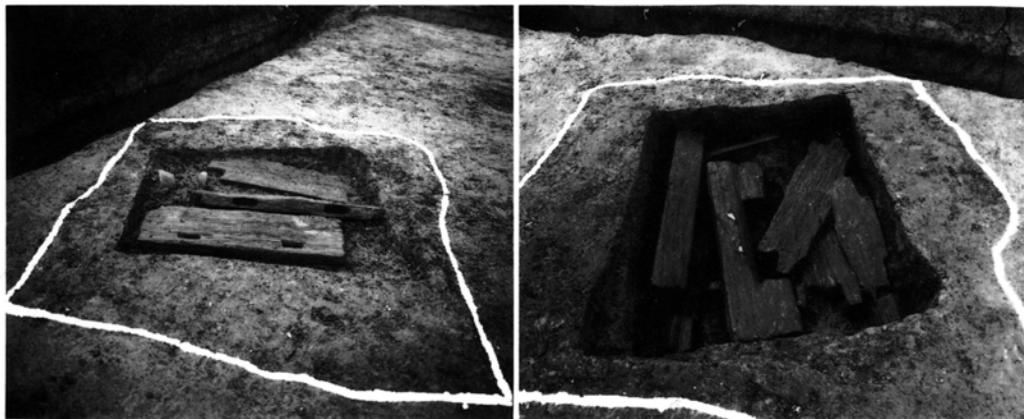
**S K 1011** 調査区域の中央北寄り、60D区で検出された一辺30cm、深さ30cmほどの略方形プランの土坑。S B1011内の北東隅近くに位置し、既述のように掘立柱建物の集中する地点であることからみて柱掘形の可能性がある。

**S K 1012** 調査区域の中央北寄り、61調査区にある径20cm、深さ10cmほどの土坑。S B1011南に位置し、南北側柱列の第2掘形を結んだライン上にあることからみて、このS B1011に関連する柱掘形の可能性もある。

## e. 墓 (S Z) (図版99)

墓と考えられるものは1基みられる。ただし下記のように若干の問題点もある。

S Z 1001 調査区域北部の58D区、S D 1019とS D 1020のほぼ中央で検出された。その構造について調査の経過を追って説明する。まず遺構の検出を行ったところ一辺が140~160cmの方形の土坑が認められ、その埋土の中央にさらに一辺80cmの方形の土坑の存在が確認された。埋土は内側のものが炭混りの暗灰褐色砂質シルトで、その外側は地山ブロック土からなっていた。そこでまず内側の土坑から発掘をはじめたところ、柄を有するものをふくむ各種の板材(長さ70~80cm・厚さ60cm)前後が東西方向に長く乱雑に積み重ねられた状況で出土し、それに混じって炭・火葬人骨(?)および蔵骨器と考えられる壺2個体(2166・2167)が破片で出土した。これらを取り上げたところ土坑の底面に2本の角材が東西方向に並列して存し、その両端がさらに外側へと続いていることが確認された。そこで外側の土坑の埋土(地山ブロック土)を掘り上げたところ、この角材は12×12×112cmのもので、外側の土坑の底面に長軸に直交するかたちで据え置かれていることが判明した。推測の域をでない点もあるが、こうした状況からみて、このS Z 1001の構造は一辺140~160cm、深さ40cmの方形の土坑を掘り、その底に2本の角材を据え、その上に木櫃を置いて蔵骨器を納めたのち、掘削土で埋めたもので、後世の開墾等の造成に際して発見され一度取り上げられた後に再度埋め戻された結果、上記のような出土状況となったのではないかと推定された。ただ板材による木櫃の復元は成功していない点およびほかに木櫃内に蔵骨器を(しかも2個体)納めた事例を欠く点で若干の問題を残した。もっともこのS Z 1001の東方のS D 1015の東西部で五輪塔の残欠が、S D 1016で四耳壺(2582)が骨粉を伴って出土しており、S Z 1001の周辺に墓域の存在が予想されるところである。



検出状況(南から)

板材の出土状況(東から)

第222図 S Z 1001

## f. 道 (SF)

既述のように今回の調査で検出された多数の溝のうちには、しばしば2条の溝が平行する位置関係にある箇所が認められる。このような2条の溝間の高まりは、その形状からみて「道」の可能性がある。ほかにこれを積極的に支持する材料は見い出せないが、ここではひとまず道として扱っておきたい。

**S F 1001**  
(図版98) 調査区域北部、60A・B区で検出されたS D1001とS D1002・1012・1003の間。幅250cm、検出総長26.0mをはかる。

**S F 1002**  
(図版98) 調査区域の北部、60B区南部で検出されたS D1004とS D1005の間。幅280～390cm、検出総長30.0mをはかる。

**S F 1003**  
(図版99) 調査区域北部の南寄り、60C区で検出されたS D1015とS D1016の間、幅320～400m、検出総長27.0mをはかる。

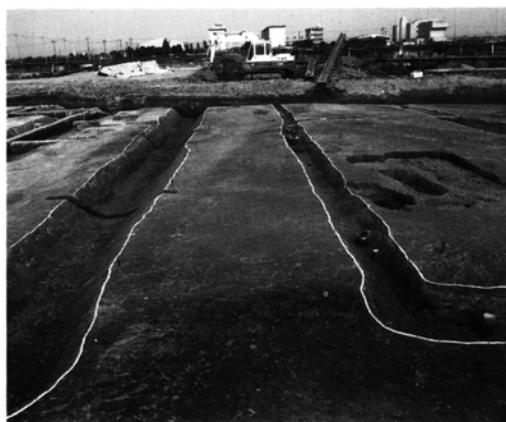
**S F 1004**  
(図版100) 調査区域の中央北寄り、58E・59K・61調査区にかけて検出されたS D1021とS D1023の間、幅400～480cm、検出総長28mで、S F1005、S F1006と交差する。

**S F 1005**  
(図版100) 調査区域の中央北寄り、61調査区で検出されたS D1021、とS D1022の間。幅400cm前後、検出総長28mをはかる。

**S F 1006**  
(図版100) 調査区域の中央北寄り、61調査区から60D区にかけて検出されたS D1023とS D1022・1025の南北部の間。上記S F1004の南延長上にあたるが、便宜的にS F1005との交差点以南をS F1006として把握することとした。幅400cm前後で、検出長は28mをはかるが、S D1025が終息した地点から以南ではS D1023に沿ったこの道幅分では小土坑など他の遺構が認められない。このことからS D1025の終息地点から14m南下したのち東折しさらに8.0mほどが道であった公算が高い。

**S F 1007**  
(図版102) 調査区の中央寄り、59E、F区で検出されたS D1035・1033とS D1036の間。幅が280～480cmで、巾の広狭が大きくこの点で若干の問題がある。検出総長32mをはかる。なおS D1042をS D1036の延長と考えた場合には、検出総長54mとなる。

**その他** 上記のほかにも可能性のある箇所として、まず調査区域中央のS D1027—1031の重複部があげられる。切り合い関係等をみると2条が同時存在していた公算があり、この意味で道が存したことが予想される。また調査区域の南部、59G、H区で検出されたS D1048～1051が並走する箇所も注意すべき箇所である。ただ、S D1048・1047・1049とS D1050の組み合わせを考えた場合には幅600cmをはかることとなり、あまりにも幅広のきらいが生じるなど若干の問題がある。



第223図 SF1005 (西より)

### g. その他

**S X 1001**  
(図版98) 調査区域北部、60B区で検出された炭化物の集積。東西400cm、南北200cmの範囲に炭化物の集積（最大厚10cm）をみるもので、炭化物層中より陶磁器類、鉄器片が多数出土。炭化物層下の地山に被熱の痕跡を見い出せないことから、これらの炭化物は他所から移動されたものとみられる。また炭化物層中から出土した陶器の多くが、このS X 1001の北西15m地点にある炭化物を埋土の基調とするS K 1005出土のものと接合したことからみて、両者炭化物の形成は期を一にした公算が高い。

**S X 1002**  
(図版100) 調査区域の中央北寄り、60D区で検出された溝状の遺構。検出長9.0m、幅2.5m、深さ10cm、きわめて浅い点特徴的である。埋土は灰褐色シルトを基調とするものでS D 1024、S B 1011により壊されている。その形状、埋土は下記よ S X 1003と酷似している。

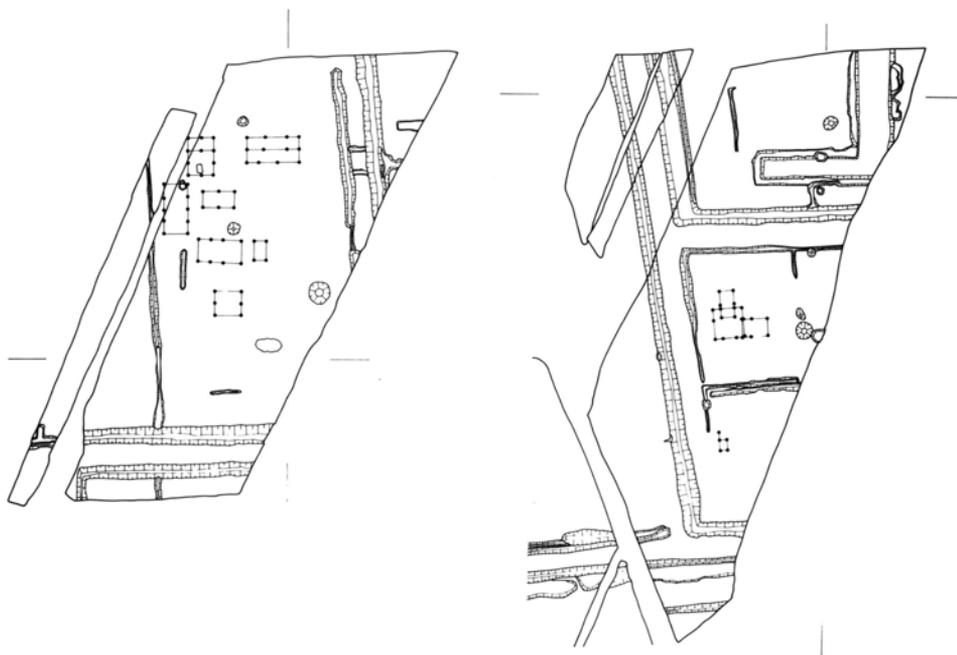
**S X 1003**  
(図版100) 上記S X 1002の東7mのところ検出された溝状の遺構、検出長5.5m、幅2.5m、深さ20cmで、きわめて浅い。長軸はほぼS X 1002と一致する。埋土は灰褐色シルトを基調とする。

### h. 屋敷地について

今回の調査では、溝で画された広場の内に井戸・掘立柱建物あるいは柱穴状の土坑が集中することから「屋敷地」と考えられる地区が4箇所見出された。

**屋敷地 1**  
(図版105) 調査区域の北部で検出されたもので、東・南・西側が溝により画された東西約30m、南北約55m(推定)の方格の屋敷地である。建物の配置についてみると、S B 1002の桁行の柱穴とS B 1001の梁間の柱穴が対応し、S B 1002の西桁行柱列とS B 1004の東桁行柱列とが同一直線上にあるという位置関係がみられ、少なくともこれらについては同時存在の可能性が考えられる。井戸は、大(S E 1001・1002)・小(S E 1003・1004)がみられ、出土遺物からS E 1001が古く、次いでS E 1002、S E 1003、S E 1004という順である。こうした点は、北側のS E 1001・S E 1002が廃絶時に井戸枠の下段を残すのに対し、南側S E 1003・S E 1004では一切を抜き取っていたという状況と対応をみせる。屋敷地を画する溝についてみると、西側のものが小規模であるのに対し、東・南側は堅固であり平行する2条の溝からなり、それぞれの高まりは「道」が想定される。北側を画する施設については未確認であり、さらに北へ屋敷地が延びる可能性はある。個々の遺構の細かな時期区分は困難で、溝からは14世紀～15世紀中葉にかけての時期の遺物が出土し、井戸はS E 1001が14世紀後半、S E 1002が15世紀初頭S E 1003・S E 1004が15世紀前葉～中葉で、S K 1005・S X 1001からは15世紀中葉の遺物の出土をみる。なおこの屋敷地としたものが1つの屋敷地なのか2つの屋敷地なのか判然としない。

**屋敷地 2・3**  
(図版106) 調査区域の中央北寄りで検出されたもので屋敷地の一角を捉えたにすぎない。屋敷地 2は北側および西側をS E 1022で、南側をS D 1025・S D 1026で画された南北40m、東西44m



第224図 屋敷地 1～3

以上の（推定）方格の屋敷地でその内に掘立柱建物が3棟以上、井戸3基がある。屋敷地3は北側および西側をS D1025で画された屋敷地で、南北20m（推定）東西14m以上をはかる。地山面の高位差からみて、西側部のS D1025はさらに南下し、南側に回っていた可能性がある。その内には柱穴様の土坑が多く検出されたが、建物と認定し得るものは少なく1棟をみるにすぎない。また井戸については未確認である。屋敷地2・3とも溝・井戸からの出土遺物は、14～15世紀前葉の年代を示す。なお屋敷3の西・南側（S D1023沿い）には「道」が想定される。

**その他** 調査区域の中央南寄りで検出されたS E1016の周辺には柱穴様の土坑が集中し、屋敷地の可能性がある。また同じ中央南寄りの東・南側をS D1033、西側をS D1034で画された方形の広場（東西35m、南北35m）もその内に井戸が一基みられ屋敷地の可能性がある。

### i. 遺構の年代

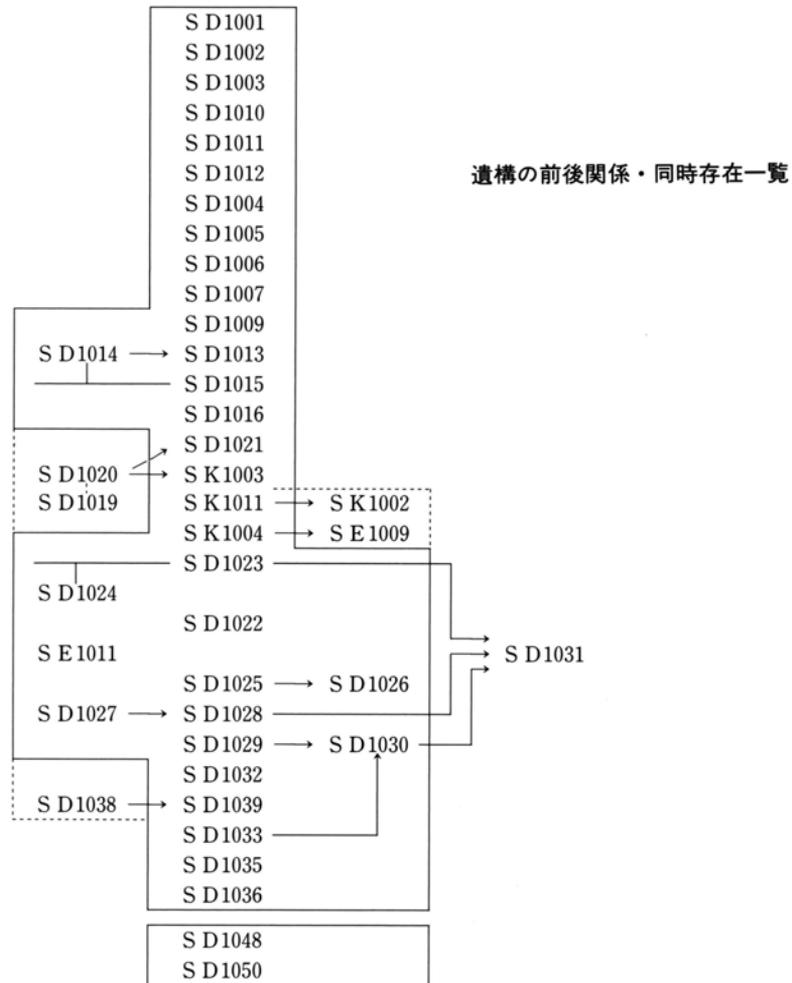
遺構の年代について、まず遺構相互の前後（切り合い）関係および遺構の配置状況から知られる同時存在について整理し、そのうち出土遺物の検討を通じて得られる「年代」観を提示したい。

**遺構の前後関係と同時存在** 遺構相互の切り合いにより前後関係から知られるものについて前後関係を→印（前→後）で示す。次に遺構相互の切り合い関係（前後関係）が認められる同時存在した（つながっていた）と考えられるもの（—でつなぐ）、および遺構の配置状況・位置関係からみて同時存在の公算の高いもの（……でつなぐ）についても、北から順に列挙することにする。後者の場合、柱通り、柱節の揃い、溝の平走関係・位置的にみて連続する公算が大等々

を根拠にするもので確実な前者に較べ格段におちる。

以上の前後関係および同時存在を組み合わせて整理したのが下表である。

遺構は部分的に切り合い関係が認められるものの、総じて同時存在と考えたとしてもおかしくない配置状況を示している。もとよりこれらすべてが同時に存在したわけではなく、先行する溝に平行する位置にあとから溝が開削された場合もあったであろうし、先行する溝にとりつける新たに溝が設けられた場合も考えられる。また廃絶の早遅が生じたことも十分に予想される。ただここで強調しておきたいのは、こうした配置状況は遺構が設けられてからのち廃絶にいたるまでの間にその配置が大きく改変される事態が生じなかったことを物語っているものと解される点である。想像の域を出ないが、そこには何らかの「計画性」あるいは「規制」（例えば地割の制定）がはたらいていたことが予想される。



上記のSD1014・SD1020・SD1019・SD1024・SD1027・SD1038は先行遺構の可能性もあるかにみられるが、これらが切り合い関係のないほかの遺構と同時存在の公算もある。

**出土遺物からみた遺構の年代** 出土遺物から年代決定を行なうに際しては次の二つの点について十分に慎重であるべきであろう。

第1点としては、しばしば指摘されるところであるが、遺構出土遺物でもって年代決定を行なうに際しては、その出土遺物の入りかたに様々な可能性が考えられるので出土遺物の示す年代をそのまま遺構の上・下限年代とすることには問題があるということである。殊に溝のような開放的な遺構の場合、個々の遺物に入った過程が十分に説明し得ないものが殆んどであり、その開削年代を求めることは難しく、また廃絶年代についても溝としての機能を失った段階を正確に特定することは難しい。

第2点としては、既往の編年研究に関することである。従来、県下では当該期（鎌倉・室町期）の土器・陶器類の編年研究は、陶器を中心として、窯業地別に行なわれ、それぞれ体系化がはかられてきたが、窯業地相互の細かな型式間の対応関係については、所謂消費地の発掘調査が少なかったためか、十分な検討が行なわれる機会が少なかった。こうした意味で、この阿弥陀寺遺跡の調査は14～15世紀代の資料を提供するものとして注目されたところであった。しかし一方ではほかに比較する事例が少ないという点で、本事例でもって短絡的に各窯編年を調整することには問題があることも確かなことである。しかし、かかる点の克服は容易ではない。そこでここではこうした点をふるまえつつも既往の編年観<sup>9)</sup>で示すこととし、敢えてこれら相互を調整して示すことは差し探えて、およそ妥当とするところを大雑把に示すにとどめた。なお灰釉系陶器碗B類（均質手）についてはB類（≒窯洞1）を13世紀末に、C<sub>2</sub>類（≒大洞東）を15世紀前葉とした<sup>10)</sup>。

**遺構の変遷** 結論的に言えば、年代決定に関して上述のような問題を有する遺構の個々の年代は不正確であり、かつ年代の示す幅の広さからみて遺構の変遷を細かく正確に捉えることは現状では困難である。ただ大雑把にみれば、出土遺物が14世紀代に限られるもの（A）、14～15世紀中葉におよぶもの（B）、15世紀前葉～中葉のもの（C）とに分けられ、このように変遷したものと推察される。なお、この間に大きな断絶は看取されない。

3 鎌倉・室町時代

遺構	土器		灰釉系陶器		施釉陶器(瀬戸)	年代
	土鍋	土釜	碗	壺・甕(常滑)		
SE1001			B <sub>3</sub>			14世紀
SE1002			C <sub>1</sub>			15世紀初
SE1003					後期前半	15世紀前半
SE1004			C <sub>2</sub>		後期前・後半	15世紀
SE1009			B <sub>4</sub> ・C <sub>2</sub> ・D		後半	14~15世紀
SE1012			B <sub>4</sub>			14世紀
SE1013			B <sub>3</sub> ・B <sub>5</sub>		前期	13, 14世紀
SE1016			B <sub>2</sub>	IV期前半		14世紀
SE1018		A <sub>3</sub>	B <sub>5</sub>	IV期前半		14世紀
SX1001			C <sub>2</sub>		後半後半	15世紀
SK1001			C <sub>1</sub>		前期~中期後半	13~15世紀初
SK1002			B <sub>3</sub>			14世紀
SK1003	A <sub>2</sub>		C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub>	V期前半	中期後半~後期	14~15世紀
SK1004			A <sub>1</sub> ・B <sub>5</sub>			14世紀
SZ1001				III期	前期	13~14世紀前半
SD1001			A <sub>1</sub> (B <sub>3</sub> ~) B <sub>5</sub> ・G		中期後半~後期	14~15世紀
SD1002	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub> ・A <sub>3</sub>	A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub> ・ B <sub>4</sub> ・B <sub>5</sub> ・C <sub>1</sub>		中期後半	14世紀
SD1003			B <sub>5</sub>		後期前半	14~15世紀
SD1004		A <sub>1</sub> ・B <sub>1</sub> ・B <sub>3</sub> ・ B <sub>4</sub> ・C <sub>2</sub>	II期・III期後 半	前期~後期	13~15世紀	
SD1005			B <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub> ・B <sub>4</sub> ・ B <sub>5</sub>	?	後期前半	14~15世紀
SD1006			C <sub>1</sub>			15世紀初
SD1013			A <sub>1</sub> ・B <sub>5</sub> ・C <sub>1</sub>		中期後半	14~15世紀初
SD1014		A <sub>2</sub>	B <sub>4</sub> ・C <sub>1</sub>		中期~後期	14~15世紀
SD1015東西		A <sub>1</sub>	A <sub>1</sub> ・B <sub>3</sub>		中期前半	14世紀
〃 南北			B <sub>5</sub> ・C <sub>1</sub>	IV期後半	前期前半~中期	13~15世紀
SD1016			(B <sub>5</sub> )	IV期後半	前期前半・後期	13世紀前半 14~15世紀
SD1017			B <sub>3</sub> ・B <sub>4</sub>			14世紀
SD1018			A <sub>1</sub> ・B <sub>5</sub>		前期	13~14世紀
SD1019			A <sub>1</sub> ・B <sub>3</sub> ・B <sub>5</sub>		中期後半	14世紀
SD1020			B <sub>4</sub> ・C <sub>1</sub>			14~15世紀初
SD1021		A <sub>2</sub> ・A <sub>3</sub> ・A <sub>4</sub>	A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub> ・ B <sub>4</sub> ・B <sub>5</sub> ・C <sub>1</sub> ・ C <sub>2</sub>	IV期前半・V 期前半	中期後半	14~15世紀
SD1022東西	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub> ・A <sub>3</sub>	A <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	B <sub>3</sub>	14世紀
〃 南西			B <sub>5</sub>		前期	13, 14世紀後半
SD1023(平行)			B <sub>4</sub> ・B <sub>5</sub>			14世紀
〃 (以南)	A <sub>3</sub>	A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ・B <sub>1</sub>	B <sub>3</sub> ・C <sub>1</sub>	IV期前半	中期後半~後期	14~15世紀
SD1024	A <sub>1</sub>		A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub>			14世紀
SD1025			A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub> ・ B <sub>4</sub>			14世紀
SD1033			A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub>			14世紀(前半)
SD1039		A <sub>1</sub>	A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub>			14世紀(前半)
SD1051			A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub>			14世紀
SD1052		A <sub>2</sub>	B <sub>4</sub>			14世紀

## B. 遺物

遺物は溝・井戸・土坑等から出土したが、その大半は溝からの出土である。遺物としては、土器・陶磁器類、木製品、漆製品、金属製品、石製品および動・植物遺体がみられる。量的には土器・陶磁器類、なかんづく陶器が圧倒的に多い。

以下、a. 土器・陶磁器、b. 木製品、c. 漆製品、d. 金属製品、e. 石製品の順で、遺構内出土のものを中心に報告する。動・植物遺体については後章でふれる。

### a. 土器・陶磁器類

記述の煩雑をさけるため、土器・陶磁器類の種類・器種について若干の分類と用語の整理をあらかじめ行っておきたい。

#### 種類

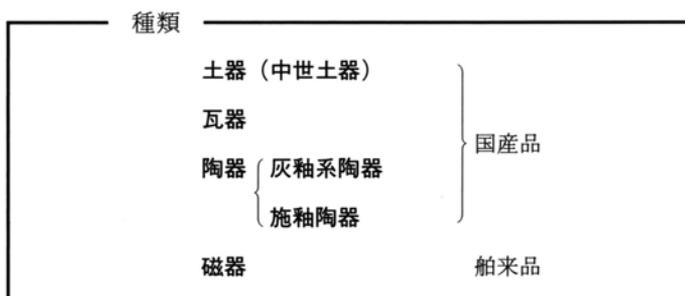
土器・陶磁器類としては、土器、瓦器、陶器、磁器の各種がみられる。

土器は、皿類および鍋・釜類に限られ、量的には少ない。鎌倉・室町時代の土器（土師器）については土師器、中世土師器、土師質土器等の様々な呼称が現在用いられている。いまここではこの問題に深く立ち入ることはさけ、既述の弥生土器との区別を考え、適切な用語とはいえないが、便宜的に「中世土器」の呼称を用いておきたい。

陶器はいずれも所謂瓷器系の陶器で、便宜的にこれを灰釉陶器（白瓷）の系譜上にあって原則として施釉しない灰釉系陶器と釉薬を施す施釉陶器に分ける。量的には灰釉系陶器が圧倒的に多い。産地についてはいずれも猿投窯、瀬戸・美濃窯・常滑窯産と考えられるもので、遠隔地にある窯からの搬入品については認めるにいたっていない。

瓦器は量的に少なく、器種も「火鉢」に限られ、椀類の出土をみない。

磁器はいずれも中国製磁器で、青磁・白磁・青白磁がみられる。器種としては水滴・瓶子もみられるが椀・皿類が多い。



#### 器種

中世土器の器種としては、鍋、釜、皿がある。殊に従来、鍋・釜類の器種については様々な名称が与えられてきたが、ここでは鐳の有無により鐳の無い土鍋と鐳を有する土釜に分けることとした。詳細は分類については第228図で示す分類に基づくことにする。

灰釉系陶器の器種の名称については、椀、皿、鉢、壺、甕等を用いることとし、いわゆる「山茶椀」、「山皿」を灰釉系陶器椀・灰釉系陶器皿と呼ぶことにする。さらにこの灰釉系陶器椀・皿については、所謂「均質手」と「荒肌手」のものがある。便宜的にここでは

施釉陶器



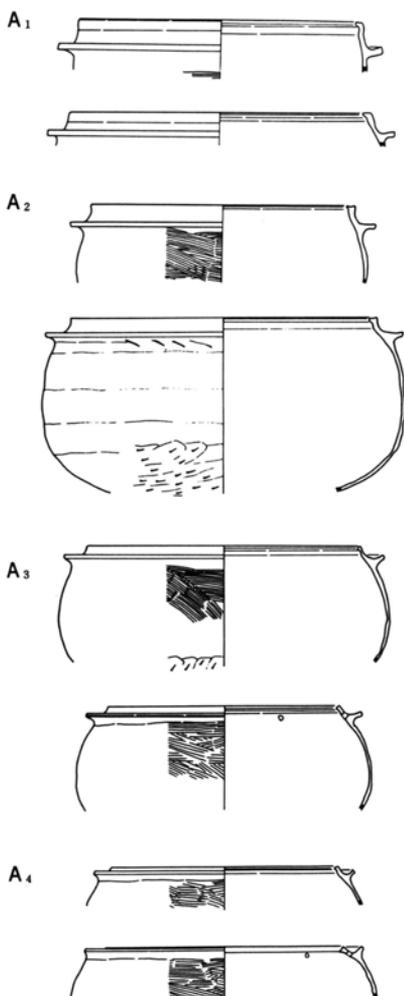
第225図 中世土器の分類 (1)

施釉陶器の分類

分類にあたっては、基本的に藤沢良祐氏の見解<sup>(9)</sup>に依拠し、形式の表記を例えば瓶子Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類を瓶子A・B・Cと改めて示すこととした。これは灰釉系陶器鉢A・Bなどと表記した上の統一をはかったためである。

藤沢良祐 1984「古瀬戸概説」『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』 岐阜県土岐市。

土 釜 A



土釜A

土釜Aは小片が多く全形を伺い知るものは少ない。  
口縁部の造作を中心に土釜A<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>に分ける。

土釜A<sub>1</sub>

水平方向に突出する鋳に、直立ないし内傾する口縁部のもので、鋳の長さに較べ口縁部の長さが大きい。体部は箱形に近いものが推測される。

土釜A<sub>2</sub>

水平方向に突出する鋳に、内傾したのち垂直方向に立ち上がる口縁部のもので、体部は幾分丸味を有する。体部上半はハケ目調整で下半はケズリ調整。ハケ目は弱く痕跡的なものもみられる。

土釜A<sub>3</sub>

鋳は幾分上方へ突出し、口縁部は内傾するものの長さは鋳に勝る。焼成前に口縁部と鋳との境に小孔を対面に穿つものもみられる。体部は扁球形を呈す。

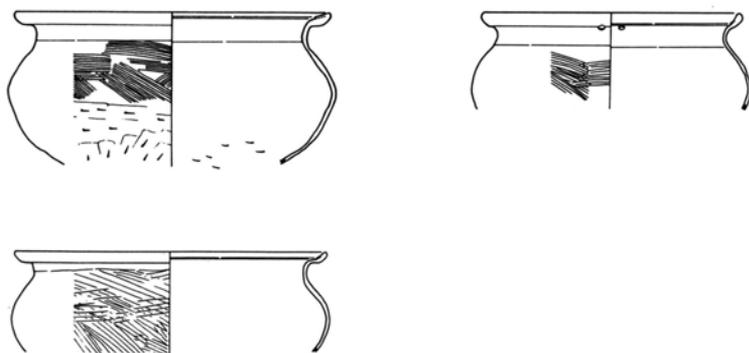
土釜A<sub>4</sub>

鋳は斜上方へ突出し、口縁部は大きく内傾し、外側からみた場合は口縁部が鋳にかくれるものも散見される。胎土が精緻で器壁は格段と薄くなり、外面のハケ目は粗く、土鍋A<sub>2</sub>と通じるものがある。ほとんどのものに小孔（焼成前）が対面に穿たれている。

土鍋A

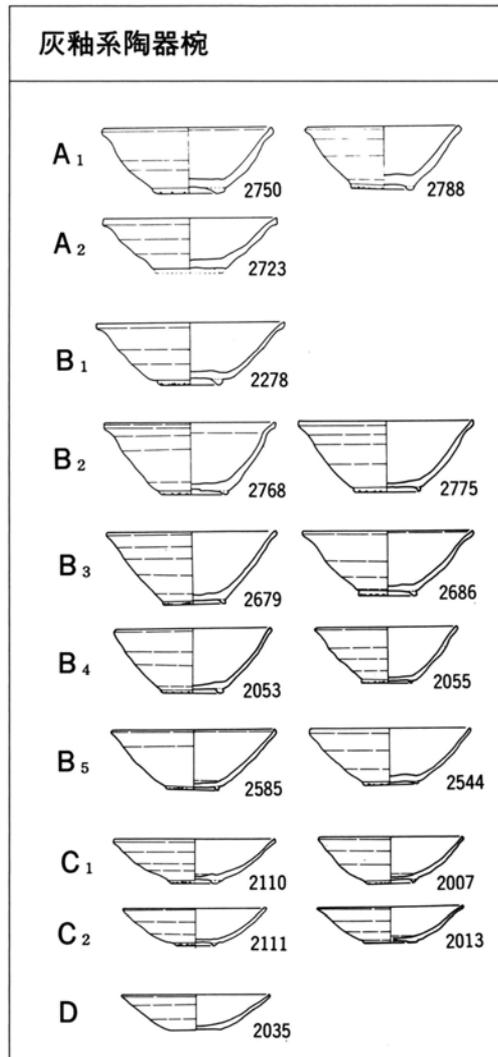
扁球形の胴に、直立する短い頸部を有したのち口

土 鍋 A



縁部が大きく外返し口縁端部が折り返されるものを土鍋Aとする。これは従来「伊勢型鍋」と呼称されたものである。

第226図 中世土器の分類(2)



第227図 中世土器の分類 (3)

しばしば用いられる「北部系」(均質手)、「南部系」(荒肌手)という用語でこれを区別することとしたい(第229図)。出土量の多い碗については便宜的に次のように分ける。まず南部系のもを碗A(土田報告 碗D)として、北部系のもを底部が体部に比べ幾分厚手か同厚で底内面の中心に所謂「殺し」が顕著な碗B(同前 碗E)、底部が小さく薄く底内面が基本的に不調整で体部との境に凹みか段を有する碗C(同前 碗F)および底内面の中心から口縁にかけて単一曲線をなし底外面が回転糸切りのままで無高台の碗Dとに分ける。これらはさらに口縁の造作・形態の差異・法量から第229図に示すように細分するが、相対的な要素が多くその帰層については多分に主観的な面がある点をあらかじめことわっておきたい。なおここでいう碗A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>は藤沢良祐氏の編年の第8ないし第9型式、北部系の碗B<sub>1</sub>は田口昭二氏の編年の窯洞1号窯式碗C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>は大洞東1号窯式に概ね対応する。

鉢についてはこれをABの二つに分ける「土田報告」の分類に依拠する<sup>(11)</sup>。

施釉陶器の器種名については、通例に従い「天目茶碗」、「四耳壺」等の名称を便宜的に用

いることとする（第227図）。また瓦器、中国製磁器についても通例に従っておきたい。

以下、遺構毎に報告する。

### 井戸（S E）（図版107）

S E 1001 いずれも井戸枠等の抜き取り跡よりの出土で、破片資料である。

**灰釉系陶器** 椀（2002～2004）および鉢A（2001）がある。椀はいわゆる南部系（荒肌手 2002～2003）と北部系（均質手 2004）がある。前者と後者との型式差は大きく、鉢Aとの比較からみて前者は混入品であろう。2004は椀B<sub>3</sub>。鉢A（2001）は直線的に外傾する体部の口縁端部が外方へ若干突出し上面が凹む。

**中世土器** 皿（2005・2006）がある。ともに底内面と口縁部内外面をヨコナデ、底部外面は不調整のものである。

S E 1002 いずれも井戸枠等の抜き取り跡より出土である。

**灰釉系陶器** いずれも北部系の椀。2007および2008は椀C<sub>1</sub>で2009は椀B<sub>4</sub>(?)の底部片である。完形品である2007の内面には漆様の付着物がみられる。

S E 1003 埋土の上一下層（2012）、下層（2010・2011）からの出土ですべて破片である。

**灰釉系陶器** 鉢A（2010）および甕（2011）がある。鉢A（2010）は、S E 1001出土例に較べ幾分屈曲する体部で、口縁端部の外方への突出が大きく、端面には沈線状の凹みがまわる。甕（2011）は底部片で、胎土・色調等からみて常滑窯とみられる。

**施釉陶器** 灰釉平椀（2012）がある。削り出しの輪高台のもので、接地面（畳付部分）に回転糸切り痕が残り、内面にはトチン跡がみられる。胎土・釉調からみて瀬戸・美濃窯産。

S E 1004 便宜的に埋土中位にある沈鉄層を境に埋土を上・下層に分けて遺物の取り上げを行った。上層は2013～2019、下層は、2020～2027である。灰釉系陶器、施釉陶器および中世土器がある。

**灰釉系陶器** 椀（2013）、皿（2020・2021）、鉢B（2023）、甕（2024）がある。椀（2013）は北部系の椀C<sub>2</sub>で、付高台は痕跡的である。皿（2020・2021）はともに北部系で、回転糸切りの底部から口縁にいたる途中に稜を有するもの（2020）と、短く外反するもの（2021）とがある。2023は鉢Bの底部片で、内面は使用による磨滅が著しい。2024は甕の底部片。2023・2024は胎土・色調からみて常滑窯産。

**施釉陶器** 灰釉平椀（2015）、天目茶椀（2019）、灰釉盤（2014・2018・2027）、灰釉四耳壺A（2017・2026）、鉄釉小壺（2025）等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。灰釉平椀（2015）は口縁部片。天目茶椀（2019）は削り出しの輪高台で、露胎部に化粧掛は認められない。灰釉盤は、口縁部が「折縁」の灰釉盤Aとストレートの灰釉盤Bとに分けられる。さらに

前者は、口縁端の折返し部が幾分凹むもの（2018）と凹みが深く、口縁部上面の中央が突帯状になるもの（当初から突帯を作り出している可能性あり）とがある。後者の2014は端部が丸く肥厚している。灰釉四耳壺A（2017・2026）はともに底部片。鉄釉小壺（2025）は回転ヘラ削り調整の底部外面を除く全面に施釉されている。以上のほかに器種を特定し得ない2016がある。回転糸切りの底外面を除きほぼ全面に灰釉が施されている。盤類であろうか。

**中世土器** 皿（2024）がある。口縁部の内外面をヨコナデ調整したもので、ヨコナデの範囲は体部の $\frac{1}{2}$ ほどである。

- S E 1005      ともに井戸枠内埋土からの出土で破片資料。  
**灰釉系陶器**      ともに碗の口縁部片で、北部系のものである。口縁端部の造作からみて碗B<sub>3</sub>～B<sub>5</sub>。
- S E 1006      井戸枠等の抜き取り跡(?)からの出土。  
**灰釉系陶器**      碗（2030）が1点。北部系の碗B<sub>5</sub>である。
- S E 1008      井戸枠等の抜き取り跡（下層）からの出土。  
**灰釉系陶器**      鉢A（2031）のほか図示し得ないが北部系の碗の細片がある。鉢A（2031）は、底内面から体部内面下半の磨滅が著しい。
- S E 1009      いずれも埋土の下層からの出土である。  
**灰釉系陶器**      北部系の碗(2032～2035)がある。2032は碗B<sub>4</sub>、2034は碗C<sub>2</sub>、2033は碗B<sub>3</sub>～B<sub>4</sub>の口縁部片である。碗D（2035）は底内面と体部との境には碗Cにみられるような段差等の屈曲はなく中心より単一曲線で口縁部へいたるもので、成形技法を異にしているものと推察される。  
**施釉陶器**      灰釉盤B（2036）がある。回転ヘラ削り調整の底外面には貼付足（三足?）の痕跡が認められる。瀬戸・美濃窯産。
- S E 1012      井戸枠等の抜き取り跡よりの出土で破片資料である。  
**灰釉系陶器**      2037・2038ともに北部系の碗。2037は碗B<sub>3</sub>ないしB<sub>4</sub>の口縁部片。2038は碗B<sub>4</sub>の小型品。
- S E 1013      便宜的に埋土中位の沈鉄層を境に上・下層に分けて遺物の取り上げを行う。2043・2046～2048・2051が上層出土品である。  
**灰釉系陶器**      碗（2039～2043）、皿（2044～2049）、陶丸（2051）がある。2045は完形品。碗・皿はいずれも北部系のものである。2039・2040は碗B<sub>3</sub>、2041は碗B<sub>5</sub>、2042・2043は碗

B<sub>1</sub>~B<sub>4</sub>の底部片である。皿はいずれも体部が外反するものであるが、2046、2047、2049のように途中で緩い稜を有するものがある。陶丸(2051)は手づくね。

**施釉陶器** 灰釉卸皿(2050)がある。上方にむく口縁端面の両端の突出はない。瀬戸・美濃窯産。

**S E 1014** 木組内(2054)および曲物内(2052・2053・2055~2059)埋土よりの出土である。

**灰釉系陶器** 椀(2052~2055)、皿(2056~2059)がある。ともに北部系のものである。椀はいずれもB<sub>4</sub>で大(2052~2054)小(2055)ある。皿は外反する体部で口縁が肥厚する2056~2058と、直線的な体部の2059とがある。なお椀は4個体とも完形であるのに対し皿はいずれも口縁一部が欠損している。皿の欠損部をみると2~3方からの打撃をうけており意図的に打ち欠かれた公算が大である。

**S E 1016** 井戸枠等の抜き取り跡からの出土で、いずれも破片資料である。なお図示し得ていないが井戸枠として用いられた甕についてもここで報告することにする。

**灰釉系陶器** 椀(2060・2061)、皿(2062~2064)、鉢A(2065)がある。椀・皿はいずれも北部系。椀(2060)はB<sub>2</sub>で、口縁部を欠く2061はB<sub>2</sub>~B<sub>3</sub>に比定されるものである。皿は概して深手で、体部は緩く外反し、口縁部を肥厚させるものである。鉢A(2065)は底部片で、底部が極端に薄い。図示し得ないが井戸枠として転用されていた甕(図版 )は口径48cm、遺存高40cm、胴部径84cmの大形品で、口縁部は断面「 $\neg$ 」状のもので幅4cmほどの縁帯をもっている。常滑窯産。

**S E 1018** いずれも井戸枠内よりの出土である。

**灰釉系陶器** 椀(2066)、皿(2067・2068)、甕(2070)がある。椀(2066)は体部が直線的に外傾するB<sub>5</sub>である。皿(2067・2068)は体部が緩く外反する。甕(2069)は口径48cmの大形品で、口縁部は基本的には断面「 $\neg$ 」状のもので下半が頸部に密着した状況である。常滑窯産。

#### 土坑(S K)・墓(S Z)(図版109~図版111)

**S K 1001** 所謂四分画法によって発掘し、北西・南西・北東・南東部に分けて遺物の取り上げを行なった。ただし西部でS K 1002と重複、壊されており、しかもS K 1002の範囲が幾不明瞭な箇所がみられたため北西・南西部上層出土品については、その帰属に問題がなしとはいえないきらいがある。このため出土地点について表示した。

**灰釉系陶器** 椀(2091・2094)および陶丸(2102・2103)がある。2094は幾分深めの椀C<sub>1</sub>で、2091は椀C<sub>1</sub>ないしC<sub>2</sub>の底部片とともに北部系。陶丸はともに手づくね成・整形品。

**施釉陶器** 鉄釉香炉(2092)、灰釉盤A(2093)、灰釉平椀(2096)、天目茶椀(2097)、灰釉盤(2093・2133)、灰釉卸皿(2095)、灰釉四耳壺A(2098)、鉄釉四耳壺B(2099)、

灰釉瓶子B(2100)等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。鉄釉香炉(2092)は回転糸切り底に足が付くもの。天目茶碗(2097)は削り出しの輪高台で、露胎部に化粧掛は認められない。2093は折縁の灰釉盤Aで端部が肥厚する。灰釉卸皿(2095)の底外面は回転糸切りである。灰釉四耳壺A(2098)は肩部に稜がめぐり、釉は薄くムラがある。灰釉瓶子B(2100)は、所謂締腰瓶子の底部片で、紋様は画花紋である。底外面は回転糸切り。2101は灰釉瓶子の胴部片で、紋様は印花紋である。

**中国製磁器** 青磁碗(2105)と白磁水滴(2104)がある。青磁碗(2105)は口縁部片で外面に蓮弁紋を刻している。薄青色の釉調からみて竜泉窯産とみられる。白磁水滴(2104)は3片からなるもので、そのうち1片がこのSK1001の出土で、他2片は後述SX1001からの出土である。原位置については詳にし得ないが、SK1001出土片に炭化物の付着をみることからすればSX1001から何らかの理由で移動したものとみるべきかも知れない。

北西部 2101(上)	北東部 2094 2096(下) 2105(上)
南西部 2092(上) 2103(上) 2093(上) 2133(上)	南東部 2104(上) 2097(上) 2100(上) 2101(上)  (上)は上層出土

**SK1002** 上記SK1001の西部に重複、壊して穿たれた土坑である。したがってSK1001の遺物が混入している公算は大である。

**灰釉系陶器** いずれも碗(2088~2090)で北部系のもの。2088は碗B<sub>3</sub>で、2089・2090はB<sub>2</sub>ないしB<sub>3</sub>の底部片。

**SK1003** SD1020を壊してつくられた土坑で、埋土は大きく上・下層の2層に分けられる。遺物は南北を2分し、東西方向を3分し、北西部・北中部・北東部・南西部・南中部・南東部の6分割で取り上げたが、格別の傾向が看取されないので一括して示す。いうまでもなくSD1020の遺物が混入している可能性は大である。

**灰釉系陶器** 碗(2106~2113)、皿(2114~2120)、甕(2131)および陶丸(2121~2123)がある。碗・皿はいずれも北部系のもの。碗はB<sub>4</sub>ないしB<sub>5</sub>の底部片(2106)のほかはC<sub>1</sub>(2107~2110・2112)およびC<sub>2</sub>(2111・2113)である。皿の形態は様々であるが、大きく深手のもの(2114~2116)と浅く扁平なもの(2117~2120)に分けられる。甕(2131)は常滑窯産のもので、口縁帯が幅広で頸部に密着するが下端部は外反する。陶丸(2121~2123)は手づくね形品。

**施釉陶器** 天目茶碗(2124・2125)、灰釉碗(2126)、灰釉平碗(2127)、灰釉香炉(2128・2134)、灰釉盤(2130・2132)、灰釉花瓶(2135)等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。

天目茶碗(2125)は削り出しの輪高台であるが高台脇がヨコナデ調整で凹んでいる。露胎部には茶褐色の付着物が全体に認められる。鉄化粧を意識したものか。2124の露胎部は

鉄化粧が認められる。灰釉碗とした2126は削り出し輪高台の底部は平碗そのものであるが、口縁部の屈曲は天目茶碗の形態を示すという特異な形態の碗である。2127は灰釉平碗の底部片で付高台。灰釉釉香炉は大(2134)・小(2128)があってもに足(三足?)が貼付つくもの。2134は筒形の香炉Bで、全面に灰釉が施される。2132は折縁の灰釉盤Aで、口縁端部が丸く肥厚する、2130は小型の盤の底部片と考えられるもの。灰釉花瓶A(2135)は、上胴部に4条の櫛描直線紋(左回り)が巡る。そのほか瓶類と底部とみられるもの(2129)がある。

**中世土器** 土鍋A(2136)と皿(2137~2139)がある。土鍋A(2136)は、薄手で均質・緻密の胎土のもので、折返し口縁は内弯し、胴部のハケ目は間隔が広く、荒く施される。皿は大(2137・2138)小(2139)あって、いずれも内面ナデ調整で口縁内外面をヨコナデ、底外面未調整のもの。

**瓦器** 火鉢(2140)がある。内弯ぎみに立ち上がる口縁部片で端部は尖る。外面に印花紋(菊花)が3個を1単位として施される。器壁は内外面とも黒色を呈すが、焼成不良のためか一部茶褐色を呈す。

**中国製磁器** 青磁碗(2576)がある。外面に蓮弁紋が刻まれている。薄青色を呈す釉からみて竜泉窯産とみられる。

**土錘** 素焼の土錘(2533)が1点みられる。長さ3.5cm、径1.5cmで、中心に径0.3cmほどの穴があく。

S K 1004 埋土は大きく2層に分れるが、遺物の取り上げに際してはこの分層が必ずしも充分でなかったため一括して示す。

**灰釉系陶器** 碗(2141~2147)、皿(2148・2149)および鉢A(2151・2152)がある。碗は南部系の(2141・2142)と北部系のもの(2143~2147)とがある。2141・2142は碗A<sub>1</sub>で、2143~2146は碗B<sub>5</sub>である。皿(2148・2149)はともに北部系で、薄く扁平なものである。鉢A(2151・2152)の内面は使用による磨滅が著しい。

**中世土器** 皿(2150)がある。扁平な底部に短く立ち上がる口縁部のつくもので、内面ナデ調整で口縁内外面ヨコナデ調整、底外面未調整のものである。

S K 1005・  
S X 1001 多量の炭化物を埋土とするS K 1005およびその集積であるS X 1001から出土した陶器片には、2080・2081・2079・2072のようにお互いが接合するものがふくまれていた。そこでここでは一括して両遺構出土のものを取り扱うこととした。

**灰釉系陶器** 碗(2071)および甕(2079)がある。碗(2071)は北部系で碗C<sub>1</sub>である。甕(2079)は常滑窯産で、口縁上端を丸くし、口縁帯は頸部に密着する。

**施釉陶器** 天目茶碗(2074)、灰釉平碗(2072)、灰釉盤A・B(2075・2076)、灰釉卸皿(2078)、鉄釉稜皿(2077)、灰釉四耳壺A(2080)、鉄釉四耳壺B(2081)等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。天目茶碗(2074)は削り出しの内反り高台で露胎部には鉄化粧が施されている。灰釉平碗(2072)は削り出し輪高台で、体部は直線的に開く。灰釉盤は折縁

のA(2075)と直線的に開くB(2076)とがある。2075の口縁端部の肥厚部は扁平である。2073は小型の灰釉盤の底部片であろう。灰釉卸皿(2078)は口径に較べ底径が幅狭なもの

**中国製磁器** 白磁水滴(2104)および図示し得ないが青磁蓮弁紋碗がある。2104の白磁水滴についてはさきにSK1001の項でふれたように2片が出土し、本来はこのSX1001に存した公算が高い。

**SK1006** SD1004の掘形に存する小土坑から一括して出土。

**中世土器** 皿が大(2084~2086)小(2087)4個みられる。いずれも底内面ナデ調整、口縁部内外面ヨコナデ、体部下半から底外面にかけては不調整のもの大形品は口縁部のヨコナデが体部の $\frac{1}{2}$ ほどで、小形品は底外面との境におよぶ。2084はヨコナデ部が屈折して外方に開く。

**SK1008  
~SK1018**

小土坑からの出土で、各土坑1ないし2個体の出土なので一括して表示する。

遺構	遺物番号	種類	器種	備考
SK1008	2082	施釉陶器	灰釉四耳壺A	口縁部片 瀬戸・美濃窯産
SK1007	2083	灰釉系陶器	皿	北部系
SK1010	2153	"	碗	北部系 碗B <sub>4</sub> (?)の底部片
SK1013	2154	"	皿	北部系
SK1011	2155	"	碗	南部系 碗A <sub>1</sub> の底部片
SK1014	2156	"	皿	北部系
SK1015	2157	"	皿	北部系
"	2158	"	皿	"
SK1012	2159	"	輪花入子	"
SK1016	2160	"	皿	南部系
"	2161	"	"	南部系
SK1017	2162	"	皿(小碗)	南部系 付高台
SK1018	2163	"	碗	南部系 碗A
"	2164	"	"	北部系 碗B
"	2165	"	皿	北部系

**SZ1001** 骨粉・炭化物および木櫃材(?)混りの埋土中より破片で出土。蔵骨器とおもわれる。

**灰釉系陶器** 常滑窯産の壺(2166)で、短く外反する口縁部の下端が斜め下方へのび断面三角形の口縁帯を形成している。肩部に降灰釉がみられる。

**施釉陶器** 瀬戸・美濃窯産の灰釉四耳壺A(2167)で「耳」は付着痕を認めるにすぎない。肩に稜がみられ、幅狭な底部に短く開く高台が付く。胴内面はヨコナデ調整、外面の灰釉は焼成不良のためか発色が悪く白色を呈す。

## 溝 (SD) (図版112~図版124)

遺物の取り上げに際して、便宜的に埋土中位に存する沈鉄層を境に上・下層に分けた場合がほとんどである。しかし、沈鉄層は基盤へも続き、さらに沈鉄層以下がグライ化していることからみてこの沈鉄層の形成は埋土と無関係であり、おそらくは地下水の常時滞水位の上面が沈鉄層を形成するものと考えられる。したがって、この沈鉄層で上・下層に分割したことに分層上の意味はほとんどない。そこで以下の報告においては上・下層に分けずに一括して遺物を示すこととした。ただこの沈鉄層は硬く、発掘に際してはこの面で手スコが止まってしまう、さらに下の青色土での分層は困難をきわめるという状況であったことが便宜的な分層に溜ってしまった大きな理由であった。

**SD1001 灰釉系陶器** 碗 (2168~2180)、皿 (2181~2193)、鉢A (2194)、鉢B (2210)、甕 (2211) がある。碗 (2168~2171) は南部系のもので2168・2169は12ないし13世紀前葉のもので他に同時期のものをみないことから混入品もしくは伝世品と解される。2170・2171は碗A<sub>1</sub>で、2170は口縁端を面取りしている。碗 (2171~2180) は北部系のもので、2172~2174は碗B<sub>3</sub>ないしB<sub>4</sub>の底部片で、2176・2177は碗B<sub>5</sub>、2178~2180は碗C<sub>2</sub>である。皿はいずれも北部系で様々の形態のものがある。2184は口縁部を肥厚させ縁帯を設けている。2182、2185、2186、2188、2189は体部下半に稜を有している。鉢A (2194) および鉢B (2210) はともに底部片で、内面の磨滅が著しい。無高台の2210は常滑窯産。甕 (2211) は常滑窯産で底外面に砂粒が目立つ。

**施釉陶器** いずれも瀬戸・美濃窯産で、天目茶碗 (2195)、灰釉皿A (2197・2198)、灰釉香炉 (2199)、灰釉柄付片口 (2200・2207)、灰釉盤A (2205~2206)、灰釉四耳壺A (2202)、鉄釉内耳鍋 (2203) 等がある。天目茶碗 (2195) は削り出し輪高台で、精緻な造りである。灰釉皿A (2197) は薄手で深めのものである。灰釉香炉 (2199) は口縁部を外方へ屈折させるもので頸部に菊(?)の印花紋を施す。その形状からみて袴腰の香炉Aの口縁部と考えられる。2200は灰釉柄付片口の口縁部片で外方へ屈折したのち立ち上がる端部が肥厚している。2207は片口部片で、口縁端部は内弯して立ち上がり肥厚しない。2201・2205・2206は折縁の灰釉盤Aで、いずれも端部を肥厚させている。2208灰釉盤の底部片で、2204も小型の灰釉盤の底部片。灰釉四耳壺A (2202) で内面は回転ヨコナデ調整。鉄釉内耳鍋 (2203) は軟質のもので鉄釉に光沢はない。口縁部は外方へ屈折したのち内弯ぎみに立ち上っている。内耳はこの屈折部に設けられている。2209は器種を特定し得ないものであるいは灰釉柄付片口の口縁部片かと思われる。

**中世土器** 皿 (2213) がある。底内面および口縁内外面をヨコナデ調整、底外面不調整のもので、口縁部が緩く外方へ屈折している。

**瓦器** 火鉢 (2212) がみられる。器表が黒色で胎は灰色を呈する。体部の下端近くに1条の貼付突帯がめぐる。

**S D 1002 灰釉系陶器** 椀 (2214~2237)、皿 (2238~2254、2261)、鉢A (2255)・鉢B (2256)、甕 (2257)、陶丸 (2258・2259) がある。椀 (2226~2229) は南部系のもの。2226は12世紀代に比定されるもので、他に同時代のものは見出せないことから混入品もしくは伝世品であろう。2227は椀Aの口縁部片、2228は付高台の痕跡がみられないもので椀A<sub>2</sub>。2229は椀A<sub>1</sub>の底部片。椀 (2214~2225、2230~2237) は北部系のもので、椀B<sub>3</sub>~B<sub>5</sub>に属するものが大半で、2225のみ椀C<sub>1</sub>である。皿も大半が北部系のもので、南部系のは少なく図示するところでは2238のみである。2261は回転糸切り底に内湾ぎみに立ち上がり体部がつくもので、器高が高く型的には上記の皿類に先行するものである。2238は小片で口縁端が垂直方向に面取されている。北部系の皿の形態は様々で、体部が外傾するもの、内湾するもの、稜を有するもの等々がある。鉢A (2255) はS E 1001出土 (2201) に類似するもので、口縁端面が浅く凹み、端部が外方へ若干突出する。鉢B (2256) は、面取りされた端部の両端がヨコナデ調整のため若干突出するもので、常滑窯産。2257は甕の底部片、下半部にヘラ状工具による記号様のものがみられる。常滑窯産。陶丸 (2258・2259) は手づくね成形品。

**施釉陶器** 底外面に卸目を有する灰釉底卸目皿 (2260) がある。口縁部は外方へ屈折したのち短く内湾するもの。瀬戸・美濃窯産。

**中世土器** 土鍋A (2264)、土釜A (2262・2263)、皿 (2265~2272) がある。土鍋A (2264) の口縁折返し部は扁平で、幾分内湾する。2262は土釜A<sub>2</sub>、2263は罅部より上方が内傾し幾分短い土釜A<sub>1</sub>の小型品の公算が大である。口縁内側には幅広の凹みを有す。皿は大 (2265~2268) 小 (2269~2272) あるが、いずれも底外面未調整で口縁部内外面をヨコナデするもので、2267・2268・2269・2270は口縁部が外傾する。

**瓦器** 三足の火鉢 (2273) がある。内湾する口縁部の外側に3個を1単位に印花紋 (菊花) が施される。

**S D 1003 灰釉系陶器** 椀B<sub>5</sub> (2274)、皿 (2275) がありともに北部系。皿は体部下半に稜を有する。

**施釉陶器** 灰釉仏供 (2276) の底部片がある。

**S D 1004 灰釉系陶器** 椀 (2278~2287)、皿 (2288~2299)、鉢A (2312・2313)、三筋壺 (2316)、甕 (2315) がある。椀 (2285・2286) は南部系の椀A<sub>1</sub>の底部片でこの2点を除いて北部系。2278・2279・2280は、それぞれ椀B<sub>1</sub>・B<sub>3</sub>・B<sub>4</sub>で、2281~2284は椀C<sub>2</sub>である。皿は2288を除き北部系のもので、細部の形状では様々であるが薄手で扁平なもの (2294~2299) が顕著である。鉢A (2312・2313) はともに口縁端面に沈線状の凹みを有し、端部外方へ若干はり出すもの。三筋壺 (2316) は2ないし3条を単位とする直線紋を推定3段めぐらすもので、肩部に降灰釉が認められる。12世紀代に比定されるもので、ほかに同時期のものが認められないことからすれば伝世品もしくは混入品であろう。なおこの2316の1片はS D 1006から出土している点は注目される。2315は甕の口縁部片。2316・2315ともに常滑窯品。

**施釉陶器** 天目茶碗(2301)、灰釉平碗(2300、2303)、灰釉皿A(2304)、灰釉皿B(2302)、灰釉盤(2311)、灰釉卸皿(2306・2307)、灰釉瓶子(2308)、灰釉水注(2309)、灰釉柄付片口(2314)等がある。天目茶碗(2301)は削り出しの輪高台。灰釉平碗はともに削り出しの輪高台で、2300は口縁部が極端に薄い。灰釉瓶子(2308)の内面はヨコナデ調整。灰釉水注(2309)には印花紋が施される。灰釉柄付片口(2314)は口縁部が外方へ屈折し内弯して立ち上がるもので、体部下端の形状からみて器高は遺存高に近いものと考えられる。2305は皿ないし盤の底部片。2310は瓶類の底部片。

**中世土器** いずれも皿(2317~2322)で、底内面ナデで口縁内外面ヨコナデ調整、底外面未調整のもの。

**中国製磁器** 2323は青磁碗の底部片。釉は暗緑色を呈する。

**S D 1005 灰釉系陶器** 碗(2327~2340)、皿(2341~2353)、陶丸(2357・2358)、鉢A(2360~2362)、甕(2363)がある。碗は南部系の碗A<sub>1</sub>(2337)を除き北部系で、概ね2327・2330・2328は碗B<sub>2</sub>、2333・2331・2332はB<sub>3</sub>、2329・2334はB<sub>4</sub>、2335はB<sub>5</sub>、2336は碗C<sub>1</sub>に分類される。底部片(2338~2340)は碗B<sub>2</sub>~B<sub>5</sub>のものである。皿は2353が南部系のほかは北部系で様々の形態がある。鉢A(2360・2361)は片口で、2360は丸く肥厚する端面に沈線状の凹みを有するが、2361は丸く肥厚するにとどまる。陶丸(2357・2358)は手づくね成形品。甕(2363)は常滑窯産で、口縁部は下方へ折曲げられ、幅広の縁帯を作り出している。

**施釉陶器** 灰釉皿A(2354)、灰釉皿C(2356)、灰釉盤A(2359)等がある。灰釉皿A(2354)は口縁部が外方へ屈折したのち端部が短く立ち上がるもので、焼成不良のためか釉の発色が悪い。折縁の灰釉盤Aの口縁端部は上方に肥厚する。2355は瓶類の底部片。

**中世土器** いずれも皿で形態はバラエティに富む。2364は碗形で口縁端部が外反する。2365・2366は口縁のヨコナデ部が外反し屈折部に段を有する。2368は小型品で平らな底部に短く外傾する体部がつく。

**瓦器** 火鉢の足と思われるものが1点(2370)ある。

**S D 1006 灰釉系陶器** 北部系の碗C<sub>1</sub>(2371)がある。**施釉陶器** 灰釉卸皿(2373・2374)および器種を特定し得ない2372がある。**中世土器** 内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ調整で底外面未調整の皿(2375)がある。

**S D 1008 灰釉系陶器** 北部系の皿(2277)がある。底外面回転糸切りで体部が外反する。

**S D 1009 灰釉系陶器** 碗(2324)、鉢A(2326)がある。碗は北部系でB<sub>4</sub>ないしB<sub>5</sub>の底部片。鉢B(2326)は底部片で、ほとんどの場合下胴部がヘラ削り調整されるが、本例はそれをみない。

**施釉陶器** 灰釉盤(2325)の底部片。

**S D 1013 灰釉系陶器** 椀 (2376~2382)、皿 (2383~2386)、鉢A (2390)、陶丸 (2387~2389) がある。2376・2380は南部系の椀A<sub>1</sub>で高台は欠損している。2377~2381は北部系の椀で、2377・2378はB<sub>5</sub>、2379・2382はC<sub>1</sub>、2381はB<sub>3</sub>~B<sub>4</sub>の底部片。皿はいずれも北部系で外傾する体部のつくもの。鉢A (2390) は底部片で、体部下半にはヘラ削り調整は認められない。陶丸はいずれも手づくね成・整形品。

**施釉陶器** 折縁の灰釉盤A (2391) および仏供 (2392) がある。2392は焼成不良で赤褐色を呈す。いずれも瀬戸・美濃窯産。

**中世土器** いずれも皿 (2393~2396) で、底内面ナデ、口縁内外面ヨコナデ調整で底外面は不調整。

**S D 1014 灰釉系陶器** 椀 (2397~2400)、皿 (2401~2404)、甕 (2414) がある。椀・皿はいずれも北部系。2399は椀B<sub>4</sub>の小型品、2400は椀C<sub>1</sub>である。皿は大小あるが、いずれも体部が外傾するもので、2401には緩い稜がある。2414は常滑窯産の甕の底部片。

**施釉陶器** 灰釉卸皿 (2405)、灰釉瓶子 (2407)、灰釉小形壺 (2406) がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。灰釉卸皿 (2405) は、口径に比べ底径が著しく小さかもので、浅く凹む口縁端面の両端は若干突出する。2407は灰釉瓶子の胴部片で、外面に印花紋が施される。2406は小型壺の底部片で、底外面は回転ヘラ削り調整。

**中世土器** 皿 (2408~2413) および土釜A<sub>2</sub> (2415) がある。皿は2409が椀形のほか比較的腰がはり口縁が緩く外反するものである。内面ナデ調整、口縁部内外面ヨコナデ調整で底外面は不調整である。2411は外反する口縁部と体部との境に明瞭な段を有する。2415は土鍋A<sub>2</sub>の典型例である。

**S D 1017 灰釉系陶器** 北部系の椀 (2416~2419) および常滑窯産の甕の底部片 (2420) がある。2416・2418は椀B<sub>4</sub>・B<sub>3</sub>で底部片もこれらに属するものである。

**S D 1018 灰釉系陶器** 椀 (2421~2426) および陶丸 (2427) がある。2421は南部系の椀A<sub>1</sub>で口縁部が幾分肥厚する。2422~2426は北部系の椀で、2422は椀B<sub>5</sub>。2423~2426の底部片はB<sub>4</sub>ないしB<sub>5</sub>のものである。陶丸 (2427) は手づくね成形品。

**施釉陶器** 灰釉瓶子 (2428) で肩部に4~5条の櫛描直線紋が巡る。内面はヨコナデ調整。

**瓦器** 火鉢 (2429) で、直線的に外傾する口縁端は面取りされ内側の端部がわずかに突出している。また底部と体部の稜部は幅狭の面取りがなされている。口径については遺存部が少ないため誤差が大きいものと思われる。

**S D 1015 (東西部)** S D 1015は平面「L」字型(北西をコーナーとする)に屈折する溝であり、東西部はS D 1013の延長上にあたるため、場合によってはS D 1013と重複している可能性がある。そこでS

D1015を東西部、南北部に分けて出土遺物を報告することにする。

**灰釉系陶器** 碗(2430~2450)、皿(2451~2456)、鉢A(2461)・鉢B(2469)・壺(2468、2474)・甕(2470~2473)および陶丸(2457~2459)がある。碗は南部系の碗A<sub>1</sub>(2430)を除き北部系。2431~2435・2437・2440は碗B<sub>3</sub>で、2433はあるいは碗B<sub>2</sub>とすべきかも知れない。2436・2438・2439は碗B<sub>3</sub>、2442~2444は碗B<sub>3</sub>の小型品である。底部片は碗B<sub>2</sub>~B<sub>4</sub>に属する。皿は2451が南部系で、2452~2456は北部系のもの。後者には体部が外反するもの(2451~2454)と内湾ないし外傾して短く立ち上がるもの(2455・2456)とがある。鉢A(2461)は底部片で、底部と体部は内面では一続きで明瞭な傾斜変換点を有しない。2469は常滑窯産の鉢Bの底部片。2461・2469とも内面は使用による磨滅が著しい。2468は常滑窯産(?)と思われる壺の口頸部。従来常滑窯ではあまり例をみないものであるが、SK1005出土の2079と胎土・色調等が酷似する。2474は厚手の壺の底部片で付高台の剝離痕がある。灰白色の器表に微細な黒色の「ふきだし」が混じる様子は猿投窯なかんづく東山窯産の可能性を示唆する。甕(2470~2473)はいずれも常滑窯産で、口縁部の断面が「**→**」状のものから「**N**」状のものがある。

**施釉陶器** 天目茶碗(2463・2464)、鉄釉碗(2465)、灰釉皿C(2466)、灰釉盤(2462)、灰釉四耳壺A(2467)がある。鉄釉碗(2465)を除き瀬戸・美濃窯産。天目茶碗(2463)は貼付高台で、口径に比べ高台径が大きい。2464は2463の口縁部の形態に類似する。鉄釉碗(2465)は類例をみないもので半球形の体部に幅狭の削り出しの蛇目高台がつき茶褐色の鉄釉が高台部を除く全面に掛けられる。高台周辺の露胎部は鉄化粧が施され、高台のいわゆる畳付には回転糸切り痕がみられる。胎は暗青灰色を呈す。産地不明。2466は平底の底部に外傾する体部がつく灰釉皿C。2467は灰釉四耳壺Aの肩部片。

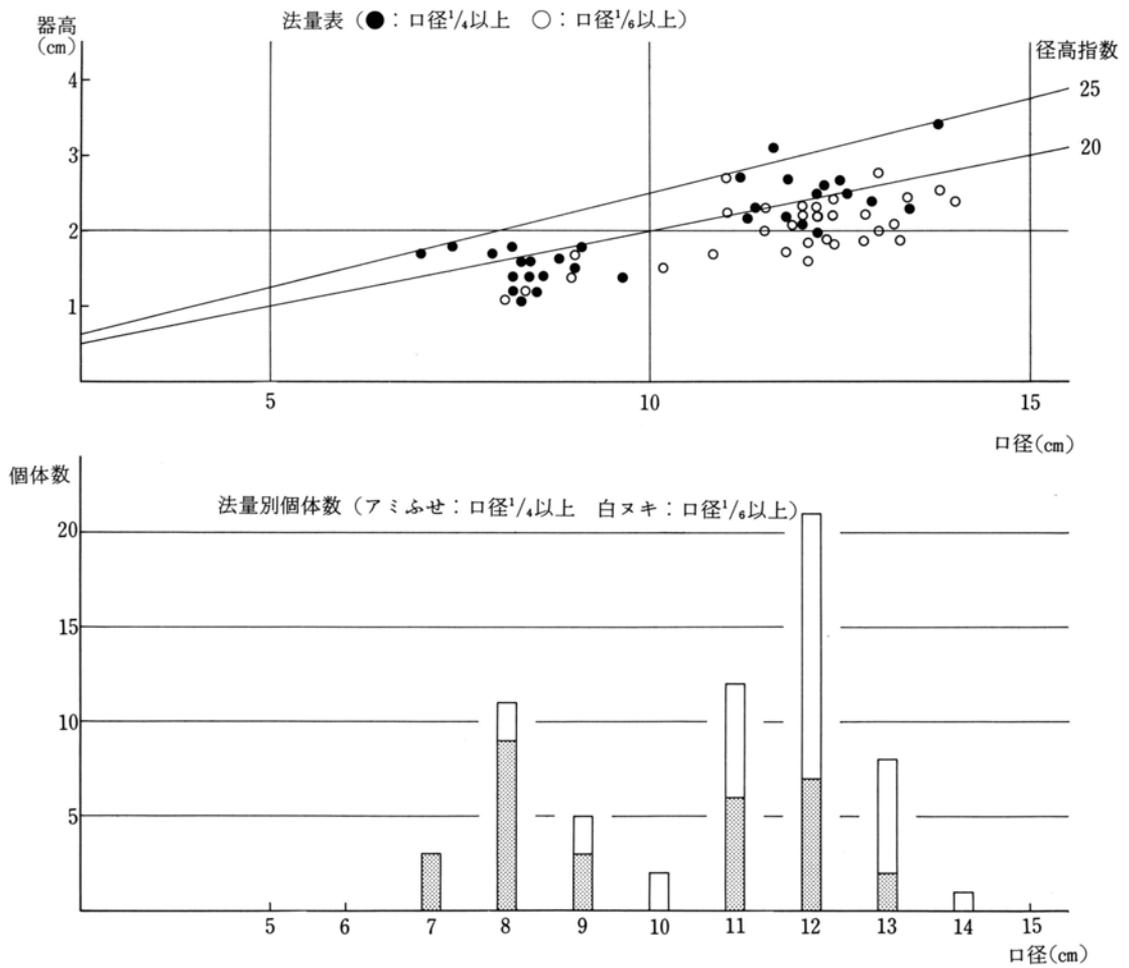
**中世土器** 皿(2476~2532)、土釜A(2538・2539)がある。他の遺構に比べ皿の出土量が著しく多い。実測し得た62点の皿について若干の整理・検討を加える。成・整形手法についてみるといずれも内面および口縁部内外面をヨコナデ調整し底外面不調整というもので、いわゆるロクロ成・整形あるいは型使用の痕跡は看取されない。これらを法量的にみたものが次頁の表である。残存率が口径 $\frac{1}{4}$ 以上のものを対象としてみると、口径14~11cmの大型品と口径10~7.0cmの小型品とに大別される<sup>(12)</sup>。小破片からの復元が多いためか形態上の小異が著しいが、大型品(2476~2519)の多くは平らで腰の張った底部を有するもので、碗形に近いもの(2482, 2503~2505)は少ない。小型品(2520~2532)についてみると形態的には3種にまとめられる。すなわち、

- a. 体部が内湾ぎみに立ち上がるもの(2521~2524・2532)
- b. 直線的に立ち上がるもの(2525~2531)
- c. ヨコナデ部が外反するもの(2520・2534~2537・2475)

とである。なお、2532の底部は内側に突出するかの如くであるが、いわゆる「ヘソ皿」ほどではない。

土釜Aは、罌に比べ口縁部が長く直立(2538)・内傾(2539)するもので、口縁端面は平

3 鎌倉・室町時代



S D 1015 (東西) 出土の皿

坦で端部が内側に短く突出し、口縁端内面直下に凹みがめぐる土鍋A<sub>1</sub>。

**中国製磁器** 青磁皿 (2540)、白磁碗 (?) (2542)、青白磁瓶子 (2541) がある。青磁皿 (2540) は完形品で削り出し高台。灰緑色の釉は底内面の中心へおよんでいない。2542は白磁碗 (?) というより盤・鉢類の底部片とすべきかも知れない。2541は青白磁の「唐児唐草文」瓶子の小片である。

S D 1015  
(南北部)

**灰釉系陶器** 碗 (2543~2546)、皿 (2547・2548)、壺 (2568)、甕 (2567)、陶丸 (2569・2570) がある。2543・2544は碗B<sub>s</sub>、2545・2546は碗C<sub>1</sub>でいずれも北部系。皿もともに北部系で、体部が外反するもの (2547) と短く内弯するもの (2548) とがある。壺 (2568) は、外反する細い口頸部に丸く肩の張った体部がつくもので、口縁端部は断面三角形を呈す。甕 (2567) は肩部片で後述S D 1016の (2572) と同形態のもの推察される。壺・甕ともに常滑窯産。陶丸 (2569・2570) は手づくね成形品。

**施釉陶器** 灰釉盤A(2559・2560・2561)、灰釉四耳壺A(2555～2588)、灰釉花瓶A(2562)および壺・瓶類の胴部片(2563～2566)がある。いずれも瀬戸・美濃窯産、灰釉盤Aの2559は、口径に比べ底径が大きなもので、体部は内弯する。口縁部は外方へ屈折させたもので肥厚しない。2560も口縁部の造作は類似する。2561は底径が幾分幅狭となるが体部は内弯傾向にある。灰釉四耳壺Aの2555は肩部に耳の付着痕が存し、内面ナデ調整。2556と2557は胎土・釉調等からみて同一個体である。これらはいずれも釉は薄くムラがある。灰釉花瓶A(2562)は口縁を欠くが、三段にわたって2～3条の櫛描直線紋がめぐる。2564～2566はいずれも印花紋を有する壺・瓶類の胴部片で、内面はいずれもナデ調整。

**中世土器** いずれも皿で、底内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ調整で底外面不調整のもの。2549～2551はヨコナデの範囲が体部の大半に及ぶのに対し2552は $\frac{1}{2}$ ほどにとどまる。

**中国製磁器** 青磁碗(2571)がある。削り出し高台で、体部外面には蓮弁紋(?)が刻される。釉は暗灰緑色を呈す。

S D 1016 **灰釉系陶器** 碗(2574)、陶丸(2575)、甕(2572・2573)がある。碗(2574)は北部系のもので碗B<sub>5</sub>の底部片。陶丸(2575)は手づくね成形品。甕はともに常滑窯産で、2572はひずみ大きいもので、肩部に記号様の「^」がへら描される。2573は小型の甕で、幅狭ないわゆる「N」字口縁で胴部下半はへらを縦位に用いた整形で肩部より上方を内外面とヨコナデ調整している。肩部には「菊花」様の押印がある。

**施釉陶器** 灰釉花瓶(2580・2578・2579)、灰釉水注A(2581)、灰釉四耳壺A(2582)がある。2581を除き瀬戸・美濃窯産。2578は灰釉花瓶BないしCの口縁部片で、2579は所謂尊式花瓶(灰釉花瓶B)の胴部片。2580は薄く透明に近い不安定な釉の灰釉花瓶Aで口縁部を欠く。2581は灰釉水注Aで肩部の釉は降灰釉の可能性もある。胎土も瀬戸・美濃窯産のものとは異なり、緻密である。産地不詳。2582は、肩の張る灰釉三耳壺で口縁端部を欠く。釉は薄く透明に近い。

**中世土器** 皿(2577)がある。内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ調整で底外面は不調整。

**中国製磁器** 青磁碗(2583)がある。外面に蓮弁紋を刻するもので、釉は灰緑色を呈す。

S D 1019 **灰釉系陶器** 碗(2584～2591)、皿(2592～2597)、鉢A(2600)、陶丸(2598・2599)がある。碗は2589が南部系の碗A<sub>1</sub>であるほかは北部系のものである。2584は碗B<sub>3</sub>、2585～2588は碗B<sub>5</sub>で、2590・2591は碗B<sub>3</sub>～B<sub>4</sub>の底部片。皿は2592を除き北部系のもので形態は様々であるが、体部が直線的で深めの2593・2594と底径が広く体部が短い2595～2597とがある。2600は口縁端部が丸く肥厚する鉢A。陶丸(2598・2599)はともに手づくね成形品。

**施釉陶器** 灰釉盤A(2601・2602)および灰釉瓶子(?) (2603)がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。2601・2602は折縁の灰釉盤Aで、口縁端部が肥厚する。2603はその形状から瓶子類の胴部片で、印花紋(菊花)のほか櫛描紋が施されている。

**中世土器** 皿(2604・2605)および土釜A(2606)がある。皿はともに底内面ナデ、口

縁部内外面ヨコナデ調整で底外面不調整のもの。2606は水平に突出する罫に比べ長く内傾する口縁部を有する土釜A<sub>1</sub>の口縁部片。

**S D 1020 灰釉系陶器** 碗(2607~2610)、皿(2611、2612、2615)がある。いずれも北部系。2607は碗B<sub>4</sub>、2608~2610は碗C<sub>1</sub>である。皿は広い底部に外傾する短い体部がつくもの(2611・2612)と小型で体部が内弯する2615とがある。

**施釉陶器** 天目茶碗(2613・2614)がある。ともに直立する口縁部片で瀬戸・美濃窯産。

**中世土器** いずれも皿(2617~2620)で、大(2617~2619)小(2620)がある。形態上の小異はあるが、内面ナデ、口縁内外面ヨコナデ調整で底外面不調整という点共通する。

**中国製磁器** 青磁皿(2616)がある。大形の皿の底部片で、内面に花卉状の紋様がある。青灰色の釉は高台の畳付の除き全面に施される。

**S D 1021 灰釉系陶器** 碗(2627~2651)、皿(2652~2661・2773)、鉢A(2624~2626)・鉢B(2623)、甕(2621・2622)がある。碗は2646が南部系の碗A<sub>1</sub>であるほかは北部系。2628・2629は碗B<sub>2</sub>、2627・2630は碗B<sub>3</sub>、2631・2633・2634は碗B<sub>4</sub>、2632・2635・2637・2638は碗B<sub>5</sub>、2639~2643・2645は碗C<sub>1</sub>、2644は碗C<sub>2</sub>である。底部片は2647が碗B<sub>2</sub>、2648~2650は碗B<sub>3</sub>~B<sub>5</sub>、2651は碗Cであろう。皿にも2652・2653の南部系と2654~2661・2773の北部系とがある。2652は小型の鉢とでもいべきもので例は少なく特殊品であろう。2653は口縁端面が垂直方向に面取りされる。北部系の皿は深めのものから浅く扁平なものまで様々であるがいずれも体部が外反するもので、下半部に稜を有するもの(2657・2658)もある。鉢A(2624~2626)はいずれも底部片で、内面は使用による磨滅が著しい。常滑窯産の鉢B(2623)も底部片で内面の使用による磨滅が著しい。甕はともに常滑窯産で、口頸部の端をN字状に屈折させ2.0cm幅の縁帯をもうけた2621と口頸部の端を折り返し(詳細な技法については不明)4.0cm幅の縁帯を設けた2622とがある。

**施釉陶器** 灰釉盤A(2662~2664)、灰釉瓶子(2665・2666)、灰釉仏供(2668)、灰釉柄付片口(2667)、灰釉卸皿(2669・2670)がある。いずれも瀬戸・美濃窯産である。灰釉盤Aは図示する限りでは大(2664)、中(2663)、小(2662)があるが、2662と2663はその形状・釉調からみて同一個体の可能性がある。2664は丸味をもった体部で折り曲げた口縁は内弯する。2662・2663の体部は2666に比べ幾分直線的で口縁端部は肥厚する。2664の灰釉は薄くムラがある。2666は灰釉瓶子の口頸部で、頸部中央に突帯がめぐる。2665は灰釉瓶子ないし四耳壺の肩部片で櫛描直線紋(3条)の上に印花紋(菊花)が施される。灰釉仏供(2668)の底外面は回転糸切り。灰釉卸皿(2669・2670)の底外面も回転糸切りのままである。2667は灰釉柄付片口の口縁部片で、口縁部は受け口状に屈折し内弯する。外面下半には灰釉は施されない。

**中世土器** いずれも土釜Aで、罫が水平に突出し、口縁端部が直立する土釜A<sub>2</sub>(2671)、罫が水平ないし幾分上方へ傾き、A<sub>2</sub>に比べ短い口縁部が内傾する土釜A<sub>3</sub>(2672・2673)、

短い鏝が上方に傾きかつ短い口縁部が著しく内傾した土釜A<sub>4</sub> (2674・2675) とがある。2673・2675の口縁部には焼成前に穿孔される。

**中国製磁器** 青磁碗 (2676) がある。内面に花紋 (?) が浮彫されている。釉は灰緑色を呈する。

**S D 1022**  
(東西部)

S D 1022は、北西部をコーナーとする平面「L」字形の溝で、東西部よりまとまって遺物の出土をみたため、東西・南北部を一括して示すことをさけ、それぞれに分けて報告することとした。

**灰釉系陶器** 碗 (2677~2689)、皿 (2690~2693)、鉢A (2695) がある。南部系の碗A<sub>1</sub>の底部片 (2689) を除き碗・皿はいずれも北部系。2677~2687は碗B<sub>2</sub>。2688は碗B<sub>3</sub>というよりはB<sub>2</sub>の小型品とみるべきかもしれない。皿の形態は様々で、体部が外反し口縁帯をもうけるもの (2692)、外反するだけのもの (2691)、外反し口縁帯を設けるが体部下半に稜が入るもの (2693)、口径に比べ著しく幅狭な回転糸切り底から丸味をもって立ち上がる体部のもの (2694) 等がある。鉢Aは底部片で内面は使用による磨滅が著しい。



第228図 S D 1022東西部  
遺物出土状況(西より)

**中世土器** 土鍋A (2701~2705) および土釜A (2696~2700) がある。皿 (2706) はこのS D 1022から枝状に派生する小溝からの出土である。土鍋Aは大(2701~2704 口径26.0cm前後)・小(2705 口径20.0cm前後) がある。いずれも折返し口縁で、口頸部の内外面をヨコナデ調整、体部の上半をハケ目調整下半をヘラケズリ調整している。内面はナデ調整で下半をヘラケズリ調整している。土釜Aの口径も様々であるが、いずれも破片よりの復元推定であり、大小を問題とすることは出来ない。2696は体部外面にハケ目調整は現状では認められないが鏝の接合部下にヘラないし板状工具の押圧痕があり、浅いハケ目が存した可能性はある。2696・2698・2700は土釜A<sub>2</sub>、2697・2699は土釜A<sub>3</sub>である。皿 (2706) は内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデで底外面不調整のもの。

**S D 1022**  
(南北部)

**灰釉系陶器** 碗 (2707・2708)、皿 (2709~2712)、鉢A (2714) がある。碗・皿はいずれも北部系のもの。2707は碗B<sub>5</sub>、2708は碗B<sub>4</sub>~B<sub>5</sub>の底部片。皿はいずれも体部が外反するもので、2709・2710は口縁端を肥厚させている。2714は鉢Aの底部片で、内面は使用による磨滅が著しい。

**施釉陶器** 短く外反し端面が浅く凹む。瀬戸・美濃窯産の灰釉瓶子の口縁部片 (2713)。

**S D 1023**  
(S D 1021  
平行部)

S D 1023も便宜的にS D 1021平行部と以南に分けて報告する。S D 1021平行部出土のものはいずれも灰釉系陶器である。碗 (2715~2717)、皿 (2718~2720) があるが、すべて北

部系。2715は椀B<sub>4</sub>、2716は椀B<sub>5</sub>で2717は椀B<sub>4</sub>~B<sub>5</sub>の底部片。皿は概して薄く扁平なものである。

SD1023  
(SD1021  
平行以南)

**灰釉系陶器** 椀(2721~2728)、皿(2729~2739)、陶丸(2740・2741)、甕(2748)がある。2721・2722は南部系の椀A<sub>1</sub>、2723は体部が大きく外反する南部系の椀A<sub>2</sub>。2724~2728は北部系で、2724は椀B<sub>1</sub>、2725は椀B<sub>3</sub>、2727~2728は椀C<sub>1</sub>。2729~2732は南部系で、2733~2739は北部系の皿。皿の形態は様々であるが体部は基本的には外反し、2733・2737・2738・2739は体部下半に稜を有す。陶丸(2740・2741)は手づくねの成形品。甕(2748)は常滑窯産で、口縁部が「N」字状に屈折し、幅2.0cmの縁帯をもうけている。

**施釉陶器** 灰釉平椀(2742)、灰釉底卸目皿(2744)、灰釉盤(2743・2745・2746)がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。2742は灰釉平椀の底部片で削り出し輪高台。2744は灰釉底卸目皿の底部片で、底内面に楕円直線紋(3条)が2重にめぐる。2743は灰釉盤の底部片。2745は丈の高い三足が付く折縁の灰釉盤Aで口縁端が短く立ち上がる。2746は三足の灰釉盤で、体部内面のみこみ部分にへら状工具による卸目が刻まれている。

**中世土器** 土釜A<sub>4</sub>(2749)がある。罌・口縁部とも短く厚手である。

**中国製磁器** 青磁椀(2747)がある。灰緑色の釉が内外面に施されている。底内面に陰刻花紋が施されているが、黒色の付着物および釉が厚いことから十分に観察できない。

SD1024 **灰釉系陶器** いずれも椀(2763~2771)。  
2763・2765は高台が欠落するが南部系の椀A<sub>1</sub>。2765~2771は北部系のもので形態に小異があるが口縁端を丁寧に肥厚させている点からして椀B<sub>2</sub>である。

**中世土器** 土鍋A<sub>1</sub>(2772)がある。折り返し口縁で、折り返し部は比較的薄く仕上げられている。



第229図 SD1024 遺物出土状況(北西より)

SD1025 **灰釉系陶器** 椀(2750~2755)、皿(2756・2757)、鉢A(2759・2760)、甕(2758)、陶丸(2762)がある。2750は南部系の椀A<sub>1</sub>で、これ以外はすべて北部系のもの。2751は椀B<sub>2</sub>、2752~2754は椀B<sub>3</sub>、2755は椀B<sub>4</sub>。皿はともに北部系で外反する体部で口縁が肥厚する。2759は鉢Aの口縁部片で、端部が丸く肥厚する。2760は鉢Aの底部片で内面は使用による磨滅が著しい。2758は常滑窯産の甕の底部片。

**中国製磁器** 青磁椀(2761)がある。青緑色の釉で底内面に陰刻花紋が認められるが、釉が厚く十分に観察できない。

SD1033 **灰釉系陶器** 椀(2774~2777)および皿(2778)がある。2779は南部系の椀A<sub>1</sub>で、2775~2777は北部系の椀B<sub>2</sub>。皿(2778)は南部系のもので、口縁端部は面取りされている。

SD1039 **灰釉系陶器** 椀(2779~2784)、皿(2785)がある。2779・2780は南部系の椀A<sub>1</sub>、2781~2784は北部系の椀B<sub>2</sub>である。皿(2785)は南部系で、口縁端部は垂直方向に面取りしている。

**中世土器** 土釜A<sub>1</sub>(2786)がある。罌が水平に突出し、長い直立する口縁部をもつ。

S D1051 灰釉系陶器 椀 (2787~2789・2791・2792) および皿 (2790) がある。2787・2788は南部系の椀A<sub>1</sub>、2789も南部系で体部が大きく開く椀A<sub>2</sub>、2791・2792は北部系の椀B<sub>3</sub>である。2790は南部系の皿。

S D1052 灰釉系陶器 椀 (2793・2794)、皿 (2795・2797) がある。いずれも北部系で、2793・2794は椀B<sub>4</sub>、皿 (2795・2797) はともに口縁が外反するものである。

中世土器 土釜A (2798・2799) がある。2798は土釜A<sub>2</sub>。2799は小片であるため口径に大きな誤差をもつ可能性が大であるが、口縁部・鏝の作行からみて小型品であることは間違いない。口縁端部が短く直立するが全体としては内傾が著しく、鏝も水平に突出するが部厚くて通例のものとは異なるものである。

中国製磁器 青磁椀 (2796) がある。底部片で釉は(青)緑色を呈す。

#### 付 「墨書」陶器

今回の調査で出土した灰釉系陶器の椀・皿のうちには、その底外面に「墨書」が認められるものが多数ある。ただ「墨書」を十分に判読し得ず、その内容・性格等を明確にし得なかった。殊に破片資料や「墨書」の擦れたものが多く、未熟な読解力に加え赤外線撮影等の調査をしていない現段階での判読・図示はいたずらに誤読、恣意的な解釈・憶測を生み混乱をまねきかねない。そこで今回はその存在を指摘するにとどめ、詳細な検討については将来に委ねたい。

「墨書」陶器一覽

遺 構	灰 釉 系 陶 器、椀	同 皿
S E1001	2004	
S E1013	2039, 2041	2045
S E1014	2052	2056, 2059
S E1018	2066	2068
S K1002	2089	
S K1001	2094	
S K1003	2106, 2112	2114, 2116, 2119
S K1004	2146	
S D1001	2175	2186, 2187, 2189
S D1002	2220, 2230, 2231, 2233, 2234, 2235, 2236, 2237	2240, 2242, 2239, 2249
S D1003	2275	
S D1004	2281, 2287	2293, 2299, 2296
S D1005	2237, 2239, 2331, 2332, 2334, 2338, 2239, 2340	2341, 2343, 2344
S D1013	2382	2384
S D1017	2419	
S D1018	2423, 2425, 2426	
S D1015(東西)	2445, 2447, 2448, 2449, 2450, 2446	
S D1015(南北)	2545	
S D1019	2591	
S D1021	2643, 2636, 2642, 2629, 2642, 2651, 2646, 2647, 2648, 2649, 2632	
S D1022	2707	
S D1023	2715	2734, 2736, 2739
S D1024	2764, 2771	
S D1033	2775, 2755	

## b. 木製品

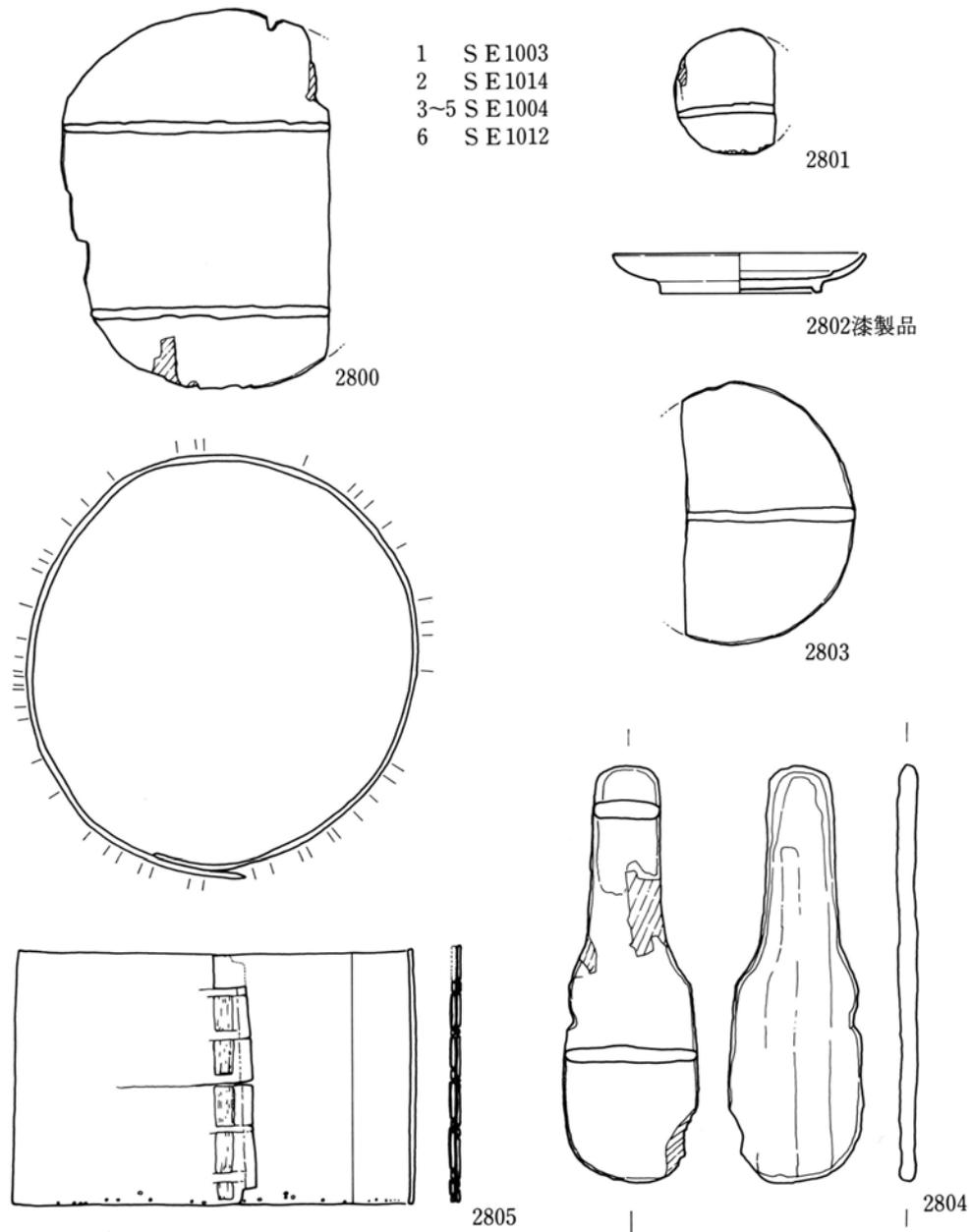
木製品には井戸枠として転用された曲物、曲物の底板ないし蓋板と思われる円板・杓子(?)がある。

- S E 1003 復元径20.2cm、厚さ0.7cmの円板が1点出土した(2800)。曲物等の底板ないし蓋板と考えられる。下層出土。
- S E 1004 底板ないし蓋板と思われる円板(2803)、杓子状木製品(2804)、および図示し得なかったが幅10cm、長さ60cm前後の曲物の側板とおぼしきものが出土した。2803は復元径14.0cm、厚さ0.6cmの円板。2804は身幅が広い杓子で先端が弧状を呈し、身の側縁と頸部との変換点が稜をなし楕形の頸部を形成し柄に移行する。身に較べ柄は肉厚である。また身に表裏はない。現存長22.2cm、身幅7.2cm・身厚0.7cm、柄幅3.6cm・厚さ1.0cmをはかる。
- S E 1010 S E 1010の井戸枠として転用されたもので遺存した2段のうちの下段である。径36.0cm・高さ22cmをはかる。側板は厚さ0.5cm前後で、内面に1~2cm前後の間隔をおいて垂直方向に刻み(ケビキ)を入れて曲げ、幅1.5cmほどの樺皮を用いて1箇所綴り合わせている。そしてさらにその外側をいわゆる廻しの側板を2段まわしている。この側板はケビキを入れない帯状の板を用いてそれぞれ1箇所樺皮を用いて留めている。
- S E 1012 2805はS D 1012の井戸枠として転用されたもので、2段のうちの下段のものである。径42.0cm、高さ27.2cmをはかる。側板は厚さ0.5cm前後で内面に1~2cm前後の間隔で垂直方向に刻み(ケビキ)を入れて曲げ、1箇所1列で1目くぐりの5段の樺皮縫いを行っている。なお、側板の重ね合せ部に生じる段差の解消を意図しての両端を斜めに切り落としている。側板の下端近くに底板をとめた竹クギ跡(穴)がめぐっている。
- S E 1014 2801は容器の底板ないし蓋に用いられたと考えられる円板である復元径6.8cm・厚0.5cmをはかる。井戸枠として転用された曲物が1点(写真図版31左下から2段目)みられる。径56cm・高さ45cmをはかる。側板は厚さ0.5cm前後で内面に1~2cm間隔で垂直ないし斜行(左下り)方向にケビキを入れて曲げ樺皮縫いを行っている。そしてその外側に3段にわたっていわゆる廻しの側板をまわしている。これらについては内面にケビキはみられない。なお内側の側板の重ね合せ部段差によってできる新たに生じる間隔と解消するために縦長の板材をはめ込んでいる。

このほかにも、井戸枠として転用された曲物は多いが、発掘の時点ですでに腐蝕が進み脆弱となっていたものが多く、その取り上げ、保存には困難を極めた。殊に発掘途上におけるわずかな乾燥で崩壊したものも少なくない。こうしたことからまことに遺憾なことであるが十分な実測図を揚げることができなかった。ご容赦いただきたい。

## c. 漆製品

数個体分の漆塗木椀・皿の出土をみたがS E 1004出土の皿を除いたほかは発掘時点ですでに木質が腐蝕しており黒漆の上に朱漆で紋様を描いた漆膜がかろうじて遺存するという



第230図 木製品および漆器 (1~5: 1/4, 6: 1/8)

ものであった (SK1001、SD1015南北部等)。

- S E 1004 下層より漆塗木皿が1点 (2802) 出土した。輪高台で内弯する体部の内面に段を有する皿で全面黒漆塗りで、体部外面に朱塗で描いたものとみられ、朱塗が痕跡的に看取される。木質については未同定。口径13.3cm、器高2.2cm、底径8.6cm。

#### d. 金属製品

鉄製品が所々で出土したが残欠が多く、本来の形状を復し得るものは少ない。SX1001から比較的まとまって出土した。

S X 1001 陶磁器類を多量にふくむ炭化物層から鉄器が多く出土した。銹化が進んでおり本来の形状を知り得るものは少ない。第234図にその一部を示した。

2806は山形のいわゆる火打鎌(燧鉄)と思われるが頂部の円孔が不明確である。横幅9.5cm、縦3.2cm、厚0.6cmと異常に厚いがこれは銹化の進行にともなう膨張の結果とみられる。

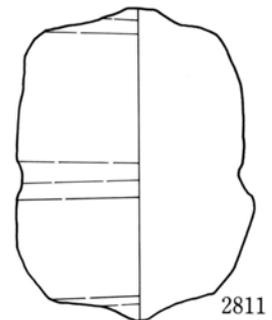
2・3・4は鉄釘。2・3は断面長方形の脚の上端を叩きのばし折り曲げて釘頭としたいわゆる折頭釘である。4は釘頭を欠くが断面長方形の釘とみられる。このほか幅2.0cm前後の長方形(長さは不特定)の鉄板がみられるがおそらくは飾金具の残片であろう。

S D 1025 2810は60D区のS D 1025より出土した鉄釘。釘頭に格別の造作は認められない。角錐形の截頭釘であろう。

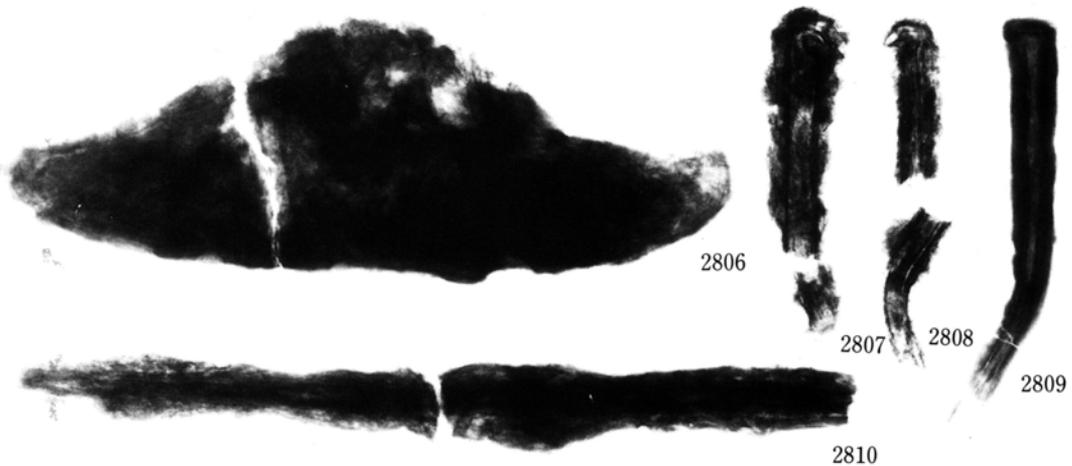
e. 石製品

五輪塔の残欠が1点みられる。

S D 1015 60C区のS D 1015東西部上層より五輪塔の空風輪が1点出土した(2801)。全体に風化が進んでいるが形態を損なうほどではない。遺存長16.8cm、最大径12.4cm。石質は黒雲母花崗岩であるが、産地を特定するにいたらない。



第231図 S D 1015出土  
五輪塔(空風輪)(1:8)



第232図 阿弥陀寺遺跡出土の鉄製品(X線写真) 実物大

第III章 分析・考察

1. 弥生時代の遺構と遺物 ————— 石黒

2. 自然科学的分析

A. 阿弥陀寺遺跡の土器胎土の特徴 ————— 永草

B. 阿弥陀寺遺跡から出土した緑色の岩石について —— 楯

C. 阿弥陀寺遺跡から出土した赤色物質のX線回折分析 — 楯

D. 阿弥陀寺遺跡の炭化米について ————— 伊藤

E. 「中世土器」の胎土について ————— 北村

# 1 弥生時代の遺構と遺物

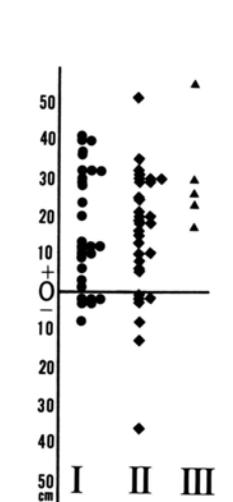
## A. 遺 構

### a. 遺跡の地表面について

(1) 阿弥陀寺遺跡は、巨視的にみて沖積平野に点在する微高地上に立地している。調査区内でみると、北は微低地、南にはやや大きく深い谷地形(谷A)を控えている。恐らく微高地は東西に連続していると思われるが、詳細は不明である。

I期は、大溝SD04が居住域の北を画し、南は谷Aによって画されている。SD04は微高地北縁に沿って北東から南西に延び、水流も同様である。SD12やSD04下層の在り方等から考えると、小規模な谷地形がSD04掘削以前にすでに存在していたようだ。

上述のSD12は比較的先行する窪地状の自然地形のようであるが、それより新しいものとしてNR01・02の両自然流路がある。これら自然流路の存在は、当時の地表面には地表の水を集めて流すだけの凹凸があり、決して平坦ではなかったことを示している。



第3表 床面レベル時期別度数分布

微視的な地表面の起伏については、竪穴住居の壁面の高さを一定に考えて、床面レベルの変化に注目すると、 $-8\text{ cm} \sim +40\text{ cm}$ の範囲の中で、下群： $-3\text{ cm} \sim 0\text{ cm}$ 、中群： $+10\text{ cm}$ 前後、上群： $+30\text{ cm} \sim +40\text{ cm}$ の3つのレベルに集中する傾向がある。そして、上群は調査区東部に集中し、中群は調査区中央に、下群は散在する傾向にある。つまり、調査区中央にある住居跡床面が他より低いのである。

調査区の中央部にある大形住居(SB28)を始めとするいくつかの住居跡や土坑内部には自然堆積と考えられる砂が埋積しており、同じ砂によって埋積されている自然流路との関係も、当時この地区の地表面が低かったために自然流路による砂の運搬作用があったことの痕跡と見なすことができる。だから、検出した自然流路は部分であって本来さらに延長し拡大していたと考えたほうがよい。

調査区内での地表面の傾斜は巨視的には東西の中央軸線から南へ下降し、部分的に存在する遺構の埋没過程の凹凸や旧地表面の凹凸のうち凹部に集中する侵食によって凹部の連続つまり自然流路が形成されたとするならば、大型住居は丁度自然流路の収束する位置にあるので、おそらく北から南への水流が大形住居跡あたりで開放され、それが「ハ」字状の自然流路痕を形成したのであろう。NR01とNR02は、検出状況においては「ハ」字の位置関係にあって別物のようで

## 1 弥生時代の遺構と遺物

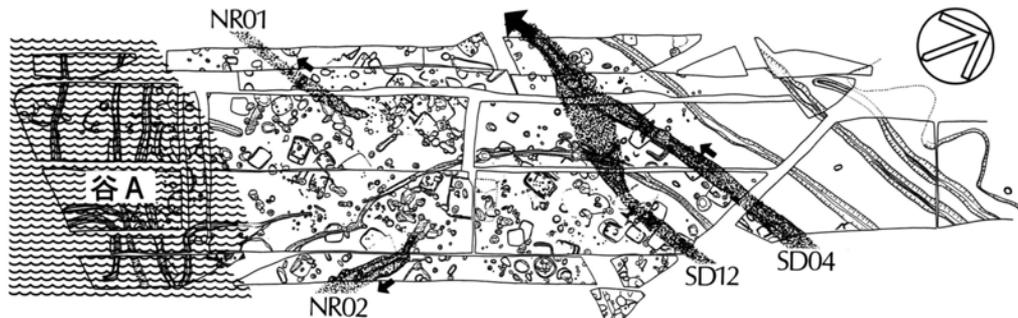
あったが、もとは同一であった水流の分流した支流の基底部痕であった可能性が極めて高いのである。しかし、そうなるとこの時期（おそらくI-1b期からI-2期にかけてのある時期）には集落内部を洗うほどの洪水が阿弥陀寺遺跡を襲ったことになる。

ところで、SD04の掘削されている部分では、溝南北の土堤状の高まり(SX7・8)の外部でラミナの発達が認められ、北への連続も顕著である。溝から溢れた流水あるいは北部微低地での広域な洪水性の流水の存在が推定できる。SD04付近では基本的にその走行に一致したものと考えるが、こうした現象によって微高地の北部は拡張されていった可能性が高い。それに対して南部は侵食のため逆に谷の拡大したことが、SB72掘形南端の崩壊から推測できる。

II期は、微高地南北での埋積の進行によって微高地が若干拡大した。とくに微高地北縁では風化して摩耗したI期の土器を含む包含層が広範に形成されており、II期の遺構のベースとなっている。また、住居の床面レベルは基本的にII期と変化ないので、凹部に形成された自然流路もいったんは埋積して全体的な起伏の減少による地表面平均レベルの上昇はあったかもしれないが、調査では明確にしえなかったし、住居跡床面レベルの上昇も認められないことは、洪水性の堆積層は形成されなかった、かえって微高地の侵食が進行したことを示している。

III期は、住居の検出数が以前に比べて急激に減少するので、地表面の上昇が無ければ、居住形態に変化(掘立柱建物あるいは平地式住居の盛行)があったのかもしれない。いずれにしても、包含層の形成さえ確認できない削平状況では結論は不可能である。IV期などなおさらである。この時期谷Aは南へかなり後退している。IV期については確認できない。

(2) 本来の地表面標準標高について確定したことはいえないが、竪穴住居の深さを平均1mとするならば、I期は1~1.4m程度、II期以降はそれ以上あったものと推測する。この点は、IV期の環濠内部に同時期の竪穴住居跡が未検出であること、III期・IV期の環濠の深さが同時期の朝日遺跡その他と比べて著しく浅いことなどを考慮するなら、ある程度妥当な数値であると考えられる。ところでこの1~1.4mという数値は遺跡周辺の水田面レベルに近い。幾ら沖積地とはいえ、弥生時代以降微高地も含めて全面的な沖積作用を受けたなら別であるが、逆に削平を受けている状況であれば、近似値として認めて良からう。ただ、その数値が近似値であるならば、かえって1m近いその削平の激しさには驚かされる。しかし、その方が阿弥陀寺遺跡の弥生時代範囲以北において、現在の水田下に弥生時代包含層からなる客土が広範囲に行われていることを理解する上には都合が良い。



第233図 I期の谷・溝・自然流路(1:2000)

b. 遺構の変遷について

i. 住居・土坑そして井戸

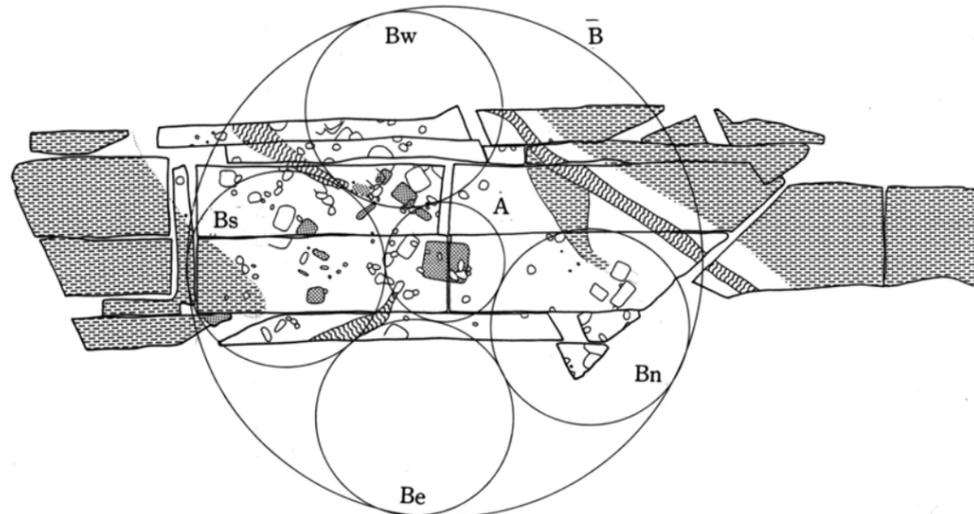
I期からIV期にかけての変遷で、集落の構成要素が揃いその内容がある程度揃ったのはI期のみで、他は要素の欠落などがあり不十分である。第235図参照。

I期は第234図に示したように大形住居を中心とした住居群の展開と散在する土坑群、住居群小単位を区分する窪地（自然流路）と土坑群の配置などがうかがえる。住居群小単位については、Bw区は微高地の延長方向に住居跡が展開しており重複状況から一定の占地が行われていたと考えられる。Bs区に住居群は西側の微高地に平行して展開する一群と東側の一群及びその間に存在する舟形土坑群（土坑c類）に区分できる。とくにこれらの土坑がすぐ埋め立てられる性格のものでなく持続的廃棄を基本として一定期間開放されているものであることは、それらが仮に蓋をされたとしても、地表の人為区分としては有効であるし、われわれの判断材料としても使えると考える。A区・Bs区間の土坑群、Bw区・Bs区間の土坑群など、土坑群は無作為に設定されるのではなく、住居の配置ともども一定の占地に対応したものと考える。

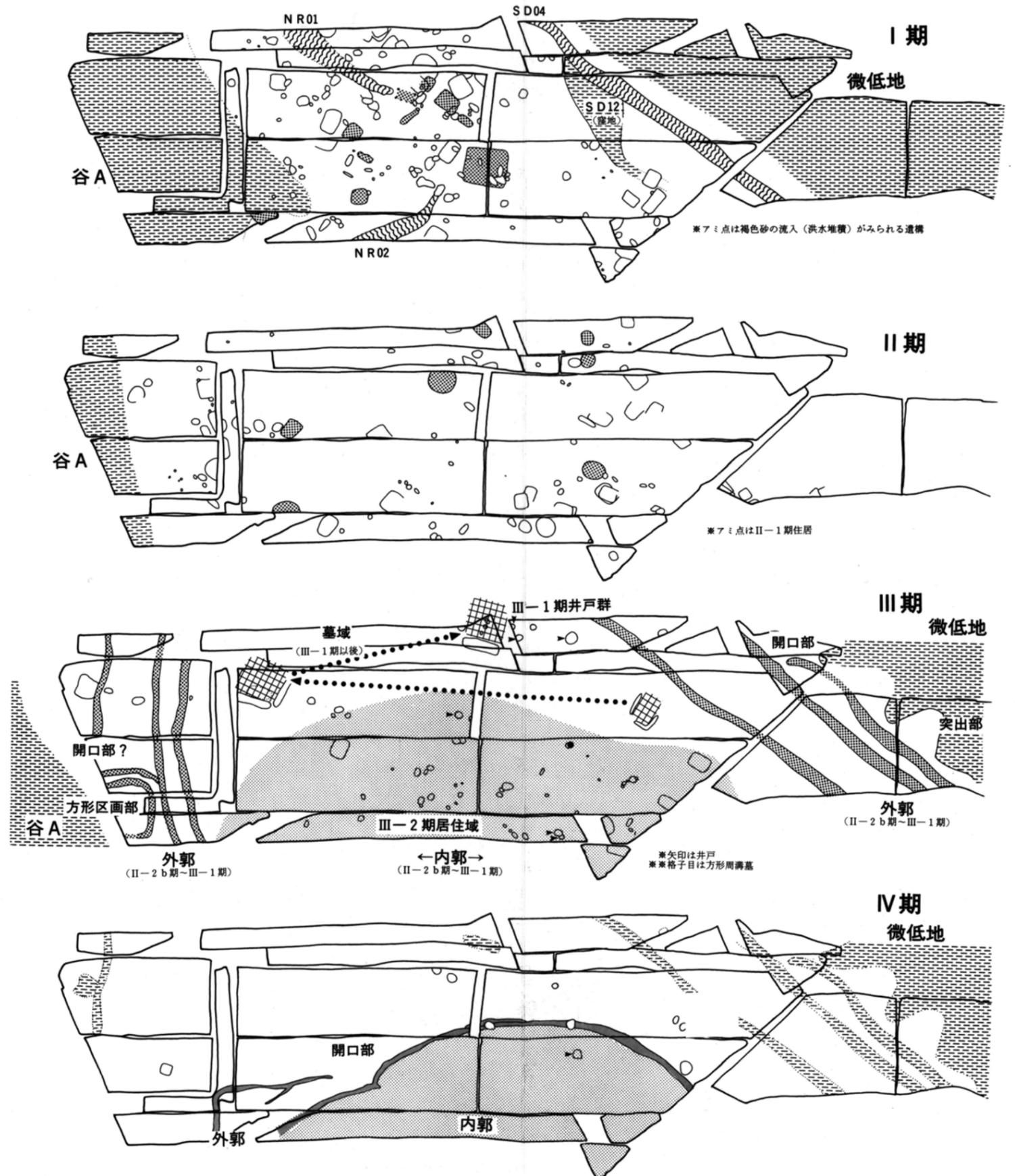
II期は、住居配置に規則性は認められない。強いて言えば、I期に大形住居のあったA区が空白となり、住居の無かったBn区とBw区の間に住居群小単位ができたことぐらいである。他には、この時期非方形の住居プランの目立つことが指摘できる。

III期は、1期と2期で遺構の広がりや違いがある。1期はII期に重複して遺構が展開するけれども、2期には東方へ収縮し、遺構数が顕著に減少する。この時期に初めて井戸が出現する。以前には無かったから、異なる生活様式が他から持ち込まれたことになる。井戸は調査区の中央部西端と東端に1群ずつと、中央のやや南よりに1基ある。住居跡は検出できなかったが、本来は住居群に伴うものとしてあったとすれば、住居群もその程度の数はあったのであろう。

IV期は環濠(SD07)内部が居住域に限定できると考える。そして埋め立てられることなく開放したまま自然埋没する性格不明の大形土坑が環濠外に展開している。



第234図 I期遺構群分割概念図 (1:2000)  
B径約145m (B小円径約55m)



第235図 遺構変遷図 (1/1400)

## ii. 方形周溝墓について

弥生時代の墓は、主体部の明らかになった例の検出はなかったが、いわゆる方形周溝墓の痕跡と考えられるもの3基と、壺棺と思われるもの1基が検出できた。

方形周溝墓はいずれもⅢ期に属し、SZ01→SZ03→SZ02という築造順序が出土土器群から推定できるが、《列》を形成して「流れ」を示すような造墓形式ではなかった。ただ、居住域外縁において相互に間隔をおく造墓形式であるという指摘は可能である。この時期の方形周溝墓としては通有の在り方と言えよう。

プランは現代の破壊や調査上の制約もあり完全調査でないため比較ができない。

周溝内部からの遺物の出土状況は、相互に相違があり統一的な様相はうかがえない。SZ01では接合すれば完全になる大形壺の大破片が周溝内で重ねて置かれており、置くということではSZ02の復元可能な土器の多くが溝底から出土したのと共通する。しかしSZ03では周溝埋土の上半部から破片も含めて多量の土器が出土しており、いかにも廃棄されたという一群と墳丘上から転落した一群に分かれる感触をもった。いずれにしてもこれだけの資料で結論付けることは不可能である。

壺棺(SX 13)は、完全な状態ではなくすでに崩壊したような出土状況を示していた。いちおう異なる系統の壺体部下半部をそれぞれ組み合わせた壺棺であった可能性が高いというものであるが、断言できるものではない。

## iii. 環濠および〈囲郭集落〉について<sup>(1)</sup>

環濠は埋没期としてはⅢ期とⅣ期の2時期で検出した。しかし、掘削され機能した時期は、前者がⅡ期末、後者がⅣ期の早い時期ということになると考える。前者がⅡ期末というのは遺構区分の説明から言ってズレを生じることになるけれども、土器編年そのものに内在している限界が関与しているためである<sup>(2)</sup>。前者を「第1期の環濠」、後者を「第2期の環濠」と呼ぼう。

\*

**第1期の環濠** 基本濠2条(SD2・3、SD19・20)と不規則な断続濠<sup>(3)</sup>1条(SD01・21)の計3条からなる外郭を構成する。北縁ではさらに北の微低地との境界に段差が設けられて突出部を形成し、南縁でも方形周溝状の区画を1ヶ所検出している。

断続濠は、北部の例では突出部と基本濠の間に設定され、内側へ弧状にカーブする直前に外側へ少し膨らんで基本濠の間には若干のスペースを作り出し、逆に外側の突出部との間は狭くするというようなプランをなしている。外側の突出部の性格が、上部平坦部において特に遺構が検出できなかったこともあってはっきりしないうらみはあるけれども、基盤を削って斜面に強い傾斜をつけ比高を作り出していることを考慮すると、突出部は高さを確保する必要のある部分であった可能性が極めて高いのである。したがって、この突出部と対応した「かたち」で断続濠に変化が付けられていることと、基本濠と断続濠がそのまま連結されることなく「切れ目」あるいは「開口部」を作り出していることをあわせて考慮するなら、そこに外郭における通路の外への開放部を想定してもよからう<sup>(4)</sup>。

同様に、南部でも最も外側(南側)の断続濠の終わる部分に対応して方形周溝状の区画が設定されている。これも区画内部に遺構は未検出であるけれども、方形区画と組み合う「かたち」で断続濠の終

息部分があるということであり、ここも外郭における通路の開放部と考えて良からう。

これら第1の環濠の全体的な規模であるが、昭和61年度福田川関連調査で検出された2条の溝を基本濠に連続するものと仮定すれば、プランは第236図のようになり、外郭外縁で東西約450m、南北約330mを測る。そして面積は7万㎡程度となる。内郭だけでも6万㎡に及ぶ。ただ、単純面積は広いが、内容的に朝日遺跡の凝集度には劣る<sup>(5)</sup>。

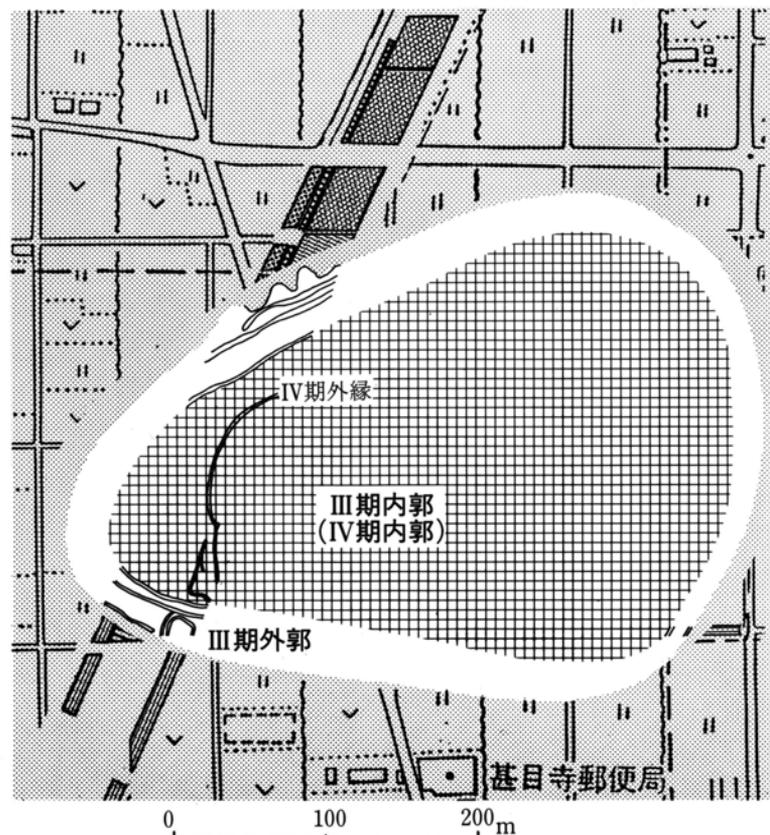
\*\*

**第2期の環濠** IV期に属すが、ほとんど環濠の西端部分をかすめたという感じで、全体については想像すらできない。

規模は「第1の環濠」よりかなり収縮している。明確な外郭の形成は行われず、「開口部」らしき所にスペースが設定されているだけである。

「開口部」は、SD07とSD17によって「L」字の点対称を変形させた形が構成され、SD07の曲折部にSD17の延長が来る位置で濠が途切れて形成されている。カギ穴(あるいは前方後円墳)の左半分を思わせるプランである。

SD17の直角三角形の突出部を「第1期の環濠」の突出部に共通するものであるとするならば、この部分も通路の外への開放部と推定できる。というより、こうした組み合わせが基本であるとしたほうがよいのかもしれない。



第236図 環濠推定復元図(1:5000)

## B. 土 器

### a. 前言

(1) 土器は、一つひとつ丹念に観察するならそれぞれに個性があり、二つと同じものはない（個体〔単独性〕としての非連続）。しかし、われわれはそうした差異を越えて似通った部分もそれぞれに認めている（一般性（斉一性）にもとづく〔単独性〕の〔特殊性〕への置換による連続的認識）。たとえば、「壺」がどういふものか聞かれれば即座に口のすぼまった一定の形の土器を思い浮かべそうしたものとして説明するし、「集めなさい」と言われれば特に困難もなく一群に纏めることもできる。同様に煮炊きに使う甕（鍋）も一定の形の土器を思い浮かべ一群に纏めることができる。

このことは、そうした区分が、個々の個体を比較しながら帰納的に到達したもの（経験的認識）であるというより、すでに知識としてわれわれが保持している情報（先入的認識（準拋枠））に照合されたものであることを示している。したがって、その知識の範囲では、煮炊きに使う道具でものを蓄えたりしたりすることに対して違和感を覚えるだけでなく、そもそもそうしたことは特別な場合を除き思い付かない。

このような、われわれの事物を区分する場合（連続性の認識と対になる不連続性の認識）における一定の傾向（慣習的態度）は、決して個人それぞれの自由裁量にあるのではなく、過去から伝統（集団規範）として受け継がれて世代ごとに刷り込まれてきており（学習による内面化）、ほとんど無意識レベルにさえ達している。そして、このことは、現代のわれわれの日常生活だけでなく、あらゆる領域において認められる。したがって、当然学問的領域においても存在すると言わねばならない。

(2) 外観が異なってもそれらを同じものとして括するという行為—分類のひとつの側面—は、基準の取り方によっては際限の無いものとなる。分類は、ただ分かつためにあるのではなくまとめることでもあるという点をも忘れてしまうならば、かえって無秩序となる。また、余りに機械的すぎると、それがいくら精緻で科学的であり客観的であるかのような印象を与えようとも何のために分類するのかという基本的立場が不明確ならば、これも無秩序と化す。分類は対象に一定の秩序を与えることであり、その役割はわれわれにあること、したがってわれわれの態度如何が大きく成否を左右することも十分考慮しなくてはならない。分類は第三者的にできるものではないし、するものでもない。

ところで、われわれの分類はあくまで現代的視点にもとづくものであり、過去の製作者や生活者の分類と同レベルの分類ではない。そこには根本的な断絶がある。その断絶をどの様に埋めるかが課題であるけれども、殊に文字の無い時代にあつてわれわれの把握し得るのは、〈かたち〉に含まれるさまざまな情報と〈使用状況の痕跡〉という限られた情報であり、接近もそうした限られた情報にもとづくものである。

(3) 土器の変化を考える場合考慮しなくてはならないのは、それが時間軸上で生起するだけでなく、〈特定の場所〉において生起するということである。したがって、土器の「様式」・「型式」もそうした〈特定の場所〉と切り離しては成立しない概念となる。そして、この場合の〈特定の場所〉とは、

便宜的に設定された概念的なものではなく、現象に深く関与する実態的な性質のものである。もちろん、単に〈特定の場所〉において生起するというのは空虚な言葉にすぎず、当然そこには荷担者の実在を考えねばならないけれども、多種・多様な関係の成立する〈場〉に対する認識は根本的である。

考古学的に〈場〉をどのように把握するかは、分布論にかかわる議論である。それはマイクロ・マクロを問わず平面座標上に位置を確定していくことである。その結果、有意な範囲が抽出できればそれが「様式」・「型式」を考える場合の出発点となるのであり、予め範囲が存在するわけではない。従来は、範囲を無批判に前提したために結果混乱を招いたのである。しかし、範囲について余りにそれを明瞭なものだと考えることも、ア・プリオリな範囲設定と同様の弊害を招く。その範囲を実線で描くことができるというような〈分布〉は恐らく現象面では有り得ないであろう。とくにそれが「土器様式」という複合体であればなおさらであるし、「土器型式」であっても属性が単独でなければ境界は振幅する。ただ、生産にのみ限定した議論がもし可能であるならば、あるいは明瞭な境界設定ができるかもしれないが。

(4) これまで『年報』で行ってきた分類(試案)はすべて廃案にし、改めて提出する。しかし、ここでの分類が最終ではない。分類は、目的ではなく手段であることを確認するなら、目的によって柔軟に行う必要がある。

しかし、分類には絶えず用語上の問題がついてまわる。概念の諸レベルと現象の諸レベルすべてが完全に一致するということがまず有り得ない個々の事実を一括に括ることの正統性を保証するはずの学術用語(総称語)には、実態に即していることより記載の便宜性の優先(現象の言語による切り取りと固定における言語=用語の優位性)や、用語自体の地域性、歴史性など負的要因が多い<sup>(6)</sup>。

#### ■方針

(1) 経済性；繁雑さの回避

(2) 境界の明確化；時間的区分は明確な時間差の抽出をめざす。形式分類は、変化の連続が設定できてから行う。連続のないものは、〈遊離種〉として別に扱う。

空間的(系統的)区分は系統間の相互作用を重視して中間型(折衷型)の設定を進める。無理な帰属決定は境界を実態から遠ざけることになる。

(3) 分類の単独性；一つの分類ですべての記載はしない。分類の総合は異なる次元である。

#### ■基礎的な用語

在来系……当該遺跡において中心的な部分、かつ時間的連続性がある。

外来系……当該遺跡において非中心的な部分、かつ時間的には不連続であったり、後出的であったりする。

固有……当該遺跡において中心的な性質。一器種・・・そうした性質を備えた器種。

参入……当該遺跡において非中心的な性質。一器種……そうした性質を備えた器種。

専有<sup>(7)</sup>…ある性質が空間的に限定される場合。非拡散的。

一化……ある性質が空間的に限定されていく過程。一器種…空間的に限定された性質を備えた器種。

共有……ある性質が空間的に均等に広がっている場合。拡散的。

一化……ある性質が空間的に均等に広がっていく過程。一器種……空間的に均等にひろがった性質を備えた器種。

## b. 時期区分および系統区分

### i. 系統区分

土器の系統区分においては、当然〈固有性〉の分布的偏差と、技術的連続性が指標となる。しかし、現在の資料集積は厳密な分布論が行えるほど進んでいないし、技術的連続性も分布的側面が不十分であれば断言するまでに至らない。

ここでは、便宜的ではあるが筆者がかつて行った区分を変更踏襲する<sup>(8)</sup>。対象はⅠ期からⅢ期までである。Ⅳ期はこうした区分の適用できる時期ではない。

\*

**A系統**……尾張平野南西部を中心圏域として、連続的に継起した一群。旧来の名称では、朝日式→貝田町式という推移をみせる。

**B系統**……いわゆる瓜郷式以降の連続をすべて含む。分布的には知多半島以東に重心がある。統条痕紋系土器と貝田町式系統の相互作用の下に成立した系統である。

**C系統**……統条痕紋系土器。現状では良好な資料に欠けるため未命名の一群。かつて『勝川』において「Ⅱ期B類」とした一群に相当する。二枚貝条痕（Ca）系と櫛条痕（Cb）系に区分でき、両者は分布差である可能性を残す。

**D系統**……伊勢湾地方では伝統的に認められる一群の系統。C系統ほど境界は明瞭でなく分布的にもA系統と重複するが、もっぱら伊勢湾西岸部に分布の重心があり、より西の地域と関係する。朝日式・貝田町式の枠を大きく取れば同一グループに含めることも可能<sup>(9)</sup>。

**W系統**……Ⅲ期になって突然出現する、中部瀬戸内地方に源流をもつ一群。経由地域の違いで付加された後発属性に相違がある。最も把握の難しい一群。

**X系統**……記載するに際して系統の同定できないもの。記載に必要なればとくに取り上げるのではない一群。

### ii. 土器の分類と時期区分

ここでは時期区分の基幹となる在来系土器（A系統）について分類し、時間的に配列する。分類呼称は、すべての土器に対して行くと、系統だけで少なくとも5つある現状では異状に多くなり複雑化するので、大枠としての系統区分のA～Wをそれぞれの項目で使用する。つまり、A系統の壺は「壺A」と呼ぶ。したがって細別でも、「太頸壺A」となり、更に区分する場合は「太頸壺Aa」という具合である。こうした方法で他の系統についても命名する。

#### (1)分類

##### ■器種

**太頸壺A** 全体のわかる例はほとんど無い。口縁部の分類を代替案とする<sup>(10)</sup>。

a 口唇部は面をもって二枚貝やハケメ工具による刻みが施される。多くは口縁部にヨコナデが施される。D系統の壺に手法的に近い。総じて口径は20cm以上である。

b 口唇部は面を持たないで丸く終わる。口径は20cm以下の例が多い。口縁部が水平にのび

## 1 弥生時代の遺構と遺物

るものを挟んで上方にあるものと下方にあるものに区分できるが今回はとくに命名しない。指摘だけしておく。

- c 口縁部がラッパ状に外反する無紋の粗製壺。

**細頸壺 A** 全体のわかる例は多いが、口縁部の形態に相違が目立つので、口縁部の区分を全体の分類に代替させる。

- a 口縁部は上方に立ち上がって受口状をなす。
- b 口縁部は緩く外反してそのままおわる。

**無頸壺 A** 細頸壺の成形第2段階で製作される。

**甕 A** 体部径が口縁部径より小さく倒鐘形をなすものと、体部径が口径を凌いで全体に丸い感じのものに大きく区分できる。しかし、両者は時期が下れば確かに後者が前者を圧倒するけれども初期には共存しているし、形態の変化自体極めて緩慢なので、もっと変化に敏感な部分を重視して区分した<sup>(11)</sup>。

- a 口縁部が強く外折して口唇部が丸くおわる朝日式の甕に類似したものを a1、口縁部の外反が弱く、口唇部も面をもち、どちらかと言えば深鉢形を呈するものを a2 とする。
- b 形態は a に近似するが、外面調整がハケメで異なるもの。口縁部上端の刻みが共通する。
- c 形態は a とは異なり後述の d に近いが外面調整に二枚貝が使用されている。
- d 形態は口径 > 体部径と口径 < 体部径の間でバラツキがあるけれども、全面ハケメ調整が施される。
- e 外観は c に近似するが、口縁部内面に二枚貝による圧痕を残す。
- f 形態は d に近似するが、口縁部を内外面から指でつまんだ後が顕著に残る。ハケメ調整。
- g 形態は口径 > 体部径である。口唇部に部分圧痕を施す。ハケメ調整

**台付甕 A** 脚台の付いた甕。

- a 外観は甕 Ad に近似する。
- b 外観は甕 Af に近似する。

**高杯 A** 破片が多く全体の形が分かるものは少ない。研磨されたものを精製、そうでないものを粗製とよぶ。

**鉢 A**

- a 甕の成形方法(第2段階)によって製作され無紋を基本とするもの。高さは13~15cm。粗製。
- b 細頸壺の成形方法(第1段階)によって成形される。研磨され沈線紋様の施されるものが典型。精製。
- c 高さ10cm以下の小形の鉢で成形方法は甕の第1段階によるものと壺とは異なる独自のものがある。紋様は施されない。

**大形鉢** 壺の成形方法(第2段階)によって製作され、甕に近似した口縁部をつける。

円窓付壺A 緩く外反する口縁部をもち、体部は無紋が基本である。焼成前に円孔を穿つものについて円窓付壺とする<sup>(12)</sup>。

## ■紋様

紋様は、太頸壺・細頸壺・無頸壺などの壺類においては共通する表現手法の採用がみられ、それぞれは時間的な変化も共通しているように見受けられる。ここでは、そうした共通性をみせる体部紋様を特に取り上げて説明する。

**櫛描紋** a 櫛描直線紋と付加沈線および研磨された磨消帯による横帯構成の交互配置を基礎紋様帯として、櫛描直線紋上に流水紋に関する複数の半円紋、縦位の波状紋や直線紋などが施されているもの。櫛描直線紋帯は3～4段。

b a類と基礎紋様帯は同じであるが、櫛描直線紋上に縦位弧線が施されるもの。縦位弧線に縦位直線の組み合わせられるものもある。紋様帯は幅が狭くなって櫛描直線紋帯が5段以上に多重化するものもある。細頸壺Aaでb類の場合は口縁部に直線紋が施される傾向があり、浮紋もほとんど棒状浮紋であり、円形浮紋の施される例はまず無い。

c 基礎紋様帯は櫛描紋b類の多重化したものに共通するが、段数は8～12と非常に多い。櫛描紋帯には粘土粒を浮紋として縦列に貼る例が多い。細頸壺Aaでc類の場合は口縁部に波状紋と円形浮紋が施される傾向がある。

d 基礎紋様帯は櫛描紋a類と同じで段数も少ないが、櫛描直線紋上への施紋が櫛ではなく沈線で行われる。直線や弧線がある。櫛描紋原体は、a・b・cとは異なる例が多い。上記紋様の内、b・cには沈線の欠落したものがあり、これを**b'類・c'類**と呼ぶ。

e 基礎紋様帯はb'類に共通するが、縦位弧線は連続して一気描きとなる。磨消帯欠落をe'類とする。

f 基礎紋様帯はc'類に共通するが多重化はc'類に比べ著しい。縦位弧線は連続して一気描きとなり、磨消帯は磨消線になる。

**磨消ハケメ帯** 櫛描紋が施されること無く付加沈線と研磨による磨消線が施されるため、本来櫛描直線紋の施されていた部分にハケメがそのまま残っている紋様。「磨消刷毛目帯」「磨消刷毛目紋帯」とも呼ばれる。

**磨消線紋** 暗紋風に施される。多くは直線である。

**指頭圧痕紋** 口縁部を上下から指でつまんでその圧痕を顕著に残す手法。もともと口縁部を指で刻む手法は存在したが、その場合は口唇部下端を刻むのみで、内面に圧痕を残すことはなかった。この手法は壺・甕ともに認められる。

**部分圧痕数** 口唇部の円周何分割かの位置に圧痕を複数まとめて施す手法。圧痕数は3～10程度まである。

**単独圧痕紋** 口唇部の円周何分割かの位置に圧痕を一ずつ単独で施す手法。指頭や棒で施す場合が多い。壺・甕ともに施される。ちなみに、D系統ではハケメ工具で横に動かしながら施すた

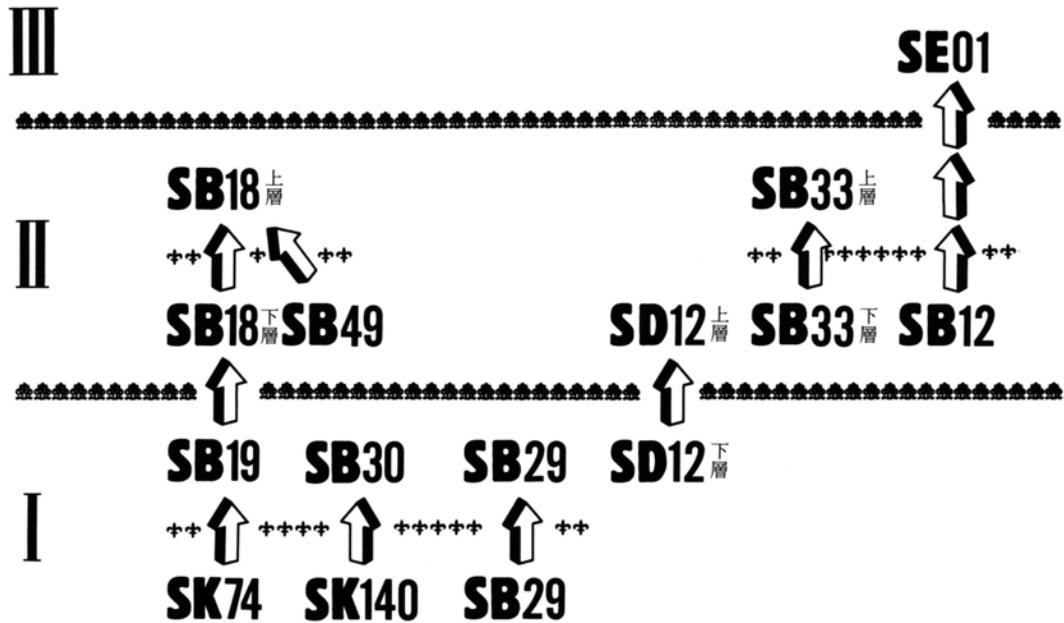
1 弥生時代の遺構と遺物

め木の葉形になるものがある。

(2) 時期区分

■ 遺構の重複関係について

遺構の重複関係は後述のように決して多くない。しかし、それでも一応変化の傾向は追うことができる。



第4表 遺構の重複関係

■ 組列の検討一壺

上記の重複関係に対応する要素を抽出すると次のようになる。

I 期

- S K 74 両者に共通するものとして、25と194、26と199があるが、これは同一個体のように混入
- S B 19 したものと考えられる。したがって、この2つを除くと、細頸壺Aaの櫛描紋はb類=b類とa類/c類という関係になる。SK74には太頸壺Abで二枚貝直線紋の施された195があるが、混入であるのかこの時期に存在するのかははっきりしない。17(細頸壺Ab)の櫛描紋b類は直線紋帯3段で縦位直線であり古い様相といえる。
- S K 140 出土土器に偏りがあるため直接比較はできない。
- S B 30
- S B 29 上層・下層に分かれるうち、直接比較する材料には欠けるが櫛描紋で比較するなら、下層の41はb類だが櫛描紋様は3段でしかも縦位は直線であり、古い様相を示す。上層は櫛描紋b類は存在するが櫛描紋帯はかなり多重化しているし、c類も存在する。同じくb類・c類が出土したSB19では櫛描紋b類の多重化は認められない。  
 櫛描紋はc類・b類多重/b類古相という対応関係になる。

ここで櫛描紋**b**類と同**c**類の関係について見ると、先にSK140との比較ができなかったSB30では**b**類多重が出土している。SB49では**b**類多重と**c**類が出土している。SB56でも**b**類多重と**c**類が出土している。**a**類と**b**類との関係では、SK181で両者が出土している。

これらのことから、いちおう主紋様としての櫛描紋の系列を、**a**類→**b**類→**b**類多重・**c**類という順序で整理しておく、なお、**b**'類や**c**'類に関しては、**b**'類が若干存在するものの**c**'類は皆無である。

## II期

**S B 18** 上層は小破片が多量に出土した廃棄群であったが、654以下のような磨消ハケメ帯の施された細頸壺Aaが出土し、下層には櫛描紋**e**類の細頸壺Aaが出土している。残念ながら比較するには至らない。

**S B 33** 下層では無頸壺に櫛描紋**e**類と**f**類が確認できる。上層及び覆土中には磨消線紋が存在する。果たして両者は共存するのかもしれないのか。

**S B 12** 櫛描紋**e**類・**f**類、それと沈線と磨消線の併用紋もみられる。しかし磨消線紋は出土していない。

**S B 61** 磨消線紋と櫛描紋**e'**類が出土している。

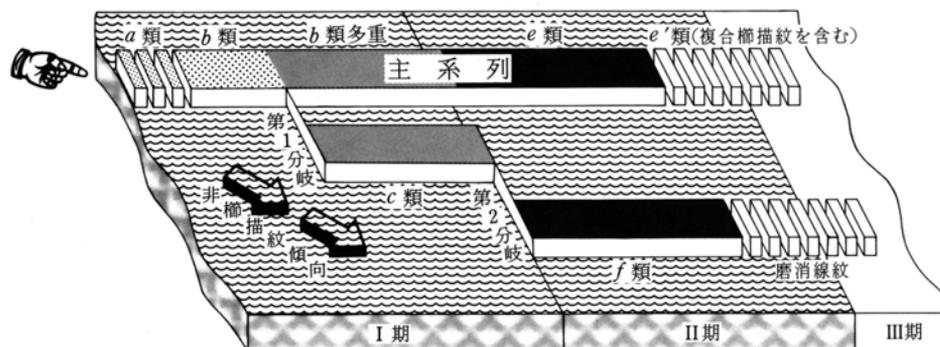
**S B 67** 磨消線紋と磨消ハケメ帯が出土している。

**S B 71** 櫛描紋**e**類・**f**類が出土している。

**S D 09** 櫛描紋**e**類、**e'**類、**f**類、磨消線紋が出土している。ほかでは一緒に出土していないので、この一群に関しては混在のようである。

以上のことから、櫛描紋**e**類・**f**類については共存すると見て良いであろう。磨消線紋と櫛描紋**e'**類については、III期に属す例の存在、櫛描紋**e**類・**f**類に共存しない点、形式的に新しい点などから後出すると考えられる。つまり、櫛描紋**e**類・**f**類→磨消線紋・櫛描紋**e'**類という順序が想定できる。そしてその終末はIII期にかかるということになる。

以上をまとめると、櫛描紋を中心とした紋様系列は下図のようになる。



第237図 櫛描紋様の変化系列

## ■組列の検討—壺以外

甕の組列は、大別段階での変化であり、大別内での細かな変化はAaを除き現状で検討できる程に資料の集積は進んでいない。それ以外の器種も資料的に十分ではないので、今回は詳細について検討できない。鉢などは、とくに精製の場合は細かい変化が追えそうであるが、今回は見送ることにした。

iii. 各期の概要

■ I 期

細別については、細頸壺Aの櫛描紋が第5表のような共伴度数の比較によって、*a* 類 = *b* 類、*b* 類 = *c* 類、*a* 類 ≠ *c* 類という関係を読み取ることができる。口唇部刻みも条痕紋系土器からの系譜関係からいって本来は *a* 類に相関すると思われるので、これらを I-1 期・I-2 期細別の一つの指標とした。甕では Aa→Ab への変化の系列(後述)とその出現頻度差<sup>(13)</sup>を指標とした。

○ I-1 期の問題点

(1) I-1 期の細別は、今回の資料では心ならずも可能性の提示にとどまった。I-1a 期として提示できたのは、二枚貝施紋の太頸壺、櫛描紋 *a* 類、甕 Aa1 など、断片的な資料であって、组成的に明確にすることはできなかった。しかし、他のいくつかの遺跡においては良好な資料が得られているので、今後近いうちに整備できると考えている<sup>(14)</sup>。

(2) 太頸壺Aの頸部櫛描紋には2種類ある。すなわち、櫛I種 *a* 類の整った直線からなる櫛描紋と櫛II種 *b* 類による上下に揺れた単位の短い櫛描紋(228, 340)である。後者はまさにかつて中村友博氏がいった「デカダンス」に相当する<sup>(15)</sup>。こうした断続的櫛描紋は細頸壺Aにもまま認められる(485)。手法的にB系統土器(瓜郷式)の櫛描紋と共通しており、単に技術の習熟度<sup>(16)</sup>だけでなく、一定の手法(参入手法)の存在として認めることができるかもしれない。

(3) 太頸壺は紋様の違いから、大きく櫛描紋系、二枚貝刺突紋系、縄紋系、篋櫛併用紋系(D系統)<sup>(17)</sup>、そして無紋傾向の1群に区分できる。そして、細頸壺もほぼ同様の区分が可能である。もちろん、各系列が同等の頻度で出現するわけではないにしても、このことはそれぞれの表現手法が独立した地位<sup>(18)</sup>を保っていることを示しているのではないか。

(4) 細頸壺Aaには、体部調整に二枚貝を使用したものがある(189, 263)。ほとんどは最終調整の研磨で消されてしまうが、部分的に残った例が幾つかある事は、他にもまだ存在することを示唆する。これまでのところ朝日式では確認していないが、仮にA系統に限定されるなら、二枚貝調整を主とする統条痕紋系土器-Ca系統ラインとの交差が細頸壺 Aaを成立させたという想定を裏付ける一つの資料となる。

(5) これまで細頸壺には黒色仕上げの多いことが指摘されてきたが、今回の資料を通観する限りでは、黒色仕上げは最終ではなくその後に赤彩されることがはっきりした。そして、赤彩も円を基調とする図形に描かれているようである。黒漆地に赤漆の彩色といった関係と類似している。

(6) 甕は4系列あるけれども、Ad系列の斉一性が乏しい。形態は、SK74で典型的にみるように、口縁径>体部径、口縁径≧体部径、口縁径<体部径、などさまざまであり一定の傾向をうかがうことはできない。甕Dともからんで、拡散的である。

有孔土器はいずれも甕底部の焼成後穿孔であり、器種として定着していない。

	a 類	b 類	c 類	d 類	口唇部刻み	
SK74	□	③		◇		I-1 期
SK181	□	①				
SK185	□			◇	●	
SK297	□	①				
SB17		①	△	◇		I-2 期
SB19	□	③	△			
SB30		⑤	△			
SB56		②	△			

第5表 櫛描紋種類別共存関係

(7) 高杯や鉢は、基本的に精製と粗製に2分される。高杯では、研磨を施すものとそうでないもの、鉢は成形技法との関係で細頸壺の第1段階(Ab)が精製、甕の第1段階(Ac)が粗製となる。精製の高杯には細頸壺Aaの口頸部を倒立させて脚台部とするものがあり、デザインとしての優性が注目される。精製の鉢は、沈線紋構成による細密な紋様を施す例が中心でしかも黒色研磨仕上げなので、系譜的にはC系統に係わる参入器種ではないかと考える<sup>(19)</sup>。

#### ○I-2期の問題点

(1) 細頸壺Aa(櫛描紋*c*類)の出現と甕Abの卓越を指標とはするけれども、それ以外の器種についての情報が不足しており、今後の資料集積が望まれる。

#### ■II期

(1) 太頸壺は全体の把握できる資料がほとんどないため、内容把握に限界がある。口縁部の特徴では、口縁部外周に指頭圧痕を残す例が目立つ。これは甕にもあるので、この時期を特徴づける共通の表徴としてとらえた。また、部分圧痕を円周4分割の位置に施す例もあり、これなども紋様としてとらえた。体部施紋は基本的に細頸壺と共通する。

口縁部内面に瘤状突起を貼り付けるD系統壺は、この時期には完全に浸透してA系統の一部を構成する器種となる。口唇部は上下端を刻んでおりD系統とは異なるのでわかる。

(2) 細頸壺はAaのみとなる。紋様は大きく3つの系列に分かれる。櫛描紋*b*類は、多段化はI-2期とそれほどかわらないが、縦位の弧線が連続して一気描きの縦位波状紋となり、磨消帯も付加沈線が欠落して形骸化し*e*類に移行する。櫛描紋*c*類はさらに多重化・細密化を極め、磨消帯も磨消線となり、*f*類に変化する。そして、II-2期には口頸部以外の櫛描紋は縦位波状紋以外脱落して磨消線が主紋様(磨消線系列)になる。あとは体部の紋様要素が順次脱落する方向で変化する。II-2b期には体部への粘土紐(粒)貼付紋も基本的に消滅する。これら2系列は付加沈線の欠落を特徴とするけれども、新たに付加沈線はそのままだが櫛描紋の欠落した従来「磨消刷毛目帯」と呼ばれた紋様が出現する。これはII期を通して変化が余りないようである。

細頸壺の黒色仕上げは櫛描紋*f*類までで、その他の系列にはみられなくなる。

細頸壺はI-2期の分化傾向に拍車をかけ、櫛描紋*f*類に至っては加速度的に変化して差異の連続(モード)となる。それに対し、櫛描紋*e*類は櫛描紋系としてそれほどの目に付くような変化は見せず持続的(規範的)である。両者の相違は何に起因するのであろうか。

(3) 甕はAc系がII-1期に残存するほかは、Af系が特徴的に展開する。Ad系はそのまま存続する。

台付甕AはII期の中で成立する可能性は高いけれども、確信の持てる資料は無い。いずれにしても、III期に最も接近した微妙な時間的位置にあるのだろう。

口縁部に部分圧痕紋を施す甕AgはII-2期には存在するが、II-1期にまで溯るかは不明。

(4) 大形鉢は、I期からの連続は資料が不足しており明確でない。おそらく、B系統からの逆参入であろう。鉢Acは甕の成形第1段階から製作されるものと、独自に製作されるものとに分化する。ただし、この兆しはすでにI-2期にある。

有孔鉢は1例確認している。しかし、甕底部の焼成後穿孔例も並存する。

### ■ III期

この時期以降A系統は衰退・消滅するので、A系統に代わり主体化するW系統についての説明も行う。

#### ○ III-1期の問題点

**A系統** 太頸壺は全体のわかる資料に欠けるが、重要な特徴としては口縁部のヨコナデが回転運動を伴うような「速度」を感じさせる手法(回転ヨコナデ)になる。細頸壺は口縁部に回転ヨコナデが施されるほか、II-2b期の磨消線紋系は紋様要素の脱落が更に進行し、縦位波状紋と縦位刺突紋は同一個体では施されなくなり分化する。体部調整は粗雑化が進む。また、形態の変化も顕著である。球形化する例が目立つ。紋様では、コンパス山形紋が特徴的に出現する。そして同じ施紋動作であるコンパス波状紋も盛行する。出現時期の限られる指標的な紋様である。

甕は台付甕がほとんどを占める。脚部は、端部がヨコナデされないために接地面が内側へはみだしたり、底部成形時に挿入した粘土が反対側(天井部側)にはみ出してへソ状の突起を作ったり、天井部の仕上げが不十分でユビオサエ痕を顕著に残したりなど、定形化には至っていない。口縁部はハケメ工具刻みを施す例と指頭圧痕紋系の2者がある。

底部焼成前穿孔の有孔鉢Aはこの時期に定着する。形態も甕形から脱却して独自の形態をもつようになり、II期例とは異なる。大形鉢はII期から続く。

**W系統** 太頸壺には単純口縁(Wa)と受口状口縁(Wb・Wc)がある。頸部にはハケメ工具で刻みを施した幅広の偏平な突帯がめぐる。

細頸壺は袋状口縁(Wa)と受口状口縁(Wb)がある。WbはA系統細頸壺と形態的に接近する。Waは伊勢湾東岸部に分布の中心がある器種である<sup>(20)</sup>。

円窓付壺はW系統にも現れる。

甕は平底か内彎状の上げ底がほとんどであるが、なかには底面にハケメを施す例がある。外面調整は体部の上半にハケメ工具による直線紋(連続ヨコハケメ)を施す例が比較的多い。

外面調整法は、確認できる手法の組み合わせから大きくa・bの2種に区分できる。

a1: (ハケメ→) タタキ→タテハケメ

a2: (ハケメ→) タタキ→タテハケメ→連続ヨコハケメ

a3: タテハケメ→タタキ

a4: タテハケメ→タタキ→連続ヨコハケメ

b: (タタキ→) タテハケメ→連続ヨコハケメ

また、a・bの調整法を基本として紋様要素を付加するものがあり、大きくc・dの2種がある。

c: ハケメ工具などにより体部上位に列点を加える

d: ハケメ工具などにより体部上位に波状紋を加える

しかし、時期的な問題に関しては、a・bがIII-1期に始まることはほぼ確定的だが、c・dについてはIII-2期以降の存在は確実としてもIII-1期に始まるかどうかは不確定である。

内面調整は下から3分の2ぐらいの高さまでケズリが施される。外面のタタキは消されていたり、もともと施されていなかったりもするが、内面のケズリはほぼ100パーセント施されるので、小破片で

も識別できる。

#### ○Ⅲ－２期の問題点

**A系統** 太頸壺・細頸壺は存在が断片的となるだけでなく、多くがW系統の影響を強く受ける。甕は台付甕が多少は残存するようだ。

**W系統** 基本的組成はⅢ－１期を継承する。太頸壺は頸部施紋の刻み突帯が頸部への連続圧痕に移行する。

甕は台付甕Waおよび移行型W(A)が出現し、定形化に向かう。平底甕は比率が低下する。体部外面にハケメ工具で波状紋や刺突紋などを施紋する例が増加する。

#### ○Ⅲ－３期の問題点

**A系統** 皆無となる。すべてW系統に吸収・変換される。

**W系統** 壺はⅢ－２期を継承する。甕はほとんど台付甕Wbとなり、定型化を達成する。結果、すべてがW系統になるけれども、W系統そのものもⅢ－１期に比べれば変化している。これは、W系統が一方向的に強固な境界を設定して優勢さを保つのではなく、台付甕の変遷に典型的にみられるようにA系統との相互的な変換によって成分の組み替えがおこなわれたからである。

#### ■Ⅳ期

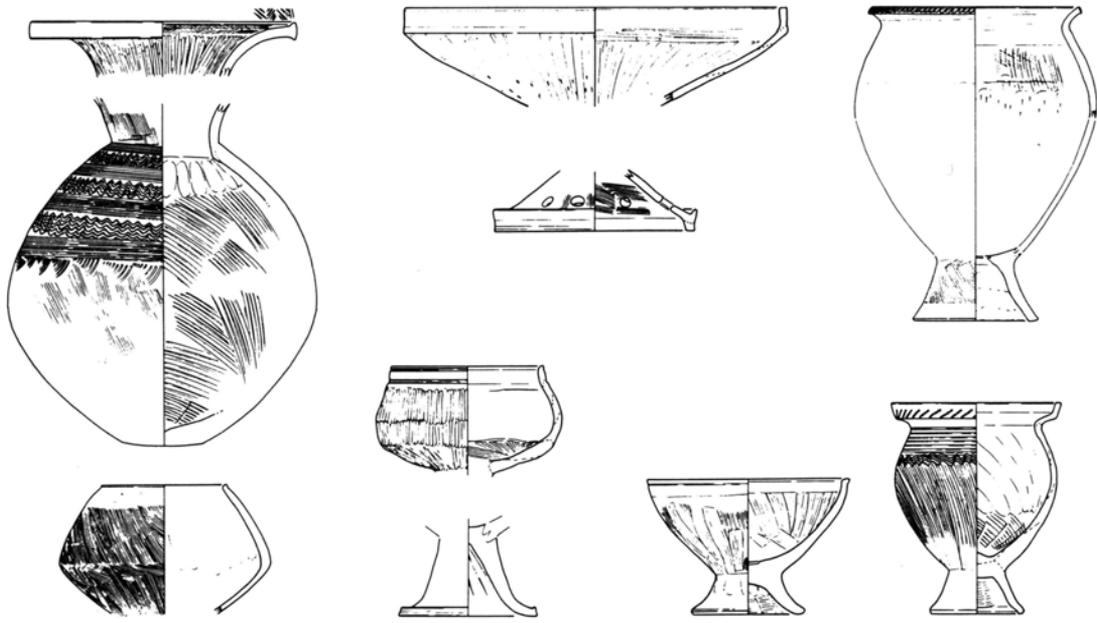
資料的には決して十分ではないが、細分の可能性について指摘しておきたい。

第238図はⅣ期のなかでも古い様相を示す一群、第239図はⅣ期のなかでも新しい様相を示す一群である。後者は従来「山中期」と呼ばれた時期に相当する時期の土器である。問題となるのは第238図の型式学的な帰属である。

ここでⅣ期の古相として提示した資料は一括出土ではなく、溝出土資料などを恣意的に集めたものである。したがって、年代的そして「様式」としてに確実に1単位を構成するというわけではない。ただ、従来「山中期」と呼ばれた一群に比べて明らかに先行する特徴を有するという点を重視した結果、つまり引き算の結果である。

今後、「見晴台式」の検討も含めて、当該期の具体的様相の把握に努めたいと考えている。

1 弥生時代の遺構と遺物



第238図 IV期古相



第239図 IV期新相

C. 土器の変化—A系統を中心に

i 細頸壺口縁部について

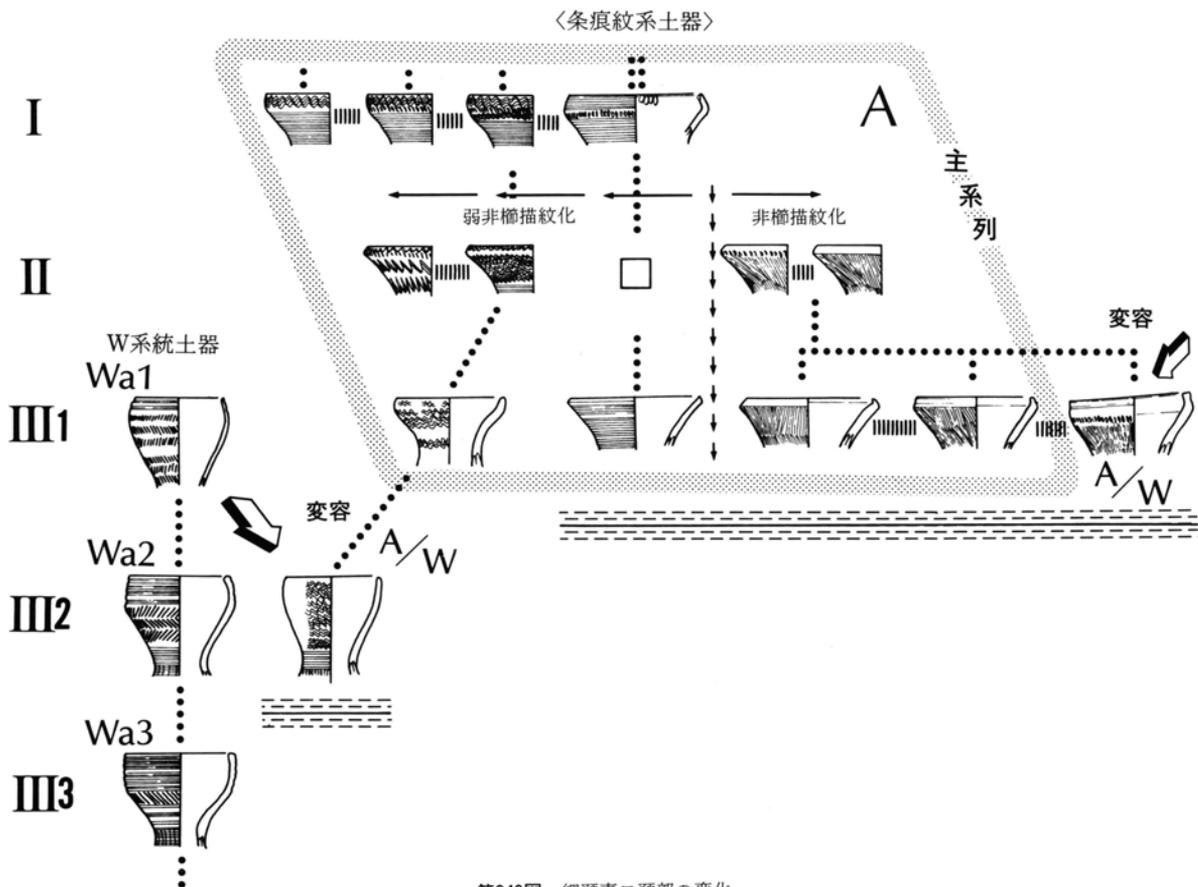
細頸壺Aaは、口縁部が垂直あるいは内傾して立ち上がり受口状をなすことに特徴の根本がある。口縁部内面の部分圧痕、口唇部の刻み、屈曲部外面の刻み、棒状浮紋など、いずれも〈条痕紋系土器〉にたどることのできる要素ばかりである。(それだけでなく、体部紋様に散見する最大径部の刻み突帯直上に施される斜格子沈線紋、黒色仕上げなども、手法的には〈条痕紋系土器〉の精製土器の表現手法に関係するものである)。

口縁部外面は、こうしたことから当初から紋様帯として形成されたと考えることができる。

I期は直線紋と波状紋という限られた紋様要素ではあるが、構成には変化がある。しかし、II期になると、体部紋様の変化にも対応して櫛描紋系と非櫛描紋系に分化する。櫛描紋系は直線紋の比率が極端に低下し、波状紋の盛行と施紋部分の拡大が進行するけれども、構成上の変化には乏しい。II期後半以降は体部施紋の櫛描紋も衰退するから、口頸部のみはそうした傾向に反して櫛描紋を固守しているといえよう。

III期には無紋系の口縁部に回転ヨコナデが盛行して、薄手の口縁部が厚みを増して「受口」という形状そのものに明確さが欠けるようになる。その極限にはW系統との折衷型が存在する。

櫛描紋系も回転ヨコナデによって口縁部櫛描紋が脱落して無紋化するとともに、「受口」形態が拡散して細頸壺Abに接近するものが出現する。つまりW系統の影響による規範の喪失傾向がうかがえる。



第240図 細頸壺口頸部の変化

## ii. 細頸壺体部について

**形態** 体部の形態はおそらく I 期の初めころにそれまで比較的高い位置にあった最大径部が下にさがって以降は、それほど大きな変化を見せない。基本的にはほとんど変わらないといったほうがよい。形態の変化を促す要因が成形に関わる技術的分野にはないからであろう。

\*

**調整** 内面調整は I 期には爪圧痕を残している例が目立ったが、II 期にはほとんど見られなくなる。外面調整は、I 期は体部中央の上下界付近、最下部、底部に研磨が施されているのが普通であった。しかし、II 期になると底部と体部最下部に研磨が施されなくなり、底部には木葉痕をそのまま残すようになる。

\*\*

**施紋** ここでは櫛描紋を中心に施紋手法の変化と紋様の変化を概観する。

I 期の櫛描紋は、例えば *b* 類を取り上げると、第241図のような4工程で施紋されている。

第1工程：櫛描紋帯を施す。

第2工程：縦位弧線を加える。

第3工程：櫛描紋帯の上下端に沈線を加える（付加沈線）。櫛描紋帯が上下に揺れている場合には、沈線が櫛描紋に重複して施されることがある。

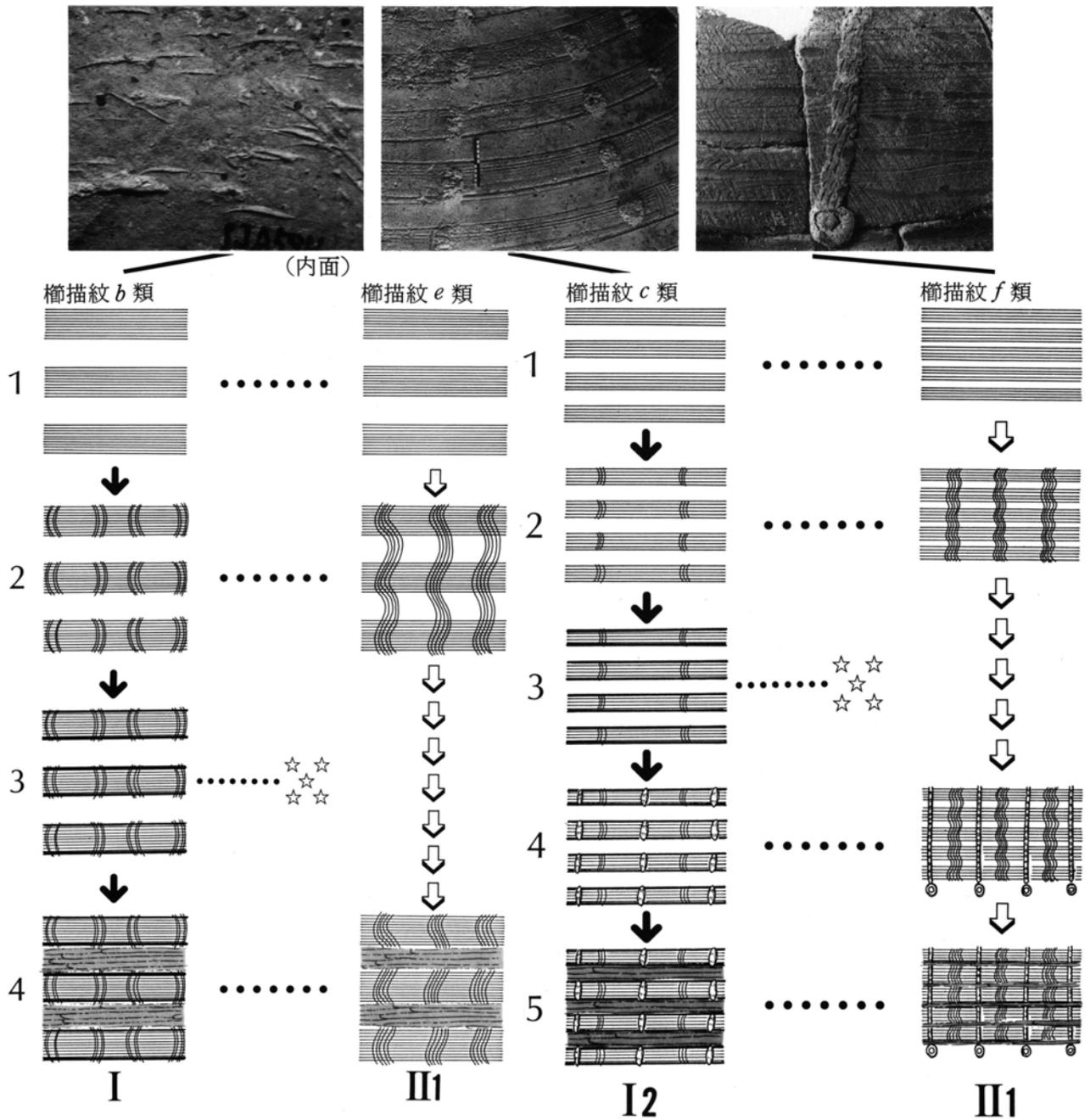
第4工程：沈線間を研磨する。研磨はときどき沈線をつぶすことがある。

櫛描紋 *c* 類はこれに浮紋貼り付け工程を加えただけである。

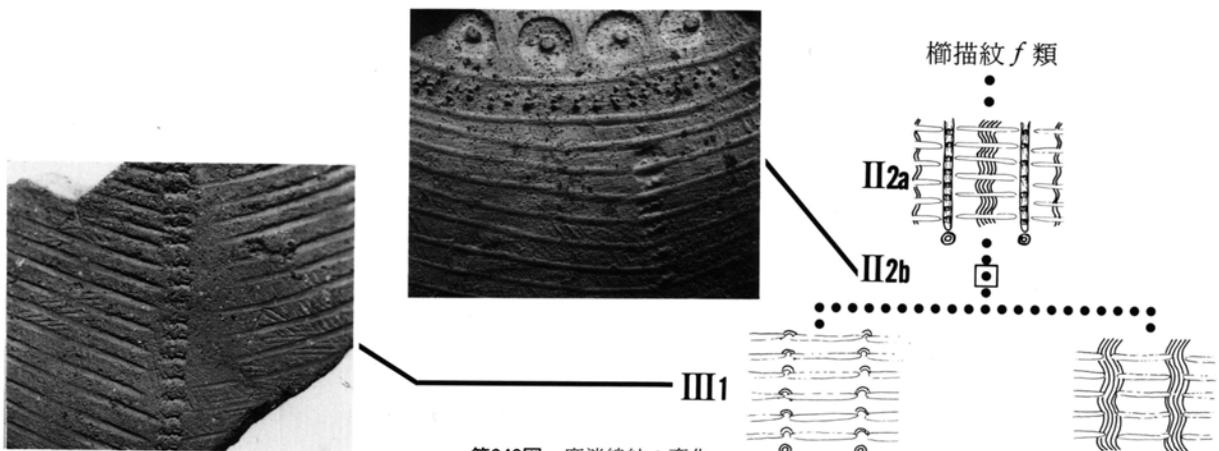
しかし、それがII期になると第3工程が省略され3工程で施される櫛描紋 *e* としたものになる。櫛描紋 *f* 類も I 期には5工程で施されるのが、II期には第3工程が省略され4工程で施される櫛描紋 *f* になる。どちらも、第2工程の施紋が、各櫛描紋帯で施紋動作が完結していた縦位弧線から各櫛描紋帯を縦断する一気描き施紋動作の縦位波状紋に替わっており、第2工程・第3工程での変化が施紋上の大きな変化となっている。しかし、結果としての紋様構成、すなわちみかけ上の紋様構成を変えない範囲での省略が行われたとするなら、付加沈線は当然施されるものであるから、それが脱落するというのは、紋様構成の維持に対する圧力もそれほど強いものではなかったといえる。

この結果櫛描紋 *f* 類系列においては、それまで縦位分割が紋様構成的には付加的であったのがII期以降は第242図のように櫛描紋帯の脱落とともに体部施紋を非櫛描紋化したことによって、施紋順序では最初に施されるようになり、器面の分割という性格を強めていく。そして、III期には、もともと紋様を構成する要素であった縦位波状紋や縦位刺突紋がそれぞれ単独で縦位分割線として使用されるようになる。この時期に至って、磨消線は確実に縦位分割されるようになる。磨消線に消されるはずの縦位波状紋や縦位刺突紋がもはや消されなくなってしまったのである。

上述のように、櫛描紋 *f* 類は非櫛描紋化するが、櫛描紋は *e* 類において継承され、磨消帯の脱落はあるもののIII期まで存続する。しかし、頻度的に従属的な位置にあることは否めない。その意味で、III期におけるW系統壺の櫛描紋盛行は、在来系であるA系統の変化の方向とは逆の方向なのであり、参入要素として区別する必要があるのである。



第241図 櫛描紋の施紋順序と変化



第242図 磨消線紋の変化

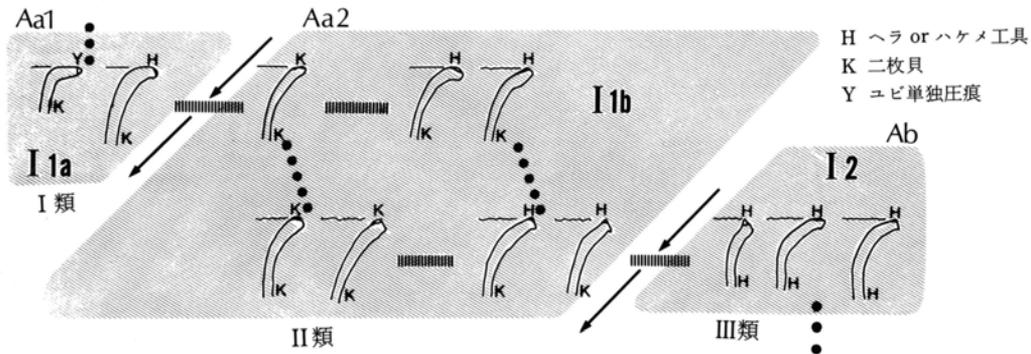
iii. いわゆる朝日形甕<sup>(21)</sup>について

かつて「朝日形甕」とよんだ甕 Aa(典型はAa1)は I 期をもって消滅するけれども、衰微の兆しは I - 2 期に認められる。おそらく I - 1b 期までが盛行期であろう。

第243図は甕 Aa1→甕 Aa2→甕 Ab という基礎的な流れを、さらに口唇部の刻み手法差や体部の外面調整の手法差によって区分したものである。

甕 Aa1 は、口縁部が逆 L 字状に強く外折し、口唇部を丸くするのが特徴である。そして単独圧痕か刻みを口唇部に対して直交して施す。これが、甕 Aa2 になると口縁部の外反は全体に緩くなり、それとともに口唇部の刻みは上端に施されるようになる。また丸く仕上げられていた口唇部も面を作るようになる。これは口唇部にハケメが施されることを要因とする。

このような甕 Aa1 から甕 Aa2 への変化は、それ固有の変化の方向によるのではなく、他系統との相互関係が影響を与えている。つまり、阿弥陀寺遺跡において様式を構成する要素が単に出現頻度の増減として独立的に並存するのではなく、要素の吸収・変換が行われ質的に変化しているのである。



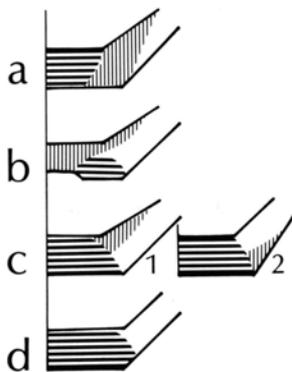
第243図 朝日形甕の変化

iv. 底部について

底部成形は壺・甕をとわず一括して分析する。

底部成形法には第244図のような a ~ d の 4 種類がある。

a は出発点となる粘土塊を円盤状に成形してその周りに粘土紐を付加して積み上げを開始する。粘土紐でリングを作って中を充填することも考えられるけれども、ドーナツ底をなす例が少ないので前者を取りたい。I 期 A 系統細頸壺に多い。底部内面の窪みが特徴的である。III 期 W 系統甕底部もこの手法のようである。I 期 B 系統でも認められる。



第244図 底部成形技法

b は粘土紐でリングを作り中を充填する。ドーナツ底をなす例が多い。ただし、底面が研磨されるとわからない。I 期 C 系統壺の一部にある。II 期 A 系統細頸壺・甕に現れる。

c は粘土盤の外周に粘土紐を積み上げる例で、継ぎ足しの粘土を内側に行うものを C1、外側に行うものを C2 とした。I 期 A 系統甕に特徴的である。

d は粘土盤の外周上縁に粘土紐を積み上げる例で、継ぎ足しはあっても少ないので底部の感じは薄手である。D 系統甕と C 系統深鉢(櫛条痕系: Cb) に伝統的に採用される。

v. 台付甕の変遷過程について<sup>(22)</sup>

台付甕がII-2b期あるいはIII-1期において出現することはすでに述べた。ここでは、台付甕の脚台に焦点を据え、その変化の過程と背景について述べる。

\*

**甕の使用法** 平底甕は弥生前期以来の基本形である。しかし、それがそのまま炉床に据え置かれて使用されたかどうかについては、そうとばかりは言えないようである。もちろん、使用状況そのままの出土状態を示す例があれば確実なのであるが、現状ではススの付着状況を観察することによってしか把握できない。

ところで、ススの付着状況がそのまま使用状況を示すかと言えば、それもまた推測に頼らざるを得ないのであるから、使用法の把握はまだ結論の得る段階には至っていない。したがって、台付甕脚台の成立については、盤状土製品や脚状土製品の展開と相関はあろうけれども、直接的な因果関係の有無については、今後の検討に委ねたい。ここでは、脚台の形式的な側面について、とくに系統区分との関わりで考えてみたい。

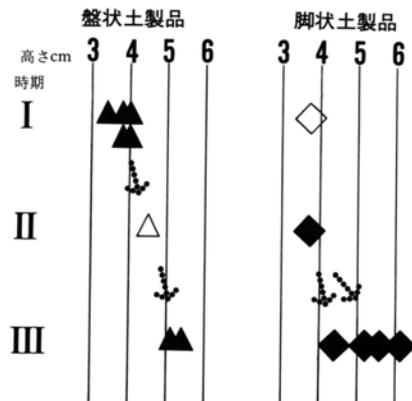
\*\*

**台付甕の変遷** 台付甕はまずA系統に出現し、それがB系統、W系統に波及するとともに、出発点であったA系統の台付甕が消滅するという推移をたどる。

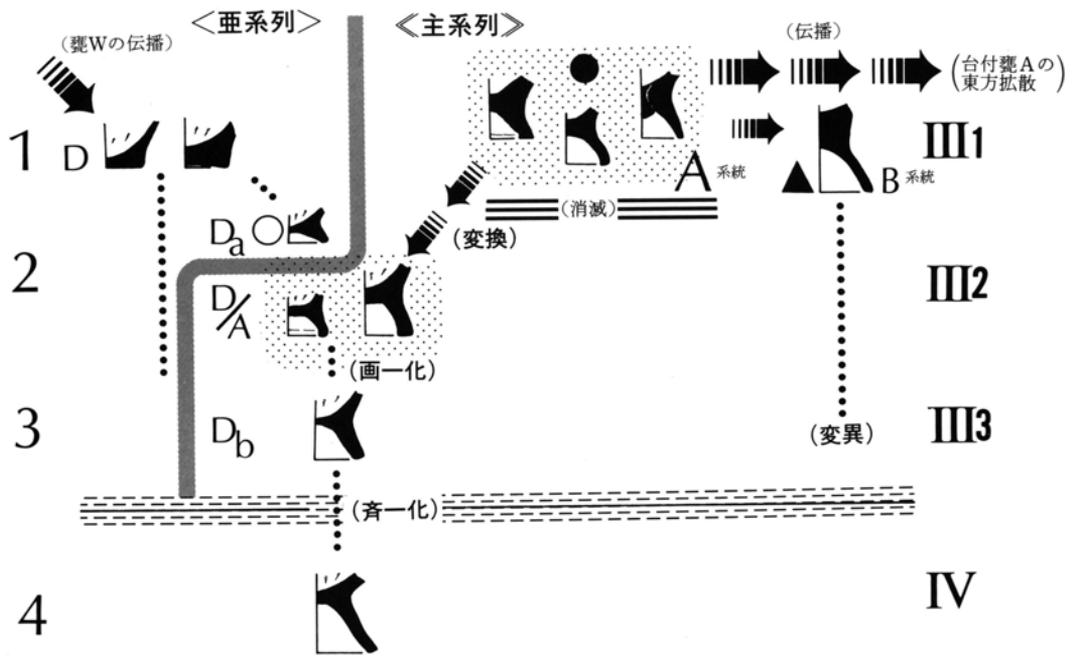
A系統の台付甕は、脚台の成形法は充填であり、そのため脚台内面天井部にヘソ状の突起を作るものがある。また、脚台の厚さは薄かったり厚かったり、立ち上がりも直線的であったり内彎気味であったり、そして接地面の仕上げが十分でなく内側に粘土のはみだすものがあるというように、バラツキが大きい。このことは、脚台の成形法がまだ安定したものではなく、画一化していないことを示す。実際類型化は難しいのである。

III-2期になって出現するW系統の台付甕には、脚台部が高台状で低いもの(Wa)<sup>(23)</sup>の他に、脚台の立ち上がりが内彎したり、接地面の内側に粘土がはみだしたり、天井部にヘソ状の突起があったりというようなA系統の特徴を共有する注目すべき一群がある。後者はA系統に極めて近似しているだけでなく、おそらくこの時期にA系統が消滅すること、W系統がA系統の分布圏に重複していることを考慮するなら、III-1期台付甕AがW系統に転移(変換)を始めたものと推測する。つまり、移行型W(A)の形成を見るのである。これに対して、台付甕Bはその初期にA系統からの影響を受けようとも、形態的にA系統との近似度が低いだけでなく分布圏が異なるので、A系統とW系統のような移行型を介在しての直接的関係は想定できない。参入要素として台付甕という形態と使用方法の伝播があったとしても、土器製作の情報はストレートには受け入れられていない。伝統的な土器情報を根本的に変えることのない変化である。したがって、こうしたことは台付甕一般の共有化ではあっても、下位レベルでは専有化である<sup>(24)</sup>。

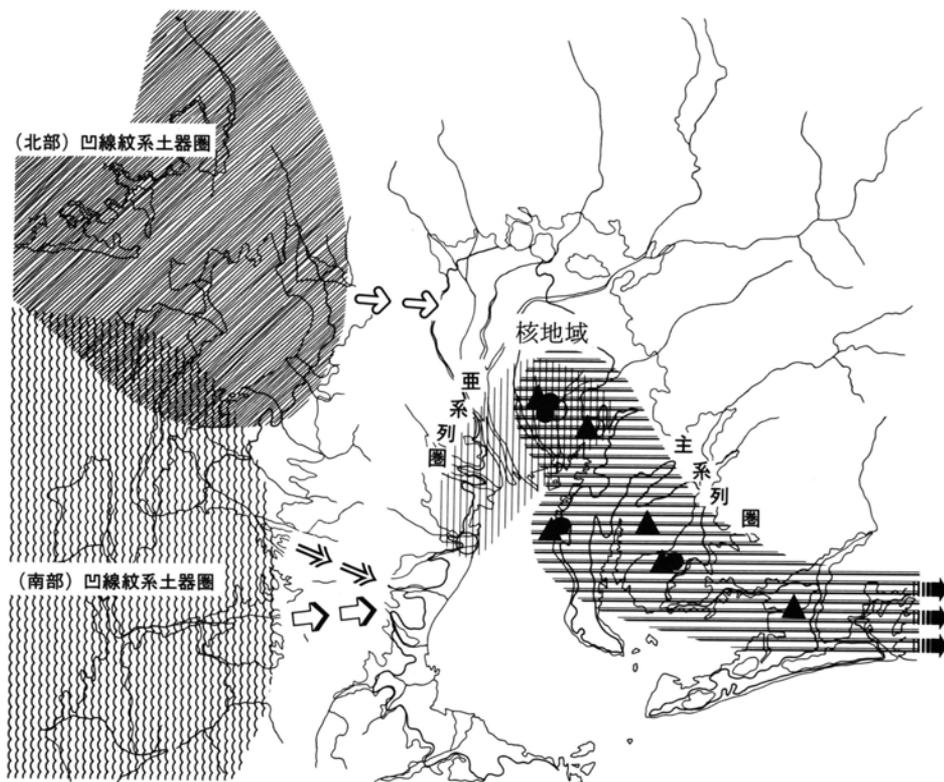
III-3期は、バラツキのあった台付甕W(A)から画一化の進んだ台付甕Wbへの移行が完了する。



第245図 盤状・脚状土製品の器高変化



第246図 台付甕脚台の変遷過程



第247図 III期台付甕に関わる各圏域

分布圏も三河地方に拡大して共有化し、共有器種となるだけでなく、W系統も様式的に共有化のレベルを高める。

このような台付甕の変遷は、 $A \rightarrow W(A) \rightarrow Wb$ が主系列をなし、亜系列としての $Wa$ は $W(A)$ と時間的に並行する。そして分布的には両系列圏の交わる尾張地方南西部が核地域となる。

## vi. 壺の紋様

### ■「櫛描紋（複数の条線からなる平行線を同時に施す紋様）」の原体について

伊勢湾地方の「櫛描紋」は、「朝日式」の終末あるいは「貝田町式」の始まりを出発点とする。しかし、畿内地方の回転台を用いる櫛描紋は、A系統において基本的に主体となることはない。朝日式は原体が貝殻（だから擬似櫛描紋）であり、「貝田町式」も櫛描紋のみからなる紋様は少ないからである。こうした状況で、櫛描紋についてそのみを取り出し畿内地方と比較することに有効性はなかろう。やはり、伊勢湾地方は「伊勢湾地方」として、独自に検討を加える。

\*

伊勢湾地方の「櫛描紋」は原体の違いによって2種類に大別できる。

**貝殻描紋** 二枚貝腹縁の外側か内側を器面に接触させて施紋する。内側を器面に当てれば静止痕が波形の弧状に残る。円弧の開いたほうが原体の進行方向である。外側を接触させたものは、静止痕が不明瞭である。破片では櫛描紋との区別が難しい場合もある。ほとんどが時計回り。

**櫛描紋** 1単位の条線が全く同じ動きをして規格的なもの-I種と、各条線が不揃でやや柔軟なものの-II種とがある。

I種には条線の細いもの-a類と太いもの-b類、II種にも同様の区分が可能である。ただし、細いもの-a類のなかには、条線が非常に細い、深く鋭く切り込んだような「ささら状」と表現されるものがある。これはその特徴が極めて明瞭なのでA類（I種A類またはII種A類）とする。

I種とII種の間間的なものとして「複合櫛描紋<sup>(25)</sup>」と呼ばれているものがある。1単位の条線がみかけ状複数の単位に分かれているものであるが、多数条の少単位（多くは2単位）-a類と少数条（2条から3条が多い）の多単位-b類に大きく区分できる。これをIII種とする。

\*\*

貝殻描紋は「朝日式」からの系譜をたどることのできるものであるが、I-1a期に若干見られるのみである。阿弥陀寺遺跡ではI-1a期についての資料が僅少なので、貝殻描紋の在り方について詳しくは触れ得ない。Ca系統土器（統条痕紋系土器）の貝殻描紋はI期に限定される。おそらく、I-1b期までであろう。

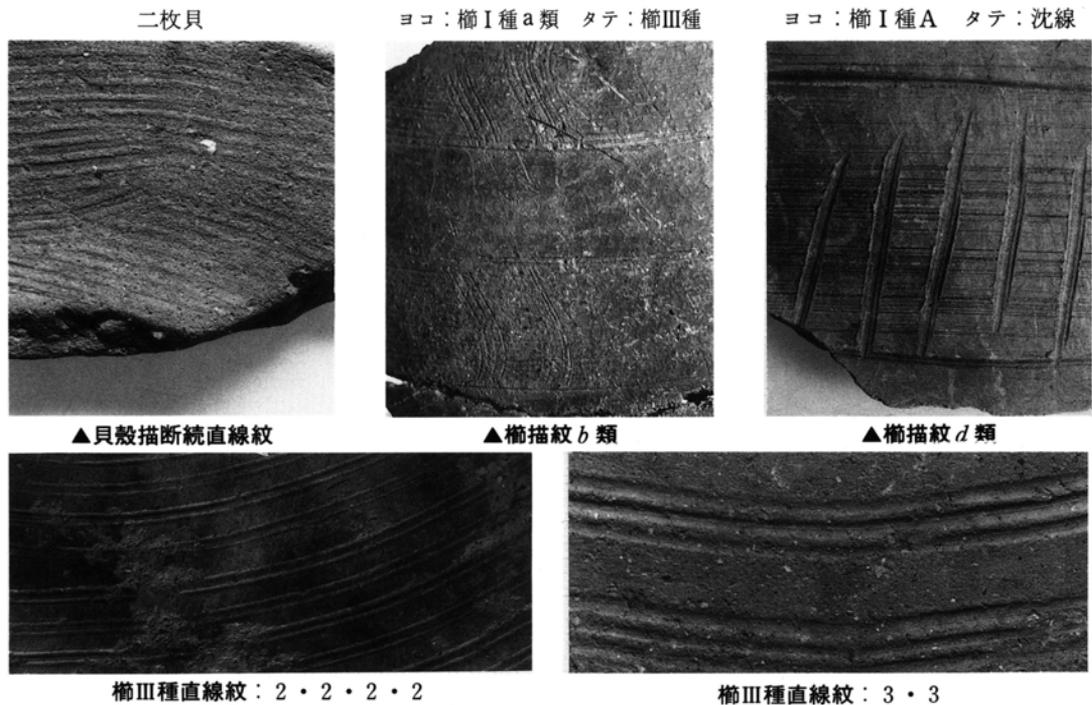
櫛描紋は、I種がIV期まで続く。II種はA類を除いてI期で終わる。II種b類はそのなかでさらに細い太いという相対的な区分ができるけれども、概して太いものは尾張南西部以外の地域との系統的關係を有する。B系統土器（いわゆる瓜郷式）の櫛描紋はII種b類であるし、美濃地方も同様である。これは、II種の成立が〈条痕紋系土器〉を基盤として、Cb系統土器（統条痕紋系土器）に主として採用されていることによる。

II種A類は、系譜的にはB系統土器（瓜郷式土器）にたどることができる。I期では「貝田町式」の周

辺的施紋に採用され、III期では知多半島から三河地方にかけて分布する土器群（獅子懸ー下長山類型）に限定して見られる極めて特徴的な存在である。

III種は、a類がA系統土器においてII-2期に出現するようであるが、まだ確定するには至らない。III-1期にはb類がW系統土器に出現し両者は系統差において並存するが、III-2期になると基本的にb類に限定されるようになる。阿弥陀寺遺跡では確認できなかったけれども、当地方ではIV期にも残存する。ところで、b類は畿内地方との関係は明らかで、規格的な手法からみても明らかに参入要素である。しかし、それに対しa類が当地域で独立に成立したのかどうかは、今後の検討を必要とする。とくにその従属的な存在様態は、外的な影響による成立を少なからず示唆しており、年代的位置の確定も含めて課題である。ただ、注意すべきは、I期A系統土器において櫛描紋の縦位区画紋（直線や弧線）にはあきらかに櫛III種b類が採用されていることである。縦位区画紋の原体から横位主紋様帯の原体へと転換がなされたとしたなら、西方とは別系としてII期の早い段階にIII種の出現する可能性は残っている。

■紋様の互換性



第248図 櫛描紋原体

**壺の頸部紋様** 阿弥陀寺I期に属す太頸壺の頸部紋様は、無紋を除いて櫛描紋・縄紋・沈線紋の三種がある。相互の境界は、櫛描紋と沈線紋、縄紋と沈線紋で若干重なるけれども、体部紋様を加えると縄紋と櫛描紋は明瞭に区分できる。沈線紋は完形となる資料が得られてないため全体の紋様組成が完全に把握できるわけではないが、おそらく沈線紋のみか篋櫛併用紋であろう。

これら3種に無紋を加えた4種の関係は、後述する体部紋様と同様に同一範疇の表現的差異と考えられる。というのも、これら4種の差異は器形的差異とはなっておらず、あくまで同一器形における

紋様差なのである。しかも器形は貝田町式固有のものであるから、縄紋についても異系統紋様の借用以上の意味はないと考えられる。

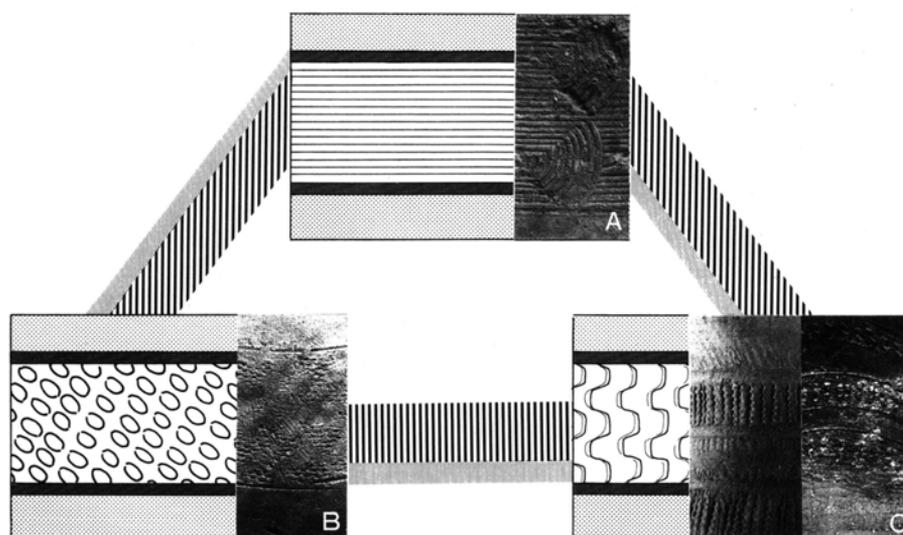
上記4種の紋様は、II期には縄紋が欠落し3種となる。体部紋様も境界が弛緩して頸部紋様との相関は低下する。しかし、頸部に限定すれば基本的な紋様系列として相互に重複すること無く並存するし、区分は明瞭である。ゆえに、互換性はあると考える。

\*

**壺の体部紋様** 阿弥陀寺I期に属す施紋手法のうちA系統(貝田町式)に特徴的なものに、付加沈線磨消手法がある。一見したところは沈線によって紋様単位が区画されているようであるが、実際の施紋順序は沈線が後である。すなわち、櫛描紋を横帯状に何段か施した後、それぞれの櫛描紋帯の上下に沈線を加えてあいだを磨き消す(A手法)のであって、あらかじめ沈線で区画しているのではない。同様の手法は瓜郷式にも見られる。阿弥陀寺遺跡ではこれに加えて縄紋(B手法)・二枚貝貝刺突紋(C手法)を紋様単位とするものがあり、表現上の違いはあっても紋様構成は横帯構成として同じ範疇で括ることができる。つまり、付加沈線磨消手法によってこの3種の施紋の互換性が保証されていると言うことができる。

この付加沈線磨消手法は、もともとは櫛描紋手法の一種として成立し、その後に紋様手法の相互影響のもとに上述のようにまず3種紋様要素の互換性が生じた。これらはあくまで頸部から体部上半部にかけて横帯状に施されるものとして完結していたが、周辺領域との相互影響のなかで変形して拡大し、縄紋や二枚貝貝刺突紋の場合に限って体部中央から下部にかけて連弧状あるいは振幅の大きな波状の単位を施すものが周辺領域(C系統)に成立した。これらが信州から関東にかけて特徴的な「続条痕紋系土器」の紋様構成と関連することは明らかであるけれども、分布は現状で伊勢湾地方に限定されているので、「貝田町式」の影響範囲の拡大として理解できよう。

しかし、阿弥陀寺II期には付加沈線磨消手法は無紋化していわゆる「磨消ハケメ手法」のみとなる。



第249図 紋様要素の互換性

d. 土器の変化—外来系を中心に

i. C系統土器とその周辺について

C系統は条痕紋手法の違いからCa系：二枚貝条痕系とCb系：櫛条痕系に区分できる。しかし、土器のセットでは、二枚貝条痕系には壺と深鉢の組み合わせが成立しているのに対し、櫛条痕系深鉢には櫛条痕系壺の組成が見られない<sup>(26)</sup>。両者のそうした相違に注目するなら、二枚貝条痕系と櫛条痕系は下位レベルにおいて「使用」は別にして技術的には独立した2つの系統に区分するほうが、より実態に即したものと見える。

\*

**Ca系統** 壺の紋様の特徴は、口唇部の刻み、口縁部外面の無紋、頸部中央の隆起とそこへの沈線紋、頸部境界様紋としての複合鋸歯紋、体部の二枚貝条痕と連環状弧紋である。深鉢は、口唇部と口縁部内面の二枚貝条痕である。色調は灰色系で、胎土には角張った砂礫が含まれている。成形時におけるハケメ工具の使用はI-1期には認められない。この時期に限ってはCb系統と軌を一にしている。しかしI-2期になるとハケメ調整が表面化する。

II期以降、Ca系統はその存在が不明瞭になる。A系統に収斂されるのであろう。

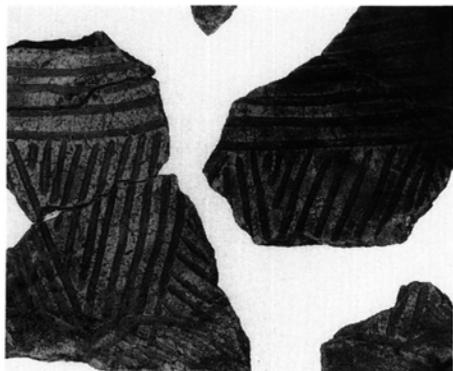
\*\*

**Cb系統** 深鉢はCa系統と色調が異なり茶褐色系である。荒々しい条痕のタッチが非常に特徴的である。口縁部内面には櫛刺突紋が施される。底部には必ず布目圧痕を残す。

口縁部内面の櫛刺突紋。I-1期は、施紋部が口縁部上端寄りに圧縮されていることに関係して原体の傾きが大きく、施紋動作も押し引き状である。I-2期以降は口縁部に対して直交位置に点列として施されるようになる。

Cb系統深鉢はII期以降も連続する。ハケメ調整も最後まで採用されない。ほとんど変化を見せない中で、わずかに口縁部内面の刺突紋に上述したような時期的な差が現れる。

とくに指摘しておきたいのは、阿弥陀寺遺跡での類例が少なく地域差にも関わる要素であるけれども、内面の刺突紋が羽状や山形状に施される例は古く、刺突紋に波状紋が組み合う例は新しい様相を示すものである。



複合鋸歯紋



連環状弧紋(沈線付加) 地紋は二枚貝条痕

第250図 Ca系統壺紋様の特徴

\*\*\*

**付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺** C系統をCa系統とCb系統に区分するとき問題になるのは、付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺の帰属である。本例は体部上半に付加沈線二枚貝刺突による連弧紋が研磨手法と組み合わせて施され、体部下半には櫛条痕が施されている。帰属系統に関しては、分布的には尾張地方に限定されるからB系統は関係ない。また、付加沈線と研磨による磨消帯の形成はA系統の紋様手法と共通するものの、意匠が異なる。とすればC系統しか残らない。体部下半の条痕は二枚貝ではないので、Cb系に接近したものということになるが。

ところで、二枚貝刺突紋と紋様・調整手法的の近接した壺を探すと、土器220のような爪形紋の施された壺を挙げることができる。個別表現は異なるものの、原体の動きは「刺突紋」という用語は別にして押し引き状の例もあり共通しているし、紋様構成上も頸部の横帯、体部の連弧紋そして研磨、さらに体部下半の櫛条痕と、同一部位の要素間で交換可能である。したがって、本例は土器220系統との関係を考慮しなくてはならない。

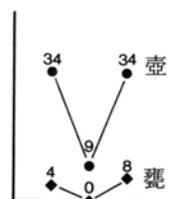
土器220類似例の出土している至近の遺跡は岐阜県美濃加茂市牧野小山遺跡<sup>(27)</sup>である。同遺跡では、Ca系統土器が深鉢の出土はないものの、壺が出土している。深鉢の主体はCb系のもので、それに対応してか、壺にはCa系統と異なる条痕系櫛描紋とでも言える一群が存在する。また、A系統細頸壺も目立つ。つまり、阿弥陀寺遺跡の系統構成との比較では、B・D両系統の欠落はあるが、それ以外のA・C両系統が並存しているのである。そして牧野小山遺跡の土器群から引き算して残るのが深鉢Cb、土器220類似壺、条痕系櫛描紋壺である。このことは、深鉢Cbに組成するのがこの2つの壺であることを示す。すなわち、付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺は祖型がCb系統分布圏内であって、それが二枚貝の使用に示されるようにCa系統への傾斜のなかで成立したのである。だから、単純にCb系統と断定するわけにいかない。

このように、付加沈線二枚貝刺突連弧紋壺はCa・Cb両系統の並存する尾張南西部において成立した、裏返せばA系統分布圏に最も接近して成立したのである。そのことは、付加沈線磨消帯手法の採用に示されている。

さて、土器220の系統はいずれにあるか。現状では、阿島式・嶺田式という天竜川流域に分布する一群に求めるのが妥当である。

## ii. B系統土器について

阿弥陀寺遺跡で出土するB系統土器は、全体的な傾向として第6表のように壺が多く甕は少ない。



第6表 B系統土器  
時期別出土点数

**I期** 壺は太頸壺が多く、細頸壺は2点確認したのみである。太頸壺は口縁部形態が受口状口縁をなす例と単純口縁をなす例の二者があり、出土点数は後者が圧倒的に多い。

紋様的には、231が頸部の隆起が顕著でそこに斜位の沈線紋を施していることから〈統条痕紋系土器〉への傾斜が強いと言えるくらいであって、多くはより櫛描紋系土器への傾斜を強めている。三河地方などB系統土器分布圏では〈統条痕紋系土器〉と櫛描紋系土器との間を埋めるバリエーションが豊富であ

り、このことと比較するなら、阿弥陀寺遺跡での〈櫛描紋系土器〉への傾斜はA系統土器との関係にあるのかもしれない。

B系統壺のうち〈櫛描紋系土器〉に傾斜したグループを特徴づけるのは、単純口縁太頸壺では口唇部の櫛描紋と単独圧痕（多くは指頭による）、口縁部外面の幅の広い凹線状のハネアゲ紋、頸部の付加沈線磨消手法と櫛描紋の組み合わせ（これがA系統土器との共通項になる）、体部上位の沈線連弧紋、体部の櫛条痕である。

甕は、A系統甕（Aa）に近似した特徴を有するグループと口縁部内面・口唇部に櫛描紋（多くは波状紋または連弧紋）を施すグループに分れる。そしてどちらにも共通する特徴としては、体部の調整が二枚貝によらず櫛で行われること、調整痕の傾きがA系統では左上がりなのに対しB系統では右上がりに施されることが指摘できる。つまり、A系統／B系統＝二枚貝／櫛＝左上がり／右上がりという2項の反転関係<sup>(28)</sup>としてA系統甕とB系統甕の関係を見ることができるのである。

II期 付加沈線磨消手法の研磨の脱落による形骸化と、櫛描紋施紋部の縮小が認められる。付加沈線磨消手法の形骸化はA系統土器でもパターンは異なるが見られるので、I期からの弛緩が並行的に進行すると言える。

III期 紋様構成的には3類に区分できる。1類：もっぱら櫛描紋からなり、連弧紋などをまじえるが基本的には横帯構成をとるもの、2類：沈線紋と櫛描紋の組み合わせで、紋様部上半は横帯構成、下半は懸垂紋の配置を主な意匠とする縦型構成をとるもの、3類：沈線紋を基本として、横帯構成の斜格子紋を施すもの、である。この三者はIII-1期から並行し、頻度差については出土点数が少ないので有意な相違は認められない。

甕はいずれも台付甕である。口縁部の形態は非常に特徴的で平坦画をもって強く外折し、口唇部には板でD字刻みが施される。体部はナデ仕上げされる。脚台は底部が厚く台付鉢のようである。同じ台付甕でありながらも、独自性が表出されている。

iii. D系統土器について

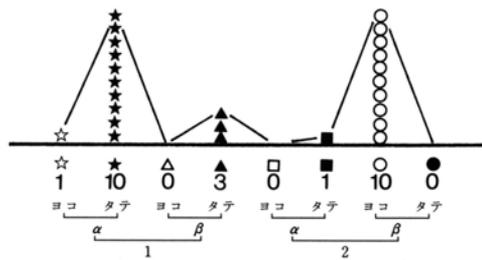
D系統に含めたものは甕がほとんどであるけれども、これまで近江系土器として問題にされてきた土器も含んでいる。したがって、内容をさらに区分する必要がある。

そこで甕については、口縁部内面に波状紋を施す単純口縁甕と波状口縁甕の二つをDwとして、それ以外の有段波状口縁甕と体部上半にハケメ工具の直線紋（連続ヨコハケメ）を施すもの、口唇部にハケメ

工具で大きな圧痕を施すものをDaとして区分する。

壺は現在までのところ良好な資料は出土していない。予測でしかない。

I期Da系統 壺は口縁部をヨコナデした後、口縁部内面に瘤状突起を付け、口唇部にハケメ工具で直交する刻みを施すのが特徴である。頸部は多条沈線を施す。体部は不明。



第7表 甕 Da 分類別度数分布

甕。頸部は 1：く字状をなすものと 2：緩く外反するもの、口唇部は  $\alpha$ ：単純に終わるものと  $\beta$ ：下方に垂下して拡張されるもの、体部上半は連続ヨコハケメを施すもの—ヨコとタテハケメのみのもの—タテ、がある。以上が個体でどのように組み合っているかを調べると、それぞれの点数は

$$\begin{array}{cccc} 1\alphaヨコ-1 & 1\alphaタテ-10 & 1\betaヨコ-0 & 1\betaタテ-1 \\ 2\alphaヨコ-0 & 2\alphaタテ-1 & 2\betaヨコ-10 & 2\betaタテ-0 \end{array}$$

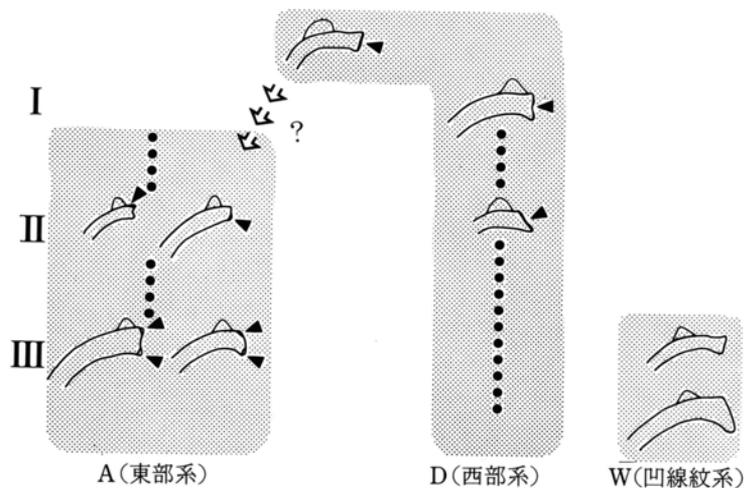
となる。

つまり、 $1\alphaタテ$ と $2\betaヨコ$ は類型として安定しているのであり、さらに口唇部への大きな圧痕が前者に強く相関することも両者の独立性を保証する。そこで前者を甕Da- $\alpha$ 、後者を甕Da- $\beta$ と呼ぶ。そして、有段波状口縁甕が有段部を削除すれば甕Wa- $\beta$ に一致することは、有段波状口縁甕の系譜関係を明瞭に示していると言える。ところで、この両者の系統的帰属であるけれども、分布圏でいえば尾張南西部はその東端に位置し、西は近江地方南部・山城地方にまで及ぶきわめて広域な分布圏を形成しているので<sup>(29)</sup>、地域を限定するかたちでの特定は困難である。型式学的に類似する「大和形甕」のサブグループとして位置づけておくのが穏当であろう<sup>(30)</sup>。

II期 II期になると、壺は637・727のようにA系統に収斂される。口唇部の上下端を別に刻む手法であり、直交して一度に刻むD系統とは異なる。D系統としては出土していない。

甕はDa- $\alpha$ が消滅し、Da- $\beta$ 系列に限定される。しかし、すべてが非A系統として分離できるわけではなく、体部上半の連続ヨコハケメが647・4649・761のように断続的に施されるものもあり、壺と同様に収斂された部分を考えたほうがよいかもしれない。

III期 III期も甕Da- $\beta$ 系列は存続する。別のところで「弱加飾単純口縁甕」と呼んだものに相当する。これ自体識別に困難はないが、問題は同様の手法が採用されているW系統甕の評価である。W系統甕はすべて内面ケズリであり、内面ケズリの分布圏からはずれる伊勢湾西岸部での成立は可能性が低い。余地があるのは、尾張南西部と近江地方北部である。壺は1点(1460)出土している。



第251図 D系統（瘤状突起付太頸）壺の変化

vi. W系統土器について

■組成

**太頸壺Wa** 口縁部は緩く外反し、口唇部は若干垂下して拡張され、櫛描紋や圧痕紋の施されることを特徴とする。いわゆる凹線紋を施す例は少ない。頸部は、ハケメ工具刻みを施した幅広で扁平な突帯を施す例と、直接ハケメ工具圧痕を施す例がある。時期差と考えている。口縁部内面には扇形紋やハケメ工具による羽状圧痕紋を施す。

**Wb** 口縁部は上方に立ち上がって受口状をなす。外面は凹線紋が施される。頸部はハケメ工具刻みを施した幅広の扁平な突帯を施す例と、直接ハケメ工具圧痕を施す例がある。Waと同様時期差と考えている。簾状紋の施されることはまず無い。

**Wc** 上記二つに比べて小形である。短い頸部に受け口状口縁が付く。口縁部外面は凹線紋が施される。頸部には簾状紋が必ず1段めぐり。体部形態はソロバン形が基本。

**Wd** 口縁部が袋状をなし、頸部には断面三角形突帯がめぐり。大形の器種である。口縁部外面は紋様帯として凹線紋・ハケメ工具羽状圧痕紋・直線紋などが施される。

**細頸壺Wa** 口縁部は太頸壺Wdと近似するが頸部は長い。口縁部外面には凹線紋、ハケメ工具あるいは櫛によって直線紋・圧痕紋・羽状押し引き紋が何段も施される。最初は凹線紋も少条で形態も口径>口頸部高でイチジク形を呈するが、新しくなると口径 $\geq$ 口頸部高となって上下に詰まってくる。そしてこれに対応して凹線紋下の紋様がハケメ工具圧痕紋のみとなる。また頸部には簾状紋が施されるようになる。

体部形態はソロバン形が基本。体部下半の外面調整は、ケズリ→ハケメまたは板ナデである。研磨する例もあるが、これはおそらく地域差に関係する。紋様は櫛描紋が主で、櫛III種も多い。構成は直線紋と波状紋の反復か直線紋帯の最下段に波状紋を1帯めぐらす2つの場合が主である。

**Wb** 口縁部は太頸壺Wbに近似するが頸部は細い。口縁部に凹線紋を施す以外基本的に無紋でハケメ調整のみである。タタキ痕を残すものがある。A系統細頸壺(変容:926)の変換かもしれない。

**短頸壺** く字状に外反する口縁部をもち頸部直下には紐孔を穿つ。口唇部は回転ヨコナデでおわるものと凹線紋を施すものがある。

**円窓付壺** A系統からの変換である。口縁部は緩く外反するものと水差し形土器のような直口のものとがある。体部はソロバン玉状を呈する。基本的に無紋。

**甕 平底** 強く外折する口縁部をもち、体部は最大径部が上部3分の1ぐらいいあって、底部からの立ち上がりは内彎気味をなす。外面調整はタタキと粗いハケメの組み合わせで変化がある。ハケメ工具の圧痕紋や直線紋、波状紋を加える例もある。内面は下半3分の2にケズリが施される。底部は平坦なものや内彎して上げ底のものがある。ケズリやハケメを施す例もあるが、多くはナデで消されている。

**脚台付** ケズリ込んで高台状にしたWa、A系統との折衷型であるW(A)、完全にW系統として定着したWbがある。組列はW(A)→Wbとなり、Waは除外される。

口縁部から体部の形状は平底と大差ない。紋様との相関は平底と異なるようであるが確証は無い。

**受口状口縁** 底部の形態は分からないが、口縁部が小さく受口状をなす例がいくつか出土している。体部外面には連続ヨコハケメを施す。

**高杯 Wa** 杯部の形態は太頸壺Wb口縁部に近似する。外面には凹線紋が施される。

**Wb** 水平環状口縁と内面の突帯に特徴づけられる。口唇部には凹線紋や波状紋が施される。脚部は連続成形で円盤充填が行われる。調整は外面をけずる例が見られるのに対し、内面をけずる例は少ない。また脚部上位や裾端部への凹線紋はほとんど無い。

**Wc** 小形の鉢状の杯部をもつ。口縁部外面に凹線紋、その下にハケメ工具の羽状圧痕紋や押し引き紋を施す。

以上が主要器種である。他には、取手の付いたコップ状土器や、各種の鉢がある。

#### ■紋様

**櫛描紋** 直線紋、波状紋、簾状紋、扇形紋、縦形流水紋などがある。施紋方向は右まわりで、回転運動を利用しての施紋が特徴的である。原体は櫛Ⅲ種が多い。

**凹線紋** 沈線を施した後回転ヨコナデを加えて仕上げる。少数ではあるが、沈線を施さない凹線紋もある。

太頸壺口縁部の凹線紋の場合は、櫛で縦位に何箇所か切られる。

**突帯紋** 幅広の扁平なハケメ工具刻みを加えた突帯、断面三角形突帯、甕の頸部に付加した粘土紐に指頭圧痕を加えた指頭圧痕紋突帯などがある。このうち、時期差に関わるのは最初の例だけである。

**圧痕紋** ハケメ工具、櫛、管状工具、指などで施される。

**瘤状突起** 口縁部内面に多数配置する。

#### ■調整

**タタキ** 筋溝が細くわりと平板的なもの、筋溝の幅と筋間の幅が同じぐらいで凹凸が顕著なもの、とがある。ほとんどの器種に観察できる。

**ケズリ** 壺は体部外面下半、甕は内面下半、高杯は杯部や脚部外面に観察できる。

**研磨** 壺は体部外面下半、高杯は杯部や脚部外面に観察できる。壺の場合、横方向は伊勢湾西岸部系である。

\*

#### ■W系統土器の性質

Ⅲ期を特徴づけるW系統土器の波及に際して、「近江系土器」が完全に同調しないことは、両者の関係が決して緊密ではないことを示している。ということは、「近江系土器」自体は彼の地における〈在来系土器〉としてW系統土器とは別の〈層〉に存在するのであり、伊勢湾周辺地方と同じ状況にあることになる。すなわち、分布上一見表層的な〈外来系土器〉としてのW系統土器と、それに対する基層的な〈在来系土器〉としての「近江系土器」でありまた「伊勢湾系土器」である、という図式が成立するのである。そして、W系統土器は単に表層的であるにとどまらず、広域的な機動性を示して基

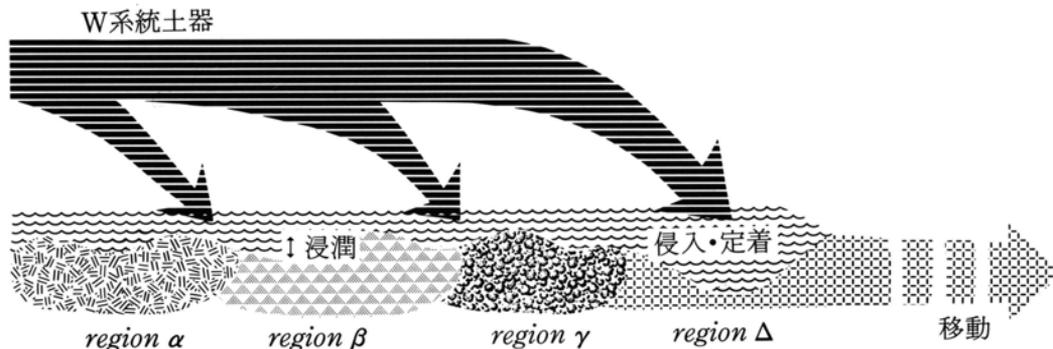
層である〈在来系土器〉の崩壊を引き起こすのであり、その典型が伊勢湾地方において認められるのである。こうした状況をパターン化して整理すると次のようになる。

〈在来系土器〉を土器A、〈外来系土器〉を土器Wとして大別する。そして両者の関係のなかで新たに生まれた土器を土器Mと呼ぶ。土器Mは土器Aからも土器Wからも単独では生まれないものであり、その意味で単なる中間的存在ではない。相互作用のもとに成立するのである。従って、折衷型一般ではなく、折衷型土器の専有化による固有器種の成立としてとらえるべきものとする。つまり、土器Aが土器Wの侵入を契機に組み替えが行われ、土器Aは存在形態を変えて存続すると言いうことができるのである。

伊勢湾地方へ波及してくるW系統土器がどのような集団的背景のもとにあるかは、よくわからない。型式学的特徴の発現地は中部瀬戸内、より限定するなら吉備地方周辺を考えざるを得ないわけであるけれども、器種組成の組み替えが周辺にいくほど増幅されるという型式学的な空間分布の不連続性を見ると、広域にW系統土器として括ることを躊躇する。

伊勢湾地方に展開するW系統土器と型式学的に接近する地域を推測すると、例えば壺の紋様では、簾状紋は河内地方に分布の中心を持ち、それが突帯紋の併用にも絡んで部分使用であることはその周辺（北河内・摂津から山城あたり）に関係することを示すと考える。その他、台形土器であるとか、台付無頸壺、台付鉢などもこれら周辺に関係の深いことを示している。しかし、体部内面下半部にケズリを施す平底甕は上記地域ではあまり見られず、近接地域では近畿の日本海側地方や北陸地方のほうが主体的であり近江地方にも分布すること<sup>(31)</sup>、壺の受口状口縁と頸部の刻みや体部下半部のハケメなどが近江地方において卓越することなどを見ると、W系統土器の諸要素の系譜が幾つかの下位系統に別れる可能性があるにしても、伊勢湾地方波及直前に近江地方でそれら諸要素主要部分の複合が行われた可能性が極めて高いと考える。

この点に関して伊勢湾地方におけるIII期の土器に係わる情報の流れを概観する（第253図参照）と、たとえば情報伝達がそれほど恣意的ではないと言われる甕の調整・施紋手法<sup>(32)</sup>にもとづく分布圏の相互関係は、近江地方の〔強加飾受口状口縁甕（口縁部や体部上半に櫛刺突紋・直線紋・波状紋など紋様要素を複数組み合わせる）〕と伊勢湾西岸部の〔強加飾単純口縁甕（強加飾受口状口縁甕をあまり紋様構成を変えないで単純口縁にした甕）〕の両分布圏が伊賀盆地を中心とする南部の山間部でリンクしてU字状に閉じた分布圏を形成し、甕W分布圏と対立的にかなり安定した分布圏を形成するのに対し、伊勢湾東岸部は甕Wの

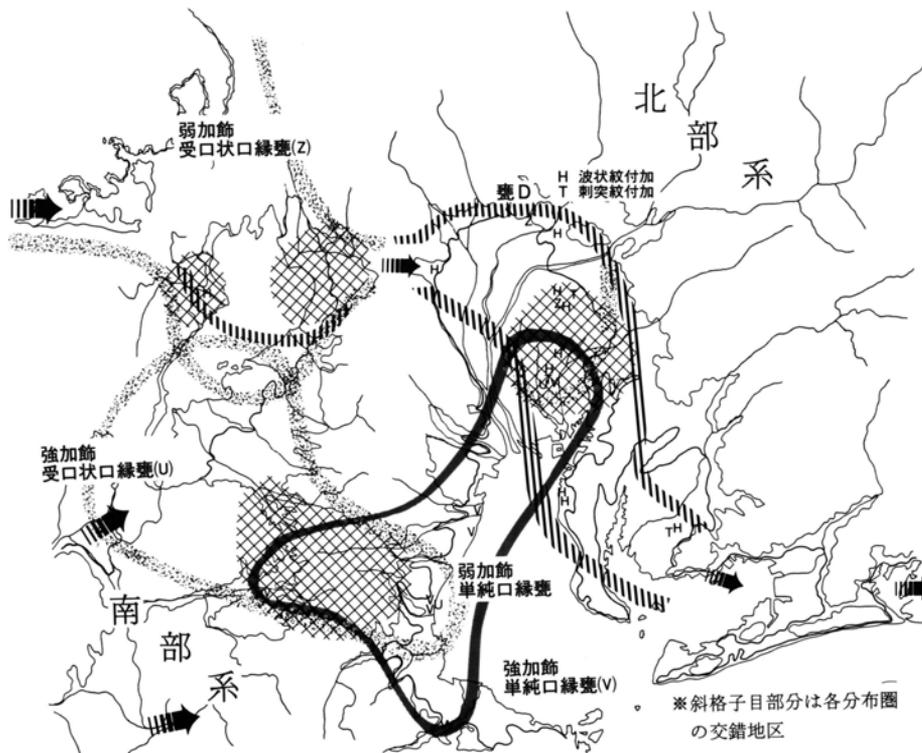


第252図 W系統土器のイメージ

広域分布を基盤にして北西から南東に開いた分布圏を形成し、周辺要素を取り込んで加飾傾向を発現する<sup>(33)</sup>。

甕Wの主要な加飾手法としてある体部上半のハケメ工具による直線紋(連続ヨコハケメ)は、伊勢湾西岸部と尾張南西部に分布する〔甕Da-β(強加飾単純口縁甕と異なり、紋様が体部上半の直線紋のみで中期前半以来の伝統的器種)〕と関係するか、あるいは近江地方北半部の〔弱加飾受口状口縁甕〕と関係するかであるが、甕Wのパリアントとしてままた出現する連続ヨコハケメのみの加飾度の低い受口状口縁甕に注目するなら、近江地方北部との関係が想定できる。したがって、情報系としては、閉鎖的なく南部系、開放的なく北部系とすることができるのである。そして、W系統土器波及の主要な流れは〈北部系〉に一致するものとする。

W系統土器の本源的成立地を中部瀬戸内、とくに吉備地方に限定できたとしても、変化の主体は吉備地方周辺から進出した集団ではなかろう。何故なら、すでに述べたように周圈的な変化がみられるという状況は、生産・消費基盤の中心から周辺への一元的な拡大というのではなく、受容者側の存在が前提され、その個性が地域差として現れるからである。端的に言うなら、伊勢湾周辺地方に進出してきた集団があるとしても、その大多数は決して遠隔の地から直接来たわけではなく、基本的には隣接地域間の交通の連鎖を超えるものではなかったと考える。だが、そうした連鎖を成立させるためには中部瀬戸内地方に由来する〈固有の情報体系〉を優位とする態度保持者が〈層〉として存在しなくてはならないのであり、しかもそれが直接土器生産者でなかった場合をも考慮するなら、集団内部における特定の土器情報の垂直的な位置と、他の情報に対する優位性(支配的傾向)を保証する〈力〉の実態の把握が今後の重要課題となろう<sup>(34)</sup>。



第253図 III期各種甕分布圏

e. 土器の変化—折衷型土器について

本文では「折衷型」として幾つか土器を説明した。折衷型という範疇は、一つの個体を構成する要素群が、通時的・共時的を問わず分布圏を異にして存在する要素と共通する場合に、その共通性が偶然ではなく他の影響の下に出現したと認めた個体について適用した。したがって、基本的には1個体の要素群が複数の系統に分かれることを前提とする。

折衷型はその時々に出現して時間的に連続した系列を成立させず不安定な性格を見せることが多いものの、ときによっては安定的に独立した系列を形成することがある。折衷型として括られた範囲には、器形・調整・紋様などの諸属性において、一方の系統に限りなく近い（他方からは限りなく遠い）ものから限りなく遠いもの（他方には限りなく近い）まで幅がある。とくに、紋様は共通しているが器形が異なるとか、器形・紋様はほとんど同一であるにもかかわらず調整がほんの小さな部分だけ異なるとかいうようなこともあり、各属性においてもそれぞれ遠近の度合いは異なるのである。とすれば、折衷型の細分を単一の基準で行うことは不可能なのであり、器形・調整・紋様はどれをとっても重要な指標なのであるから器形を重視するとか紋様を重視するという偏った態度は避けねばならない。

■変容と変換<sup>(35)</sup>

折衷型土器が異なる系統の相互影響で成立するというとき、相互影響が均等でどちらにも傾かない場合、どちらか一方にほんの小さく傾く場合、どちらか一方に大きく傾く場合といった区分が一応はできる。このとき、ある系統を基準にとれば、その系統からの型式学的な逸脱の度合いが傾きということになるだろう。したがって、逸脱が型式学的連続の成立する範囲に含まれる場合、それを〈変容〉と呼び、逸脱が型式学的連続を超えてしまう場合、それを〈変換〉あるいは〈転移〉とよぶ。そして、〈変換〉のあるものについては〈模倣〉との関係で別に検討することにする。このような視点によって、土器に含まれる情報とその周辺環境（社会的、制度的など）との関係を理解する可能性が生じるのではないかと考える。情報の流れに表面化する背後の状況が把握できるかもしれないという思いがある。

ある系統への帰属認定は、変異の可能範囲を想定した上で、その中で保持されている型式学的特性の連続を重視した系列の確定をまず行わなければならない。その上での遠近ということになる。系列はすでに述べたように、A・B・C・D・Wの5系統に整理した。ここでは再度詳述はしないので、事実記載および先行する分析記載を参照されたい。

(1) 折衷型土器の事例

表記方法について	変容 (B/C)	…Cの影響でBが変容した。
	変換 (A→D) D	…AからDへ技術的基盤の移動を伴い変換した。出土地区が重要。
	変換 B (B→A)	…BからAへの「全体的表現手法」の変換ではあるが、技術的基盤の移動は伴っていないと推測できるもの。出土地区が重要。

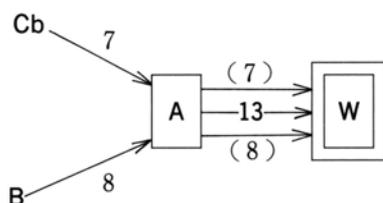
I 期	34	854はA系変容 (A/D)。	72	1168は脱B系で変換。(B→A) A。	
1	3は深鉢Cbを二枚貝調整で製作している。脱 C 櫛条痕系で変換。Cb (Cb→Ca)。	III 期	73	1179 " B(B→A)。波状紋は細かく上下にゆれている。	
2	17と23は形態がよく似ている。17はA系変容 (A/Ca)。	35	862は脱Aで変換。(A→W) W。	74	1180はA系変容 (A/W)。
3	37の口縁部は受口状口縁をなしている。C系変容 (Ca/A)。	36	879 "。	75	1181 "。
4	53はB系変容 (B/Ca)。	37	880 "。	76	1189はA系変容 (A/B)。
5	69はA系変容 (A/Ca)。	38	895は脱Bで変換。(B→W) W。	77	1202 "。
6	105はA系変容 (A/Ca)。	39	896 "。	78	1204 "。
7	158はB系変容 (B/A)。	40	899は脱Aで変換。(A→W) W。	79	1205 "。
8	189はA系変容 (A/Ca)。	41	905はA系変容 (A/W)。	80	1230 "。
9	199は脱C系で変換。(Ca→A)。	42	907 "。	81	1232 "。
10	221・227はC系変容 (Ca/A)。	43	908 "。	82	1233 "。
11	263はA系変容 (A/Ca)。	44	926 "。	83	1234 "。
12	302は脱B系で変換。B (B→A)。	45	928 "。	84	1241は脱A系で変換。(A→W) W。
13	391は脱Cb系で変換。(Cb→A) A。	46	954 "。	85	1252は脱B系で変換 (B→A) A。
14	402 "。	47	966 "。	86	1264は脱Cb系で変換。(Cb→A) A。
15	495はB系変容 (B/A)。	48	976 "。	87	1265 "。
16	608は脱B系で変換 (B→A) A。	49	1022は脱B系で変換。(B→A) A。	88	1266 "。
17	631はC系変容 (Ca/A)。	50	1023 脱B系で変換 (B→A) A。	89	1267 "。
18	633は脱A系で変換。A (A→D)。	51	1025 A系変容 (A/W)。	90	1270はA系変容 (A/W)。
II 期	55	1042はW系変容 (W/B)。	91	1292 脱A系で変換 (A→W) W。	
19	246は脱B系で変換 (B→A) A。	52	1026はA系変容 (A/W)。	92	1301は脱Cb系で変換。(Cb→A) A。
20	637は脱D系で変換。(D→A) A。	53	1031は脱B系で変換 (B→W) W。	93	1302 "。
21	686は脱B系で変換。(B→A) A。	54	1044はA系変容 (A/W)。	94	1303は脱Cb系で変換 (Cb→A) A。
22	710は脱Cb系で変換。(Cb→A) A。	55	1042はW系変容 (W/B)。	95	1318はA系変容 (A/W)。
23	713はA系変容 (A/W)。	56	1052はA系変容 (A/W)。	96	1319 "。
24	715 "。	57	1064 "。	97	1322 "。
24	723はCb系変容 (Cb/A)。	58	1065 "。	98	1337 "。
25	776はA系変容 (A/B)。	59	1074 "。	99	1339はB系変容。
26	807は脱Cb系で変換。(Cb→A) A。	60	1111は脱Aで変換 (A→W) W。	100	1365は脱B系で変換。(B→A) A。
27	809は脱B系で変換。(B→A) A。	61	1113 "。	101	1368はA系変容 (A/W)。
28	810 "。	62	1118 "。	102	1370 "。
29	831は口唇部がB系。A系変容 (A/B)。	63	1119 "。	103	1374は脱B系で変換。(B→A) A。
30	834は脱B系で変換。(B→A) A。	64	1120 "。	104	1391はA系変容 (A/W)。
31	835は脱Cb系で変換。(Cb→A) A。	65	1144は脱A系で変換。(A→W) W。	105	1404は脱A系で変換 (A→W) W。
32	844は脱B系で変換。B (B→A)。	66	1145 "。	106	1423 "。
33	851は脱D系で変換。D (D→A)。	67	1174 "。	107	1437は脱B系で変換。(B→A) A。
		68	1361 "。	108	1449はA系変容 (A/W)。
		69	1385 "。		
		70	1164は脱Cb系で変換。(Cb→W) W。		
		71	1165はA系変容 (A/W)。		

(2) 折衷型のパターン

I期 出現率は17：636の2.6%。変換は7例で折衷型の38%、そのうち2点がCb→A、1点がCa→A。変容は、A-Ca間で8例、内訳はA/Caが5例、Ca/Aが3例。A-B間はB/Aが2例。A-Caの相関は11例で64%となり、A-B間は11%だから、差は大きい。阿弥陀寺遺跡におけるA-B間の関係はほとんど土器の搬出入のという物資の移動関係であって、相互作用という影響関係とは余り関係ないのであろうか。それに対しA-Ca間の関係は搬出入の関係もあるが、分布圏の隣接を背景にしてのより緊密な交流であらうか。

II期 出現率は17：220の7.7%。変換は11例で折衷型の65%。すべて→Aであるが、全体の数量が少ないこともあってA系統との関係における相関差は認められない。しかし、全体の影響関係がA系統に向う点は重要である。

III期 出現率は74：602で12.3%と他より多い。変換は32例で折衷型の43%。うち、→Aは15例、→Wは17例である。しかし、A→Wは13例あるのに対しW→Aはない。B-Aが8例、Cb-Aが7例である。



第254図 各系統相関図

したがって、上図のように、CbやBからのAへの流れもWへと集束するのであり、一方的でさえある。

変容はA系細頸壺口縁部のヨコナデ手法に占められ、他に太頸壺頸部の断面三角形突帯など紋様に関わってある程度で際だった変化は無い。だが、ほとんどIII-1期に限定されており、W系統出現初期における相互作用が部分的にとどまっていたことを示している。III-2期以降に台付甕を始めとして変換が盛行することとは対照的である。

(3) 折衷型の成立条件

変換と変容を区別して考える。

変換は、一方の系統から他方の系統への型式学的移動であると考えれば、表面的な接触関係では生じない。I-1期にはまず見られなかった深鉢CbのA系統への変換(志向性はCb系統を向く)がI-2期以降顕著になることは、深鉢Cdの分布圏がすでに阿弥陀寺遺跡を覆っていたのにそれがなかなか変換に至らなかったということから言えば、変換に至るための条件が形成されていなかったということになる。また、III期におけるW系統への変換のうち、特にA系統台付甕のW系統への変換が1時期遅れることも、同様に変換に至るための条件が整備されていなかったことを示している。すなわち、製作技術に関わるのであれば習得による〈技術的基盤の共有〉が達成されねばならないのであり、こうしたことを可能とする〈場〉を前提とする。それに、〈統合〉を促進する社会的基盤も必要であっ

たであろう。ここに至って、〈特定の場所〉において変換されたのか、変換されたものも移動するのかという点に関わって製作地の特定が重要になってくるのであるが、この点に関して十分な解答は用意していない。

変容は、型式学的範疇が強固であれば別であるが、変換ほど技術習得の〈場所〉を強く要求するものではないから、分布圏の重複地区であれば各系統の情報が錯綜しているので発生する条件は整っている。あくまで部分的な要素の借用による型式学的範疇の拡散であるから、表面的な接触による偶然的成立も有り得ると想定できる。だが実際は、変容も決して広範囲に無規範に起こることはないようであり、変換とはレベルが異なるものの、一定の社会的背景が関与すると考える。つまり、変容も一定の方向性を有しているのであって、ブラウン運動的に四方八方と相関するわけではない。

I期でA-C間がA-B間を凌駕して変換・変容関係を形成していたことは、両者の分布圏が重複していたことが第一の理由ではなく、Ca系統の二枚貝使用にその一端が示されているように、A系統地域との関係保持が必要であるというCa系統側の事情が大きく左右していたのではないだろうか。つまり、土器の搬出入という表面的な関係ではなく基礎的な交通関係を背景として変換・変容が行われたのであり、だから単なる土器の搬出入関係であったCb系統においてはそうした交通関係を基盤に持たなかったが故に変換・変容の開始が遅れたと言えよう。

III期は、W系統土器の出現が単に異系統土器分布圏の拡大ではなく、この地方に侵入・定位したことが分布圏重複の基盤として存在し、その結果交通関係が深化した。そして相互浸透せざるを得ないような基盤の形成はA系統全体の脱A系統を促進しはしたが、反面そのことが全面的なW系統への移行を抑制したのではあるまいか。

#### (4) とくに変換について

ここでは、変換を模倣という観点も含めて再検討してみたい。

模倣とは、「まねること」である。土器製作の習得自体おそらく模倣に始まる。だからとくに模倣として検討することは、その意識的行為としての対象の如何が問題となる。

安定した型式学的連続が認められるというのは、“模倣の対象が固定され(=情報系の閉鎖状態)、逸脱の許容されない状況においてその模倣の繰り返しによって系統が保持される”ということである。そして、そこでは内面化されたモデルが伝達されていく。したがって、そこにおける変化はあくまで内的変化である。

それに対し、型式学的連続が不安定になったり途絶えたりすることがある。系統そのものの消滅や、分岐に際し大きく逸脱することがある。系統の消滅する場合は、完全に消滅する場合と、別の系統に転移して存続する場合とがある。型式学的連続が分岐する場合は、みかけ上は同じなのだが技術的基盤の変化する場合が重要である。

I-2期以降の深鉢Cbの分岐はA系統への変換となって技術的基盤の移動をみせるが、このような型式学的連続の分岐に製作者の分岐が一致する(内的分岐)のか、A系統製作者の模倣による分岐(外的分岐)であるのか判断は難しい。考えられるのは、①そうした事例が何故I期に起こらなかったかに注目して、I-2期以降A系統がCa系統を統合したことによるA系統の相互作用範囲の拡大によってCb系統と直接することになったことを評価するか、②A系統内部に逸脱を許す条件が存在した、と見

るかである。II期において、変換のベクトル(志向性の方向を意味しない)が各系統からA系統へ集束することを重視するなら、この時期の全体的な傾向の一環として前者の可能性を考慮すべきかもしれない。

III期における台付甕AのW系統への変換は、技術的基盤の変化と系統の消滅がシンクロした例である。その変換においては技術的基盤に断絶はあるものの、生活者の断絶ではなかったが故に技術的基盤の断絶を超えて、生活用具としての台付甕という〈フォーム〉の連続という、よりハイレベルの連続が維持されたのであろう。だから、もともと台付甕を使用しないW系統の模倣とは考えられない。生活様式の変化となってしまうし、III期における全体的な変換・変容の方向性からいって矛盾するからである。この意味でいえば、W系統内部の変化に注意しなければならない。一つの系統として括られたなかに、実は異なる系統の蠢きが隠れているかもしれない。

III期は、A系統からW系統への変換以外に、B系統やC b系統のA系統とW系統への変換も起こっている。いずれも技術的基盤の転移であるが、C d系統の変換が比較的元の特徴を残しているのに対し、B系統の場合は元に無い新しい〈形〉を生み出している。これは明らかにモデルの変形であり、新しい要素を加えるありかたでの逸脱である。したがって、C b系統について単なる模倣(系列の横滑り)とするなら、B系統は創造的模倣と言えよう。その場合の模倣の行為者は、D系統に転入したB系統製作者であったか、W系統製作者であったのか、どちらであろうか。

模倣が行われるとは、それを意識的行為と考えるならば、①製作者が従来の土器製作環境のなかで集団の圧力(規制)によって他の製作者と同じものを製作していた〈場所〉から別の〈場所〉への移動(転入)によって、従来の規制からの解放だけでなく全く新しい〈場所〉に臨んで新しい技術を習得した結果、それまでの無意識的な製作活動から一時でも意識化された製作活動を経験したことによって、従来の規制から逸脱した土器を製作することになった、②製作者の所属した〈場所〉そのものの離散と再統合の中で、規制の密度に差ができ、逸脱を許容する状況が発生した、③製作者の所属した〈場所〉の規制が何らかの事情で新しい価値のもとに再編成された、などいくつかの可能性が考えられる。

①については、転入先の規制が新たに加われば、独自性の表出は不可能なので、①と②の複合した状況も考えられる。③は製作者の所属する集団の動向にも関わってより根源的であり、型式学的連続の消滅に対応するかもしれない。

さて、III期の変換においては、A系統へのベクトルが①・②に関係し、W系統へのベクトルが③に関係するのではないか。あるいは全体的環境が③となり、その内部で①・②が起こった可能性もある。

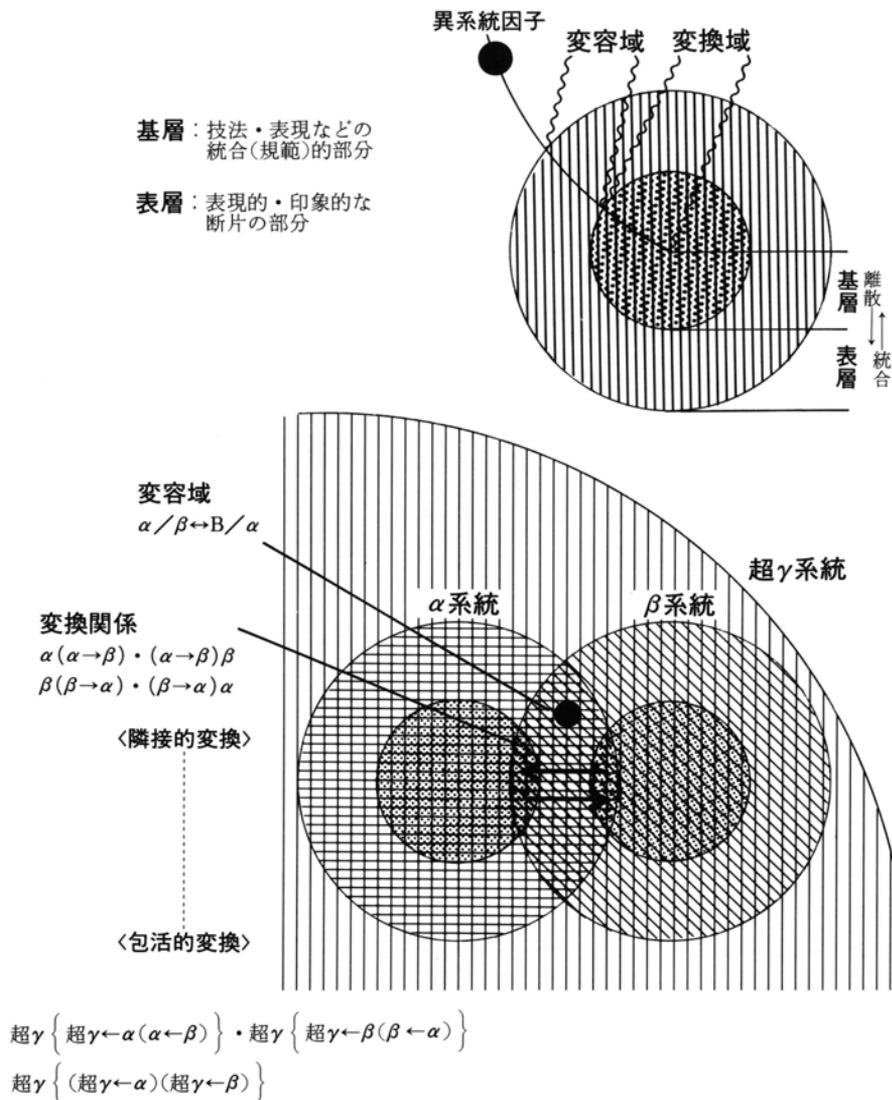
#### (5) 変容について

変容は、模倣の繰返しによるモデルの内面化とその連鎖における変化(内的変化)ではない。これも系統からの逸脱傾向を示すものであるから外的変化である。この外的変化は外部からの影響によって引き起こされる。しかし、変換とは異なって外部からの影響は表面的に終始すると考えたほうがよい。

例えば、III-1期細頸壺の口縁部への回転ヨコナデが、W系統からの影響であることは、II期以降口縁部にヨコナデを施していた無紋系(磨消ハケメ帯系)だけでなく、口縁部を紋様帯としていた櫛描紋系や磨消線紋系にも採用されるという普及状況に示されている。しかも、口縁部への回転ヨコナデは細頸壺のみに限定されず、太頸壺にも及んでいるのであって、このことは凹線紋に象徴されるW系統

土器の基本的手法が周囲に大きな影響を与えているのだと評価できる<sup>(36)</sup>。しかしそうはいても、A系統土器の特性は保持されているであって、逸脱傾向は示しても型式学的範疇からの逸脱までには至っていない。だから変容として把握することになる。

現状において変容が変容のまま停止することはない。III期の例では、III-2期以降に表面化する変換の前段階としての意味が大きいのである。つまり、III-1期におけるD系統土器の侵入・定位が周辺に直ちに根本的な変化を引き起こしていないのは、一定期間の作用すなわち〈技術的基盤の共有〉を達成する過程、見方を変えるなら特定系統の技術的基盤が周辺系統の技術的基盤を駆逐する過程を必要としたことを典型的に示しているのではないだろうか。だから、III-1期はA系統土器がまだ土器複合体としての存在の仕方をしていても、すでに接触は始まっており新しい段階に移行していると考えられるのである。



第255図 系統概念図と相互関係概念図

## f. 弥生土器総括

**大別と細別** I期～IV期の4大別区分については、器種の消長や器種を横断する表現手法(モード)などの変化をめぐって従来の立場を変更せざるをえないような状況に至ることはなかったけれども、細別ははっきり言って不十分である。「組列」の設定においてモードを中心にして進めた部分は基本的に問題はないと考えられるが、モードの及ばない異なる組列との並行関係などについては十分把握するには至らなかったからである。この点は今後詰めなければならない。

**系統と群** 型式学的な区分において、複数の系統それぞれに時間的な系列を認め、それを横断するかたちで共時的な器種組成を設定した場合、果たしてそれが他と区別される〈群〉としてどのように把握できるのかという点について議論が残ることになった<sup>(37)</sup>。

各系統の関係は、第8表のように〈在来系〉と〈外来系〉という区分枠の中で比率的には〈在来系〉が優位にあるという程度で確固たる〈斉一性〉を見せるわけではなく、型式学的には離散的な状況を示しており、全体を〈群〉として統合することについて躊躇せざるをえないのが正直な感想である。かえって、各系統それぞれの分布圏の交錯する地区として阿弥陀寺遺跡があるのではないかというようなありかたの中で、重層的な状況を人為的に切り取ったものが今回の共時的器種組成だという思いがする。だから、果たして自然区分としての〈個性ある群〉設定が可能であるのか、現在のところ定見はない。しかし、土器の生産と消費というサイクルが、完全に開放することなく、また完全に閉じることがないのであれば、あるレベルにおいて他との比較において〈個性ある群〉を抽出することは可能であると考えたい。そこにおける問題はそうしたレベルの設定とレベルの評価である。「様式論」の検討が心要である。

**画期** I期～IV期への変遷における最も大きな画期は、II期とIII期の間にある。ここでは、土器の製作技術およびその使用に関する伝統が大きく変化しているのである。それは単にW系統土器(凹線紋系土器群)の分布上の変化というような表層的な性格ではなく、在地の伝統を土器製作レベルにおいて「断ち切る」という基層的な部分に関与する性格がIII期W系統土器には強く伺われるのである。

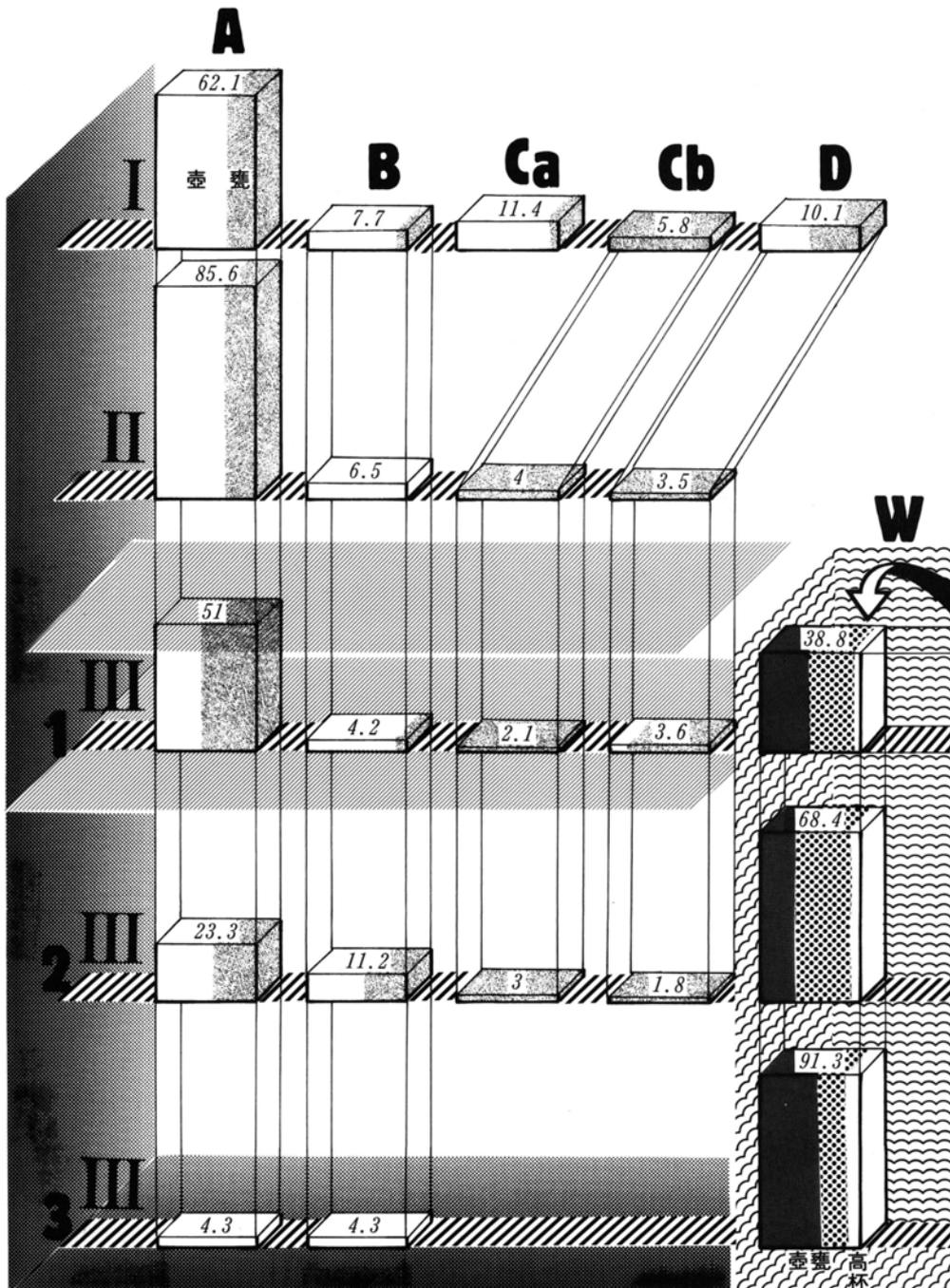
だが、生活においては、台付甕のA→W(A)→Wbという変換に認められるように、消費されるべき器種は位相を変えて存続しており、そこに土器の変化が決して生活者の変化に完全に一致するものではないことが示されている。というより、土器の変化はまず土器の変化として評価せねばならないのであり、それが生活者の変化を示すかどうかは次元の異なる議論なのである。その意味で、変化が即画期ということにはならない。内的変化であればあくまで連続がベースにあり、不連続をベースとする外的変化とは大きく性格を異にするからである。II期とIII期の間にある画期はまさに後者の典型である。

このように、I期～II期には〈外来系〉が〈非在来系〉として並存して相互の影響関係も一方が他方を解体する方向での関係もなく統合されていたのが、III期にはW系統がA系統を含めた異系統を解体し崩壊させるという関係、一方的な強い関係が広範囲にわたって認められるのであり<sup>(38)</sup>、こうした状況において衰退しつつあるA系統には、まさに「瓦解する」という言葉が相応しいのである。

**地域性** 阿弥陀寺遺跡の土器に表れた地域性は、基本的には伊勢湾地方全体の動向に規制されたも

のである。それは、〈動態〉であってなんら固定されてはいない。他との比較においてでなければ〈個性ある群〉が抽出できないということは、共時的・通時的両側面に通じるものである以上、〈地域性〉も動的に把握しなければ意味がない。静止画のように固定された地域性は観念でしかない。実態は動画である。

今後、画期の理解および伊勢湾地方各地域との詳細な比較検討によって、範囲をもって定位した〈個性〉の把握に努めるとともに、地域性の基盤となる情報の伝達回路を明らかにしていきたい<sup>(39)</sup>。



第8表 各系統土器出土比率（数字はパーセントを示すが、傾向として見た方がまちがいはない）

## C. 石器

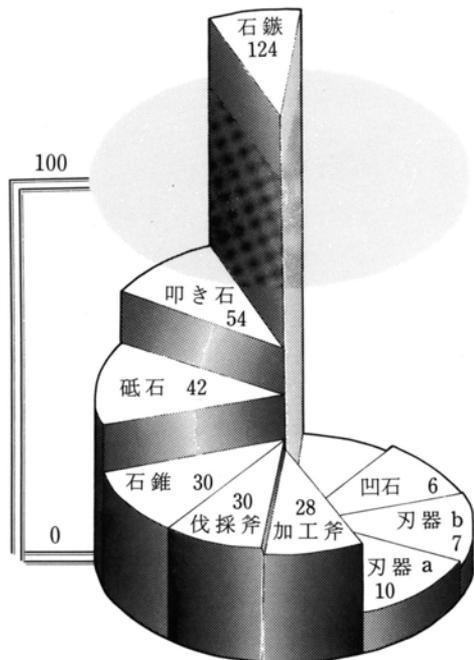
### a. 組成

阿弥陀寺遺跡における弥生中期後半の石器組成は、第9表のように石鏃が最も多く叩き石、砥石、石錐、伐採斧、加工斧、刃器a、刃器b、凹石の順である。そして、磨製穂摘具の確実な例は未だ出土していない。叩き石が多いのは朝日遺跡も同じで、この地方の特徴のようである。また磨製穂摘具の著しく僅少な点も同様である。刃器bの一部については磨製穂摘具の代用も考えられるとはいえ、点数は少ない。刃部の鋭利なスクレーパーは出土していない。

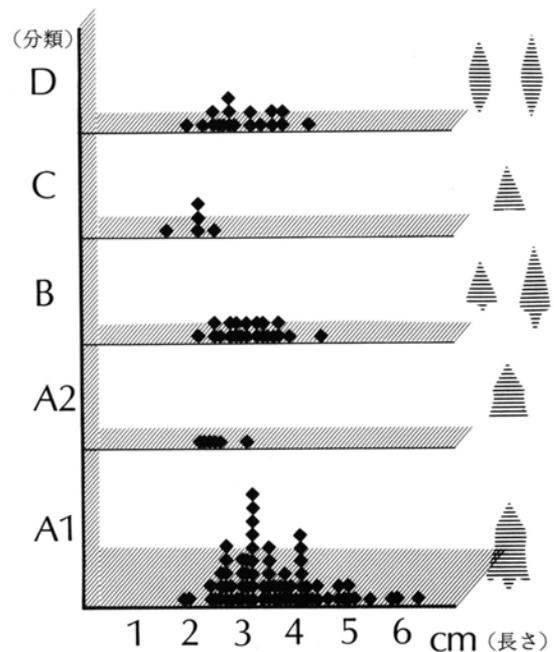
### b. 石鏃

石鏃は長さの度数分布が第10表のようになる。上からD：柳葉形、C：三角形、B：有茎三角形、A2：五角形、A1：有茎五角形となり、点数は有茎五角形が最も多い。石鏃長さ度数分布のピークは、おおよそ3.2cm位のところにあり、DやBは明瞭なピークを形成しないものの、やはり同じくらいの長さに集中する雰囲気を示している。

ところで、A1にはもう一つのピークが4.1cmのところにあり、他の例より長身であることがはっきりしている。とくに4cm以上のものが6cmを超える範囲まで分布しており、群を抜いている。先の2峰分布が用途差を示しているかどうかは即断できないが、他の石鏃長の分布に一致しない範囲については、それを石鏃の大型化として理解することはできよう。



第9表 石器種別点数



第10表 石鏃長形態別度数分布

## 2. 自然科学的分析

### A. 阿弥陀寺遺跡の土器胎土の特徴について

#### (1) はじめに

弥生時代を中心として、阿弥陀寺遺跡をはじめとする愛知県下の遺跡から出土した土器を分析し、これらを比較・検討することで、当遺跡の胎土の特徴を明らかにすることを試みた。またこの結果から、この時代の土器の交流について若干の考察も行った。

分析に用いた試料は、阿弥陀寺(甚目寺町)・勝川(春日井市)・トトメキ(東海市)・瓜郷(豊橋市)・西中(知立市)の各遺跡および大阪府美園遺跡から出土した、弥生時代中期の土器136点である(第11表)。

分析の方法は、重鉱物分析・実体顕微鏡による表面観察・土器薄片の偏光顕微鏡観察の三種類である。まず全ての土器について、パリノ・サーヴェイ㈱に依頼し、重鉱物分析を行った。その後、その結果から阿弥陀寺遺跡の在地の土器と推定されるものを抽出し、表面観察と偏光顕微鏡観察を行った。

#### (2) 重鉱物分析

以下は、パリノ・サーヴェイ㈱による分析結果をもとに、考察を加えたものである。分析結果は第12表および第256図・257図に示す。

##### a. 試料のグループ分け

分析結果をもとに各試料の重鉱物組成において優占する鉱物、含まれる鉱物の組合せおよびその量比などから以下のような試料のグループ分けを行った。そのグループは、同定粒数が100個に満たなかったNo.122を除く135点を5つ(I~V)のグループに分け、さらにIは8つ(1~8グループ)、IIは4つ(1~4グループ)、IIIは2つ(1・2グループ)、IVは3つ(1~3グループ)に細分した。

#### I グループ

斜方輝石+単斜輝石が優占する。随伴する鉱物の種類とその量比から次の8グループに細分することができる。括弧内の数字は各グループに含まれる試料の個数を表す。

I-1 No.7・14・115 (3)

斜方輝石+単斜輝石が圧倒的に多い。

I-2 No.1・3~6・8~11・15~24・26~28・30・31・36・37・39・41・42・67・110・111 (32)

斜方輝石+単斜輝石の次に黒雲母が多く、少量の角閃石と微量のジルコン・ザクロ石を伴う。

I-3 No.12・35・55~57・75・85・86 (8)

I-2の組成に比べて不透明鉱物が多い。

I-4 No.29・32~34・88~90・97・100・102・104~108・112 (16)

斜方輝石+単斜輝石が、角閃石+黒雲母とほぼ同量かやや少ない。少量のジルコンを伴う。

第11表 分析試料一覧表

No.	遺跡名	出土地点・層位	器種(系統)	時期	実測図番号
*1	阿弥陀寺	S D17上位	壺(A)	I期	
2	"	56C・包含層下部	"	"	
3	"	56D・包含層下部	"	"	
4	"	56C・包含層下部	"	"	
*5	"	NR02	"	"	
*6	"	56C・包含層中位	甕(A)	"	
*7	"	56D・包含層下位	"	"	
8	"	56D・炭化物層3	"	"	
9	"	56B・包含層	"	"	
10	"	56C・包含層上部	"	"	
*11	"	56D・包含層	壺(A)	"	
*12	"	56D・包含層下位	"	"	
13	"	S D04	"	"	
*14	"	56D・包含層3	"	"	
15	"	S B59床面	甕(A)	"	173
*16	"	S K74	"	"	206
17	"	S K56	"	"	152
18	"	58農2・包含層上	"	II期	
*19	"	"	壺(A)	"	
*20	"	"	"	"	
*21	"	S B12	"	"	641
22	"	56D・包含層	"	"	
23	"	59E・包含層	"	"	845
*24	"	59D・包含層上位	"	"	
25	"	59F・包含層	甕(A)	"	
26	"	S B69	台付壺(A)	"	726
*27	"	S B32	"	"	667
28	"	S D18上層	壺(A)	III期	1207
*29	"	S D18	"	"	1206
*30	"	"	"	"	1241
*31	"	S D01	"	"	1086
*32	"	56D・包含層	高杯(W)	"	
33	"	S D03	壺(W)	"	
34	"	S Z02	高杯(W)	"	
*35	"	56D・包含層	壺(W)	"	
*36	"	56C・包含層	"	"	
*37	"	59C・包含層	"	"	
38	"	S D03	甕(W)	"	
*39	"	"	"	"	
40	"	S Z02中位	台付壺(W)	"	
41	"	S Z02下位	甕(W)	"	
42	"	S E7	"	"	
43	"	S D2	壺(W)	"	
44	"	56D・包含層	甕(C b)	I期	
45	"	S Z02中位	"	III期	
46	"	56D・包含層	"	I期	
47	"	56・4 Bトレンチ	"	"	
48	"	56・4 Bトレンチ	"	"	
49	"	S D03	"	III期	
50	"	59C・包含層	壺(C a)	I期	
51	"	59C・地山直上	壺(C b)	"	
52	"	56C・包含層下位	壺(B)	"	
53	"	56D・包含層中位	"	"	
54	"	56D・炭化物層2	壺(C a)	"	
55	"	56C・包含層	"	"	
56	"	S K186	"	"	186
57	"	S K297	"	"	312
58	"	"	"	"	304
59	"	S K74	壺(B)	"	213
60	"	"	"	"	212
61	"	59B・包含層	"	"	
62	"	59B・包含層	"	"	
63	"	S Z03	"	III期	963
64	"	58農1	"	"	904
65	"	56D・包含層上位	"	"	
66	"	S D03	"	"	
67	"	S B67	甕(D)	II期	721
68	"	S B20	"	"	662
69	"	S E01	甕(D)	"	
70	阿弥陀寺	S B14	"	II期	
71	"	56D・包含層下位	壺(A)	I期	
72	"	"	"	"	
73	"	56D・炭化物層2	"	"	
74	"	56D・包含層	壺(C)	"	
75	"	56C・包含層下位	"	"	
76	"	S D04	"	"	
77	"	56C・包含層	"	"	
78	"	56D・包含層下位	"	"	
79	"	S D03	壺(B)	III期	
80	"	56C・包含層上位	"	"	
81	"	56D・炭化物層	"	I期	
82	"	56C・包含層	"	III期	
83	"	S K01	"	"	
84	美園	"	甕(C b)	0期	
85	勝川	I LOW	壺(A)	I期	
86	"	"	"	"	
87	"	"	壺(C a)	"	
88	"	"	"	"	
89	"	"	甕(C b)	"	
90	"	"	"	"	
91	"	"	"	"	
92	"	"	壺(B)	III期	
93	"	"	"	"	
94	"	"	壺(W)	"	
95	"	"	"	"	
96	"	"	"	"	
97	"	"	"	"	
98	"	"	"	"	
99	"	"	"	"	
100	"	"	"	"	
101	"	"	"	"	
102	"	"	"	"	
103	"	"	甕(C b)	I期	
104	"	"	壺(A)	III期	
105	"	"	甕(W)	"	
106	"	"	"	"	
107	"	"	"	"	
108	"	"	"	"	
109	"	"	壺(A)	I期	
110	"	"	壺(B)	"	
111	"	"	壺(A)	"	
112	"	"	"	II or III期	
113	"	"	"	"	
114	トトメキ	I北-黒灰色砂層	"	II期	
115	"	"	"	"	
116	"	"	壺(B)	"	
117	"	"	"	"	
118	"	"	"	III期	
119	"	"	甕(C b)	II期	
120	"	"	"	"	
121	瓜郷	"	壺(B)	I期	
122	"	"	"	"	
123	"	"	"	"	
124	"	"	"	"	
125	"	"	"	"	
126	"	"	"	"	
127	"	"	"	II期	
128	"	"	"	"	
129	"	"	"	"	
130	西中	"	壺(B)	III期	
131	"	"	壺(W)	"	
132	"	"	壺(B)	"	
133	"	"	壺(W)	"	
134	"	"	"	"	
135	"	"	"	"	
136	"	"	台付壺(W)	"	

\*は表面観察および偏光顕微鏡観察を行った試料

I-5 No.38・46・99 (3)

斜方輝石+単斜輝石が角閃石とほぼ同量である。

I-6 No.113・114 (2)

斜方輝石+単斜輝石の次に不透明鉱物が多く、角閃石と黒雲母が非常に少ない。

第12表 重鉱物分析結果

試料番号	重 鉱 物 組 成											同定鉱物粒数				
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン		ザクロ石	電気石	不透明鉱物	その他
				緑色	褐色			緑色	赤褐色							
1	97	19	6	1	1	46	2							11	67	250
2	30	1	38			120				1	1				59	250
3	71	19	10	1		19	16			1	1			1	111	250
4	36	9	7		2	26	1		5	2				2	160	250
5	75	22	9	1		52	5		1					1	84	250
6	68	22	9			23	4		4						119	250
7	143	26	2			5	1							2	71	250
8	89	43	10		1	45	2							2	58	250
9	72	43	10	2	1	59	2			3				2	56	250
10	90	28	10			24	5		3					2	88	250
11	82	20	7	1	1	40	4		2					3	90	250
12	33	9	4	1		7	2		3					26	165	250
13	87	7	1	62	14	1	2								76	250
14	116	27		2	1	1									101	250
15	75	39	8			47	17		1						63	250
16	113	15	1	1		15	10								95	250
17	49	27	10	2		34	4		2					1	121	250
18	84	31	15	2		24	3		1					2	87	250
19	62	39	7		1	15	17								109	250
20	49	20	3	4		59	19		1	1					94	250
21	73	36	9	1	4	21								3	103	250
22	81	31	30			32	3		2		1			1	69	250
23	32	6	27	1	1	44	2	3	5	1				2	126	250
24	69	34	9			41	2		1					2	92	250
25	1	4	54			87	10		2	1					91	250
26	30	16	2	1	4	9	23		3						162	250
27	21	8	2		5	4	27		3		1				179	250
28	30	3	9			16			2					1	189	250
29	25	2	26		3	14	2	1	2					28	147	250
30	112	16	5		22	8	18		1						68	250
31	71	24	10		1	15	11		1					3	114	250
32	51	14	46			18	25		5					22	69	250
33	34	11	22	4	1	13	3		3	2				42	115	250
34	44	23	32			29	11	1	1	1	2			42	61	247
35	63	16	4	2	1	3	4		2					15	140	250
36	90	23	16		6	20	19							2	74	250
37	2	78	26	17	3	32	9		1	1				7	74	250
38	26	3	32			4			3		2			23	30	123
39	99	8	4	9	15	3	28			1					83	250
40	37	2	52	4	1	35	1							7	78	217
41	10	3	8	2		13	12		1	1				2	75	127
42	40	14	2	1	1	17	58								117	250
43				1		11	24								214	250
44	10	7	48			6	3		2					60	114	250
45	14	3	111	3	5	2			1					30	81	250
46	58	27	75	1	3				1					9	76	250
47	17	7	52	1					1	2				101	69	250
48	15	10	50	1	4				3	1				111	55	250
49	17	13	89		2	4			5	2				70	48	250
50	5	4	80		2	4	2		24	19				64	46	250
51	13	1	134			1	4		10	4				43	40	250
52	8	5	45		1	31	1		27	10				51	71	250
53	28	14	32			4	19		11	7				28	60	203
54	5	8	74			3	3	3	20	16				54	64	250
55	87	12	17		2	7	1		2					15	107	250
56	61	15	10		2	3			1					34	80	206
57	73	12	11			3	4		2					65	80	250
58	4	5	5		13	6	76		7	3					91	210
59	8	9	56	1	1	28	1		14	25				31	76	250
60	2	2	81			64	7		14	7				36	37	250
61	5	13	74			68			2	3	2			7	76	250
62	11	4	48		2	3	1		2	2	1			110	66	250
63	1	8	73			8			13	11	1			102	33	250
64		2	8		195	1	20			1					23	250
65	1	1	22		1	17			11	3				117	77	250
66	3	1	24			3	1		13	1	2			60	142	250
67	51	24	5		2	13	29		1					1	124	250
68	3	2	5		11	13	85								131	250
69	1		1		2	5	96		2	1					142	250
70	9	5	90			69				1				4	72	250

試料番号	重 鉱 物 組 成											同定鉱物粒数				
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン		ザクロ石	電気石	不透明鉱物	その他
				緑色	褐色			緑色	赤褐色							
71	1		2		44				49		12	6			136	250
72	1		4		34		3	17		6	2				183	250
73					1										249	250
74	1	3	38		28		37	20		4	12				107	250
75	53	18	21		5		19	7		1				9	117	250
76	15	3	96				47			1	8	2	1	7	50	250
77	19	4	132		3		30	1		2					59	250
78	25		110		2		19	1		2	1			1	89	250
79	8	4	143				24			10	3	1	7	50	250	
80	7	7	49	1			17	4		15	22	3	36	89	250	
81	1	1	73				17			10	19	3	25	44	193	
82	1	1	128				39	10		9	2	1	8	51	250	
83	7	4	124				61			11	8		15	20	250	
84	1	12	68	1	5	15	1		4	58			17	68	250	
85	101	12	11				27			2	1		65	31	250	
86	49	7	9	2			8			1			78	96	250	
87	2	90					77	29		2	4		10	36	250	
88	37	14	11				20	4		3	1		14	146	250	
89	23	7	41		1		7	1		5	1		14	150	250	
90	13	10	35				20			4	1		84	83	250	
91	14	4	108	1						1			82	40	250	
92	7	5	117	2			39	12		6	5		7	50	250	
93	1	12	115		1	15	10		5	16	1	9	65	250		
94	25	2	2		1		8	96		6			2	108	250	
95	114	1	4		3		3	7		1			8	109	250	
96	32	2	3				33	2			1		42	75	190	
97	6	1	3		1		17	16		6		2	22	176	250	
98	12		1	4	4		1			6	9		5	208	250	
99	74	11	66	2			7	1		2	8	1	35	43	250	
100	21	6	10	1			25	10		8	2		53	114	250	
101	5	7	111	1	2		18			6	12	3	35	50	250	
102	17	3	14				28	14		7	2	2	16	147	250	
103	7	11	88	21	20		3	3		2	4		26	65	250	
104	14	2	10				1			6	2		79	87	201	
105	43	12	25		1		34	4		5	3		40	67	234	
106	32	4	3		4		15	29		6	2		5	150	250	
107	13	12	13		1		28	6		8	1		20	148	250	
108	65	17	47	2			45	6		3	3		18	44	250	
109	146	3	22	12	15								8	44	250	
110	37	17	8		2		29	12		1		1	1	142	250	
111	46	20	17	1			17	3		1	1		23	121	250	
112	26	8	8	1	3		9	7		4			22	65	153	
113	34	5	2		2	1	1	1		1			31	173	250	
114	1	60	17	16		1	9		1				81	64	250	
115	175	20	1				5						13	35	250	
116	4	6	115		1	19										

### 3 自然科学的分析

I-7 No.13・40・109・119 (4)

斜方輝石に対する単斜輝石の量比が非常に小さい。

I-8 No.95・96 (2)

I-7グループに比べて角閃石が非常に少ない。

#### IIグループ

角閃石が多い。Iグループ同様に次の4グループに細分できる。

II-1 No.50~54・59~61・63・79~83・92・93・101・103・116~118・123~125・134・136 (26)

角閃石が最も多いか、または不透明鉱物と同量程度で少量のジルコン・ザクロ石を伴う。

II-2 No.44・45・47~49・62・91 (7)

II-1に比べてジルコン・ザクロ石が非常に少ない。

II-3 No.65・66 (2)

II-1に比べて不透明鉱物が非常に多い。

II-4 No.76~78・120・121・127~131 (10)

II-1に比べて不透明鉱物が少なくジルコンも少ない。

#### IIIグループ

角閃石が多いが、他の試料中には少ない鉱物が多いのでIIグループとは区別した。次の2グループに分けられる。

III-1 No.84・135 (2)

ザクロ石が多い。

III-2 No.132・133 (2)

ジルコンが多い。

#### IVグループ

黒雲母が多い。次の3グループに細分できる。

IV-1 No.2・58・68・69・94・126 (6)

黒雲母が最も多い。

IV-2 No.25・70・87 (3)

黒雲母と角閃石が多い。

IV-3 No.71・72・74 (3)

黒雲母と酸化角閃石が多い。

#### Vグループ No.64 (1)

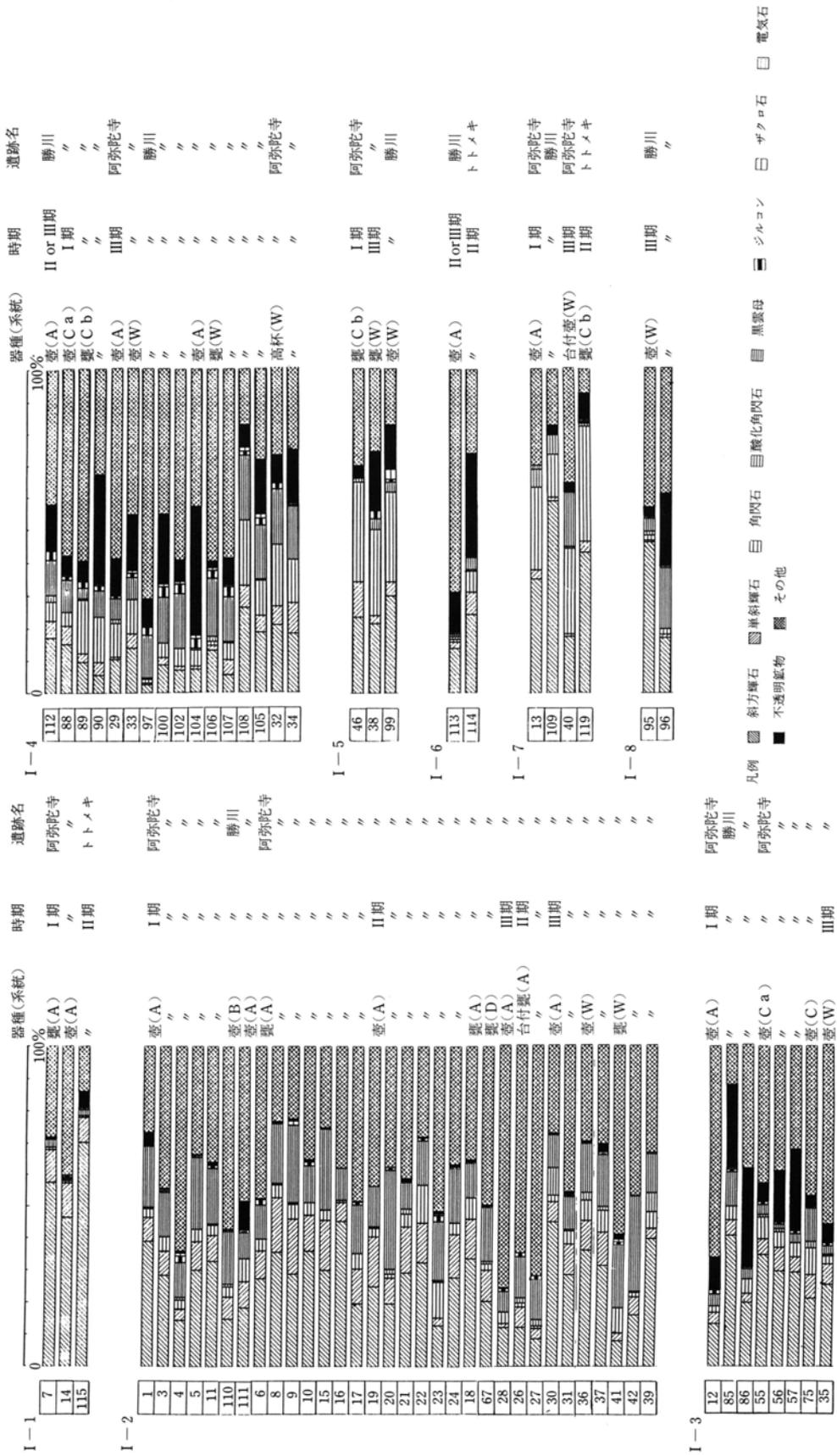
酸化角閃石が非常に多い。

#### VIグループ No.43・73・98 (3)

「その他」が非常に多い。

b. 胎土と器種・器形の関連について

この結果と、器種・器形による分類との間の対応関係について、遺跡別に述べる。



第256図 グループ別重鉱物組成(1)



## 阿弥陀寺遺跡

分析点数が83点と最も多く、器形によるA～DおよびWの系統分類と胎土のグループの間に、以下のような対応関係が見られる（第13表）。

### A系統

全34点（壺22点・甕12点）

中29点がIグループに属し、中でもI—2グループに24点が集中する。また、IVグループに4点が含まれる。このうち台付甕2点は両方ともI—2グループに分類される。

### B系統

全15点中、No64（Vグループ）を除く全てがIIグループに属する。特にII—1グループに11点が分類される。

### C系統

単にC系統とされたものと、Ca・Cb系統に分けられたものがある。

前者は5点全てが壺で、I—3グループに1点、II—4グループに3点、IV—3グループに1点属する。Ca系統も6点全て壺で、そのうちI—3グループに3点、II—1グループに2点、IV—1グループに1点が属する。C系統・Ca系統では胎土にばらつきがみられるようである。

Cb系統（いわゆる条痕文系）は7点中6点が甕で、残り1点は壺である。これらはNo46（I—5グループ）を除き、II—2グループに属する。この系統は、上記二系統に比べまとまりがあり、この差は器種あるいは器形によるものの可能性もある。

### D系統

甕のみ4点のうち、3点がIVグループに属し、うち2点がIV—1グループ、1点がIV—2グループである。残り1点はI—1グループに属する。

### W系統

12点（壺6点・甕4点・高杯2点）のうち、VIグループに属するNo73以外は全てIグループに属し、特に壺・甕10点中I—2グループに5点が属する。そのほかはI—3・4・5・7グループに1点ずつ属する。高杯は2点ともI—4グループに属する。

### 美園遺跡

分析点数は1点（Cb系統）だけで、III—1グループに属する。

### 勝川遺跡

分析点数は29点である。Iグループに分類されるものが21点と最も多く、IIグループに5点、IVグループに2点、VIグループに1点が分類される（第14表）。Iグループのうち、I—4グループに12点

第13表 阿弥陀寺・トトメキ遺跡の系統分類と胎土のグループ

	A	B	C（下段左はCa右はCb）	D	W
I	①②②②②②② ②②②②②②② ②③④⑦①⑥ ①②②②②②②② ②②②②		③ ③③③ ⑤⑦	②	②②③④⑦ ②②②⑤ ④④
II		①①①①①①① ①①①①②③③ ①①①	④④④ ①①①①②③③ ①① ① ②②②②②④		
III					
IV	①③③ ②		③ ①	①①②	
V		○			
VI	○				○

○は壺、□は甕、◇は高杯を表し、白ヌキは阿弥陀寺遺跡、ヌリはトトメキ遺跡を表す。マークの中の数字は小分類を表す。

が含まれ、特にW系統は壺6点中3点、甕4点全てがこのグループに分類される。

A系統は全てがIグループに含まれるが、小分類ではばらつきがみられる。B系統とC系統は分析点数が少なく、分類と胎土のグループの対応関係がはっきりしない。

**トトメキ遺跡**

分析点数は7点（壺：A系統2点・B系統3点、甕：C b系統2点）である。A系統の壺2点はI—1・

6グループに1点ずつ、B系統の壺3点は全てII—1グループに属する。C b系統の甕はI—7・II—4グループに1点ずつ属する(第13表)。分析点数は少ないが、A系統とIグループ、B系統とIIグループ（特にII—1グループ）という、阿弥陀寺遺跡に似た対応関係がみられる様である。

**瓜郷遺跡**

全9点(全てB系統の壺)のうちIV—1グループに属する1点を除き、他は全てIIグループに属する(第15表)。阿弥陀寺・勝川遺跡の試料とは全く異なった傾向を示す。

**西中遺跡**

分析点数は7点（壺：B系統2点・W系統4点、台付甕：W系統1点）で、B系統の壺はII—4グループに1点、III—2グループに1点属し、W系統の壺ではII—1・4グループにそれぞれ1点、III—1・2グループにそれぞれ1点ずつ分類された。台付甕はII—1グループだった(第15表)。系統と胎土の間には対応関係はみられない様である。

**c. 系統分類と胎土の関係**

今回分析した6遺跡のうち、大阪府の美園遺跡を除く5遺跡は、尾張地域と三河地域に大きく二分することができる。前者は阿弥陀寺・勝川・トトメキの三遺跡で、瓜郷・西中の両遺跡は後者である。

A系統は尾張南西部の在地の器形で、その多くはIグループに分類できた。特に阿弥陀寺遺跡出土の試料ではI—2グループが大半を占め、これが阿弥陀寺遺跡の土器の重鉱物組成の特徴といえるだろう。また、勝川遺跡ではIグループのうちI—4グループがやや多く、I—2グループは少ない。この様に、同じ尾張地域でも阿弥陀寺・勝川の両遺跡の胎土の間には、若干の傾向の違いがあり、この差は阿弥陀寺遺跡が五条川(旧木曾川水系)、勝川遺跡が庄内川の流域であることに起因すると推測できる。

B系統は三河地域の遺跡における在地の器形（いわゆる瓜郷式系統）で、瓜郷・西中の両遺跡出土の土器の多くがこの系統に分類できる。また、尾張地区三遺跡でもこの系統に分類されるものが出土して

第14表 勝川遺跡の系統分類と胎土のグループ

	A	B	C (下段左はCa右はCb)	D	W
I	②③③④④ ⑥⑦	②	④ ④④		④④④⑤⑧ ⑧ ④④④④
II		①①	①②		①
III					
IV			②		①
V					
VI					○

○は壺、□は甕を表す。  
マークの中の数字は小分類を表す。

第15表 瓜郷・西中遺跡の系統分類と胎土のグループ

	A	B	C	D	W
I					
II		①①①④④④ ④④④			①④ ①
III		②			①②
IV		①			
V					
VI					

○は壺、□は甕を表し、白ヌキは瓜郷遺跡、ヌリは西中遺跡を表す。  
マークの中の数字は小分類を表す。

いる。

分析の結果、全遺跡を通してB系統の土器はIIグループ（特にII-1グループ）に分類されるものが多い。このことは、尾張地域の遺跡で出土したB系統の土器の胎土が三河地域の在地の土器と同じ特徴を持つことを示し、この地域と三河地域とのつながりをうかがわせる。

C系統は尾張北部から美濃地域における在来の器形である。特にCa系統は尾張平野部周辺地域、Cb系統は尾張北東部から美濃にかけての地域の特徴を持っている。

CおよびCa系統の壺では異質な胎土が混在しているが、Cb系統の壺・甕（いわゆる条痕文系）では胎土の質がよく揃っており、そのほとんどがIIグループに分類できる。しかし、II-2あるいはII-4に分類されるものが多く、B系統の土器とはやや傾向が異なるかもしれない。

美園遺跡の土器はこのCb系統で、III-1グループに分類されている。しかし、重鉱物の組合せはIIグループに似ており、IIグループが三河あるいは尾張北部・美濃地域の重鉱物の特徴であるなら、この土器は愛知県産である可能性もないとはいえない。

D系統は伊勢系の土器で、阿弥陀寺遺跡出土の甕4点のみである。そのうち3点がIVグループに分類できる。分析点数は少なくはっきりとしたことは不明である。

W系統は、土器編年で阿弥陀寺III期に属する外来系の土器である。尾張地域ではIグループ、三河地域ではIIまたはIIIグループと、ほぼ在地の特徴を持っている。特に勝川遺跡出土のW系統の土器は、I-4グループに比較的よいまとまりを示す。これらの土器は器形からは外来系の土器と判別されたのに対し、胎土は出土遺跡の在地の特徴を示し、興味深い結果である。

また、阿弥陀寺遺跡出土の高杯は2点ともI-4グループに属する。このグループが勝川遺跡の胎土の傾向と考えるなら、阿弥陀寺・勝川遺跡のつながりが推定できる。

#### d. 尾張地域の土器胎土の重鉱物組成

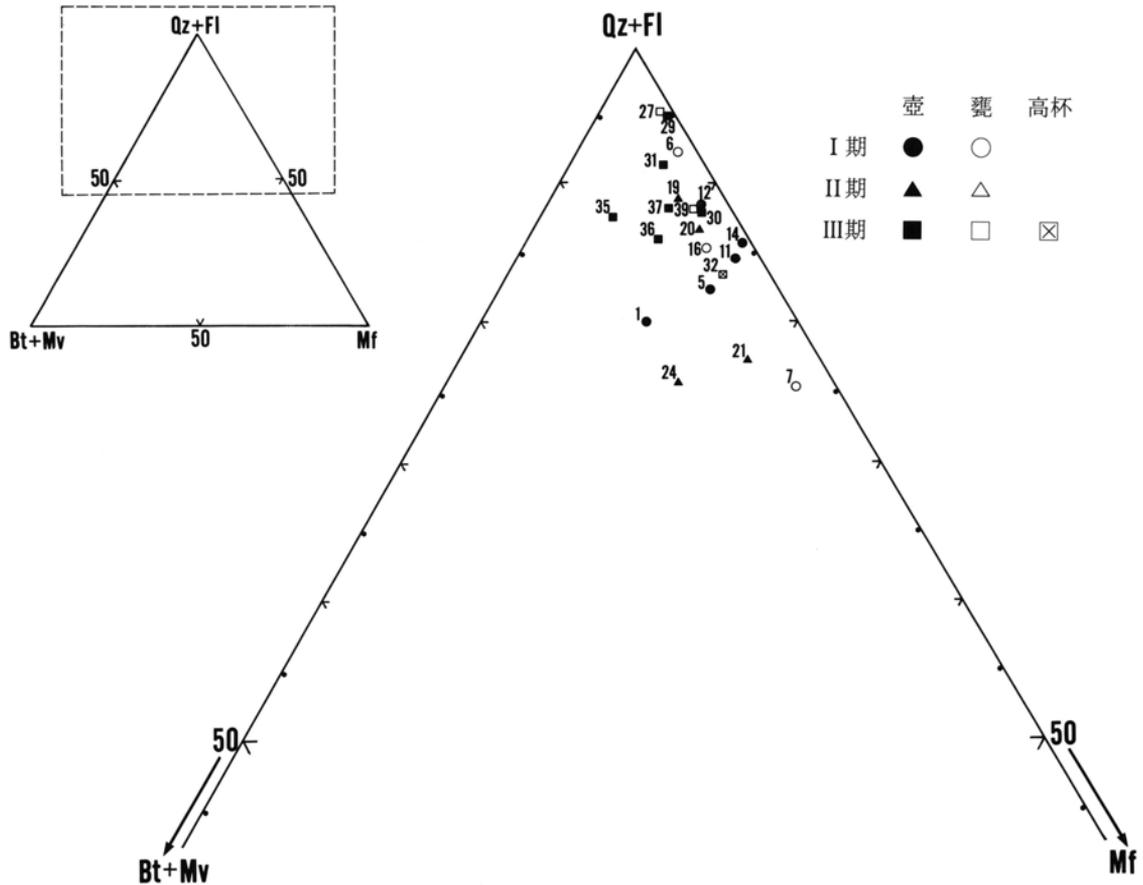
器形や文様から尾張地域の在地と考えられる土器（A系統の壺・甕）の多くは、重鉱物中に斜方輝石+単斜輝石が多く含まれている。当センターでは、報告書の発行に合わせて組織的に土器の重鉱物分析を行ってきているが、その結果でも、尾張地方の土器には両輝石を多く含むものが多いことを報告している。

当遺跡の北東約5kmに位置する、朝日遺跡の弥生土器包含層中に含まれる鉱物を観察する機会を得たが、この中にも両輝石が含まれていた。また、尾張西部の各遺跡の基盤を構成する砂層中にも両輝石が含まれていることが、今年（1989年）度の分析で明らかになりつつある。

これらのことから、尾張地方の堆積物中には普遍的に両輝石が含まれており、これが土器の胎土に影響を与えていると推定できる。両輝石の供給源が判明すれば、これが阿弥陀寺遺跡だけでなく、尾張地域産の土器の一つの指標となり得るだろう。

### (3). 表面観察と偏光顕微鏡観察

上記のように、Iグループが当遺跡および付近の遺跡の在地の土器の特徴と考えられる。このIグループに属する試料のうち、阿弥陀寺遺跡の出土で、表面観察に耐える大きさを持ったものを選び出し、表面観察と偏光顕微鏡観察の試料とした。試料番号は重鉱物分析で用いたものと共通で、No.1・5～7・11・12・14・16・19～21・24・27・29～32・35～37・39の21試料について分析を行った。



第258図 Qz+Fl-Bt+Mv-Mf 三角ダイアグラム  
鉱物名の略号は第16表と同じ

その方法は、今年（1989年）度並行して実施した岡島遺跡（愛知県西尾市）の分析方法と同じである。詳しくは、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集・『岡島遺跡』を参照されたい。以下にそれぞれの結果について述べる。

a. 表面観察

分析結果を第16表に示す。これをもとに石英+長石・黒雲母+白雲母・雲母以外の有色鉱物の三成分を頂点に、三角ダイアグラムを作成した（第258図）。

その結果、重鉱物分析によって同じIグループに分類された試料は、三角ダイアグラム上でも、石英+長石が85~90%、黒雲母+白雲母が5%前後、雲母以外の有色鉱物が10~15%のあたりに比較的好くまとまった分布を示した。重鉱物分析によって同じ特徴を持った土器群は、表面観察においてもよく似た傾向を示す。

ただし、No.1・7・21・24は、他の試料に比べて石英+長石が少なく、雲母や他の有色鉱物をやや多く含む傾向にある。特にNo.7は、土器表面に多くの火山ガラスが観察できた。これらの4試料は、同じような特徴を持ちながらやや異なった傾向を示し、今後の分析によっては、この地方の胎土の小地域差

第16表 表面観察結果

No.	Qz	Fl	Bt	Mv	Gr	Ch	Oth	TOTAL
1	130	33	19	1	21	0	1	205
5	140	33	9	0	28	0	1	212
6	157	44	3	0	13	0	1	219
7	100	36	5	1	41	2	8	209
11	119	46	4	0	26	0	6	203
12	137	33	4	0	18	0	10	205
14	153	15	0	1	27	2	7	206
16	133	36	5	1	23	0	5	204
19	140	31	6	0	15	0	9	203
20	147	36	5	1	21	1	4	216
21	141	26	9	1	38	0	5	220
24	129	27	20	2	31	0	4	213
27	149	38	1	0	8	0	10	208
29	156	28	1	0	9	0	5	200
30	149	19	3	1	19	0	9	205
31	171	11	5	0	12	0	5	209
32	140	21	4	1	27	0	7	200
35	145	34	16	0	9	0	0	204
36	157	18	11	0	17	0	2	207
37	155	13	7	0	15	0	16	210
39	164	7	4	0	18	0	10	204

Qz: 石英 Fl: 長石 Bt: 黒雲母 Mv: 白雲母  
Mf: 雲母以外の有色鉱物 Gr: 花崗岩 Ch: チャート  
Oth: その他 (花崗岩・チャート以外の岩片や火山ガラスなど)

が読み取れるかもしれない。

b. 偏光顕微鏡観察

分析結果を第17表に示す。偏光顕微鏡観察では観察面積が狭いため、量比は定量的には扱わず、観察者の判断によった。

鏡下では、石英・斜長石・カリ長石・黒雲母の他に、全試料に輝石（特に斜方輝石）および安山岩質の火山岩が含まれていた。また、これらにチャートや溶結凝灰岩（いわゆる濃飛流紋岩）が伴った。これが偏光顕微鏡観察における胎土の特徴と思われる。

ただし、No.6・7は、他の試料では比較的多く含まれているチャートが認められなかった。同時に他の試料に比べ、No.6では溶

結凝灰岩が多く、No.7では両輝石と火山岩が多い。これらの試料は異なった傾向を持っていると考えべきかもしれない。

また火山岩は、ガラス質と結晶質の二種類に分けることができ、その比率は試料によって差が認められるようである。これらを定量化することによって、グループの細分化も可能であろう。

(4). 阿弥陀寺遺跡の土器の胎土の特徴に関する考察

これらの分析の結果、阿弥陀寺遺跡の土器には、重鉱物分析では両輝石が含まれ、偏光顕微鏡観察では火山岩が含まれていることがわかった。このうち重鉱物分析で観察できる両輝石には火山ガラスや火山性の岩片が付着していることがある。また、土器表面に火山ガラスが観察できる試料がある（No.7・31）。偏光顕微鏡下では、火山岩中に時折斜方輝石や単斜輝石が観察できる。これらのことから、重鉱物分析における尾張地方の一つの指標である両輝石は、火山性の岩体（両輝石安山岩？）か火山灰が起源であると推定できる。このことは、当遺跡をはじめとする尾張地方の遺跡の胎土の特徴を考える場合において、重要な情報となろう。

昨年（1988年）度、春日井市町田遺跡の土器（弥生時代中期および後期）についても同様の方法で分析を行った。この結果、町田遺跡でも重鉱物分析で両輝石が含まれる土器が多く存在しており、同時に偏光顕微鏡下で火山岩が観察できる土器群が存在することがわかっている。このことは、この時代に町田遺跡と尾張西部が、つながりのあったことを示唆しているかもしれない。

謝 辞

分析にあたり、愛知教育大学地学教室の仲井豊教授および三宅明助教授には、同大学の施設を使用させていただくと共に、有益な助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

第17表 阿弥陀寺遺跡偏光顕微鏡観察結果

No	鉱物										岩片						
	Qz	Pl	K-F	Bt	Mv	Hb	Opx	Cpx	Ol	Zr	To	Gr	Ch	WT	VR	SS	M
1	++	+	+	-			+	-		(-)		(-)	+	+	++	(-)	
5	++	+	+	-			+						+	+	++		
6	++	+	+	-	(-)	(-)	-	(-)						++	+		
7	+	+	+				++	++				-		+	++		
11	++	+	+	-			+	+	+	(-)	(-)	-	++	(-)	-		
12	++	-	+	+			-	-			(-)			+	+		
14	++	+	+	(-)			+	-			-		+		+		
16	++	+	+	(-)			-	-	-			-	+	+	+		(-)
19	++	+	+	+			-	-			(-)		-		+		
20	++	+	+	+			-	-	+			-	+	+	+		
21	++	+	+	-	(-)	-	-	+				-	+	(-)	+		
24	++	+	+	++			-	+	-			-	+	-	+		
27	++	+	+	-			-	(-)	(-)				+	+	+	-	
29	++	+	-	-			-	(-)	(-)		(-)	-	+	-	(-)		
30	++	+	-	-			-	(-)	(-)		(-)		+	-	-		
31	++	-	+	-			(-)				(-)	+	+	+	+		
35	++	-	+	+			-	-				-	+	-	-		
36	++	+	+	-			-	-				-	+	-	+		
37	++	+	+	-			-	+	-	(-)		-	+	-	+		
39	++	+	+	-			-	+	-	(-)		-	+	-	+		

鉱物 Qz:石英 P1:斜長石 K-F:カリ長石 Bt:黒雲母 Mv:白雲母 Hb:角閃石  
Opx:斜方輝石 Cpx:単斜輝石 Ol:カンラン石 Zr:ジルコン To:電気石  
岩片 Gr:花崗岩 Ch:チャート WT:溶結凝灰岩 VR:火山岩 SS:砂岩 M:変成岩

## B. 阿弥陀寺遺跡から出土した緑色の岩石について

阿弥陀寺遺跡では、多数の石製品が検出された。このうち石斧に多くみられた緑色の岩石について、岩石学的な記載を行った。今回の発掘で出土した緑色の石斧から4点を選び、各々小片を切り出して岩石薄片を作製した。これらの岩石薄片を試料として、構成鉱物の同定や組織の観察を行った。以下に各試料の特徴を記す。

### ■試料1・2・3(図版32-1)

全体の組織は凝灰岩状である。石基部分の主要鉱物はアクチノ閃石、曹長石、針状の不透明鉱物(イルメナイト)である。アクチノ閃石はおもに柱状で、不透明鉱物を取り囲むように全体に分布している。試料1には、球顆構造を持つ軽石や玄武岩源の接触変成岩などの礫がみられた。また、礫の周囲や球顆構造の周囲には緑泥石が観察され、球顆構造の内部には緑簾石や黒雲母が確認された。まれに角閃石がみられた。

### ■試料4(図版32-2)

全体の組織はアクチノ閃石によるデッカサイト組織(柱状の結晶が十字に交差している組織)である。主成分鉱物は、アクチノ閃石、曹長石、不透明鉱物(イルメナイト)であった。まれにジルコンや角閃石がみられた。

以上のことから、これらの試料は塩基性の岩石が弱い接触変成作用を受けて生成されたアクチノ閃石ホルンフェルスであると同定される。その源岩については、試料1~3の岩石は球顆構造を示す礫などから塩基性のスコリア凝灰岩、試料4の岩石は玄武岩であると考えられる。

これらの試料の源岩となった塩基性の凝灰岩や玄武岩は、おそらく一連のものと考えられ、岩石学的に「緑色岩」と呼ばれているものにあたる。

「緑色岩」は、東海地方では濃尾平野北方に分布する美濃帯の中・古生層中や、三重県南部から愛知県南東部に分布する三波川帯にその存在が知られている。今回の試料は、これらの岩体の一部が接触変成を受けたものと考えられ、「緑色岩」の一部とみなすことができる。

一般に弥生時代の磨製石斧には、緑色岩を使用したものが多くみられ、肉眼では今回の試料とよく似た特徴を有している。これらの緑色岩は、組織が方向性をもって加工しやすいこと、また塩基性であるため比重が大きく打撃力があることから、石斧には適した石材であると考えられる。そのため選択的に石斧の石材に使用された可能性が高い。今後の分析によって、岩石の詳細な同定や流通など、多くの成果をもたらすものと考えられる。

### 謝 辞

名古屋大学理学部鈴木和博・縣孝之・愛知教育大学三宅明の諸先生には、岩石・鉱物の同定に関して御教示いただいた。心から御礼申し上げます。

## C. 阿弥陀寺遺跡から出土した赤色物質のX線回折分析

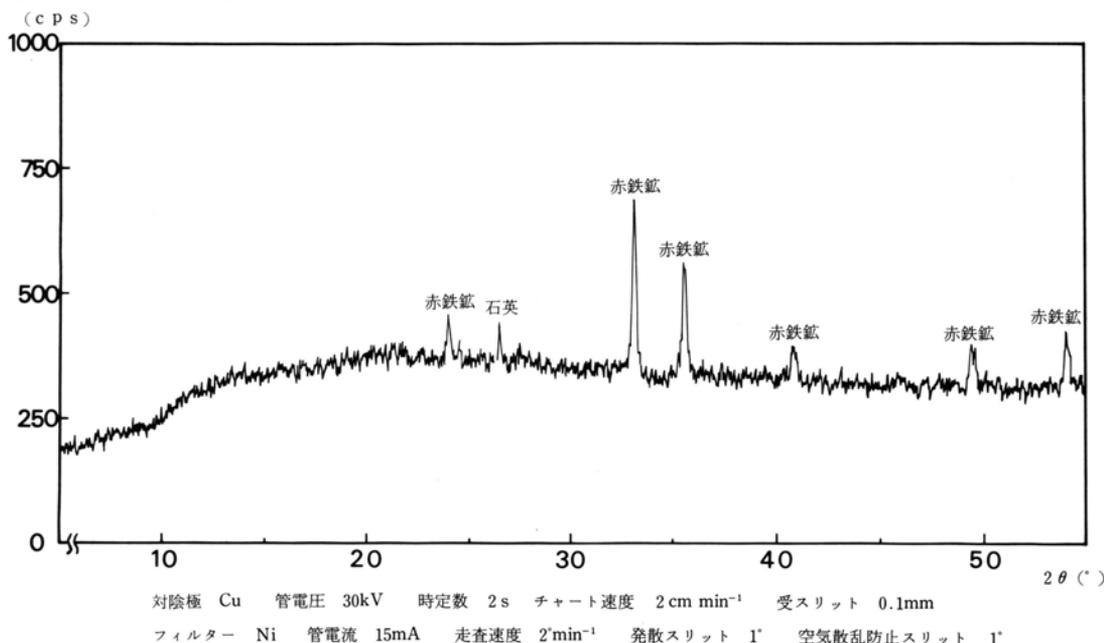
X線回折分析は、結晶によって回折されたX線から結晶構造を知る分析方法である。

今回検出された赤色物質は、偏光顕微鏡下において不透明で同定が困難であったことからX線回折分析を行った。試料の赤色物質は、阿弥陀寺I期の遺構（SK14）から検出されたものである。大きさ約7×5cm、厚さ約3.5cmの本来ドーナツ状であったと思われる焼土塊である。表面は滑らかで暗赤褐色から赤褐色を呈しており、長石が1点認められた。断面はもろく暗灰色から赤褐色であり、平均約2mmの小粒が集まっているように見える。また、赤色物質の破片を水洗したものの中から、平均粒径50 $\mu$ mの少量の石英・長石類・雲母類が偏光顕微鏡下で観察された。

X線回折分析には、断面から採取した赤色物質約1gを用いた。メノウ乳鉢でおよそ10 $\mu$ m以下の粒径になるように粉碎したものを、アルミニウムの穴あき試料ホルダーにつめX線を照射した。測定時の諸条件は分析結果とともに第259図に示した。図中の横軸は入射X線と回折X線のなす角度（ $2\theta$ ）、縦軸は回折X線の強度（cps）を示している。チャートには7箇所の明瞭なピークが認められるが、このうち26.5°は石英によるものであり、これを除いたピークはすべて赤鉄鉱（Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）によるものである。また、偏光顕微鏡下で確認された石英以外の鉱物は、その量が赤鉄鉱に比べ大変少ないためピークが検出されていない。以上の結果から、今回検出された赤色物質は赤鉄鉱を主成分としていることが確認できた。

### 謝 辞

本分析を進めるにあたり、愛知教育大学の三宅明助教授には同大学の設備の使用について有益なご指導・ご便宜を賜った。心から御礼申し上げます。



第259図 赤色物質X線回折チャート

## D. 阿弥陀寺遺跡出土の炭化米について

今回の発掘にともなって、弥生時代中期の住居跡などから多くの炭化米が検出された。遺跡から出土する炭化米については、武田ほか（1979）の三重県納所遺跡（弥生時代中期）、塩谷（1982）の朝日遺跡（弥生時代中期～後期）など多くの報告があり、一般に粒長・粒幅・粒厚を測定し、粒形を比較している。これらの研究をもとに、本遺跡出土の炭化米について検討を行った。

水洗選別によって得られた試料から、変形やひび割れがなく細部の構造をよく残したものを選び、1/20mmノギスをもちいて粒長(l)・粒幅(w)・粒厚(d)を測定した。測定した試料は、土器編年による阿弥陀寺I期の4遺構359粒、II期4遺構164粒の合計523粒である。

遺構ごとの測定数及び測定値の平均を第18表に、測定数の多い遺構について、粒長、粒幅の分布を第261図に表した。どの遺構も平均値に大きな差はなく、特に粒形の異なる集団は認められなかった。

次に、長幅比の度数分布を時期別に表した(第262図)。最頻値はI期、II期ともに1.65～1.70であるが、II期では長幅比の小さい方にやや偏った分布を示した。時期別の平均値からもわかるように、I期の炭化米はII期に比べわずかに大型で、粒形は細長い傾向が見られたが、見かけ上は識別できないほどの小差である。



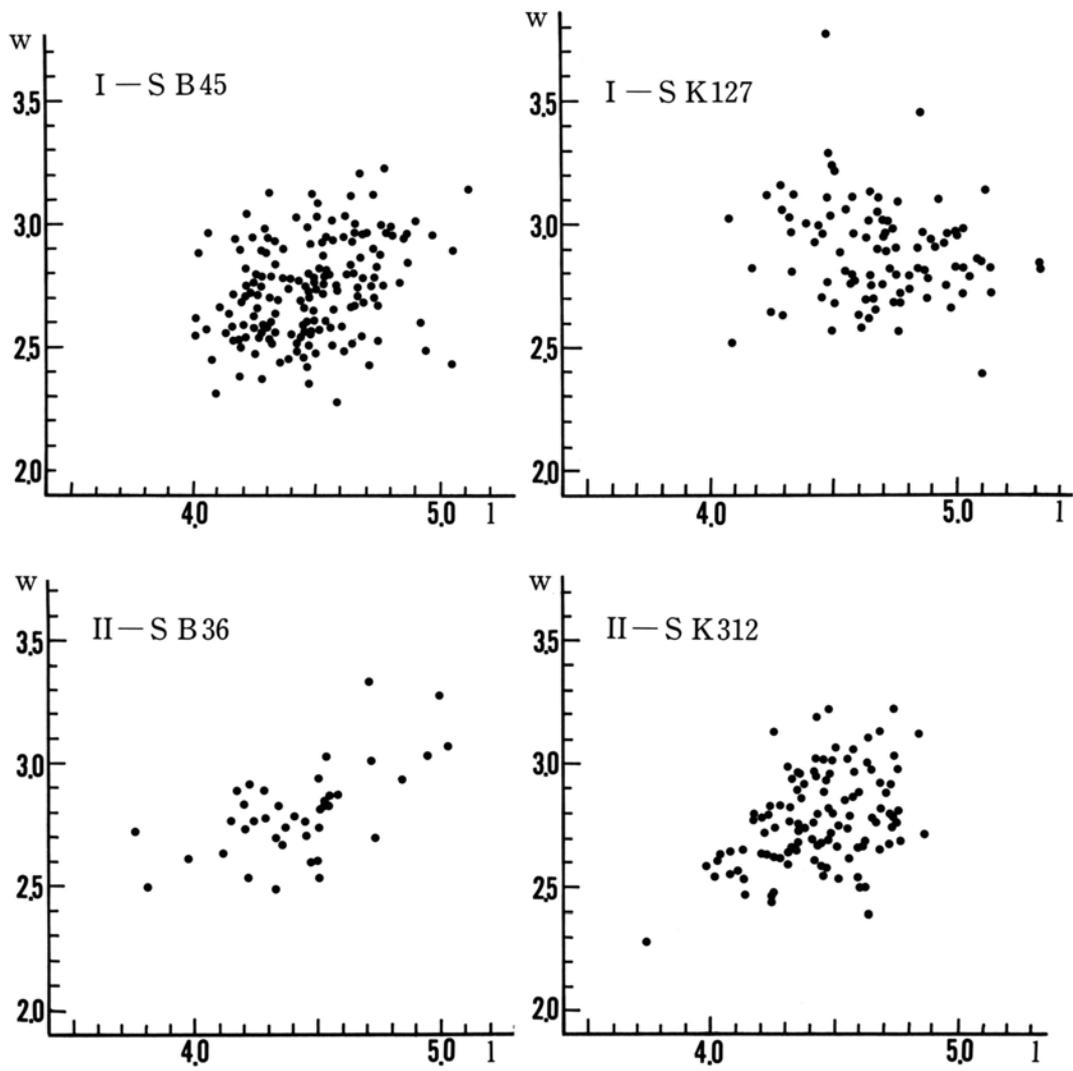
第260図 測定に用いた炭化米（S K 312）

武田ほかは、納所遺跡の炭化米について粒長(mm)・粒幅(mm)・長幅比の平均がそれぞれ4.90・2.83・1.73の集団を粒形a、4.28・2.66・1.60の集団を粒形b、4.28・2.97・1.44の集団を粒形cとしている。本遺跡の炭化米をこれらの粒形と比較してみると、I期、II期とも粒形bに類似するものが最も多く、a、cに類似するものが10～20%含まれている。しかし、長幅比の分布からみても粒形の区分は困難なことから、本遺跡出土の炭化米についてはひとつの集団として考えたほうが望ましい。

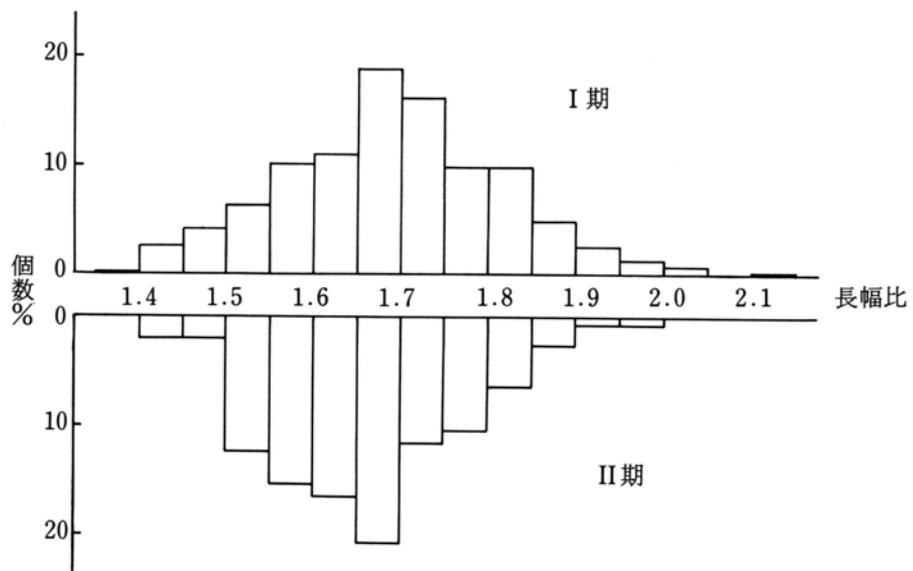
以上のことから、阿弥陀寺遺跡から出土した炭化米は、I期からII期を通じて長幅比1.65～1.70に最頻値をもち、日本型のイネ（*Oryza sativa* L. *japonica* Kato.）の粒形の範囲に含まれるまとまった集団であると考えられる。

第12表 炭化米測定結果

時 期	遺構番号	測定数	粒長(l)	粒幅(w)	粒厚(d)	長幅比(l/w)
I	S B 45	198	4.53mm	2.78mm	1.87mm	1.64
	S K 127	100	4.67	2.88	1.93	1.63
	S K 150	53	4.39	2.66	1.83	1.66
	S K 310	8	4.17	2.55	1.66	1.64
	平 均		4.54	2.79	1.88	1.64
II	S B 36	40	4.43	2.79	1.85	1.59
	S B 65	8	4.43	2.65	1.85	1.67
	S K 135	6	4.44	2.76	1.83	1.61
	S K 312	110	4.44	2.76	1.82	1.62
	平 均		4.44	2.76	1.83	1.61



第261図 粒長 (l)・粒幅 (w) 分布図 (単位: mm)



第262図 長幅比度数分布図

## E. 「中世土器」の胎土分析

今回の発掘調査で出土した、中世土器の胎土分析（重鉱物）をバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施している。その分析データについてはすでに報告したところであるが<sup>(40)</sup> その後の知見もあるので再度ここに分析報告を行うこととした。

### 課題と試料

**課題** 分析にあたっては、阿弥陀寺遺跡出土の「14世紀代」前後の土器を主たる分析対象として、器種と胎土の関係等を明らかにし、土器の「流通」等を考える上での基礎資料作りを分析の第1課題・目標とした。

**試料** 試料は阿弥陀寺遺跡より出土した中世土器14点である。試料とした土器の遺物番号、出土遺構については第19表に示すとおりである。

### 分析方法

分析方法については、次のとおりである。土器片約10gを鉄乳鉢にて粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩を用いて水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた1/4~1/8mmの粒子をテトロモエタン(比重約2.96)により重液分

第19表 重鉱物分析結果

遺構	遺物番号	試料番号	重 鉱 物 組 成													その他	固定鉱物粒数	
			カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母	緑レンコン石	ジルコン	ザクロ石	リン灰石	鉱物不透明			
						緑色	褐色								A			B
SD1015東西	2510	18		112	35	6	2			86		1	1		4	2	3	252
//	2513	20		42	8	3	2			32		1			1	5	2	96
//	2509	24	1	101	27	7	1			83		3			2	10	10	245
//	2482	28		102	25	12	6	15		54		2	2		2	17	18	255
SD1002	2265	31		75	29	19	1			34					12	6	17	193
SD1015東西	2528	26		39	19	6				23					4	12	1	104
SD1021	2673	14		4	5		1			159		2	2		1	1	13	188
SD1002	2262	30			8	22	1			140		7			4	19	17	218
SD1022東西	2697	15			2					224		2				3	20	251
//	2704	11			2	2	1			238			1	1		5	11	261
//	2702	10			3	4			1	171		1	1				6	187
//	2705	17								237	2	1				1	9	250
SD1021	2675	13			1					51						206	3	261
SK1003	2136	12	1	1	1					18			1		1		2	25

※参考 大淵遺跡 (海部郡基目寺町大淵)

60D SD04	—	33			6	20	1	1		4		40	1		3	161	13	250
----------	---	----	--	--	---	----	---	---	--	---	--	----	---	--	---	-----	----	-----

参考 杉山遺跡 (新城市大字杉山)

遺物番号は報告書に基づく

SK1368	193	2	1	1	4	13				152		5			5	8	6	195
SK1263	184	4		3			4			10		1			1	15	6	40

大淵遺跡 (愛知県埋蔵文化財センター 1988 「大淵遺跡 阿弥陀寺遺跡」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第4集)  
杉山遺跡 同 上 「杉山遺跡」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第5集)

離、重鉍物のプレパラート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。

不透明鉍物については、斜め上立方からの落射光下で黒色金属光沢を呈すものをAとし、それ以外をBとした。表中の「その他」は、変質等で同定不能の粒子である。

## 分析結果及び考察

**分析結果** 分析の結果、得られた試料の重鉍物組成は第19表、第264図に示すとおりである。処理後に得られた重鉍物の粒数が100粒に満たないものが2513、2136の2点みられた。このうち2513については100粒に近いのではほぼ正しい組成を表しているものと解した。また2136については後述のように重鉍物の含有量が少ないことに意味がある可能性がある。

なお、第19表、第264図には阿弥陀寺遺跡に隣接する大淵遺跡(海部郡甚目寺町大字甚目寺字大淵)<sup>(41)</sup>および愛知県東部にある杉山遺跡(新城市大字杉山)出土土器<sup>(42)</sup>の分析結果についても参考として示した。

**試料のグループ分け** 分析結果をもとに、その重鉍物組成における共通する特徴をとらえ、以下のような試料のグループ分けを試みた。

Iグループ(2510、2513、2509、2482、2265、2528)

斜方輝石が最も多く、次に黒雲母、単斜輝石、角閃石の順に多いグループ

IIグループ(2673、2262、2697、2704、2702、2705、および杉山遺跡193)

黒雲母が非常に多いことで特徴づけられるグループ

IIIグループ(2675)

不透明鉍物Bが非常に多く、他に黒雲母が含まれる。

IVグループ(2136および杉山遺跡184)

同定鉍物粒数が極端に少ない。

Vグループ(大淵遺跡例)

不透明鉍物Bが多い点はIIIグループに似るが、他の試料に較べてジルコンの量が非常に多いことが特徴である。

III～Vグループについては、例数が少なくグループとするには問題があるが、今後に備えグループとした。

なおこのグループ分けで問題となるのは不透明鉍物Bの取り扱いである。つまりこの不透明鉍物Bの鉍物名については未知であり、鉍物組成で斜方輝石が多いという場合と不透明鉍物Bが多いとではおのづからその意味が異なるからである。この点は今後の課題である。

土器の器種と胎土との関係は、上記のように試料は重鉍物組成の特徴により比較的明瞭なグループ分けができるが、このグループと器種との間にさらに明瞭な対応関係を認めることができる(第264図)。すなわち、Iグループは全て14世紀代の皿類、IIグループはいずれも14世紀代の土鍋A、土釜Aで、Vグループは12世紀～13世紀前葉の土鍋A、IIIグループは15世紀代の土釜A、IVグループは15世紀代の土鍋Aという対応である。

このことから (a) 14世紀代に限って言えば皿類と鍋・釜類とでは胎土が異なっていたことが知られる。(b) 例数が少ないきらいがあるが土鍋・土釜では、時期によって胎土が異なって(変化して)いる可能性がある。(c) そうしてもう1つ重要な点は、阿弥陀寺遺跡から東へ離れた豊川水系の杉山遺跡出土の土鍋Aと阿弥陀寺遺跡出土の土鍋Aの鉱物組成が概ね一致をみた点である。従来形態の一致から特定の生産地から供給された可能性があることが指摘される場所であったが今回の胎土分析でさらにその妥当性が高まったものと云えよう。

#### 製作地の問題等

こうした成果をふまえて、次に製作地の問題について若干の検討を加えてみたい。まずこのような胎土と器種との対応関係から次のことが考えられる。すなわち皿類と鍋・釜類とでは、

- i) 製作地が異なる
- ii) 土器の用途により土(素地)を選択していた。
- iii) 形能により土(素地)を選択していた。

等々の場合が想定される。

i) について言えば、例えば器種により生産地が異なっていたことや(逆に言えば産地を選択して購入していた)1つの生産地で製作する器種の分担が決められていたことなどが考えられる。ただこの場合、土鍋A、土釜Aが県下において極めて画一的な形態を示すのに較べ、皿類の形態がバラエティに富んでいる点からすれば同一場所で両者が製作された可能性は弱まろう。

ii) について言えば皿類と鍋・釜類とでは耐火性などを考慮する必要から異なる土(素地)を使っていた可能性が考えられる。これはi)の後者の考えと連動しよう。

iii) については、製作時の成形過程における作り易さを考慮して異なる素地を用いていたことなどが考えられる。

以上のように製作地については様々な推測が可能でありすべては今後の資料の蓄積により詳細な検討に期すべきであろう。

#### 胎土変化の問題

今回の分析では「14世紀代」に比定される土器を中心に試料を選択したが一部、鍋・釜類については、12世紀末葉及び15世紀代の「土鍋A」、15世紀初頭の「土釜A」の分析を行った。分析試料の絶対数が少ないが、次に年代と胎土の変化について若干言及してみた。

土鍋Aについてみると、

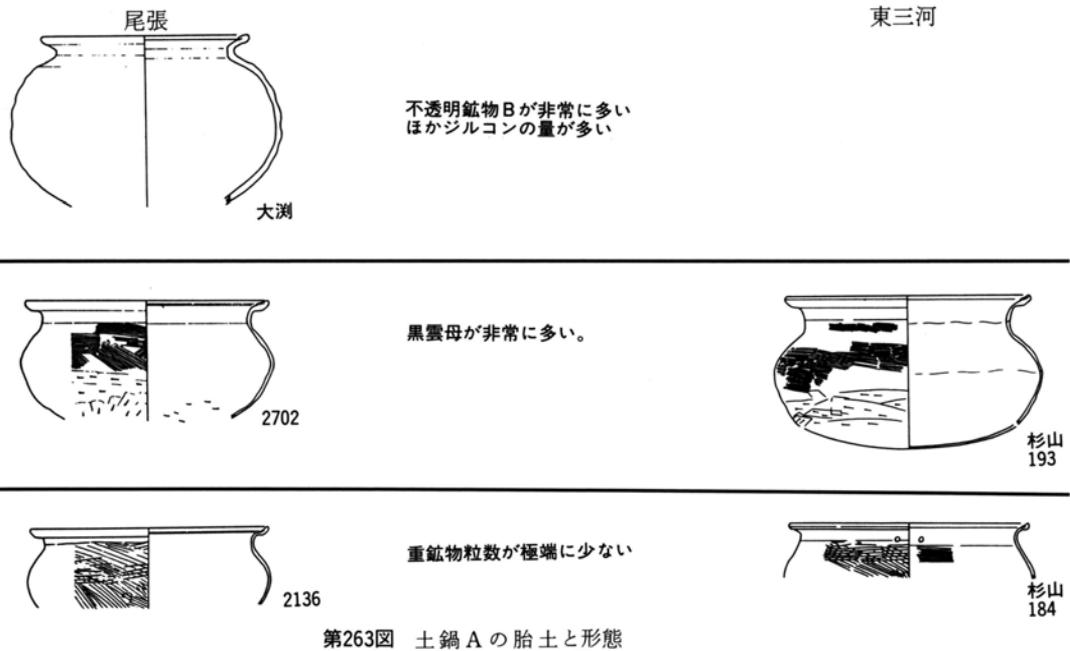
- ①12世紀末～13世紀前葉…不透明鉱物Bが非常に多いほか、  
ジルコンの量が多いという特徴をもつ。
- ②14世紀代…黒雲母が非常に多いという特徴をもつ。
- ③15世紀代…重鉱物粒数が極端に少ない

という具合に整理される。単純化をおそれずに言えば、この順で「土鍋A」は年代とともに胎土変化したということになるろう。この結果は、はからずも隣接する土田遺跡(清州町)での胎土分析(重鉱物)結果をまとめた赤塚次郎氏が設定した第1段階～第3段階<sup>(43)</sup>に①

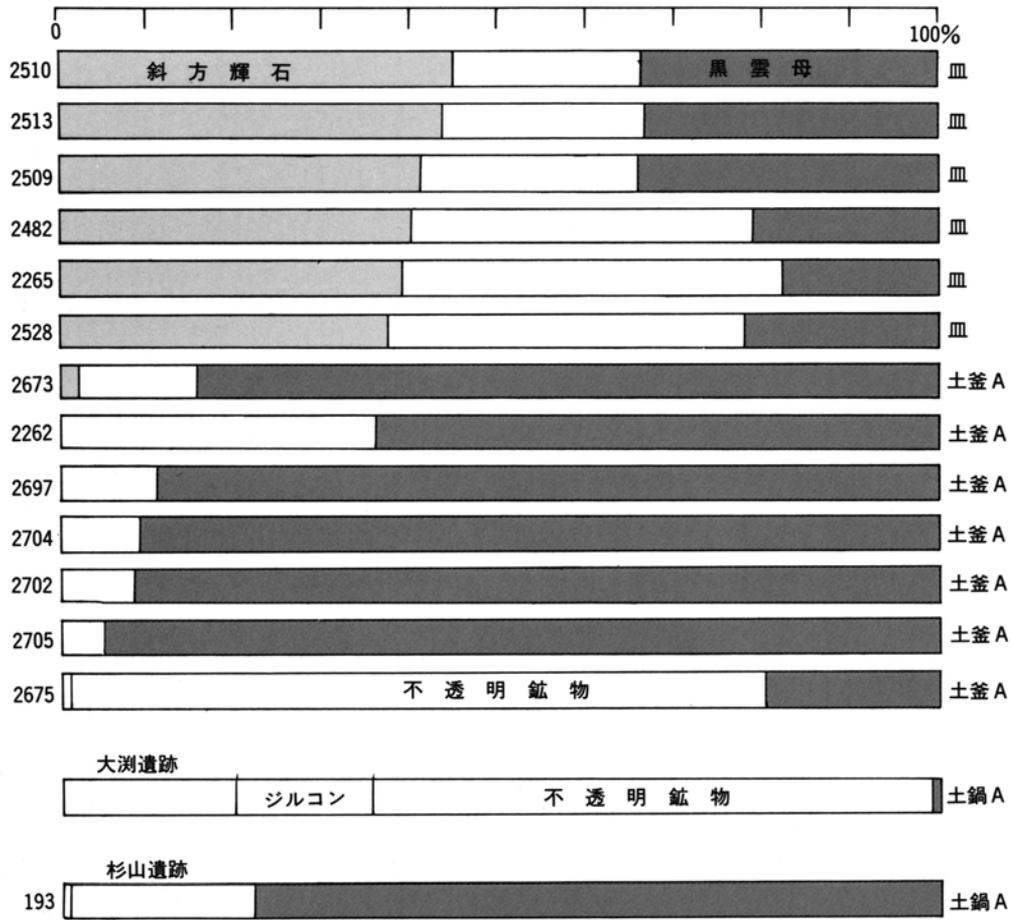
～③が対応するものである。さらに遠く離れた杉山遺跡において②、③が認められその変化が期を一にすることが明らかになった。これは形態・技法の変化のみならず、胎土の変化も一致をみるということである。このことは、この土鍋Aが少なくとも尾張～三河にかけての編年指標として極めて有用なことを示すとともに、これら土鍋Aが共通するある特定の産地から継続的に入手されていたことを示しているものと解され注目されよう。今後、主として「陶器」の研究からすすめられてきた当該期の編年・「流通」を考える上で重要な資料となるものと考えられる。

以上、胎土分析の結果の報告及びそれについての若干の考察を行ってみた。まだまだ分析結果について考察すべき点も多いものと考えられるが、いましばらくは、各地の遺跡での分析結果の蓄積をまちたい。

本項は、パリオ・サーヴェイ株式会社の依頼報告書を基に、北村が一部組替・加筆（主として考察部分）等を行いまとめあげたものである。



第263図 土鍋Aの胎土と形態

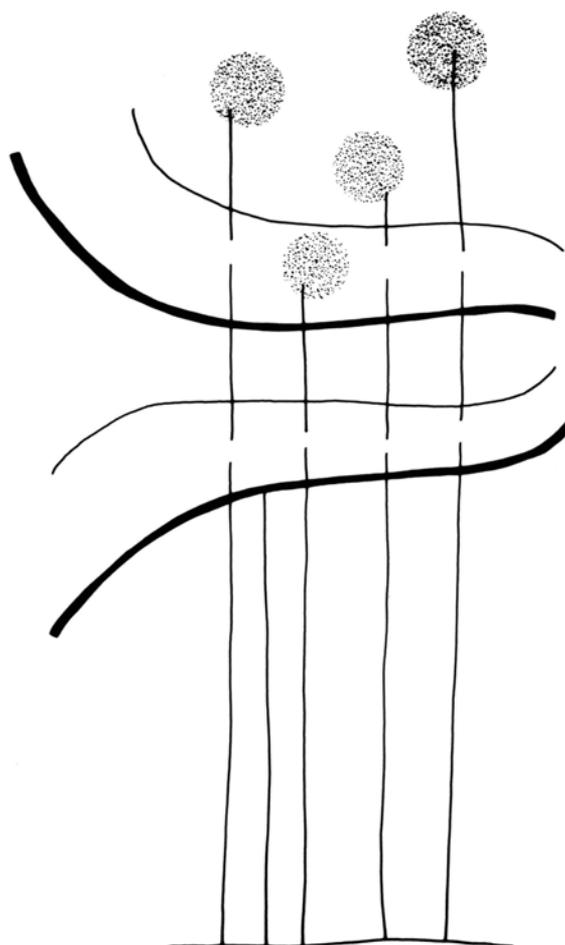


第264図 胎土重鉱物組成

# 第IV章

## まとめと課題

1. 弥生時代 ————— 石黒
2. 鎌倉・室町時代 ————— 石黒



# 1. 弥生時代

阿弥陀寺遺跡の弥生時代資料は、決して十分なものではない。発掘調査そのものに原理的な限界(遺跡の保存状況の如何・調査者の能力的不均質とそれを基とする調査者と遺跡との干渉の程度差)がある以上、完全を目標とはしても、それはあくまで理念でしかない。とはいえ、過去の文化遺産である資料の価値は、そうした限界によって低下することは決してない。今回の調査によって明らかになった点のいくつかはすでに述べてある。ここでは、明らかにならなかった点と問題点について指摘し将来の課題としたい。

\*

遺跡固有の問題としては、集落内部の状況がI期を除いてはっきりしなかった。これは後世の改変という不可抗力もあるのだが、集落内部の密度がどのようであったかは是非知りたかったことである。いちおうは、廃棄空間の存在状況から決して高密度ではないという印象をもったけれども、それが時期的に変化するか否かは〈田郭集落〉の性格にも関わって重要である。大型住居を中心として配置された居住域内部の1単位が、おぼろげながらも把握できたことをもってよしとすべきか。

\*\*

現在も、〈田郭集落〉=〈拠点集落〉であるという集落観が大勢となっているようだが、〈拠点集落〉の拠点性はなにも〈田郭集落〉であることによって規定されるものではない。〈拠点集落〉が〈田郭集落〉になったからといって、〈田郭集落〉が〈拠点集落〉であるとは断定できないのである。〈拠点集落〉とは、形式ではなく機能による規定であれば、諸要素の複合状況が問題となる。量的側面は無関係である。したがって、阿弥陀寺遺跡は〈拠点集落〉ではない。

〈田郭集落〉に関係しては、その構造上の特質としての防禦形式の把握という問題がある。例えば「土塁」の平面的・立体的構造や、日常的あるいは緊急時の出入り用通路そして集落の「顔」としての出入口などの構造上の特徴がどうであるかなど、〈田郭集落〉が「戦い」に関係した集落形式であれば、それを最も端的に表す部分の確認が急務である。またそうした体制の中で、内部は見えるかたちで整えられるのか、あるいは内部にはほとんど変化らしいものは見られないのかなど、〈田郭集落〉の「共同体」としての物理的・観念的表現の把握が必要である。外皮の分析だけでは、〈田郭集落〉の特質を把握することはできない<sup>(1)</sup>。

\*\*\*

低湿地に営まれた集落の生活はどのようであったのか。

阿弥陀寺遺跡には、磨製穂摘具は全くといってよいほど無く、貝塚・貝層は無く、ただ人々が居住していただけなのか。だが、そんなことはないはずである。人が集まれば「力」になる、「力」があればそれを使う対象がある、問題はその対象である。われわれはその対象を把握しなければならないのであるが、今回は不十分であった。

\*\*\*\*

一部の人を除きこれまで多くの人に同一視されてきた尾張南西部にも、今回些細ではあるが土器に差のあることを示した。朝日遺跡と阿弥陀寺遺跡は至近距離にあるにも拘らず全く同じではないのである。

朝日遺跡によって代表されてきた尾張地方は、今後他の遺跡によって様々な色彩の変化を見せることになるかもしれない。あるいはそうした遺跡の色彩が混ざりあって背景に沈んでしまい、かえって朝日遺跡を浮かび上がらせることになるかもしれないが、そうした複眼的視点の形成に阿弥陀寺遺跡の成果が参与できれば、今回の調査成果には未来がある。時代・文化の把握は、複眼的に対処してこそ豊かな理解を生むと確信する。

## 2. 鎌倉・室町時代について

今回の調査では、該期の遺構範囲のほぼ中央を東西に走る坪境の溝群（これ自体「道」を構成するようである）周辺以北において、14世紀から15世紀初頭にかけての方角区画に基づく、「屋敷地」、「道」、墓地的な空間のいくつかが明らかになった。

\*

方角区画部分は「道」による基本的区画である大区画と溝による小区画とによって構成されている。区画内部のすべてから良好な遺構が検出されたわけではないが、そのうちの幾つかからは掘立柱建物の存在が推定される礎板を有する柱穴群が多数検出され、屋敷地と推定された。北部の大区画は一辺が少なくとも50m以上を測り、道路起結部分を付属させ、複数の建物が東に開放するコ字形配列を見せている。それに対し、南部では大区画が縮小傾向を見せるだけでなくさらに小区画に細分されており、それに対応してか小規模な建物が若干検出されるにとどまっている。

こうした区画の在り方は、本来は居住域・生産域全体の構成の中で位置づけられるべきものである。だけれども、部分的に限定された情報とはいえ、今回の成果が土地利用の制度的側面を示すものとして、社会構成の一端に接近する手掛かりになるものであることは論をまたないであろう。今後他の遺跡を含めて広域的に分析を継続させていくことが課せられている。

\*\*

墓地的な空間は、すでに土田遺跡の報告において「方形土坑」の性格分析からそれが埋葬遺構であることが説かれているが、本遺跡ではそれが主体になる空間は検出されなかった。その代わり、北部大区画の南に接して、すでに破壊されてはいたが特殊な形式の墓跡と、蔵骨器と推定される古瀬戸壺類が多数出土した長大な土坑が検出された。特殊な長大な土坑（溝と呼んでも差支えない規模）の存在と、建物群の検出されなかったことを考慮するならば、「屋敷地」という日常的空間に対応する非日常的空間ということができるかもしれない。破片となって出土した古瀬戸壺類はいずれも蔵骨器と推測されるにもかかわらず、付近にそれらが埋められたり置かれたりしていた状況を示す遺構は見あたらないが、五輪塔の一部が出土したことを重視するなら、そうした出土状況は破壊され整地された結果であると考えられるのである。こうした墓地の改変が何によって引き起こされたかはにわかに断じ得ないけれども、社会の時代的不安定さに関連する事項であろうか。

\*\*\*

生産域は、今回まったく言及するには至らなかった。調査区南部で検出された東西方向の小溝が関係するとすれば、居住域に近接して水田だけでなく「はたけ」の存在も考慮しなくてはならない。